

独立行政法人
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所

精神保健研究所年報

第28号（通巻61号）

平成26年度

National Institute of Mental Health
National Center of Neurology
and Psychiatry

— 2015 —

独立行政法人
国立精神・神経医療研究センター

精神保健研究所年報

第 28 号（通巻 61 号）

平成 26 年度

National Institute of Mental Health
National Center of Neurology
and Psychiatry
—2015—

巻頭言

平成 26 年度精神保健研究所年報を謹んでここにお届け申し上げます。

読者の皆様におかれましては、昭和 27 年 1 月に設立され還暦を過ぎてもなお意気軒昂な精神保健研究所に、本年報を通じて、触れていただければ幸甚でございます。そして、さらには、精神保健研究所の共同研究のよきパートナーとして、助言者として、引き続き協働していただきますよう、心よりお願い申し上げます。御笑覧いただければ幸いに存じます。

平成 26 年度は、国立精神・神経医療研究センター(以下「NCNP」)として平成 22 年 4 月に独立行政法人化して以来中期計画 5 年間の最終年であり、独法移行後の第 1 期の成果の集大成の年となりました。そのため、NCNP のブランディング化推進のため、樋口総長のリーダーシップのもと、優れた研究成果の見える化を強力にすすめてまいりました。26 年度は米国 NIH を範として、主要メディア(一般紙、専門誌等)との協働による第 1 回 NCNP メディア塾を 1 泊 2 日のリトリート方式で多摩の森の中で開催しました。これは、NCNP の主要な研究活動と成果を NCNP の研究者とメディアの記者が合宿形式でともに伝え、学びあうというものです。読売、朝日、毎日、日経、NHK、共同通信、日経 BP (メディカル他) の各社からは 2~4 名の複数の参加があり、充実した知の時間が創造されました。結果として、危険ドラッグへの各種取り組みをはじめとする研究成果が、メディアを通じて今まで以上に適切な形で発信され、国の政策形成にもよりインパクトを与えることにつながったと自負しています。その結果、独立行政法人評価において、NCNP は精神保健研究所の優れた政策提言力が高く評価され、政策提言面で「S」評価を勝ち取ることができました。ここに謹んでご報告申し上げます。

精神保健研究所としては、26 年度は政策形成、政策提言のできる精神保健の研究機関として改めて盤石の体制の確保と国内外のネットワーク強化元年と位置づけ積極的な取り組みを行いました。その結果、薬物依存症医療研究の全国拠点施設への指定、摂食障害全国拠点施設への指定を厚生労働省から受けることができました。また、国際機関との共同事業といたしましては、WHO と共同で WHO 世界自殺レポートの作成に貢献するとともに、ジュネーブでの発刊記念・ハイレベル会議に福田が招かれ、会議において WHO と協力し、日本の貢献を約束するスピーチをしました。これらの活動実績が認められ、2015 年 4 月からの 4 年間、自殺対策に関する世界で 4 番目の WHO 研究協力センターとして、3 月に指定がされました。さらに、日本の精神医療政策を語る上で重要な課題である、精神医療の質評価について、OECD のプロジェクトに協力してまいりましたが、研究所の取り組みを評価した OECD によるレポートも出され、話題となりましたことを報告します。

平成 27 年 4 月より、国の医療政策に貢献する研究開発をミッションとする国立研究開発法人として、スケール・アップすることが決まりました。精神保健医療研究の拠点として、多施設共同研究、モデル医療構築研究、コホート研究、疫学等の現状解析評価研究を引き続き強化することはもとより、研究所の活動の一層のグローバル化と国際的な認知を高めてまいりたいと考えております。

読者の皆様におかれましては、倍旧の御指導・御鞭撻を賜りますよう重ねてお願い申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。

平成 27 年 3 月吉日

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所
所 長 福田 祐典



国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成 27 年 3 月 9 日

目 次

I. 精神保健研究所の概要	1
1. 創立の趣旨及び沿革	1
2. 内部組織改正の経緯	7
3. 国立精神・神経医療研究センター組織図	9
4. 職員配置	10
5. 精神保健研究所構成員	11
II. 研究活動状況	14
1. 精神保健研究所所長室	14
2. 精神保健計画研究部	16
3. 薬物依存研究部	30
4. 心身医学研究部	57
5. 児童・思春期精神保健研究部	66
6. 成人精神保健研究部	78
7. 精神薬理研究部	98
8. 社会精神保健研究部	106
9. 精神生理研究部	114
10. 知的障害研究部	129
11. 社会復帰研究部	141
12. 司法精神医学研究部	152
13. 自殺予防総合対策センター	170
14. 災害時こころの情報支援センター	201
III. 研修実績	213
IV. 平成 26 年度精神保健研究所研究報告会抄録	244
V. 平成 26 年度委託および受託研究課題	263

I. 精神保健研究所の概要

1. 創立の趣旨及び沿革

I. 創立の趣旨

本研究所は、精神衛生に関する諸問題について、精神医学、心理学、社会学、社会福祉学、保健学等各分野の専門家による学際的立場からの総合的、包括的な研究を行うとともに、国、地方公共団体、病院等において精神衛生業務に従事する者に対する精神衛生全般にわたる知識、技術に関する研修を行い、その資質の向上を図ることを目的として、昭和27年1月、アメリカのNIMHをモデルに厚生省の附属機関として設立された。

II. 精神衛生研究所の沿革

昭和25年に精神衛生法が制定された際、国立精神衛生研究所を設立すべき旨の国会の附帯決議が採択された。これを踏まえ、厚生省設置法及び厚生省組織規程の一部が改正され、昭和27年1月、千葉県市川市に国立精神衛生研究所が設置された。

研究所の規模について、当初、厚生省は、1課8部60名程度の組織を構想していたが、財政事情等により、総務課、心理学部、生理学形態学部、優生学部、児童精神衛生部及び社会学部の1課5部30名の体制で発足した。また、附属病院をもつことの重要性は、当時から認識されていたが、病院の新設は困難な情勢であったため、隣接する国立国府台病院と連携、協力することとされた。

その後、知的障害に対する対策の確立が社会的に求められるようになったことを受け、昭和35年10月1日、新たに精神薄弱部を設置するとともに既存の各部の再編と名称変更が行われた。この結果、研究所の組織は、総務課、精神衛生部、児童精神衛生部、社会精神衛生部、精神身体病理部、精神薄弱部及び優生部の1課6部となった。

昭和36年には、国立精神衛生研究所組織細則が制定され、部課長のもとに心理研究室、生理研究室、精神衛生相談室及び精神衛生研修室の4室が置かれた。それとともに、昭和35年1月から事実上行われていた精神衛生技術者に対する研修業務が厚生省設置法上の業務として加えられて医学科、心理学科、社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修が開始されることとなり、研修業務が調査研究と並ぶ研究所の重要な柱として正式に位置づけられることとなった。

昭和40年には、地域精神医療、社会復帰対策の充実等を内容とする精神衛生法の大改正に伴い、社会復帰部が新設されるとともに、新たに精神発達研究室及び主任研究官(3名)が置かれた。また、昭和46年6月には、社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室が設置された。さらに、昭和48年には、人口の高齢化に伴って、痴呆性老人等いわゆる「恍惚の人」が社会問題化したのを背景に、老人精神衛生部が、翌昭和49年には、同部に老化度研究室が新設された。

昭和50年には、精神衛生に関する相談が精神障害者の社会復帰と深く関連することから、社会復帰部を社会復帰相談部に改組、精神衛生相談室を同部に移管した。また、昭和53年12月には、社会復帰相談庁舎が完成し、精神衛生相談をはじめとする精神障害者の社会復帰に関する研究体制が強化された。昭和54年には、研修各科の名称が医学課程、心理学課程、社会福祉学課程及び精神衛生指導課程に改称

されるとともに、新たに精神科デイ・ケア課程が新設された。翌昭和55年には、研修庁舎が完成し研修業務の一層の充実が図られた。

Ⅲ. 国立精神・神経センター精神保健研究所の設立

国立精神衛生研究所は、このような着実な歩みをたどった後、昭和61年10月、国立武蔵療養所及び同神経センターとともに国立高度専門医療センターとして発足した国立精神・神経センターに発展的に統合された。ここに、国立精神・神経センター精神保健研究所は、国立高度専門医療センターの一研究部門として、精神保健に関する研究及び研修を担うこととなった。その際組織改正により、総務課が庶務課とされ、精神身体病理部と優生部が統合されて精神生理部とされたほか、精神保健計画部及び薬物依存研究部が新設された。その結果、統合前の1課8部8室は、1課9部19室となり、研究・研修機能の強化が図られた。

半年後の昭和62年4月には、国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合され、二病院二研究所を擁する国立高度専門医療センターが本格的に活動を開始した。これに伴い、庶務課は廃止され、精神・神経センター運営部(国府台地区)に研究所の事務部門(主幹、研究所事務係)が置かれた。また、同年10月には、心身医学研究部の新設と精神保健計画部システム開発研究室の増設が認められ、平成元年10月には、社会復帰相談部に援助技術研究室が設置された。

さらに、平成11年4月には、精神薄弱部が知的障害部に名称変更されるとともに、薬物依存研究部が組織改正により、心理社会研究室、依存性薬物研究室、診断治療開発研究室の3室編成となった。

平成14年1月に精神保健研究所が創立50周年を迎え、創立50周年パーティの開催、記念誌の発行、公開市民シンポジウムを行った。

平成15年10月には司法精神医学研究部が新設され、3室体制で、研究員の増員も認められ、研究所の組織は、11部27室体制(精神保健研修室を含む)となった。

平成17年4月には精神保健研究所は小平(武蔵)地区に移転し研究活動を開始した。

平成18年10月には自殺予防総合対策センターの新設により、自殺実態分析室・適応障害研究室・自殺予防対策支援研究室の3室と、成人精神保健部に犯罪被害者等支援研究室・災害時等支援研究室の2室の増設が認められた。

平成21年6月に精神保健に関する技術研修の事務担当が政策医療企画課から研究所事務係へと移管され、また10月に精神生理部に臨床病態生理研究室が設置され3室編成となり、研究所の組織は11部33室(精神保健研修室含)となった。

Ⅳ. 独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所へ改組

国民の健康に重大な影響のある特定の疾患等に係る医療に関し、調査、研究及び技術の開発並びにこれらの業務に密接に関連する医療の提供、技術者の研修等を行う独立行政法人の名称、目的、業務の範囲等に関する事項を定めることを目的とした、「高度専門医療に関する研究等を行う独立行政法人に関する法律」の施行により、それまでのナショナルセンター6組織が平成22年4月1日に独立行政法人化された。

我が国立精神・神経センターは「精神疾患、神経疾患、筋疾患及び知的障害その他の発達の障害に係る医療並びに精神保健」を担当する「独立行政法人国立精神・神経医療研究センター」となり、精神保健研究所も内部の組織が改正された。

自殺予防総合対策センターは、自殺実態分析室、適応障害研究室、自殺予防対策支援研究室の3室編成。

精神保健計画部は、精神保健計画研究部へ名称変更され、統計解析研究室、システム開発研究室の2室編成。

薬物依存研究部は、心理社会研究室、依存性薬物研究室、診断治療開発研究室の3室編成。

心身医学研究部は、ストレス研究室、心身症研究室の2室編成。

児童・思春期精神保健部は児童・思春期精神保健研究部へ名称変更され、精神発達研究室、児童期精神保健研究室、思春期精神保健研究室の3室編成。

成人精神保健部は、成人精神保健研究部へ名称変更され、精神機能研究室、診断技術研究室、認知機能研究室、犯罪被害者等支援研究室、災害等支援研究室の5室編成。

老人精神保健部は、精神薬理研究部へ名称変更され、精神薬理研究室、気分障害研究室の2室編成。

社会精神保健部は、社会精神保健研究部へ名称変更され、社会福祉研究室、社会文化研究室、家族・地域研究室の3室編成。

精神生理部は、精神生理研究部へ名称変更され、精神生理機能研究室、臨床病態生理研究室の2室編成。

知的障害部は、知的障害研究部へ名称変更され、診断研究室、治療研究室、発達障害支援研究室の3室編成。

社会復帰相談部は、社会復帰研究部へ名称変更され、精神保健相談研究室、援助技術研究室の2室編成。

司法精神医学研究部は、制度運用研究室、専門医療・社会復帰研究室、精神鑑定研究室の3室編成。

以上自殺予防総合対策センター及び11部、計33室となった。

また、研究所の事務部門は、主幹が研究所事務室長となり、研究所事務係とともに、研究所の所属となった。

平成23年4月、事務部門の組織変更が行われ、研究所事務室は総務部の所属となった。

平成23年12月には災害時こころの情報支援センターの新設により、情報支援研究室の1室が認められた。

以上自殺予防総合対策センター、災害時こころの情報支援センター及び11部、計34室となった。

平成24年1月、千葉県市川市の地に国立精神衛生研究所が設置されてから、創立60周年を迎え、記念祝賀会を開催し、創立60周年記念誌を発行した。

沿革

事項 年次	所長	組織等経過
昭和25年5月		精神衛生法国会通過(精神衛生研究所設置の附帯決議採択)
26年3月		厚生省公衆衛生局庶務課が設置の衝にあたる
27年1月	黒沢 良臣 (国立国府台 病院長兼任)	厚生省設置法並びに組織規程の一部改正により精神衛生に関する調査研究を行う附属機関として、千葉県市川市に国立精神衛生研究所設置総務課、心理学部、生理学形態学部、優生学部、児童精神衛生部及び社会学部の1課5部により業務開始
35年10月		心理学部を精神衛生部に、社会学部を社会精神衛生部に、生理学形態学部を精神身体病理部に、優生学部を優生部に名称変更し、精神薄弱部を新設
36年4月		精神衛生研修室、心理研究室、精神衛生相談室及び生理研究室を新設
36年6月		厚生省設置法の一部改正により精神衛生技術者の研修業務が追加され、医学科、心理学科、社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修開始
36年10月	内村 祐之	
37年4月	尾村 偉久 (公衆衛生局長が 所長事務取扱)	
38年7月	若松 栄一 (公衆衛生局長が 所長事務取扱)	
39年4月	村松 常雄	主任研究官を置く
40年7月		社会復帰部及び精神発達研究室を新設
41年7月		本館改築完成(5カ年計画)
44年4月		総務課長補佐を置く
46年4月	笠松 章	
46年6月		社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室を新設
48年7月		老人精神衛生部を新設
49年7月		老人精神衛生部に老化度研究室を新設

50年7月		社会復帰部を社会復帰相談部に名称変更 精神衛生相談室を精神衛生部から社会復帰相談部の所属に改正
52年3月	加藤 正明	
53年12月		社会復帰相談庁舎完成(2カ年計画)
54年4月		研修課程の名称を医学課程、心理学課程、社会福祉学課程及び精神衛生指導課程に名称変更し、精神科デイ・ケア課程を新設
55年4月		研修庁舎完成(講義室・図書室・研修生宿舎)
58年1月	土居 健郎	
58年10月		老人精神衛生部に老人保健研究室を新設
60年4月	高臣 武史	
61年5月		厚生省設置法の一部改正により、国立高度専門医療センターの設置を決定
61年9月		厚生省組織令の一部改正により、国立高度専門医療センターの名称と所掌事務が決定
61年10月		国立高度専門医療センターの一つとして、国立武蔵療養所、同神経センターと国立精神衛生研究所を統合し、国立精神・神経センター設置 ナショナルセンターの1研究所として精神保健研究所に改組、精神身体病理部と優生部を統合し精神生理部としたほか、精神保健計画部及び薬物依存研究部を新設、1課9部19室となる
62年4月	島菌 安雄 (総長が所長事務取扱)	厚生省組織規程の一部改正により、国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合し、2病院、2研究所となる 庶務課廃止、研究所に主幹を置く
62年6月	藤縄 昭	
62年10月		心身医学研究部(ストレス研究室、心身症研究室)と精神保健計画部システム開発研究室を新設
平成元年10月		社会復帰相談部に援助技術研究室を新設
6年4月	大塚 俊男	
9年4月	吉川 武彦	
11年4月		薬物依存研究部で研究室の改組があり、心理社会研究室と依存性薬物研究室となり、診断治療開発研究室を新設 精神薄弱部を知的障害部に名称変更

13年1月	堺 宣道	
14年1月		精神保健研究所創立50周年
14年6月	高橋 清久 (総長が所長事務 取扱)	
14年8月	今田 寛睦	
15年10月		司法精神医学研究部を新設(制度運用研究室、専門医療・社会復帰研究室、精神鑑定研究室)
16年4月	金澤 一郎 (総長が所長事務 取扱)	
16年7月	上田 茂	
17年4月		市川市(国府台)から小平市(武蔵地区)に移転
17年8月	北井 曉子	
18年10月		自殺予防総合対策センターの新設(自殺実態分析室、適応障害研究室、自殺予防対策支援研究室)、成人精神保健部の増設(犯罪被害者等支援研究室、災害時等支援研究室)
19年6月	加我 牧子	
21年10月		精神生理部に臨床病態生理研究室を新設
22年4月		独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所となる 8つの研究部の名称を変更(精神保健計画研究部、児童・思春期精神保健研究部、成人精神保健研究部、精神薬理研究部、社会精神保健研究部、精神生理研究部、知的障害研究部、社会復帰研究部)し、知的障害研究部に発達障害支援研究室を新設、11部33室(室長定数29)となる 所長補佐及び自殺予防総合対策センター副センター長を置く
23年12月		災害時こころの情報支援センターの新設(情報支援研究室)
25年4月	野田 広	
25年7月	福田 祐典	

2. 内部組織改正の経緯

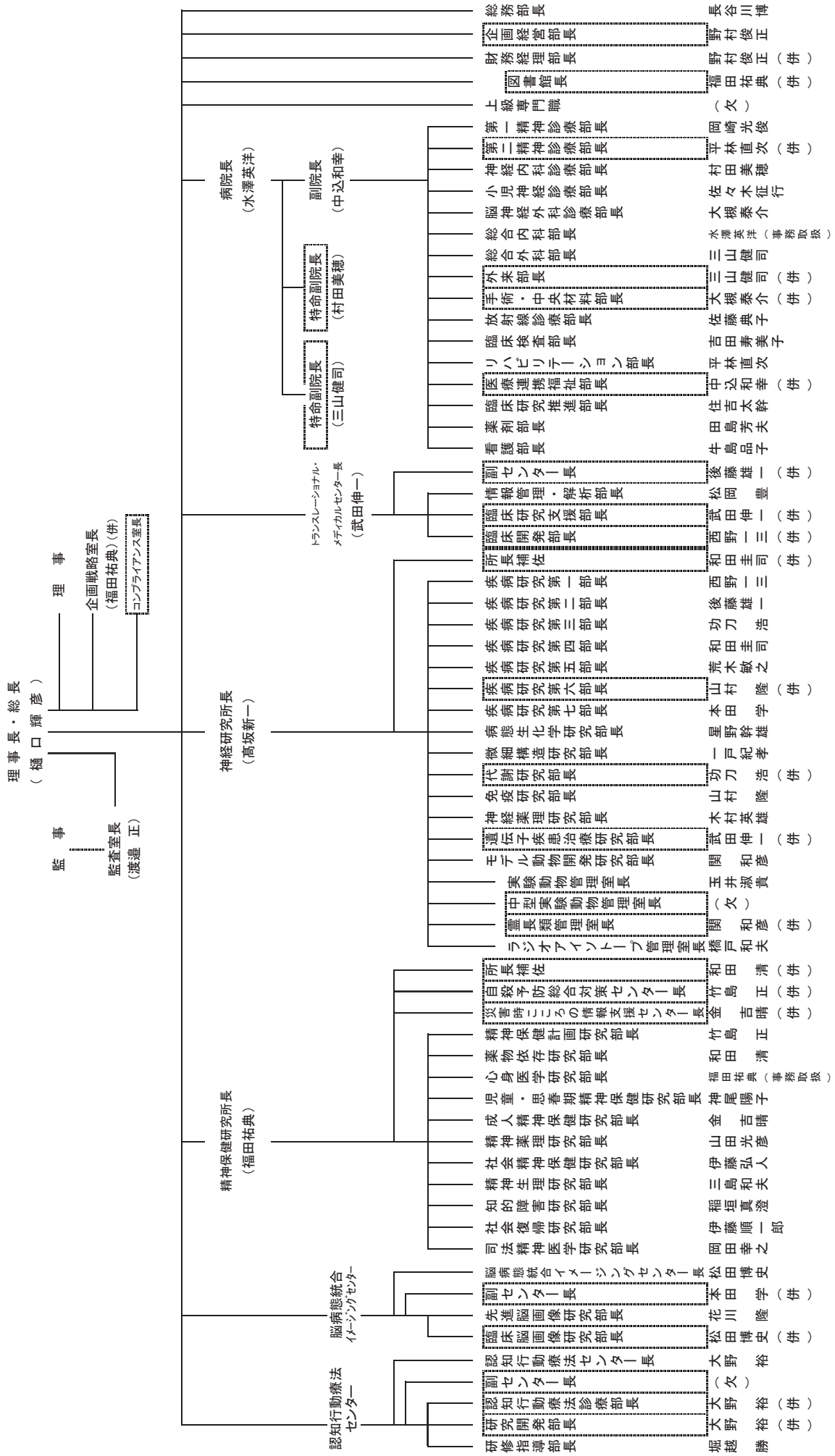
国立精神衛生研究所											国立精神・神経センター精神保健研究所										独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所		
創立昭和27年1月	35年10月	36年6月	40年7月	46年6月	48年7月	49年7月	50年7月	54年4月	58年10月	61年4月	61年10月	62年4月	62年10月	元年10月	11年4月	13年4月	15年10月	18年10月	20年6月	21年10月	平成22年4月	平成23年12月	
総務課	→ 総務課 精神衛生研修室 (6月)									総務課 精神衛生研修室	庶務課 精神衛生研修室	運営部庶務第二課 精神保健研修室	運営部庶務第二課 運営部企画室 精神保健研修室			運営部政策医療 企画課 精神保健研修室		運営局 政策医療企画課 精神保健研修室	運営局 政策医療企画課 精神保健研修室 庶務課 研究所事務係		研究所事務室 研究所事務係		
											精神保健計画部 統計解析研究室		精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室					精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室			精神保健計画研究部 統計解析研究室 システム開発研究室		
																		自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室			自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室		
											薬物依存研究室 薬物依存研究室 向精神薬研究室		薬物依存研究室 薬物依存研究室 向精神薬研究室		薬物依存研究室 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室			薬物依存研究室 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室			薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室		
心理学部	精神衛生部	精神衛生部 心理研究室 精神衛生相談室 (4月)					精神衛生部 心理研究室			精神衛生部 心理研究室			心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室					心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室			心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室		
児童精神衛生部		→ 児童精神衛生部 精神発達研究室								児童精神衛生部 精神発達研究室	児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室	児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室						児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室			児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室		
																						災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室	
					老人精神衛生部	老人精神衛生部 老化研究室			老人精神衛生部 老化度研究室 老人保健研究室	老人精神衛生部 老化度研究室 老人保健研究室	成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室	成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室						成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室			成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室		
											老人精神保健部 老化研究室 老人保健研究室		老人精神保健部 老化研究室 老人精神保健研究室					老人精神保健部 老化研究室 老人精神保健研究室			精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室		
社会学部	社会精神衛生部				社会精神衛生部 ソーシャルワーク研究室					社会精神衛生部 ソーシャルワーク研究室	社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室	社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室						社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室			社会精神保健研究部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室		
生理学形態学部	精神身体病理部	精神身体病理部 生理研究室 (4月)								精神身体病理部 生理研究室 (4月)	精神生理学 精神機能研究室	精神生理学 精神機能研究室						精神生理学 精神機能研究室			精神生理学研究部 精神生理学研究室 臨床病態生理研究室		
優生学部	優生学部									優生部													
	精神薄弱部									精神薄弱部	精神薄弱部 診断研究室 治療研究室	精神薄弱部 診断研究室 治療研究室			知的障害部 診断研究室 治療研究室			知的障害部 診断研究室 治療研究室			知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室		
					社会復帰部			社会復帰相談部 精神衛生相談室		社会復帰相談部 精神衛生相談室	社会復帰相談部 精神保健相談研究室	社会復帰相談部 精神保健相談研究室	社会復帰相談部 精神保健相談研究室	社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室				社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室			社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室		
																		司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室			司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	

組織

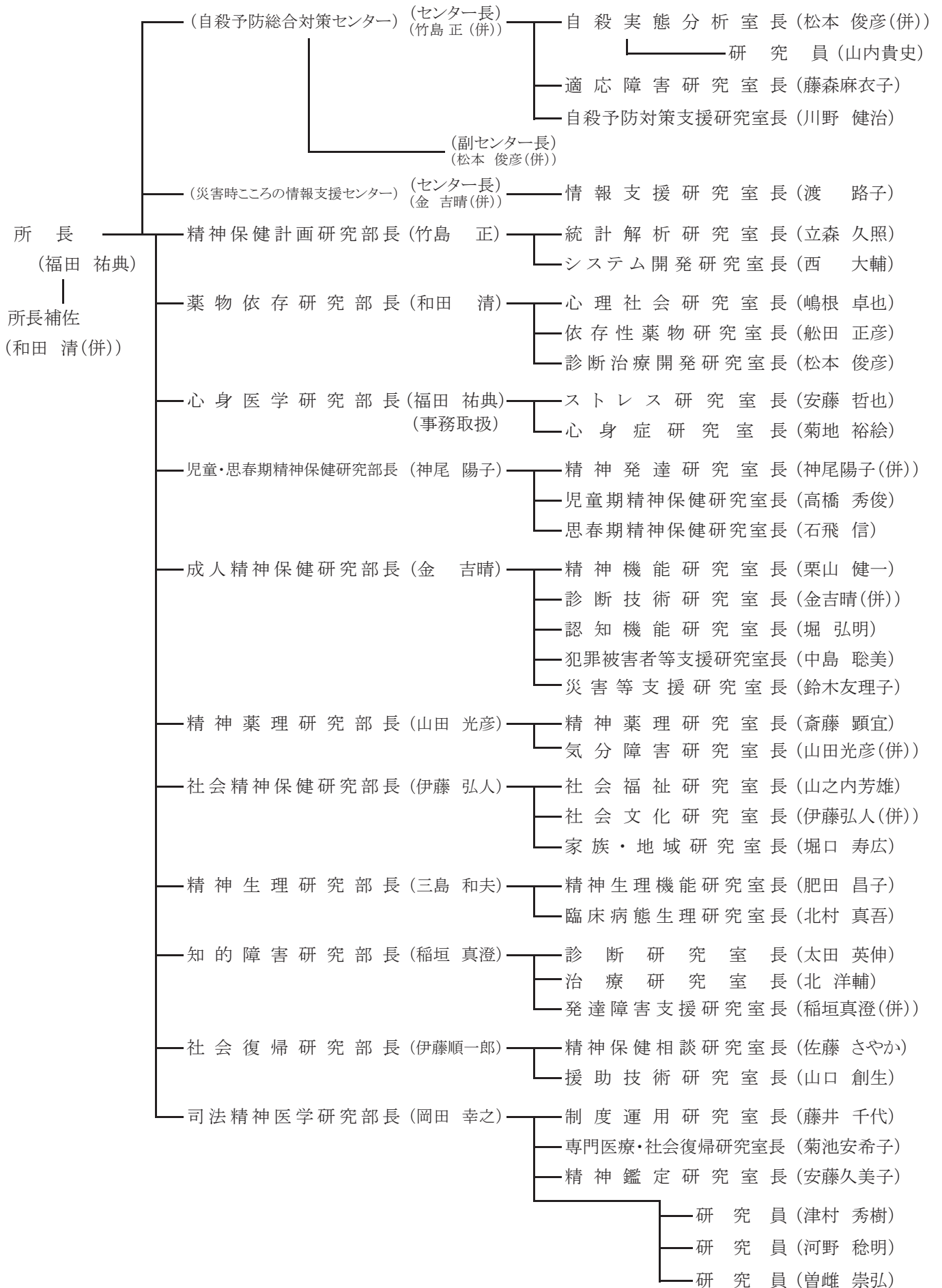
独立行政法人国立精神・神経医療研究センター組織図

(平成27年3月31日現在)

は併任



4. 職員配置(平成27年3月31日現在)



精神保健研究所構成員(平成26年度)

所長 植田 祐典															
秘書室 笹 和紀															
部門	部長	研究員	流動研究員	非常勤研究員	科学研究員 ○科学研究員 ○科学研究員	科学研究員助手 ○科学研究員助手 ○科学研究員助手	センター事務助手	協力研究員	併任研究員	客員研究員	外来研究員 ○補助員	外来事務助手	研究員 ○実習生	研究生 ○実習生	
自殺予防総合センター 支援センター	センター長 竹島 正 (併)	松本 隆彦 (併) 藤森 麻衣子 藤本 隆彦 (併) 藤本 麻衣子	山内 貴史	小高 真美 白鳥 由紀 (26.5.30) 大柳 理雄 香井 美穂子 川本 鈴香 (27.1.1～)	菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎	菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎	菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎	菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎	菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎	菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎	菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎	菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎	菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎	菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎 菅澤 尚太郎	
災害時こころの情報 支援センター	センター長 金 吉晴 (併)	渡 路子 (併) 鈴木 友理子 (併)		小見 めぐみ 大滝 涼子 大沼 麻美 吉田 航 中村 里江 中村 里江 ○菊池 美名子			柳田 知里 (26.5.1～26.5.31) 菊池 ゆき (26.5.1～26.5.31) 雨宮 千晴 (26.7.1～) 加藤 純子 (26.7.1～)					雨宮 千晴 (～26.6.30)	小菅 清香 石田 秋子 中村 裕美 池田 美樹 川崎 美代子 河鷹 謙一 (26.6.1～) ○神野 圭平 (26.6.1～26.8.31)	小菅 清香 石田 秋子 中村 裕美 池田 美樹 川崎 美代子 河鷹 謙一 (26.6.1～) ○神野 圭平 (26.6.1～26.8.31)	
精神保健計画研究部	竹島 正	立森 久照 西 大輔		○西口 直樹	嶋志田 由美子	嶋志田 由美子 嶋志田 由美子 嶋志田 由美子 嶋志田 由美子 嶋志田 由美子				赤澤 正人 伊藤 万智 高橋 裕友 野口 正行 橋本 康男 目黒 克己	嶋志田 由美子 嶋志田 由美子 嶋志田 由美子 嶋志田 由美子 嶋志田 由美子		嶋志田 由美子 嶋志田 由美子 嶋志田 由美子 嶋志田 由美子 嶋志田 由美子	赤澤 正人 伊藤 万智 高橋 裕友 野口 正行 橋本 康男 目黒 克己	
薬物依存研究部	和田 清	松田 正彦 松本 俊彦 鳴根 卓也		米澤 雅子	住司 淑子 滝田 百穂子 菅藤 美穂子 菅藤 雅子 菅藤 美穂子 中野 真紀 (26.12.1～)	住司 淑子 滝田 百穂子 菅藤 美穂子 菅藤 雅子 菅藤 美穂子 中野 真紀 (26.12.1～)		今村 扶美		尾崎 茂 近藤 耕 山口 みほ 渡沼 啓人	引土 絵未		尾崎 茂 近藤 耕 山口 みほ 渡沼 啓人	青尾 直也 富山 健一 高野 圭 池田 明広	
心身医学研究部		安藤 哲也 菊池 裕絵			小島 恵子 中野 真紀 (27.3.1～) 菅藤 美穂子 菅藤 美穂子 菅藤 美穂子	小島 恵子 中野 真紀 (27.3.1～) 菅藤 美穂子 菅藤 美穂子 菅藤 美穂子				菅藤 美穂子 菅藤 美穂子 菅藤 美穂子 菅藤 美穂子 菅藤 美穂子			菅藤 美穂子 菅藤 美穂子 菅藤 美穂子 菅藤 美穂子 菅藤 美穂子	菅藤 美穂子 菅藤 美穂子 菅藤 美穂子 菅藤 美穂子 菅藤 美穂子	
児童・思春期精神保健 研究部	神尾 陽子	高橋 秀俊 石飛 信		岡島 純子 (～26.5.9) 野中 俊介 中鉢 真行 小松 佑起子 (26.8.1～27.1.31) Andrew Mark Stickleley (26.10.16～) ○小原 由香 (26.4.7～)	岡島 純子 (～26.5.9) 野中 俊介 中鉢 真行 小松 佑起子 (26.8.1～27.1.31) Andrew Mark Stickleley (26.10.16～) ○小原 由香 (26.4.7～)	岡島 純子 (～26.5.9) 野中 俊介 中鉢 真行 小松 佑起子 (26.8.1～27.1.31) Andrew Mark Stickleley (26.10.16～) ○小原 由香 (26.4.7～)				黒田 美保 飛松 省三 内内 幹男 平岩 篤子 三宅 圭造 成尾 良之 米田 義賢 蓮美 裕司 權田			黒田 美保 飛松 省三 内内 幹男 平岩 篤子 三宅 圭造 成尾 良之 米田 義賢 蓮美 裕司 權田	黒田 美保 飛松 省三 内内 幹男 平岩 篤子 三宅 圭造 成尾 良之 米田 義賢 蓮美 裕司 權田	黒田 美保 飛松 省三 内内 幹男 平岩 篤子 三宅 圭造 成尾 良之 米田 義賢 蓮美 裕司 權田

部名	部長	専攻	研究員	流動研究員	非常勤研究員	科学研究員 ○科学研究補助員	科学研究員 ○科学研究補助員	科学研究員 ○科学研究補助員	センター事務助手	協力研究員	併任研究員	客員研究員	外来研究員 ○准助員	外来事務助手	研究生 ○実習生
成人精神保健研究部	金 吉晴	中島 聡美 鈴木 健一 堀 和明 (26.6.1～)	伊藤 真利子 木村 明 大村 英史		深澤 舞子 藤澤 26.12.31 遠野 敬子 (26.5.1～) 松田 陽子 (26.8.1～26.12.31)	野添 麗太 (26.6.30) ○細川 素子 (26.7.1～) ○石野 公子 (26.7.1～)	石丸 径一郎 前田 尚 教員 隆 若島 昌多 松岡 恵子			石丸 径一郎 前田 尚 教員 隆 若島 昌多 松岡 恵子	小西 聖子 志志子 望月 光恵 堀内 伸 北山 健行 北山 明彦 白井 優子 緒田 優子 (26.7.1～)	池田 大剛	伊藤 真利子 藤澤 聡美 遠野 敬子 (26.4.30) 松田 陽子 (26.7.31) 中谷 麻 紗 上田 敬 紗 河瀬 未 知 中山 佳代 成瀬 知美 正木 智子 吉池 元康 本間 哲弘 (26.10.1～) 藤田 麻登 (26.11.1～) ○野田 奈々 (26.7.1～26.9.30) (26.10.1～26.12.31)	栗村 和香子	伊藤 真利子 藤澤 聡美 遠野 敬子 (26.4.30) 松田 陽子 (26.7.31) 中谷 麻 紗 上田 敬 紗 河瀬 未 知 中山 佳代 成瀬 知美 正木 智子 吉池 元康 本間 哲弘 (26.10.1～) 藤田 麻登 (26.11.1～) ○野田 奈々 (26.7.1～26.9.30) (26.10.1～26.12.31)
精神薬理研究部	山田 光彦	斎藤 眞直 (26.4.30) (26.5.1～)	杉山 祥央 後藤 希央		山田 美佐	松谷 真由美 村松 浩美						岡 淳一郎 長田 寛二 藤澤 直也 白川 伸一郎 白川 盛彦 志川 藤彦 米本 直裕	川島 義高		遠藤 香 神垣 有美 高橋 宏 藤澤 直也 西川 文太郎 藤田 幸直 澤辺 英江 絵本 健伸
社会精神保健研究部	伊藤 弘人	堀田 菊広 山之内 芳雄	大森 由夏 三宅 美智	池野 敬 橋本 真希子	堀内 翠美子 村田 江里子 (26.4.30) 柴田 史織 (26.6.30) 松本 裕美 (26.5.1～26.7.31) 江頭 織佳 (26.11.1～) 中村 明美 (26.5.1～26.11.30) 原 わかな (26.5.1～26.11.30)	堀内 翠美子 村田 江里子 (26.4.30) 柴田 史織 (26.6.30) 松本 裕美 (26.5.1～26.7.31) 江頭 織佳 (26.11.1～) 中村 明美 (26.5.1～26.11.30) 原 わかな (26.5.1～26.11.30)	○田波 由佳 (26.9.30) 山縣 真美子 稲井 由紀子 江頭 織佳 (26.4.30) 大川 泰江 (26.12.1～) 熊谷 珠樹 長島 望 田澤 留 長島 留 中村 明美 中村 聖子 原 わかな (26.4.30) (26.12.1～) 村田 江里子 (26.5.1～26.12.31) 松本 裕美 (26.8.1～26.10.31)		小川 朝左 川畑 俊敏 木村 真人 未安 民生 杉浦 伸一 杉山 直也 野田 寿恵 八平田 耕太郎 村松 公美子 宮地 元彦 上村 智子 小林 美亜		石井 美緒 大塚 史子 三澤 博規 安井 泰之 金森 燕子 石黒 陽子 松本 洋 (26.7.1～)		中島 嵩貴 片寄 みのり 野崎 健太郎 有竹 清夏 山本 裕樹 山本 上裕樹 樋口 一朗 川島 健太郎 大場 真由美 松田 彩子 藤澤 悠理 寺澤 大丸 淑樹 (26.9.1～)		
精神生理研究部	三島 和夫	肥田 昌子 北村 真喜 (26.5.1～)	中崎 恭子 Jakob Spaeti		藤沼 るり 藤沼 直子 北村 真喜 (26.5.1～) ○高野 希美 (26.10.1～) ○斎藤 徳雄 (26.10.1～) ○武田 裕子 (27.2.1～)	加藤 真直 大嶋 真奈子		阿部 又一郎 荒瀬 宏明 鹿 達彦		内山 佳孝 兼坂 匡一 大川 雄一 池老澤 尚 樋口 重和 本多 真己 上田 泰己 池田 正明 山崎 美恵 岩越 純一 石高 一志 熊野 宏昭 水島 高志 阿部 善也	元村 祐貴 金山 裕子 (26.6.30) ○小野 順子 ○藤 順子		中島 嵩貴 片寄 みのり 野崎 健太郎 有竹 清夏 山本 裕樹 山本 上裕樹 樋口 一朗 川島 健太郎 大場 真由美 松田 彩子 藤澤 悠理 寺澤 大丸 淑樹 (26.9.1～)		

部名	部長	専長	研究員	流動研究員	非常勤研究員	科学研究員 ○科学研究員補助員 ○科学研究員	科学研究員補助員 ○科学研究員補助員	センター事務助手	協力研究員	兼任研究員	客員研究員	外来研究員 ○准助員	外来事務助手	研究生 ○実習生
知的障害研究部	稲垣 真澄	大田 英伸 北 洋輔	白川 由佳 奥村 安寿子 安村 明 (~26.4.30)	野木 浩太 李 折 (~26.9.30) 安村 明 (~26.5.1) ○前田 亜衣子 ○前田 仁美 (~26.5.1~)	須藤 葉衣子 大橋 啓子 (26.6.1~)	○柳部 仁美 (~26.4.30) 大橋 啓子 (~26.5.31) 中村 純子 吉川 朋子			中川 栄二	村上 祐紀 井我 敦子 小池 義典 木美谷 雅子 後藤 麗恵 後藤 麗恵 佐藤 敦士 田村 俊一 中村 みほ 藤波 菜二 林 徹 細川 ちづる 三砂 広子 山崎 敦子 軍司	石上 祐紀 井我 敦子 小池 義典 木美谷 雅子 後藤 麗恵 後藤 麗恵 佐藤 敦士 田村 俊一 中村 みほ 藤波 菜二 林 徹 細川 ちづる 三砂 広子 山崎 敦子 軍司	大森 幹真	大森 武史 小林 剛 脚原 ことこ 中川 真智子 外田部 真美 山本 穂乃子 若田 れい子 若田 純一 若田 祥 (26.11.1~) ○兵沼 未知	
社会復帰研究部	伊藤 順一郎	佐藤 さやか 山口 創生		下平 美智代 種田 綾乃	○村木 英香 (26.8.1~) ○堀尾 奈都記 (26.9.1~)	藤田 真純 田中 純子 水松 千恵 (26.5.1~) 細谷 草子 (26.6.1~)	樽垣 早苗		平林 直次 坂田 増弘	原 敬造 西尾 雅明 瀬戸盛 雄太郎 菅川 信希 福井 里江 安西 佳雄 吉田 光賢	久永 文恵 和世 和世 ○堀尾 奈都記 (26.6.23~8.31)			
司法精神医学研究部	岡田 幸之	菊池 安寿子 菊池 雅子 藤井 千代	津村 季樹 森野 俊明 曾根 菜弘		○小山 蘭子	三輪 謙子 山口 雄世 中澤 佳奈子 (~26.10.20)			野田 隆敏 朝原 千佳奈子 中澤 佳奈子				浅野 敦子	

Ⅱ 研究活動状況

1. 精神保健研究所所長室

I. 概要

1) 人事

平成26年度は、25年度に引き続き福田祐典が所長を務めた（国立精神・神経医療研究センター企画戦略室長併任）。

本年度の精神保健研究所常勤研究員人事は、下記のとおりである。

4月1日、知的障害研究部 治療研究室長に北 洋輔，社会復帰研究部 精神保健相談研究室長に佐藤さやか，同援助技術研究室長に山口創生，5月1日、精神薬理研究部 精神薬理研究室長に斎藤顕宜，6月1日、成人精神保健研究部 認知機能研究室長に堀 弘明，精神生理研究部 精神生理機能研究室長に肥田昌子が着任した。このほか流動研究員，科研費研究員，外来研究員等多数の若手研究者を迎えた。

また3月31日付で、精神保健計画研究部長 竹島 正，薬物依存研究部長 和田 清，社会復帰保健研究部長 伊藤順一郎，災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室長 渡 路子，成人精神保健研究部 精神機能研究室長 栗山健一，司法精神医学研究部 常勤研究員 津村秀樹が退職した。

2) 概況

精神保健研究所は、患者さんやご家族，国民に役立つ研究を実践し，国の精神保健福祉政策策定に貢献するシンクタンクとしての機能を果たす一方で，研究発表分野でも精力的な活動を行っている。

平成26年度には英文原著96編，和文原著30編，英文総説4編，和文総説145編，和文著書69編を報告した（分担執筆含む）。また，学会発表としては国際学会で103件，国内学会で267件の発表を果たした。

主要学会等では，若手研究者が筆頭著者として優秀賞や奨励賞等を受賞した。詳細は各研究部の活動状況を参照されたい。

恒例の第26回精神保健研究所研究報告会（平成27年3月9日）では，最優秀発表賞（青申賞）に山口創生（社会復帰研究部），若手奨励賞に杉山 梓（精神薬理研究部）が選ばれた。

精神保健研究所は，専門家を対象とした各分野の研修（精神保健福祉，薬物依存，心身医学，自殺対策，司法精神医学，発達障害，精神医療均てん化等）を行っている。平成26年度には22課程を実施し合計1,022名が受講した。詳細は後述した。

3) 精神保健研究所へのゲスト

平成26年5月13日

Beth Israel Medical Center の Benjamin H. Natelson 氏が来訪，心身医学研究部担当の国際セミナーにて講演（Gulf war illness - toward its biopsychosocial understanding）が行われた。

平成26年7月29日

韓国政府職員一行，NCNP を訪問。精研では司法精神医学研究部を見学。

平成26年12月5日

宮城県仙台第三高等学校より5名の高校生が来訪し，精神薬理研究部，精神生理研究部，災害時こころの情報支援センターを見学。「精神保健研究への関心が深まった」との感想をいただいた。見学を積極的に

受け入れることで若手研究者の育成の一助につながれば幸いである。

平成 27 年 2 月 23 日

カンザス大学社会福祉学部の Leslie Young 氏, 同 Kellie Spencer 氏, 来訪。社会復帰研究部担当の公開セミナーにて講演「ピアスタッフが精神科医療現場で働く意義」が行われた。

平成 27 年 3 月 26 日

メルボルン大学から Chee Ng 先生一行, メルボルン大学・NCNP 合同研究会のため来訪。
(所外)

平成 26 年 11 月 5 日

WHO 精神保健・薬物依存部長 Shekhar Saxena 博士と, 認知症サミット日本後継イベントにて面談(福田)。

平成 26 年 11 月 17 日

OECD の Emily Hewlett と国際早期精神病学会にて面談(福田)。

2. 精神保健計画研究部

I. 研究部の概要

精神保健計画研究部は精神保健に関する計画の調査及び研究を行うため昭和61年に設置された。精神保健計画研究部の研究は、①精神保健福祉の現況と施策効果のモニタリングのための技術の開発と実施（モニタリング研究）、②疫学研究及び精神科医療の現場における治療やリハビリテーション技術に関する科学的根拠（evidence）を充実させるための現場との共同実証研究や研究方法論の提供（疫学・臨床研究）、③精神保健福祉施策の重要課題の解決方策を得るための情報収集と分析（政策情報研究）に区分できる。

①に関しては、630調査等による精神保健医療福祉のマクロ動向の分析、精神科入院受療必要量の算定方法の検討等を行った。

②に関しては、精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究：世界精神保健日本調査セカンド、妊婦の精神健康に関する研究、日本版CREWプログラムの開発と職場での適用可能性に関する研究等を行った。

③に関しては、精神障害者の重症入院患者の評価方法の開発に関する研究、てんかん患者の保健医療福祉等ニーズ調査、精神疾患当事者に対する態度の変容のための啓発資料・プログラムの開発等を行った。

部長：竹島 正，統計解析研究室長：立森久照，システム開発研究室長：西 大輔，流動研究員（3名）：臼田謙太郎，後藤基行，下田陽樹，外来研究員（1名）：趙 香花，客員研究員（7名）：伊庭幸人，須賀万智，高橋祥友，野口正行，橋本康男，目黒克己，赤澤正人，研究生（12名）：大類真嗣，小野さや香，的場由木，森川すいめい，加藤直広，船木友里恵（4/1より），中村江里（4/28より），久保田明子（9/8より），藤本大士（9/8より），前田克実（9/8より），山田理恵（11/10より），小竹理紗（12/8より），センター研究助手（2名）：構 聡子，吉田勾美，科研費研究補助員（1名）：西口直樹，科研費研究助手（1名）：鴨志田由美子，外来事務助手（2名）：ソウ由香，原 治子。

II. 研究活動

1) 630調査等による精神保健医療福祉のマクロ動向の分析

厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課が、都道府県・政令指定都市の精神保健福祉主管部（局）長に文書依頼を行い収集した全国の精神科医療施設などの状況についての資料（精神保健福祉資料）を、同課の許可を得て二次的に分析した。在院期間が1年以内の患者の動態の指標である平均退院率は改革ビジョン前から上昇傾向にあったが、この数年はほとんど変化がみられない。数値目標とは2012年時点でおおよそ5ポイントの開きがある。一方、すでに長期在院となった患者の動態の指標である退院率は2011年から2012年の間では少し下降した。数値目標の水準からはまだ6ポイント弱の隔たりがある。新規入院患者、長期在院患者ともに退院の発生を表す指標にほぼ変化がみられず、プラトーに達した可能性が高いと思われる。統合失調症の在院患者数は一貫して減少傾向にあったが、目標値とは2万人以上の開きがある。（立森，臼田，後藤，下田，西，竹島）

2) 地域精神保健医療の推進基盤に関するヒアリング報告

精神科医療機能別必要量の算定方法の検討の示唆を得ることを目的として、全国の11都道府県の精神保健福祉行政主管部局および精神保健医療関係者を対象にヒアリング調査を行った。精神保健医療の改革を都道府県レベルで進めて行くためには、(1)審議事項を明確にした公的かつ包括的な議論の場、(2)精神医療の課題検討の場としての役割を果たしている実質的な議論の場とそれを公的な検討の場につなげていく道筋、(3)都道府県の現状と課題をマップ上で共有し、そのマップをニーズに応じてカスタマイズしながら、課題を解決していくプロセスの共有がきわめて重要と考えられた。（竹島，立森）

3) 精神科入院受療必要量の算定方法の検討

精神保健医療が地域医療の一翼を担う重要な分野であることを踏まえて、地域の精神保健医療のニーズを踏まえた精神科医療の機能別必要量の算定方法を明らかにするため、わが国の精神保健医療のモニタリングに長く使用されてきた630調査をもとに、精神科医療機能別必要量について入院受療必要量の観点から検討を行

った。その結果、都道府県の精神医療改革進展をベースにした計算が最も有望であると考えられた。次のステップは、計算結果に相当する人口万対入院患者数 16.5 人以下で精神科医療が提供されている都道府県において、地域精神医療に必要な精神科入院受療必要量が確保されていることを検証することである。(竹島, 立森)

4) 26 年度 630 調査および追加調査の実施とそこから得られる成果の活用可能性の検討

平成 26 年度 630 調査の追加調査として、全国の精神科医療機関や都道府県・政令指定都市を対象に入院追加調査、入院外調査、通報等調査を実施した。追加調査に寄せられた質問とデータクリーニングの過程で浮かび上がる問題を解決し、持続可能性のある、新たな 630 調査を開発することが期待される。(竹島, 立森, 下田)

5) 精神医療機能別必要量の検討—Unmet needs の把握のための通報等調査—

通報等のかたちで事例化してくる、満たされていないニーズと地域精神保健福祉活動に求められるものについて明らかにすることを目的として、都道府県・政令指定都市が平成 26 年 1-6 月の 6 ヶ月間に受理した通報等の調査を行った。通報等対象者については、自傷他害のリスクに基づいた措置入院の要否検討だけでなく、必要な支援・治療等の検討が担保される体制の整備が必要と考えられた。(竹島, 下田, 立森)

6) 精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究：世界精神保健日本調査セカンド

2010年代中盤の地域住民における精神障害の頻度と受診行動、それらの関連要因や社会生活、自殺行動への影響を検討することを目的とした、世界精神保健日本調査セカンド (WMHJ2) に参画した。調査は世界保健機関 (World Health Organization: WHO) の主導する国際的な精神・行動障害に関する疫学プロジェクトの一環として実施され、その調査結果は国内の疫学データとして有用なばかりでなく、統一規格に基づく国際比較にも利用可能である。調査は3年計画で実施され、これまでに関東、北陸、東北、北海道での調査が完了した。(立森, 下田, 竹島)

7) 地域疫学調査によるてんかんの有病割合の推定

東日本の 20-75 歳の地域住民の無作為抽出サンプルを対象にてんかんのスクリーニングを行ったデータを分析し、地域住民におけるてんかんの有病率の推定を試みた。てんかんのスクリーニング項目に対しては 1366 名の有効回答 (有効回答回収率 39.3%) があった。有効回答回収率が約 40%とやや低いことや、調査地域が東日本に限定されていること、サンプルサイズが有病率を十分な精度で推定するには依然として不足、てんかんの評価はスクリーニング項目によるものであるため疑陽性の可能性があるなどの限界があるものの、生涯有病率が 1.1% (95%CI : 0.59% - 1.7%)、時点有病率が 0.29% (95%CI : 0.073% - 0.59%) と推計された。(立森, 加藤, 下田)

8) 妊婦の精神健康に関する研究

妊娠中のうつ病は母子の双方に悪影響を及ぼすことが指摘されているが、わが国における頻度や関連因子について、構造化面接を用いて調べた先行研究はほとんどない。また、うつ病になった場合には薬物療法を行っていくため、安全で有効な予防法・治療法の開発も求められている。そのため、東京医科大学産科婦人科教室、戸田中央産院と連携し、妊娠中のうつ病の頻度を構造化面接を用いて調べた。その結果、日本の市中産院に通う妊娠中期女性の精神疾患有病率は 6.2%であること、既知の関連要因に加えて出産へのプレッシャーが精神疾患に関連していることを示した。また、妊娠うつ病の治療および産後うつ病の予防としてオメガ 3 系脂肪酸の安全性・有効性を検討するための研究を実施中である。(西, 臼田, 立森, 竹島)

9) 日本版 CREW プログラムの開発と職場での適用可能性に関する研究

近年、産業精神保健の領域で注目され、うつ病の予防とも関連する概念にワーク・エンゲイジメント (仕事に対して熱意を持ち、集中して積極的に取り組んでいる状態) があるが、その向上を目的とした介入プログラムの開発、およびその効果評価研究はほとんど実施されていない。そのため、東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野に協力し、ワーク・エンゲイジメントの向上を目的として確立された介入プログラム CREW (Civility, Respect & Engagement at Work) の日本版を開発した。また、某病院の 1 つの病棟に所属するスタッフを対象に予備的な介入研究を実施し、有効性が示唆された。(西)

10) 世界精神保健に係る国際連携

WPA（世界精神医学会）疫学・公衆衛生セクションミーティング（WPASEPH2014）を2014年10月15-18日に奈良で開催した。このミーティング（国際会議）の開催を通じて、専門家間の情報交換の促進とわが国の成果の情報発信を行い、国際連携に寄与した。この成果を、国内における精神医学と公衆衛生学の研究者の協働による精神保健疫学発展のための学術プログラム実施、世界精神保健日本調査の成果の自治体レベルでの活用のための検討、精神保健医療福祉のニーズ調査の検討等につなぎ、精神保健疫学研究の発展とその社会活用を進めていくことが望まれる。（竹島、立森、西、下田）

11) 精神障害者の重症入院患者の評価方法の開発に関する研究

精神病床上に1年以上継続して入院していた者を対象とした既存調査のデータの二次解析により、「重度かつ慢性」の暫定基準案を用いたクラスター分析による患者の分類とロジスティック回帰による「重度かつ慢性」の暫定基準案と他の調査項目との関連性の検討を行った。長期在院の者が暫定基準案の観点から4群に分類できることが分かった。またロジスティック回帰により「重度かつ慢性」の暫定基準案と関連性を有すると思われる項目は、臨床上に重症もしくは重症の者の転帰としてそうなりやすい状態が多く含まれており、少なくとも重度に関しては暫定基準案が一定の妥当性を有していることを示唆している。（立森、加藤）

12) 精神疾患当事者に対する態度の変容のための啓発資材・プログラムの開発

大学生および専門学校生を対象に精神疾患当事者の芸術作品をもとに共生社会の実現に向けての啓発教育の資材案「やさしさのなかの、たくましい生き方—芸術活動を続けている精神疾患当事者から学ぶこと—」を用いた啓発教育を試行し、対象者への質問票調査に基づいて啓発資材案の評価を行った。啓発資材案を用いたグループディスカッションを含む講義が、参加者が精神疾患当事者について考え、精神疾患が当事者にどのような影響を及ぼしたのかを共感的に理解する機会となり得ること、ひいては、精神疾患当事者および精神疾患についての正しい理解を促し、共生社会の実現に寄与しうることが示唆された。（竹島）

13) 国立精神・神経医療研究センターの歴史的使命と貢献に関する実証的研究

歴史資料館開設準備会は、当センターのミッションを踏まえ、歴史資料館のあるべき姿を構想・立案することを目的として設置された。その研究活動の一環として、NCNPの活動およびその背景となる政策動向の年表作成、病院の歴史に関するパネル作成、歴代幹部等へのインタビュー、センター所蔵の歴史的資料の目録整備と保存処置、各種資料のデジタル化、全国精神科病院の保有する歴史資料調査の報告書を作成するなどした。また、外部より研究生を招聘し、武蔵療養所時代の病床日誌等の分析のための目録作成を開始し、一部の成果について学会報告を行った。（竹島、後藤）

14) てんかん患者の保健医療福祉等ニーズ調査

てんかん患者の医療保健福祉等の多様なニーズを踏まえた総合的な医療を提供するため、てんかん患者のニーズを把握すること、将来の全国規模調査の基盤を整備することを目的として、1医療施設において、てんかん治療のため受診している20-65歳のてんかん患者およびその主治医に対し、それぞれ自記式質問紙によるアンケート調査を実施した。また、「てんかんに対する総合的な医療の提供体制整備に関する研究班」に所属する班員に対して、全国規模で調査を実施する場合の課題把握のためのアンケート調査を実施した。本研究において開発されたてんかん患者の保健医療福祉等ニーズ調査票は、てんかん患者の多様なニーズの把握に役立つと考えられた。今後は、本調査で使用した質問の内容を精査した上で、全国規模の調査に活用されることが望まれる。（竹島、立森、小竹）

15) 筋ジストロフィーのエビデンス創出を目的とした臨床研究と体制整備における生物統計に関する研究

本報告では測定誤差の平均に対する同等性の検定に対して、シミュレーションにより検出力を推定した。また、十分な検出力を確保するために必要な標本数を求めた。観測者が2人の場合、3人の場合ともに、許容される誤差が真の値Xの3%以上の場合、4人程度の調査を行い測定誤差に有意な差が無ければ測定誤差に偏りは無いと考えられる。一方、許容される誤差が真の値Xの1%程度の場合、12人以上の調査が必要であると考えられる。（立森、加藤）

16) 精神・神経疾患等の実態把握に関する研究

デュシェンヌ型筋ジストロフィー患者を対象としたNS-065/NCNP-01の早期探索的臨床試験、メラス症候

群の日本人患者を対象とした EPI-743 の早期探索的臨床試験，妊婦における心身の健康増進に向けたオメガ 3 系脂肪酸による無作為化比較試験，デュシェンヌ型筋ジストロフィー（DMD）患者の病態進行に関連する尿中バイオマーカーの検討，パーキンソン病発症予防のための運動症状発症前 biomarker の特定，筋ジストロフィーの臨床試験におけるアウトカムメジャー研究，健常成人志願者を対象とした 123I-イオフルパン SPECT の健常成人データの収集に関する多施設共同研究に疫学・生物統計の専門家として関与し，質の高い研究成果の公表の促進に貢献した。（立森）

III. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

竹島 正，立森久照，西 大輔，趙 香花，臼田謙太郎，後藤基行，下田陽樹は，精神保健計画研究部共通の取り組みとして，ウェブサイト「かえるかわる 精神保健医療福祉の改革ビジョン研究ページ」を運営し，わが国の精神保健医療福祉の実態等に関する情報を提供した。

竹島 正は，全国精神保健福祉連絡協議会の副会長としてその活動を支援した。また，一般社団法人うつ病の予防・治療日本委員会（JCPTD）理事，「支援付き住宅推進会議」委員，NPO 法人「自立支援センターふるさとの会」の苦情解決第三者委員会，倫理審査委員会の委員長を務め，平成 26 年度厚生労働省社会福祉推進事業「居住支援と生活支援の展開に当たっての社会資源・地域ネットワークの実態に関する全国調査及び普及可能な事業モデルの検討」への協力を行った。公益社団法人全日本断酒連盟顧問，こころのバリアフリー研究会評議員，地域からこころの医療を考える会会長，一般社団法人 高知医療再生機構こころの医療 RYOMA 大使を務めた。

竹島 正，立森久照はメディアカンファレンス等を通して，メディア関係者への精神保健啓発を行った。

立森久照は，「支援付き住宅推進会議」委員を務めた。

西 大輔は，世田谷区，西東京市，静岡県練馬区，東大和市などの自治体や，公益財団法人パブリックヘルスリサーチセンターなどの法人が主催する一般市民向けの講演会，一般社団法人うつ病の予防・治療日本委員会（JCPTD）が主催する市民公開講座，および西東京市，神奈川県司法書士会，大阪府司法書士会などにおける職員向けの研修会の講師を務め，市民社会に対する精神保健の啓発に貢献した。

2) 専門教育面における貢献

竹島 正，立森久照，西 大輔は，WPA（世界精神医学会）疫学・公衆衛生セクションミーティングを奈良にて主催し，精神保健疫学領域の専門家間の情報交換の促進とわが国の成果の情報発信を行い，疫学・公衆衛生の領域の国際連携に寄与した。また，国立精神・神経医療研究センターとメルボルン大学の 2010 年 9 月から 5 年間の「メンタルヘルスプログラムにおける協力関係に関する覚書」（MEMORANDUM OF UNDERSTANDING 2010 COOPERATION IN MENTAL HEALTH PROGRAMS AS BETWEEN NCNP and THE UNIVERSITY OF MELBOURNE）に基づき，国立精神・神経医療研究センター・メルボルン大学の交流に努めた。

竹島 正は，全国精神保健福祉相談員会相談役を務めた。また，精神保健対策，自殺対策に関する各種研修への協力を行った。

立森久照は，東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻精神保健学分野の客員研究員として，その機関に所属する研究者，院生と共同研究を実施した。情報・システム研究機構統計数理研究所の客員准教授として，同機関の研究者，大学院生と協同研究を実施した。防衛医科大学の医学部学生実習に協力した。東京大学医学部健康科学・看護学科の学生実習に協力し，人材養成に貢献した。日本社会精神医学会の学術委員として第 33 回日本社会精神医学会において，社会精神医学研究ワークショップを企画・開催し，若手研究者の育成に貢献した。立正大学大学院心理学研究科の非常勤講師として臨床心理学研究法特論を受け持ち人材養成に貢献した。大分県立看護科学大にて，保健医療政策の評価の講義を行い，人材養成に貢献した。

西 大輔は，東京大学および防衛医科大学の医学部学生実習に協力した。また，国立病院機構災害医療センターのがん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会および看護師研修会，東久留米市医師会のうつ診療充実強化研修，茨城県栄養士会の研修で講師を務めた。さらに，TMC 主催の第 4 回臨床研究入門講座ワークショ

ップおよび第4回臨床研究実践講座ワークショップで講師・ファシリテーターを務めた。このような活動を通し、医学生、看護師、栄養士、若手医師、若手研究者の育成に貢献した。

3) 精研の研修の主催と協力

竹島 正は、精神保健計画研究部長として、第51回精神保健指導課程研修(2014.7.30-31)の主任を務めた。また、自殺予防総合対策センター長として、第8回自殺総合対策企画研修(2014.8.19-20)、第10回精神科医療従事者自殺予防研修(2014.12.2-3)の主任、第9回精神科医療従事者自殺予防研修(2014.9.16-17)の副主任を務めた。

立森久照、西 大輔は、第51回精神保健指導課程の副主任を務めた。

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

竹島 正は、内閣府本府政策参与(非常勤)、厚生労働省平成26年度自殺防止対策事業評価委員長、精神保健福祉士試験委員、内閣官房多重債務者対策本部「多重債務問題及び消費者向け金融等に関する懇談会」構成員、人事院事務総局職員福祉局心の健康づくり指導委員会委員、人事院事務総局職員福祉局の職場復帰相談医、船橋市自殺対策連絡会議委員長、富山県自殺対策推進協議会アドバイザーを務めた。

立森久照は、内閣府「自殺報道の影響と取組に関する調査研究」検討委員会の委員を務めた。警察庁「てんかんにかかっている者と運転免許に関する調査研究委員会」の委員を務めた。一般財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会医療経済研究機構のアドバイザーとして専門知識の提供を行った。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Sueki H, Yonemoto N, Takeshima T, Inagaki M: The Impact of Suicidality-Related Internet Use: A Prospective Large Cohort Study with Young and Middle-Aged Internet Users. PLoS ONE 9 (4): e94841, 2014.
- 2) Takeshima T, Yamauchi T, Inagaki M, Kodaka M, Matsumoto T, Kawano K, Katsumata Y, Fujimori M, Hisanaga A, Takahashi Y: Suicide prevention strategies in Japan: A 15-year review (1998–2013). Journal of Public Health Policy 36 (1): 52-66, 2015.
- 3) Nakanishi M, Yamauchi T, Takeshima T: National strategy for suicide prevention in Japan: Impact of a national fund on progress of developing systems for suicide prevention and implementing initiatives among local authorities. Psychiatry and Clinical Neurosciences 69 (1): 55-64, 2015.
- 4) Matsumoto T, Tachimori H, Tanibuchi Y, Takano A, Wada K: Clinical features of patients with designer drugs-related disorder in Japan: A comparison with patients with methamphetamine- and hypnotic/anxiolytic-related disorders. Psychiatry Clin Neurosci 68(5): 374-382, 2014.
- 5) Bruffaerts R, Demyttenaere K, Kessler R C, Tachimori H, Bunting B, Hu C, Florescu S, Haro J M, Lim C C, Kovess-Masfety V, Levinson D, Medina Mora M E, Piazza M, Piotrowski P, Posada-Villa J, Salih Khalaf M, Ten Have M, Xavier M, & Scott K M: The associations between preexisting mental disorders and subsequent onset of chronic headaches: A worldwide epidemiologic perspective. J Pain 16(1): 42-52, 2015.
- 6) O'Neill S, Posada-Villa J, Medina-Mora M E, Al-Hamzawi A O, Piazza M, Tachimori H, Hu C, Lim C, Bruffaerts R, Lepine J P, Matschinger H, de Girolamo G, de Jonge P, Alonso J, Caldas-de-Almeida J M, Florescu S, Kiejna A, Levinson D, Kessler R C, & Scott K M: Associations between dsm-iv mental disorders and subsequent self-reported diagnosis of cancer. J Psychosom Res 76(3): 207-212, 2014.
- 7) Nishi D, Hashimoto K, Noguchi H, Matsuoka Y: Serum neuropeptide Y in accident survivors with depression or posttraumatic stress disorder. Neuroscience Research, 83: 8-12, 2014.
- 8) Nishi D, Shirakawa MN, Ota E, Hanada N, Mori R: Hypnosis for induction of labour (Review). Cochrane Database of Systematic Reviews Issue 8, 2014.

- 9) Hamazaki K, Nishi D, Yonemoto N, Noguchi H, Kim Y, Matsuoka Y: The role of high-density lipoprotein cholesterol in risk for posttraumatic stress disorder: Taking a nutritional approach toward universal prevention. *Eur Psychiatry* 29 (7): 408-413, 2014.
- 10) Kodaka M, Matsumoto T, Katsumata Y, Akazawa M, Tachimori H, Kawakami N, Eguchi N, Shirakawa N, Takeshima T: Suicide risk among individuals with sleep disturbances in Japan: a case-control psychological autopsy study. *Sleep medicine* 15 (4): 430-435, 2014.
- 11) Kodaka M, Matsumoto T, Katsumata Y, Akazawa M, Tachimori H, Kawakami N, Eguchi N, Shirakawa N, Takeshima T: Suicide risk among individuals with sleep disturbances in Japan: a case-control psychological autopsy study. *Sleep medicine* 15 (4): 430-5, 2014.
- 12) 白神敬介, 川野健治, 立森久照, 竹島 正: 東日本大震災被災地岩手県大槌町における精神的健康—居住形態ごとの QOL の比較—。厚生学 62(3): 9-18, 2015.
- 13) 奥村康之, 藤田純一, 松本俊彦, 立森久照, 清水沙友里: 日本全国の生活保護受給者への抗不安・睡眠薬処方地域差。臨床精神薬理 17(11): 1561-1574, 2014.
- 14) 白杵理人, 西 大輔, 松岡 豊: せん妄を伴う可逆性後頭葉白質脳症に olanzapine と降圧薬の併用が奏功した 1 例。総合病院精神医学 26(1): 69-74, 2014.
- 15) 安藤道人, 後藤基行: 精神病床入院体系における 3 類型の成立と展開—制度形成と財政的変遷の歴史分析—。医療経済研究 26 (1): 27-41, 2014.
- 16) 赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 小高真美, 川上憲人, 江口のぞみ, 白川教人, 立森久照, 竹島 正: 過去に自殺企図歴のない成人男性における自殺のリスク要因の検討。精神科治療学 29 (4): 519-526, 2014.
- 17) 勝又陽太郎, 赤澤正人, 松本俊彦, 小高真美, 亀山晶子, 白川教人, 五十嵐良雄, 尾崎 茂, 深間内文彦, 榎本 稔, 飯島優子, 竹島 正: 中高年男性うつ病患者における自殺のリスク要因: 心理学的剖検を用いた症例対照研究による予備的検討。精神医学 56(3): 199-208, 2014.

(2) 総説

- 1) Sarris J, Logan AC, Akbaraly TN, Amminger GP, Balanza-Martinez V, Freeman MP, Hibbeln J, Matsuoka Y, Mischoulon D, Mizoue T, Nanri A, Nishi D, Ramsey D, Rucklidge J, Sanchez-Villegas A, Scholey A, Su KP, Jacka FN: Nutritional medicine as mainstream in psychiatry. *Lancet Psychiatry* 2 (3): 271-274, 2015.
- 2) 竹島 正, 山内貴史, 松本俊彦: わが国における自殺の原因分析と自殺対策の展望。公衆衛生 78 (4): 230-235, 2014.
- 3) 竹島 正: 自殺対策における精神保健医療の役割—自殺総合対策大綱見直しを踏まえて—。精神神経学雑誌 116 (8): 670-676, 2014.
- 4) 竹島 正: 精神保健疫学の今後—歴史を振り返りながら—。精神科 26 (1): 1-3, 2015.
- 5) 竹島 正: 人口構成の変化と高齢者の抱えるメンタルヘルスの問題の意味するもの。老年精神医学雑誌 26(2): 131-137, 2015.
- 6) 山内貴史, 奥村泰之, 白川教人, 松本俊彦, 竹島 正: 自殺のリスク評価において何に注意すべきか—消防庁および地方自治体の自損行為データから見えてきたこと—。精神科治療学 30(3): 315-320, 2015.
- 7) 立森久照: 【精神医学に必要な「最強の統計学」】 投稿論文によくみられる統計手法の過ち。精神科 24(5): 558-563, 2014.
- 8) 立森久照: これから論文を書く人のための統計の使い方と報告の仕方 (第 10 回) 統計的因果推論の補足とレポーティング・ガイドラインの紹介。日本社会精神医学会雑誌 24(1): 93-94, 2015.
- 9) 立森久照: これから論文を書く人のための統計の使い方と報告の仕方 (第 9 回) 統計的因果推論 (その 4) 傾向スコアとその応用。日本社会精神医学会雑誌 23(4): 393-395, 2014.
- 10) 立森久照: これから論文を書く人のための統計の使い方と報告の仕方 (第 8 回) 統計的因果推論 (その 3) 観察研究における因果推論。日本社会精神医学会雑誌 23(3): 275-278, 2014.

- 11) 立森久照：これから論文を書く人のための統計の使い方と報告の仕方（第7回）統計的因果推論（その2）. 日本社会精神医学会雑誌 23(2)：144-146, 2014.
- 12) 立森久照：これから論文を書く人のための統計の使い方と報告の仕方（第6回）統計的因果推論（その1）. 日本社会精神医学会雑誌 23(1)：70-72, 2014.
- 13) 野口普子, 西大輔, 松岡豊：PTSDの予防と緩和における魚油の可能性. 心身医学 54 (9)：856-860, 2014.
- 14) 臼田謙太郎, 西大輔, 松岡豊：妊娠うつ病予防に対するω3系脂肪酸の可能性. 心身医学 54 (9)：849-855, 2014.
- 15) 後藤基行, 竹島正, 中込和幸：国立精神・神経医療研究センターにおける歴史資料研究の進捗状況. 生物学史研究 91：74-75, 2014.
- 16) 下田陽樹, 立森久照, 竹島正：精神保健 630 調査からわかるもの. 精神科 26 (1)：57-62, 2015.
- 17) 松本俊彦, 小高真美, 山内貴史, 川野健治, 藤森麻衣子, 勝又陽太郎, 赤澤正人, 廣川聖子, 亀山晶子, 白川教人, 竹島正：心理学的剖検と今後の方向. 精神保健研究 60：89-96, 2014.

(3) 著書

- 1) Matsuoka Y, Hamazaki K, Nishi D: Omega-3 polyunsaturated fatty acid potential for post-traumatic stress and depression. Ronald Ross Watson, Joseph A. Tabor, John E. Ehiri and Victor R. Preedy editor. 編:Handbook of public health in natural disasters. Wageningen Academic Publishers, Netherlands, 427-440, 2015.
- 2) 竹島正：精神保健に関する予防の概念と対象. 日本精神保健福祉士養成校協会 編：新・精神保健福祉士養成講座2 精神保健の課題と支援 第2版. 中央法規出版, 東京, pp58-62, 2015.
- 3) 竹島正：精神保健に関する国, 都道府県, 市町村, 団体等の役割および連携. 日本精神保健福祉士養成校協会 編:新・精神保健福祉士養成講座2 精神保健の課題と支援 第2版. 中央法規出版, 東京, pp63-69, 2015.
- 4) 竹島正：うつ病と自殺防止対策. 日本精神保健福祉士養成校協会 編：新・精神保健福祉士養成講座2 精神保健の課題と支援 第2版. 中央法規出版, 東京, pp227-231, 2015.
- 5) 竹島正：諸外国の精神保健活動の現状および対策. 日本精神保健福祉士養成校協会 編：新・精神保健福祉士養成講座2 精神保健の課題と支援 第2版. 中央法規出版, 東京, pp326-341, 2015.
- 6) 西大輔：うつ病に併存する PTSD と心的外傷について. 野村総一郎 編：抑うつの鑑別を究める. 医学書院, 東京, pp35-44, 2014.

(4) 研究報告書

- 1) 竹島正：新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島正）」平成24～26年度総合研究報告書. pp1-10, 2015.
- 2) 竹島正, 立森久照, 高橋邦彦, 山之内芳雄, 堀尾奈都記, 河原和：地域精神保健医療の社会サービスへの統合および精神医療機能別必要量の検討に関する研究—地域精神保健医療の推進基盤に関するヒアリング報告—. 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島正）」平成24～26年度総合研究報告書. pp11-24, 2015.
- 3) 竹島正, 立森久照, 高橋邦彦, 山之内芳雄：地域精神保健医療の社会サービスへの統合および精神医療機能別必要量の検討に関する研究—26年度630調査および追加調査の実施とそこから得られる成果の活用可能性の検討—. 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島正）」平成24～26年

- 度総合研究報告書. pp25-47, 2015.
- 4) 竹島 正, 立森久照, 西 大輔, 高橋邦彦, 下田陽樹, 金田一正史, 山之内芳雄: 地域精神保健医療の社会サービスへの統合および精神医療機能別必要量の検討に関する研究—26年度630調査および追加調査の実施とそこから得られる成果の活用可能性の検討—. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究 (研究代表者: 竹島 正)」平成 24~26 年度総合研究報告書. pp49-54, 2015.
 - 5) 竹島 正, 下田陽樹, 立森久照, 高橋邦彦, 金田一正史, 小池純子: 地域精神保健医療の社会サービスへの統合および精神医療機能別必要量の検討に関する研究—Unmet needs の把握のための通報等調査—. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究 (研究代表者: 竹島 正)」平成 24~26 年度総合研究報告書. pp55-64, 2015.
 - 6) 竹島 正, 山内貴史, 廣川聖子, 牛島品子, 西村武彦: 地域精神保健医療の社会サービスへの統合および精神医療機能別必要量の検討に関する研究—精神疾患当事者に対する態度の変容のための啓発資料・プログラムの開発に関する研究—. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究 (研究代表者: 竹島 正)」平成 24~26 年度総合研究報告書. pp65-68, 2015.
 - 7) 竹島 正: 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究 (研究代表者: 竹島 正)」平成 26 年度総括研究報告書. 2015.
 - 8) 竹島 正, 立森久照, 曾根大地, 小竹理紗, 岡村 毅: てんかん患者の保健医療福祉等ニーズ調査に関する研究. 厚生労働科学研究委託費 (障害者対策総合研究事業)「てんかんに対する総合的な医療の提供体制整備に関する研究 (業務主任者: 大槻泰介)」平成 26 年度総括研究報告書. pp17-58, 2015.
 - 9) 竹島 正, 立森久照, 川上憲人, 西 大輔, 山内貴史, 高橋清久: 国際連携—わが国における精神保健疫学の発展をめざして—. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究: 世界精神保健日本調査セカンド (主任研究者: 川上憲人)」平成 26 年度総括研究報告書. pp72-85, 2015.
 - 10) 竹島 正, 高井美智子, 松本俊彦, 山内貴史, 小高真美, 福永龍繁, 鈴木秀人, 引地和歌子, 白川教人, 川野健治, 藤森麻衣子, 大槻露華, 川本静香: 自殺の要因分析体制の確立に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究 (研究代表者: 福田祐典)」平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp5-13, 2015.
 - 11) 松本俊彦, 小高真美, 高井美智子, 山内貴史, 白川教人, 竹島 正: 自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究—女性の自殺の背景と予防介入ポイント: 心理学的剖検の手法を用いた自殺既遂者の精神医学的・心理社会的特徴の性差から—. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究 (研究代表者: 福田祐典)」平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp15-25, 2015.
 - 12) 奥村泰之, 清水沙友里, 立森久照, 竹島 正: 精神保健福祉資料におけるレセプト情報の利活用の可能性 (研究協力報告書). 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究 (研究代表者: 竹島 正)」平成 24~26 年度総合研究報告書. pp69-75, 2015.
 - 13) 立森久照, 白田謙太郎, 後藤基行, 下田陽樹, 加藤直広, 西 大輔, 竹島 正: 630 調査等による精神保健医療福祉のマクロ動向の分析に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究 (研究代表者: 竹島 正)」平成 24~26 年度総合研究報告書. pp77-91, 2015.
 - 14) 栗田主一, 岡村 毅, 井藤佳恵, 古田 光, 稲垣宏樹, 杉山美香, 立森久照, 新美芳樹, 的場由木, 船木友里恵: 高齢精神障害者の処遇実態の分析と対策に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対

策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究(研究代表者:竹島 正)」平成24~26年度総合研究報告書. pp125-135, 2015.

- 15) 岩谷 力, 我澤賢之, 竹島 正: 自立支援医療に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究(研究代表者:竹島 正)」平成24~26年度総合研究報告書. pp163-173, 2015.
- 16) 高橋邦彦, 立森久照, 加藤直広, 竹島 正: 精神医療にかかる医療圏のあり方に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究(研究代表者:竹島 正)」平成24~26年度総合研究報告書. pp175-182, 2015.
- 17) 立森久照, 加藤直広, 川上憲人, 下田陽樹, 大槻泰介: 地域における成人てんかんの有病率調査に関する研究. 厚生労働科学研究委託費(障害者対策総合研究事業)「てんかんに対する総合的な医療の提供体制整備に関する研究(業務主任者:大槻泰介)」平成26年度総括研究報告書. pp59-65, 2015.
- 18) 立森久照, 川上憲人: こころの健康に関する方法論の検討と改善, 統計解析. 厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究:世界精神保健日本調査セカンド(主任研究者:川上憲人)」平成26年度総括研究報告書. pp65-71, 2015.

(5) 翻訳

- 1) 西 大輔: PTSD ハンドブック. 金剛出版, 東京, 2014. 金吉晴 監訳, 分担翻訳.

(6) その他

- 1) 竹島 正, 小高真美, 山内貴史: 「WHO 世界自殺レポート会議および関連行事」開催報告: 第3回 関連行事②シンポジウム. 公衆衛生情報 44(1): 20-12, 2014.
- 2) 竹島 正: 一般社団法人 日本社会精神医学会. 精神医学 56(4): 342, 2014.
- 3) 竹島 正: 自治医大精神医学に期待される研究と実践. 自治医大精神医学教室同門会誌(4): 3-44, 2014.
- 4) 香月真理子, 富樫健太郎, 大迫久美恵, 滝川一廣, 佐川眞太郎, 清水邦光, 本田哲也, 竹島 正, 尾上義和, 的場由木, 阿久津斎木, 小川正明, 佐藤幹夫: 最相葉月さんを囲んで「セラピスト」をセラピストたちが読む. 飢餓陣営 41: 91-104, 2014.
- 5) 竹島 正: 地域において当事者の尊厳ある回復を支えるために何ができるか 指定発言—従来志向からの脱却—. 精神保健政策研究 23: 39-40, 2014.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Takeshima T: National Strategies for Suicide Prevention. 6th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention, Tahiti, French Polynesia, 2014.6.10-13.
- 2) Takeshima T, Yamauchi T: Japan's comprehensive suicide prevention policy and international implications. The 110th Annual Meeting of the Japanese Society of Psychiatry and Neurology, Kanagawa, 2014.6.26-28.
- 3) Takeshima T: Cooperation in mental health programs between UOM and NCNP: Present and future. Joint Symposium 2014 Department of Psychiatry & National Center of Neurology and Psychiatry, Melbourne, 2014.11.19.
- 4) Tachimori H: Functional disability and social burden of common mental disorders: Findings from World Mental Health Japan Survey. Joint Symposium 2014 Department of Psychiatry & National Center of Neurology and Psychiatry, Melbourne, 2014.11.19.
- 5) Nishi D: Omega-3 PUFAs for depressive symptoms in pregnant women – An open label trial. Joint Symposium 2014 Department of Psychiatry & National Center of Neurology and Psychiatry,

Melbourne, 2014.11.19.

- 6) 竹島 正, 小高真実, 山内貴史, 福田祐典, 樋口輝彦: 自殺予防における NCNP と WHO の協働—これまでとこれから—. 第 110 回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.26-28.
- 7) 竹島 正: WHO はじめての世界自殺レポート—その意義と活用—. 第 38 回日本自殺予防学会, 福岡, 2014.9.11-13.

(2) 一般演題

- 1) Shiraga K, Takeshima T, Kawano K: Suicidal behaviors among caregivers of children temporally protected by child guidance centers in Japan. WPA Section on Epidemiology and Public Health – 2014 Meeting, Nara, 2014.10.15-18.
- 2) Yamauchi T, Shirakawa N, Shitoto R, Matsumoto T, Takeshima T: Characteristics of non-fatal suicidal behavior in an urban area in Japan, as assessed by pre-hospital medical emergency records. WPA Section on Epidemiology and Public Health 2014 Meeting, Nara, Japan, 2014.10.15-18.
- 3) Yamauchi T, Takeshima T: Epidemiology of suicide and development of suicide prevention policies in Japan. The 5th World Congress of Asian Psychiatry, Fukuoka, 2015.3.3-6.
- 4) Kodaka M, Matsumoto T, Yamauchi T, Takai M, Takeshima T: Psychiatric and psychosocial characteristics of women who died by suicide: A psychological autopsy study of 92 cases. 6th World Congress on Women's Mental Health, Tokyo, 2015.3.22-25.
- 5) Nishi D, Kuan-Pin Su, Hamazaki K, Matsuoka Y: Omega-3 fatty acids for depressive symptoms in pregnant women - Protocol. 2nd International Society for Nutritional Psychiatry Research, Melbourne, 2014.4.3-4.
- 6) Matsuoka Y, Hamazaki K, Nishi D: The role of polyunsaturated fatty acids and lipids in risk for posttraumatic stress disorder. 2nd International Society for Nutritional Psychiatry Research, Melbourne, 2014.4.3-4.
- 7) Matsuoka Y, Nishi D, Hamazaki K, Yonemoto N, Matsumura K, Noguchi H, Hashimoto K, Hamazaki T: Docosahexaenoic acid for selective prevention of posttraumatic stress disorder among severely injured patients: A randomized, placebo-controlled trial. International Society for Fatty Acids and Lipids, Stockholm, 2014.6.28-7.2.
- 8) Matsuoka Y, Nishi D, Hamazaki K, Yonemoto N, Matsumura K, Noguchi H, Hashimoto K, Hamazaki T: Docosahexaenoic acid for selective prevention of posttraumatic stress disorder among severely injured patients: a randomized, placebo controlled trial. 16th World Congress of Psychiatry, Madrid, 2014.9.14-18.
- 9) Nishi D, Koido Y, Nakaya N, Sone T, Noguchi H, Hamazaki K, Hamazaki T, Matsuoka Y: Omega-3 fatty acids for posttraumatic stress symptoms in rescue workers after the Great East Japan Earthquake. World Psychiatric Association Section on Epidemiology and Public Health, Nara, 2014.10.15-18.
- 10) Nishi D, Su KP, Usuda K, Hamazaki K, Matsuoka Y: The synchronized trial on expectant mothers with depressive symptoms by omega-3 PUFAs (SYNCHRO): Study protocol. the Mind-Body Interface International Workshop, Taichung, 2014.10.29.
- 11) Goto M, Ando M: Three Types of Psychiatric Hospitalization in Japan: A Historical Analysis of Institutional Formation and Financial Transition. WPA Section on Epidemiology and Public Health - 2014 Meeting, Nara, 2014.10.15-18.
- 12) Usuda K, Nishi D, Makino M, Tachimori H, Matsuoka Y, Sono Y, Shimada H, Ito H, Isaka K, Konishi T, Takeshima T: Prevalence and risk factors for common mental disorders in mid-pregnant women in Japan. 6th World Congress on Women's Mental Health, Tokyo, 2015.3.22-25.

- 13) Haruki Shimoda, Masao Tsuchiya, Noboru Iwata, Yukari Yokoyama, Kiyomi Sakata, Seiichiro Kobayashi, Akira Ogawa, Norito Kawakami: Psychometric properties and distribution of scores of K6 in disaster victims: A secondary analysis comparison of data from affected areas and the national populations in Japan. WPA Section on Epidemiology and Public Health - 2014 Meeting, Nara, 2014.10.15-18.
- 14) Kodaka M, Matsumoto T, Katsumata Y, Akazawa M, Tachimori H, Kawakami N, Eguchi N, Shirakawa N, Takeshima T: Suicide and sleep disturbances. WPA Section on Epidemiology and Public Health - 2014 Meeting, Nara, 2014.10.15-18.
- 15) 稲垣正俊, 末木 新, 米本直裕, 竹島 正: 自殺関連のインターネット利用の影響—若年・中年層インターネット利用者に対する大規模前向きコホート研究—. 第38回日本自殺予防学会, 福岡, 2014.9.11-13.
- 16) 小高真美, 高井美智子, 引戸絵未, 岡田澄江, 渡辺恭江, 福島喜代子, 稲垣正俊, 山田光彦, 竹島 正: ソーシャルワーカー養成課程における自殺予防教育の取組み状況と実施要件に関する研究. 第38回日本自殺予防学会, 福岡, 2014.9.11-13.
- 17) 松岡 豊, 浜崎 景, 西 大輔, 米本直裕, 野口普子, 金 吉晴: HDL コレステロールと心的外傷後ストレス障害の発症リスク. 第23回日本脂質栄養学会, 東京, 2014.8.29-30.
- 18) 後藤基行, 竹島 正: 精神病床を有する全国の病院における歴史的資料・物品の保存状況について. 第18回日本精神医学史学会, 京都, 2014.11.9.
- 19) 後藤基行, 竹島 正: (独) 国立精神・神経医療研究センターにおける歴史資料館開設準備活動. 2014年度日本科学史学会生物学史分科会・夏の学校, 宮城, 2014.7.4-5.

(3) 研究報告会

- 1) 竹島 正: 自殺の要因分析体制の確立に関する研究. 平成26年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究」第1回研究会議, 東京, 2014.7.4.
- 2) 竹島 正: 地域精神保健医療の社会サービスへの統合及び精神医療機能別必要量の検討に関する研究. 平成26年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究」第1回研究会議およびディスカッション, 東京, 2014.7.14.
- 3) 竹島 正: 地域精神保健医療の社会サービスへの統合及び精神医療機能別必要量の検討に関する研究. 平成26年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究」第2回研究会議およびシンポジウム会議, 東京, 2014.12.9.
- 4) 竹島 正: てんかん患者の保健福祉等ニーズ調査. 厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究開発事業「てんかんに対する総合的な医療の提供体制整備に関する研究(研究代表者: 大槻泰介)」研究会議, 東京, 2015.1.12.
- 5) 竹島 正: 新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究. 厚生労働科学研究(障害者対策総合研究推進事業(精神障害、神経・筋疾患分野))研究成果等普及啓発事業研究成果発表会, 東京, 2015.2.4.
- 6) 立森久照: 630 調査等による精神保健医療福祉のマクロ動向の分析及び精神医療機能別必要量の算定法に関する研究. 平成26年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究」第2回研究会議およびシンポジウム会議, 東京, 2014.12.9.

C. 講演

- 1) 竹島 正: 地域からこころの医療を考える. 地域から心の医療を考える会, 埼玉, 2014.9.6-7.

- 2) 竹島 正：自殺予防からの地域づくり。自殺対策シンポジウム IN とくしま，徳島，2014.9.15.
- 3) 竹島 正：マクロに見たうつ病の現状と社会的インパクト。日経健康セミナー 21「うつ病治療最前線」，東京，2014.11.1.
- 4) 樋口輝彦，竹島 正，丸岡いずみ：パネルディスカッション うつ病を乗り越えるために。日経健康セミナー21「うつ病治療最前線」，東京，2014.11.1.
- 5) 竹島 正：自殺予防総合対策の状況。福祉講演会「生きること。支えること。」，岩手，2014.11.7.
- 6) 吉川武彦，竹島 正，福田 宏：てい談 生きることへの支え。福祉講演会「生きること。支えること。」，岩手，2014.11.7.
- 7) 竹島 正：やさしさのなかのたくましい生き方 —アート，社会とメンタルヘルス—。橿原町家族会講演，高知，2014.12.5.
- 8) 西 大輔：うつを予防する生活習慣とストレスマネジメント。世田谷区講演会，東京，2014.6.23.
- 9) 西 大輔：食事・運動の予防効果。市民公開講座「うつ病を知る日」，東京，2014.10.18.
- 10) 西 大輔：うつ病予防のためにできること。静岡県精神保健福祉センターうつ病予防研修会，静岡，2014.10.24.
- 11) 西 大輔：職場から考えるうつ病予防法。西東京市 平成 26 年度職員ゲートキーパー研修会，東京，2014.10.31.
- 12) 西 大輔：生活習慣から考えるうつ病予防。こころの健康アップ講座，東京，2015.11.4.
- 13) 西 大輔：予防できるうつ病。伊勢保健所 自殺予防講演会，三重，2015.2.27.

D. 学会活動

(1) 学会主催

- 1) Takeshima T: WPA Section on Epidemiology and Public Health-2014 Meeting Nara, 2014.10.15-18.

(2) 学会役員

- 1) Takeshima T: WPA Section on Epidemiology and Public Health-2014 Meeting President of the Organizing Committee
- 2) Takeshima T: Asia Australia Mental Health International Advisory Council member
- 3) Tachimori H: WPA Section on Epidemiology and Public Health-2014 Meeting, Regional committee member
- 4) Nishi D: WPA Section on Epidemiology and Public Health-2014 Meeting, Regional committee member
- 5) Nishi D: The International Society for Nutritional Psychiatry Research, Executive committee member
- 6) 竹島 正：一般社団法人日本社会精神医学会 理事
- 7) 竹島 正：日本精神衛生学会 理事
- 8) 竹島 正：日本自殺予防学会 理事
- 9) 竹島 正：日本精神保健福祉政策学会 理事
- 10) 竹島 正：日本精神神経学会 「精神保健に関する委員会」委員
- 11) 竹島 正：日本精神神経学会 「精神医療・保健福祉システム委員会」委員
- 12) 竹島 正：第 38 回日本自殺予防学会 プログラム委員
- 13) 竹島 正：第 9 回国際早期精神病学会 組織委員会委員
- 14) 西大輔：日本精神神経学会 「精神保健に関する委員会」委員
- 15) 西大輔：日本総合病院精神医学会 評議員，編集委員
- 16) 西大輔：日本脂質栄養学会 評議員

(3) 座長

- 1) 竹島 正, 栗田圭一：(司会・コーディネーター) 包括的で、統合された、反応性のあるコミュニティメンタルヘルスの構築に向けて—私たちは何ができるか—。第110回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.26-28.
- 2) 竹島 正, 川野健治：(座長) 若年者の自殺の背景要因。第38回日本自殺予防学会, 福岡, 2014.9.11-13.
- 3) 竹島 正, 近藤治郎, 山口浩志, 吉尾さだえ, 石本康仁：(コーディネーター) 高齢者の自殺を防ぐために私たちができること。自殺対策シンポジウム IN とくしま, 徳島, 2014.9.15.
- 4) 野口正行, 竹島 正：(座長) 地域からこころの医療を考える。WPA Section on Epidemiology and Public Health – 2014 Meeting, Nara, 2014.10.15-18.
- 5) 竹島 正：(座長) わが国のアルコール関連問題の現状・治療・対策：アルコール健康障害対策基本法施行に向けて。WPA Section on Epidemiology and Public Health- 2014 Meeting, Nara, 2014.10.15-18.

(4) 学会編集委員等**E. 研修****(1) 研修企画**

- 1) 竹島 正, 立森久照, 西 大輔：第51回指導課程研修。東京, 2014.7.30-31.
- 2) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 藤森麻衣子：第8回自殺総合対策企画研修。東京, 2014.8.19-20.
- 3) 藤森麻衣子, 竹島 正, 山内貴史：第9回精神科医療従事者自殺予防研修。東京, 2014.9.16-17.
- 4) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 藤森麻衣子：第10回精神科医療従事者自殺予防研修。京都, 2014.12.2-3.

(2) 研修会講師

- 1) 竹島 正：精神保健のプライマリケアへの統合のピラミッドモデルの考え方。第51回指導課程研修, 東京, 2014.7.30-31.
- 2) 竹島 正：自殺対策の考え方。自殺総合対策企画研修, 東京, 2014.8.19-20.
- 3) 竹島 正：自殺対策の現状。第5回心理職自殺予防研修。東京, 2014.9.16-17.
- 4) 竹島 正：地域ネットワークと自殺問題を経験した人の支援。平成26年度自殺対策関係者研修会, 愛媛, 2014.10.24.
- 5) 竹島 正：自殺予防から見たアルコール健康障害対策～地域保健, 医療, 介護の連携に向けて～。平成26年度自殺対策関連研修会 IIIハイリスク者支援研修 (アルコール問題対応研修), 愛媛, 2014.10.23.
- 6) 竹島 正：精神保健の現状と課題。平成26年度精神保健指定医研修会 (新規・第19回), 大阪, 2014.12.4.
- 7) 竹島 正：これからの自殺対策に求められるもの～「今, ここから」私たちの地域でできることは～。平成26年度自殺予防対策研修会, 福岡, 2014.12.12.
- 8) 竹島 正：世代の特徴と, 地域における自殺対策の視点。官民協働した自殺対策の推進を考える研修会, 新潟, 2015.1.8.
- 9) 竹島 正：自殺対策に関する評価・検証について。相模原市自殺対策協議会委員研修, 神奈川, 2015.1.20.
- 10) 竹島 正：自殺予防対策について。ふじみ野市議会議員研修, 埼玉, 2015.1.21.
- 11) 竹島 正：特別報告 満たされないニーズの存在～最新の調査から見えてくるもの～。第39回全国精神保健福祉業務研修会, 京都, 2015.2.8.
- 12) 竹島 正：自殺対策と地域連携。長野県医師会自殺防止対策研修会, 長野, 2015.2.28.
- 13) 立森久照：精神障害の地域疫学研究で明らかとなった課題。第51回指導課程研修, 東京, 2014.7.30-31.
- 14) 西 大輔：看護師のストレスマネジメント。国立病院機構災害医療センター看護師研修会, 東京, 2014.6.2.
- 15) 西 大輔：司法書士のメンタルヘルス。神奈川県司法書士会「司法書士のためのメンタルヘルス対応講座」, 神奈川, 2014.6.30.
- 16) 西 大輔：一中堅研究者が思うこと。TMC 主催 第4回臨床研究入門講座ワークショップ, 東京,

2014.7.25-26.

- 17) 西 大輔：精神保健におけるセルフケア. 第 51 回指導課程研修, 東京, 2014.7.30・31.
- 18) 西 大輔：(ファシリテーター) TMC 主催 第 4 回臨床研究実践講座ワークショップ, 東京, 2015.1.23-24.
- 19) 西 大輔：支援者のメンタルヘルス. 大阪司法書士会 相談従事者のメンタルヘルス対策を考える研修会, 大阪, 2015.2.13.
- 20) 西 大輔：せん妄. 災害医療センター がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会, 東京, 2015.2.15.
- 21) 西 大輔：気持の辛さ. 災害医療センター がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会, 東京, 2015.2.15.

F. その他

- 1) 竹島 正：自殺対策官民連携協働会議@福島 (内閣府). 福島, 2014.6.20.
- 2) 竹島 正：日本・韓国・台湾自殺予防情報交換. 東京, 2014.6.27.
- 3) 竹島 正：第 3 回自殺対策官民連携共同会議. 東京, 2014.6.30.
- 4) 竹島 正：全国精神保健福祉センター長会定期総会. 東京, 2014.7.17.
- 5) 竹島 正：船橋市自殺対策連絡会議. 千葉, 2014.8.5.
- 6) 竹島 正：全国精神保健福祉連絡協議会常務理事会. 東京, 2014.8.14.
- 7) 竹島 正：自殺対策主管課長会議. 東京, 2014.9.25.
- 8) 竹島 正：自殺対策官民連携協働会議 (内閣府). 東京, 2015.2.3.
- 9) 竹島 正：心の健康づくり指導委員会 (人事院). 東京, 2015.2.6.
- 10) 竹島 正：自殺防止対策事業評価委員会 (厚生労働省). 東京, 2015.2.27.

3. 薬物依存研究部

I. 研究部の概要

薬物依存研究部は、「麻薬・覚せい剤等に関する実態調査結果に基づく勧告」（総務庁，平成10年5月）により，機能強化が要請され，平成11年度より研究室の改組及び1研究室の新設がなされ，下記のように3研究室体制となっている。

心理社会研究室

- (1) 薬物乱用・依存及び中毒性精神障害の実態調査研究に関すること。
- (2) 薬物依存の発生要因に係わる心理学的及び社会学的調査研究に関すること。
- (3) 薬物依存の予防及びその指導，研修の方法の研究に関すること。

依存性薬物研究室

- (1) 薬物依存の発生要因に係わる精神薬理学的調査研究に関すること。
- (2) 依存性薬物の薬効に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること。
- (3) 中毒性精神障害に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること。

診断治療開発研究室

- (1) 薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の開発の研究に関すること。
- (2) 薬物依存及び中毒性精神障害の治療システムの開発の研究に関すること。
- (3) 薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の研修に関すること。

しかし，診断治療開発研究室には人員がつかず，2研究室体制のままであったが，平成20年10月から人員が付き，3研究室体制となった。従来同様，平成26年度も，官民を問わない各種問い合わせ，講師派遣，調査・研修等各種協力依頼が殺到し，それらは人員の限界を超えるものであったが，最大限の協力を惜しまなかったつもりである。

人員構成は，次のとおりである。部長：和田 清，心理社会研究室長：嶋根卓也，依存性薬物研究室長：船田正彦，診断治療開発研究室長：松本俊彦，流動研究員：邱 冬梅，大澤美佳（平成26年6月より）

II. 研究活動

A. 疫学的研究

1) 飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査（2014年）

中学生における薬物乱用の広がりや薬物乱用の危険因子を把握し，中学生に対する薬物乱用防止対策の基礎資料に供するために，飲酒，喫煙，薬物乱用に対する意識・実態調査を実施した（層別一段集落抽出法）。①有機溶剤の生涯経験率は，男子で1.0%，女子で0.4%であり，全体では0.7%であった。②大麻の生涯経験率は男子で0.3%，女子で0.1%，全体では0.2%であった。③覚せい剤の生涯経験率は，男子で0.3%，女子で0.2%，全体では0.2%であった。危険ドラッグの生涯経験率は，男子で0.3%，女子で0.1%，全体で0.2%であった。危険ドラッグ乱用経験者における大麻乱用経験率，覚せい剤乱用経験率は，それぞれ，48.6%，65.1%であり，従来の「喫煙→有機溶剤→大麻・覚せい剤」という流れとは別に，「喫煙→有機溶剤・危険ドラッグ→大麻・覚せい剤」ないしは「喫煙→危険ドラッグ→大麻・覚せい剤」という新しい流れの出現可能性を示唆するものであった。（平成26年度厚生労働科学研究費補助金（以下，厚労科学研究）：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業。和田 清，邱 冬梅，嶋根卓也）

2) 薬物乱用・依存者におけるHIV感染の実態とハイリスク行動についての研究

薬物依存症者におけるHIV/HCV/HBV感染の実態とハイリスク行動に関するわが国唯一の継続的定点調査である。全国5カ所の医療施設調査（全国の精神科病院に入院中の覚せい剤関連精神障害患者の約11%を捕捉できる）及び5カ所での非医療施設調査を実施した。HIV抗体陽性者は4名認められたが，感染経路は全員男性同性愛者間での性行為であると推定された。覚せい剤関連精神障害患者でのHCV抗体陽性率は医療施設群で約34%，非医療施設群で約40%と高かった。厚労科学研究：エイズ対策研究事業。和田 清）

3) 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査

2014年度の調査では、国内1,598箇所の有床精神科医療機関の75.2%より回答を得ることができた。調査期間中に薬物関連障害患者の治療を行った精神科医療機関は、調査対象施設の16.4%であり、この割合は、2010年度調査の8.4%はもとより、2012年度調査の13.8%をも上回る数値であった。今年度、国内の精神科医療機関から報告された症例の総計は1,709例であったが、面接調査拒否事例や、重要な変数の欠損事例を除いた1,579例の薬物関連障害症例を今回の分析対象とした。

その結果、対象症例1,579例において、「主たる薬物」として最も多かったのは覚せい剤(42.2%)で、次いで危険ドラッグ(23.7%)、処方薬(睡眠薬・抗不安薬)(13.1%)、有機溶剤(5.7%)、大麻(2.4%)という順であった。しかし、「過去1年以内に主たる薬物の使用が認められた者」1,019例に限定した場合、「主たる薬物」として最も多いのは、危険ドラッグ(34.8%)であり、次いで覚せい剤(27.4%)、処方薬(16.9%)であった。今日の薬物依存症臨床の現場では、危険ドラッグや処方薬といった「取り締まれない薬物」が中心的課題となりつつある状況がうかがわれた。

今年度の調査では、対象となった薬物関連障害患者がどのくらい治療・回復のための社会資源を利用しているのかも調べた。その結果、過去1年以内に薬物使用のある薬物関連精神疾患症例1,019例中、ICD-10の「依存症候群」の診断に該当した者は69.2%にも達していたにもかかわらず、医療機関などの依存症治療プログラム(38.5%)や自助グループ(32.4%)・民間リハビリ施設(22.2%)を利用したことのある者は限られていた。今後、国内における薬物依存症に対する治療体制の整備は喫緊の課題であると考えられた(厚労科学研究：障害者対策総合研究事業。松本俊彦，嶋根卓也，和田 清)。

4) クラブイベント来場者における違法ドラッグの乱用実態把握に関する研究(2014年)

医療的に事例化していない「危険ドラッグ」の乱用実態を把握するために、調査協力が得られた関東地方の1店舗で開催された2回の音楽イベントの来場者(16歳以上)のうち46名に調査協力を依頼し、計26名に対してノート型パソコン(スタンドアロン型、オフライン)を用いた自記式調査を実施した(回収率:56.5%)。クラブ利用者層全体では「指定薬物制度による使用や所持の禁止」が概ね認知されているものの、危険ドラッグ使用者の間では十分に認知されていないことが示唆された。(厚労科学研究：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業。嶋根卓也，和田 清)

5) 薬局を情報源とする処方薬乱用・依存の実態把握に関する研究

保険薬局の薬剤師に対して、ゲートキーパートレーニング(以下、GKT)による介入を行い、その効果を明らかにした(介入群83名，対照群231名)。GKTの前後で、介入群では「処方医への情報提供」ができる薬剤師が有意に増えるが、対照群では同様の変化はみられなかった。介入群における「処方医との情報共有」ができる対象者の増加は、ゲートキーパーとしての薬剤師が担う臨床行動が改善したことを意味しており、GKTがもたらした効果と言える。(厚労科学研究：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業。嶋根卓也)

B. 臨床研究

1) 薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究

平成21年9月～平成25年6月に国立精神・神経医療研究センター病院薬物専門外来を初診し、何らかの依存性薬物に関してDSM-5使用障害に該当した全患者231名のうち、初診後ただちにSMARPPに少なくとも1回以上参加した者79例を対象候補者とし、ここからさらに、SMARPP初回クール終了から1年経過時点における通院継続者37名(対象候補者の46.8%：男性28名，女性9名：平均年齢[標準偏差]；36.4[7.2]歳)を対象とした。この対象に関して、診療録にもとづく後方視的な情報収集を行い、SMARPP初回クール終了から1年経過時点の転帰に影響を与える要因について検討した。その結果、対象37例のうち、SMARPP終了後1年経過時点で断薬していた者は25例(67.6%)であり、その60%は1年以上の断薬を継続していた。対象のSMARPP終了後1年経過時点での断薬に影響している要因は、「無職」($p=0.046$)、「危険ドラッグの乱用歴がない」($p=0.029$)、SMARPP終了後1年までのあいだに、「精神保健福祉センターのプログラムを利用している」($p=0.001$)であった。また、薬物使用頻度が「改善」していると見なされた者は26例(70.3%)であり、対象のSMARPP終了後1年経過時点での断薬に影響している要因は、「SMARPP初回クール参加

回数が多い」(p=0.040)ということだけであった。一方、対象 37 例中、多剤乱用者も含む覚せい剤使用障害に該当する者 23 例のうち、SMARPP 初回クール終了後 1 年経過時点で断薬をしていた者は 15 例 (65.2%) であり、そのうちの 60%が 1 年以上の断薬を継続していた。覚せい剤使用障害症例の SMARPP 初回クール終了後 1 年経過時点における断薬に影響を与える要因は、「危険ドラッグの乱用歴がない」(p=0.011)、「SMARPP 初回クール参加回数が多い」(p=0.034)であった。また、薬物使用頻度が改善していた見なされた者は 16 例 (69.6%) であり、対象の SMARPP 終了後 1 年経過時点での「改善」に影響する要因としては、「学歴が高校卒業以上」(p=0.025)、「危険ドラッグの乱用歴がない」(p=0.005)、「睡眠薬・抗不安薬の乱用歴がない」(p=0.025)、「SMARPP 終了後 1 年経過時点で仕事に就いている」(p=0.016)、「SMARPP 初回クール参加回数が多い」(p=0.006)であった。

以上の結果より、SMARPP は覚せい剤使用障害患者に対する効果は明確であり、初回クールを 7 割以上参加し、その後も 1 年間の通院を継続していることが、断薬もしくは薬物使用頻度の改善、および、社会的機能の改善に影響する可能性が推測される。(平成 26 年度精神・神経疾患研究開発費、松本俊彦 厚労科学研究：障害者総合対策事業 (精神分野)、松本俊彦)

2) HIV 拠点病院と連携した薬物依存者支援システムの構築と治療プログラムの開発に関する研究

エイズ拠点病院における薬物関連問題の重症度を測定し、薬物依存回復支援の可能性を探ることを目的とした調査により、拠点病院群 355 名 (平均 46.6 歳、男性 96.4%、MSM86.9%)、ダルク群 96 名平均 36.2 歳、男性 86.5%、MSM13.6%) より有効回答を得た。拠点病院群の半数以上に薬物使用が認められたが、物質使用障害の程度は比較的軽度であった。また、抗 HIV 薬との相互作用を気にしつつも、依存症治療に対する潜在的なニーズが高いことが示唆された。(平成 26 年度精神・神経疾患研究開発費、嶋根卓也)

C. 基礎研究

1) カチノン系化合物の有害作用評価に関する包括的研究

危険ドラッグであるカチノン系化合物の精神依存性並びに細胞毒性の発現について、特徴的評価パラメータの探索を行った。薬物依存性は条件付け場所嗜好性試験による解析、中枢興奮作用については運動促進作用が特徴的な評価パラメータになることが明らかになった。細胞による毒性評価は迅速かつ客観的解析手法として有用である。カチノン系化合物の中枢作用および毒性の発現は、ドパミン受容体拮抗薬の前処置によって抑制されることから、ドパミン神経系が関与すると考えられる。また、カチノン系化合物の定量的構造活性相関(QSAR)による解析から、ドパミン取り込み阻害作用の強度から有害作用を推測できることが明らかになった。QSAR 解析に基づいた解析から、カチノン系化合物 840 種類の有害作用について検討し、その乱用危険性を示した。(厚労科学研究：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業、船田正彦)

2) 合成カンナビノイドの細胞毒性に関する研究

CHO-CB1 受容体発現細胞を使用して、合成カンナビノイド(AB-CHIMINACA, 5-fluoro-AMB)暴露による細胞毒性の評価を行った。薬物添加 3 時間後に、死細胞由来プロテアーゼ遊離を測定し、細胞毒性の指標とした。本試験により、AB-CHIMINACA, 5-fluoro-AMB は非常に強力な細胞毒性を惹起することから、乱用することにより重篤な健康被害の発生が危惧される。培養細胞を利用した細胞毒性の評価は迅速かつ正確な毒性評価法として有用であると考えられる。(厚労科学研究：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業、船田正彦)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

当研究部は、研究部創設以来、厚生労働省に限らず、薬物乱用・依存対策に関係する各省庁・自治体・市民団体等と連携を取り続けてきており、独自に研修会を主催するのみならず、各種研修会への講師派遣、啓発用資料および教材作成、調査等への協力などを行っている(細目は研究業績参照)。

1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・市民向け講演会：(IV. 研究業績 C.講演 参照)
- ・報道：(IV. 研究業績 F.その他 参照)

2) 専門教育面における貢献

・研修会・研究会

- ・第28回薬物依存臨床医師研修会（主催），第16回薬物依存臨床看護研修会（主催），第6回薬物依存症に対する認知行動療法研究会（主催），平成26年度厚生労働省依存症治療拠点機関設置運営事業 全国拠点機関

・各種教育研修会等への講師派遣（IV. 研究業績 C. 講演 参照）

・大学

昭和大学薬学部兼任講師（和田 清），早稲田大学人間科学学術院非常勤講師（松本俊彦），星薬科大学非常勤講師（船田正彦），東京薬科大学薬学部非常勤講師（嶋根卓也），津田塾大学非常勤講師（嶋根卓也），国立障害者リハビリテーションセンター学院非常勤講師（嶋根卓也）。

・その他

"Addiction" Editorial advisory board（和田 清），Psychiatry and Clinical Neurosciences Reviewer（和田 清，松本俊彦）。

3) 精研の研修の主催と協力

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

・政府委員会

厚生労働省薬事・食品衛生審議会臨時委員指定薬物部会（和田 清），厚生労働省医薬食品局依存性薬物検討会委員（和田 清），法務省保護局「薬物地域支援研究会」メンバー（和田 清，松本俊彦），法務省矯正局「少年矯正の処遇等に関する専門家会議」メンバー（和田 清，松本俊彦），文部科学省スポーツ・青少年局「薬物乱用防止広報啓発活動推進協力者会議」委員（嶋根卓也）

・その他公的委員会

東京都薬物情報評価委員会委員（和田 清），独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員（和田 清），大阪府薬物指定審査会委員（和田 清），東京地方裁判所登録精神保健判定医（松本俊彦），世田谷区自殺対策連絡協議会会長（松本俊彦），中央区自殺対策検討委員会委員長（松本俊彦），東京都危険ドラッグ専門調査委員会専門委員（船田正彦），社団法人全国高等学校 PTA 連合会薬物乱用防止啓発パンフレット編集委員（嶋根卓也），一般社団法人埼玉県薬剤師会理事（嶋根卓也），一般社団法人埼玉県薬剤師会職能対策・学術委員（嶋根卓也）。

・研究成果の行政貢献

- ・「危険ドラッグ」「指定薬物」について，依存性・細胞毒性等を評価し，薬物使用の禁止・制限について具体的な提案（依存性薬物の指定）を行った（厚労省医薬食品局）。
- ・「刑の一部執行猶予」制度導入を見越して，薬物依存者に対する「保護観察所における治療プログラムの開発」，ならびに，「地域支援ガイドライン」（案）の策定とそのモデル事業の推進に貢献した（法務省保護局）。
- ・少年院収容者に対する薬物離脱指導プログラム導入に対して，「矯正教育プログラム（薬物非行）」策定とその推進に貢献した（法務省矯正局）。

5) センター内における臨床的活動

毎週木曜日に薬物依存症外来での診療を行うとともに，デイケアにて薬物再乱用防止のための集団認知行動療法プログラムを実施している（和田 清，松本俊彦）。また，毎週火曜日に医療観察法病棟（8 病棟，9 病棟）にて物質使用障害治療プログラムの運営をサポートしている（松本俊彦）。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Matsumoto T, Tachimori H, Tanibuchi Y, Takano A, Wada K: Clinical features of patients with designer-related disorder in Japan: A comparison with patients with methamphetamine- and

- hypnotic/anxiolytic-related disorders. *Psychiatric Clin Neurosci*. 68: 374-382, 2014.
- 2) Ando S, Yasugi D, Matsumoto T, Kanata S, Kasai K: Serious outcomes associated with overdose of medicines containing barbiturates for treatment of insomnia. *Psychiatry Clin Neurosciences*. 68: 721, 2014.
 - 3) Takeshima T, Yamauchi T, Inagaki M, Kodaka M, Matsumoto T, Kawano K, Katsumata Y, Fujimori M, Hisanaga A, Takahashi Y: Suicide prevention strategies in Japan: A 15-year review (1998-2013). *Journal of Public Health Policy* 36(1): 52-66, 2015.
 - 4) Shimane T, Matsumoto T, Wada K: Clinical behavior of Japanese community pharmacists for preventing prescription drug overdose. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 69: 220-227, 2015.
 - 5) Mori T, Funada M, Tsuda Y, Maeda J, Uchida M, Suzuki T: Dopaminergic hyperactivity accompanied by hyperlocomotion in C57BL/6J-bg(J)/bg(J) (beige-J) mice. *J Pharmacol Sci*. 125(2): 233-236, 2014.
 - 6) 引土絵未, 松本俊彦, 和田 清, 谷渕由布子, 高野 歩, 今村扶美, 川地 拓, 加藤 隆: いわゆる「脱法ドラッグ」使用障害患者の集団薬物再乱用防止プログラム (SMARPP) への治療反応性一覚せい剤使用障害との比較. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 49(6) : 318-329, 2014.
 - 7) 船田正彦, 竹林(大澤)美佳, 宮崎育子, 浅沼幹人, 青尾直也, 和田 清: ハルミンの薬物依存性ならびに細胞毒性の評価: 植物由来幻覚成分の有害作用について. *精神保健研究* 61 : 61-72, 2015.
 - 8) 高野 歩, 川上憲人, 宮本有紀, 松本俊彦: 物質使用障害患者に対する認知行動療法プログラムを提供する医療従事者の態度の変化. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 49 (1) : 28-38, 2014.
 - 9) 池田朋広, 小池純子, 森田展彰, 山本和弘, 合川勇三, 松本俊彦, 稲本淳子: 措置入院指定病院の立場における違法物質使用障害者への退院支援策の検討—司法的処遇と薬物採尿検査に着目した4事例から— . *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 49(1) : 45-56, 2014.
 - 10) 勝又陽太郎, 赤澤正人, 松本俊彦, 小高真美, 亀山晶子, 白川教人, 五十嵐良雄, 尾崎 茂, 深間内文彦, 榎本 稔, 飯島優子, 竹島 正: 中高年男性うつ病患者における自殺のリスク要因: 心理学的剖検を用いた症例対照研究による予備的検討. *精神医学* 56(3) : 199-208, 2014.
 - 11) 赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 小高真美, 川上憲人, 江口のぞみ, 白川教人, 立森久照, 竹島 正: 過去に自殺企図歴のない成人男性における自殺のリスク要因の検討. *精神科治療学* 29 (4) : 519-526, 2014.
 - 12) 近藤あゆみ, 井手美保子, 高橋郁絵, 谷合知子, 三浦香澄, 山口亜希子, 四辻直美, 松本俊彦: 精神保健福祉センターにおける薬物依存症再発予防プログラム「TAMARPP」の有効性評価. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 49 (2) : 119-135, 2014.
 - 13) 池田朋広, 小池純子, 森田展彰, 合川勇三, 松本俊彦, 稲本淳子, 岩波 明: 措置入院指定病院に入院する違法物質使用障害者の実態調査—退院時における逮捕群と非逮捕群との比較から—. *日本社会精神医学会雑誌* 23 : 112-122, 2014.
 - 14) 奥村康之, 藤田純一, 松本俊彦, 立森久照, 清水沙友里: 日本全国の生活保護受給者への抗不安・睡眠薬処方地域差. *臨床精神薬理* 17(11) : 1561-1574, 2014.
 - 15) 奥村泰之, 藤田純一, 松本俊彦: 日本における子どもへの向精神薬処方の経年変化—2002年から2010年の社会医療診療行為別調査の活用—. *精神神経学雑誌* 116(11) : 921-935, 2014.
 - 16) 勝又陽太郎, 松本俊彦: 若年者の自傷行為に対する援助行動と感情体験との関連. *日本社会精神医学会雑誌* 24(1) : 9-18, 2015.
 - 17) 高野 歩, 宮本有紀, 松本俊彦: 薬物使用障害を有する人を対象としたインターネットを活用した介入に関する文献レビュー. *日本アルコール薬物医学界雑誌* 50(1) : 19-34, 2015.

(2) 総説

- 1) 和田 清：連載 刑事政策研究会 基調報告 10 薬物犯罪 わが国の薬物乱用・依存問題の現状と政策的課題. 論究ジュリスト 2014 年/春号 (9 号) : 96-105, 2014.
- 2) 和田 清：巻頭論文「脱法ドラッグ」乱用の急拡大と求められる薬物乱用防止教育の視点. 教育時報 (岡山県教育委員会) 2014 年 9 月号 : 4-7, 2014.
- 3) 和田 清：薬物依存. 臨床精神医学 43(11) : 1647-1651, 2014.
- 4) 和田 清：我が国の薬物乱用・依存の最近の動向と治療の現状・課題について. 警察学論集 第 67 巻第 1 2 号 : 90-112, 2014.12.10.
- 5) 和田 清, 松本俊彦, 船田正彦, 嶋根卓也, 邱 冬梅：薬物乱用・依存の疫学. 精神科 26(1) : 44-49, 2015.
- 6) 山口 豊, 窪田辰政, 須部宗生, 杉山三七男, 下川 学, 横沢民男, 松本俊彦：自傷行為の実態について. 国士舘大学 21 世紀アジア学会 21 世紀アジア学研究第 11 号 : 73-83, 2014.
- 7) 松本俊彦：脱法ドラッグの現状. 財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センターNEWS LETTER 2013.2・第 90 号 : 2-5, 2014.
- 8) 松本俊彦：職能ワークショップ 3 (保健師)：事例検討 アディクションとしての自傷～「故意に健康を害する」症候群としてのアディクション～. 日本アルコール関連問題学会雑誌 15(2) : 113-116, 2014.
- 9) 松本俊彦, 小高真美, 山内貴史, 川野健治, 藤森麻衣子, 勝又陽太郎, 赤澤正人, 廣川聖子, 亀山晶子, 白川教人, 竹島 正：心理学的剖検と今後の方向. 精神保健研究 60 : 89-96, 2014.
- 10) 山口 豊, 窪田辰政, 杉山三七男, 橋本佐由理, 松本俊彦, 宗像恒次：自傷行為研究における課題. 思春期学 32 : 197-206, 2014.
- 11) 竹島 正, 山内貴史, 松本俊彦：わが国における自殺の原因分析と自殺対策の展望. 公衆衛生 78(4) : 230-235, 2014.
- 12) 松本俊彦：1. 依存の問題～常用量依存も含めて. Modern Physician 34 (6) : 653-656, 2014.
- 13) 松本俊彦：トラウマという視点からみえてくるもの. 精神科治療学 29 (5) : 569-575, 2014.
- 14) 松本俊彦：[DSM-5 をどう見るか? 第 4 回]私は DSM-5 の物質関連問題をこう見る. 精神科治療学 29(5) : 700-701, 2014.
- 15) 松本俊彦：物質依存当事者の求助行動促進. 精神科 24 (6) : 676-681, 2014.
- 16) 松本俊彦：自傷行為を繰り返す人たちとその家族への支援. 日本アルコール関連問題学会雑誌 16(1) : 159-161, 2014.
- 17) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助. アディクションと家族 30 (1) : 16-22, 2014.
- 18) 松本俊彦：Q08 脱法ドラッグの健康被害と指導上の注意点について. 健康教室 2014 年 7 月増刊号：養護教諭のための教育実践に役立つ Q & A 集 V : 39-41, 2014.
- 19) 松本俊彦：薬物関連精神患者の司法的問題とその対応. 日本社会精神医学会雑誌 23(3) : 202-208, 2014.
- 20) 松本俊彦：脱法ドラッグ (危険ドラッグ) 関連障害の疫学的動向とその症候学的特徴：～「全国精神科医療施設における薬物関連障害の実態に関する調査」より～. 精神科救急 17 : 22-27, 2014.
- 21) 松本俊彦：薬物依存症. 臨床精神医学 43(8) : 1161-1166, 2014.
- 22) 松本俊彦：物質関連障害. 精神科 26(1) : 83-86, 2015.
- 23) 松本俊彦：社会の要請に応える「新しい教育課題」「薬物乱用防止教育」の基礎的知識とその意義. 月刊教職研修 43(2) : 52-53, 2014
- 24) 松本俊彦：薬物依存症に対する治療—認知行動療法的ワークブックを用いたグループ療法—. 保険の科学 56(10) : 683-687, 2014
- 25) 松本俊彦：現代社会と薬物 危険ドラッグ問題の実態と対応. 診療研究 501 : 15-20, 2014.
- 26) 松本俊彦：自傷行為を繰り返す若者の理解～どのような支援が必要か～. 病院・地域精神医学 57(1) : 19-25, 2014.
- 27) 松本俊彦：覚醒剤依存症の理解. 更生保護 65(10) : 6-12, 2014.
- 28) 松本俊彦：この病, この一曲 僕をだましてもいいけど, 自分はまだだまさないで. こころの科学 178 :

- 2-8, 2014.
- 29) 松本俊彦: エッセイ「私の「ゆきづまり」乗り越え体験から 薬物依存症の臨床から. こころの科学 178 : 92-93, 2014.
- 30) 松本俊彦: 特集心の病と向き合う 心の病を俯瞰する. 月報司法書士 No.513 : 4-15, 2014.
- 31) 松本俊彦: 特集 その患者に睡眠薬は必要かー眠れないという訴えにどう対応するかー 睡眠導入に好ましくない薬剤. 精神科治療学 29(11) : 1439-1442, 2014.
- 32) 宮田久嗣, 樋口 進, 廣中直行, 池田和隆, 伊豫雅臣, 小宮山徳太郎, 松本俊彦, 鈴木 勉, 高田孝二, 和田 清, 齋藤利和: DSM-5 を理解する為の基礎知識 物質関連障害および嗜癖性障害群. 精神神経学雑誌 29(11) : 950-954, 2014.
- 33) 松本俊彦: 習慣化・嗜癖化した自傷行為への対応. 認知行動療法実践レッスン エキスパートに学ぶ 12 の極意 : 115-130, 2014.
- 34) 松本俊彦: 境界性パーソナリティ障害に伴う精神疾患の診断と治療ー物質使用障害を中心にー. Depression Strategy うつ病治療の新たなストラテジー4(4) : 7-9, 2014.
- 35) 松本俊彦: 物質関連障害および嗜癖性障害群. 臨床精神医学 日本の精神科医は米国 DSM-5 をどう読むか第 43 巻増刊号 : 166-172, 2014.
- 36) 谷合知子, 四辻直美, 奥田秀実, 荏部春夫, 三浦香澄, 平賀正司, 近藤あゆみ, 松本俊彦: 薬物等再発予防プログラム「TAMARPP」の質的効果評価ー担当職員への振り返りから. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 49(6) : 305-317, 2014.
- 37) 松本俊彦: 薬物依存症と「自己治療仮説」～人が依存症になる理由に関する一つの見方～. 公益財団法人 麻薬・覚せい剤乱用防止センター NEWS LETTER 2014.8・第 91 号 : 2-7, 2014.
- 38) 松本俊彦: くすりにハマる患者のこころ. 月刊薬事 56(10) : 27-30, 2014.
- 39) 松本俊彦: DSM-5 「え, うそ, アルコール依存症の診断名が変わるの!？」 薬物「使用障害」について. 季刊ビィ Be! 116 Sept 2014 : 47, 2014.
- 40) 松本俊彦: 薬物依存. 山口徹, 北原光夫 監修, 高木誠, 小室一成 総編集 : 今日の治療方針 私はこうしている : 957-958, 2015.
- 41) 高井美智子, 松本俊彦: 自殺対策とリスクマネジメント. 臨床心理学 15(1) : 59-63, 2015.
- 42) 松本俊彦: 覚醒剤乱用受刑者に対する自習ワークブックとグループワークを用いた薬物再乱用防止プログラムの介入効果. 精神神経学雑誌 117(1) : 3-9, 2015.
- 43) 谷渕由布子, 松本俊彦: 危険ドラッグをめぐる諸問題. 精神医学 57(2) : 105-117, 2015.
- 44) 山内貴史, 奥村泰之, 白川教人, 松本俊彦, 竹島正: 自殺のリスク評価において何に注意すべきかー消防庁および地方自治体の自損行為データから見えてきたことー. 精神科治療学 30(3) : 315-320, 2015.
- 45) 松本俊彦: 自殺念慮のアセスメントーCASE アプローチー. 精神科治療学 30(3) : 325-332, 2015.
- 46) 松本俊彦: 薬物依存症の現在～再乱用防止ー依存症治療を中心に～. ストレスアンドヘルスケア 2015 春号 No216 : 1-4, 2015.
- 47) 松本俊彦: SMARPP による薬物依存治療の現状と可能性. 最新精神医学 20(2) : 131-139, 2015.
- 48) 嶋根卓也: 特集を読み解く上でのキーワード「乱用・依存・中毒」. 月刊薬事 56(10) : 21, 2014.
- 49) 嶋根卓也: 心に悩みを抱えた患者の支援ーゲートキーパーとしての薬剤師. 月刊薬事 56(10) : 41-44, 2014.
- 50) 嶋根卓也: 社会問題化する危険ドラッグに薬剤師はどのように関われるか. 日本薬剤師会雑誌 66 : 17 - 20, 2014.
- 51) 嶋根卓也: 青少年はなぜ薬物に手を出すのか. 教育と医学 738 : 58-67, 2014.
- 52) 嶋根卓也: 危険ドラッグを使う若者たち. 心理臨床の広場 7(2) : 26-27, 2015.

(3) 著書

- 1) 和田 清: 「脱法ハーブ」の問題点. 中・高校 編 : 体と心 保健総合大百科 保健ニュース・心の健康ニュース 縮刷活用版 2014 年. 少年写真新聞社, p74, 2014.

- 2) 和田 清：Ⅱ. 物質関連障害および嗜癖性障害群 物質関連障害群 物質誘発性障害群—中毒, 離脱, 物質・医薬品誘発性精神障害. DSM-5 を読み解く 2. 中山書店, pp121-128, 2014.
- 3) 和田 清：「脱法ドラッグ」なぜ日本は規制できないのか. 文春ムック 文芸春秋オピニオン 2015年の論点 100, 株式会社文芸春秋, pp238-239, 2015.
- 4) 松本俊彦：8. 破壊的行動障害 C. 薬物乱用. 齊藤万比古 総編：子どもの心の診療シリーズ 子どもの心の処方箋ガイド 診察の仕方／診断評価／治療支援. 中山書店, 東京, pp329-331, 2014.
- 5) 松本俊彦：B. 子どもの心の診療特有の問題. 4 自傷行為. 齊藤万比古, 小平雅基 編：日本精神神経学会小児精神医療委員会監修 臨床医のための小児誠意新医療入門. 医学書院, 東京, pp117-121, 2014.
- 6) 松本俊彦：アルコールとうつ, 自殺——「死のトライアングル」を防ぐために. 岩波書店, 東京, pp1-78, 2014.
- 7) 松本俊彦：第4章 治療 衝動・逸脱行動に対する対処. 齋藤利和 編：最新医学別冊 新しい診断と治療のABC 83 アルコール依存症 精神9. 最新医学社, 大阪, pp143-151, 2014.
- 8) 赤澤正人, 松本俊彦：第7章 自殺と自傷行為. 臨床死生学テキスト編集委員会 編：テキスト臨床死生学. 勁草書房, 東京, pp85-95, 2014.
- 9) 松本俊彦：6. 境界性パーソナリティ障害. 平安良雄 編：精神科レジデントハンドブック第2版. 中外医学社, 東京, 149-156, 2014.
- 10) 谷渕由布子, 松本俊彦：行動嗜癖. 田中啓治, 御子柴克彦 編：脳科学辞典: DOI. 10.14931/bsd.4651
- 11) 松本俊彦：9. 薬物乱用・依存. 東京都保健医療公社豊島病院副院長 味澤篤 編：長期療養時代のHIV感染症/AIDS マニュアル. 日本医事新報社, 東京, pp118 - 126, 2014.
- 12) 松本俊彦：リストカットがやめられない… 女と男のディクショナリー HUMAN+. 公益社団法人 日本産婦人科学会, 神奈川, p17, 2014.
- 13) 松本俊彦：ダイエット, 拒食・過食. 女と男のディクショナリー HUMAN+. 公益社団法人 日本産婦人科学会, 神奈川, p18, 2014.
- 14) 松本俊彦：V. 自殺関連 第三部 新しい尺度とモデル/今後の研究のための病態 非自殺的な自傷行為. DSM-5 を読み解く 伝統的精神病理, DSM-IV, ICD-10 をふまえた新時代の精神科診断 1 神経発達症群, 食行動障害および摂食障害群, 排泄症群, 秩序破壊的・衝動制御・素行症群, 自殺関連. 神庭重信 総編, 神尾陽子 編：中山書店, 東京, pp190-202, 2014.
- 15) 松本俊彦：Ⅱ. 物質関連障害および嗜癖性障害群 診断概念の歴史. DSM-5 を読み解く 伝統的精神病理, DSM-IV, ICD-10 をふまえた新時代の精神科診断 2 統合失調症スペクトラム障害および他の精神障害群, 物質関連障害および嗜癖性障害群. 神庭重信 総編, 村井俊哉, 宮田久彌 編：中山書店, 東京, pp107-120, 2014.
- 16) 松本俊彦：精神保健. 自殺対策. 公衆衛生実践キーワード. 鳩野洋子, 島田美喜 編：医学書院, 東京, pp105-106, 2014.
- 17) 松本俊彦：(河野アミ 構成)：危険ドラッグはなぜ「危険」なのか～その恐ろしさと回復のヒント～. KADOKAWA, 東京, pp-1-109, 2014.
- 18) 松本俊彦：抗不安薬の正しい使い方～より安全に用いるための注意点は？. 抗不安薬プラティカルガイド 今だから知っておきたい正しい使い方. 中外医学社, 東京, pp26-34, 2015.
- 19) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない・自傷から回復するためのヒント-. 講談社, 東京, pp1-272, 2015.
- 20) 松本俊彦 監修：依存症からの回復 DVD 第1巻-第3巻. 社会福祉法人NHK厚生文化事業団, 東京, 2015.
- 21) 嶋根卓也：処方薬乱用への対応. 精神保健福祉白書編集委員会 編：精神保健福祉白書 2015年版. 中央法規出版株式会社, 東京, p41, 2014.

(4) 研究報告書

- 1) 和田 清：総合研究報告書。平成 25～26 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合・政策研究事業）「脱法ドラッグ」を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の「回復」とその家族に対する支援に関する研究（H25-医薬一般-018）研究報告書。2015。
- 2) 和田 清：総括研究報告書。平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「脱法ドラッグ」を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の「回復」とその家族に対する支援に関する研究（H25-医薬一般-018）研究報告書。pp1-16, 2015。
- 3) 和田 清, 邱 冬梅, 嶋根卓也：飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査（2014 年）。平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「脱法ドラッグ」を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の「回復」とその家族に対する支援に関する研究（H25-医薬一般-018）研究報告書。pp17-94, 2015。
- 4) 和田 清, 石橋正彦, 中村亮介, 前岡邦彦, 森田展彰, 他：薬物乱用・依存者における HIV 感染と行動のモニタリングに関する研究（2014 年）。平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）高リスク層の HIV 感染監視と予防啓発及び内外の HIV 関連疫学動向のモニタリングに関する研究（主任研究者：木原正博）総括・分担研究報告書。pp180-199, 2015。
- 5) 川崎二三彦, 松本俊彦, 高橋 温, 上野昌江, 長尾真理子：2. 精神科医の立場から。社会福祉法人横浜博萌会子どもの虹 情報研修センター（日本虐待・思春期問題情報研修センター）平成 24・25 年度研究報告書「親子心中」に関する研究（3）裁判傍聴記録による事例分析。pp147-148, 2014。
- 6) 松本俊彦, 高野 歩, 谷渕由布子, 立森久照, 和田 清：全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査。平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「脱法ドラッグ」を含む薬物乱用・依存の実態把握と薬物依存症者の「回復」とその家族に対する支援に関する研究（研究代表者 和田清）総括・分担研究報告書。pp95-128, 2015。
- 7) 松本俊彦, 小高真美, 高井美智子, 山内貴史, 白川教人, 竹島 正：自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究－女性の自殺の背景と予防介入ポイント：心理学的剖検の手法を用いた自殺既遂者の精神医学的・心理社会的特徴の性差から－。平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究（研究代表者 福田祐典）」総括・分担研究報告書。pp15-29, 2015。
- 8) 松本俊彦：薬物依存症に対する包括的治療プログラムの開発と普及・均てん化に関する研究。平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「様々な依存症の実態把握と回復プログラム策定・推進のための研究（研究代表者 宮岡等）」総括・分担研究報告書。pp15-42, 2015。
- 9) 船田正彦：25-1 大麻関連化合物を中心とした脱法ドラッグにおける精神薬理作用発現の機序解明に関する研究。平成 26 年度精神・神経疾患研究開発費による研究報告集（2 年度班・初年度班）。国立精神・神経医療研究センター，2015。
- 10) 船田正彦：違法ドラッグの構造類似性に基づく有害性評価法の確立と乱用実態把握に関する研究。平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「違法ドラッグの構造類似性に基づく有害性評価法の確立と乱用実態把握に関する研究（研究代表者：船田正彦）」平成 26 年度総括研究報告書。pp1-10, 2015。
- 11) 船田正彦：合成カンナビノイドの細胞毒性：培養筋細胞による評価。平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「違法ドラッグの構造類似性に基づく有害性評価法の確立と乱用実態把握に関する研究（研究代表者：船田正彦）」。平成 26 年度分担研究報告書。pp11-19, 2015。
- 12) 船田正彦：危険ドラッグを中心とした中枢神経系に作用する物質の迅速検出法の開発に関する研究。平成 26 年度厚生労働科学研究委託費（医薬品等規制調和・評価研究事業）「危険ドラッグを中心とした中枢神経系に作用する物質の迅速検出法の開発に関する研究（研究代表者：船田正彦）」平成 26 年度委託業務評価報告書（総括）。pp1-6, 2015。
- 13) 船田正彦：合成カンナビノイド迅速検査法の開発：危険ドラッグ製品からの検出。平成 26 年度厚生労働

科学研究委託費（医薬品等規制調和・評価研究事業）「危険ドラッグを中心とした中枢神経系に作用する物質の迅速検出法の開発に関する研究（研究代表者：船田正彦）」平成 26 年度委託業務評価報告書(分
担). pp7-11, 2015.

- 14) 嶋根卓也, 藤原英憲, 宮野廣美, 西川真司: 薬局を情報源とする処方薬乱用・依存の実態把握に関する研究. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業) 『脱法ドラッグ』を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の『回復』とその家族に対する支援に関する研究 (研究代表者: 和田 清)」平成 26 年度総括分担研究報告書. pp169-179, 2015.
- 15) 嶋根卓也: 薬剤師を情報源とする医薬品乱用の実態把握に関する研究. 平成 25～26 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業) (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業) 『脱法ドラッグ』を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の『回復』とその家族に対する支援に関する研究 (研究代表者: 和田 清)」平成 25～26 年度総合分担研究報告書. p11, 2015.
- 16) 嶋根卓也, 和田 清, 日高庸晴: クラブイベント来場者における違法ドラッグの乱用実態把握に関する研究 (2014). 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業) 「違法ドラッグの構造類似性に基づく有害性評価法の確立と乱用実態把握に関する研究 (研究代表者: 船田正彦)」平成 26 年度総括分担研究報告書. pp45-51, 2015.
- 17) 嶋根卓也, 和田 清, 日高庸晴: クラブイベント来場者における違法ドラッグの乱用実態把握に関する研究 (2011～2013). 平成 24～26 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業) 「違法ドラッグの構造類似性に基づく有害性評価法の確立と乱用実態把握に関する研究 (研究代表者: 船田正彦)」平成 24～26 年度総合分担研究報告書. pp103-106, 2015.

(5) 翻訳

- 1) 松本 俊彦 監訳, 遠藤 光政, 川口 衆 訳: 「報酬欠陥症候群」 生物学的モデル, アロー出版, 奈良, 2014. (ケネス・ブラム, ジェイ・M・ホルダー 著)
- 2) 松本 俊彦 監訳, 藤井 さやか, 市川 亮 訳: 「統合失調症とアルコール・薬物依存症を理解する為のセルフ・ワークブック」, 金剛出版, 東京, 2014. (デニス・C・デイリー, ケネス・A・モントローズ 著)

(6) その他

- 1) 河出敏裕, 太田達也, 金光旭, 和田 清, 森野嘉郎: 連載 刑事政策研究会 座談会 10 薬物犯罪. 論究ジュリスト 2014 年/春号 (9 号) . 106-126, 2014.
- 2) 和田 清: プラタナス 危険(脱法)ドラッグ問題が指摘すること. 日本医事新報 No.4723:3-3, 2014.11.1.
- 3) 和田 清: 薬物乱用の若年化? 高齢化?. 学校保健の動向 平成 26 年度版. 公益財団法人 日本学校保健会. pp113-113, 2014.11.20.
- 4) 和田 清: 「危険ドラッグ」問題が指摘する日本のアキレス腱. 青淵 第 789 号 12 月号. pp20-22, 2014.
- 5) 和田 清: <社会安全フォーラム>我が国の薬物対策の今とこれから～脱法ドラッグの脅威への対処に向けて～ 【パネルディスカッションの概要】. 警察学論集 第 67 巻第 12 号: 149-156, 2014.12.10.
- 6) 和田 清: 編集後記. 日本社会精神医学会雑誌 24(1) : p103, 2015.
- 7) 嶋根卓也: 薬局・薬剤師ができる危険ドラッグ対策. Excellent Pharmacy, メディファーム株式会社, 東京, 5 巻, 第 3 号, 通巻 27 号, pp1-4, 2014.
- 8) 嶋根卓也: 心に悩みを抱えた患者の支援～ゲートキーパーとしての薬局・薬剤師～(ゲートキーパーDVD 教材紹介). Excellent Pharmacy, メディファーム株式会社, 東京, 第 5 巻, 第 5 号, 通巻 29 号, p 11, 2015.
- 9) 嶋根卓也: 変わる薬物依存・変わる支援～危険ドラッグから処方薬乱用まで～. 季刊リカバリーアイランド沖繩, リハビリセンター琉球 GAIA, 沖繩, Vol.007, p6-7, 2015.
- 10) 嶋根卓也: お父さん, お母さん 薬物乱用防止はあなたが主役 (監修). 薬物乱用防止パンフレット, (社)

全国高等学校 PTA 連合会, 2015.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Funada Masahiko, Kenichi Tomiyama, Kiyoshi Wada: Abuse of law-evading herbs as a new trend in Japan: harmful effect and legislation. The Third Asia-Pacific Society for Alcohol and Addiction Research Congress, The Fourth Chinese Alcohol and Drug Abuse Congress, 光大会展中心 Shanghai, 2014.4.26.
- 2) Yuko Tanibuchi, Toshihiko Matsumoto, Ohji Kobayashi, Kiyoshi Wada: Current status of Substance Abuse in Japan: Focused on Evasive Drugs. SY13-2: ISAM-JSND Joint Symposium: Recent Topics of Substance Abuse in Asian-Pacific Regions. 16th International Society of Addiction Medicine Annual Meeting. Pacifico Yokohama Conference Center in Yokohama, 2014.10.4.
- 3) Matsumoto T: Symposium34 Consideration of Japanese drug policy from the view point of harm reduction. 16th International Society of Addiction Medicine Annual Meeting, Kanagawa, 2014.10.5.
- 4) Matsumoto T: Symposium41 Building bridges: Networking to establish the exchange of culturally sensitive addiction modalities and research. 16th International Society of Addiction Medicine Annual Meeting, Kanagawa, 2014.10.6.
- 5) Funada M.: Abuse of law-evading herbs as a new trend in Japan: harmful effect and legislation. The 3rd Congress of Asia-Pacific Society for Alcohol and Addiction Research, Shanghai, 2014.4.26.
- 6) 和田 清: 薬物依存症者における C 型肝炎・HIV 感染の実態. シンポジウム 7 AS7 薬物乱用と HIV 感染—わが国の現状と対応—. 平成 26 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 神奈川, 2014.10.4.
- 7) 松本俊彦: 向精神薬乱用・依存, 過量服薬の防止のために精神科医にできること. 日本総合病院精神医学会無床総合病院精神科委員会主催 無床フォーラム 2014 招待講演, 神奈川, 2014.6.26.
- 8) 松本俊彦: 教育講演 9 専門家の要らない薬物依存治療 ~ワークブックを用いた治療プログラム「SMARPP」~. 第 110 回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.26.
- 9) 松本俊彦: 嗜癖としての自傷~その理解と対応実践~ シンポジウム 43 行動嗜癖の現状と治療. 第 110 回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.27.
- 10) 松本俊彦: 精神科医療機関における脱法ドラッグ関連患者の臨床的特徴. シンポジウム 52 「脱法ドラッグ」乱用・依存の実態と対応策について. 第 110 回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.27.
- 11) 松本俊彦: 基調講演 性的トラウマと「故意に自分の健康を害する」症候群. 日本「性とこころ」関連問題学会 第 6 回学術研究大会, 東京, 2014.6.28.
- 12) 松本俊彦: 「危険ドラッグ」乱用患者の臨床的特徴. 第 22 回日本精神科救急学会学術総会 ランチョンセミナー 3, 北海道, 2014.9.5.
- 13) 松本俊彦: 自殺未遂者支援の問題点・課題点. 総括的視点から (指定討論). 第 38 回日本自殺予防学会総会シンポジウム 4 自殺未遂者支援の実態とその問題点・課題点, 福岡, 2014.9.12.
- 14) 松本俊彦: 基調講演 自己治療としてのアディクション. 日本アディクション看護学会第 13 回学術大会, 愛知, 2014.9.20.
- 15) 松本俊彦: 特別講演 人はなぜ依存症になるのか? 第 36 回日本アルコール関連問題学会, 神奈川, 2014.10.3.
- 16) 松本俊彦, 成瀬暢也: 分科会 3 司法機関における依存症対応の実態と今後の動向. 第 36 回日本アルコール関連問題学会, 神奈川, 2014.10.3.
- 17) 松本俊彦: シンポジウム 1 脱法ドラッグ乱用の現状 全国精神科病院調査より. 第 36 回日本アルコール関連問題学会, 神奈川, 2014.10.4.
- 18) 松本俊彦, 村山昌暢: 分科会 9 処方薬乱用・依存の予防と治療—精神科医療は何をなすべきで, 何をな

- すべきではないのか. 第 36 回日本アルコール関連問題学会, 神奈川, 2014.10.4.
- 19) 松本俊彦: シンポジウム 6 診断書の諸問題—出すべきか出さざるべきか—. 第 27 回日本総合病院精神医学学会総会, 茨城, 2014.11.29
 - 20) 松本俊彦: 分科会⑤特別講演「私の依存症治療」. 第 27 回九州アルコール関連問題学会熊本大会, 熊本, 2015.2.20.
 - 21) 船田正彦: 「脱法ドラッグ」の依存性・細胞毒性評価と対応策としての「包括指定」. 第 110 回日本精神神経学会, 神奈川, 2014.6.27.
 - 22) 船田正彦: 脱法ハーブの危険性を知る: 薬物依存性・細胞毒性ならびにその法規制. 第 14 回日本外来精神医療学会, 栃木, 2014.7.12.
 - 23) 船田正彦: 脱法ドラッグによる有害作用の評価: 合成カンナビノイドの包括的規制を目指して. 平成 26 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会 第 49 回日本アルコール薬物・医学会総会, 神奈川, 2014.10.3.
 - 24) 嶋根卓也, 和田 清, 日高庸晴, 船田正彦: クラブ利用者層における脱法ドラッグ乱用の実態と乱用に伴う身体・精神症状について. シンポジウム 52 「脱法ドラッグ」乱用・依存の実態と対応策について. 第 110 回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.27.
 - 25) 嶋根卓也: 若年薬物乱用者向け認知行動療法プログラム“OPEN”について. シンポジウム 2 脳機能変化からみたアルコール・薬物依存症の病態解析と治療法の開発. 平成 26 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 神奈川, 2014.10.3-4.
 - 26) 嶋根卓也: 繁華街の若者における脱法ドラッグの乱用状況: クラブユーザー調査より. シンポジウム 3 脱法ドラッグの蔓延とその危険性: 検出からその規制まで. 平成 26 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 神奈川, 2014.10.3-4.
 - 27) 嶋根卓也: 薬物乱用問題を抱えた HIV 陽性者に対する薬物依存治療の可能性. シンポジウム 7 薬物乱用と HIV 感染—わが国の現状と対応—. 平成 26 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 神奈川, 2014.10.3-4.
 - 28) 嶋根卓也: 処方薬乱用者のゲートキーパーとしての薬剤師: 「まちの科学者」を取り戻す. シンポジウム S52 薬物乱用の新たな波への理解と対応: 危険ドラッグと処方薬乱用, 日本薬学会第 135 年会, 兵庫, 2015.3.25-28.
 - 29) 引土絵未: 治療共同体の実践から学ぶ—治療共同体 Amity を中心に. 平成 26 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 神奈川, 2014.10.4.

(2) 一般演題

- 1) Shimane T, Matsumoto T, Wada K: (Poster) The Japanese community pharmacist as a “gatekeeper” for PREVENTING PRESCRIPTION DRUG OVERDOSE. 16th International Society of Addiction Medicine Annual Meeting, Kanagawa, 2014.10.5-6.
- 2) Takano A, Kawakami N, Miyamoto Y, Matsumoto T, Naruse N, Kobayashi O: (Poster) DEVELOPMENT AND FEASIBILITY STUDY OF WEB-BASED PREVENTION PROGRAM FOR PEOPLE WITH DRUG PROBLEMS IN JAPAN. 16th International Society of Addiction Medicine Annual Meeting, Kanagawa, 2014.10.5-6.
- 3) Kodaka M, Matsumoto T, Yamauchi T, Takai M, Takeshima T: Psychiatric and psychosocial characteristics of women who died by suicide: A psychological autopsy study of 92 cases. 6th World Congress on Women's Mental Health, Tokyo, 2015.3.22-25.
- 4) 三好美浩, 勝野眞吾, 和田 清: 全国高校生の薬物乱用間に共通するライフスタイル変数との関連性. 平成 26 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 神奈川, 2014.10.4.
- 5) 奥村泰之, 松本俊彦: 過量服薬の発生前の診療状況: 大規模レセプト情報を用いた記述疫学研究. 第 110 回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.27.

- 6) 引土絵未, 岡崎重人, 山崎明義, 松本俊彦: (ポスター) 日本型治療共同体モデル開発に向けた予備的調査—グループインタビューを通して—. 第36回日本アルコール関連問題学会, 神奈川, 2014.10.3.
- 7) 津田多佳子, 多田利光, 木下 優, 佐野由美, 東田奈緒美, 大山樹, 勝野淳, 伊藤真人, 松本俊彦: (ポスター) 川崎市精神保健福祉センターにおけるアルコール依存症支援の認知行動療法的プログラム「だるま〜ぶ」の取組. 第36回日本アルコール関連問題学会, 神奈川, 2014.10.3.
- 8) 竹林(大澤)美佳, 富山健一, 和田 清, 船田正彦: 3,4-methylenedioxypropylvalerone (MDPV) の行動薬理学的特性と有害作用. 平成26年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会. 第49回日本アルコール薬物・医学会総会, 神奈川, 2014.10.4.
- 9) 嶋根卓也, 川崎裕子, 膳熊昭三, 金子伸行, 宮野廣美: 薬局・薬剤師向けゲートキーパー教材の開発—心に悩みを抱えた患者の支援—. 第20回埼玉県薬剤師会学術大会, 埼玉, 2014.11.16.
- 10) 嶋根卓也, 今村顕史, 岡 慎一, 池田和子, 山本政弘, 辻麻里子, 長与由紀子, 大久保猛, 太田実男, 神田博之, 岡崎重人, 大江昌夫: エイズ拠点病院における薬物関連問題の重症度と薬物依存回復支援の可能性. 第28回日本エイズ学会学術集会, 大阪, 2014.12.3-5

(3) 研究報告会

- 1) 和田 清 (主催): 平成26年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「脱法ドラッグ」を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の「回復」とその家族に対する支援に関する研究(H25-医薬一般-018) 研究成果報告会. 埼玉, 2015.2.27.
- 2) 和田 清, 邱 冬梅, 嶋根卓也: 飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査(2014年). 平成26年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「脱法ドラッグ」を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の「回復」とその家族に対する支援に関する研究(H25-医薬一般-018) (研究代表者: 和田 清). 平成26年度研究成果報告会, 埼玉, 2015.2.27.
- 3) 和田 清, 松本俊彦, 上條吉人, 庄司正実, 福永龍重, 嶋根卓也, 宮永 耕, 近藤あゆみ: 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査, 平成26年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業「脱法ドラッグ」を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の「回復」とその家族に対する支援に関する研究」(研究代表者: 和田 清) 研究成果報告会, 埼玉, 2015.2.27
- 4) 松本俊彦, 成瀬暢也, 川副泰成, 嶋根卓也, 武藤岳夫: 専門病棟を持たない精神科医療機関における薬物依存症治療システムの構築に関する研究. 平成26年度精神・神経疾患開発研究費「物質依存症に対する医療システムの構築と包括的治療プログラムの開発に関する研究」(25-2) (主任研究者: 松本俊彦) 研究成果報告会, 東京, 2015.12.10.
- 5) 船田正彦, 富山健一, 和田 清: 合成カンナビノイド有害作用の評価. 平成26年度精神・神経疾患研究開発費「大麻関連化合物を中心とした脱法ドラッグにおける精神薬理作用発現の機序解明に関する研究(25-1) (主任研究者: 船田正彦)」研究成果報告会, 東京, 2014.12.10.
- 6) 船田正彦, 大澤美佳, 和田 清: 危険ドラッグの有害作用とその検出法に関する研究. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成26年度研究報告会, 東京, 2015.3.9.
- 7) 嶋根卓也, 今村顕史, 岡 慎一, 池田和子, 山本政弘, 辻麻理子, 長与由紀子, 大久保猛, 太田実男, 神田博之, 岡崎重人, 大江昌夫: HIV 拠点病院と連携した薬物依存者支援システムの構築と治療プログラムの開発に関する研究. 平成26年度精神・神経疾患研究開発費「物質依存症に対する医療システムの構築と包括的治療プログラムの開発に関する研究(主任研究者: 松本俊彦)」研究報告会, 東京, 2014.12.10.
- 8) 嶋根卓也, 藤原英憲, 宮野廣美, 西川真司: 薬局を情報源とする処方薬乱用・依存の実態把握に関する研究. 平成26年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「『脱法ドラッグ』を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の『回復』とその家族に対する支援に関する研究(研究代表者: 和田 清)」研究報告会, 埼玉, 2015.2.27.

- 9) 邱冬梅, 和田清, 嶋根卓也 : 危険ドラッグの使用実態について—薬物使用に関する全国住民調査より— . 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 26 年度研究報告会, 東京, 2015.3.9.

C. 講演

- 1) 和田清 : 学校薬剤師が知っておくべき薬物乱用・依存の現在—全国中学生調査の結果も踏まえて—. 北九州市学校薬剤師講習会. 公益社団法人 北九州市薬剤師会, 福岡, 2014.4.19.
- 2) 和田清 : 「脱法ドラッグ」を中心とした薬物乱用・依存状況の理解と薬物の乱用・依存・中毒の理解. 昭和大学薬学部 4 年生用「薬毒物と中毒」(計 10 回) の第 10 回目, 東京, 2014.7.1.
- 3) 和田清 : 学校における薬物乱用防止教室の考え方・進め方—「脱法ドラッグ」を含む薬物の乱用・依存・中毒の理解と全国中学生調査から見えてくるもの—. 平成 26 年度薬物乱用防止教室推進研修会. 山形県教育委員会, 山形, 2014.7.11.
- 4) 和田清 : 「脱法ドラッグ」を含む薬物の乱用・依存・中毒の理解と全国中学生調査から見えてくるもの—. 平成 26 年度薬物乱用防止教室推進のための講習会. 三重県教育委員会, 三重, 2014.7.13.
- 5) 和田清 : 我が国の薬物乱用・依存の最近の動向と治療の現状・課題について. 我が国の薬物対策の今とこれから—脱法ドラッグの脅威への対処に向けて—. 社会安全フォーラム. 警察政策研究センター, (公財)日工組社会安全財団, 東京, 2014.7.18.
- 6) 和田清 : 薬物依存とは何か—支援者が知っておきたい基礎知識—. 平成 26 年度薬物乱用・依存関連問題専門研修. 北九州市立精神保健福祉センター, 福岡, 2014.7.22.
- 7) 和田清 : 学校薬剤師が知っておくべき薬物乱用の現在. 平成 26 年度学校薬剤師研修会. 日本薬剤師会学校薬剤師部会, 佐賀, 2014.8.3.
- 8) 和田清 : 総論 I 薬物依存. 日本精神神経学会薬物療法研修会. 日本精神神経学会, 東京, 2014.8.17.
- 9) 和田清 : 我が国における青少年による薬物乱用の課題. 平成 26 年度文部科学省補助事業「喫煙, 飲酒, 薬物乱用防止に関する指導参考資料」研修会. 日本学校保健会, 福井, 2014.8.19.
- 10) 和田清 : 薬物依存, そのメカニズムと今日の問題について—「脱法ドラッグ」について— : 薬物使用に関する全国住民調査 (2013 年) 及び全国中学生調査 (2012 年) . 第 1 回 NCNP メディア塾, 東京, 2014.8.22.
- 11) 和田清 : 総論 I 薬物依存. 日本精神神経学会薬物療法研修会. 日本精神神経学会, 大阪, 2014.8.24.
- 12) 和田清 : 薬物乱用・依存の現況と喫緊課題としての「薬物依存症」に対応した医療体制の整備. 第 52 回総会・研修会. 平成 26 年度全国自治体病院協議会精神科特別部会, 大阪, 2014.8.29.
- 13) 和田清 : 最近の薬物乱用・依存の特徴と「脱法ドラッグ」について. 依存症を考える会 2014.大日本住友製薬株式会社, 北海道, 2014.8.30.
- 14) 和田清 : 薬物の心身に与える影響. 少年補導幹部専科. 警察大学校, 東京, 2014.9.4.
- 15) 和田清 : 薬物依存に関する考え方・理解促進に向けて—薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することに重要性—. 平成 26 年度関東信越地区再乱用防止対策講習会. 厚労省医薬食品局監視指導・麻薬対策課, 神奈川, 2014.9.30.
- 16) 和田清 : 薬物依存の理解と「脱法ドラッグ」 (「危険ドラッグ」の理解.) . 平成 26 年度学校環境衛生・薬事衛生研究協議会, 岡山, 2014.10.2.
- 17) 和田清 : わが国の薬物乱用・依存状況と危険ドラッグについて. 危険ドラッグに関する研修会. 茨城県保健福祉部薬務課, 茨城, 2014.10.7.
- 18) 和田清 : 学校薬剤師が知っておくべき薬物乱用の現在. 平成 26 年度学校薬剤師研修会. 日本薬剤師会学校薬剤師部会, 岩手, 2014.10.19.
- 19) 和田清 : わが国に必要な薬物乱用防止及び再乱用防止対策—危険ドラッグ問題を端緒として—. 衆議院厚生労働委員会, 2014.10.17.
- 20) 和田清 : 薬物依存—薬物の乱用・依存・中毒を理解する—. 第 64 回麻薬取締職員研修. 厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課, 東京, 2014.10.22.

- 21) 和田 清：危険ドラッグ（「脱法ドラッグ」）について—薬物の乱用・依存・中毒の違いを理解する事の重要性—。都立病院関連施設薬剤師会 平成 26 年度第 2 回学術講演会，東京，2014.10.23.
- 22) 和田 清：薬物依存に関する考え方・理解促進に向けて—薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性—。平成 26 年度北海道・東北地区再乱用防止対策講習会。厚生省医薬食品局監視指導・麻薬対策課，福島，2014.10.29.
- 23) 和田 清：最近の薬物乱用・依存状況—特に危険ドラッグ問題と「刑の一部執行猶予」制度について。第 2 回精神科救急治療を考える。日本イーライリリー，千葉，2014.11.5.
- 24) 和田 清：最近の危険ドラッグを含む薬物乱用状況と薬物の乱用・依存・中毒について。富山県薬物乱用防止指導員大会。富山県薬物乱用対策推進本部，富山，2014.11.7.
- 25) 和田 清：薬物依存に関する考え方・理解促進に向けて—薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性—。平成 26 年度東海・北陸地区再乱用防止対策講習会 厚生省医薬食品局監視指導・麻薬対策課，石川，2014.11.11.
- 26) 和田 清：薬物依存に関する考え方・理解促進に向けて—薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性—。第 7 回麻薬取締官中等科研修 厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課，愛知，2014.12.16.
- 27) 和田 清：覚せい剤依存症と医療。任用研修課程高等科 46 回研修 法務省矯正研修所，東京，2015.1.21.
- 28) 和田 清：わが国の薬物乱用・依存状況と危険ドラッグについて。第 3 回千葉県医師会医療安全講習会，千葉，2015.2.5.
- 29) 松本俊彦：子ども・若者のメンタルヘルス—自傷と自殺を中心に。第二東京弁護士会子どもの権利に関する委員会主催講演会，東京，2014.4.2.
- 30) 松本俊彦：求められる薬物乱用防止教育とは？～「ダメ、ゼッタイ」だけではダメ～。神奈川県福祉保健局生活衛生部薬務課主催 平成 26 年度薬物乱用防止講演会，神奈川，2014.5.14.
- 31) 松本俊彦：若者の薬物乱用を防ぐために薬剤師ができること。愛知県女性薬剤師会主催 平成 26 年度第 1 回愛知県女性薬剤師会学術講演会，愛知，2014.5.18.
- 32) 松本俊彦：専門的処遇プログラム（覚せい剤事犯者処遇）。法務省法務総合研究所主催 第 11 階保護局関係職員処遇強化特別研修，東京，2014.5.20.
- 33) 松本俊彦：アルコール問題とうつ，自殺。福井県医師会主催 平成 26 年第 1 回産業医研修会，福井，2014.5.25.
- 34) 松本俊彦：PSW に期待すること。愛知県精神保健福祉士協会主催 第 14 回愛知県精神保健福祉士協会定期総会記念講演，愛知，2014.6.8.
- 35) 松本俊彦：故意に自分の健康を害する生徒たち～リストカット等の理解と対応。愛知県学校保健会県立学校部運営部会 養護教諭会総会第 1 回研究会，愛知，2014.6.10.
- 36) 松本俊彦：若者のアディクション。東京都中部総合精神保健福祉センター主催 平成 26 年度精神保健福祉研修（前期），東京，2014.6.11.
- 37) 松本俊彦：処方薬乱用の予防と精神科治療の課題。MSD 株式会社主催 第 2 回湾岸うつ・睡眠研究会，千葉，2014.6.13.
- 38) 松本俊彦：向精神薬乱用・依存を防ぐために精神科医療にできること。日本イーライリリー社主催 精神科救急・急性期治療研究会，東京，2014.6.17.
- 39) 松本俊彦：自殺の現状と自治体が担う役割・地域が担う役割について。横浜市福祉保健局主催 第 1 回よこはま自殺対策ネットワーク協議会，神奈川，2014.6.18.
- 40) 松本俊彦：脱法ドラッグ乱用患者の臨床的特徴。医療法人社団 薫風会 山田病院主催 第 3 回薫風会学術交流会，東京，2014.6.20.
- 41) 松本俊彦：事例検討会座長 特定非営利活動法人メンタルケア協議会主催 第 15 回シンポジウム 大事例検討会へのお誘い～3 つの自殺企図事例から考える～，東京，2014.6.22.
- 42) 松本俊彦：自殺の実態・地方自治体の施策について。横浜市こころの健康相談センター主催 平成 26 年度自殺対策基礎研修，神奈川，2014.6.25.

- 43) 松本俊彦：依存症精神医学。独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 平成 26 年度第 1 回アルコール依存症臨床医等研修，神奈川，2014.7.1.
- 44) 松本俊彦：処方薬乱用と過量服薬の理解と対応。公益財団法人東京都福祉保健財団主催 平成 26 年度ゲートキーパー養成研修，東京，2014.7.2.
- 45) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助～「故意に自分の健康を害する」若者たち。公益財団法人東京都予防医学協会主催 第 242 回学校保健セミナー，東京，2014.7.4.
- 46) 松本俊彦：思春期・青年期の自傷と依存症公益財団法人明治安田こころの健康財団主催 2014 年度子ども・専門講座 8，東京，2014.7.6.
- 47) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助。岩手県精神保健福祉センター主催 「自傷行為の理解と援助」研修，岩手，2014.7.7.
- 48) 松本俊彦：自殺をめぐる最近の動向と対策。東京都多摩総合精神保健福祉センター主催 平成 26 年度自殺対策研修，東京，2014.7.11.
- 49) 松本俊彦：自傷とアディクション～トラウマ・解離という視点から。MSD 株式会社主催 自殺関連行動ならびにアディクションからの回復研究会，大阪，2014.7.12.
- 50) 松本俊彦：自殺予防のために一人ひとりにできること。国分寺市主催 ゲートキーパー養成講座，東京，2014.7.16.
- 51) 松本俊彦：これからの依存症支援～保健・医療・福祉・教育・司法の連携。地方独立行政法人岡山県精神科医療センター，岡山，2014.7.18.
- 52) 松本俊彦：精神科医による思春期・青年期のメンタルヘルス～心のサインを受け止めよう～。神奈川県立総合教育センター主催 平成 26 年度 精神科医による思春期・青年期のメンタルヘルス研修講座，神奈川，2014.7.23.
- 53) 松本俊彦：精神科薬物治療—精神科治療薬の依存・乱用を中心に。特定非営利活動法人横浜市精神障害者家族連合会主催研修会，神奈川，2014.7.25.
- 54) 松本俊彦：薬物乱用・依存の現在とその治療。Sapporo Neuropsychiatric Forum 2014，北海道，2014.7.26.
- 55) 松本俊彦：若者たちが抱える困難の根底にあるもの。2014AIDS 文化フォーラム in 横浜，神奈川，2014.8.2.
- 56) 松本俊彦：自分を傷つける子どもたち—思春期の危機—。思春期心の健康セミナー，茨城，2014.8.12.
- 57) 松本俊彦：自殺、自傷、依存への相談対応と自殺対策。特定非営利活動法人メンタルケア協議会主催 第 2 回東京都自殺相談ダイヤル・夜間こころの電話相談相談員グループ研修，東京，2014.8.17.
- 58) 松本俊彦：思春期の問題行動とその対応 自傷行為、依存症、自殺など。日本産婦人科学会主催 女性のヘルスケアアドバイザー養成プログラム，東京，2014.8.24.
- 59) 松本俊彦：自傷・自殺企図の理解と援助。平成 26 年度思春期問題研修，青森，2014.8.27.
- 60) 松本俊彦：危険ドラッグ利用患者の臨床的特徴。大塚製薬株式会社主催学術講演会，群馬，2014.8.29.
- 61) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助。第 24 回サイコソーシャルリハビリテーション研究会，愛知，2014.8.30.
- 62) 松本俊彦：誰でもできる依存症治療～SMARPP～。大塚製薬株式会社主催学術講演会，東京，2014.9.3.
- 63) 松本俊彦：自殺未遂者の相談支援について。北海道立精神保健福祉センター主催 平成 26 年度行政課題研修「自殺対策研修」，北海道，2014.9.8.
- 64) 松本俊彦：処方薬乱用と過量服薬の理解と対応。東京都福祉保健局主催 平成 26 年度自殺総合対策にかかる講演会，東京，2014.9.10.
- 65) 松本俊彦：依存症精神医学。独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 平成 26 年度第 2 回アルコール依存症臨床医等研修【医師（基礎）コース】，神奈川，2014.9.19.
- 66) 松本俊彦：処方薬乱用の予防と精神科治療の課題。MSD 株式会社主催 第 6 回うつ病の薬物療法・精神療法研究会，京都，2014.9.20.
- 67) 松本俊彦：講演会：若者の生きるを支える～大人たちは何ができるか？～ シンポジウム：若者の生きるを支える～私たちにできること～。神奈川県精神保健福祉センター主催 神奈川県自殺対策講演会・シンポジウム，神奈川，2014.9.28.

- 68) 松本俊彦：矯正施設における自殺・自傷への対応。法務省矯正研修所主催 任用研修課程高等科第46回研修、東京、2014.9.29.
- 69) 松本俊彦：救急センターにおける自殺未遂者支援の意義。横須賀医師会主催自殺未遂者対策講演会、神奈川、2014.10.8.
- 70) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助。厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課主催 平成26年度九州沖縄地区薬物中毒対策講習会、佐賀、2014.10.15.
- 71) 松本俊彦：薬物乱用・依存の現状について。薬物依存症治療の新たな展開～SMARPPの理念と実際～。長崎県長崎こども・女性・障害者支援センター主催 平成26年度アルコール・薬物関連問題研修会、長崎、2014.10.17.
- 72) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助～生きるための自傷が死をたぐり寄せるプロセス。こころと脳のセミナー・吉富薬品株式会社主催 第30回こころと脳のセミナー、福岡、2014.10.18.
- 73) 松本俊彦：自傷行為と遭遇したら。日本小児科医会主催 第2回「子どもの心」研修会（導入編）、東京、2014.10.19.
- 74) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助。厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課主催 平成26年度近畿地区薬物中毒対策講習会、和歌山、2014.10.21.
- 75) 松本俊彦：薬物乱用・依存の現状とその治療。千葉大学大学院医学研究院主催 子どものこころ発達研究センター特別講演、千葉、2014.10.22.
- 76) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助。アディクション問題を考える会主催 セミナー、東京、2014.10.26.
- 77) 松本俊彦：覚せい剤事犯者処遇プログラムについて。大阪保護観察所主催 覚せい剤事犯者処遇プログラムに関する自庁研修、大阪、2014.10.27.
- 78) 松本俊彦：危険ドラッグと家族の対応。仙台ダルク家族会主催 第8回フォーラム、宮城、2014.11.2.
- 79) 松本俊彦：向精神薬乱用・依存の実態、ならびにその予防と治療。千葉県医師会千葉県精神科医会主催 平成26年度千葉県精神科医会総会及び学術集会、千葉、2014.11.3.
- 80) 松本俊彦：薬物処遇プログラムの集団実施について。法務省保護局主催 薬物依存対策研修、東京、2014.11.7.
- 81) 松本俊彦：アルコールとうつ・自殺「死のトライアングル」を防ぐために。内閣府主催 アルコール関連問題啓発フォーラム、東京、2014.11.12.
- 82) 松本俊彦：「依存するこころ」の理解と支援 インターネット・薬物・アルコール。昭和女子大学主催平成26年度生活心理研究所公開講座、東京、2014.11.15.
- 83) 松本俊彦：なぜ自分を傷つけるの？若者の自殺予防のために大人にできること。ぐんま思春期研究会主催 第3回研修会、群馬、2014.11.16.
- 84) 松本俊彦：思春期・青年期の自傷行為の理解と支援～「故意に自分の健康を害する」症候群。中央大学主催 講演会（公開授業）、東京、2014.11.17.
- 85) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助。厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課主催 平成26年度中国・四国地区薬物中毒対策講習会、島根、2014.11.19.
- 86) 松本俊彦：危険ドラッグはどう「危険」なのか？乱用者の臨床的特徴とその援助のあり方。日本プライマリ・ケア連合学会主催 プライマリ・ケア認定薬剤師研修会、東京、2014.11.23.
- 87) 松本俊彦：薬物事犯者へのアセスメント及びトリートメントの実際等。法務総合研究所主催 薬物事犯に関する研究、埼玉、2014.11.26.
- 88) 松本俊彦：子どもの自傷行為の理解と対応～子どもの生きづらさを考える～。石川県こころの健康センター主催 平成26年度第3回子どものこころの問題に携わる関係者育成研修会、石川、2014.11.30.
- 89) 松本俊彦：大学生の自殺防止－自傷行為に注目して－。日本学生相談学会主催 第52回全国学生相談研修会、東京、2014.12.1.
- 90) 松本俊彦：アルコールとうつ・自殺。独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 アルコール問題の早期発見早期介入実践講座、神奈川、2014.12.12.

- 91) 松本俊彦：地域における支援困難家族。横須賀市主催 地域における支援困難事例事例検討会，神奈川，2014.12.16.
- 92) 松本俊彦：自殺関連事象。独立行政法人国立国際医療研究センター主催 思春期精神保健対策医療従事者専門研修(1)，千葉，2014.12.19.
- 93) 松本俊彦：自殺関連行動と文化ー自傷とボディモディフィケーションに関する文化精神医学的考察。東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター主催国際シンポジウム「東アジアの死生学へ」，東京，2014.12.20.
- 94) 松本俊彦：自殺未遂者への対応～リストカット・大量服薬を繰り返す人の理解と対応～。山口県精神保健福祉センター主催 平成 26 年度自殺未遂者支援研修会，山口，2015.1.11.
- 95) 松本俊彦：自傷する若者の心理理解と適切な対応援助。愛媛県心と体の健康センター主催 平成 26 年度自殺対策関連研修会，愛媛，2015.1.19.
- 96) 松本俊彦：自殺・自傷行為・セキュリティ(1)，(2)。公益財団法人精神・神経科学振興財団主催 平成 26 年度指定入院医療機関従事者病棟研修会，山形，2015.1.20.
- 97) 松本俊彦：自らを傷つける若者への理解～思春期・青年期の子どもの声なき訴えを知ろう～。東京都西多摩保健所主催 平成 26 年度思春期講演会，東京，2015.1.21.
- 98) 松本俊彦：学生のメンタルヘルス問題への理解と対応。国立大学法人東京医科歯科大学主催 平成 26 年度大学院保健衛生学研究科・医学部保健衛生学科教員研修会 (FD)，東京，2015.1.28.
- 99) 松本俊彦：自傷や依存をやめたい！でもやめられない。特定非営利活動法人 地域精神保健福祉機構主催 第 26 回こぼり亭月例会，東京，2015.1.31.
- 100) 松本俊彦：自殺未遂を繰り返す方々へのかかわりについて。一般社団法人東京精神保健福祉協会主催 東京都被保険者退院促進支援事業における専門支援員事例検討・相談会「特別企画研修」，東京，2015.2.2.
- 101) 松本俊彦：薬物依存について。一般社団法人東京都病院薬剤師会 ヤンセンファーマ株式会社共催 平成 26 年度精神科薬物療法学術研究会，東京，2015.2.3.
- 102) 松本俊彦：危険ドラッグはなぜ「危険」なのか～その恐ろしさと回復のヒント。NPO 法人 ぷしけ主催 平成 26 年度自殺対策啓発事業講演会，東京，2015.2.6.
- 103) 松本俊彦：専門的処遇プログラム(覚せい剤事犯者処遇)。第 50 回保護観察官高等科研修，東京，2015.2.10.
- 104) 松本俊彦：大切な人から「死にたい」といわれたら～自殺予防のためにひとりひとりができること。世田谷区世田谷保健所主催 世田谷区自殺対策シンポジウム，東京，2015.2.11.
- 105) 松本俊彦：薬物依存者に対する認知行動療法の有効性と限界。平成 26 年度薬物事犯者に対する処遇プログラム等に関する矯正・保護実務者連絡協議会，埼玉，2015.2.13.
- 106) 松本俊彦：青少年の自殺のために何ができるか。明星大学心理相談センター主催 公開講演会，東京，2015.2.14.
- 107) 松本俊彦：依存的に自分を傷つける若者へどんな支援が必要か。NPO 法人エンパワメントかながわ主催 若者のリアルと依存，神奈川，2015.2.15.
- 108) 松本俊彦：自殺企図・未遂者への対応について。江戸川区保健師研究会主催 講演会，東京，2015.2.16.
- 109) 松本俊彦：自殺予防のために私たち一人ひとりにできること。神奈川県厚木保健福祉事務所主催 平成 26 年度水と緑といのちの地域ネットワーク会議第 3 回担当者部会，神奈川，2015.2.18.
- 110) 松本俊彦：精神鑑定事例。法務省矯正研修所主催 専門研修課程調査鑑別特別科第 8 回研修，東京，2015.2.25.
- 111) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか。東京少年鑑別所主催 心理技官のためのワークショップ，東京，2015.2.28.
- 112) 松本俊彦：こどもの自殺予防。神奈川県立子ども医療センター主催 子どもの心の診療ネットワーク事業 平成 26 年度第 2 回児童思春期精神科セミナー，神奈川，2015.2.28.
- 113) 松本俊彦：危険ドラッグはなぜ「危険」なのか～その怖ろしさと回復のヒント～。社会福祉法人 桜ヶ丘 社会事業協会主催 精神科医療地域連携事業 南多摩圏域(日野市・多摩市・稲城市)講演会，東京，2015.3.4.

- 114) 松本俊彦：アルコール問題とうつ・自殺。千葉県医師会主催 平成26年度かかりつけ医うつ病対応力向上研修，千葉，2015.3.5.
- 115) 松本俊彦：故意に自分の健康を害する人たちへの理解と援助。高知大学保健管理センター主催 メンタルヘルス講演会，高知，2015.3.8.
- 116) 松本俊彦：薬物依存について。日本イーライリリー株式会社 主催 千葉県若手精神科医の会，千葉，2015.3.10.
- 117) 松本俊彦：青年期の依存症。東京都立小児総合医療センター主催 医師、医療関係者向け児童青年期臨床精神医療講座，東京，2015.3.11.
- 118) 松本俊彦：アディクション支援と自殺予防。函館市主催 平成26年度自殺予防講演会，北海道，2015.3.13.
- 119) 松本俊彦：薬物依存症の臨床。大阪府こころの健康総合センター主催 平成26年度薬物依存症者等ケア強化事業依存症研修，大阪，2015.3.16.
- 120) 松本俊彦：リストカットは「生きたい!」という叫び。公益財団法人キリスト教婦人矯風会主催 きょうふう会アディクションセミナー，東京，2015.3.18.
- 121) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか～薬物依存症と自己治療仮説～。群馬県こころの健康センター主催 第33回こころの県民講座，群馬，2015.3.20.
- 122) 松本俊彦：故意に自分の健康を害する人にどう向き合うかを考える。NPO 法人仙台グリーンケア研究会 主催 講演及びワークショップ，宮城，2015.3.22.
- 123) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助。公明党厚生労働部会主催講演，東京，2015.3.25.
- 124) 松本俊彦：命をつなぎとめ 生きることを支援すると。中央区保健所主催 平成26年度中央区ゲートキーパー養成講座，東京，2015.3.25.
- 125) 松本俊彦：薬物乱用・依存の現在～危険ドラッグ・処方薬依存について考える～。福岡保護観察所主催 薬物依存研修会，福岡，2015.3.27.
- 126) 松本俊彦：思春期の自傷行為の理解と支援について。滋賀県臨床心理士会主催 スクールカウンセラー研修会，滋賀，2015.3.29.
- 127) 嶋根卓也：変わる薬物，変わる治療。東京都立多摩総合精神保健福祉センター，東京，2014.4.22.
- 128) 嶋根卓也：脱法ドラッグを使う若者たち～変わる薬物・変わる治療～。木津川ダルク開設記念フォーラム「新たな挑戦」，京都，2014.6.14.
- 129) 嶋根卓也：心の悩みを抱えた患者の支援～ゲートキーパーとしての薬剤師。埼玉県薬剤師会主催平成26年度新人薬剤師研修会，埼玉，2014.6.15.
- 130) 嶋根卓也：薬物乱用のウソ・ホント。東京都立総合工科高等学校，東京，2014.6.17.
- 131) 嶋根卓也：薬物乱用のウソ・ホント。関東学院大学，神奈川，2014.6.24.
- 132) 嶋根卓也：「ダメ。ゼッタイ。」で終わらせない薬物乱用防止教室。群馬県教育委員会，群馬，2014.7.9.
- 133) 嶋根卓也：薬物依存症の理解と回復に向けて私たちにできること。神奈川県精神保健福祉センター，神奈川，2014.7.18.
- 134) 嶋根卓也：心に悩みを抱えた患者の支援～ゲートキーパーとしての薬剤師～。兵庫県薬剤師会，兵庫，2014.7.27.
- 135) 嶋根卓也：薬物乱用のウソ・ホント。星薬科大学・薬品毒性学教室 薬品毒性学教室夏季セミナー，群馬，2014.7.29.
- 136) 嶋根卓也：「ダメ。ゼッタイ。」で終わらせない薬物乱用防止教室。富山県教育委員会スポーツ・保健課，富山，2014.7.31.
- 137) 嶋根卓也：向精神薬乱用と依存～薬剤師による気づき・関わり・つなぎ～。山口県精神保健福祉センター主催自殺予防ゲートキーパー養成研修，山口，2014.8.03.
- 138) 嶋根卓也：心の悩みを抱えた患者の支援～ゲートキーパーとしての薬剤師～。世田谷区世田谷保健所，東京，2014.8.08.
- 139) 嶋根卓也：「ダメ。ゼッタイ。」で終わらせない薬物乱用防止活動。埼玉県東松山保健所主催平成26年度

- 薬物乱用防止研究会, 埼玉, 2014.8.26.
- 140) 嶋根卓也: 薬物乱用のウソ・ホント. 横須賀市立不入斗中学校, 神奈川, 2014.8.28.
- 141) 嶋根卓也: 薬物乱用のウソ・ホント. 横須賀市立大津中学校, 神奈川, 2014.8.28.
- 142) 嶋根卓也: 変わる薬物・変わる支援—危険ドラッグから処方薬乱用まで—. 東京家庭裁判所立川支部, 東京, 2014.9.17.
- 143) 嶋根卓也: 過量服薬と自死—医者や薬局のくすりなら大丈夫?—. 島根県立心と体の相談センター主催平成 26 年度自死対策等関係機関研修会, 島根, 2014.9.19.
- 144) 嶋根卓也: 危険ドラッグを取り巻く状況と学校における薬物乱用防止教育. 長野県教育委員会主催平成 26 年度長野県薬物乱用防止教育指導者講習会, 長野, 2014.9.26.
- 145) 嶋根卓也: 処方薬を正しく使えない人たち—薬局をゲートキーパー・ステーションに—. (独) 国立病院機構久里浜医療センター主催アルコール関連問題研究会, 神奈川, 2014.10.16.
- 146) 嶋根卓也: 精神医学Ⅲ—物質関連障害を中心に— (総論). 国立障害者リハビリテーションセンター, 埼玉, 2014.10.21.
- 147) 嶋根卓也: 心に悩みを抱えた患者に寄り添う薬局・薬剤師. 高知県薬剤師会主催自殺予防ゲートキーパー養成講習会, 高知, 2014.10.26.
- 148) 嶋根卓也: 精神医学Ⅲ—物質関連障害を中心に— (各論). 国立障害者リハビリテーションセンター, 埼玉, 2014.10.28.
- 149) 嶋根卓也: 変わる薬物, 変わる支援—危険ドラッグから処方薬乱用まで—. 埼玉県草加保健所主催平成 26 年度薬物乱用防止研修会, 埼玉, 2014.10.31.
- 150) 嶋根卓也: 「ダメ。ゼッタイ。」で終わらせない薬物乱用防止教育—危険ドラッグから処方薬乱用まで—. 京都府教育委員会主催平成 26 年度薬物乱用防止教室, 京都, 2014.11.17.
- 151) 嶋根卓也: 危険ドラッグを使う若者たち. 横浜ダルクケアセンター, 神奈川, 2014.11.22.
- 152) 嶋根卓也: 「ダメ。ゼッタイ。」で終わらせない依存症支援. 石川県地域生活定着支援センター, 石川, 2014.11.28.
- 153) 嶋根卓也: 「ダメ。ゼッタイ。」で終わらせない依存症支援. 武蔵野市健康福祉部障害者福祉課, 東京, 2014.11.28.
- 154) 嶋根卓也: 向精神薬の過量服薬防止のために～心のサポーターとしての薬剤師～. 山形県健康福祉部主催保険薬局研修会, 山形, 2014.11.30.
- 155) 嶋根卓也: 変わる薬物・変わる支援—危険ドラッグから処方薬乱用まで—. 滋賀県立精神保健福祉センター主催平成 26 年度アディクション関連問題従事者研修会, 滋賀, 2014.12.2.
- 156) 嶋根卓也: 「ダメ。ゼッタイ。」で終わらせない薬物乱用防止教育—危険ドラッグから処方薬乱用まで—. 愛媛県教育委員会主催平成 26 年度薬物乱用防止教室指導者講習会, 愛媛, 2014.12.9.
- 157) 嶋根卓也: 「ダメ。ゼッタイ。」で終わらせない薬物乱用防止教育—危険ドラッグから処方薬乱用まで—. 横浜市青少年相談センター主催平成 26 年度若者相談支援スキルアップ研修, 神奈川, 2015.2.5.
- 158) 嶋根卓也: 社会問題化する危険ドラッグに薬剤師はどのように関われるか. 埼玉県薬剤師会主催 学校薬剤師会講習会, 埼玉, 2015.2.22.
- 159) 嶋根卓也: みんなで考えよう! 依存症と回復. 川崎アディクションフォーラム実行委員会主催 第 3 回川崎アディクションフォーラム, 神奈川, 2015.2.28.
- 160) 嶋根卓也: 薬物依存症の治療・対応について. 京都府精神保健福祉総合センター, 京都, 2015.3.5.
- 161) 嶋根卓也: 「ダメ。ゼッタイ。」で終わらせない薬物乱用防止教育—危険ドラッグから処方薬乱用まで—. 北海道薬剤師会主催 平成 26 年度学校保健講演会, 北海道, 2015.3.7.
- 162) 嶋根卓也: 「ダメ。ゼッタイ。」で終わらせない危険ドラッグ対策—実態から支援まで—. 千葉県精神保健福祉センター, 千葉, 2015.3.19.
- 163) 引土絵未: SMARPP を用いた処遇. 名古屋保護観察所, 愛知, 2014.8.18.
- 164) 引土絵未: 薬物処遇プログラムの実施方法について. 薬物処遇重点実施研修, 千葉, 2014.8.25.

D. 学会活動**(1) 学会役員**

- 1) 和田 清：日本社会精神医学会 副理事長
- 2) 和田 清：日本アルコール・薬物医学会 評議員
- 3) 和田 清：日本依存神経精神科学会 理事
- 4) 松本俊彦：日本アルコール・薬物医学会 理事
- 5) 松本俊彦：日本精神科救急学会 理事
- 6) 松本俊彦：日本青年期精神療学会 理事
- 7) 松本俊彦：日本依存神経精神科学会 評議員
- 8) 松本俊彦：日本司法精神医学会 評議員
- 9) 松本俊彦：日本社会精神医学会 評議員
- 10) 船田正彦：日本アルコール・薬物医学会 評議員
- 11) 船田正彦：日本神経精神薬理学会 評議員
- 12) 船田正彦：日本薬理学会 評議員
- 13) 嶋根卓也：日本アルコール・薬物医学会 評議員

(2) 座長

- 1) 和田 清, 成瀬暢也：シンポジウム 52「脱法ドラッグ」乱用・依存の実態と対応策について．第 110 回日本精神神経学会学術総会，パシフィコ横浜，2014.6.27.
- 2) 和田 清：新薬理学セミナー2014 薬物依存研究における最前線—NIDA/NIH からのメッセージ．日本薬理学会第 130 回関東部会，星薬科大学，2014.7.5.
- 3) 和田 清, 川副泰成：シンポジウム 1 PS1 脱法ドラッグ最前線～臨床現場での実態～．平成 26 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，パシフィコ横浜，2014.10.4.
- 4) 和田 清, 嶋根卓也：シンポジウム 7 AS7 薬物乱用と HIV 感染—わが国の現状と対応—．平成 26 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，パシフィコ横浜，2014.10.4.
- 5) 和田 清：学術委員会主催 教育・研究入門講座「疫学調査研究の基本的手法と論文化について—中高生のメンタルヘルス 大規模研究の経験より—」．第 34 回日本社会精神医学会，富山国際会議場，2015.3.6.
- 6) 和田 清：一般演題 11「アルコール・依存症・ストレス関連障害」．第 34 回日本社会精神医学会，富山国際会議場，2015.3.6.
- 7) 杠岳文, 松本俊彦：シンポジウム 1 アルコール・薬物問題と自殺予防．第 38 回日本自殺予防学会総会，福岡，2014.9.12.
- 8) 嶋根卓也：特別講演 1「チベット医学から描く薬学教育」．第 20 回埼玉県薬剤師会学術大会，埼玉県県民健康センター，埼玉，2014.11.16.
- 9) 嶋根卓也, 船田正彦：(オーガナイザー) 一般シンポジウム S52 薬物乱用の新たな波への理解と対応：危険ドラッグと処方薬乱用．日本薬学会第 135 年会，兵庫，2015.3.25-28.

(3) 学会誌編集委員等

- 1) 和田 清：日本社会精神医学会 学術委員会 委員長，編集委員会委員
- 2) 和田 清：日本アルコール・薬物医学会 庶務委員会委員，編集委員会委員，教育委員会委員
- 3) 松本俊彦：日本青年期精神療学会 編集委員
- 4) 松本俊彦：星和書店「精神科治療学」編集委員

E. 研修**(1) 研修企画**

- 1) 第16回薬物依存臨床看護等研修会. 2014.9.9-12.
- 2) 第28回薬物依存臨床医師研修会. 2014.9.9-12.
- 3) 松本俊彦: 自傷行為・過量服薬の理解と対応, 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第5回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修. 東京, 2014.11.4-5.
- 4) 松本俊彦: SMARPPの意義と実際, 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第6回薬物依存症に対する認知行動療法研修. 東京, 2014.11.11-12.
- 5) 松本俊彦: 自殺のハイリスク者, 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催第10回精神科医療従事者自殺予防研修. 京都, 2014.12.2-3.
- 6) 松本俊彦: SMARPPの意義と実際, 独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター主催 平成26年度依存症治療拠点病院事業薬物依存症に対する認知行動療法研修会. 東京, 2015.3.2-3.

(2) 研修会講師

- 1) 松本俊彦: ハイリスク者支援の考え方. 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第8回自殺総合対策企画研修, 東京, 2014.8.20.
- 2) 松本俊彦: 「脱法ドラッグ」ーその乱用実態から依存性・毒性,治療までー. 第1回 NCNP メディア塾, 東京, 2014.8.22.
- 3) 松本俊彦: 薬物関連精神障害者の司法的問題とその対応. 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第28回薬物依存臨床医師研修, 東京, 2014.9.10.
- 4) 松本俊彦: 自殺のハイリスク者. 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第5回心理職自殺予防研修, 東京, 2014.9.16.
- 5) 松本俊彦: 事例をもとにしたディスカッション. 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター自殺予防研修 (病院職員向け), 東京, 2014.9.24.

F. その他

- 1) 和田 清: 偽造薬対策, 消費者の教育啓発と制度構築をー推進会議が初会合. CBnews (by キャリアブレイン), 2014.4.11.
- 2) 国立精神・神経医療研究センター: 脱法ドラッグ: 「合法」にだまされしないで 茨城ダルク入所, 元依存症患者 改正薬事法施行, 使用者も摘発. 毎日新聞 (茨城版朝刊). 2014.5.10.
- 3) 国立精神・神経医療研究センター: 脱法ドラッグ根絶議論 県薬物乱用防止指導員ら22人. msn産経ニュース. 2014.5.14.
- 4) 国立精神・神経医療研究センター: 若者の薬物乱用防げ! 先生の卵に麻薬Gメン講義. 産経新聞 (大阪). 2014.5.17.
- 5) 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所: 覚醒剤所持容疑で逮捕された人気男性デュオ… View Point. 2014.5.19.
- 6) 国立精神・神経医療研究センター: 麻薬専門病棟で行われていること 受診したら通報される?. 日刊ゲンダイ, 2014.5.21.
- 7) 和田 清: 中高年に広がる覚せい剤汚染! 検挙者の半分以上が40代,50代ー飲み屋やネットで密売. Jcast テレビウォッチ. 2014.6.7.
- 8) 和田 清: インタビュー 薬物依存ー「脱法ドラッグ」も含めてー. CLINICAL ANGLES IN PSYCHIATRY 第11号, 2014.6.
- 9) 和田 清: 知っとくワード 薬物依存①脳の異常は戻せず. 日本経済新聞 朝刊. 2014.6.22.
- 10) 和田 清: 知っとくワード 薬物依存②覚醒剤使用者は高齢化. 日本経済新聞 朝刊. 2014.6.29.
- 11) 厚生労働研究班: 脱法ドラッグ40万人 厚生省研究班推計 平均33歳 若者も. 朝日新聞(朝刊). 2014.7.3.

- 12) 厚生労働省が実施した「薬物使用に関する全国住民調査」：脱法ハーブに殺される！ 日本を破滅へと導く「草」の正体（週刊朝日）. Yahoo ニュース. 2014.7.3.
- 13) 和田 清：知っとくワード 薬物依存③脱法ドラッグが最も怖い. 日本経済新聞 朝刊. 2014.7.6.
- 14) 国立精神・神経医療研究センター：社説 脱法ドラッグ 社会から締め出そう. 中日新聞. 2014.7.8.
- 15) 国立精神・神経医療研究センター：社説 脱法ドラッグ 社会から締め出そう. 東京新聞. 2014.7.8.
- 16) 和田 清：知っとくワード 薬物依存④脳神経の「渴望」が呼び込む. 日本経済新聞 朝刊. 2014.7.13.
- 17) 和田 清：山形市 県内の養護教諭ら研修会 薬物の危険性を正しく伝える指導法学ぶ. 山形市新聞 朝刊 23面. 2014.7.12.
- 18) 和田 清：危険な「脱法ドラッグ」なぜ販売されているのかー「薬物規制」の現状と課題. 弁護士ドットコム. 2014.7.15.
- 19) 和田 清：知っとくワード 薬物依存⑤ 特効薬なし、経ち続ける一手. 日本経済新聞 朝刊14面, 2014.7.20.
- 20) 国立精神・神経医療研究センター：論説 脱法ドラッグ 危険性の認識共有急げ. 岩手日報 朝刊3面. 2014.7.20.
- 21) 国立精神・神経医療研究センター：「脱法」の罠 乱用ドラッグ・ハーブ（上）断てぬ誘惑「廃人」になる. 産経新聞 朝刊 27面. 2014.7.22.
- 22) 国立精神・神経医療研究センター：社説 脱法ドラッグ 社会の破壊は許さない. 琉球新報 朝刊2面. 2014.7.22.
- 23) 和田 清：「脱法」の罠 乱用ドラッグ・ハーブ（中）脳直撃 死と隣り合わせ 細胞破壊 動かぬマウス. 産経新聞 朝刊29面. 2014.7.23.
- 24) 和田 清：危険ドラッグ規制に国際協力必要・・・藤井参院議員. YOMIURI ONLINE. 2014.7.24.
- 25) 厚労省研究班：基礎からわかる危険ドラッグ. 読売新聞. 2014.7.25.
- 26) 和田 清：深層NEWS 危険ドラッグ規制 国際協力を. 読売新聞 朝刊33面2014.7.25.
- 27) 和田 清：厚労省推計 危険ドラッグ 「使用40万人」 他の薬物より年齢若く. 日本経済新聞 夕刊14面. 2014.7.29.
- 28) 国立精神・神経医療研究センター：どう診る？危険ドラッグ中毒者. 日経メディカル8月号. pp20-21, 2014.
- 29) 和田 清：シリーズ◎危険ドラッグ（その3）今のままでは規制強化は机上の空論？和田 清（国立精神・神経医療研究センター薬物依存研究部長）に聞く. 日経メディカルOnline. 2014.8.13.
- 30) 和田 清：記者の目 危険ドラッグ使用後の悲惨な事故 治療で乱用者を減らせ. 毎日新聞. 2014.9.25.
- 31) 和田 清：ドラッグ若者に急拡大 厚労研究班調査 健康志向と裏腹. 毎日新聞. 2014.9.27.
- 32) 和田 清：薬物の危険性を指摘 「防止教育」再点検を. 毎日新聞（岡山版）. 2014.10.8.
- 33) 和田 清：危険ドラッグの作用など研修会. 毎日新聞（茨城版）. 2014.10.10.
- 34) 和田 清：危険ドラッグ“薬事監視員の増員を図る” 衆院厚労委 高橋議員に厚労省. しんぶん赤旗. 2014.10.19.
- 35) 和田 清：クローズアップ茨城「まさに毒物」周知急務 危険ドラッグ 茨城県. 朝日新聞. 2014.10.22.
- 36) 薬物依存研究部：依存症研究 初の全国拠点 横須賀にアルコールや薬物. 日本経済新聞(夕刊) . 2014.11.10.
- 37) 和田 清：対策遅れる危険ドラッグ 和田 清さんに聞く(上) 検査態勢弱く規制進まず. しんぶん赤旗. 2014.11.18.
- 38) 和田 清：対策遅れる危険ドラッグ 和田 清さんに聞く(下) 検査態勢弱く規制進まず. しんぶん赤旗. 2014.11.19.
- 39) 厚生労働省研究班：薬物依存症治療の取組 患者自ら気付き再発防止. 毎日新聞. 2014.11.20.
- 40) 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所：「治すつもりが逆効果！頭痛持ちは知っておくべき「鎮痛薬」の思わぬリスク」で「飲酒・喫煙・くすりの使用についてのアンケート調査(2013年)」の結果を

- 引用. WooRis. 2014.11.25.
- 41) 国立精神・神経医療研究センター:論説 とちぎ発 危険ドラッグ 若者への啓発活動を強化を. 下野新聞, 2014.12.12.
 - 42) 和田 清:そこが聞きたい 危険ドラッグ規制強化 インタビュー和田 清氏 検査・治療 体制構築を. 毎日新聞. 2014.12.17.
 - 43) 国立精神・神経医療研究センター:(医療最前線)危険ドラッグ 信頼築く治療で断薬前進. 朝日新聞 神奈川版. 2015.2.6.
 - 44) 松本俊彦:薬事法改正に伴う脱法ドラッグの取り締まり強化. 静岡第一テレビ ニュース every 静岡, 2014.4.15.
 - 45) 松本俊彦:脱法ドラッグ 45%に幻覚 乱用者依存症過半数. 毎日新聞, 2014.4.15 .
 - 46) 松本俊彦:中国の咳止めシロップ中毒について, 日本の咳止めシロップ中毒に対する現在の規制等. フジテレビ 世界HOT ジャーナル, 2014.4.26.
 - 47) 松本俊彦:薬物依存からの回復方法について. TBS ラジオ 荻上千キ・Session-22, 2014.5.22.
 - 48) 松本俊彦:薬物依存 家族たちの苦悩. NHK おはよう日本, 2014.05.27.
 - 49) 松本俊彦:中高年に急増!?なくせるか, 薬物汚染. NHK 週刊ニュース深読み, 2014.6.7.
 - 50) 松本俊彦:女性の薬物依存 絶つ. 読売新聞朝刊, 2014.6.15.
 - 51) 松本俊彦:〇〇がやめられない (依存の悩みについて). NHK ハートネット TV, 2014.6.26.
 - 52) 松本俊彦:脱法ドラッグ汚染拡大. 毎日新聞朝刊, 2014.6.27.
 - 53) 松本俊彦:メンタルヘルス治療の新たな展開—精神科薬物療法. 日経ラジオ 杏林シンポジア, 2014.7.14.
 - 54) 松本俊彦:脱法ドラッグ乱用者4割超に幻覚・妄想. 朝日新聞夕刊, 2014.7.15.
 - 55) 松本俊彦:医師は自らのうつ病を予防できて当たり前?. 日経メディカル, 2014.7.16.
 - 56) 松本俊彦:脱法ドラッグによる交通事故が相次ぐニュースについて. 日本テレビPON!, 2014.7.17.
 - 57) 松本俊彦:なぜ拡大?どう防ぐ?脱法ドラッグ. NHK 週刊ニュース深読み, 2014.7.19.
 - 58) 松本俊彦:睡眠薬・抗不安薬・ご注意を 処方量だけで依存症も. 朝日新聞朝刊, 2014.7.22.
 - 59) 松本俊彦:基礎からわかる危険ドラッグ 利用者の事故急増. 読売新聞朝刊, 2014.7.25.
 - 60) 松本俊彦:規制といたちごっこ 危険ドラッグ 大麻・覚せい剤しのご害も 幻覚, 依存性早い症状悪化. 中日新聞, 2014.7.31.
 - 61) 松本俊彦:規制といたちごっこ 危険ドラッグ. 東京新聞, 2014.7.31.
 - 62) 松本俊彦:危険ドラッグ 40人死亡 11年以降今年急増24人. 毎日新聞, 2014.7.31.
 - 63) 松本俊彦:危険ドラッグ死者急増 今年すでに24人 専門家指摘 覚せい剤より危険. 読売新聞, 2014.8.6.
 - 64) 松本俊彦:危険ドラッグ治療現場の悲鳴. 毎日新聞, 2014.8.8.
 - 65) 松本俊彦:依存症. TBS ラジオ明日も元気, 2014.8.11-15.
 - 66) 松本俊彦:危険ドラッグ中毒性重く. 日経新聞, 2014.8.12.
 - 67) 松本俊彦:覚せい剤より依存性が高い危険ドラッグ!. 週刊プレイボーイ, 2014.8.25.
 - 68) 松本俊彦:危険ドラッグ 相談どこで?. 毎日新聞夕刊, 2014.9.5.
 - 69) 松本俊彦:シリーズ 20代の自殺第3回 “自傷行為” 生きるために傷つけて・・・. NHK ハートネット TV, 2014.9.1.
 - 70) 松本俊彦:薬物依存治療の中断防ぐ 新たなプログラム「スマーブ」患者同士, 体験を語り合い. 中日新聞朝刊, 2014.9.11.
 - 71) 松本俊彦:薬物依存治療の中断防ぐ. 東京新聞朝刊, 2014.9.11.
 - 72) 松本俊彦:気がつけば依存症 危険ドラッグ 安く手軽. 読売新聞朝刊, 2014.9.21.
 - 73) 松本俊彦:厚労省方針 脱薬物依存を支援 全国で治療プログラム. 毎日新聞朝刊, 2014.9.22.
 - 74) 松本俊彦:若い人の自殺を防ごう 平塚でシンポ. 神奈川新聞, 2014.9.29.
 - 75) 松本俊彦:薬物依存治療を広めたい ワークブック方式に注目 精神神経医療研究センター開発. 山口新聞,

2014.9.29.

- 76) 松本俊彦：根絶！危険ドラッグ 薬物依存の治療 ワークブック活用に注目 専門機関以外も取り組みやすく。静岡新聞夕刊，2014.9.30.
- 77) 松本俊彦：薬物依存症の再発防止 治療ワークブックに注目。北國新聞夕刊，2014.10.1.
- 78) 松本俊彦：脱薬物依存に新手法 ワークブックが効果。岩手日報，2014.10.5.
- 79) 松本俊彦：ワークブックで脱薬物依存 精神科専門機関 治療プログラム開発。山梨日日新聞，2014.10.6.
- 80) 松本俊彦：ワークブック活用 薬物依存「読む治療」。夕刊フジ朝刊，2014.10.6.
- 81) 松本俊彦：薬物依存症治療 ワークブック方式が効果。佐賀新聞，2014.10.7.
- 82) 松本俊彦：薬物依存治療を継続 国立研究センター、ワークブック方式開発。山陽新聞，2014.10.7.
- 83) 松本俊彦：多様化する問題・・・悩み向き合い 32年 ぐんま思春期研究会。上毛新聞，2014.10.7.
- 84) 松本俊彦：もっと命救える 青少年の自殺予防対策で研究。中日新聞，2014.10.07.
- 85) 松本俊彦：薬物依存の治療広めたいワークブック方式に注目 精神神経センター開発。琉球新報，2014.10.7.
- 86) 松本俊彦：薬物依存の治療 ワークブック方式に注目。下野新聞，2014.10.10.
- 87) 松本俊彦：薬物依存の治療 ワークブック方式に注目 再発防止へ問題点や修正法学ぶ。四國新聞，2014.10.10.
- 88) 松本俊彦：薬物依存再発防げ ワークブック方式治療で断薬率アップ。神戸新聞，2014.10.11.
- 89) 松本俊彦：3か月後の継続 90%超 薬物依存治療ワークブック方式。新潟日報，2014.10.13.
- 90) 松本俊彦：薬物依存症治療 ワークブック方式注目 自ら問題振り返り，修正法学ぶ。福井新聞，2014.10.16.
- 91) 松本俊彦：薬物依存 遅れる治療 新プログラムで効果。沖縄タイムス朝刊，2014.10.17.
- 92) 松本俊彦：今年1～9月 危険ドラッグ原因死74人 昨年の9人から急増。読売新聞朝刊，2014.10.17.
- 93) 松本俊彦：法務省調査 保護観察中 薬物依存治療3% 専門施設不足で。読売新聞夕刊，2014.10.17.
- 94) 松本俊彦：医療新世紀 薬物依存治療プログラム ワークブック形式に注目 脱落者が減少，受け皿増加。東奥日報夕刊，2014.10.20.
- 95) 松本俊彦：危険ドラッグ依存症の治療について。NHK福岡，2014.10.24.
- 96) 松本俊彦：薬物依存症 地域支援に何が必要か。NHK視点・論点，2014.11.5.
- 97) 松本俊彦：シリーズ 依存症 第1回 治療・支援への長い道のり。NHKハートネットTV，2014.11.11.
- 98) 松本俊彦：シリーズ 依存症 第2回 どうすれば“回復”できるか？。NHKハートネットTV，2014.11.12.
- 99) 松本俊彦：リストカットしてしまうあなたへ 信頼できる人きつといる。朝日中高生新聞，2014.11.16.
- 100) 松本俊彦：危険ドラッグ依存拡大/少ない専門機関 ワークブック式治療注目。愛媛新聞朝刊，2014.11.18.
- 101) 松本俊彦：どうすれば安心安全 薬物依存治療の取組 患者自ら気付き再発防止。毎日新聞夕刊，2014.11.20.
- 102) 松本俊彦：ドラッグってなんだ。NHKBSプレミアム 関口宏のそもそも，2014.12.1.
- 103) 松本俊彦：子供の自傷行為 原因や対応学ぶ 金沢で研修会。北國新聞，2014.12.1.
- 104) 松本俊彦：日本の社会の変化（バブル崩壊後，リーマン・ショック，格差社会）から人々の心理的な変化、それが自殺とどのような関係があるのか。心理的な変化が現れた時、我々はどのような対策をしなければいけないのか。韓国教育国営放送 EBSDocu-prime，2014.12.9.
- 105) 松本俊彦：他人事ではない！危険ドラッグの恐怖。フジテレビ ノンストップ！，2014.12.10.
- 106) 松本俊彦：悪質化 危険ドラッグ 成分複雑 使用者の罪悪感希薄 回復に3年「最悪の経験」。毎日新聞夕刊，2014.12.10.
- 107) 松本俊彦：高校生「カンニング自殺」裁判に疑問一争点は、自殺の解釈。精神科医の意見書は無視！？。TOCANA，2014.12.19.
- 108) 松本俊彦：厚労省方針 薬物依存治療拡大へ 危険ドラッグ対策。岩手日報朝刊，2014.12.24.
- 109) 松本俊彦：薬物依存治療体制強化 専門プログラム全国普及 15年度以降厚労省方針。愛媛新聞朝刊，2014.12.24.

- 110) 松本俊彦：厚労省 薬物依存治療プログラム 来年度から全国拡大. 下野新聞朝刊, 2014.12.24.
- 111) 松本俊彦：薬物依存治療普及へ 厚労省 全国 69 施設に順次拡大. 中国新聞朝刊, 2014.12.24.
- 112) 松本俊彦：厚労省方針 危険ドラッグなど薬物依存 治療体制全国で整備. 徳島新聞朝刊, 2014.12.24.
- 113) 松本俊彦：厚労省 危険ドラッグ対策 薬物依存 治療普及へ. 長崎新聞朝刊, 2014.12.24.
- 114) 松本俊彦：厚労省 薬物依存, 治療普及へ 危険ドラッグ対策で. 福島民報朝刊, 2014.12.24.
- 115) 松本俊彦：全国で薬物依存治療プログラム 危険ドラッグ問題化 体制を強化 厚労省, 来年度から. 北海道新聞朝刊, 2014.12.24.
- 116) 松本俊彦：厚労省 来年度以降体制を強化 薬物依存治療普及へ. 山形新聞朝刊, 2014.12.24.
- 117) 松本俊彦：薬物依存治療法 全国に拡大方針 国が危険ドラッグ対策. 琉球新報朝刊, 2014.12.24.
- 118) 松本俊彦：薬物依存 治療普及へ 危険ドラッグ対策 厚労省が体制強化. 佐賀新聞朝刊, 2015.1.5.
- 119) 松本俊彦：薬物依存：保護観察中, 支援 1 割未満 26 件「治療拠点なし」. 毎日新聞朝刊, 2015.1.6.
- 120) 松本俊彦：恐ろしすぎる…働き女子に忍び寄る「危険ドラッグ」の悲惨な状態. BizLady, 2015.1.9.
- 121) 松本俊彦：厚労省の手法「効果確認」 精神保健施設 全国 69 カ所で 薬物依存 危険知り治す. 日本経済新聞朝刊, 2015.1.10.
- 122) 松本俊彦：全国初調査 6 年間で 子どもに向精神薬処方増 注意欠如・多動症薬で 2.5 倍. 読売新聞朝刊, 2015.1.13.
- 123) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える精神科医. 茨城新聞, 2015.1.15.
- 124) 松本俊彦：治療の受け皿増やすべき. 北日本新聞, 2015.1.15.
- 125) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える精神科医. 新潟日報, 2015.1.15.
- 126) 松本俊彦：回復者に一目置く文化が日本にも育ってほしい. 福井新聞, 2015.1.15.
- 127) 松本俊彦：回復へ向け 受け皿増やしたい. 沖縄タイムス, 2015.1.16.
- 128) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える精神科医. 東奥日報, 2015.1.16.
- 129) 松本俊彦：子供に向精神薬処方増のなぜ?. yomiDr, 2015.1.20.
- 130) 松本俊彦：やめ方を教えろと言われ自分の宿題になった. 愛媛新聞, 2015.1.20.
- 131) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える精神科医. 埼玉新聞, 2015.1.20.
- 132) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える精神科医. 宮崎日日新聞, 2015.1.20.
- 133) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える医師. 神戸新聞, 2015.1.21.
- 134) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える精神科医. 西日本新聞夕刊, 2015.1.24.
- 135) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える精神科医. 徳島新聞, 2015.1.27.
- 136) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える精神科医. 京都新聞, 2015.1.31.
- 137) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える医師. 東京新聞, 2015.2.2.
- 138) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える精神科医, 松本俊彦さん. 山口新聞, 2015.2.13.
- 139) 松本俊彦：幻覚 3 日間の悪夢 壁一面に文字・蛍光灯に「即死亡」. 朝日新聞朝刊, 2015.2.18.
- 140) 松本俊彦：薬物患者の 3 分の 1 が危険ドラッグ使用. NHK ニュース, 2015.2.27.
- 141) 松本俊彦：依存防ぐ治療環境を. 読売新聞朝刊, 2015.3.17.
- 142) 船田正彦：脱法ハーブ捜査強化 法改正で権限付与 福岡県 警察・九州厚生局と連携. 西部読売新聞, 2014.5.6.
- 143) 船田正彦：池袋事故「脱法ハーブ吸った直後に運転した」供述. 毎日新聞, 2014.6.24.
- 144) 船田正彦：脱法ハーブ交通事故多発. 中日新聞, 2014.6.24.
- 145) 船田正彦：「脱法ハーブ事故」多発. 東京新聞, 2014.6.25.
- 146) 船田正彦：脱法ドラッグ 規制のがれ いたちごっこ. 読売新聞, 2014.6.26.
- 147) 船田正彦：脱法ハーブ撲滅に壁 事件・事故後たたく 深刻な依存症も急増. 北海道新聞, 2014.7.8.
- 148) 船田正彦：脱法ハーブ規制後手 事件・事故後絶たず 鑑定技術が未発達続々と「新種」登場. 愛媛新聞, 2014.7.8.
- 149) 船田正彦：表層深層 脱法ハーブ絡み事件・事故深刻 規制逃れ「新種」続々 撲滅に決め手なく. 京

- 都新聞, 2014.7.8.
- 150) 船田正彦: 脱法ハーブ撲滅に壁 新種続々 いたちごっこ. 簡易鑑定的手法未発達. 中国新聞, 2014.7.8.
- 151) 船田正彦: 「新種」続々 摘発に壁 安値で取引 鑑定も困難 強い依存度 大麻の20倍. 西日本新聞, 2014.7.8.
- 152) 船田正彦: 脱法ドラッグ追いつめる 新物質続々 規制方法を模索 脳神経細胞が現象. 朝日新聞, 2014.7.17.
- 153) 船田正彦: 「脱法」の罨 乱用ドラッグ・ハーブ (中) 脳直撃 死と隣り合わせ 細胞破壊 動かぬマウス. 産経新聞, 2014.7.23.
- 154) 船田正彦: 成分不明の危険ドラッグ 即座に有害判定. 毎日新聞, 2014.9.3.
- 155) 船田正彦: 危険ドラッグ 法の網 ネット業者, 新種も対象. 原料供給源 「中国ルート」封じ込め. 読売新聞, 2014.12.24.
- 156) 嶋根卓也: (資料提供.) クラブユーザーにおける MDMA 等のクラブドラッグ乱用実態に関する研究. 踊れない国ニッポン! ここがヘンだよ風営法S P, ビートたけしのTV タックル, テレビ朝日, 2014.4.21.
- 157) 嶋根卓也: 薬物依存症理解深め, 脱法ドラッグ問題も, 木津川で勉強会. 京都新聞, 2014.6.15.
- 158) 嶋根卓也: 脱法ドラッグ普通の人, 木津川の回復支援団体フォーラム, 「家族が理解, 協力を». 京都新聞, 2014.6.30.
- 159) 嶋根卓也: 危険ドラッグ, 4人に1人経験=クラブ利用の16歳以上男女-厚労省研究班. 時事通信社, 2014.8.8.
- 160) 嶋根卓也: 危険ドラッグ4人に1人経験, 厚労省, クラブ利用者調査. 静岡新聞, 2014.8.8.
- 161) 嶋根卓也: 「クラブ」利用の16歳以上, 危険ドラッグ24%経験. 中日新聞, 2014.8.8.
- 162) 嶋根卓也: 危険ドラッグ, 4人に1人, クラブ利用者に使用調査. 富山新聞, 2014.8.9.
- 163) 嶋根卓也: 16歳以上のクラブ利用者, 危険ドラッグ経験24%. 日本経済新聞, 2014.8.9.
- 164) 嶋根卓也: 危険ドラッグ24%経験, クラブ利用16歳以上男女, 福島民報, 2014.8.9.
- 165) 嶋根卓也: 危険ドラッグ, 4人に1人経験, クラブ利用の16歳以上男女, 厚労省研究班. 厚生福祉, 2014.08.15.
- 166) 嶋根卓也: 危険ドラッグ汚染, 厚労省研究班, クラブ利用者2割が経験, 平均年齢31.6歳. 朝日新聞, 2014.08.20.
- 167) 嶋根卓也: 健康情報拠点事業で「ゲートキーパー」担う DVD 作成, 埼玉県薬剤師会. PHARMACY NEWSWEEK 324号, 2014.10.16.
- 168) 嶋根卓也: 埼玉県薬剤師会, 患者支援のDVD作成. 薬事日報, 2014.10.29.
- 169) 嶋根卓也: 横浜ダルク, 危険ドラッグテーマに講演, あす/神奈川. 毎日新聞地方版, 2014.11.21.
- 170) 和田清, 邱冬梅, 嶋根卓也: 治すつもりが逆効果! 頭痛もちは知っておくべき「鎮痛薬」の思わぬリスク. WooRis, 2014.11.25. (<http://wooris.jp/archives/109321>)
- 171) 嶋根卓也: 薬物乱用防止へ講習会, 松山, 教職員ら90人学ぶ/愛媛. 読売新聞大阪版, 2014.12.17.
- 172) 嶋根卓也: (ラジオ) 危険ドラッグ防止に向けた薬剤師の関わり. 薬学の時間, ラジオ NIKKEI 第1, 20:10~20:15, 2015.1.8.
- 173) 嶋根卓也: (危険ドラッグ) 入手先6割「友人・知人». 朝日新聞, 2015.3.10.
- 174) 嶋根卓也, 船田正彦: 薬物乱用の新たな波への理解と対応, 危険ドラッグと処方薬乱用. 薬事日報, 2015.3.20.

4. 心身医学研究部

I. 研究部の概要

心身医学研究部の研究課題は、ストレス関連疾患、特に心身症や摂食障害、生活習慣病を対象に、Biopsychosocial モデルに基づき、心身相関の観点から病因や発症のメカニズム、病態を臨床的、基礎的に研究すること、効果的な治療法や予防法を開発することである。また、心身症・摂食障害の実態やその背景を調査すること、実証的な診断・治療法を普及していくことである。また平成26年度からは摂食障害全国基幹センターが当研究部内に設置された。

臨床面では研究部のスタッフが全員で引き続きセンター病院心療内科外来で診療・研究に携わっている。

人事面ではH26度の人員構成は次のとおりである。ストレス研究室長：安藤哲也，心身症研究室長：菊地裕絵，流動研究員：大江悠樹，西原智恵，併任研究員：有賀 元（センター病院），天野智文（センター病院），協力研究員：倉 尚樹，小原千郷，客員研究員：近喰ふじ子（東京家政大学），兒玉直樹（産業医科大学），大和 滋，西園マーハ文（白梅学園大学）研究生8名。

II. 研究活動

1) 心身症の発症機序と病態，治療に関する基礎的ならびに臨床的研究

(1)心身症・摂食障害の研究ネットワーク拠点整備と治療プログラムの開発（精神・神経疾患研究開発費）

摂食障害と過敏性腸症候群を対象にして，①摂食障害について，NCNP の治療支援ネットワーク研究拠点としての機能を整備し，治療プログラムを開発すること，②過敏性腸症候群について，臨床研究基盤を整備し治療プログラムを開発することを目標にした。摂食障害については情報ウェブサイトの開設（<http://www.edportal.jp/>および <http://www.edportal.jp/pro/>），神経性過食症の短期入院プログラムの研究，Enhanced-Cognitive Behavior Therapy（CBT-E）の効果検証，cEMA を応用した食行動の多面的評価法の開発を進めた。過敏性腸症候群については CBT の開発，cEMA を用いた多面的評価法の開発，¹³C マニトール呼気試験による診断法の開発，生体検体由来微量物質マーカー研究，脳機能画像を用いた神経基盤の解明や治療反応性予測の研究を行った（安藤，菊地，大江，西原，倉）。

(2)過敏性腸症候群の認知行動療法開発（精神・神経疾患研究開発費）

過敏性腸症候群は代表的な心身症で有病率は非常に高く慢性に経過し QOL 低下や医療資源への負荷が大きい。認知行動療法センター，病院総合内科，東北大学の協力を得て認知行動療法を開発し，フイージビリティースタディーを実施した。介入による有害事象は認められず，症状や QOL の改善が認められたことから，本プロトコルは我が国でも安全に実施可能かつ一定の治療効果を持つと考えられる（安藤，大江，倉，菊地）。

(3)摂食障害の家族のケア負担感と精神的健康の研究

摂食障害患者をもつ家族の精神的負担は大きい。効果的な家族への心理的サポートの確立のため，患者家族のケア負担感と精神的健康の実態を明らかにし，それに関連する因子を探ることを目的とする調査を実施した。本邦においても，神経性やせ症患者に対して主要なケアを提供する家族は，高いケア負担感を感じており，その多くが精神的健康状態を害しており，摂食障害症状の重症度や家族のストレス対処方略が関連していることが示された（小原，安藤）。

2) 摂食障害の診療体制整備の研究

厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「摂食障害の診療体制整備に関する研究」

本研究の目的は厚生労働省の摂食障害治療支援センター構想を踏まえ，摂食障害（ED）患者がその病態・病期・背景に応じて必要な診療や支援を受けられるよう，全国の患者および診療の実態を調査し，整備

すべき診療・支援ネットワーク体制や、診療体制を明確化し指針を作成すること、整備の為の課題を明確にし、施策の提言を行うこと、患者家族等のための対応マニュアルを作成することである。精神科、心療内科、小児科、内科、疫学の専門家からなる研究班を組織し、平成26年度は実態調査を行った（安藤、菊地）。

- 3) 食行動と生物心理社会的因子の経時的関連に関する包括的モデルの開発（日本学術振興会科学研究費補助金 若手研究（B））

食行動と生物心理社会的因子の経時的関連の包括的理解を目指し、ecological momentary assessment（EMA）法および携帯情報端末による食事記録システムを用いて普通体重群および肥満群での調査・解析を進めた。過食や気晴らし食いと関連が指摘されている食事の心理的効果として塩分摂取量と食後の不安やストレスの軽減の関連を示した。またEMA用食欲評価尺度を開発し公刊した（菊地）。

- 4) 過敏性腸症候群の日常生活下での多面的評価法の開発（精神・神経疾患研究開発費）

自己報告による評価が中心となるIBSにおいて、生態学的妥当性を高め、かつ心理社会的側面も含めた評価を可能とする評価法として、EMAを利用した評価法の開発を開始した。これまでに開発してきた日常生活下のストレス評価法の個人内比較における妥当性の評価のため日常生活下での調査を実施した（菊地、西原）。

- 5) 日常生活下調査による摂食障害の食行動異常関連要因と背景基盤の解明（日本学術振興会科学研究費補助金 若手研究（B））

EMAを含めた日常生活化調査を用いて摂食障害の食行動異常の関連要因および背景基盤を解明する研究を開始した（菊地）。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

- 1) 市民社会に対する一般的な貢献

発達障害児の親の会（こっこの会）での講演、練馬区教育委員による学校訪問活動（近喰ふじ子）

- 2) 専門教育面における貢献

山梨大学大学院客員准教授 社会医学講座、東京大学医学部 非常勤講師、二葉看護学院 非常勤講師（安藤哲也）

二葉看護学院非常勤講師、東京大学大学院教育学研究科 客員准教授（菊地裕絵）

二葉看護学院 講義「心身医学」一部担当、心理学（倉 五月）

「小児心身医学会」における認定医・専門医の受験に指しての試験委員（近喰ふじ子）

- 3) 精研の研修の主催と協力

安藤哲也、菊地裕絵：平成26年度第12回摂食障害治療研修 精神保健に関する技術研修。精神保健研究所，小平市，2014.8.26-29.

安藤哲也、菊地裕絵：平成26年度第11回摂食障害看護研修 精神保健に関する技術研修。精神保健研究所，小平市，2014.11.5-7.

- 4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

平成26精神保健等国庫補助金摂食障害治療支援センター設置運営事業に採択され全国摂食障害対策連絡協議会の設置開催および摂食障害全国基幹センターの設置運営を行い神経性無食欲症や神経性大食症などの摂食障害対策を推進した（安藤、菊地）。

- 5) センター内における臨床的活動

センター病院心療内科併任医師（安藤、菊地）

センター病院心療内科心理士（大江、倉、森）

IBS専門外来を新規に立ち上げ、専門診療の強化を行った（安藤、有賀）。

- 6) その他

国立国際医療研究センター国府台病院心療内科非常勤医師，付帯業務（安藤哲也）

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Kim J, Nakamura T, Kikuchi H, Yoshiuchi K, Yamamoto Y: Co-Variation of depressive mood and spontaneous physical activity evaluated by ecological momentary assessment in major depressive disorder. Conf Proc IEEE Eng Med Biol Soc 2014: 6635-6638, 2014.
- 2) Kikuchi H, Yoshiuchi K, Inada S, Ando T, Yamamoto Y: Development of an ecological momentary assessment scale for appetite. Bio Psycho Social Medicine 9: 2, 2015.
- 3) Ueno M, Maeda M, Komaki G: Different subgroups of high-scorers on the TAS-20 based on the big five personality traits Personality and Individual Differences 68: 71-76, 2014.
- 4) 太田一樹, 小澤竹俊, 寺田竜美, 村澤直子, 今井洋史, 安藤哲也, 望月弘彦: 在宅療養中のがん緩和治療期患者における血清アルブミン, トランスサイレチン濃度の検討. 日本病態栄養学会誌 17(4): 493-500, 2014.
- 5) 倉 五月, 倉 尚樹, 岡 孝和, 永野貴裕, 朽久保 修: 中高年女性における失体感症の評価および肥満との関係; 失体感症尺度 (体感への気づきチェックリスト) による検討. 予防医学 56: 119-122, 2014.
- 6) 志賀弘幸, 根本清貴, 高橋 晶, 新井哲明, 朝田 隆: 維持修正型電気けいれん療法の有用性 — 年間入院日数の検討から—. 精神科治療学 29(1): 127-132, 2014.
- 7) 小関俊祐, 巢山晴菜, 兼子 唯, 鈴木伸一: 教員志望の大学生の不安と抑うつに及ぼす拒絶に対する過敏性と自動思考の影響. 健康心理学研究 27: 35-44, 2014.
- 8) 巢山晴菜, 兼子 唯, 伊藤理紗, 横山仁史, 伊藤大輔, 国里愛彦, 貝谷久宣, 鈴木伸一: 重症社交不安障害患者における拒絶に対する過敏性とうつ症状が社交不安症状に与える影響性の検討. 不安障害研究 6: 1-10, 2014.
- 9) 兼子 唯, 中澤佳奈子, 大月 友, 伊藤大輔, 巢山晴菜, 伊藤理紗, 山田和夫, 吉田栄司, 貝谷久宣, 鈴木伸一: 社交不安障害の状態像による注意バイアスの違いの検討. 行動療法研究 39: 23-34, 2014.

(2) 総説

- 1) 小原千郷, 安藤哲也: 摂食障害患者の家族支援. 精神保健研究 61: 37-43, 2015.
- 2) 菊地裕絵, 吉内一浩: 特集・心身症関連疾患に対する心理的アプローチと薬物療法 緊張型頭痛. 医学と薬学 71(9): 1475-1479, 2014.
- 3) 菊地裕絵: 英文誌から 緊張型頭痛における頭痛の強さと急性増悪の日内変動: ecological momentary assessment による検討. 心身医学 55(3): 277-277, 2015.
- 4) 原島沙季, 菊地裕絵, 吉内一浩: ストレスの生理学的測定法. JOHNS31(3): 279-282, 2015.
- 5) 近喰ふじ子, 山本洋子, 市丸雄平: 「起床状況」から検討した女子大学生の背景. 東京家政大学研究紀要第 55 集(1): 103-111, 2015.
- 6) 近喰ふじ子, 佐藤明徳: 規範意識を育てる. 東京家政大学付属臨床相談センター紀要第 15 集: 83-87, 2015.
- 7) 高橋 晶: 災害救助要員のメンタルヘルス (特集 東日本大震災からの復興に向けて: 災害精神医学・医療の課題と展望). 精神神経学雑誌 116(3): 224-230, 2014.
- 8) 高橋 晶, 山下吏良, 高橋祥友: 災害支援学の立場からの中長期的支援の構想—今後同様な災害が起こった場合も含めて. 精神医学 56(1): 79-88, 2014.
- 9) 高橋祥友, 高橋 晶, 山下吏良: 【多様な自殺予防のあり方を模索する】リジリエンス 喪失と悲嘆についての新たな視点. 自殺予防と危機介入 34(1): 14-18, 2014.

(3) 著書

- 1) 吉内一浩, 菊地裕絵: 摂食障害. 医歯薬出版 編: 目でみる臨床栄養学 UPDATE 第2版. 医歯薬出版, 東京, pp201-208, 2015.
- 2) 鈴木眞理, 西園マーハ文, 小原千郷: 摂食障害—見る読むクリニック—. 星和書店, 東京, 2014.
- 3) 葉山晴菜, 貝谷久宣, 鈴木伸一: 2014 不安症の事典 不安症に併発する疾患「うつ病」. 日本評論社 (分担執筆)
- 4) 兼子 唯, 鈴木伸一: 広場恐怖症. 貝谷久宣・佐々木司・清水栄司 編: 不安症の事典, 日本評論社, 東京, pp54-59, 2015.

(4) 研究報告書

- 1) 安藤哲也: 厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業 (障害者政策総合研究事業(精神障害分野)) 摂食障害の診療体制整備に関する研究 (研究代表者 安藤哲也) 平成 26 年度 研究報告書 (総括研究報告書+分担研究報告書). 2015.
- 2) 安藤哲也: 精神・神経研究開発費「心身症・摂食障害の研究ネットワーク拠点整備と治療プログラムの開発」(主任 安藤哲也) 平成 26 年度研究報告書 (総括研究報告書+分担研究報告書). 2015.
- 3) 安藤哲也: 精神・神経研究開発費「心身症・摂食障害の研究ネットワーク拠点整備と治療プログラムの開発」(主任 安藤哲也)「摂食障害ネットワーク拠点整備ならびに過敏性腸症候群の認知行動療法開発」平成 26 年度分担研究報告書. 2015.
- 4) 菊地裕絵: 精神・神経研究開発費「心身症・摂食障害の研究ネットワーク拠点整備と治療プログラムの開発」(主任 安藤哲也)「過敏性腸症候群の日常生活下での多面的評価法の開発」平成 26 年度分担研究報告書. 2015.
- 5) 菊地裕絵: 発達障害者の主観評価法の開発. 厚生労働科学研究委託費 障害者対策総合研究事業 障害者対策総合開発事業 (精神障害分野) 発達障害者の就労定着を支援する多次元スマートセンシングシステムの開発 平成 26 年度委託業務成果報告書. pp12-15, 2015.
- 6) 有賀 元: 精神・神経研究開発費「心身症・摂食障害の研究ネットワーク拠点整備と治療プログラムの開発」(主任 安藤哲也)「過敏性腸症候群の診断ツールの開発」平成 26 年度分担研究報告書. 2015.

(5) 翻訳

- 1) 近喰ふじ子: アクロス・ザ・ライフスパン 第4章 機能的・発達の側面, 星と波描画テストの発展～理論・研究・実践. (ダフネ・ヤローン著, 杉浦京子 監訳), 川島書店, 東京, pp25-53, 2015.

(6) その他

- 1) 菊地裕絵: 書評 モーズレイ摂食障害支援マニュアル. 臨床心理学 14 (6), p911, 2014.
- 2) 小原千郷: 神経性食欲不振症のケア提供者におけるケア負担感と精神的健康状態—その実態と関連要因の検討—. 山梨大学学位論文 (博士) (医科学), 2015.
- 3) 近喰ふじ子: 書評 子どもの描画からわかること. キャシー A マルキオディ 著, 小林芳郎 訳, 田研出版, 児童心理 8, p26, 2014.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Kikuchi H: Can we know how much depressed we are from how we move? - Investigation through ambulatory assessment. Joint Symposium MPI of Psychiatry and NCNP, 神奈川, 2014.11.5-7.
- 2) 安藤哲也: 関連研究費による活動の紹介. シンポジウム「よりよい摂食障害の治療・支援を目指して」. 第 125 回日本心身医学会関東地方会, 東京, 2014.10.18.

- 3) 安藤哲也：司会 シンポジウム「よりよい摂食障害の治療・支援を目指して」. 第 125 回日本心身医学会関東地方会, 東京, 2014.10.18.
- 4) 菊地裕絵：シンポジウム 6 心身関連の基礎研究とその臨床応用 日常生活下モニタリングによる心身関連の評価. 第 55 回日本心身医学会学会学術講演会, 千葉, 2014.6.6-7.
- 5) 菊地裕絵：シンポジウム 4 心療内科に寄与する行動医学 生活習慣病. 第 19 回日本心療内科学会学術大会, 東京, 2014.11.29-30.
- 6) 高橋 晶：レビー小体型認知症 (DLB) の臨床と課題. シンポジウム 9 レビー小体型認知症. 第 29 回日本老年精神医学会, 東京, 2014.6.13.
- 7) 高橋 晶, 今村芳博, 山下吏良, 高橋祥友：ワークショップ 災害精神医学 2 災害時精神医療の経験と備え 救済者支援を含めたメンタルヘルス. 第 110 回日本精神神経学会学術会議, 神奈川, 2014.6.28.
- 8) 兼子 唯：不安と気分変動の関連 (公募シンポジウム SS-007 不安障害に対する認知行動療法の洗練を目指して). 第 78 回日本心理学会, 京都, 2014.9.10-12.
- 9) 兼子 唯：突発的に生じる大きな音に対する恐怖を主訴とする特定の恐怖症患者に対する行動療法. 日本医療心理学会ケースカンファレンス in 沖縄, 沖縄, 2014.10.17-19.
- 10) 兼子 唯：予期不安と外食恐怖に対して身体感覚に焦点をあてた行動療法を実施した症例. 第 16 回八ヶ岳シンポジウム, 東京, 2014.12.13.

(2) 一般演題

- 1) Kikuchi H, Yoshiuchi K, Yamamoto Y, Ando T: Association between energy intake and psychosocial factors in daily lives: a pilot study. 13th International Congress of Behavioral Medicine, Groningen, 2014.8.20-23.
- 2) Kikuchi H, Yoshiuchi K, Yamamoto Y, Ando T: Change in psychological states after meals and food intake: investigation by using electronic food diary and ecological momentary assessment. 73rd Annual Scientific Meeting of the American Psychosomatic Society, Savannah, 2015.3.2.
- 3) Oe Y, Kura S, Ariga H, Amano T, Yamato S, Horikoshi M, Fukudo S, Kikuchi H, Tomita Y, Ando T: Development of cognitive behavioral therapy for irritable bowel syndrome in Japan: interim report of a pilot study in Japan. 73rd Annual Scientific Meeting of the American Psychosomatic Society Savannah, USA, 2015.3.19.
- 4) Kim J, Nakamura T, Kikuchi H, Yoshiuchi K, Yamamoto Y: Co-Variation of Depressive Mood and Spontaneous Physical Activity Evaluated by Ecological Momentary Assessment in Major Depressive Disorder. 36th Annual International IEEE EMBS Conference, Chicago, 2014.8.26-30.
- 5) Amano T, Ariga H, Yamato S, Kanazawa M, Fukudo S: Effect of 5-HT₄ Agonist Mosapride on Human Gastric Accommodation. Digestive Disease Week 2014, Chicago, 2014.5.3-6.
- 6) Takahashi S, Shigemura J, Takahashi Y, Nomura S, Yoshino A, Tanigawa T: The role of workplace interpersonal support among workers of the Fukushima nuclear power plants following the 2011 accident. The International Society for Traumatic Stress Studies 31st Annual meeting, Miami, 2014.11.
- 7) 倉 五月, 倉 尚樹, 岡 孝和, 安藤哲也：禅修行を取り入れたヘルスプロモーションの試みー生活習慣病対策としてー. 第 55 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会, 千葉, 2014.6.6-7.
- 8) 小原千郷, 安藤哲也, 小牧 元, 鈴木 (堀田) 眞理, 加茂登志子：神経性食欲不振症のケア提供者の精神的健康に関連する因子の検討. 第 55 回日本心身医学会学会学術講演会, 千葉, 2014.6.6-7.
- 9) 大江悠樹, 倉 五月, 福土 審, 菊地裕絵, 富田吉敏, 安藤哲也：過敏性腸症候群 (IBS) に対する認知行動療法 (CBT) の開発ー日本版 CBT-E の作成と介入経過ー. 第 55 回日本心身医学会学会

- 学術講演会, 千葉, 2014.6.6-7.
- 10) 金 鎮赫, 中村 亨, 菊地裕絵, 吉内一浩, 佐々木 司, 山本義春: 大うつ病性障害における自発的身体活動に基づく抑うつ気分の連続評価法の開発. 第 53 回日本生体医工学会大会, 仙台, 2014.6.24-26.
 - 11) 大江悠樹, 倉 五月, 菊地裕絵, 堀越 勝, 安藤哲也: 過敏性腸症候群に対する認知行動療法の開発研究—日本版 CBT-IE の現状と課題—. 第 14 回日本認知療法学会, 大阪, 2014.9.12-14.
 - 12) 菊地裕絵, 吉内一浩, 山本義春, 安藤哲也: EMA を用いた日常生活下におけるエネルギー摂取量と心理社会的因子の関連に関する予備的検討. 第 18 回日本摂食障害学会学術集会, 大阪, 2014.9.13-14.
 - 13) 富田吉敏, 倉 五月, 大江悠樹, 菊地裕絵, 堀越 勝, 安藤哲也: 認知行動療法と鉄補充で改善した過敏性腸症候群 (心身症) の一例. 第 125 回日本心身医学会関東地方会, 東京, 2014.10.18.
 - 14) 大江悠樹, 倉 五月, 有賀 元, 天野智文, 堀越 勝, 福土 審, 菊地裕絵, 富田吉敏, 安藤哲也: 過敏性腸症候群に対する認知行動療法の開発—CBT が奏功した思春期男性患者の 1 例. 第 125 回日本心身医学会関東地方会, 東京, 2014.10.18.
 - 15) 西原智恵, 菊地裕絵, 岩永知秋, 須藤信行, 安藤哲也: 食物アレルギーとして治療され多彩な症状が持続していた転換性障害に対し、心身医学的アプローチを行った一例. 第 125 回日本心身医学会関東地方会, 東京, 2014.10.18.
 - 16) 富田吉敏, 大江悠樹, 倉 五月, 菊地裕絵, 安藤哲也: 鉄補充が心身に好影響をもたらした症例. 第 19 回日本心療内科学会総会・学術大会, 東京, 2014.11.29-30.
 - 17) 大江悠樹, 倉 五月, 富田吉敏, 堀越 勝, 菊地裕絵, 安藤哲也: 過敏性腸症候群に対する内部感覚暴露を用いた認知行動療法 (CBT-IE) 日本語版の開発研究. 第 19 回日本心療内科学会総会・学術大会, 東京, 2014.11.29-30.
 - 18) 小原千郷, 小牧 元, 鈴木(堀田)眞理, 加茂登志子, 上野真弓, 安藤哲也: 神経性食欲不振症の家族のケア負担感に関連する因子の検討. 第 14 回日本認知療法学会・第 18 回日本摂食障害学会学術集会 合同学会, 大阪, 2014.9.12-14.
 - 19) 倉 五月, 倉 尚樹, 岡 孝和, 朽久保 修: 中高年者における失体感症の評価—失体感症尺度 (体感への気づきチェックリスト) による検討—. 第 125 回日本心身医学会関東地方会, 東京, 2014.10.18.
 - 20) 小原千郷: 神経性食欲不振症の家族のケア負担感に関連する因子の検討. 第 14 回日本認知療法学会・第 18 回日本摂食障害学会学術集会 合同学会, 大阪, 2014.9.12-14.
 - 21) 小玉結衣, 小野塚裕子, 岡田亜衣菜, 近喰ふじ子, 福井 至: 東京家政大学附属臨床相談センター来談者の紹介経路. 第 55 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会, 千葉, 2014.6.6.
 - 22) 近喰ふじ子: 発達障害診断への心理的アプローチとしての風景構成法の意義. 第 55 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会, 千葉, 2014.06.07.
 - 23) 近喰ふじ子, 山本洋子, 市丸雄平, 他: 起床状況から検討した女子大学生の背景. 第 55 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会, 千葉, 2014.06.07.
 - 24) 近喰ふじ子, 井上俊哉, 塚本尚子, 他: 「新ストレス対処行動」質問紙作成の試み. 第 125 回日本心身医学会関東地方会, 東京, 2014.10.8.
 - 25) 佐藤明穂, 近喰ふじ子, 梅原 碧: 介護福祉士の健康の指標としての「新ストレス対処行動」質問紙の利用. 第 125 回日本心身医学会関東地方会, 東京, 2014.10.18.
 - 26) 近喰ふじ子, 山本映子, 森 由美子: 発達障害児を育てる親の現状と夫婦関係. 第 79 回日本民族衛生学会総会, 茨城, 2014.11.22.
 - 27) 近喰ふじ子, 山本映子: 発達障害児を育てる親の現状と母親のストレス. 第 16 回子ども健康科学会, 京都, 2014.12.13.
 - 28) 梅原 碧, 近喰ふじ子, 廣田敬乃, 他: 保育園児の子どもたちの生活調査と母子関係の予測の試み (1). 第 16 回子ども健康科学会, 京都, 2014.12.13.

- 29) 兼子 唯, 石井 華, 小松千賀, 野口恭子, 吉田栄司, 鈴木伸一, 貝谷久宣, 佐々木 司: 東日本大震災後の東京近郊在住のパニック障害患者の状態の検討. 第 16 回身体疾患と不安・抑うつ研究会, 東京, 2014.8.16.
- 30) 兼子 唯, 巢山晴菜, 国里愛彦, 伊藤理紗, 鈴木伸一: 日常生活内における安全確保行動がネガティブ感情に与える影響の検討. 第 40 回日本認知・行動療法学会, 富山, 2014.11.1-3.
- 31) 巢山晴菜, 兼子 唯, 伊藤理紗, 野口恭子, 貝谷久宣, 鈴木伸一: 2014 うつ症状の変化に対する拒絶に対する過敏性の予測力の検討. 日本行動療法学会第 40 回大会, 富山, 2014.11.3.
- 32) 兼子 唯, 巢山晴菜, 国里愛彦, 伊藤理紗, 鈴木伸一: 不安と気分変動の関連の検討. 第 20 回日本行動医学会学術総会, 埼玉, 2014.11.22-23.
- 33) 巢山晴菜, 兼子 唯, 伊藤理紗, 野口恭子, 貝谷久宣, 鈴木伸一: 2014 拒絶に対する過敏性と不安抑うつ発作の関連の検討. 第 21 回日本行動医学会学術総会, 埼玉, 2014.11.23.
- 34) 兼子 唯・巢山晴菜・国里愛彦・伊藤理紗・鈴木伸一: 不安からの回避・逃避行動の分類の検討. 第 7 回日本不安症学会, 広島, 2015.2.14-15.

(3) 研究報告会

- 1) 安藤哲也: 摂食障害ネットワーク拠点整備ならびに過敏性腸症候群の認知行動療法開発. 平成 26 年度精神・神経疾患研究開発費「安藤班」班会議, 東京, 2014.6.28.
- 2) 菊地裕絵: 過敏性腸症候群の日常生活下での多面的評価法の開発. 平成 26 年度精神・神経疾患研究開発費「安藤班」班会議, 東京, 2014.6.28.
- 3) 有賀 元: 特別講演 知られざる隠れたモサプリドの効果～機能性ディスペプシアの新たな治療戦略を目指して～. 北多摩北部所沢地区消化器疾患勉強会, 東京, 2014.11.18.

(4) その他

- 1) 近喰ふじ子: 指定討論 夜尿が治らない児童養護施設女兒とのプレイセラピー. 日本遊戯療法学会第 20 回大会, 東京, 2014.7.20.
- 2) 近喰ふじ子: 芸術療法の理論・技法・演習. 2014 年度 NCCP 4 認定初級カウンセラー養成講座 初級 I I, 東京, 2014.8.14.
- 3) 近喰ふじ子: 心身医学アセスメントと実際. 三原カウンセリング研究会 (MCR 講座), 広島, 2014.12.20.
- 4) 近喰ふじ子: 心理学ひとくちメモ「投影 projection」について. パペットセラピー学会誌(8)1: p36, 2014.

C. 講演

- 1) 菊地裕絵: 日常生活下における行動医学的評価法の紹介—Ecological momentary assessment (EMA)—. 心いき東大プロジェクト第 3 回研究会, 東京, 2014.6.24.
- 2) 高橋 晶: 気になるあのこころの病気～中高年がかかりやすいこころの病気を含めて～. つくば市民健康講座, 茨城, 2014.5.10.

D. 学会活動 (学会主催, 学会役員, 座長, 編集委員等)

(1) 学会主催

- 1) 安藤哲也: 第 125 回日本心身医学会関東地方会 大会長, 東京, 2014.10.18.
- 2) 菊地裕絵: 第 125 回日本心身医学会関東地方会 事務局長, 東京, 2014.10.18.

(2) 学会役員

- 1) 安藤哲也: 日本心身医学会 評議員

- 2) 安藤哲也：日本心療内科学会 評議員
- 3) 安藤哲也：日本皮膚科心身医学会 評議員
- 4) 安藤哲也：日本ストレス学会 評議員
- 5) 安藤哲也：日本摂食障害学会 評議員
- 6) 菊地裕絵：日本心身医学会 代議員
- 7) 菊地裕絵：日本女性心身医学会 評議員，幹事，財務委員会副委員長
- 8) 菊地裕絵：日本サイコオンコロジー学会 代議員
- 9) 菊地裕絵：日本交流分析学会 評議員
- 10) 菊地裕絵：日本行動医学会 評議員
- 11) 菊地裕絵：日本ストレス学会 評議員
- 12) 近喰ふじ子：子ども健康科学会 理事
- 13) 近喰ふじ子：日本パペットセラピー学会 理事
- 14) 近喰ふじ子：日本心身医学会 代議員
- 15) 近喰ふじ子：日本小児心身医学会 評議員
- 16) 近喰ふじ子：日本民族衛生学会 評議員

(3) 座長

- 1) 安藤哲也：シンポジウム 6「心身相関の基礎研究とその臨床応用」 第 55 回日本心身医学会総会
ならびに学術講演会，幕張メッセ国際会議場，千葉，2014.6.6-7.
- 2) 菊地裕絵：一般演題 H「心身症関連」，第 43 回日本女性心身医学会学術集会，京都，2014.8.10.
- 3) 近喰ふじ子：「接食障害 2」，第 32 回日本小児心身医学会学術集会，大阪，2014.9.13
- 4) 近喰ふじ子：症例検討①，第 6 回日本小児心身医学会関東地方会甲信越地方会，東京，2015.2.28-3.1.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 菊地裕絵：日本心身医学会 編集委員会 編集同人・英文投稿推進 WG
- 2) 菊地裕絵：日本女性心身医学会 編集委員会 副委員長
- 3) 菊地裕絵：Editorial board member of WOMAN (Psychosomatic Gynaecology and Obstetrics)
- 4) 菊地裕絵：日本摂食障害学会 ニュースレター 編集委員

(5) その他

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 安藤哲也，菊地裕絵：平成 26 年度精神保健に関する技術研修，第 12 回摂食障害治療研修．東京，2014.8.26-29.
- 2) 安藤哲也，菊地裕絵：平成 26 年度精神保健に関する技術研修，第 11 回摂食障害看護研修．東京，2014.11.5-7.

(2) 研修会講師

- 1) 安藤哲也：摂食障害病態・治療総論．第 12 回摂食障害治療研修 精神保健に関する技術研修，東京，2014.8.26-29.
- 2) 安藤哲也：摂食障害病態・治療総論．第 11 回摂食障害看護研修 精神保健に関する技術研修，東京，2014.11.5-7.
- 3) 菊地裕絵：心療内科領域に生かす新しい症状評価法 Ecological Momentary Assessment (EMA).

第 42 回日本心療内科学会学術講習会，東京，2014.11.30.

- 4) 菊地裕絵：心身医学各論（神経・筋，内分泌・代謝）. 2014 年夏期心身医学セミナー，東京，2014.7.20.
- 5) 小原千郷：家族療法と心理教育. 第 12 回摂食障害治療研修，東京，2014.8.26-29.
- 6) 小原千郷：ケアとコミュニケーションのスキル. 第 11 回摂食障害看護研修，東京，2014.11.5-7.

F. その他

5. 児童・思春期精神保健研究部

I. 研究部の概要

当部は、児童期に発症する種々の行動および情緒の障害について、地域コホートを確立し長期経過および病態解明を継続的に行っており、その成果をもとに早期診断法開発、予防法および治療法開発研究に取り組んでいる。なかでも、自閉症スペクトラム障害 (Autism spectrum disorders: 以下、ASD) は、発達最早期から発症し、すべてのライフステージを通して合併精神障害のリスクが高いため、当部が現在、最も精力的に取り組んでいる研究テーマである。ASD の複雑な病態の解明のために、子どもから成人までを対象として神経生理学的、認知神経科学的、分子遺伝学的など多領域アプローチを用いた研究を内外の共同研究者たちと展開しており、近年は、ASD に対する早期療育効果の検証、ASD に合併率の高い不安障害に対する認知行動療法など ASD の QOL 向上に向けた介入法に関する研究を精力的に進めている。

また、乳幼児期からの横断的および縦断的研究により得られたエビデンスに基づいて、地域・学校ベースの精神保健ケアシステムの提案を発信している。また、発達障害者支援法に基づく知識および支援体制の普及推進の目的で、早期発見・早期介入システムと育児支援のための研修、教育と医療の連携推進、そして一般精神科における成人となった発達障害者への医療に関する研修を含む、多領域の専門家に向けた多様な情報発信および啓発活動にも精力的に取り組んでいる。

人員構成は以下のとおりである。部長：神尾陽子，児童期精神保健研究室長：高橋秀俊，思春期精神保健研究室長：石飛 信，流動研究員（3名）：小松佐穂子（～7月），原口英之，浅野路子（10月～），科研費研究員（5名）：野中俊介，中鉢貴行（～4月），岡島純子（～5月），小松佐穂子（8月～H27.1月），AndrewMarkStickley（10月～），科研費研究補助員（1名）：小原由香（4月～），客員研究員（11名）：飛松省三，黒田美保，三宅篤子，則内まどか，平岩幹男，長尾圭造，立花良之，米田英嗣，渥美義賢，箱田裕司，安達潤（12月～），研究生（20名）：武井麗子，榊原信子，荻野和雄，名雪圭祐，西海枝洋子，山根直人，貫井祐子，望月由紀子，神長伸幸，柴田奈津美，近藤綾子，金 鎮赫，佐藤真由美，市川寛子，押山千秋，秋元頼孝，青木保典（5月～），山口穂奈美（5月～），中鉢貴之（5月～），小松佐穂子（H27.2月～）

II. 研究活動

1) 自閉症スペクトラム障害の最適予後のための早期介入に関する研究(精神・神経疾患研究開発費)

有病率2-3%にも推定される自閉症スペクトラム障害(ASD)の長期予後の低さは、生涯持続する中核症状に加え、高頻度に併発する精神医学的併存症による。ASD の多様性は大きく、成人期までASD 診断がなされないケースでは、併存症の症状が前景となり包括的評価がなされないまま併存症の治療のみが先行し、ASD 者の臨床ニーズに応じた治療サービスが提供されず、社会復帰のバリアとなっている。本研究は、ASD 者のライフステージにわたる予後の向上に資する包括的な早期介入のあり方をエビデンスに基づいて提案するため、児童期から思春期にかけて、そして成人期におけるASD および関下群、およびこれらに合併する精神医学的併存症を含む精神発達症状の発達軌跡を明らかにし、脳画像など生物学的指標を含む多次元の評価を行うことでバイオマーカーを同定し、早期介入のためのエビデンスを構築する。ASD ハイリスク児、ローリスク児を含む多摩コホートを主要対象とし、目的に応じて臨床サンプルを対象とし、横断的かつ縦断的に多次元の評価を行うことを特色とする。ASD と併存症を含む視点から併存症の発症時期や経過や予後予測マーカーが特定されればエビデンスにもとづいた早期介入についての提言が可能となり、ASD 治療の標準化に貢献できる。(神尾，石飛，高橋，荻野，山口，原口，浅野，松尾，小原，三宅)

2) 我が国における、自閉症児に対する「応用行動分析による療育」の検証に関する研究(厚生労働科学研究委託費 障害者対策総合研究開発事業)

就学前の自閉症児に対して安全で有効な行動的治療である療育がどこの地域でも提供できるため

のエビデンスを提供することを目的とする。諸外国で有効性が報告されている応用行動分析（Applied Behavior Analysis：以下 ABA）による療育とわが国の地域で提供されている自閉症プログラムによる療育の効果を子どもと親の変化を包括的に評価することで、比較し、それぞれの効果の特徴や関連要因について明らかにする。本年度は、予備的研究として、国内の自閉症幼児の療育に関する研究のシステマティック・レビュー、わが国初となる、民間機関による自閉症児に対する ABA に基づく療育サービスの全国実態調査を行い、国内の自閉症児療育の動向を整理した。さらに、クリニック・ケースを対象に、長期予後および予後判定指標に関して、予備的検討を行った。ABA 療育については言語に焦点を当てた予備的実験を行った。また近年、増加している自閉症幼児に対する療育効果についての無作為化比較対照試験を対象とするメタアナリシスを実施し、IQ や言語に及ぼす影響と関連する理論的背景を検証した。以上の結果を踏まえて、次年度より開始する療育の効果検証研究の研究プロトコルの妥当性を確認し確定した。そして、研究実施に向けて、ABA 療育を実施している大学および民間機関、および通常の療育を提供している地域拠点機関から 5 大学、民間機関 3 機関、地域療育機関 3 機関、計 11 施設の研究協力が内定し実施体制が確定した。（神尾、原口、山口、三宅、小原、野中、荻野、石飛、高橋）

3) 発達障害者の就労定着を支援する多次元スマートセンシングシステムの開発（厚生労働科学研究委託費 精神障害分野）

本委託業務は、コンピュータ援用による「行動・心理・生理・環境」情報の多次元かつ統合的なセンシングシステムの開発を目的として行った。これまでの発達障害に関する精神生理学や健康情報学における研究成果を統合し、臨床医学的エビデンスに基づいた情報通信技術（ICT）の発達障害支援への活用を目指すものである。定型発達および自閉症スペクトラム障害青年・成人を対象に、第 1 段階（携帯情報端末による環境・生理状態センシングシステムの開発、発達障害に特化した ecological momentary assessment (EMA) の改変、感覚過敏に関するチェックリスト作成）、第 2 段階（発達障害者を対象とした 7 日間の日常生活下調査による上記システムの実証的検討）、第 3 段階（発達障害に特化した行動・心理・生理・環境状態センシングシステムの開発の完成）を計画している。平成 26 年度は第 1 段階を予定通り終了し、今後は第 2 段階以後を実施予定である。これまでにないユニークな成果物（発達障害に特化した環境・生理状態センシングシステム）が期待され、今後の ICT を活用した発達障害者の健康支援に必要な不可欠な役割を果たすものと考えられる。（高橋、神尾）

4) 幼児用対人コミュニケーション行動評価尺度（The Baby and Infant Screen for Children with aUtism Traits (BISCUIT)）日本語版の信頼性・妥当性の検証（厚生労働科学研究費補助金事業 障害者対策総合研究事業）「発達障害児とその家族に対する地域特性に応じた継続的な支援の実態と評価のあり方に関する研究」

中核症状・併存症状双方の観点から ASD の早期診断をすすめる、幼児期から個別ニーズに応じた支援体制を確立していくことが今後の重要課題である。このためには、中核症状・併存症双方の観点から子どもを包括的に評価可能で、実臨床にも使用可能な簡便な評価尺度が必要である。本年度は、多国間比較を目的とした国際共同研究プロトコルに準じた研究計画に従い、計 49 名のデータ収集を行い、信頼性・妥当性の検証を行った。（石飛、小原、神尾）

5) 自閉症スペクトラム障害の薬物療法ガイドライン作成に向けた研究（厚生労働科学研究委託費 障害者対策総合研究事業（障害者対策総合研究開発事業：精神障害分野）

ASD を有する児童および成人が呈する様々な併存症に対する介入手段の一つとして、本邦でも様々な向精神薬を用いた薬物療法が従来から行われてきたが、その多くが「適応外使用」のもと、各医師の判断と自己責任のうえで行わざるを得ないのが現状である。この要因の一つとして、薬物療法に限らず本邦における ASD に関する標準的な診療に関するエビデンスの不足のため、ASD 者に対する薬物治療を含めた明確な治療ガイドラインが存在しないことがあげられる。本年度は、NICE clinical guideline を中心とした欧米の ASD 診療ガイドラインにおける薬物療法の位置づけを検

証し、養育者や各領域の専門家（多職種チーム）の連携による包括的支援の視点を重視した「ASD薬物療法ガイドライン」の作成に必要な記載項目を抽出した。また、このガイドライン案をさらに実践的な内容にするための問題点の提示も行った。（石飛，神尾）

6) 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある児童生徒の包括的な心の健康教育支援（文部科学省科学研究費）

ASD児では、様々なタイプの不安障害の併存が高率（40%-84%）に認められると報告されている。ASD児の不安症状に対する介入の第一選択として、従来、認知行動療法が推奨されているが、不安症状を有するASD児の多さを考慮すると、教育場面などでの早期介入が行えることが理想的である。本年度は、ASD（閾下の自閉症的特性を含む）児の集団向け不安軽減プログラムを用い、小学4-6年生が通う通級指導教室の1クラスにおいて、週1回の頻度で計10セッションのプログラムを実施し、同意の得られた10歳のASD男児2名と閾下自閉症的特性を有する男児1名、およびその親、教師からの報告が収集された。収集された報告を用い、実際に教師が教育場面で実施可能かどうかを検討した。（野中，岡島，三宅，小原，荻野，原口，山口，石飛，高橋，石川，神尾）

7) 学童期以降の脳機能と、個性の関連性評価に関する研究（「人間力活性化によるスーパー日本人の育成と産業競争力増進／豊かな社会の構築」（独）科学技術振興機構 委託研究開発費）

センター・オブ・イノベーション（COI）プログラムのCOI拠点「人間力活性化によるスーパー日本人の育成と産業競争力増進／豊かな社会の構築」（中核機関：国立大学法人大阪大学）において、金沢大学を中心とするサテライト金沢の共同研究機関として、脳の個性を生かした子どもの健やかなこころの育成：特異から得意へのパラダイムシフトをコンセプトに、精神生理学および発達心理学的手法を用いて達成することを主目的としている。サテライト金沢では、特に(1)拠点の生み出す「人間力活性化」システムを、脳科学的に個々の個性に最適化すること、(2)人間形成で最も重要な“子どもの育成”に焦点をあて、最適介入することを重点に進めている。最終的な目標は、「自然からのrichな刺激と養育者からの愛情のなかで成長し形成される理想的な人間力」について脳科学的に解明をすすめる、個々の特徴が最大限に生かされる生育環境について、学術的に呈示することである。その中で、「幼児から老年期までの脳機能と、個性の関連性評価」をテーマに、学童期から老齢期までの各年齢における脳機能の客観的評価方法の策定のために、学童を対象に、発達障害特性が聴覚情報処理に与える影響について脳磁図研究を実施、自閉特性が高い場合、視覚情報処理のみみられる側性が低下していることを見出した。引き続き、聴覚情報処理と社会性、情緒・行動、言語理解との関連を検討する予定である。（高橋，神尾）

8) 被災地の子どもの精神医療支援（厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業 精神障害分野）「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」）

1つは、H26年度は本研究課題の最終年度として、昨年度までの東日本大震災により被害を受けた子どもの保護者を対象に面接調査の結果を踏まえ、国際的なガイドライン遵守のためのチェックリストを完成させた（神尾・金・森脇）。もう一つの研究は、東日本大震災後のメディアへの暴露が被災地から遠隔地の子どもの心身の成長やメンタルヘルスに与える影響を調査した。その結果、子どもの情緒や行動の問題（特に情緒）において、映像にどれだけ曝されたかよりも、視聴直後の症状が影響していることが示された。さらに自閉症的特性をもつ子どもは影響が残りやすいことも示された。敏感に反応する児童に対しては丁寧なモニターが必要であることが示唆された。（大沼，神尾，金）

9) 本邦における非精神病性の一般精神科外来受診成人患者における注意欠如・多動性障害 ADHD の有病率推定のための多施設共同横断研究（Japan Prevalence Study of Adult ADHD in Patients at Psychiatric Outpatient Care: J-PAAP）

ADHD（注意欠陥・多動性障害）は成人期まで症状が持続することが明らかになり、さらに気分障害、不安障害、物質使用障害などさまざまな併存障害を伴い、精神科的ニーズが高い。一般外来

の精神科成人患者の ADHD を適切に診断し、必要な治療や支援の提供を行うことが今後の精神科医療には求められるが、これに関する基礎的データはこれまでほとんど報告がない。本研究の主要な目的は、一般精神科の 18 歳以上の外来受診患者における ADHD の有病率を、国際的診断基準に準拠した半構造化面接を用いて推定する事である。H26 年度は、九州地区の医療機関の協力を得て、1000 名超の対象者に対するスクリーニングを終了し、約 2 割が陽性と判断された。現在、スクリーニングに引き続き、構造化面接を実施中である。(神尾, 立森)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

社会全体のニーズの高まりに対応して、全国各地での自治体主催の市民向けの公開講座で精力的に講演を行った。また HP を通じて研究成果を逐次更新し、発信した。さらに、テレビ、新聞、雑誌等のメディア取材を積極的に受け、発達障害に関する知識の普及啓発活動を行った。

2) 専門教育面における貢献

神尾は、山梨大学連携大学院の客員教授として、院生 2 名の指導にあたり、1 名を学位取得に導いた。また 2 名の学生の学位審査の副査を担当した。神尾はセンター病院への東大、防衛医大の臨床実習生に対する児童精神医学の講義を担当した。対外的には全国の発達障害を診療できる児童精神科医、成人精神科医の人材育成を目的とした事例検討会や研修を担当した。

神尾、高橋、石飛は、国や大学、学会、研究会、自治体、そして各地医師会主催の専門家（精神科医、保健師、福祉士、臨床心理士、言語聴覚士、教員）向けの研修会講演講師を可能な範囲で精力的に引き受け、人材の育成に携わっている。センター内外を対象とした活動としては、H26 年度は研究と臨床の橋渡しを目指すカンファレンス「発達障害を考える基礎と臨床の勉強会」を 2 回開催し、センター外から第一線の臨床家および研究者を講師に招き、内外の若手医師および若手研究者の多数参加を得、啓発と指導に取り組んだ。

3) 精研の研修の主催と協力

発達障害者支援事業の一環として、当部主催で行う研修として、発達障害の早期発見のスキルアップを目的とする第 9 回「発達障害早期総合支援研修」（自治体の乳幼児健診に携わる医師および保健師対象）および未診断発達障害成人の医療的対応のスキルアップを目的とする第 7 回「発達障害精神医療研修」（精神科医対象）を企画・実施し、両研修会において神尾が講義も担当した。

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

その他公的委員会：神尾は、第 22 期日本学術会議連携会員としての委員会活動（臨床医学委員会脳とこころ分科会委員および出生・発達分科会委員）を通して、9 月出生・発達分科会委員発出の提言執筆に携った。脳とこころ分科会では幹事を担当し、編集に携わった。10 月からは第 23 期日本学術会議第二部会員としての、あらたな委員会活動（第 23 期日本学術会議臨床医学委員会出生・発達分科会委員、及び脳とこころ分科会委員、科学者委員会男女共同参画分科会委員）の活動を開始した。出生・発達分科会では委員長を担当した。子どもの虹情報研修センター（日本虐待・思春期問題情報研修センター）運営委員として事業評価を行い、進行中の研究への助言を行った。また平成 23 年度に引き続き、環境省エコチル調査に関しては、環境省エコチル調査メディカルサポートセンター精神神経発達分野プロジェクト委員として定例会議に出席、プロトコル作成および独自にデータ収集、解析を行い、エコチルで使用する調査項目の決定に貢献した。社会技術研究開発センター運営評価委員会委員をあらたに任命され、社会実装の評価軸の構築に関する議論を開始した。また独立行政法人医薬品医療機器総合機構の専門協議委員として子宮頸がんワクチン副反応問題についての会議出席および専門的助言を行った。

その他、日本小児保健協会発達障害への対応委員会委員、小平市の特別支援教育専門家委員として、児童精神医学の専門家として専門的助言を行った。

高橋は、東京都大島町からの要請により、全島の発達障害の診断・治療・調査・研究を含めた支

援体制の構築に向けて月1回赴いている。また、日本総合病院精神医学会の東日本大震災精神科医派遣プロジェクト～第1次計画福島県浜通り地域(沿岸部)支援～松村総合病院(福島県いわき市)へ診療支援として毎月1回派遣されている。

研究成果の行政活用：発達障害の早期発見に関して、当部の研究成果をもとに厚生労働省の発達障害施策の一環として普及に努めているところであるが、全国の市町村からの評価手順に関する問い合わせが年々増えており、H26年度は約9自治体から導入検討の相談があった。また多摩地区では神尾が小平市特別支援教育推進プログラム専門家委員を務め、義務教育期間における特別支援教育を円滑に推進するための「小平市教育委員会の特別支援教育推進の大綱」の評価に携わった。さらに当部として、小平市内で年5回の教師対象研修を行い、特別支援教育の専門的支援を行った。

5) センター内における臨床的活動

研究協力希望者に対する臨床活動および地域コホートの外来診療をセンター病院にて行っている。

6) その他

特になし。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Kamio Y, Haraguchi H, Miyake A, Hiraiwa M: Brief report: Large individual variation in outcomes of autistic children receiving low-intensity behavioral interventions in community settings. *Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health* 2015 9(6):2015. doi:10.1186/s13034-015-0039-6.
- 2) Takei R, Matsuo J, Takahashi H, Uchiyama T, Kunugi H, Kamio Y: Verification of the utility of the Social Responsiveness Scale for Adults in non-clinical and clinical adult populations in Japan. *BMC Psychiatry* 2014 14 (302):2014. doi:10.1186/s12888-014-0302-z.
- 3) Kitamura S, Enomoto M, Kamei Y, Inada I, Moriwaki A, Kamio Y, Mishima K: Association between delayed bedtime and sleep-related problems among community-dwelling 2-year-old children in Japan. *Journal of Physiological Anthropology* 2015 34(12):2015. doi:10.1186/s40101-015-0050-x.
- 4) Matsuo J, Kamio Y, Takahashi H, Ota M, Teraishi T, Hori H, Nagashima A, Kinoshita Y, Ishida I, Hiraishi M, Takei R, Higuchi T, Motohashi N, Kunugi H: Autistic-like traits in adult patients with mood disorders and schizophrenia. *PLOS ONE* 10(4):2015. doi:10.1371/journal.pone.0122711.
- 5) Ishii R, Canuet L, Ishihara T, Aoki Y, Ikeda S, Hata M, Katsimichas T, Gunji A, Takahashi H, Nakahachi T, Iwase M, Takeda M: Frontal midline theta rhythm and gamma power changes during focused attention on mental calculation: an MEG beamformer analysis. *Front Hum Neurosci* 8:406, 2014.
- 6) Ishitobi M, Kawatani M, Asano M, Kosaka H, Goto T, Hiratani M, Wada Y: Quetiapine responsive catatonia in an autistic patient with comorbid bipolar disorder and idiopathic basal ganglia calcification. *Brain and Development* 36:823-825, 2014.
- 7) Asano M, Ishitobi M, Kosaka H, Hiratani M, Wada Y: Ramelteon monotherapy for insomnia and impulsive behavior in high-functioning autistic disorder. *Journal of clinical psychopharmacology* 34(3):402-3, 2014.
- 8) Jung M, Kosaka H, Saito D N, Ishitobi M, Morita T, Inohara K, Asano M, Arai S, Munesue T, Tomoda A, Wada Y, Sadato N, Okazawa H, Iidaka T: Default mode network in young male adults with autism spectrum disorder: relationship with autism spectrum traits.

- Molecular Autism 5(35): 2014.
- 9) Komeda H, Kosaka H, Saito D N, Mano Y, Jung M, Fujii T, Yanaka H T, Munesue T, Ishitobi M, Sato M, Okazawa H: Autistic empathy toward autistic others. Social Cognitive and Affective Neuroscience, 2014.
 - 10) Okamoto Y, Kitada R, Tanabe H C, Hayashi M J, Kochiyama T, Munesue T, Ishitobi M, Saito D N, Yanaka H T, Omori M, Wada Y, Okazawa H, Sasaki A T, Morita T, Itakura S, Kosaka H, Sadato N: Attenuation of the contingency detection effect in the extrastriate body area in Autism Spectrum Disorder. Neuroscience Research 87:66-76, 2014.
 - 11) Matsuura N, Ishitobi M, Arai S, Kawamura K, Asano M, Inohara K, Fujioka T, Narimoto T, Wada Y, Hiratani M, Kosaka H: Effects of methylphenidate in children with attention deficit hyperactivity disorder: a near-infrared spectroscopy study with CANTAB®. Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health, 2014. doi:10.1186/s13034-014-0032-5.
 - 12) Matsuura N, Ishitobi M, Arai S, Kawamura K, Asano M, Inohara K, Narimoto T, Wada Y, Hiratani M, Kosak H: Distinguishing between autism spectrum disorder and attention deficit hyperactivity disorder by using behavioral checklists, cognitive assessments, and neuropsychological test battery. Asian Journal of Psychiatry 12:50-57, 2014.
 - 13) Okazaki R, Takahashi T, Ueno K, Takahashi K, Ishitobi M, Higashima M, Wada Y: Changes in EEG complexity with electroconvulsive therapy in a patient with autism spectrum disorders: a multiscale entropy approach. Frontiers in Human neuroscience, 2015. doi:10.3389/fnhum.2015.00106.
 - 14) 遠藤明代, 小保内俊雅, 稲田尚子, 森脇愛子, 神尾陽子: 保育所・幼稚園に在籍する気になる年中児の行動と発達に関する保育者意識調査. 小児の精神と神経 54(3) : 229-241, 2014.
 - 15) 原口英之, 野呂文行, 神山 務: 幼稚園における特別な配慮を要する子どもへの支援の実態と課題: 障害の診断の有無による支援の比較. 障害科学研究 39 : 27-35, 2015.
 - 16) 原口英之, 加藤 香, 井上雅彦: わが国におけるペアレント・メンター養成研修の現状と今後の課題. 自閉症スペクトラム研究 12(2) : 63-67, 2015.
 - 17) 原口英之, 井上雅彦, 山口穂菜美, 神尾陽子: 発達障害のある子どもをもつ親に対するピアサポート: わが国におけるペアレント・メンターによる親支援活動の現状と今後の課題. 精神保健研究 28 : 49-56, 2015.

(2) 総説

- 1) Fein D, Kamio Y: Commentary on The Reason I Jump by Naoki Higashida. Journal of Developmental & Behavioral Pediatrics 35(8): 539-542, 2014.
- 2) 神尾陽子: 自閉スペクトラム症の長期予後. 臨床精神医学 43 (10) : 1465-1468, 2014.
- 3) 神尾陽子: 自閉症スペクトラム障害の言語. 臨床神経心理 25 : 1-6, 2014.
- 4) 神尾陽子, 荻野和雄, 石飛 信, 高橋秀俊: 発達障害の疫学. 精神科 26 (1) : 33-37, 2015.
- 5) 石飛 信, 荻野和雄, 高橋秀俊, 神尾陽子: 自閉症の症候. 神経内科 81 (4) : 375-380, 2014.
- 6) 石飛 信, 荻野和雄, 高橋秀俊, 原口英之, 神尾陽子: 自閉スペクトラム症と精神科的併存症. 臨床精神医学 44 (1) : 37-43, 2015.

(3) 著書

- 1) 神尾陽子: 自閉症スペクトラムの縦断的発達研究. 臨床心理学. 金剛出版, 東京, pp378-381, 2014.
- 2) 神尾陽子: 発達障害へのアプローチ—最新の知見から 発達障害のアセスメント. 精神療法. 金剛出版, 東京, pp445-450, 2014.

- 3) 神尾陽子：DSM-5と発達障害. 五十嵐 隆, 平岩幹男 編：発達障害の理解と対応 改訂第2版 小児科臨床ピクシス. 中山書店, 東京, pp158-162, 2014.
- 4) 神尾陽子：発達障害児の子育てを支援する 途切れない発達障害支援. 橋本和明 編：子育て支援ガイドブック「逆境を乗り越える」子育て技術. 金剛出版, 東京, pp33-44, 2014.
- 5) 神尾陽子：児童精神医学の診断概念と DSM-IV 以降. 神庭重信, 神尾陽子 編：DSM-5を読み解く：伝統的精神病理, DSM-IV, ICD-10 をふまえた新時代の精神科診断. 中山書店, 東京, pp24-33, 2014.
- 6) 神尾陽子：自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム障害. 神庭重信, 神尾陽子 編：DSM-5を読み解く：伝統的精神病理, DSM-IV, ICD-10 をふまえた新時代の精神科診断. 中山書店, 東京, pp68-74, 2014.
- 7) 神尾陽子：発達障害の概念・分類とその歴史的変遷. 「精神科治療学」編集委員会 編：発達障害ベストプラクティス—子どもから大人まで— 精神科治療学 vol.29. 星和書店, 東京, pp10-13, 2014.
- 8) 神尾陽子：自閉症, 情緒・行動関連の評価 特集:小児の言語発達とその障害. 小児内科 vol.46. 東京医学社, 東京, pp1623-1627, 2014.
- 9) 高橋秀俊, 神尾陽子：発達障害. 定藤規弘 編：脳科学辞典. 2014. doi : 10.14931/bsd.2391.

(4) 研究報告書

- 1) 神尾陽子：我が国における, 自閉症児に対する「応用行動分析による療育」の検証に関する研究 平成 26 年度委託業務成果報告(総括). 平成 26 年度厚生労働科学研究委託費 障害者対策総合研究開発事業 (身体・知的等障害分野)「我が国における, 自閉症児に対する「応用行動分析による療育」の検証に関する研究 (業務主任者: 神尾陽子)」。 pp1-4, 2015.
- 2) 神尾陽子, 山口穂菜美, 原口英之：国内における自閉症幼児への早期療育に関する研究の現状と課題：療育プログラムの概要. 平成 26 年度厚生労働科学研究委託費 障害者対策総合研究開発事業 (身体・知的等障害分野)「我が国における, 自閉症児に対する「応用行動分析による療育」の検証に関する研究 (業務主任者: 神尾陽子)」。 pp5-16, 2015.
- 3) 神尾陽子, 原口英之, 小原由香, 山口穂菜美, 三宅篤子, 平岩幹男：望ましい ASD 療育に必要な構成要素と個別要因に関する研究—アウトカム指標に関する予備的検討. 平成 26 年度厚生労働科学研究委託費 障害者対策総合研究開発事業 (身体・知的等障害分野)「我が国における, 自閉症児に対する「応用行動分析による療育」の検証に関する研究 (業務主任者: 神尾陽子)」。 pp17-22, 2015.
- 4) 神尾陽子：発達障害者の就労定着を支援する多次元スマートセンシングシステムの開発. 平成 26 年度委託業務成果報告(総括). 平成 26 年度厚生労働科学研究費委託費 障害者対策総合研究開発事業 (精神障害分野)「発達障害者の就労定着を支援する多次元スマートセンシングシステムの開発 (業務主任者: 神尾陽子)」。 pp1-4, 2015.
- 5) 神尾陽子, 石飛 信：自閉症スペクトラム障害(ASD)の薬物療法ガイドライン作成に向けた研究～欧米の ASD 診療ガイドラインの検証に基づく「ASD 薬物療法ガイドライン」作成の試み. 平成 26 年度厚生労働科学研究委託費 障害者対策総合研究開発事業「発達障害を含む児童・思春期精神疾患の薬物治療ガイドライン作成と普及 (業務主任者: 中村和彦)」。 pp128-162, 2015.
- 6) 神尾陽子, 本田秀夫, 大澤多美子, 内山登紀夫, 外岡資郎, 村松陽子, 石飛 信, 小原由香：標準的な評価指標に関する研究：幼児用対人コミュニケーション行動評価尺度 (BISCUIT) 日本語版の信頼性・妥当性の検証. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「発達障害児とその家族に対する地域特性に応じた継続的な支援の実態と評価のあり方に関する研究 (分担研究者: 神尾陽子)」

- 7) 高橋秀俊: 発達障害者の感覚過敏を含む事前評価. 平成 26 年度厚生労働科学研究費委託費 障害者対策総合開発事業 (精神障害分野) 「発達障害者の就労定着を支援する多次元スマートセンシングシステムの開発 (業務主任者 神尾陽子)」。pp5-11, 2015.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 高橋秀俊: 書評 臨床医のための小児精神医療入門. 精神経誌 116 (9) : 787-787, 2014.
 2) 高橋秀俊: 書評 育児に悩んでいます: うちの子, どこかへんかしら?—双極性障害やそのほかの精神の病気をもつ子どもの親のためのガイドブック—. 精神経誌 116 (7) : 647-647, 2014.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 神尾陽子: DSM-5 の基本を理解する (精神科用語検討委員会・精神科病名検討連絡会). 第 110 回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.26-28.
 2) 神尾陽子, 高橋秀俊, 荻野和雄: 神経症とその併存症の診断と治療. 第 110 回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.26-28.
 3) 神尾陽子: 自閉症スペクトラムの早期マーカー. 第 36 回日本生物学的精神医学会, 奈良, 2014.9.29-10.1.
 4) 神尾陽子: 自閉症児の顔認知. 第 78 回日本心理学会大会, 京都, 2014.9.10-12.
 5) 高橋秀俊, 神尾陽子: 自閉症スペクトラム障害児における聴覚性驚愕反射の特性とエンドフェノタイプ候補可能性の検討. 第 36 回日本生物学的精神医学会 第 57 回日本神経化学学会大会 合同年会, 奈良県文化会館・奈良県新公会堂, 奈良, 2014.9.29-10.1.
 6) 高橋秀俊, 軍司敦子, 廣永成人, 萩原綱一, 飛松省三, 神尾陽子: 自閉症スペクトラム障害の聴覚誘発脳磁界反応について. 日本臨床脳磁図コンソーシアム サテライトシンポジウム, 福岡国際会議場, 福岡, 2014.11.19.
 7) 石飛 信: 自閉症スペクトラム障害に対する非定型抗精神病薬治療について. 第 110 回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.26-28.
 8) 野口晃菜, 原口英之, 熊澤 綾, 大久保健一, 米田広樹: インクルーシブ教育システムの構築に向けたスクールワイドな支援モデルの可能性. 日本特殊教育学会第 52 回大会, 高知, 2014.9.20-22.

(2) 一般演題

- 1) Kuroda M, Kawakubo Y, Kuwabara H, Kamio Y, Kano Y: Effects of cognitive-behavioral intervention on emotion regulation in adults with high-functioning autism spectrum disorders. International Meeting for Autism Research 13rd Annual Meeting, Atlanta, 2014.5.14-17.
 2) Yamazaki T, Tobimatsu S, Kamio Y: Neural development of voice and linguistic processing in preschool children: A NIRS study. 2014 ICME International Conference on Complex Medical Engineering, Taipei, 2014.6.26-29.
 3) Kamio Y, Ogino K, Iida Y, Endo A, Komatsu S, Takahashi H, Ishitobi M, Miyake A: Do early autistic symptoms predict later mental health problems?. The 9th International Conference on Early Psychosis-To the new horizon, Tokyo, 2014.11.17-19.
 4) Takahashi H, Nakahachi T, Komatsu S, Iida Y, Okajima J, Ogino K, Kamio Y: Source localization analyses of preattentive auditory discrimination processing in Japanese

- children with autism spectrum disorders. International Meeting for Autism Research 13rd Annual Meeting, Atlanta, 2014.5.14-17.
- 5) Okamoto Y, Kitada R, Seki A, Tanabe H C, Hayashi M J, Kochiyama T, Munesue T, Ishitobi M, Saito D N, Yanaka H T, Omori M, Wada Y, Okazawa H, Kosaka H, Koeda T, Sadato N: The neural response in the object-selective visual regions for children and adults with ASD. 第 37 回日本神経科学学会大会, 神奈川, 2014.9.11-13.
 - 6) Kosaka H, Jung M, Saito D, Ishitobi M, Inohara K, Arai S, Masuya Y, Fujioka T, Okamoto Y, Munesue T, Tomoda A, Sato M, Sadato N, Okazawa H, Wada Y: Effects of long-term oxytocin administration on functional connectivities with default mode network in autism spectrum disorder. 第 37 回日本神経科学学会大会, 神奈川, 2014.9.11-13.
 - 7) Morita T, Kosaka H, Saito D N, Fujii T, Ishitobi M, Munesue T, Inohara K, Okazawa H, Kakigi R, Sadato N: Does being observed modulate self-conscious emotion in individuals with autism spectrum disorders?. 第 37 回日本神経科学学会大会, 神奈川, 2014.9.11-13.
 - 8) Ishitobi M, Kosaka H, Hiratani M, Tomoda A, Wada Y, Kamio Y: Low-dose aripiprazole for behavioural symptoms in antipsychotics naive subjects with autism spectrum disorders: A prospective open-label study. The 16th World Congress of Psychiatry, Madrid, 2014.9.14-18.
 - 9) 則内まどか, 森 久美子, 神尾陽子, 菊池吉晃: 母親のわが子に対する愛着の神経基盤—おやつ場面における脳活動—. 日本生理人類学会第 70 回大会, 福岡, 2014.6.21-22.
 - 10) 中西 陽, 石川信一, 神尾陽子: 自閉的特性を強く示す中学生の社会的スキルと学校適応. 第 55 回日本児童青年精神医学会総会, 静岡, 2014.10.11-13.
 - 11) 長尾圭造, 高橋秀俊, 駒田幹彦: 学校メンタルヘルスマネジメント用フォーマットの開発とその実際の使用. 第 45 回全国学校保健・学校医大会, 石川, 2014.11.8.
 - 12) 山田健志, 篠原 隆, 稲見康司, 岩田 健, 厚坊浩史, 小松知己, 島 陽一, 末光俊介, 杉本達哉, 鈴木康弘, 高橋秀俊, 萩倉美奈子, 早川昌子, 南 雅之, 吉本博昭, 保坂 隆: 日本総合病院精神医学会の広報活動 20 年間のまとめ. 第 27 回日本総合病院精神医学会 学術総会, 茨城, 2014.11.28-29.
 - 13) 升谷泰裕, 岡本悠子, 藤沢隆史, 田中志保, 新井清義, 浅野みずき, 丁 ミンヨン, 石川俊介, 藤岡 徹, 石飛 信, 松村紀子, 友田明美, 小坂浩隆: 青年期 ASD 者における視線計測と血漿オキシトシン濃度の関連. 第 55 回日本児童青年精神医学会総会, 静岡, 2014.10.11-13.
 - 14) 丁 ミンヨン, 石飛 信, 棟居俊夫, 岡本悠子, 藤岡 徹, 新井清義, 浅野みずき, 升谷泰裕, 友田明美, 小坂浩隆: Resting-state functional connectivity MRI を用いた自閉症スペクトラム障害と Default-mode network の関連性. 第 55 回日本児童青年精神医学会総会, 静岡, 2014.10.11-13.
 - 15) 新井清義, 藤岡 徹, 石飛 信, 浅野みずき, 滝口慎一郎, 丁 ミンヨン, 岡本悠子, 友田明美, 平谷美智夫, 松浦直己, 小坂浩隆: 10 歳以下の ADHD 児における OROS-MPH 治療効果の検討: CANTAB による実行機能評価. 第 55 回日本児童青年精神医学会総会, 静岡, 2014.10.11-13.
 - 16) 野中俊介, 三宅篤子, 小原由香, 原口英之, 小松佐穂子, 山口穂菜美, 荻野和雄, 岡島純子, 石飛 信, 高橋秀俊, 神尾陽子: 通級指導教室に在籍する ASD 児の不安症状に対する集団認知行動療法の予備的検討 (第一報). 日本認知・行動療法学会第 40 回大会, 富山, 2014.11.1-3.
 - 17) 小倉正義, 綾木香名子, 原口英之, 加藤 香, 安達 潤, 吉川 徹, 竹澤大史, 井上雅彦: ペアレント・メンター活動における実態とメンターの意識(1): 動機, 援助者利得, 負担感に着目した実態調査. 第 55 回日本児童青年精神医学会総会, 静岡, 2014.10.11-13.
 - 18) 綾木香名子, 小倉正義, 原口英之, 加藤 香, 安達 潤, 吉川 徹, 竹澤大史, 井上雅彦: ペアレント・メンター活動における実態とメンターの意識(2): 援助者利得に関連する要因の検討.

第 55 回日本児童青年精神医学会総会，静岡，2014.10.11-13.

- 19) 神山 努，枝松慎次郎，石井要伸，原口英之：専門学校における発達障害が疑われる学生に対する教育の現状と課題．日本 LD 学会第 23 回大会，大阪，2014.11.23-24.

(3) 研究報告会

- 1) 神尾陽子：自閉症スペクトラム障害の最適予後のための早期介入に関する研究．精神・神経疾患研究開発費研究班 神尾班 第 1 回 班会議，2014.6.2
- 2) 神尾陽子：通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある児童生徒の包括的な心の健康教育支援．平成 26 年度科学研究補助金挑戦的萌芽研究 神尾班 第 1 回班会議，2014.9.4.
- 3) 神尾陽子：我が国における，自閉症児に対する「応用行動分析による療育」の検証に関する研究．平成 26 年度厚生労働科学研究委託費 障害者対策総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（身体・知的等障害分野） 神尾班 第 1 回班会議，2014.9.23.
- 4) 神尾陽子：発達障害者の就労定着を支援する多次元スマートセンシングシステムの開発．平成 26 年度厚生労働科学研究委託費 障害者対策総合研究事業 障害者対策総合開発事業（精神障害分野） 神尾班 班会議，2014.12.15.
- 5) 神尾陽子：我が国における，自閉症児に対する「応用行動分析による療育」の検証に関する研究．平成 26 年度厚生労働科学研究委託費 障害者対策総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（身体・知的等障害分野） 神尾班 第 2 回班会議，2015.1.12.
- 6) 高橋秀俊，軍司敦子，金子 裕，廣永成人，萩原綱一，稲垣真澄，飛松省三，花川 隆，神尾陽子：自閉症スペクトラムの聴覚誘発定常ガンマ律動に関する検討（続報）．第 4 回 IBIC シンポジウム，東京，2015.2.5.
- 7) 秋元頼孝，高橋秀俊，軍司敦子，金子 裕，花川 隆，馬塚れい子，神尾陽子：自閉症スペクトラム障害における 語用論理解の脳磁図研究：予備的検討．第 4 回 IBIC シンポジウム，東京，2015.2.5.
- 8) 石飛 信，原口英之，浅野路子，野中俊介，荻野和雄，高橋秀俊，神尾陽子：自閉症スペクトラム障害の併存症スクリーニングツール開発に関する予備的検討．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成 26 年度 研究報告会（第 26 回），東京，2015.3.9.
- 9) 原口英之，三宅篤子，石飛 信，高橋秀俊，神尾陽子：我が国における，自閉症児に対する「応用行動分析による療育」の検証に関する研究．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成 26 年度研究報告会（第 26 回），東京，2015.3.9.

(4) その他

- 1) 井上雅彦，山本淳一，竹内弓乃，原口英之：ワークショップ 5：ABA．第 55 回日本児童青年精神医学会総会，静岡，2014.10.11-13.

C. 講演

- 1) 神尾陽子：自閉症スペクトラムの早期発見における地域連携．小児科医有志による講演会，千葉，2014.7.2.
- 2) 神尾陽子：発達障害の新しい理解：発達障害のある子どもたちの健やかな成長を育む社会の役割とは．NPO 法人ダイオキシン・環境ホルモン対策国民会議 年次総会記念講演会，東京，2014.7.27.
- 3) 神尾陽子：発達障害の早期支援：就学前と就学後に地域で取り組めること．第 98 回信濃木崎夏期大学，長野，2014.8.3.
- 4) 神尾陽子：児童精神医学の研究法—とくに自閉症スペクトラムについて—．児童思春期精神医学夏期セミナー北海道大会 日本 ADHD 学会研修委員会主催，北海道，2014.8.23-24.

- 5) 神尾陽子：通級指導学級における不安軽減プログラムについて。小平市教育委員会 通級指導学級担任研修会，東京，2014.8.27.
- 6) 神尾陽子：就学前後の発達障害の最新知見：早期の診断・支援の意義と地域連携の重要性。小金井市市民講演会「発達障がい最新知見を学び、発達支援の地域連携を考える講座」，東京，2014.9.28.
- 7) 神尾陽子：自閉症のある児童生徒の学校卒業後の現状と課題。国立特別支援教育総合研究所，神奈川，2014.10.22.
- 8) 神尾陽子：自閉症スペクトラムの早期発見から長期的視点に立った支援へ。第 5 回「発達脳」レクチャー講演会，広島，2014.11.12.
- 9) 神尾陽子：成人後を視野に入れた発達障害早期支援とは。第 8 回福井子どものこころの臨床研究会，福井，2014.11.28.
- 10) 神尾陽子：不安障害・気分障害にひそむ発達障害。千葉精神科アゴラの会，千葉，2015.3.18.
- 11) 神尾陽子：子どもの発達障害とうつ病 ライフイノベーション領域における科学技術シナリオプランニングに向けた調査研究—うつ病を事例として。文部科学省 科学技術・学術政策研究所 科学技術動向研究センター，東京，2015.3.26.
- 12) 高橋秀俊：思春期のこころと病。思春期精神保健セミナー，福島，2014.10.6.
- 13) 長尾圭造，高橋秀俊：日本における思春期・青年期の自殺予防活動。モーズレー病院/ロンドン大学児童青年期精神医学専門研修～九州大学病院セミナー2014，福岡，2014.11.22-23.
- 14) 荻野和雄：子どものメンタルヘルスへの大人の対応について。小平市健康づくり講演会，東京，2015.3.17.

D. 学会活動

(1) 学会主催

なし

(2) 学会役員

- 1) 神尾陽子：日本精神神経学会 精神医学研究推進委員会 委員
- 2) 神尾陽子：日本生物学的精神医学会 評議員，将来計画委員会委員，プログラム委員
- 3) 神尾陽子：日本自閉症スペクトラム学会 理事
- 4) 神尾陽子：日本精神保健・予防学会 評議員
- 5) 高橋秀俊：日本精神神経学会 小児精神医療委員，災害支援委員，災害支援連絡会委員，編集委員，国際委員
- 6) 高橋秀俊：日本総合病院精神医学会 評議員，児童青年期委員，編集委員，診療報酬問題委員，医療政策委員，広報委員
- 7) 高橋秀俊：日本生物学的精神医学会 評議員

(3) 学会誌編集委員等

- 1) 神尾陽子：Review Journal of Autism and Developmental Disorders, Associate editor

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 神尾陽子，高橋秀俊：平成 26 年度精神保健に関する技術研修，第 9 回発達障害早期総合支援研修。東京，2014.6.19-20.
- 2) 神尾陽子，高橋秀俊：平成 26 年度精神保健に関する技術研修，第 7 回発達障害精神医療研修。東京，2014.9.24-26.

(2) 研修会講師

- 1) 神尾陽子：成人期の発達障害の精神医学的問題について．平成 26 年度精神保健に関する技術研修 第 7 回発達障害精神医療研修，東京，2014.9.25.
- 2) 神尾陽子：自閉症スペクトラム児・者の発達の道筋．平成 26 年度精神保健に関する技術研修 第 7 回発達障害精神医療研修，東京，2014.9.27.
- 3) 神尾陽子：自閉症の診断と評価．平成 26 年度第二期特別支援教育専門研修 発達障害・情緒障害・言語障害教育コース 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所主催，神奈川，2014.10.1.
- 4) 神尾陽子：成人期の発達障害の見立てに必要なアセスメントについて．平成 26 年度発達障害サポーター養成講座（成人期） ひょうご発達障害者支援センター主催，兵庫，2014.11.11.
- 5) 神尾陽子：自閉症の評価 PARS など．筑波大学人間系（障害科学）研究室，茨城，2014.12.16.
- 6) 神尾陽子：自閉症スペクトラム障害が疑われる対応困難な事例．厚生労働省平成 26 年度医療機関と連携した精神障害者の就労支援モデル事業に係る事例検討会，北海道，2015.1.24.
- 7) 神尾陽子：発達障害のある子どもの医学的支援．通常学級に在籍する発達障害のある児童生徒への健康支援スキル研修，茨城，2015.2.27.

F. その他

- 1) 第 15 回臨床カンファレンス：「薬理遺伝学とは—最近の抗うつ薬の話題を交えて—」2014.7.17.
- 2) 第 16 回臨床カンファレンス：「ASD の適応行動および感覚処理特性の評価について」
2015.2.19.

6. 成人精神保健研究部

I. 研究部の概要

研究部及び研究室の研究目的

成人を主な対象とした様々な精神健康上の問題、特にトラウマ性疾患、悲嘆についての病態解明、治療研究に取り組むとともに、自然災害、犯罪被害、虐待等におけるストレスを緩和し、効果的な治療と支援の研究を進め、代表的な病態である PTSD の神経科学的・遺伝学的な解明と治療研究を推進している。各種震災、事故等に際しては専門家派遣などの現地支援に当たるとともに、効果的な行政・医療対応のシステム研究にも取り組んでいる。また関係諸機関（厚生労働省、警察庁、内閣府等中央省庁、精神保健福祉センター、災害医療センター、保健医療科学院、世界保健機構、兵庫県および新潟こころのケアセンター等）とのネットワークの構築、共同研究の推進、教育研修活動も積極的に行っているところである。恐怖記憶の形成と消去に関する実験心理研究を推進している。自然災害、犯罪被害者への対応に関するガイドラインの作成、普及、研修に取り組んでいる。

平成 26 年度の当研究部の構成は以下の通りである。部長：金 吉晴。診断技術研究室長：金 吉晴（兼任）。犯罪被害者等支援研究室長：中島聡美。災害等支援研究室長：鈴木友理子。精神機能研究室長：栗山健一。認知機能研究室長：堀 弘明（6 月～）。流動研究員は伊藤真利子、林 明明、大村英史。兼任研究員は松岡 豊。科研費研究員は深澤舞子（～12 月）、浅野敬子（5 月～）、松田陽子（8 月～12 月）。外来研究員として池田大樹。協力研究員は堤 敦朗、松岡恵子、白井明美、石丸径一郎、寺島 瞳、井筒 節、西多昌規、深澤舞子（1 月～）。研究生は伊東史エ、伊藤まどか、浅野敬子（～4 月）、松田陽子（～7 月、1 月～）、中谷 優、上田 鼓、河瀬さやか、中山未知、大塚佳代、成澤知美、吉池卓也、正木智子、入軽井悦子、本間元康、備瀬哲弘、森田麻登。実習生として野田奈々。客員研究員として加茂登志子、小西聖子、宮地光恵、鈴木伸一、北山徳行、白井明美、袴田優子（7 月～）各氏を迎えている。（順不同）

II. 研究活動

1) PTSDに対する持続エクスポージャー療法に関する指導者育成システムの研究

現在各国のガイドラインで PTSD に対する治療法として最もエビデンスがあるとされている、持続エクスポージャー療法 (Prolonged Exposure Therapy) の治療者の効果的育成についてのシステム研究を行った。
(金)

2) 複雑型 PTSD に関する認知行動療法の検討

ICD-11 で導入が予定されている複雑型 PTSD に対する STAIR/NST 治療を導入し、スーパーバイズ体制を構築し、資料を標準化した。
(金)

3) 東日本大震災後の精神健康調査

東日本大震災後の行政職員（県職員、教職員）、児童生徒、地域住民の精神健康調査について、各関係機関に専門的技術支援を行い、解析等を担当した。
(鈴木、深澤、金)

4) 複雑性悲嘆の認知行動療法の効果に関する研究

米国の Shear らによって開発された複雑性悲嘆の認知行動療法の有効性をオープントライアルにて検証を行なっている。現在目標症例数 15 例中 14 例が登録しており、13 例（86%）が治療を終了している。現在のところ良好な結果を得ている。また、Wagner らによって開発されたインターネットを利用した複雑性悲嘆の認知行動療法についてもオープントライアルを行っている。
(中島、伊藤、白井、小西、成澤、正木、松田、金)

5) 性暴力被害者向け支援情報の提供のあり方についての研究

性暴力被害者救援センターなどを対象とした被害者向けの支援情報パンフレット「一人じゃないよ」について、性暴力被害者救援団体、犯罪被害者等早期支援団体を対象に有用性についての評価調査を行っている。
(中島、浅野、小西、金)

6) 睡眠剥奪が情動記憶の意図的な形成回避に及ぼす脳機能への影響

睡眠剥夺は恐怖情動記憶の般化を選択的に消去するが、意図的に恐怖記憶の獲得を回避すると、恐怖記憶の般化をかえって促進する事が明らかとなった。これはトラウマ受傷後の睡眠剥夺は PTSD 発症を予防する可能性を示唆する半面、重度のストレス体験に対して防衛機制が働き、記憶獲得能が麻痺した症例においては、かえって PTSD の発症を促進し、重症化・遷延化を促すリスクファクターとなりうる可能性を示唆している。現在、機能的 MRI を用い本現象の背景となる脳機能の検討を行っている。(栗山, 池田, 本間, 吉池)

7) 繰り返しの視・触・位置覚統合学習により生じる錯覚効果への情動の影響

複数の知覚情報を同時処理し事象を統合的に認知する能力は、情動的な文脈により影響を受ける。我々は、視・触・位置覚統合学習効果を錯覚として定量化することができるラバーハンドイリュージョン現象における情動刺激の影響を機能的 MRI を用い検討している。(本間, 栗山, 吉池, 池田)

8) 恐怖条件づけ学習における COMT 遺伝子多型の影響

COMT (catechol-O-methyltransferase)は、ドパミンをはじめとするカテコールアミン類を分解する酵素の一つであり、ヒトでは COMT 遺伝子にエンコードされている。COMT 活性は記憶機能に影響することが示されており、さらにはエストロゲン等の性ホルモンの活性に影響することが示唆されている。我々は、COMT 遺伝子多形が恐怖条件づけ記憶に及ぼす影響およびその性差に関して検討を行っている。(栗山, 吉池, 池田)

9) 錯覚学習における COMT 遺伝子多型の影響

COMT 遺伝子多型はヒトの記憶能力の個人差に関係することが示されている。複数の知覚情報を同時処理し事象を統合的に認知する能力は、学習により獲得、変容することが分かっている。我々は COMT 遺伝子多型と複数の知覚情報の統合処理能力との関連性を検討している。(本間, 栗山, 池田)

10) 高照度光が恐怖条件づけ学習の消去に与える影響

高照度光はヒトの学習機能を促進することが示されている。恐怖条件づけ消去学習は、不安障害やストレス関連障害の治療戦略である認知行動(暴露)療法の認知モデルであり、我々は高照度光曝露が、これを促進するか検討することで新規治療法の開発への発展を検討している。(吉池, 栗山, 池田)

11) 複雑性悲嘆の生物学的基盤に関する研究

悲嘆が遷延化した状態である複雑性悲嘆については、報酬系の活性化や、愛着に関わる脳活動領域や、選択的注意に関わる脳活動領域等の異常が疑われているが、現段階では研究も少なく、脳機能における病態は不明確である。本研究は、複雑性悲嘆に特徴的な生物学的基盤を認知課題を使った機能的磁気共鳴画像を用い検討を行うことを目的としている。現段階で複雑性悲嘆・閾値下の複雑性悲嘆の被験者 12 例が登録・終了しており、引き続き検討を行っていく予定である。(吉池, 栗山, 中島, 池田, 大村, 本間, 浅野)

12) 複雑性悲嘆の集団認知行動療法の開発及びその効果に関する研究

昨年度開発した複雑性悲嘆の集団認知行動療法 (group cognitive therapy for complicated grief, G-CGT) のプログラム (全 6 回) の安全性と有用性について検討を行った。昨年度健常大学生・大学院生の結果をもとにプログラムの内容を修正し、遺族のケアに関わる支援者 (2 団体) 14 人 (2 グループ) に実施した。プログラム中に有害事象の訴えはなかった。複雑性悲嘆症状 (ICG) および抑うつ症状 (BDI-II) の得点の平均値は、プログラム前と比較してプログラム後に有意な低下が見られた。(中島, 松田, 浅野, 成澤, 正木)

13) PTSD の病態解明と治療効果予測法開発に向けた、遺伝子・バイオマーカー・心理臨床指標による多層的検討

トラウマ体験者 (PTSD 発症群, 非発症群) と健常者を対象とし、遺伝子解析 (遺伝子多型, 遺伝子発現, DNA メチル化), 内分泌・免疫系や自律神経系指標を含むバイオマーカー測定, 認知機能測定, 多角的な心理・臨床的評価を行う。PTSD 発症群に対しては持続エクスポージャー療法等の治療を行い、治療反応性との関連も検討する。これらの検討により、PTSD の病因・病態解明, 生物学的指標に基づく客観的治療効果予測法の開発を目指す。(堀, 伊藤真利子, 林, 金)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

以下の報道を通じて研究成果の社会還元を行った。

- ・ 新潟日報モア（2014.8.7.【社会面】）被災者支援 長い目で（新潟 心のケア学ぶ研修会）。（金）
- ・ 毎日新聞（2014.8.21. ネットニュース）listening：市民による被災者心のケア 震災後に脚光各地で研修実施。（金）
- ・ 新潟 PTSD 対策専門研修会 東日本大震災の津波と原発事故による精神的影響について. 新潟県精神保健福祉協会こころのケアセンター発行, 2014.12.（金）
- ・ 新聞協会報（2015.3.3. 第 4135 号 4 面）記者対象 PFA 研修開く。
- ・ 日経メディカル 私の視点.（2015.3.11）ありがた迷惑な押し付け支援をしないために。（金）
- ・ しんぶん赤旗（2014.5.16. 10 面）【眠りのコツ伝授】（栗山）
- ・ 朝日新聞（朝刊 2014.6.5）【体内時計、うまく使うには 7 日、みやまで公開学術シンポ/福岡県】（栗山）
- ・ 日経 Gooday（2014.11.17）眠りの超スキル. 寝る前の 2 時間が自分磨きのゴールデンタイムだった！ <http://gooday.nikkei.co.jp/atcl/report/14/091100017/111100002/>（栗山）
- ・ 日経ヘルス 特別編集版 2015 年春号【熟眠感がない】。（栗山）

2) 専門教育面における貢献

- ・ 専門家向け情報の提供（中島）
国内の悲嘆の研修者とともに災害グリーフサポートプロジェクト（Japan Disaster Grief Support Project; JDGS project）を設立し Web 等を通して被災者遺族にかかわる専門家への情報提供を行った。
- ・ 専門家向け講演会
全国精神保健福祉センター長会, 健康危機管理保健所長等研修, 国土交通省幹部職員研修会, 行政職員向け研修会等で, 災害精神保健に関する最新知見を提供している。（金, 鈴木）
- ・ 客員教授：東京女子医科大学医学部（金）, 山梨大学医学部（金）, 武蔵野大学心理臨床センター（中島）。
- ・ 大学講師：東京大学大学院医学系研究科（金）, 京都大学医学部（金）, 東京医科歯科大学医学部（金）, 学習院大学文学部心理学科（金）, 福島県立医科大学（鈴木）, 山形大学医学部（鈴木）, 東京女子医科大学（堀）
- ・ 各地の医師会, 法務省, 警察庁, 精神保健福祉センター等の依頼を受け, トラウマ対応, PTSD 治療, 犯罪被害者対応, 被災者・遺族対応, 災害精神保健に関する一連の講演を行った（金, 中島, 鈴木）。
- ・ 国際協力（鈴木）
JICA によるホーチミン医科薬科大学における臨床疫学養成プログラムに協力し, 講義を行った。

3) 精研の研修の主催と協力

- ・ 国立精神・神経医療研究センターにおいて第 9 回犯罪被害者メンタルケア研修を主催した。（中島）

4) 保健医療行政・施策に関する研究・調査, 委員会等への貢献

①政府委員会

- ・ 原子力規制委員会原子力規制庁 緊急事態応急対策委員（金）
- ・ 宇宙航空研究開発機構 有人サポート委員会 専門委員（金）
- ・ 日本学術会議 連携委員（中島）
- ・ 内閣府 犯罪被害者等施策推進会議専門委員（中島）
- ・ 内閣府「平成 26 年度交通事故被害者サポート事業検討会」委員（中島）

- ・ 国土交通省 平成 26 年度公共交通事故被害者等支援懇談会 メンバー (中島)
- ・ 警察庁 犯罪被害者の精神的被害の回復に資する施策に関する研究会座長 (中島)
- ・ 東京都 犯罪被害者等支援を進める会議委員 (中島)
- ・ 福島県立医科大学放射線医学県民健康管理センター 専門委員 (鈴木)
- ・ 仙台市教育局教育委員会 平成 26 年度仙台市児童生徒の心のケア推進委員 (鈴木)
- ・ 厚生労働省「健康づくりのための睡眠指針 2014」に関する検討会 委員 (栗山)

②その他公的委員会

- ・ ふくしま心のケアセンター 顧問 (金)
- ・ みやぎ心のケアセンター 顧問 (金)
- ・ ふくしま心のケアセンター 顧問 (中島)

5) センター内における臨床的活動

- ・ 病院において PTSD, 複雑悲嘆の外来診療, CBT を行っている. (金, 中島)
- ・ 病院において新患・再来の外来診療を行っている. (堀)

6) その他

- ・ 成人部 HP に「自然災害に関するガイドライン」「薬物療法アルゴリズム」「犯罪被害者のメンタルヘルス情報ページ」を掲載し, 専門家, 一般に対し治療や対応についての啓発を行っている. (金, 中島)

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Suzuki Y, Fukasawa M, Obara A, Kim Y: Mental Health Distress and Related Factors Among Prefectural Public Servants Seven Months After the Great East Japan Earthquake. *J Epidemiol* 24(4), 287-294, 2014.
- 2) Suzuki Y, Fukasawa M, Nakajima S, Narisawa T, Keiko A, Kim Y: Developing a Consensus-based Definition of “Kokoro-no Care” or Mental Health Services and Psychosocial Support: Drawing from Experiences of Mental Health Professionals Who Responded to the Great East Japan Earthquake. Version 1. *PLoS Curr.* 7, 2015.1.29. 【online】
- 3) Miyajima K, Fujisawa D, Yoshimura K, Ito M, Nakajima S, Shirahase J, Mimura M, Miyashita M: Association between quality of end-of-life care and possible complicated grief among bereaved family members. *J Palliat Med.*17(9), 1025-1031, 2014.
- 4) Goto A, Reich MR, Suzuki Y, Tsutomi H, Watanabe E, Yasumura S: Parenting in Fukushima City in the post-disaster period: short-term strategies and long-term perspectives. *Disasters.* Jul; 38 Suppl 2: s179-89.2014.
- 5) Goto A, Rudd RE, Bromet EJ, Suzuki Y, Yoshida K, Suzuki Y, Halstead DD, Reich MR: Maternal confidence of Fukushima mothers before and after the nuclear power plant disaster in Northeast Japan: Analyses of municipal health records. *Journal of Communication in Healthcare.* 7(2): 106-116, 2014.
- 6) Yabe H, Suzuki Y, Mashiko H, Nakayama Y, Hisata M, Niwa S, Yasumura S, Yamashita S, Kamiya K, Abe M: Psychological distress after the great East Japan earthquake and fukushima daiichi nuclear power plant accident: results of a mental health and lifestyle survey through the fukushima health management survey in fy2011 and fy2012. *Fukushima J Med Sci* 60(1): 57-67, 2014. 【online】
- 7) Sakuma A, Takahashi Y, Ueda I, Sato H, Katsura M, Abe M, Nagao A, Suzuki Y, Kakizaki M, Tsuji I, Matsuoka H, Matsumoto K: Post-traumatic stress disorder and depression

- prevalence and associated risk factors among local disaster relief and reconstruction workers fourteen months after the Great East Japan Earthquake: a cross-sectional study. *BMC Psychiatry* 2015, 15:58, 2015.
- 8) Ikeda H, Kubo T, Kuriyama K, Takahashi M: Self-awakening improves alertness in the morning and during the day after partial sleep deprivation. *J Sleep Res.* 23(6):673-680. 2014.
 - 9) Kim W, Tateno A, Arakawa R, Sakayori T, Ikeda Y, Suzuki H, Okubo Y: In vivo activity of modafinil on dopamine transporter measured with positron emission tomography and [¹⁸F]FE-PE2I. *Int J Neuropsychopharmacol* 17(5) 697-703, 2014.
 - 10) Ogawa K, Tateno A, Arakawa R, Sakayori T, Ikeda Y, Suzuki H, Okubo Y: Occupancy of serotonin transporter by tramadol: a positron emission tomography study with [¹¹C]DASB. *Int J Neuropsychopharmacol* 17(6): 845-850, 2014.
 - 11) Sakayori T, Tateno A, Arakawa R, Ikeda Y, Suzuki H, Okubo Y: Effect of mazindol on extracellular dopamine concentration in human brain measured by PET. *Psychopharmacology (Berl)* 231(11): 2321-2325, 2014.
 - 12) Shingai Y, Tateno A, Arakawa R, Sakayori T, Kim W, Suzuki H, Okubo Y: Age-related decline in dopamine transporter in human brain using PET with a new radioligand [¹⁸F]FE-PE2I. *Ann Nucl Med* 28(3): 220-226, 2014.
 - 13) Fujii K, Ozeki Y, Okayasu H, Takano Y, Shinozaki T, Hori H, Orui M, Horie M, Kunugi H, Shimoda K: QT is longer in drug-free patients with schizophrenia compared with age-matched healthy subjects. *PLoS One* 9: e98555, 2014.
 - 14) Ota M, Noda T, Sato N, Hattori K, Teraishi T, Hori H, Nagashima A, Shimoji K, Higuchi T, Kunugi H: Characteristic distributions of regional cerebral blood flow changes in major depressive disorder patients: a pseudo-continuous arterial spin labeling (pCASL) study. *J Affect Disord* 165: 59-63, 2014.
 - 15) Hori H, Fujii T, Yamamoto N, Teraishi T, Ota M, Matsuo J, Kinoshita Y, Ishida I, Hattori K, Okazaki M, Arima K, Kunugi H: Temperament and character in remitted and symptomatic patients with schizophrenia: modulation by the COMT Val158Met genotype. *J Psychiatr Res* 56: 82-89, 2014.
 - 16) Ogawa S, Fujii T, Koga N, Hori H, Teraishi T, Hattori K, Noda T, Higuchi T, Motohashi N, Kunugi H: Plasma L-tryptophan concentration in major depressive disorder: new data and meta-analysis. *J Clin Psychiatry* 75: e906-e915, 2014.
 - 17) Teraishi T, Hori H, Sasayama D, Matsuo J, Ogawa S, Ishida I, Nagashima A, Kinoshita Y, Ota M, Hattori K, Kunugi H: Relationship between Lifetime Suicide Attempts and Schizotypal Traits in Patients with Schizophrenia. *PLoS One* 9: e107739, 2014.
 - 18) Fujii T, Ota M, Hori H, Hattori K, Teraishi T, Matsuo J, Kinoshita Y, Ishida I, Nagashima A, Kunugi H: The common functional FKBP5 variant rs1360780 is associated with altered cognitive function in aged individuals. *Sci Rep* 4: 6696, 2014.
 - 19) Fujii T, Ota M, Hori H, Hattori K, Teraishi T, Sasayama D, Higuchi T, Kunugi H: Association between the common functional FKBP5 variant (rs1360780) and brain structure in a non-clinical population. *J Psychiatr Res* 58, 96-101, 2014.
 - 20) Ota M, Sato N, Sakai K, Okazaki M, Maikusa N, Hattori K, Hori H, Teraishi T, Shimoji K, Yamada K, Kunugi H: Altered coupling of regional cerebral blood flow and brain temperature in schizophrenia compared with bipolar disorder and healthy subjects. *J Cereb Blood Flow Metab* 34: 1868-1872, 2014.
 - 21) Teraishi T, Hori H, Sasayama D, Matsuo J, Ogawa S, Ishida I, Nagashima A, Kinoshita Y,

- Ota M, Hattori K, Higuchi T, Kunugi H: Personality in remitted major depressive disorder with single and recurrent episodes assessed with the Temperament and Character Inventory. *Psychiatry Clin Neurosci* ; 69: 3-11, 2015.
- 22) Ogawa S, Hattori K, Sasayama D, Yokota Y, Matsumura R, Matsuo J, Ota M, Hori H, Teraishi T, Yoshida S, Noda T, Ohashi Y, Sato H, Higuchi T, Motohashi N, Kunugi H. Reduced cerebrospinal fluid ethanalamine concentration in major depressive disorder. *Sci Rep* ; 5: 7796, 2015.
- 23) 菊池美名子, 金吉晴: DSM-5におけるトラウマ・ストレス関連疾患の診断基準について. *心と社会*, 157 : 48-52, 2014.
- 24) 伊藤大輔, 中澤佳奈子, 加茂登志子, 氏家由里, 鈴木伸一, 金吉晴: 外傷後ストレス障害患者の症状と生活支障度に関する要因の比較検討—トラウマや症状に対する認知的評価, 対処方略を用いた検討—. *行動療法研究*, 41(1) : 19-29, 2015.

(2) 総説

- 1) Nakajima S: Bereavement and Grief Caused by the Great East Japan Earthquake. *ADEC Forum*40(2): 17-18, 2014.
- 2) 大沼麻実, 大滝涼子, 金吉晴: 災害直後のこころのケア - WHO 版心理的応急処置 (サイコソジカル・ファーストエイド) の支援とは. *看護教育* 55(9) : 902-907, 2014.
- 3) 中島聡美: 自死遺族の複雑性悲嘆に対する心理的ケア・治療. *精神科* 25(1) : 57-63, 7, 2014.
- 4) 栗山健一: PTSDと睡眠障害. さまざまな精神・神経疾患に伴う併存する睡眠障害 (治療法を含めて), *精神科* 24(6) : 626-632, 2014.
- 5) 栗山健一: 睡眠不足が情動・記憶に及ぼす影響. *ねむりとマネジメント*, 1(1) : 49-51, 2014.
- 6) 栗山健一: その不眠をどう治療するか、あるいは治療しないか—気分障害—. その患者に睡眠薬は必要か—眠れないという訴えにどう対応するか—, *精神科治療学* 29(11) : 1373-1379, 2014.
- 7) 吉池卓也, 栗山健一: 精神疾患と不眠. *Current Therapy*33(4) : 369-373, 2015.
- 8) 堀弘明, 功刀浩: 初発精神病エピソードの初回面接. *精神科治療学* 29 (7) : 911-917, 2014.
- 9) 吉池卓也, 上田 諭, 高橋正彦, 須田潔子, 古田 光, 小山恵子: 前頭葉症状が長年にわたって先行した進行性核上性麻痺の1臨床例. *精神神経学雑誌* 116(5) : 359-369, 2014.
- 10) 安藤久美子, 中澤佳奈子, 浅野敬子, 津村秀樹, 長沼洋一, 菊池安希子, 岡田幸之: わが国における触法精神障害者通院医療の現状: 2005~2013年の全国調査の分析から (特集 医療観察法とその周辺 : 症例と取り組み) . *臨床精神医学* 43(9) : 1293-1300, 2014.
- 11) 吉池卓也, 亀井雄一: 概日リズム睡眠障害 2) 睡眠相後退型と自由継続型の病態. *睡眠医療* 8: 191-196, 2014.

(3) 著書

- 1) 金吉晴: 21. PTSD. *POCKET 精神科 改訂2版*. 金芳堂, 京都, pp139-144, 2014.
- 2) 金吉晴: V災害精神医学. 野村総一郎, 樋口輝彦 監修, 尾崎紀夫, 朝田 隆, 村井俊哉 編: 標準精神医学 第6版. 医学書院, 東京, pp228-234, 2015.
- 3) 大沼麻実, 大滝涼子, 金吉晴: 第7章 PTSD. 貝谷久宣, 佐々木司, 清水栄司 編著: 不安症の事典 PARTII 不安症の診断・治療. 日本評論社, 東京, pp79-81, 2015.
- 4) 中島聡美: 大切な人を亡くした子どもへのグリーフケア. 第1回 グリーフケアとは. 少年写真新聞社: 体と心 保健総合大百科 保健ニュース・心の健康ニュース・縮刷活用版 2014年中・高校 編, 少年写真新聞社, 東京, p119, 2014.
- 5) 中島聡美: 大切な人を亡くした子どもへのグリーフケア. 第3回 自死遺族へのグリーフケア. 少年写真新聞社: 体と心 保健総合大百科 保健ニュース・心の健康ニュース・縮刷活用版 2014

- 年中・高校編，少年写真新聞社，東京，p121，2014.
- 6) 中島聡美：犯罪被害者支援とメンタルヘルス -性暴力被害者支援の取り組み。精神保健福祉白書編集委員会。精神保健福祉白書 2015 年版，中央法規，東京，p51，2014.
 - 7) 中島聡美：犯罪被害とストレス。丸山総一郎 編：ストレス学ハンドブック。創元社，東京，pp405-417，2015.
 - 8) 鈴木友理子，中島聡美：適応障害，他の特定される心的外傷およびストレス因関連障害，特定不能の心的外傷およびストレス因関連障害。神庭重信 総編集，三村将 編：DSM-5 を読み解く。伝統的精神病理，DSM-IV，ICD-10 をふまえた新時代の精神科診断 4。不安症群，強迫症および関連症群，心的外傷およびストレス因関連障害群，解離症群，身体症状症および関連症群。中山書店，東京，pp179-186，2014.
 - 9) 鈴木友理子：PTSD とは？。高橋清久 監修，有馬邦正，平林直次，古屋龍太 編／むさしの会 編集協力：Q&A でわかるこころの病の疑問 100 当事者・家族・支援者に役立つ知識。中央法規，東京，pp40-41，2014.
 - 10) 池田大樹：自己覚醒と日中の眠気への影響。白川修一郎，高橋正也 編：睡眠マネジメント ～産業衛生・疾病との係わりから最新改善対策まで～。株式会社エヌ・ティー・エス，東京，pp133-139，2014.
 - 11) 浅野敬子，小西聖子：性暴力被害者の支援と治療。榎本 稔 編著：性依存症の治療。金剛出版，東京，pp195-205，2014.

(4) 研究報告書

- 1) 金 吉晴：被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究。平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究（研究代表者：金 吉晴）」平成 24-26 年度総合研究報告書。pp3-11，2015.
- 2) 金 吉晴，林 明明，伊藤真利子，加茂登志子，小西聖子，中島聡美，下山晴彦，石丸径一郎，氏家由里，丹羽まどか，中山未知，廣幡小百合：心的外傷後ストレス障害に対する持続エクスポージャー療法の無作為比較試験。平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究（研究代表者：金 吉晴）」平成 24-26 年度総合研究報告書。pp15-24，2015.
- 3) 金 吉晴，河瀬さやか，中山未知，大滝涼子，荒川和歌子：持続エクスポージャー療法（Prolonged Exposure Therapy: PE）の普及体制の確立に関する研究。平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究（研究代表者：金 吉晴）」平成 24-26 年度総合研究報告書。pp25-28，2015.
- 4) 金 吉晴，大沼麻実，大滝涼子，井筒 節，堤 敦朗，菊池美名子：WHO 版心理的応急処置（サイコロジカル・ファーストエイド：PFA）の普及と研修成果に関する検証。平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究（研究代表者：金 吉晴）」平成 24-26 年度総合研究報告書。pp29-42，2015.
- 5) 金 吉晴，中谷 優：災害時地域精神保健医療活動ガイドライン改訂に関する研究。平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究（研究代表者：金 吉晴）」平成 24-26 年度総合研究報告書。pp43-49，2015.
- 6) 金 吉晴，林 明明，河瀬さやか，大滝涼子，伊藤真利子：感情の表出に関する尺度の標準化研究。

- 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究（研究代表者：金 吉晴）」平成 24-26 年度総合研究報告書. pp51-60, 2015.
- 7) 秋山 剛, 飯田敏晴, 岩谷 潤, 川口彰子, 金 吉晴 他：災害時の外国人支援ガイドライン案の作成. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究（研究代表者：金 吉晴）」平成 24-26 年度総合研究報告書. pp61-72, 2015.
- 8) 鈴木 満, 金 吉晴, 大滝涼子, 大沼麻実他：海外および国内の大規模緊急事態に共通する遠隔メンタルヘルス支援の現況と課題. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究（研究代表者：金 吉晴）」平成 24-26 年度総合研究報告書. pp73-83, 2015.
- 9) 山田幸恵, 中島聡美 他：被災地域におけるグリーフ・ケア研究 - 岩手県における実践から - . 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究（研究代表者：金 吉晴）」平成 24-26 年度総合研究報告書. pp143-153, 2015.
- 10) 神尾陽子, 金 吉晴, 大沼麻実：被災地の子どもの精神医療支援：東日本大震災のメディア報道による子どもたちのメンタルヘルスへの影響. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究（研究代表者：金 吉晴）」平成 24-26 年度総合研究報告書. pp205-215, 2015.
- 11) 神尾陽子, 金 吉晴, 森脇愛子：被災地の子どもの精神医療支援：災害時の避難所・仮設住宅における子どもとその家族のための生活環境と支援ニーズの実態調査およびガイドライン遵守のためのチェックリスト作成. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究（研究代表者：金 吉晴）」平成 24-26 年度総合研究報告書. pp217-229, 2015.
- 12) 加茂登志子, 金 吉晴, 伊藤史エ, 丹羽まどか, 中山未知 他：母親のうつ状態と子どもの問題行動について. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究（研究代表者：金 吉晴）」平成 24-26 年度総合研究報告書. pp231-236, 2015.
- 13) 金 吉晴：被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究（研究代表者：金 吉晴）」平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp3-9, 2015.
- 14) 金 吉晴, 林 明明, 伊藤真利子, 加茂登志子, 小西聖子, 中島聡美, 下山晴彦, 石丸徑一郎, 氏家由里, 丹羽まどか, 中山未知, 廣幡小百合：心的外傷後ストレス障害に対する持続エクスポージャー療法の無作為比較試験. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究（研究代表者：金 吉晴）」平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp13-22, 2015.
- 15) 金 吉晴, 鈴木 満, 井筒 節, 堤 敦朗, 荒川亮介, 大沼麻実, 菊池美名子, 小見めぐみ, 大滝涼子：WHO 版心理的応急処置（サイコロジカル・ファーストエイド：PFA）の普及と研修成果に

- 関する検証. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))) 「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究 (研究代表者: 金 吉晴)」平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp23-34, 2015.
- 16) 金 吉晴, 中谷 優: 災害時地域精神保健医療活動ガイドライン改訂に関する研究. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))) 「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究 (研究代表者: 金 吉晴)」平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp35-41, 2015.
- 17) 金 吉晴, 鈴木友理子, 深澤舞子: (資料) DPAT に関する意見の収集. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))) 「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究 (研究代表者: 金 吉晴)」平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp43-63, 2015.
- 18) 金 吉晴, 河瀬さやか, 中山未知, 大滝涼子, 丹羽まどか, 伊藤史エ, 堀 弘明, 伊藤真利子, 林明明 他: TFCBT の普及体制の確立に関する研究. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))) 「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究 (研究代表者: 金 吉晴)」平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp65-67, 2015.
- 19) 秋山 剛, 加藤 寛, 金 吉晴 他: 災害時の外国人支援ガイドライン案の作成. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))) 「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究 (研究代表者: 金 吉晴)」平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp69-75, 2015.
- 20) 山田幸恵, 中島聡美 他: 被災地における支援活動について - 「ふくしま心のケアセンター」3 年目の活動から -. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))) 「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究 (研究代表者: 金 吉晴)」平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp161-170, 2015.
- 21) 神尾陽子, 金 吉晴, 大沼麻実: 被災地の子どもの精神医療支援: 東日本大震災のメディア報道による子どもたちのメンタルヘルスへの影響. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))) 「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究 (研究代表者: 金 吉晴)」平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp207-212, 2015.
- 22) 神尾陽子, 金 吉晴, 森脇愛子: 被災地の子どもの精神医療支援: 災害時の避難所・仮設住宅における子どもとその家族のための生活環境と支援ニーズの実態調査およびガイドライン遵守のためのチェックリスト作成. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))) 「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究 (研究代表者: 金 吉晴)」平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp213-224, 2015.
- 23) 神尾陽子, 金 吉晴, 伊藤史エ, 丹羽まどか, 中山未知 他: 母親のうつ状態と子どもの問題行動について. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))) 「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究 (研究代表者: 金 吉晴)」平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp225-230, 2015.
- 24) 金 吉晴, 大滝涼子: 幼少期のトラウマによる複雑性 PTSD のための認知行動療法 STAIR (感情調整と対人関係調整スキルトレーニング) と NST (ナラティブ・ストーリィ・テリング) 治療プロトコルの検討. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業「認知行動療

法等の科学的エビデンスに基づいた標準治療の開発と普及に関する研究(研究代表者:大野 裕) 平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp107-121, 2015.

- 25) 吉池卓也, 中島聡美, 池田大樹, 大村英史, 栗山健一: 脳機能画像を用いた複雑性悲嘆の病態生理の検討. 先進医薬研究振興財団 2014 年度研究成果報告書(精神薬療分野一般研究助成研究成果報告書). pp18-19, 2015.3.
- 26) 鈴木友理子: 厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業)「東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究」平成 26 年度 分担研究報告書. (研究代表者 樋口輝彦) 2015.3.

(5) 翻訳

- 1) 金 吉晴, 小林由季, 大滝涼子, 大塚佳代: 青年期 PTSD の持続エクスポージャー療法 - 10 代のためのワークブック -. 星和書店, 東京, 2014.5. (Kelly R. Chrestman, Eva Gilboa-Schechtman, Edna B. Foa: Prolonged Exposure Therapy for PTSD. -Teen Workbook-, Oxford, 2009.)
- 2) 金 吉晴, 中島聡美, 小林由季, 大滝涼子: 青年期 PTSD の持続エクスポージャー療法 - 治療者マニュアル -. 星和書店, 東京, 2014.5. (Edna B. Foa, Kelly R. Chrestman, Eva Gilboa-Schechtman: Prolonged Exposure Therapy for Adolescents with PTSD. Emotional Processing of Traumatic Experiences. Therapist Guide, Oxford, 2009.)
- 3) 金 吉晴: PTSD ハンドブック - 科学と実践. 金剛出版, 東京, 2014.5. (Matthew J. Friedman, Terence M. Keane, Patricia A. Resick : Handbook of PTSD: Science and Practice, New York, 2007)
- 4) 中島聡美: 第 17 章 PTSD の心理社会的治療. マシュー・J・フリードマン, テレンス・M・キーン, パトリシア・A・レシック 編, 金 吉晴 監訳: PTSD ハンドブック—科学と実践, 金剛出版, 東京, pp311-338, 2014. (Matthew J. Friedman, Terence M. Keane, Patricia A. Resick eds.: Handbook of PTSD: Science and Practice. The Guilford Press, New York, 2007.)
- 5) 中島聡美: 第 3 部 悲嘆に焦点を当てた構成要素 3, 4. ジュディス・A・コーエン, アンソニー・P. マナリノ, エスター・デブリンジャー 著, 白川美也子, 菱川 愛, 富永良喜 監訳: トラウマと悲嘆の治療 ト라우マ・フォーカスト認知行動療法マニュアル. 金剛出版, 東京, pp229-248, 2014. (Judith A. Cohen, Anthony P. Mannmarino, Esther Deblinger eds.: Treating Trauma and Traumatic Grief in Children and Adolescents. Guilford publication, Inc. New York, 2006.)
- 6) 中島聡美: あいまいな喪失とトラウマからの回復. ポーリン・ボス 著, 中島聡美, 石井千賀子 監訳: 家族とコミュニティのレジリエンス. 誠信書房, 東京, 2015. (Boss P: Loss, Trauma, and Resilience : Therapeutic Work with Ambiguous Loss. W. W. Norton & Company, NY, 2006.)
- 7) 栗山健一: 第 9 章 PTSD の神経回路と神経可塑性. マシュー・J・フリードマン, テレンス・M・キーン, パトリシア・A・レシック 編, 金 吉晴 監訳, PTSD ハンドブック—科学と実践, pp152-163, 金剛出版, 東京, 2014. (Matthew J. Friedman, Terence M. Keane, Patricia A. Resick : Handbook of PTSD: Science and Practice. New York, 2007)
- 8) 堀 弘明: 第 19 章 PTSD に対する薬物療法. マシュー・J・フリードマン, テレンス・M・キーン, パトリシア・A・レシック 編, 金 吉晴 監訳, PTSD ハンドブック—科学と実践, pp354-382, 金剛出版, 東京, 2014. (Matthew J. Friedman, Terence M. Keane, Patricia A. Resick : Handbook of PTSD: Science and Practice, New York, 2007)

(6) その他

- 1) 金 吉晴: 【レクチャーシリーズ】用語集 24 シェルショック (Shell shock ; 砲弾恐怖症) . ト라우マティック・ストレス 12(1), p108, 2014.6.
- 2) 金 吉晴: 被災者支援 長い目で (新潟 心のケア学ぶ研修会) 【社会面】. 新潟日報モア, 2014.8.7.

- 3) 金吉晴: listening: 市民による被災者心のケア 震災後に脚光各地で研修実施. 毎日新聞(ネットニュース), 2014.8.21.
- 4) 金吉晴: 新潟 PTSD 対策専門研修会 東日本大震災の津波と原発事故による精神的影響について. 新潟県精神保健福祉協会こころのケアセンター発行, 2014.12.
- 5) 金吉晴: こころのケア国際シンポジウム 災害とこころのケア - 復興と心の回復 - 報告書. こころのケア国際シンポジウム実行委員会発行, 2015.3.
- 6) 金吉晴: 記者対象 PFA 研修開く. 新聞協会報 第4135号4面, 2015.3.3.
- 7) 金吉晴: ありがた迷惑な押し付け支援をしないために. 日経メディカル 私の視点, 2015.3.11.
- 8) 鈴木友理子, 深澤舞子, 池淵恵美, 後藤雅博, 種田綾乃, 永松千恵, 伊藤順一郎: 東日本大震災後のコミュニティと地域精神保健医療福祉システム再構築の課題— 支援者によるワールドカフェ方式の対話から—. 家族療法研究 31(1):110-114, 2014.
- 9) 栗山健一: 【眠りのコツ伝授】しんぶん赤旗(10面), 2014.5.16.
- 10) 栗山健一: 【体内時計、うまく使うには 7日、みやまで公開学術シンポ /福岡県】朝日新聞 朝刊, 2014.6.5.
- 11) 栗山健一: 眠りの超スキル. 寝る前の2時間が自分磨きのゴールデンタイムだった! 日経 Gooday. 2014.11.17. <http://gooday.nikkei.co.jp/atcl/report/14/091100017/111100002/>
- 12) 栗山健一: 【熟眠感がない】. 健康情報 日経ヘルス 特別編集版 p41-44 2015年春号.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Kim Y: International Symposium on Disaster Medical and Public Health Management: Review of the Hyogo Framework for Action, Washington D.C, 2014.5.20-24.
- 2) Kim Y: Disaster and alcohol-related mental problems-from reports 3years after the niigata-chuetsu earthquake. 16th international Society of Addiction Medicine Annual Meeting2014, Kanagawa, 2014.10.3.
- 3) Kim Y: Keynote3: 311 disaster and mental health countermeasures311. International Society for Traumatic Stress Studies(ISTSS) Hangzhou Conferene and the 2 Annual Conference of Zhejiang Behavior Medicine Society, Hangzhou, 2014.10.18.
- 4) Kim Y: 311 disaster and mental health countermeasures. Joint symposium 2014 Department of Psychiatry(The University of Melbourne) & National center of Neurology and Psychiatry, Melbourne, 2014.11.19.
- 5) Kim Y: Welcome remarks. Expert group meeting on mental well-being, disability and disaster risk reduction, Tokyo, 2014.11.27.
- 6) Kim Y: Mental health, disability and disasters: Experiences in Japan. Expert group meeting on mental well-being, disability and disaster risk reduction. Plenary session, Tokyo, 2014.11.27.
- 7) Kim Y: Integrating mental well-being and disability in disaster reduction: learning from experience in Japan. Expert group meeting on mental well-being, disability and disaster risk reduction, Tokyo, 2014.11.28.
- 8) V K Masfety, Kim Y: Symposium1 Trauma and Mental Health: introductory session(Chair). World Psychiatric Association Section on Epidemiology and Public Health-2014 Meeting, Nara, 2014.10.16.
- 9) Matsuoka Y, Hamazaki K, Nishi D, Yonemoto N, Noguchi H, Kim Y: The Role of High-Density Lipoprotein Cholesterol in Risk for PTSD. ISTSS 30th Annual Meeting. Physiological Aspects of Trauma, Florida, 2014.11.6.
- 10) Ohmura H, Ikeda H, Yoshiike T, Kim Y, Kuriyama K: Mood generator system with emotional

- musical mode based on probabilistic complexity and bias on the circle of fifth. The 1st International Workshop on Mood Engineering, Tsukuba, 2014.10.28.
- 11) Kamo T, Honda T, Yokota J, Mikami Y, Niwa M, Nakayama M, Ito F, Kim Y: Impact of sexual violence on mental health among women victimized by intimate partner violence. 6th World Congress on Women's Mental Health, Tokyo, 2015.3.23.
 - 12) Nakajima S: Complicated grief in women whose bereavement was caused by violent death. Symposium23 “Gender Based Violence and Trauma”, the 5th World Congress of Asian Psychiatry (WCAP2015), Fukuoka, 2015.3.5.
 - 13) Nakajima S: Complicated grief among women: From the perspective of attachment and caregiving. Symposium” Psychiatric treatment of traumatized women in Japan”, IAWMH2015, Tokyo, 2015.3.23.
 - 14) Suzuki Y, Yabe H, Yasumura S, Niwa S, Ohtsuru A, Mashiko H, Maeda M, Abe M on behalf of the Mental Health Group of the Fukushima Health Management Survey. Gender and age differences on psychological distress among evacuees of the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant accident: The Fukushima Health Management Survey. World Psychiatric Association Section on Epidemiology and Public Health-2014 Meeting, Symposium on Mental Health Consequences of Radiation Disasters, Nara, 2014.10.16-18.
 - 15) Suzuki Y, Fukasawa M: What is “Kokoro-no care”, or Mental health service and psychosocial support? The 5th World Congress of Asian Psychiatry. Challenges for Asian Psychiatry, Mental Health Consequences of Disaster, Fukuoka, 2015.3.3- 3.6.
 - 16) Kuriyama K: Neurocognitive Consequences of Sleep Deprivation. 日韓合同シンポジウム【JSSR-KSSM Joint Symposium Sleep loss and society】日本睡眠学会第39回定期学術集会, 徳島, 2014.7.3.
 - 17) 金 吉晴: 日本における認知処理療法の可能性. 第13回日本トラウマティック・ストレス学会 シンポジウム B-4, 福島, 2014.5.17.
 - 18) 金 吉晴: PTSD 治療困難例に対する持続性エクスポージャー療法と D-cycloserine. 第110回日本精神神経学会学術総会 シンポジウム 44, 神奈川, 2014.6.27.
 - 19) 金 吉晴: 委員会シンポジウム 18 来たるべき災害に必要な備えと支援は何か? 東日本大震災で津波被災した精神科病院での体験を通して考える. 第110回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.28.
 - 20) 金 吉晴, 秋山 剛: ワークショップ 21 災害時精神医療の経験と備え. 第110回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.28.
 - 21) 金 吉晴: シンポジウム 1 災害時における組織のマネジメント「災害直後のメンタル対応」. 日本災害看護学会第16回年次大会, 東京, 2014.8.19.
 - 22) 金 吉晴: PTSD の実際. 第14回日本認知療法学会・第18回日本摂食障害学会学術合同集会合同学会, 大阪, 2014.9.14.
 - 23) 金 吉晴: シンポジウム A「東日本大震災とメンタルヘルス」. 第57回日本病院・地域精神医学会総会, 宮城, 2014.10.31.
 - 24) 中島聡美, 伊藤正哉, 瀬藤乃理子, 鈴木友理子, 金 吉晴: 複雑性悲嘆の概念の変遷 -DSM-5 を踏まえて-. シンポジウム D-3 複雑性悲嘆の日本における実態と治療介入の実践. 第13回日本トラウマティック・ストレス学会, 福島, 2014.5.18.
 - 25) 成澤知美, 中島聡美, 吉田謙一, 辻村貴子, 金 吉晴: 検視及び司法解剖時の遺族への対応の現状と心理的影響 -遺族へのアンケート調査の結果から-. シンポジウム D-2 犯罪被害後の急性期における介入, 第13回日本トラウマティック・ストレス学会, 福島, 2014.5.18.
 - 26) 中島聡美: プライマリケア医のための PTSD 薬物療法ガイドライン・初期対応マニュアル. ランチ

- オンセミナー1「PTSDの薬物療法：適応拡大に関する学会要望とその結果について」, 第13回日本トラウマティック・ストレス学会, 福島, 2014.5.17.
- 27) 白井明美, 中島聡美, 小西聖子: 筆記を用いた複雑性悲嘆の認知行動療法の実践. シンポジウム D-3 複雑性悲嘆の日本における実態と治療介入の実践. 第13回日本トラウマティック・ストレス学会, 福島, 2014.5.18.
- 28) 大岡由香, 野坂祐子, 中島聡美: 子どもの被害者への急性期介入 ~民間支援団体の事例分析~. シンポジウム D-2 犯罪被害後の急性期における介入, 第13回日本トラウマティック・ストレス学会, 福島, 2014.5.18.
- 29) 鈴木友理子, 深澤舞子: 仙台市の児童生徒への心とからだの健康調査. 第13回日本トラウマティック・ストレス学会シンポジウム 東日本大震災後の, 仙台市の児童生徒への心のケア, 福島, 2014.5.17-18.
- 30) 栗山健一: 体内時計が記憶・学習に与える影響. 日本時間学会第6回大会 時間学公開学術シンポジウム, 福岡, 2014.6.7.
- 31) 栗山健一: 学習に影響を及ぼす環境因子. シンポジウム【睡眠が“からだ丸ごと”に与える様々な影響—睡眠研究者の視点から—】日本睡眠学会 第39回定期学術集会, 徳島, 2014.7.3.
- 32) 栗山 健一: D-サイクロセリンおよびバルプロ酸による恐怖再燃の予防効果. シンポジウム 34【精神神経疾患の新しい治療薬の展望】, 第36回日本生物学的精神医学会, 奈良, 2014.10.1.
- 33) 浅野敬子, 平川和子, 小竹久美子, 正木智子, 小西聖子: 性暴力救援センターから精神科へ紹介された被害者の実情に関する報告. 第13回日本トラウマティック・ストレス学会, 福島, 2014.5.17-18.

(2) 一般演題

- 1) Yoshiike T, Kuriyama K, Honma M, Ikeda H, Kim Y: Neuroticism facilitates daytime wakefulness and sleep devaluation via higher neural efficiency in the bilateral prefrontal cortex. 17th World Congress of Psychophysiology, Hiroshima, 2014.9.26.
- 2) Kuriyama K, Honma M, Yoshiike T, Kim Y: Suppression of Aversive Memory Interrupts Extinction of Fear Facilitated by Sleep Deprivation. XVI World Congress of Psychiatry, Madrid, 2014.9.15.
- 3) Snider L, Kim Y, Izutsu T, Tsutsumi A, Ohtaki R: Orienting emergency responders in Psychological first aid: techniques and resources. International Society for Traumatic Stress Studies. 30th Annual Meeting, Pre-meeting institutes, Florida, 2014.11.5.
- 4) Ito M, Kamo T, Kim Y, Yonemoto N, Ujiie Y, Nakayama M: Mother's dissociation with victims of intimate partner Violence has negative relationships on child's cognitive functioning: A prospective longitudinal study. ISTSS 30th Annual Meeting. Florida, 2014.11.6-8.
- 5) Lin M, Itoh M, Soi-Kawase S, Narita-Ohtaki R, Kim Y: Emotional expressivity is influenced by different factors across genders. 6th World Congress on Women's Mental Health, Tokyo, 2015.3.22-25.
- 6) Narisawa T, Nakajima S, Tsujimura T, Yoshida K, Kim Y: Perceived effect on the bereaved of the attitude of the personnel handling judicial autopsies. (poster), ISTSS 30th Annual Meeting, Florida, 2014.11.6.
- 7) Yoshiike T, Honma M, Ikeda H, Ohmura H, Kim Y, Kuriyama K: Bright light facilitates off-line consolidation of fear extinction and prefrontal ability to regulate fear in humans. The 21st Annual Meeting of Japanese Society for Chronobiology, Fukuoka, 2014.11.8-9.
- 8) Furukawa K, Hamano T, Ohmura H, Nakagawa R, Hoshi-Shiba R, Terasawa H: 'it's almost a song...' an audio-visual installation for using three EEG systems and Clarinet. Joint 40th International Computer Music Conference (ICMC) and 11th Sound and Music Computing

- (SMC), Athens, 2014.9.14-20.
- 9) Hamano T, Ohmura H, Nakagawa R, Terasawa H, Hoshi-Shiba R, Okanoya K, Furukawa K: Creating a place as a medium for musical communication using multiple electroencephalography. Joint 40th International Computer Music Conference (ICMC) and 11th Sound and Music Computing (SMC), Athens, 2014.9.16.
 - 10) 金 吉晴: ト라우マをめぐる臨床と研究の現状. 第 11 回月経関連医学研究会 特別講演, 東京, 2015.3.22.
 - 11) 金 吉晴: “外傷後ストレスと妊娠” ～過去のトラウマ (虐待) と精神健康障害が妊娠とホルモンの状態に与える影響. 第 11 回月経関連医学研究会 合同特別講演, 東京, 2015.3.22.
 - 12) 林 明明, 丹野義彦, 金 吉晴: ストレスの記憶強化効果における不安の個人差. 第 13 回日本トラウマティック・ストレス学会, 福島, 2014.5.17-18.
 - 13) 氏家由里, 伊藤真利子, 丹羽まどか, 長江信和, 林 明明, 加茂登志子, 金 吉晴: 日本語版 PTSD 診断尺度 (PDS) の妥当性—臨床群における検討. 第 13 回日本トラウマティック・ストレス学会, 福島, 2014.5.17-18.
 - 14) 吉池卓也, 本間元康, 池田大樹, 金 吉晴, 栗山健一: 恐怖消去学習における高照度光照射の有用性. 口頭発表・ポスター日本睡眠学会 第 39 回定期学術集会, 徳島, 2014.7.2-3.
 - 15) 吉池卓也, 本間元康, 池田大樹, 大村英史, 金 吉晴, 栗山健一: 神経症人格特性が覚醒促進および睡眠への不満をもたらす背景となる前頭皮質機能特性. 第 36 回日本生物学的精神医学会, 奈良, 2014.9.29.
 - 16) 林 明明, 丹野義彦, 金 吉晴: 学習後ストレスの効果へ認知スタイルが及ぼす影響. 日本心理学会 第 78 回大会, 京都, 2014.9.10-12.
 - 17) 林 明明, 相井さやか, 伊藤真利子, 大滝涼子, 金 吉晴: 感情表出・感情体験・感情抑制の傾向が抑うつに与える影響. 第 14 回日本認知療法学会・第 18 回日本摂食障害学会学術集会合同学会, 大阪, 2014.9.12-14.
 - 18) 大村英史, 池田大樹, 吉池卓也, 金 吉晴, 栗山健一: 五度圏に基づいた確率的複雑化と偏向化による情動的旋法を用いた音楽生成システム, 第 21 回先端芸術音楽創作学会研究会, 東京, 2014.9.28.
 - 19) 種田綾乃, 伊藤順一郎, 鈴木友理子, 深澤舞子, 永松千恵, 武田牧子, 樋口輝彦: 福島県における精神保健福祉サービス事業所利用者の生活実態: 震災にともなう生活の変化とニーズの実態. 日本精神障害リハビリテーション学会 第 22 回いわて大会, 岩手, 2014.10.30-11.1.
 - 20) 深澤舞子, 鈴木友理子, 種田綾乃, 永松千恵, 須藤康宏, 伊藤順一郎, 樋口輝彦: 東日本大震災被災地における精神障害者保健福祉手帳所持者の生活実態: 福祉等サービスの利用有無による比較. 日本精神障害リハビリテーション学会 第 22 回いわて大会, 岩手, 2014.10.30-11.1.
 - 21) 久保智英, 高橋正也, 劉欣欣, 東郷史治, 田中克俊, 島津明人, 池田大樹, 久保善子, 鎌田直樹, 上杉淳子: 労働者の Worktime control の変化が疲労と睡眠に及ぼす影響—客観指標を用いた 1 年間の追跡調査. 第 6 回日本臨床睡眠医学会学術集会, 兵庫, 2014.8.2.

(3) 研究報告会

- 1) 金 吉晴: 被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究. 厚生労働科学研究 (障害者対策総合研究推進事業 (精神障害, 神経・筋疾患分野)) 研究成果等普及啓発事業研究成果発表会, 東京, 2015.2.4.
- 2) 中島聡美: 複雑性悲嘆について. 第 1 回日本心療内科学会災害支援プロジェクト報告会および研修会, 東京, 2014.6.8.
- 3) 中島聡美, 伊藤正哉: 自死遺族の複雑性悲嘆とエビデンスに基づく支援・治療. 第 5 回 自殺リスクに関する研究会, 東京, 2015.2.15.
- 4) 吉池卓也, 中島聡美, 池田大樹, 大村英史, 栗山健一: 脳機能画像を用いた複雑性悲嘆の病態生理

の検討. 第47回先進医薬研究振興財団精神神経系薬物治療研究報告会, 大阪, 2014.12.5.

- 5) 堀 弘明: 非臨床人口における統合失調型パーソナリティ・気質・性格の潜在プロフィール分析: 認知機能との関連. 第10回統合失調症研究会, 東京, 2014.9.6.

(4) その他

- 1) 吉池卓也: Bright Light Facilitates Off-line Consolidation of Fear Extinction and Prefrontal Ability to Regulate Fear in Humans. 日本時間生物学会第21回学術大会 優秀ポスター賞. 2014.11.9.

C. 講演

- 1) Suzuki Y: Global mental health: Experience in Vietnam. Round table discussion on collaboration on global mental health research in Vietnam, Hanoi, 2014.8.5.
- 2) Suzuki Y: Mental Health First Aid in Japan. Mental Health First Aid workshop, Melbourne, 2014.12.5.
- 3) 金 吉晴: 東日本大震災後の精神保健医療の歩みを振り返る. 第13回日本トラウマティック・ストレス学会 パネルディスカッション, 福島, 2014.5.17.
- 4) 金 吉晴: 被災地における精神障害等に関する情報交換と今後の研究体制について. 自殺対策官民連携協働ブロック会議, 福島, 2014.6.20.
- 5) 金 吉晴: トラウマケア～臨床心理士が知っておくべき最新の知識. 大阪府臨床心理士会第22回総会・研修会, 大阪, 2014.6.22.
- 6) 金 吉晴: 東日本大震災の津波と原発事故による精神的影響について. 平成26年度新潟PTSD対策専門研究会, 新潟, 2014.8.6.
- 7) 金 吉晴: 新たなコミュニティづくりに向けて～住民と支援者の心のケア～. 第8回震災心のケア交流会みやぎ in 南三陸～明日へ向かう支援～, 宮城, 2014.9.5.
- 8) 金 吉晴: 慢性PTSDの持続エクスポージャー療法. 第3回Evidence Based Psychiatry研究会, 愛知, 2014.10.30.
- 9) 金 吉晴: 自然災害と精神医学 (DPATの現状について). 内閣官房副長官補 (事態対処・危機管理担当) 付職員勉強会, 東京, 2014.12.24.
- 10) 金 吉晴: 就職活動を元気で乗り切るためのストレス対策. 和洋女子大学就職活動対策セミナー, 千葉, 2015.1.27.
- 11) 金 吉晴: PTSDからの回復: 持続エクスポージャー療法の立場から. 森田療法研究会, 東京, 2015.1.31.
- 12) 金 吉晴: 災害とストレス関連疾患. 第24回若手精神科医のためのクロスカンファレンス, 東京, 2015.2.4.
- 13) 金 吉晴: 次に災害が起きたら. こころの防災市民フォーラム～第3回国連防災世界会議に向けて～, 宮城, 2015.2.7.
- 14) 金 吉晴: PTSDの理解と治療. 第7回日本不安症学会学術大会, 広島, 2015.2.15.
- 15) 金 吉晴: 被災地での被災者取材の記者の対応について. 日本医学ジャーナリスト協会例会, 東京, 2015.2.27.
- 16) 金 吉晴: 災害時における心のケア～チーム医療の中で看護師に期待すること～. 災害医療センター附属昭和の森看護学校卒業式記念講演, 東京, 2015.3.2.
- 17) 金 吉晴: 災害・緊急時の初期対応はどうあるべきか? 専門家へ「つなぐ」ことの意義. 国連防災世界会議パブリックフォーラム「子どもと養育者のための心理社会的ケア～子供にやさしい災害時の支援を考える～」, 宮城, 2015.3.14.
- 18) 金 吉晴: 災害時の精神保健医療対応. 被災者の心に寄り添うために～サイコロジカルファース

- トエイド：PFA～市民講座，東京，2015.3.18.
- 19) 中島聡美：悲嘆の理解とケア．大正大学 平成 26 年度心理臨床セミナー，東京，2014.7.6.
 - 20) 中島聡美：犯罪被害者の心理とケア．平成 26 年茨城県被害者支援連絡協議幹事会，茨城，2014.7.8.
 - 21) 中島聡美：自死遺族の悲嘆とケア．平成 26 年度こころサロン(自死遺族交流会)，岩手，2014.10.17.
 - 22) 中島聡美：被災者である教職員への心のケア ～震災 3 年を経て，喪失や支援者ストレスの理解と対応～．平成 26 年度 管理監督者メンタルヘルス特別セミナー，岩手，2014.12.12.
 - 23) 中島聡美：犯罪被害で大切な方を失った遺族への心理的ケア．グリーンケアを学ぶ講座，兵庫，2015.2.6.
 - 24) 鈴木友理子，深澤舞子：平成 26 年度心とからだの健康調査結果について．平成 26 年度仙台市児童生徒心のケア推進委員会，宮城，2014.10.30.
 - 25) 鈴木友理子：災害時のこころのケア．平成 26 年度岐阜県災害医療関係機関体制整備事業「岐阜県医師会 災害医療研修会」，岐阜，2015.3.1.
 - 26) 栗山健一：眠れていますか？～心地よく眠るためのヒケツとは～．足立区江北保健総合センター睡眠講演会，東京，2015.1.26.
 - 27) 栗山健一：眠りと健康～こころよく眠るための秘訣とは～．新宿区保健所精神保健講演会，東京，2014.6.16.
 - 28) 栗山健一：あなたの睡眠は大丈夫？～人生 3 分の 1 は睡眠．板橋区板橋健康福祉センター睡眠講演会，東京，2014.7.30.
 - 29) 栗山健一，大沢知隼：60 歳からのこころと身体のメンテナンス講座 ～体内時計をリセットして身体もこころも晴ればれ講座～．新宿区落合保健センター睡眠講演会，東京，2014.11.26.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) Kim Y: International Society for Traumatic Stress Studies 理事
- 2) Kim Y: World Psychiatric Association, Committee of psychopathology.
- 3) Suzuki Y: World Health Organization, Working Group on the Classification of Stress-Related Disorders. International Advisory Group for the Revision of ICD-10 Mental and Behavioral Disorders.
- 4) Suzuki Y: World Health Organization, Member of the International Health Regulations (2005) (IHR(2005)) Roster of Experts, expert in Mental Health (2012-2016).
- 5) 金 吉晴：日本トラウマティック・ストレス学会 常任理事.
- 6) 金 吉晴：日本精神神経学会 災害支援委員会委員，災害支援連絡会委員.
- 7) 金 吉晴：自殺予防学会 理事.
- 8) 金 吉晴：日本不安症学会 評議員.
- 9) 中島聡美：日本トラウマティック・ストレス学会 理事，副会長，犯罪被害者支援委員会委員長
- 10) 中島聡美：日本被害者学会理事 企画委員
- 11) 中島聡美：日本心理臨床学会 支援活動委員
- 12) 鈴木友理子：日本精神神経学会 アンチスティグマ委員．東日本大震災特別委員.
- 13) 鈴木友理子：日本トラウマティック・ストレス学会 理事．国際委員.
- 14) 栗山健一：日本時間生物学会 評議員.

(3) 座長

- 1) Kim Y: SY21 Medication treatment for women with depression, 6th World Congress on

Women's Mental Health, Tokyo, 2015.3.24.

- 2) Suzuki Y: World Psychiatric Association Section on Epidemiology and Public Health-2014 Meeting, Chair of the Free parallel session 2, Nara, 2014.10.16-18.
- 3) Xiang Dong Wang, Suzuki Y: Challenges for Asian Psychiatry, Mental Health Consequences of Disaster, The 5th World Congress of Asian Psychiatry. Fukuoka, 2015.3.3-3.6.
- 4) Cheng-Chung Chen, Suzuki Y: Activating Regional Mental Health Services with International Collaboration- Action between Vietnam and Taiwan, The 5th World Congress of Asian Psychiatry, Fukuoka, 2015.3.3-3.6.
- 5) 金 吉晴: 第 14 回トラウマ治療研究会 座長, 東京, 2014.9.12.
- 6) 加藤 寛, 金 吉晴: パネルディスカッション「こころのケアの連携を巡って」座長, こころのケア国際シンポジウム, 兵庫, 2014.12.1.
- 7) 鈴木友理子, 種田綾乃: 自主プログラム シンポジウム 被災地における支援者支援のメリットとデメリット, これからに向けて: 現地支援者からの発信 座長. 日本精神障害リハビリテーション学会 第 22 回いわて大会, 岩手, 2014.10.30-11.1.
- 8) 角谷 寛, 栗山健一: 【睡眠が“からだ丸ごと”に与える様々な影響—睡眠研究者の視点から—】シンポジウム 座長, 日本睡眠学会第 39 回定期学術集会, 徳島, 2014.7.3.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) Kim Y: Cognitive Neuropsychiatry, editorial board.
- 2) Kim Y: Psychiatry and Clinical Neuroscience, field editor.
- 3) Hori H: The Scientific World Journal, editorial board
- 4) Hori H: Frontiers in Psychiatry, editorial board
- 5) 金 吉晴: 日本トラウマティック・ストレス学会 編集委員長
- 6) 金 吉晴: 日本精神神経学会 編集委員
- 7) 栗山健一: 日本時間生物学会 学会誌 編集委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 金 吉晴: 子供向け心理的応急処置 (PFA) 指導者研修 (セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンとの共催). 東京, 2014.7.8-11.
- 2) 金 吉晴: 平成 26 年度 DPAT 先遣隊研修. 東京, 2014.7.20.
- 3) 金 吉晴: PTSD 持続エクスポージャー療法研修会. 東京, 2014.8.26-29.
- 4) 金 吉晴: 平成 26 年度災害派遣精神医療チーム (DPAT) 研修, 東京, 2015.1.11-1.12.
- 5) 金 吉晴: 平成 26 年度災害派遣精神医療チーム (DPAT) 研修, 東京, 2015.1.17-1.18.
- 6) 金 吉晴: 平成 26 年度 PTSD 対策専門研修事業 C. 大規模災害対策コース (一般医療関係者). 東京, 2015.2.2.
- 7) 金 吉晴: ジャーナリストのための PFA 研修 (心理的応急処置) ~被災者に寄り添う取材のために~. 東京, 2015.2.10.
- 8) 金 吉晴: 平成 26 年度 PTSD 対策専門研修事業 E.大規模災害対策コース サイコロジカル・ファーストエイド指導者育成研修. 東京, 2015.2.16-19.
- 9) 金 吉晴: 平成 26 年度 PTSD 対策専門研修事業 A. 通常コース (東京). 東京, 2015.2.23-24.
- 10) 金 吉晴: 平成 26 年度 PTSD 対策専門研修事業 D. 大規模災害対策コース サイコロジカル・ファーストエイド研修. 2015.2.25-26.
- 11) 金 吉晴: 平成 26 年度 PTSD 対策専門研修事業 B. 通常コース (大阪). 大阪, 2015.3.3-4.

(2) 研修会講師

- 1) Suzuki Y : Cross-sectional study. Epidemiological research training course VI-1. JICA partnership program. University of Medicine and Pharmacy, Ho Chi Minh City, 2014.8.6.
- 2) 金 吉晴 : PTSD 心理治療の新しい潮流. 第 11 回 Prolonged Exposure Therapy 講習会 (武蔵野大学), 東京, 2014.4.28.
- 3) 金 吉晴 : 講義 12 心理ケア (支援者, 受援者). 平成 26 年度第 1 回日本 DMAT 隊員養成研修, 東京, 2014.5.12.
- 4) 金 吉晴 : ト라우マの理解と PTSD 治療. 埼玉県臨床心理士会研修会, 埼玉, 2014.7.27.
- 5) 金 吉晴 : PTSD 持続エクスポージャー療法研修会. 東京, 2014.8.26-29.
- 6) 金 吉晴 : PTSD の持続エクスポージャー療法. 北海道トラウマ・解離研究会 日本臨床 MMPI 研究会 合同研修会 in Sapporo, 北海道, 2014.9.28.
- 7) 金 吉晴 : 災害時のこころのケアについて (こころのケアに関わる支援者として有すべき知識及びその心構えについて等). 平成 26 年度第 1 回奈良県災害時こころのケア活動に関する専門職研修会, 奈良, 2014.10.15.
- 8) 金 吉晴 : 災害時におけるこころのケア. 平成 26 年度 サイコロジカル・ファーストエイド (PFA) 研修会, 沖縄, 2014.12.5.
- 9) 金 吉晴 : 相談対応の基本姿勢について～WHO 版サイコロジカル・ファーストエイドを例にして～. 全国警察職員生活相談員研修会, 東京, 2014.12.12.
- 10) 金 吉晴 : 災害時の精神医療活動概観. 平成 26 年度災害派遣精神医療チーム (DPAT) 研修, 東京, 2015.1.11.
- 11) 金 吉晴 : 災害時の精神医療活動概観. 平成 26 年度災害派遣精神医療チーム (DPAT) 研修, 東京, 2015.1.17.
- 12) 金 吉晴 : PTSD の概念と治療 ①PTSD 治療の枠組み. 第 9 回犯罪被害者メンタルケア研修, 東京, 2015.1.21.
- 13) 金 吉晴 : PTSD の概念と治療 ②PTSD 治療アルゴリズム. 第 9 回犯罪被害者メンタルケア研修, 東京, 2015.1.21.
- 14) 金 吉晴 : 心理的応急処置 (サイコロジカル・ファーストエイド) 訓練. 平成 26 年度健康危機管理研修 (高度技術編), 埼玉, 2015.1.30.
- 15) 金 吉晴 : 災害時の心の反応 総論. 平成 26 年度 PTSD 対策専門研修事業 C. 大規模災害対策コース (一般医療関係者), 東京, 2015.2.2.
- 16) 金 吉晴, 大沼麻実 : WHO 版 PFA. 平成 26 年度 PTSD 対策専門研修事業 C. 大規模災害対策コース (一般医療関係者), 東京, 2015.2.2.
- 17) 金 吉晴, 大滝涼子 : 子どもの PFA・CFS. 平成 26 年度 PTSD 対策専門研修事業 C. 大規模災害対策コース (一般医療関係者), 東京, 2015.2.2.
- 18) 金 吉晴 : 基本原理. 平成 26 年度 PTSD 対策専門研修事業 E. 大規模災害対策コース サイコロジカル・ファーストエイド指導者育成研修, 東京, 2015.2.16.
- 19) 金 吉晴 : 災害シナリオ演習 2. 平成 26 年度 PTSD 対策専門研修事業 E. 大規模災害対策コース サイコロジカル・ファーストエイド指導者育成研修, 東京, 2015.2.16.
- 20) 金 吉晴 : コミュニケーションスキル. 平成 26 年度 PTSD 対策専門研修事業 E. 大規模災害対策コース サイコロジカル・ファーストエイド指導者育成研修, 東京, 2015.2.17.
- 21) 金 吉晴 : 教育実習準備 2. 平成 26 年度 PTSD 対策専門研修事業 E. 大規模災害対策コース サイコロジカル・ファーストエイド指導者育成研修, 東京, 2015.2.17.
- 22) 金 吉晴 : PFA 指導実習 1. 平成 26 年度 PTSD 対策専門研修事業 E. 大規模災害対策コース サイコロジカル・ファーストエイド指導者育成研修, 東京, 2015.2.18.
- 23) 金 吉晴 : PFA 指導実習 4. 平成 26 年度 PTSD 対策専門研修事業 E. 大規模災害対策コース サ

- イコロジカル・ファーストエイド指導者育成研修，東京，2015.2.18.
- 24) 金 吉晴：指導実習評価。平成26年度 PTSD 対策専門研修事業 E. 大規模災害対策コース サイコロジカル・ファーストエイド指導者育成研修，東京，2015.2.19.
- 25) 金 吉晴：継続研修体制討論。平成26年度 PTSD 対策専門研修事業 E. 大規模災害対策コース サイコロジカル・ファーストエイド指導者育成研修，東京，2015.2.19.
- 26) 金 吉晴：トラウマと PTSD の診断と評価。平成26年度 PTSD 対策専門研修事業 A. 通常コース（東京），東京，2015.2.23.
- 27) 金 吉晴：PTSD の認知行動療法。平成26年度 PTSD 対策専門研修事業 A. 通常コース（東京），東京，2015.2.24.
- 28) 金 吉晴：トラウマと PTSD の診断と治療。平成26年度 PTSD 対策専門研修事業 B. 通常コース（大阪），大阪，2015.3.3-4.
- 29) 中島聡美：PTSD とは。武蔵野大学心理臨床センター主催 第11回 Prolonged Exposure Therapy 講習会，東京，2014.4.26.
- 30) 中島聡美：PTSD とは。武蔵野大学心理臨床センター主催 第11回 Prolonged Exposure Therapy 講習会，東京，2014.4.26.
- 31) 中島聡美：犯罪被害者および遺族の心理とケア。警察庁 平成26年度 被害者カウンセリング研修，東京，2014.5.20.
- 32) 中島聡美：公共交通事故等の被害者および遺族の心理。国土交通省 平成26年度 専門課程 公共交通事故被害者等支援研修，千葉，2014.5.21.
- 33) 中島聡美：犯罪被害者および遺族の心理とケア。警察庁 平成26年度 被害者支援専科，東京，2014.6.23.
- 34) 中島聡美：PTSD の病態と治療について，被害者等の理解（1）性暴力被害者。いばらき被害者支援センター養成講座 初級編，茨城，2014.8.29.
- 35) 中島聡美：複雑性悲嘆の概念と治療。第14回トラウマ治療研究会，東京，2014.9.12.
- 36) 中島聡美：複雑性悲嘆の診断基準の変遷と治療動向。岩手県精神保健福祉センター 平成26年度 トラウマケア・フォローアップ研修，岩手，2014.10.17.
- 37) 中島聡美：災害で大切な方を失った遺族の理解とケアについて。広島市精神保健福祉センター主催「大切な方を失った遺族ケア」研修会，広島，2014.10.27.
- 38) 中島聡美：あいまいな喪失理論講義。行方不明者の家族、故郷に戻れない家族の支援～「あいまいな喪失」事例検討会，JDGS project 主催，福島，2014.11.22.
- 39) 中島聡美：犯罪被害者の心理と治療・支援。第9回犯罪被害者メンタルケア研修，東京，2015.1.19.
- 40) 中島聡美：DV 被害者への対応。第9回犯罪被害者メンタルケア研修，東京，2015.1.20.
- 41) 中島聡美：犯罪・災害の被害者遺族への長期的な支援。平成26年度 都道府県 臨床心理士会被害者支援担当者 研修会，岐阜，2015.1.31.
- 42) 中島聡美：性暴力被害者のメンタルヘルス，性暴力被害者への対応と治療（PTSD）について。性犯罪・性暴力被害者支援に係る相談員，支援員育成研修，群馬，2015.2.13.
- 43) 中島聡美：悲嘆。平成26年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 PTSD 専門研修，東京，2015.2.24.
- 44) 中島聡美：犯罪被害者の心理と支援・ケア。人質交渉に関する研修教養，東京，2015.2.27.
- 45) 中島聡美：悲嘆。平成26年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 PTSD 専門研修，大阪，2015.3.4.
- 46) 鈴木友理子，深澤舞子：平成26年度心とからだの健康調査結果について。仙台市教育委員会 平成26年度 第7回 心のケア研修会，宮城，2014.8.18.
- 47) 鈴木友理子：うつ病と自殺対応のメンタルヘルス・ファーストエイド。相模原市精神保健福祉センターゲートキーパ研修（窓口編），神奈川，2014.9.19.

- 48) 鈴木友理子：原子力災害とメンタルヘルス。福島県立医科大学附属病院性差医療センター 平成 26 年度 保健師等支援研修会，福島，2014.9.30.
- 49) 鈴木友理子：メンタルヘルスファーストエイドによる不安障害への初期対応。平成 26 年度ゲートキーパー・スキルアップ研修指導者養成講習会，島根，2014.11.15.
- 50) 鈴木友理子：成人学習理論。平成 26 年度ゲートキーパー・スキルアップ研修指導者養成講習会，島根，2014.11.15.
- 51) 鈴木友理子：精神保健，メンタルヘルス，こころのケア。相模原市精神保健福祉センター教育研修事業（課題別研修）「地域精神保健活動」，神奈川，2014.12.15.
- 52) 鈴木友理子：不安障害に関するメンタルヘルス・ファーストエイド。平成 26 年度北九州市自殺対策支援者研修 メンタルヘルス・ファーストエイドドジャパン研修会，福岡，2015.1.29-30.
- 53) 鈴木友理子：成人学習理論。平成 26 年度北九州市自殺対策支援者研修 メンタルヘルス・ファーストエイドドジャパン研修会，福岡，2015.1.29-30.

F. その他

- 1) 金 吉晴：心のケアチームから DPAT へ。平成 26 年度全国精神保健福祉センター長会定期総会，東京，2014.7.17.
- 2) 金 吉晴：災害時に精神医療が果たすべきこと。第 1 回 NCNP メディア塾，東京，2014.8.22.
- 3) 金 吉晴：スポンサードセッション A『災害時における「子どもにやさしい空間（Child Friendly Spaces-CFS）支援の意義と可能性：東日本大震災支援活動における試みから考える』企画。子ども虐待防止世界会議名古屋 2014，愛知，2014.9.14.
- 4) 金 吉晴：ビデオメッセージ（スポンサードセッション A『災害時における子どもにやさしい空間（Child Friendly Spaces-CFS）支援の意義と可能性：東日本大震災支援活動における試みから考える』）。子ども虐待防止世界会議名古屋 2014，愛知，2014.9.14.
- 5) 栗山健一：あなたの睡眠は大丈夫？～人生 3 分の 1 は睡眠。板橋区板橋健康福祉センター睡眠講演会，東京，2014.7.30.

7. 精神薬理研究部

I. 研究部の概要

精神薬理研究部では、当センター中期目標における位置づけを明確化し研究を進めている。具体的には、我が国において重要な政策課題となっているうつ病と自殺予防に焦点を当て、精神薬理学をバックボーンとする研究手法を用い、政策立案に必須となる臨床疫学研究を実施するとともに、精神神経疾患の診断・評価法、治療介入法の研究開発を行っている。研究成果は、患者、健常成人、実験動物、培養細胞等を対象とした生物学的研究から得られた知見をベッドサイド、ひいては日常臨床へと相互にトランスレーションするための基盤となる。

精神薬理研究部には精神薬理研究室と気分障害研究室の2室が所属している。平成26年度の常勤研究員は部長の山田光彦と精神薬理研究室長の斎藤顕宜の2名であり、気分障害研究室長は山田光彦が兼任した。流動研究員は、杉山 梓、後藤玲央の2名、科研費研究員は、山田美佐、外来研究員は、川島義高であった。客員研究員は、岡淳一郎（東京理科大学薬学部薬理学研究室教授）、長田賢一（聖マリアンナ医科大学神経精神科准教授）、亀井淳三（星薬科大学薬物治療学教室教授）、神庭重信（九州大学大学院医学研究員精神病態医学教授）、白川修一郎（睡眠評価研究機構代表者）、高原 円（福島大学共生システム理工学類准教授）、古川壽亮（京都大学大学院医学研究科教授）、米本直裕（エラスムス大学研究員）であった。研究生は、遠藤 香、神垣有美、高橋 弘、中井亜弓、西岡玄太郎、濱田幸恵、渡辺恭江、塚越麻衣、鈴木聡史、実習生は、早田暁伸であった。科研費研究助手は、松谷真由美、村松浩美であった。

II. 研究活動

1) 精神薬理研究室による基盤的創薬研究プロジェクト

グルタミン酸仮説、デルタ受容体仮説による病態モデル研究、行動薬理評価のバッテリーの開発と非臨床試験への応用、新規抗うつ薬シーズの探索研究等を実施した。（山田光彦、斎藤顕宜、山田美佐、杉山 梓、後藤玲央、塚越麻衣、鈴木聡史、早田暁伸）

2) 気分障害研究室による臨床研究プロジェクト

一般診療科におけるうつ病治療モデルの確立のための研究（山田光彦、斎藤顕宜）、うつ病の最適薬物治療戦略確立のための大型無作為比較試験（2,000症例規模の実践的多施設共同無作為化比較試験：SUN☺D）（山田光彦）、うつ病の難治化を克服するための研究（山田光彦、斎藤顕宜）等を実施した。

3) J-MISP groupによる自殺予防プロジェクト

複合的自殺プログラムの自殺企図予防効果に関する地域介入研究（212万人規模の多施設共同非無作為化地域介入比較研究：NOCOMIT-J）、自殺企図の再発防止に対する複合的ケースマネジメントの効果（914名の自殺企図者を対象の多施設共同無作為化比較試験：ACTION-J）等の運営に関与した。

4) JGIDA groupによるゲノム医学を活用した精神疾患に対する個別化治療法の開発

薬剤に対する反応性・副作用に関連した遺伝子多型を同定し、精神科疾患医療における個別化医療の実現、画期的治療薬開発そして発症脆弱性遺伝子解明を目指す研究を行った。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

- 1) 市民社会に対する一般的な貢献
 - ・ 市民講座, 保健所, 地方自治体等における講演会, マスメディア等にて普及啓発.
- 2) 専門教育面における貢献
 - ・ 日本精神神経薬理学会認定医・指導医・治験登録医, 日本臨床薬理学会認定医として, 昭和大学, 星薬科大学において精神医学の卒前卒後教育活動を実施. (山田光彦)
 - ・ 東京理科大学において精神薬理学の卒前卒後教育活動を実施. (斎藤顕宜)
- 3) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査, 委員会等への貢献
 - ・ 自殺予防総合対策センターと連携し内閣府及び厚労省の事業に貢献 (山田光彦)

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Sugiyama A, Nagase H, Oka J, Yamada M, Saitoh A: DOR2-selective but not DOR1-selective antagonist abolishes anxiolytic-like effects of the δ opioid receptor agonist KNT-127. *Neuropharmacology* 79: 314-320, 2014.
- 2) Sacai H, Sasaki-Hamada S, Sugiyama A, Saitoh A, Mori K, Yamada M, Oka J: The impairment in spatial learning and hippocampal LTD induced through the PKA pathway in juvenile-onset diabetes rats are rescued by modulating NMDA receptor function. *Neurosci Res* 81-82: 55-63, 2014.
- 3) Kawashima Y, Yonemoto N, Inagaki M, Yamada M: Prevalence of suicide attempters in emergency departments in Japan: A Systematic review and meta-analysis. *J Affect Disord* 163: 33-39, 2014.
- 4) Saitoh A, Ohashi M, Suzuki S, Tsukagoshi M, Sugiyama A, Yamada M, Oka J, Inagaki M, Yamada M: Activation of the prelimbic medial prefrontal cortex induces anxiety-like behaviors via N-Methyl-D-aspartate receptor-mediated glutamatergic neurotransmission in mice. *J Neurosci Res* 92(8):1044-1053, 2014.
- 5) Inagaki M, Kawashima Y, Kawanishi C, Yonemoto N, Sugimoto T, Furuno T, Ikeshita K, Eto N, Tachikawa H, Shiraishi Y, Yamada M: Interventions to prevent repeat suicidal behavior in patients admitted to an emergency department for a suicide attempt: A meta-analysis. *J Affect Disord* 175C:66-78, 2015.
- 6) Ohashi M, Saitoh A, Yamada M, Oka J, Yamada M: Riluzole in the prelimbic medial prefrontal cortex attenuates veratrine-induced anxiety-like behaviors in mice. *Psychopharmacology* 232(2):391-398, 2015.
- 7) Yamada M, Tsukagoshi M, Hashimoto T, Oka J, Saitoh A, Yamada M: Lysophosphatidic acid induces anxiety-like behavior via its receptors in mice. *J Neural Transm* 122(3): 487-494, 2015.
- 8) Iwai T, Jin K, Ohnuki T, Sasaki-Hamada S, Nakamura M, Saitoh A, Sugiyama A, Ikeda M, Tanabe M, Oka J: Glucagon-like peptide-2-induced memory improvement and anxiolytic

- effects in mice. *Neuropeptides* 49: 7-14, 2015.
- 9) Narishige R, Kawashima Y, Otaka Y, Saitoh T, Okubo Y: Gender differences in suicide attempters: a retrospective study of precipitating factors for suicide attempts at a critical emergency unit in Japan. *BMC Psychiatry* 14: 144, 2014.
 - 10) Kawanishi C, Aruga T, Ishizuka N, Yonemoto N, Otsuka K, Kamijo Y, Okubo Y, Ikeshita K, Sakai A, Miyaoka H, Hitomi Y, Iwakuma A, Kinoshita T, Akiyoshi J, Horikawa N, Hirotsune H, Eto N, Iwata N, Kohno M, Iwanami A, Mimura M, Asada T, Hirayasu Y, for the ACTION-J Group: Assertive case management versus enhanced usual care for people with mental health problems who had attempted suicide and were admitted to hospital emergency departments in Japan(ACTION-J): a multicentre, randomised controlled trial. *The Lancet Psychiatry* 1(3) 193-201, 2014.
 - 11) Sueki H, Yonemoto N, Takeshima T, Inagaki M: The impact of suicidality-related internet use: a prospective large cohort study with young and middle-aged internet users. *PloS One* 9(4): e94841, 2014.
 - 12) Mori-Yoshimura M, Oya Y, Yajima H, Yonemoto N, Kobayashi Y, Hayashi YK, Noguchi S, Nishino I, Murata M: GNE myopathy: a prospective natural history study of disease progression. *Neuromuscul Disord* 24(5): 380-386, 2014.
 - 13) Yamauchi T, Inagaki M, Yonemoto N, Iwasaki M, Inoue M, Akechi T, Iso H, Tsugane S; JPHC Study Group : Death by suicide and other externally caused injuries after stroke in Japan (1990-2010): the Japan Public Health Center-based prospective study. *Psychosom Med* 76(6): 452-459, 2014.
 - 14) Yamauchi T, Inagaki M, Yonemoto N, Iwasaki M, Inoue M, Akechi T, Iso H, Tsugane S; JPHC Study Group: Death by suicide and other externally caused injuries following a cancer diagnosis: the Japan Public Health Center-based Prospective Study. *Psychooncology* 23(9): 1034-1041, 2014.
 - 15) Wang H, Yonemoto N, Murray CJ; et al: Global, regional, and national levels of neonatal, infant, and under-5 mortality during 1990-2013: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2013. *Lancet* 384(9947): 957-979, 2014.
 - 16) Kassebaum NJ, Yonemoto N, Lozano R; et al: Global, regional, and national levels and causes of maternal mortality during 1990-2013: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2013. *Lancet* 384(9947):980-1004, 2014.
 - 17) Murray CJ, Yonemoto N, Vos T; et al: Global, regional, and national incidence and mortality for HIV, tuberculosis, and malaria during 1990-2013: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2013. *Lancet* 384(9947): 1005-1070, 2014.
 - 18) Mori-Yoshimura M, Hayashi YK, Yonemoto N, Nakamura H, Murata M, Takeda S, Nishino I, Kimura E: Nationwide patient registry for GNE myopathy in Japan. *Orphanet J Rare Dis* 9:150, 2014.

(2) 総説

- 1) 山田光彦：エビデンスに基づいたうつ病の薬物治療．臨床精神薬理 17(4)：572-578, 2014.
- 2) 山田光彦：うつ病の薬物療法を考える．臨床精神薬理 17(4)：598-601, 2014.
- 3) 古川壽亮, 下寺信次, 明智龍男, 山田光彦, 渡辺範雄, 稲垣正俊, 三木和平, 米本直裕, 小川雄右, 田近安蘭, 竹島 望, 篠原清美, 藤瀬 昇, 相澤明憲, 池田 学, 安元眞吾, 広田 進, 内村直尚, 岡本泰昌, 高石佳幸, 萬谷昭夫, 倉田健一, 山脇成人, 藤田博一, 窪内 肇, 森信 繁, 近藤真前, 加藤 正, 辻野尚久, 茅野 分, 水野雅文, 菅 心, 杉下和行, 笠井清登, 井上 猛, 伊藤かほり, 久住一郎 SUN-D 臨床試験グループ：展望 SUN-D 大うつ病に対する新規抗うつ剤の最適使用戦略を確立するための大規模無作為割り付け比較試験．精神医学 56(6)：477-489, 2014.
- 4) 大野 裕, 酒井明夫, 大塚耕太郎, 栗田主一, 岩佐博人, 石田 康, 宇田英典, 亀井雄一, 中村純, 本橋 豊, 田島美幸, 米本直裕, 稲垣正俊, 山田光彦, 高橋清久：「複合的自殺対策プログラムの自殺企図予防効果に関する地域介入研究 NOCOMIT-J」を終了して：研究成果と今後の課題．ストレス科学 29(1)：1-17, 2014.
- 5) 河西千秋, 川島義高, 衛藤暢明, 山田光彦：自殺対策のための戦略研究 ACTION-J：post-ACTION-J の現状と課題．自殺予防と危機介入 35(1)：18-19, 2015.
- 6) 斎藤顕宜, 山田光彦：うつ病研究における海外の動向 各種補助療法-ケタミンを中心に-．Depression Frontier13(1)61-67, 2015.

(3) 著書

- 1) 山田光彦 (分担執筆)：南山堂 医学大辞典 第 20 版, 南山堂, 東京, 2015.

(4) 研究報告書

- 1) 山田光彦：自殺対策のための効果的な介入手法の普及に関する研究 (平成 26 年度 総括・分担研究報告書)．平成 26 年度 厚生労働省研究費補助金 (障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))．研究代表者
- 2) 山田光彦：自殺対策のための効果的な介入手法の普及に関する研究 (平成 24 年度～26 年度 総合研究報告書)．平成 26 年度 厚生労働省研究費補助金 (障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))．研究代表者
- 3) 山田光彦：気分障害の病態解明と診断治療法の開発に関する研究 (平成 24 年度～26 年度 総括研究報告書)．平成 26 年度 精神・神経疾患研究開発費．主任研究者

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 斎藤顕宜, 山田美佐, 大橋正誠, 鈴木聡史, 山田光彦：マイクロダイアリシス法の利点を活かしたストレス関連研究の可能性：マウス内側前頭前野における情動調節機序を探る．分子のささやきを聴くマイクロダイアリシス研究 マイクロダイアリシス研究のあゆみと展開．マイクロダイアリシス研究会 25 周年記念誌 pp97-105, 2014.

B. 学会・研究会における発表**(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等**

- 1) 山田光彦, 稲垣正俊, 高橋清久: 自殺対策のための戦略研究: その背景と目的. 第110回日本社会精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.26-28.
- 2) 大塚耕太郎, 岩佐博人, 本橋 豊, 石田 康, 栗田主一, 中村 純, 亀井雄一, 米本直裕, 山田光彦, 稲垣正俊, 高橋清久, 田島美幸, 宇田英典, 酒井明夫, 大野 裕: NOCOMIT-J の活動と成果. 第110回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.26-28.
- 3) 山田光彦, 稲垣正俊, 高橋清久: 自殺対策のための戦略研究: その背景と目的. 第11回日本うつ病学会総会, 広島, 2014.7.18-19.
- 4) 大塚耕太郎, 岩佐博人, 本橋 豊, 石田 康, 栗田主一, 中村 純, 亀井雄一, 米本直裕, 山田光彦, 稲垣正俊, 高橋清久, 酒井明夫, 大野 豊: NOCOMIT-J: その実務と成果. 第11回日本うつ病学会総会, 広島, 2014.7.18-19.
- 5) 山田光彦, 稲垣正俊, 高橋清久: 自殺対策のための戦略研究の概要「戦略研究 NOCOMIT-J: 成果と展望」. 第38回日本自殺予防学会総会, 福岡, 2014.9.11-13.
- 6) 大塚耕太郎, 岩佐博人, 本橋 豊, 石田 康, 栗田主一, 中村 純, 亀井雄一, 米本直裕, 山田光彦, 稲垣正俊, 高橋清久, 酒井明夫, 大野 裕: NOCOMIT-J の取組と成果, 今後の対策や被災地での取り組み「戦略研究 NOCOMIT-J: 成果と展望」. 第38回日本自殺予防学会総会, 福岡, 2014.9.11-13.
- 7) 川島義高, 米本直裕, 稲垣正俊, 河西千秋, 山田光彦: 日本の救急医療現場における自殺未遂者支援の現状「自殺対策のための戦略研究 ACTION-J: post-ACTION-J の現状と課題」. 第38回日本自殺予防学会総会, 福岡, 2014.9.11-13.
- 8) 山田光彦, 稲垣正俊, 高橋清久: 自殺対策のための戦略研究: その経緯と背景について「自殺対策のための戦略研究 ACTION-J: post-ACTION-J の現状と課題」. 第38回日本自殺予防学会総会, 福岡, 2014.9.11-13.
- 9) 衛藤暢明, 川島義高, 杉本達哉, 河西千秋, 古野 拓, 米本直裕, 池下克実, 稲垣正俊, 太刀川弘和, 大塚耕太郎, 安東友子, 山田光彦: Post ACTION-J ケース・マネージャー研修会を通じた人材養成について「自殺対策のための戦略研究 ACTION-J: post-ACTION-J の現状と課題」. 第38回日本自殺予防学会総会, 福岡, 2014.9.11-13.
- 10) 斎藤顕宜, 山田光彦: δ オピオイド神経系と恐怖・不安. 第36回日本生物学的精神医学会／第57回日本神経化学学会大会, 奈良, 2014.9.29-10.1.
- 11) 斎藤顕宜, 山田光彦: オピオイド δ 受容体作動薬の抗うつ病/抗不安様作用. 第88回日本薬理学会年会, 愛知, 2015.3.18-20.

(2) 一般演題

- 1) Yamada M, Ohashi M, Suzuki S, Tsukagoshi M, Sugiyama A, Oka J, Inagaki M, Yamada M, Saitoh A: The activation of glutamatergic neuronal transmission in the prelimbic medial prefrontal cortex induces depression/anxiety-like behaviors in mice. International Society for Affective Disorders Integrated Approaches for the 21st Century, Berlin Germany, 2014.4.28-30.

- 2) Kawashima Y, Yonemoto N, Ingaki M, Yamada M: Psychiatric disorders in suicide attempters admitted to emergency department in Japan: a systematic review and meta-analysis.15th European Symposium on Suicide and Suicidal Behaviour, Tallinn Estonia, 2014.8.27-30.
- 3) 渡辺範雄, 山田光彦, 米本直裕, 下寺信次, 三木和平, 明智龍男, 稲垣正俊, 古川壽亮: 新世代抗うつ薬の最適使用戦略: 実践的多施設共同無作為割り付け対照試験 SUN-D study 経過報告. 第 110 回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.26-28.
- 4) 塚越麻衣, 山田美佐, 岡淳一郎, 斎藤顕宜, 山田光彦: 脳室内投与されたリゾホスファジン酸は受容体を介してマウスの不安様行動を誘発する. 第 130 回日本薬理学会関東部会, 東京, 2014.7.5.
- 5) 鈴木聡史, 斎藤顕宜, 大橋正誠, 塚越麻衣, 杉山 梓, 山田美佐, 岡淳一郎, 稲垣正俊, 山田光彦: 内側前頭前野前辺縁皮質領域における NMDA 受容体を介したグルタミン酸神経伝達系の亢進は不安様行動を誘発する. 第 130 回日本薬理学会関東部会, 東京, 2014.7.5.
- 6) 稲垣正俊, 大槻露華, 米本直裕, 川島義高, 斎藤顕宜, 及川雄悦, 黒澤美枝, 村松公美子, 古川壽亮, 山田光彦: 地方郡部に位置するかかりつけ病院内科外来における大うつ病・希死念慮の有病(症)率および Patient Health Questionnaire-9 の性能: 層化抽出による横断調査. 第 11 回日本うつ病学会総会, 広島, 2014.7.18-19.
- 7) 稲垣正俊, 長 健, 大槻露華, 原田千恵美, 畠山みゆき, 三宅潤子, 光成郁子, 五阿弥倫子, 山田光彦: 地域のかかりつけ医療機関におけるうつ病の発見と継続的ケアモデル実践例の後方視的検討. 第 11 回日本うつ病学会総会, 広島, 2014.7.18-19.
- 8) 小高真美, 高井美智子, 引土絵未, 岡田澄恵, 渡辺恭江, 福島喜代子, 稲垣正俊, 山田光彦, 竹島 正: ソーシャルワーカー養成課程における自殺予防教育の取り組み状況および実施要件に関する研究. 第 38 回日本自殺予防学会総会, 福岡, 2014.9.11-13.
- 9) 後藤玲央, 斎藤顕宜, 塚越麻衣, 山田美佐, 岡淳一郎, 山田光彦: 気分障害における脂質メディエーター リゾホスファチジン酸の役割についての検討. 第 33 回躁うつ病の薬理・生化学的研究懇話会, 福岡, 2014.10.17-18.
- 10) 鈴木聡史, 斎藤顕宜, 大橋正誠, 山田美佐, 稲垣正俊, 岡淳一郎, 山田光彦: ラモトリギンはマウス内側前頭前野前辺縁皮質領域のグルタミン酸神経伝達を抑制して抗不安様作用を示す. 第 24 回日本臨床精神神経薬理学会・第 44 回日本神経精神薬理学会 合同年会, 愛知, 2014.11.20-22.
- 11) 杉山 梓, 斎藤顕宜, 稲垣正俊, 岡淳一郎, 山田光彦: リルゾールは文脈的恐怖記憶の消去を促進する. 第 24 回日本臨床精神神経薬理学会・第 44 回日本神経精神薬理学会 合同年会, 愛知, 2014.11.20-22.
- 12) 塚越麻衣, 山田美佐, 岡淳一郎, 斎藤顕宜, 山田光彦: 脂質メディエーターリゾホスファチジン酸がマウスの情動行動に及ぼす影響. 第 24 回日本臨床精神神経薬理学会・第 44 回日本神経精神薬理学会 合同年会, 愛知, 2014.11.20-22.
- 13) 川島義高, 米本直裕, 稲垣正俊, 山田光彦: 日本の救急施設における自殺未遂者の割合: 系統的レビューとメタアナリシス. 第 27 回日本総合病院精神医学会総会, 茨城, 2014.11.28-29.
- 14) 斎藤顕宜, 鈴木聡史, 早田暁伸, 岡淳一郎, 山田光彦: マウス内側前頭前野前辺縁皮質領域のグルタミン酸神経伝達系を介した不安様行動に対するオピオイド δ 受容体作動薬 KNT-127 の

影響. 第 25 回マイクロダイアリシス研究会, 東京, 2014.12.20.

- 15) 杉山 梓, 斎藤顕宜, 岡淳一郎, 長瀬 博, 山田光彦: δ オピオイド受容体作動薬 KNT-127 の新規曝露療法併用薬としての可能性. 第 88 回日本薬理学会年会, 愛知, 2015.3.18-20.
- 16) 鈴木聡史, 斎藤顕宜, 山田美佐, 岡淳一郎, 山田光彦: マウスの不安様行動における内側前頭前野下辺縁皮質領域の役割について. 第 88 回日本薬理学会年会, 愛知, 2015.3.18-20.

(3) 研究報告会

- 1) Sugiyama A, Saitoh A, Inagaki M, Oka J, Yamada M: Riluzole as a novel candidate agent to treat anxiety disorders. MPI-NCNP 合同シンポジウム, 神奈川, 2014.11.5-7.
- 2) 鈴木聡史, 斎藤顕宜, 早田暁伸, 山田美佐, 後藤玲央, 杉山 梓, 塚越麻衣, 岡淳一郎, 山田光彦: オピオイド δ 受容体作動薬はマウス内側前頭前野前辺縁皮質領域のグルタミン酸神経系を制御し不安様行動を改善する. 平成 26 年度精神・神経疾患研究開発費 (気分障害の病態解明と診断治療法の開発に関する研究(24-2)) 精神疾患関連研究班報告会, 東京, 2014.11.13.
- 3) 杉山 梓, 斎藤顕宜, 山田美佐, 後藤玲央, 塚越麻衣, 鈴木聡史, 早田暁伸, 岡淳一郎, 山田光彦: リルゾールは恐怖記憶の消去学習を促進する. 平成 26 年度精神・神経疾患研究開発費 (気分障害の病態解明と診断治療法の開発に関する研究(24-2)) 精神疾患関連研究班報告会, 東京, 2014.11.13.
- 4) 濱田幸恵, 飯島崇裕, 杉山 梓, 斎藤顕宜, 山田光彦, 岡淳一郎: 扁桃体を介したリルゾールの抗不安作用. 平成 26 年度精神・神経疾患研究開発費 (気分障害の病態解明と診断治療法の開発に関する研究(24-2)) 精神疾患関連研究班報告会, 東京, 2014.11.13.
- 5) 斎藤顕宜, 山田美佐, 塚越麻衣, 後藤玲央, 岡淳一郎, 樋口輝彦, 山田光彦: リゾホスファチジン酸シグナル伝達系の新規創薬ターゲット及びバイオマーカーとしての可能性についての検討. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成 26 年度研究報告会, 東京, 2015.3.9.
- 6) 杉山 梓, 斎藤顕宜, 岡淳一郎, 山田光彦: リルゾールの新規曝露療法併用薬としての可能性. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成 26 年度研究報告会, 東京, 2015.3.9.
- 7) 塚越麻衣, 山田美佐, 後藤玲央, 岡淳一郎, 斎藤顕宜, 山田光彦: リゾホスファチジン酸シグナル伝達系の情動行動に及ぼす検討. 第 24 回神経行動薬理若手研究者の集い, 愛知, 2015.3.17.

(4) その他

C. 講演

D. 学会活動

(1) 学会役員

- 1) 山田光彦: 日本薬理学会 評議員
- 2) 山田光彦: 日本臨床精神神経薬理学会 評議員
- 3) 山田光彦: 日本うつ病学会 評議員
- 4) 山田光彦: 日本神経精神薬理学会 評議員
- 5) 山田光彦: Mayo Neuroscience Forum 地区幹事

- 6) 山田光彦：躁うつ病の薬理生化学的研究懇話会 幹事
- 7) 山田光彦：Japanese Genetics Initiative for Drug Abuse : JGID group 幹事
- 8) 斎藤顕宜：日本薬理学会 評議員
- 9) 斎藤顕宜：日本神経精神薬理学会 評議員
- 10) 斎藤顕宜：鎮痛薬オピオイドペプチド研究会 世話人

(2) 座長

- 1) 山田光彦：シンポジウム6「自殺対策のための戦略研究 ACTION-J: post-ACTION-J の現状と課題」. 第38回日本自殺予防学会総会, 福岡, 2014.9.11-13.
- 2) 山田光彦：国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成26年度 研究報告会, 東京, 2015.3.9.
- 3) 山田光彦：オピオイドδ受容体をターゲットとした新規治療薬創薬の最前線. 第88回日本薬理学会年会, 愛知, 2015.3.18-20.
- 4) 斎藤顕宜：24-2 気分障害の病態解明と診断治療法の開発に関する研究. 平成26年度 精神・神経疾患研究開発費 精神疾患関連研究班報告会, 東京, 2014.11.13.

(3) 学会誌編集委員等

- 1) 山田光彦：分子精神医学 編集同人
- 2) 山田光彦：日本臨床薬理学会 認定医
- 3) 山田光彦：日本臨床精神神経薬理学会 専門医
- 4) 山田光彦：日本臨床精神神経薬理学会 指導医
- 5) 山田光彦：日本臨床精神神経薬理学会 治験登録医
- 6) 山田光彦：日本精神神経学会 専門医

E. 研修

(1) 研修企画

(2) 研修会講師

- 1) 山田光彦, 川島義高, 米本直裕, 稲垣正俊, 河西千秋, 他：ACTION-J ケース・マネジメント講習会. 大阪, 2014.8.2-3.
- 2) 山田光彦, 川島義高, 米本直裕, 稲垣正俊, 河西千秋, 他：ACTION-J ケース・マネジメント講習会. 東京, 2014.11.23-24.
- 3) 河西千秋, 大塚耕太郎, 張 賢徳, 太刀川弘和, 稲垣正俊, 池下克実, 下田重朗, 岸本智美, 安東友子, 井上佳祐, 川島義高：自殺予防研修会 複雑事例を通して学ぶ自殺予防のエッセンシャル. 第11回日本うつ病学会総会, 広島, 2014.7.18-19.
- 4) 川島義高：厚生労働省主催「自殺未遂者ケア研修 (一般救急版)」ワークショップ. 成果物発表とディスカッション, 東京, 2015.1.25.

F. その他

8. 社会精神保健研究部

I. 研究部の概要

社会精神保健研究部は昭和27年の国立精神衛生研究所創立時の5部の1つとしてスタートし、昭和61年の国立精神・神経センター統合の際に3研究室を有する社会精神保健部となり、平成22年に独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会精神保健研究部となった。所掌事項は「精神疾患と精神保健に関する社会文化的要因との関係」に関する調査及び研究を行うことである。

当研究部では、すべての国民が質の高い精神科医療をどの医療機関でも受けることができるように、医療機関の評価と医療の質の均てん化に関する多施設臨床研究を、高度専門医療センターにおいて実施している。具体的には、研究に関心のある臨床家が参画して、保健医療サービス研究の手法を用いて、身体疾患と精神疾患との融合領域研究、管理研究（医療の質に関する研究）および政策研究を実施している。平成24年度から国立高度専門医療研究センターとの共同で実施する「身体疾患患者へのメンタルケアモデル開発に関するナショナルプロジェクト」を開始した。

当研究部には、社会福祉研究室（山之内芳雄 室長：平成27年3月まで）、社会文化研究室（伊藤弘人 部長併任）、家族・地域研究室（堀口寿広 室長）がある。また、流動研究員（大森由実、三宅美智）および非常勤研究員（橋本 塁、田波由佳：平成26年9月まで、池野 敬、佐藤真希子：平成27年3月まで）が当研究部に配属され、研究に従事してきた。なお、臨床での問題意識からの多施設臨床研究を実施すべく、精神科・循環器科・内科医療に従事する専門家等が当研究部の研究に参画している（石井美緒、石黒陽子、大塚豪士、小川朝生、奥村泰之、金森恭子、上村智子、川畑俊貴、木村真人、小林美亜、末安民生、杉浦伸一、杉山直也、野田寿恵、八田耕太郎、平田豊明、松本 洋、三澤史斉、宮地元彦、村松公美子、安井博規）。

II. 研究活動

1) 身体疾患と精神疾患に関する研究

- 循環器疾患：国立循環器病研究センター、久留米大学、日本医科大学、名古屋大学、東京女子医科大学、早稲田大学、日本循環器心身医学会の専門家とともに、循環器疾患と精神疾患に関する研究計画の策定及び研究の実施（横山広行、内山直尚、水野杏一、木村宏之、志賀 剛、鈴木 豪、鈴木伸一、大森由実、伊藤弘人）。
- 糖尿病：国立国際医療研究センター及び糖尿病専門医療機関の専門家とともに、糖尿病と精神疾患に関する研究の実施（峯山智佳、野田光彦、大森由実、伊藤弘人）。
- 精神科と身体科等との連携マニュアルと地域連携クリティカルパスの開発（三宅康史、小川朝生、木村真人、野田光彦、数井裕光、稲垣正俊、山本賢司、平田健一、熊野宏昭、堀口寿広、大森由実、伊藤弘人）。

2) 薬剤処方・行動制限の最適化に関する研究（医療の質に関する研究）

- 抗精神病薬多剤大量処方の安全で効果的な是正の普及（山之内芳雄）。

3) 政策研究

- 医療法第6次改正を根拠とした医療計画における精神疾患に係る計画策定の状況に関する研究（堀口寿広、山之内芳雄、伊藤弘人）。
- 健康日本21(第二次)こころの健康・休養の普及に関する研究（山之内芳雄、大森由実、伊藤弘人）。
- 行政主導の自殺未遂者対応の地域づくりに関する研究（山之内芳雄）。
- 精神科重症入院患者のクリニカルパスと地域連携に関する研究（堀口寿広、伊藤弘人）。
- 障害者虐待防止法の施行状況に関する研究（堀口寿広）。

III. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・ 愛知県司法書士会主催の自殺未遂者対応講演（開催日：7月6日）（山之内芳雄）。

- ・重症心身障害児生活支援協議会を組織し、重症心身障害児の地域移行を促進するためインクルーシブ保育をモデル事業（厚生労働省障害福祉課）にて実践した（堀口寿広）。
- 2) 専門教育面における貢献
 - ・韓国, シンガポールの医療関係者への病院紹介と研究プロジェクトに関する意見交換を行った（伊藤弘人）。
 - ・愛知県庁および愛知県下保健所において自殺未遂者対策の地域づくりに関する講演。2014.10.3～2015.2.20.（山之内芳雄）
 - ・クリティカルパスに関して公益社団法人日本精神科病院協会主催通信教育事業第 34 回上級コーススクーリング講師として専門看護師等を対象とした講義を実施（堀口寿広, 伊藤弘人）。
- 3) 精研の研修の主催と協力
 - ・第 8 回精神科医療評価・均てん化研修（山之内芳雄, 伊藤弘人）
- 4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査, 委員会等への貢献
 - ・WHO 自殺対策関連行事に参画（伊藤弘人）。
 - ・APEC メンタルヘルス会議への参画（伊藤弘人）。
 - ・厚生労働省「長期入院精神障害者の地域移行に向けた具体的方策に係る検討会」への参画（伊藤弘人）。
 - ・厚生労働省「適切な向精神薬使用の推進や精神疾患患者の地域移行と地域定着の推進等を含む精神医療の実施状況調査」調査検討委員会 委員（伊藤弘人）。
 - ・厚生労働省「精神障害者に対する医療の提供を確保するための指針等に関する検討会」構成員（伊藤弘人）。
 - ・愛知県自殺未遂者支援地域連携事業会議構成員（山之内芳雄）。
 - ・WHO の Mental Health Atlas の報告データ作成と報告を実施した（堀口寿広）。
 - ・山梨県障害者幸任条例改正検討委員会に合理的配慮に関する調査報告書を参考資料として提供した（堀口寿広）。
- 5) センター内における臨床的活動
なし
- 6) その他
なし

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Ito H, Hattori H, Kazui H, Taguchi M, Ikeda M: Integrating psychiatric services into comprehensive dementia care in the community. *Open J Psychiatry* 5 (2): 129-136, 2015.
- 2) Yamanouchi Y, Sukegawa T, Inagaki A, Inada T, Yoshio T, Yoshimura R, Iwata N: Evaluation of the individual safe correction of antipsychotic agent polypharmacy in Japanese patients with chronic schizophrenia: validation of safe corrections for antipsychotic polypharmacy and the high-dose method. *Int J Neurosychopharmacol* 18(5): 1-8, 2015.
- 3) Ikeno T, Kugiyama K, Ito H: Antipsychotic medication and risk of QTc prolongation: focus on multiple medication and role of cytochrome P450 isoforms. *Open Journal of Psychiatry* 4 (4): 381-389, 2014.
- 4) Hatta K, Otachi T, Fujita K, Morikawa F, Ito S, Tomiyama H, Abe T, Sudo Y, Takebayashi H, Yamashita T, Katayama S, Nakase R, Shirai Y, Usui C, Nakamura H, Ito H, Hirata T, Sawa Y, for the JAST study group: Antipsychotic switching versus augmentation among early non-responders to risperidone or olanzapine in acute-phase schizophrenia. *Schizophrenia Research* 158: 213-222, 2014.

- 5) Kamimura H, Ito H: Glycemic control in a 79-year-old female with mild cognitive impairment using a medication reminder device: a case report. *International Psychogeriatrics* 26 (6): 1045-1048, 2014.
- 6) Ishii M, Okumura Y, Sugiyama Y, Hasegawa H, Noda T, Hirayasu Y, Ito H: Efficacy of shared decision making on treatment satisfaction for patients with first-admission schizophrenia: study protocol for a randomised controlled trial. *BMC Psychiatry*, 14 (14): 111-118, 2014.
- 7) 野田寿恵, 佐藤真希子, 杉山直也, 吉浜文洋, 伊藤弘人: 精神科看護師が抱く入院患者の攻撃性への態度と対処手法への臨床姿勢の関連. *精神医学* 56(7) : 601-607, 2014.
- 8) 野田寿恵, 佐藤真希子, 杉山直也, 吉浜文洋, 伊藤弘人: 患者および看護師が評価する精神科病棟の風土 エッセン精神科病棟風土 評価スキーマ日本語版 (EssenCES-JPN) を用いた検討. *精神医学* 56(8) : 715-722, 2014.
- 9) 石黒陽子, 山重慎二, 伊藤弘人: 統合失調症の疾病費用と患者の地域移行に関するシミュレーション. *社会保険旬報* 2583 : 20-27, 2014.

(2) 総説

- 1) Hatta K, Ito H: Strategies for early non-response to antipsychotic drugs in the treatment of acute-phase schizophrenia. *Clinical Psychopharmacology and Neuroscience* 12 (1): 1-7, 2014.
- 2) 伊藤弘人, 野田光彦: 糖尿病とうつ病～国家施策と地域医療連携の視点から～. *メディカルレビュー社* 25(3) : 256-260, 2014.
- 3) 伊藤弘人: 精神科医療クリニカルパス. *日本精神科病院協会雑誌* 33(4) : 4-10, 2014.
- 4) 伊藤弘人, 奥村泰之: レセプト情報・特定健診等情報サンプリングデータセット分析とその意義. *統計* 10 : 14-20, 2014.
- 5) 伊藤弘人, 服部英幸: 身体疾患とうつ病—複数の治療の統合を試みるナショナルセンタープロジェクト—. *Geriatric Medicine*52(10) : 1199-1203, 2014.
- 6) 福間長知, 加藤和代, 伊藤弘人, 水野杏一: 心筋梗塞. *臨床と研究* 91(5) : 31-34, 2014.
- 7) 山之内芳雄: 【精神科救急医療を知る】改善課題は救急医療の質の均てん化と向上—精神科救急医療における的確な臨床指標の策定に寄与する「eCODO」—. *PSYCHIATRIST* 19 : 34-41, 2014.
- 8) 山之内芳雄: 【今後の医療計画の見取り図と連携—精神科医と地域連携—】身体合併症に関する地域連携の取り組み. *精神神経学雑誌* 116(7) : 570-575, 2014.
- 9) 助川鶴平, 山之内芳雄, 稲垣 中, 稲田俊也, 吉尾 隆, 吉村玲児, 岩田仲生: 【抗精神病薬の適正使用】 抗精神病薬使用の適正化について. *臨床精神薬理* 17(10) : 1353-1359, 2014.
- 10) 山之内芳雄: 【ポリファーマシー—不要な薬に立ち向かう—】精神科領域における多剤処方の実態と背景. *治療* 96(12) : 1749-1753, 2014.
- 11) 山之内芳雄, 助川鶴平, 稲垣 中, 吉尾 隆, 稲田俊也, 吉村玲児, 岩田仲生: 抗精神病薬減量法のガイドラインに向けて SCAP 法. *日本病院薬剤師会雑誌* 51(3) : 267-270, 2015.
- 12) 堀口寿広: 家族の支援における障害認識のとらえ方. *精神保健研究* 61 : 45-48, 2015.
- 13) 三宅美智: 米国の隔離・身体拘束最小化方策＝「コア戦略」とは 第3回コンシューマー. *精神看護* 17(3) : 70-71, 2014.

(3) 著書

- 1) 山之内芳雄: 各抗精神病薬の使い方のコツ—有効症例から—: 統合失調症ケーススタディー～症例が導く社会復帰・QOL 向上への道～. *メディカルレビュー社*, 大阪, pp122-124, 2014.
- 2) 野田寿恵: 行動制限の最小化. *精神保健福祉白書編集委員会 編: 精神保健福祉白書 2015 年版*. 中央法規出版, 東京, p179, 2014.
- 3) 石黒陽子, 伊藤弘人: 精神科医療と国民経済. *精神保健福祉白書編集委員会 編: 精神保健福祉白書 2015 年版*. 中央法規出版, 東京, p163, 2014.

(4) 研究報告書

- 1) 伊藤弘人：身体疾患を合併する精神疾患患者の診療の質の向上に資する研究。厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「身体疾患を合併する精神疾患患者の診療の質の向上に資する研究（研究代表者：伊藤弘人）」平成 26 年度総括・分担研究報告書。2015.
- 2) 伊藤弘人：向精神薬病薬と QTc 延長一複数の薬剤の組み合わせとシトクロム P450 アイソフォーム。厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「向精神薬の処方実態に関する研究（研究代表者：中込和幸）」平成 26 年度総括・分担研究報告書。pp51-58, 2015.
- 3) 伊藤弘人：こころの健康・休養に関する研究。厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）「健康日本 21（第二次）の推進に関する研究（研究代表者：辻 一郎）」平成 26 年度総括・分担研究報告書。pp35-41, 2015.
- 4) 伊藤弘人：精神保健政策の国際動向からみた自殺対策の展開。厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「学術的・国際的アプローチによる自殺総合対策の新たな政策展開に関する研究（研究代表者：本橋 豊）」平成 26 年度総括・分担研究報告書。pp33-41, 2015.
- 5) 伊藤弘人：認知症地域連携パスに関する動向調査。厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「精神疾患の医療計画と効果的な医療連携体制構築の推進に関する研究（研究代表者：河原和夫）」平成 26 年度総括・分担研究報告書。pp33-38, 2015.
- 6) 伊藤弘人：精神科医療の質の評価と均てん化に関する研究。国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費（主任研究者：伊藤弘人）平成 26 年度総括研究報告書。2015.
- 7) 伊藤弘人：患者手帳と連携した、モニタリング項目選定モデルの提案。厚生労働科学研究委託費（障害者対策総合研究開発研究事業）「統合失調症患者の服薬セルフモニタリングシステムの開発（業務主任者：井上剛伸）」平成 26 年度委託業務成果報告書。pp21-26, 2015.
- 8) 山之内芳雄：抗精神病薬の減量ガイドラインの精緻化に関する研究。厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「向精神薬の処方実態に関する研究（研究代表者：中込和幸）」平成 26 年度総括・分担研究報告書。pp 91-100, 2015.
- 9) 山之内芳雄：身体合併症などの精神科医療連携に関する研究。厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「精神疾患の医療計画と効果的な医療連携体制構築の推進に関する研究（研究代表者：河原和夫）」平成 26 年度総括・分担研究報告書。pp85-96, 2015.
- 10) 竹島 正, 立森久照, 高橋邦彦, 山之内芳雄, 堀尾奈都記, 河原 和：地域精神保健医療の社会サービスへの統合および精神医療機能別必要量の検討に関する研究—地域精神保健医療の推進基盤に関するヒアリング報告—。厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島 正）」平成 24～26 年度総合研究報告書。pp11-24, 2015.
- 11) 竹島 正, 立森久照, 高橋邦彦, 山之内芳雄：地域精神保健医療の社会サービスへの統合および精神医療機能別必要量の検討に関する研究—26 年度 630 調査および追加調査の実施とそこから得られる成果の活用可能性の検討—。厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島 正）」平成 24～26 年度総合研究報告書。pp25-47, 2015.
- 12) 竹島 正, 立森久照, 西 大輔, 高橋邦彦, 下田陽樹, 金田一正史, 山之内芳雄：地域精神保健医療の社会サービスへの統合および精神医療機能別必要量の検討に関する研究—26 年度 630 調査および追加調査の実施とそこから得られる成果の活用可能性の検討—。厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島 正）」平成 24～26 年度総合研究報告書。pp48-60, 2015.

- る研究（研究代表者：竹島 正）」平成24～26年度総合研究報告書. pp49-54, 2015.
- 13) 堀口寿広：厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（身体・知的等障害分野）））。平成26年度総括研究報告書, 2015.
 - 14) 堀口寿広：重症入院患者のクリニカルパスと地域連携に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野））「精神障害者の重症度判定及び重症患者の治療体制等に関する研究（研究代表者：安西信雄）」平成26年度総括・分担研究報告書. pp187-198, 2015.
 - 15) 三宅美智：当事者と一緒に試みた行動制限最小化の取り組み. 平成24年度～26年度文部科学省科学研究費助成研究, pp1-18, 2015.
 - 16) 川内健三, 熊地美枝, 宇都宮 智, 佐藤真希子, 西村武彦, 永田郁子：行動制限最小化研修開催による隔離・身体的拘束施行割合とスタッフの意識の変化. 日本精神科看護学術集会誌. pp60-64, 2014.

(5) 翻訳

なし

(6) その他

- 1) 野田寿恵, 杉山直也, 佐藤真希子, 伊藤弘人, Sailas E, Putokonon H, Kontio R, Joffe G：隔離・身体拘束施行時間に影響する患者特性：日本の精神科急性期医療において. 精神神経学雑誌 116(10)：805-812, 2014.
- 2) 堀口寿広, 高梨憲司, 佐藤彰一：医療の提供を業務とする独立行政法人等における障害者虐待および障害者差別に係る取り組み状況についての調査結果報告書—医療機関における合理的配慮—, 2015.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 伊藤弘人：医療・病院管理におけるビッグデータの利用. 第52回日本医療・病院管理学会学術総会, 東京, 2014.9.13.
- 2) 伊藤弘人：心臓専門医と精神科専門医の連携モデル. 第62回日本心臓病学会学術集会, 宮城, 2014.9.28.
- 3) 伊藤弘人：身体疾患に関連した気分障害の発症・重症化予防—メンタルヘルスクエア開発ナショナルプロジェクトの経験—. 第18回日本精神保健・予防学会学術集会, 東京, 2014.11.15.
- 4) 山之内芳雄：抗精神病薬多剤大量処方からの安全で現実的な減量法. 第110回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.28.
- 5) 三宅美智：行動制限最小化分科会「行動制限最小化ガイドラインをめぐって」. 第21回日本精神科看護学術集会専門I, 鹿児島, 2014.9.6-7.
- 6) 三宅美智：行動制限最小化の今とこれからの課題. 第15回行動制限最小化研究会, 愛知, 2014.12.20.

(2) 一般演題

- 1) Horiguchi T, Ito H, Anzai N：Case vignette study on inpatient care pathway in emergency psychiatric units. WPA Section on Epidemiology and Public Health -2014 Meeting, Nara, 2014.10.15-18.
- 2) Horiguchi T, Takanashi K, Sato S, Shiga T：Feasibility of a cost-effectiveness analysis examining interventions for abused persons with psychiatric disabilities. WPA Section on Epidemiology and Public Health -2014 Meeting, Nara, 2014.10.15-18.
- 3) 山之内芳雄, 佐藤真希子, 平田豊明, 伊藤弘人：精神科救急病棟における医療の質に関する予備的検討. 第110回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.27.
- 4) 山之内芳雄：精神疾患の医療計画をめぐる動向. 第22回日本精神科救急学会学術総会, 北海道,

2014.9.6.

- 5) 山之内芳雄：多施設で精神科医療の質を高めるシステム。第3回日本精神科医学学会学術大会，愛知，2014.10.10.
- 6) 堀口寿広：障害者虐待防止法に基づく自治体の相談窓口寄せられた障害児虐待の事例に関する調査。第61回日本小児保健協会学術集会，福島，2014.6.20-22.
- 7) 堀口寿広，高梨憲司，佐藤彰一：独法病院を対象とした障害がある患者への虐待および差別に関する取り組み状況の調査。第53回全国自治体病院学会，宮崎，2014.10.30-31.
- 8) 堀口寿広，高梨憲司，佐藤彰一：独法病院における障害者虐待および障害者差別に係る取り組み状況の調査。第68回国立病院総合医学会，神奈川，2014.11.14-15.
- 9) 大森由実，伊藤弘人：多職種の共同ケアによる地域連携モデルの構築に向けて一身体疾患患者へのメンタルケアモデル開発に関するナショナルプロジェクト。第52回日本医療・病院管理学会学術総会，東京，2014.9.13-14.
- 10) 大森由実，杉浦伸一，田口真源，伊藤弘人：ICTによる情報共有ツールを用いた認知症地域支援モデルの構築一身体疾患患者へのメンタルケアモデル開発ナショナルプロジェクト。第54回全国国保地域医療学会，岐阜，2014.10.10-11.
- 11) 大森由実，宮地元彦，森田明美，出浦喜丈，伊藤弘人：人間ドック受診者におけるうつと血圧に関する縦断研究一佐久健康長寿プロジェクト。第71回日本循環器心身医学会総会，北海道，2014.11.22-23.
- 12) 三宅美智：行動制限最小化ガイドライン策定における経過報告。第39回日本精神科看護学術集会，広島，2014.6.7.
- 13) 三宅美智：奈良県内精神科病棟における隔離・身体拘束最小化のための看護師の観察に基づいたアセスメントシートの検討。第21回日本精神科看護学術集会専門I，鹿児島，2014.9.6-7.
- 14) 三宅美智：精神科医療における隔離・身体拘束の質管理システムとしてのeCODO。第52回日本医療・病院管理学会学術総会，東京，2014.9.13-14.
- 15) 池野 敬，三次 仁，井上剛伸，上村智子，間宮郁子，伊藤弘人：情報通信技術を活用した福祉支援機器の現状に関する調査。第52回日本医療・病院管理学会学術総会，東京，2014.9.13-14.

(3) 研究報告会

- 1) 堀口寿広，高梨憲司，佐藤彰一：独法病院における障害者虐待の防止ならびに差別解消に関する取り組みの状況。国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所26年度研究報告会，東京，2015.3.9.
- 2) 三宅美智：ピアサポーターが参加する行動制限最小化のための方法。文部科学省科学研修費報告会，東京，2015.2.21.
- 3) 三宅美智：ピアサポーターが参加する行動制限最小化のための方法。文部科学省科学研修費報告会，京都，2015.2.28.

(4) その他

- 1) 伊藤弘人：ワークショップ「身体科救急スタッフに向けた精神科救急患者の初期対応—PEEG 公開コースのご紹介—」。第27回日本総合病院精神医学会総会，茨城，2014.11.29.

C. 講演

- 1) Yamanouchi Y: New Strategy for Measuring Quality of Mental Health Care. IMH Quality day 2014, Singapore, 2014.10.27.
- 2) 山之内芳雄：抗精神病薬多剤大量処方からの安全で現実的な減量法。WPA Section on Epidemiology and Public Health - 2014 Meeting, 奈良，2014.10.17.
- 3) 伊藤弘人：循環器看護におけるメンタルヘルスケアへの期待。第11回日本循環器看護学会学術集会，東京，2014.10.4.

- 4) 伊藤弘人：WHO の精神保健政策—グローバルな自殺対策の動向—。厚生労働科学研究事業・成果報告シンポジウム 知と行動の統合による自殺対策の新たな政策展開，京都，2015.1.31.
- 5) 山之内芳雄：地域における精神科医療連携等について。地区医師会精神保健担当理事・担当医師連絡会開催に伴う講演，東京，2014.10.2.
- 6) 山之内芳雄：自殺未遂者支援の取り組み～地域連携をどう始めるか～。平成 26 年度自殺対策相談窓口ネットワーク会議，愛知，2014.10.3.
- 7) 山之内芳雄：自殺未遂者支援地域連携づくり推進事業について。平成 26 年度うつ・自殺対策相談窓口ネットワーク会議，愛知，2014.10.10.
- 8) 山之内芳雄：アルコール関連問題啓発状況等について。平成 26 年度 第 2 回自殺対策（アルコール健康障害対策）地域推進研究会，愛知，2014.11.21.
- 9) 山之内芳雄：SCAP 法による抗精神病薬減量支援。静岡県精神科学術講演会，静岡，2014.11.26.
- 10) 山之内芳雄：自殺未遂者基礎調査の結果から～各市毎に具体的な取組を考える～。平成 26 年度春日井保健所自殺未遂者支援地域連携づくり推進事業地域連携会議，愛知，2014.12.19.
- 11) 山之内芳雄：精神科病院の医療の質を測る。精神科医療連携を考える会，愛知，2015.1.29.
- 12) 山之内芳雄：地域で取り組む自殺未遂者対策～みなで無理せず少しずつ～。自殺対策相談窓口ネットワーク会議，愛知，2015.1.30.
- 13) 山之内芳雄：抗精神病薬の安全で現実的な減量法～既に多剤の方へ，SCAP 法。多摩統合失調症学術講演会，東京，2015.2.2.
- 14) 山之内芳雄：「自殺未遂者支援対策への取り組みと今後の方向性」についての助言。平成 26 年度うつ自殺相談窓口ネットワーク会議，愛知，2015.2.20.
- 15) 山之内芳雄：抗精神病薬の安全で現実的な減量法～既に多剤の方へ，SCAP 法。多摩統合失調症学術講演会，東京，2015.2.24.
- 16) 野田寿恵：特別講演 行動制限最小化の現状と課題。第 13 回 行動制限最小化研究会，東京，2014.5.24.

D. 学会活動

(1) 学会主催

なし

(2) 学会役員

- 1) 伊藤弘人：一般社団法人 日本・医療病院管理学会 理事・評議員.

(3) 座長

- 1) 伊藤弘人：循環器内科医とメンタルヘルス専門家との連携。第 71 回日本循環器心身医学会総会，北海道，2014.11.23.
- 2) 伊藤弘人，森山美知子：脳卒中後のうつをどう防ぎ，改善させるか。第 40 回日本脳卒中学会総会，広島，2015.3.26.
- 3) 山之内芳雄：精神疾患の医療計画への追加の意義と効果～地域医療連携の必要性和可能性と効果の観点から考察する～。第 110 回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2014.6.26.
- 4) 山之内芳雄：精神科救急病棟における薬物療法のあり方。第 22 回日本精神科救急学会学術総会，北海道，2014.9.5.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 伊藤弘人：日本医学会分科会用語委員会.
- 2) 堀口寿広：チャイルド・ヘルス 編集協力員.
- 3) 堀口寿広：日本福祉のまちづくり学会誌 査読者.

E. 研修

(1) 研修企画

なし

(2) 研修会講師

- 1) 山之内芳雄：「うつ病の基礎知識と最新治療法」等．平成 26 年度研修会「精神疾患と看護—うつ病患者の看護—」，愛知，2014.10.16.
- 2) 堀口寿広，伊藤弘人：クリティカルパスに関して．公益社団法人日本精神科病院協会第 34 回上級コース，埼玉，2014.11.18.
- 3) 堀口寿広，伊藤弘人：クリティカルパスに関して．公益社団法人日本精神科病院協会第 34 回上級コース，神奈川，2014.12.12.
- 4) 堀口寿広，伊藤弘人：クリティカルパスに関して．公益社団法人日本精神科病院協会第 34 回上級コース，福岡，2015.2.27.
- 5) 三宅美智：患者—看護者関係とコミュニケーション．精神科看護初心者研修会，京都，2014.5.16.
- 6) 三宅美智：患者—看護者（ケア者）関係とコミュニケーション．精神科看護初心者研修会，東京，2014.6.4.
- 7) 三宅美智：開放観察における看護師の役割／隔離拘束早期解除のためのアセスメント．行動制限最小化看護Ⅰ，京都，2014.6.21.
- 8) 三宅美智：職員だっこのころのケアを．渋谷区作業所連合会研修，東京，2015.2.13.
- 9) 野田寿恵：精神科行動制限最小化看護介入 研究成果．公益財団法人復康会 沼津中央病院 研修会，静岡，2014.7.17.
- 10) 野田寿恵：海外の行動制限の現状．平成 26 年度 行動制限最小化看護研修会Ⅱ，東京，2014.9.19.
- 11) 野田寿恵：精神科訪問看護に必要な薬物療法の知識．精神科訪問看護基本療養費 算定要件研修会「精神科訪問看護研修会～基礎編」，東京，2014.11.15.
- 12) 野田寿恵：1 年以上の入院患者の特徴—eCODO から分かった事—．公益財団法人復康会 沼津中央病院 研修会，静岡，2015.2.19.

F. その他

- 1) 伊藤弘人：日本医療機能評価機構 調査委員.
- 2) 山之内芳雄：抗精神病薬の安全な減量法をウェブで公開．日経メディカル，2014.4.10.
- 3) 山之内芳雄：検証・精神医療（3）多剤大量処方に一因．山陰中央新報，2014.6.20.
- 4) 山之内芳雄：検証・精神医療（3）多剤大量処方「薬漬け」頭はボーッ．佐賀新聞，2014.6.21.
- 5) 山之内芳雄：検証・精神医療（3）「薬漬け」の悪循環．新潟日報，2014.7.2.
- 6) 山之内芳雄：検証・精神医療（3）多剤大量処方 医師数の少なさ背景．熊本日日新聞，2014.7.3.
- 7) 山之内芳雄：検証・精神医療（3）「薬漬け」の悪循環．琉球新報，2014.7.15.
- 8) 山之内芳雄：検証・精神医療（3）国基準背景に「薬漬け」～医師配置少なく 過剰鎮静～．沖縄タイムス，2014.7.15.
- 9) 山之内芳雄：抗精神病薬を減薬したほうがよいか，考えてみませんか？．メンタルヘルスマガジン このころの元気，2014.11.15.
- 10) 山之内芳雄：このころの健康・休養分野における社会環境の整備．月刊健康づくり，2014.12.1.

9. 精神生理研究部

I. 研究部の概要

研究部および研究室の研究目的

精神生理研究部では、睡眠、意識、認知、感情、意欲等の精神活動を脳科学的にとらえ、その制御メカニズムを明らかにし、これら生理機能の調節障害に基づく各種の睡眠・覚醒障害、気分障害、認知症、神経症・心身症などの病態と治療法を解明することを目的としている。そのために、精神生理学、時間生物学、分子生物学、神経内分泌学、脳機能画像技術などの手法を用いて、学際的な研究を進めている。

部長1名、室長2名に加え、流動研究員2名、科研費研究員2名、協力研究員3名が研究に携わった。これら研究員と国立精神・神経医療研究センター内外の研究・治療協力施設の客員研究員および協力研究者との連携のもとに研究を進めている。

研究者の構成

部長：三島和夫。精神生理機能研究室長：肥田昌子。臨床病態生理研究室長：北村真吾（5/1～）。流動研究員：中嶋恭子、Jakub Spaeti。科研費研究員：北村真吾（～4/30）、勝沼りり、綾部直子。

協力研究員：阿部又一郎、梶 達彦、草薙宏明。併任研究員：亀井雄一（センター病院）。客員研究員：樋口重和（九州大学）、井上雄一（神経研究所附属睡眠学センター）、内山 真（日本大学）、兼板佳孝（大分大学）、大川匡子（睡眠総合ケアクリニック代々木）、海老澤 尚（メディカルケア虎の門）、本多 真（東京都医学総合研究所）、上田泰己（東京大学）、池田正明（埼玉医科大学）、程 肇（金沢大学）、山寺 亘（東京慈恵会医科大学）、熊野宏明（早稲田大学）、岩越美恵（神戸常磐大学）、永島 計（早稲田大学）、石郷岡 純（東京女子医科大学）、高橋一志（東京女子医科大学）、阿部高志（宇宙航空研究開発機構）、守口善也（群馬大学）、そのほか外来研究員2名、科研費研究補助員3名、科研費研究助手2名、センター研究助手1名、研究生15名。

II. 研究活動

精神生理研究部では、厚生労働科学研究費、文部科学省科学研究費等の公的研究費を中心とした競争的研究資金をもとに、下記のような研究に取り組んでいる。研究課題は睡眠覚醒障害、気分障害、生体リズム障害の病態生理に関する基盤的研究から、精神疾患に関わる情動・認知障害のメカニズムの脳科学的解明研究とその臨床応用、臨床疫学等をもとにした医療行政研究、新規診断法・新規治療法の開発と医療現場への展開をめざしたトランスレーショナル研究まで幅広い分野にわたり、国立精神・神経医療研究センター内外の共同研究者との連携のもとに長期的展望をもって進めている。研究成果を国内、国際学会に発表し、刊行物として発刊した。以下に主たる研究課題を列記する。

1) 体とこころの恒常性維持及び破綻機構の遺伝子環境相互作用に関する研究（脳科学研究戦略推進プログラム・課題E）

生体時計・睡眠恒常性機能を簡便に評価する技法の開発、および、生物時計・睡眠恒常性の破綻がもたらす心身の悪影響について取り組んだ。具体的には、末梢時計周期を指標にした概日リズム睡眠障害の鑑別診断・重症度診断の可能性について検証した。概日リズム睡眠障害（フリーラン型）の疾患感受性遺伝子多型を同定した。クロノタイプ（日周指向性）の新たな評価尺度である日本人用 MCTQ を標準化した。肥満(BMI \geq 25)に関連する睡眠・食習慣を明らかにした。睡眠不足時の情動不安定の神経メカニズムを明らかにした。慢性不眠症の表情認知の歪みと脳構造異常を明らかにした。（研究分担者：三島和夫）

2) 睡眠医療プラットフォーム PASM を用いて実施する臨床研究ネットワーク、運用システム、リソースの構築に関する研究（精神・神経疾患研究開発費）

睡眠障害の診断・治療・病態生理研究のための信頼性の高いフェノタイピングを可能にする症状評価フォーマットと解析システムを作成し、得られた臨床情報と生体試料を連結可能匿名化の上で研究リソースとして活用するためのデータバンクシステムを同一プラットフォーム上に構築した。本プラットフォームを活用して、概日リズム睡眠障害などを対象に生体リズム異常の診断法開発、治療最適化、疾患感受性遺伝子検索などの睡眠医療・病態生理研究を多施設共同で推進した。（主任研究者：三島和夫、分担研究者：肥田昌子）

3) 向精神薬の処方実態に関する研究（厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業））

本研究では月ベースで最大約120万人の加入者を有する大型健保団体の診療報酬データを用いて、2005年4月～2013年3月までの日本国内における向精神薬4種の処方率、処方力価、多剤併用率の経年、経月推移を解析した。今回の調査の結果、2005年から2009年にかけての向精神薬の処方率の増加傾向に一定の歯止めがかかり、特に抗不安薬では減少傾向が顕著であることが明らかになった。一方で、いずれの向精神薬においても一日当たりの処方力価の増加傾向が認められた。平成24年度診療報酬改定は向精神薬の高用量処方に対する一定の歯止め効果を発揮したことが明らかになった。（研究分担者：三島和夫）

4) 被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究（厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業））

災害後に生じる不眠症、気分障害、PTSD等に共通した病態として、生理的過覚醒（Hyperarousal）の存在が想定される。本研究は、Hyperarousal Scale（Regestein Q et al., 1993, 以下、HASとする）日本語版を作成し、その信頼性と妥当性の検討を行った。H26年度は地域住民を対象にした1年間のフォローアップ調査により、過覚醒尺度（Hyperarousal Scale：以下、HAS）で同定された過覚醒の存在が3ヶ月後及び1年後の抑うつ存在を予測し得るか検討した。ベースライン期における過覚醒の強さは、3ヶ月後、1年後の抑うつの独立した関連要因であることが示された。HASは、気分障害のリスクが高い被災者の早期発見や予防的介入のための効果的なアセスメントツールとして活用できる可能性があることが示唆された。（研究分担者：三島和夫）

5) 臨床評価指標を踏まえた睡眠障害の治療ガイドライン作成及び難治性の睡眠障害の治療法開発に関する研究（厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業））

慢性不眠症患者の情動処理プロセスの機能異常の有無について脳機能画像学的に検討した。健常群に比較して不眠群では、意識上の幸せ表情呈示時に、ポジティブな情動や報酬の処理に関連する眼窩前頭皮質、線条体、紡錘状回顔領域などの高次視覚領域の活動性が有意に低下していた($p<0.001, k>5$)。意識下の幸せ表情呈示時には、眼窩前頭皮質、線条体のほか、右扁桃核、背側前帯状皮質、補足運動野、小脳など広範な脳部位の活動性が不眠群で低下していた($p<0.001, k>5$)。

日本の不眠症患者の health-related quality of life (hrQOL)の実態を明らかにし、hrQOL 障害の関連因子を抽出した。2012 Japan National Health and Wellness Survey に参加した18以上の男女30,000人の中から、主観的不眠症状があり治療のため処方を受けている不眠症群と不眠症状のない良眠群の二群を抽出した。不眠症と関連する健康関連要因を多重回帰モデルで求めた。不眠症群($n=1,018$; 3.4%)では良眠群($n=20,542$)に比較して有意にhrQOL (Short Form-36 version 2 (SF-36v2))の悪化が認められた。また身体要因（喫煙、運動不足、飲酒）がhrQOL低下の予測因子であった。これら身体要因はないがメンタルヘルス問題（不安、抑うつ）がある群、身体要因はあるがメンタルヘルスが良好な群、どちらの要因もない群の三群で比較すると、順にhrQOLは不良であった。（研究分担者：三島和夫）

6) 生物時計の障害特性に基づく概日リズム睡眠障害の治療最適化とその効果検証（文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (B)）（研究代表者：三島和夫、研究分担者：北村真吾）

難治性で慢性経過を辿りやすい概日リズム睡眠障害（circadian rhythm sleep disorder ; CRSD）の高精度診断と治療最適化のため、睡眠リズム調整の二大因子である生物時計の「リズム周期」と「リズム位相」の迅速診断法を確立し、概日リズム睡眠障害患者の生物時計機能の障害特性を明らかにする。本研究の目的は、難治性で慢性経過を辿りやすい概日リズム睡眠障害の高精度診断と治療最適化のため睡眠リズム調整の二大因子である生物時計の「リズム周期」と「リズム位相」の迅速診断法を確立し、患者固有のリズム障害特性に基づいたテーラーメイド時間療法プログラムを作成することにある。本年度は、昨年度作成した時計遺伝子周期のin vitro モニタリングシステムの精度検証に取り組んだ。

7) 睡眠障害における生体リズム異常の分子メカニズム（文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C)）

概日リズム睡眠障害には、睡眠時間帯が著しく前進する睡眠相前進型、反対に、著しく後退する睡眠相後退型、入眠・覚醒時刻が毎日30分から1時間ずつ遅れていくフリーラン型などのサブタイプがある。これらの疾患は、生物時計の発振もしくは同調機能の障害により生じると考えられている。一般生活者を対象に時計

遺伝子 *CLOCK*, *CRY2*, *NPAS2*, *PER1*, *PER2*, *PER3*, *TIM* の SNP タイピングを行い、多型頻度とクロノタイプ（朝型夜型）の関連性を調べたところ、*PER3* 遺伝子の SNP (rs228697) がクロノタイプと有意に関連した。さらに、睡眠相後退型、フリーラン型に対して一般生活者を対照被験者群としてケース・コントロール関連解析を行った結果、クロノタイプと有意な関連性を示した *PER3* SNP (rs228697) がフリーラン型の表現型とも強い関連性を示すことが明らかとなった。時計遺伝子 *PER3* は睡眠習慣の個人差やフリーラン型の発症メカニズムを解明する上で有力なターゲットになると考えられる。(研究代表者: 肥田昌子)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

各研究員は、都民・市民のための公開講座、講演会などにおいて睡眠と健康づくり、睡眠障害および関連する健康問題などについての普及啓発に努めた。NHK および民放テレビ、ラジオ、オンラインサイト、新聞、雑誌等のメディアを通して、睡眠習慣および睡眠問題の重要性について普及啓発活動を行った。

2) 専門教育面における貢献

各研究員は、国内各地の学術集会、研究会、談話会、医師会講演会などで睡眠障害、気分障害、認知症の睡眠行動障害等の治療と予防について講演した。また、東京医科歯科大学、早稲田大学、筑波大学、秋田大学など教育機関の非常勤講師として学生教育の援助を行った。また、日本睡眠学会、日本時間生物学会、日本生物学的精神医学会、日本公衆衛生学会、不眠研究会、睡眠学研究会、関東睡眠障害懇話会、日本生理人類学会、関東脳核医学研究会などにおける理事、評議員、世話人としての活動を通じて睡眠障害診療従事者の研究及び教育のサポートを行った。国際老年精神医学会、米国睡眠学会、ヨーロッパ睡眠学会、国際時間生物学会等、米国心身医学会、等において講演者、シンポジスト、オーガナイザーとして研究成果を発表し、各国の第一線の研究者達と意見交換を行った。

3) 精研の研修の主催と協力

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

三島和夫は、国民健康・栄養調査企画解析検討会構成員として、同調査の項目策定と調査実行に関わった。厚生省薬事・食品衛生審議会において専門協議委員、参考人として複数の新薬の審査にたずさわった。JAXA 国際宇宙ステーション「きぼう」利用推進委員会宇宙医学シナリオ WG 委員として宇宙医学研究の指針策定にたずさわった。

5) センター内における臨床的活動

6) その他

研究員は、国立精神・神経医療研究センター病院において睡眠障害専門外来を開設し、専門的診療を行った。複数の新規睡眠薬の臨床治験に関わった。複数の企業から要請された治療薬剤および診断機器の安全性、有効性、機能向上に関する受託研究に関わった。

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) [Mishima K](#), DiBonaventura M, Gross H: The burden of insomnia in Japan. *Nat Sci Sleep*, 7: 1-11, 2015.
- 2) [Hida A](#), [Kitamura S](#), Katayose Y, Kato M, Ono H, Kadotani H, Uchiyama M, Ebisawa T, Inoue Y, Kamei Y, Okawa M, Takahashi K, [Mishima K](#): Screening of Clock Gene Polymorphisms Demonstrates Association of a PER3 Polymorphism with Morningness-Eveningness Preference and Circadian Rhythm Sleep Disorder. *Sci Rep*, 4: 6309, 2014.
- 3) [Kitamura S](#), [Hida A](#), Aritake S, Higuchi S, Enomoto M, Kato M, Vetter C, Roenneberg T, [Mishima K](#): Validity of the Japanese version of the Munich Chrono Type Questionnaire. *Chronobiol Int*, 31(7): 845-50, 2014.

- 4) Kitamura S, Enomoto M, Kamei Y, Inada N, Moriwaki A, Kamio Y, Mishima K: Association between delayed bedtime and sleep-related problems among community-dwelling 2-year-old children in Japan. *J Physiol Anthropol*, 34(1): 12, 2015.
- 5) Moriguchi Y, Touroutoglou A, Dickerson BC, Barrett LF: Sex differences in the neural correlates of affective experience. *Soc Cogn Affect Neurosci*, 9(5): 591-600, 2014.
- 6) Motomura Y, Kitamura S, Oba K, Terasawa Y, Enomoto M, Katayose Y, Hida A, Moriguchi Y, Higuchi S, Mishima K: Sleepiness induced by sleep-debt enhanced amygdala activity for subliminal signals of fear. *BMC Neurosci*, 15(1): 97, 2014.
- 7) Motomura Y, Takeshita A, Egashira Y, Nishimura T, Kim Y, Watanuki S: Interaction between valence of empathy and familiarity: is it difficult to empathize with the positive events of a stranger? *J Physiol Anthropol*, 34(13): 2015.
- 8) Motomura Y, Takeshita A, Egashira Y, Nishimura T, Kim Y, Watanuki S: Individual differences in empathic traits and feedback-related front-central brain activity: an event-related potential study. *J Physiol Anthropol*, 34(14): 2015.
- 9) Nakazaki K, Kitamura S, Motomura Y, Hida A, Kamei Y, Miura N, Mishima K: Validity of an algorithm for determining sleep/wake states using a new actigraph. *J Physiol Anthropol*, 33(1): 31, 2014.
- 10) Späti J, Aritake S, Meyer AH, Kitamura S, Hida A, Higuchi S, Moriguchi Y, Mishima K: Modeling circadian and sleep-homeostatic effects on short-term interval timing. *Frontiers in Integrative Neuroscience*, 9(15): 2015.
- 11) Terasawa Y, Moriguchi Y, Tochizawa S, Umeda S: Interoceptive sensitivity predicts sensitivity to the emotions of others. *Cogn Emot*, 28(8): 1435-48, 2014.
- 12) Ikeda M, Kaneita Y, Uchiyama M, Mishima K, Uchimura N, Nakaji S, Akashiba T, Itani O, Aono H, Ohida T: Epidemiological study of the associations between sleep complaints and metabolic syndrome in Japan. *Sleep and Biological Rhythms*, 12(4): 269-78, 2014.
- 13) Lee SI, Hida A, Kitamura S, Mishima K, Higuchi S: Association between the melanopsin gene polymorphism OPN4*1le394Thr and sleep/wake timing in Japanese university students. *J Physiol Anthropol*, 33(1): 9, 2014.
- 14) Ohnishi T, Murata T, Watanabe A, Hida A, Ohba H, Iwayama Y, Mishima K, Gondo Y, Yoshikawa T: Defective craniofacial development and brain function in a mouse model for depletion of intracellular inositol synthesis. *J Biol Chem*, 289(15): 10785-96, 2014.
- 15) Aritake S, Kaneita Y, Ohtsu T, Uchiyama M, Mishima K, Akashiba T, Uchimura N, Nakaji S, Munezawa T, Ohida T: Prevalence of fatigue symptoms and correlations in the general adult population. *Sleep and Biological Rhythms*, 13(2): 146-154, 2015.
- 16) Miyagawa T, Toyoda H, Hirataka A, Kanbayashi T, Imanishi A, Sagawa Y, Kotorii N, Kotorii T, Hashizume Y, Ogi K, Hiejima H, Kamei Y, Hida A, Miyamoto M, Imai M, Fujimura Y, Tamura Y, Ikegami A, Wada Y, Moriya S, Furuya H, Kato M, Omata N, Kojima H, Kashiwase K, Saji H, Khor SS, Yamasaki M, Ishigooka J, Kuroda K, Kume K, Chiba S, Yamada N, Okawa M, Hirata K, Uchimura N, Shimizu T, Inoue Y, Honda Y, Mishima K, Honda M, Tokunaga K: New susceptibility variants to narcolepsy identified in HLA class II region. *Hum Mol Genet*, 24(3): 891-8, 2015.

(2) 総説

- 1) 三島和夫: 不眠症治療の出口の目安と減薬・休薬方法. *臨床精神薬理*17(4) : 527-33, 2014.
- 2) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と減薬・休薬のための診療ガイドライン. *月刊薬事*56(4) : 489-95, 2014.
- 3) 三島和夫: うつ病診療で遭遇する睡眠問題とその対処. *カレントセラピー*32(6) : 556-61, 2014.

- 4) 三島和夫：不眠症治療の現状と課題. 医薬ジャーナル50(6) : 87-91, 2014.
- 5) 三島和夫：概日リズム睡眠-覚醒障害. 臨床精神医学43(7) : 1005-11, 2014.
- 6) 三島和夫：ガイドライン作成の背景と概要. CLINICIAN61(7) : 673-78, 2014.
- 7) 三島和夫：睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドラインについて. 日本病院薬剤師会雑誌50(7) : 833-40, 2014.
- 8) 三島和夫：意識(覚醒)の神経生理. Clinical Neuroscience32(8) : 865-68, 2014.
- 9) 三島和夫：成人の不眠に対して抗精神病薬療法は有効か?—現状と課題—. 臨床精神薬理17(10) : 1367-73, 2014.
- 10) 三島和夫：【症状に応じた向精神薬の使い方】不眠症. 日本医師会雑誌143(7) : 1457-61, 2014.
- 11) 三島和夫：睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドライン. Medical ASAHI43(10) : 74-6, 2014.
- 12) 三島和夫：概日リズムの同調機構. 睡眠医療8(2) : 167-71, 2014.
- 13) 三島和夫：睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドライン その背景と基本理念について. ファルマシア51(2) : 104-08, 2015.
- 14) 三島和夫：【睡眠障害と最新の睡眠医学】睡眠・覚醒のメカニズム. 日本医師会雑誌143(12) : 2515-23, 2015.
- 15) 三島和夫：高齢者の睡眠と睡眠障害. 保健医療科学64(1) : 27-32, 2015.
- 16) 三島和夫：高齢者の抑うつと不眠. 高齢者の不安とその対策—経済・健康・孤独— : 161-70, 2015.
- 17) 肥田昌子, 北村真吾, 三島和夫：生体リズムと睡眠障害. 精神保健研究61 : 73-80, 2015.
- 18) 北村真吾：概日リズム機能にみられる個体差. 日本生理人類学会誌19(4) : 283-90, 2014.
- 19) 北村真吾, 三島和夫：客観的手法を用いた日々の睡眠のモニタリング. 体育の科学64(8) : 541-47, 2014.
- 20) 綾部直子, 三島和夫：睡眠改善を通じた職場のメンタルヘルス対策. 最新精神医学20(1) : 27-34, 2015.
- 21) 綾部直子, 三島和夫：睡眠衛生指導と不眠症に対する認知行動療法(CBT-I)を用いたうつ対策. Depression Frontier13(1) : 9-16, 2015.

(3) 著書

- 1) 三島和夫：概日リズム睡眠-覚醒障害群. 神庭重信, 内山 真 編 : DSM-5 を読み解く 伝統的精神病理, DSM-IV, ICD-10 をふまえた新時代の精神科診断 3 双極性障害および関連障害群、抑うつ障害群、睡眠-覚醒障害群. 中山書店, 東京, pp235-243, 2014.
- 2) 三島和夫：8-2-11 睡眠障害. 精神保健福祉白書編集委員会 編 : 精神保健福祉白書 2015 年版 改革ビジョンから 10 年—これまでの歩みとこれから—. 中央法規出版, 東京, pp174-174, 2014.
- 3) 三島和夫：不眠の悩みを解消する本満足のいく眠りのための正しい方法. 法研, 東京, pp1-158, 2015.
- 4) 三島和夫：レコーディング快眠法. 朝日新聞出版, 東京, pp1-96, 2015.
- 5) 北村真吾：ストレス. 日本生理人類学会編 : 人間科学の百科事典. 丸善出版, 東京, pp226-229, 2015.
- 6) 北村真吾：精神的ストレス. 日本生理人類学会 編 : 人間科学の百科事典. 丸善出版, 東京, pp230-232, 2015.
- 7) 北村真吾：睡眠. 日本生理人類学会 編 : 人間科学の百科事典. 丸善出版, 東京, pp392-394, 2015.
- 8) 北村真吾：フリッカー値. 日本生理人類学会 編 : 人間科学の百科事典. 丸善出版, 東京, pp568-570, 2015.

(4) 研究報告書

- 1) 三島和夫, 綾部直子, 北村真吾：過覚醒尺度日本語版作成に関する研究—3 ヶ月, 1 年後追跡調査—. 厚生労働科学研究費補助金・障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業精神障害分野)「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入方法の向上に資する研究(研究代表者:金吉晴)」平成26年度 総括・分担研究報告書. pp177-84, 2015.
- 2) 三島和夫, 綾部直子, 北村真吾, 野崎健太郎, 片寄泰子：東日本大震災 2011 による不眠症とメンタル

ヘルスの追跡調査、及び Hyperarousal Scale 日本語版の開発に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金・障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業精神障害分野）「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入方法の向上に資する研究（研究代表者：金 吉晴）」平成 24 年度～平成 26 年度 総合研究報告書. pp163-72, 2015.

- 3) 三島和夫, 千先純, 三井寺浩幸, 北村真吾, 榎本みのり, 綾部直子: 大規模診療報酬データを用いた向精神薬の処方実態に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金・障害者対策総合研究事業「向精神薬の処方実態に関する研究（研究代表者：中込和幸）」平成 26 年度 総括・分担研究報告書. pp9-26, 2015.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 三島和夫: どう利用する？安全性は？睡眠薬とのじょうずなつき合い方. 栄養と料理, pp106-12, 2014.4.1.
- 2) 三島和夫: 【テレビ出演】不眠症. NHK チョイス@病気になったとき, 2014.4.12.
- 3) 三島和夫: 年代別, 快眠のススメ, 子供, 夜更かしは避ける, 大人, 30分の昼寝効果的, 高齢者, 無理に長く寝ない. 日本経済新聞, 2014.4.13.
- 4) 三島和夫: ぐっすり眠るコツ, 「長すぎる睡眠」は逆効果. 日本経済新聞Web, 2014.4.13.
- 5) 三島和夫: 最新科学が究明「その眠気、病気かもしれません」. PRESIDENT : 106-08, 2014.4.14.
- 6) 三島和夫: 【テレビ出演】“夜型脱出”大作戦!?. NHKオトナへのトビラTV, 2014.4.17.
- 7) 三島和夫: 「不眠＝不眠症」ではありません. ナショナル ジオグラフィック, 2014.4.21.
- 8) 三島和夫: 1ヵ月眠れないなら睡眠薬を飲め 我慢すると難治性に 3ヵ月で効果を実感 自ら医師に進言することも必要. 日刊ゲンダイ, 2014.4.24.
- 9) 三島和夫: 「不眠症」の正しい知識と「睡眠薬」の上手な使い方. 日刊ゲンダイWeb, 2014.4.24.
- 10) 三島和夫: 【テレビ出演】睡眠・覚醒のミステリー 遺伝子からさぐる“眠り”の正体. BSフジ ガリレオX, 2014.5.25.
- 11) 三島和夫: 【ラジオ出演】睡眠と健康について. ラジオ日本 医療界キーパーソンに聞く. 2014.6.2,9.
- 12) 三島和夫: 8時間寝なくていいんです! 間違いだらけの快眠の定説. LEE7月号, pp218-21, 2014.6.7.
- 13) 三島和夫: 【ラジオ出演】睡眠と健康について. ラジオ関西・RKBラジオ・MBCラジオ 医療界キーパーソンに聞く. 2014.6.8,15.
- 14) 三島和夫: ビジネスマンに必要な睡眠時間はどれくらいか 最新科学が究明「その眠け、病気かもしれません」【1】. PRESIDENT Online, 2014.6.10.
- 15) 三島和夫: 睡眠の都市伝説を切る. Webナショナル ジオグラフィック, 2014.6.26から隔週掲載.
- 16) 三島和夫: 「睡眠8時間ベスト」は大間違い!6時間前後で十分 シニアの眠りの新常識. 週刊朝日, 7月18日号: pp110-13, 2014.7.18.
- 17) 三島和夫: 眠りの通説 根拠に「？」 最新研究で明らか!こ2. 日本経済新聞, 2014.7.20.
- 18) 三島和夫: よく寝れば身長伸びるはウソ 眠りの最新常識. 日経WEB, 2014.7.24.
- 19) 三島和夫: 各年齢層で必要な睡眠時間の目安は?. 養護教員のための教育実践に役立つQ&A集 V, 65(9): pp108-10, 2014.7.25.
- 20) 三島和夫: 9割の医師から三島和夫さんの著書『8時間睡眠のウソ。』が推奨されました. Webナショナルラジオグラフィック, 2014.7.25.
- 21) 三島和夫: 日本睡眠学会第39回定期学術集会 頓服処方の“飲み切り”がリスクに 睡眠薬の多剤併用問題. Medical Tribune, 47(32), 2014.8.7.
- 22) 三島和夫: 電子版この一本 眠りの常識のウソを見抜く. 日本経済新聞: 2面, 2014.8.13.
- 23) 三島和夫: 8時間は寝過ぎか 睡眠時間の個人差が起こるワケ 日本経済新聞 2014.8.26.
- 24) 三島和夫: 日経電子版から きょうのおすすめ記事 ライフ 睡眠時間の個人差が起こるワケ. 日経電子版,

- 2014.8.26.
- 25) 三島和夫: 眠り下手改善は同時刻起床が肝「眠れないなら寝るな」の教え. SNN (Social News Network), 2014.8.30.
- 26) 三島和夫: 睡眠・覚醒リズム異常に関連する遺伝子が明らかに. 財経新聞, 2014.9.10.
- 27) 三島和夫: 睡眠・覚醒リズム異常に関連する遺伝子が明らかに (財経新聞). mediajam, 2014.9.10.
- 28) 三島和夫: 睡眠・覚醒リズム異常に関連する遺伝子が明らかに (財経新聞). ライブドアニュース, 2014.9.11.
- 29) 三島和夫: 睡眠・覚醒リズム異常に関連する遺伝子が明らかに (財経新聞). @niftyニュース, 2014.9.11.
- 30) 三島和夫: 睡眠・覚醒リズム異常に関連する遺伝子が明らかに (財経新聞). BIGLOBEニュース, 2014.9.11.
- 31) 三島和夫: 寝つけない時は寝なくていい!? 睡眠の達人vsビートたけし達人対談. 新潮45, 2014年9月号: pp274-85, 2014.9.18.
- 32) 三島和夫: 睡眠障害の治療に光 「時計遺伝子」の1つが夜型指向性や睡眠障害に関連. QLife, 2014.9.29.
- 33) 三島和夫: 「睡眠」研究レポート注目9選. WebR25, So-netニュース, Yahoo!ニュース, BIGLOBEニュース, @niftyニュース, ニコニコニュース, mixiニュース, gooビジネスEX, livedoor NEWS, ジョルダンニュース!, 日刊アメバニュース, ガジェット通信, Infoseekニュース, 2014.10.2.
- 34) 三島和夫: 【監修】不眠症徹底解消マニュアル. NHK チョイス@病気になったとき Vol1, 2014.10.20.
- 35) 三島和夫: 介護に負けない 科学 認知症にならないためには しっかりと噛んで食べ, 朝に動いて早く寝ること. AERA, 10月20日号: 32, 2014.10.20.
- 36) 三島和夫: 睡眠不足はうつ病の原因にも! 電車では睡眠必須の方へ. ノーツマルシェ, 2014.10.29.
- 37) 三島和夫: 不眠症 薬物療法の「出口」が見えない不安に寄り添う 不眠症患者の服薬アドヒアランスが不良となる一因は投与期間や休薬指針が明確に示されていないこと. クレデンシャル, 74: pp24-28, 2014.10.30.
- 38) 三島和夫: 元気なう 快眠でキレイに (1) =リズムと「深さ」重要. 読売新聞 16面, 2014.11.2.
- 39) 三島和夫: 睡眠薬 依存性抑えた新型 日本人の1割不眠症 広がる選択肢. 朝日新聞, 3面, 2014.11.5.
- 40) 三島和夫: 元気なう リズムと「深さ」重要-2. yomiDr, 2014.11.9.
- 41) 三島和夫: 元気なう 快眠でキレイに (4) 「質と時間」診断アプリも. 読売新聞 16面, 2014.11.30.
- 42) 三島和夫: 自殺者の平均睡眠時間は5時間. 睡眠不足が自殺を引き起こしてしまう. ヘルスプレス, 2014.12.14.
- 43) 三島和夫: 楽しむQ&A 快眠取り戻すアプリも. 読売新聞 14面, 2015.1.7.
- 44) 三島和夫: 体とこころの通信簿=冬季うつ病 日照不足が原因 人工光浴び治療. 朝日新聞, 夕刊7面, 2015.1.19.
- 45) 三島和夫: 不眠症 「よく眠れません」の訴えにどう対応するか. Medical Tribune, 8面, 2015.1.22.
- 46) 三島和夫: [プライマリケアで診るCNS疾患] 不眠症 「よく眠れません」の訴えにどう対応するか. MT Pro CNS today, 2015.1.22.
- 47) 三島和夫: きょうのなぜ? 動物はなぜ眠るの?. 毎日小学生新聞, 2015.2.1.
- 48) 三島和夫: 睡眠と健康 (1) 認知行動療法で薬減らす. 読売新聞 医療ルネッサンス, 2015.2.3.
- 49) 三島和夫: 特集 転換期を迎えた不眠診療 睡眠薬は減らせる, 休薬できる 寝ているのに眠れない? 「睡眠状態誤認」にご用心. Web日経メディカル, 2015.2.6.
- 50) 三島和夫: 理想の睡眠時間8時間はウソ!? 『正しい睡眠』の新常識とは?. BS-TBS 「まるわかり!日曜ニュース深掘り」. 2015.2.8.
- 51) 三島和夫: 「土日よく寝た」は心だけ 体は寝不足リスクを抱えたまま. WEDGE Infinity, 2015.2.12.
- 52) 三島和夫: 不眠改善へ習慣見直し 「認知行動療法」学会が普及に力 薬併用で7割改善も. 朝日新聞, 朝刊35面, 2015.2.24.
- 53) 三島和夫: 朝日新聞 短くてもスッキリ快眠 加齢とともに浅く短く 寝つきは?夜中起きる? 寝床にいる

- 時間を短く. 朝日新聞, 朝刊19面, 2015.3.1.
- 54) 三島和夫: 短くてもスッキリ快眠. apital, 2015.3.4.
 - 55) 三島和夫: 特集 攻めの不眠診療 プロローグ 不眠症は「生活習慣病」だ. Web日経メディカル, 2015.3.9.
 - 56) 三島和夫: 特集 攻めの不眠診療 プロローグ 不眠症は「生活習慣病」だ. 日経メディカル2015年3月号: pp38-39, 2015.3.10.
 - 57) 三島和夫: 特集 攻めの不眠診療 睡眠習慣を変える3ステップ step3 「簡易CBT」で睡眠の質を上げる. 日経メディカル2015年3月号: pp44-45, 2015.3.10.
 - 58) 三島和夫: 特集 特集 攻めの不眠診療 《睡眠習慣を変える3ステップ》Step2 睡眠への「誤認」を解く. Web日経メディカル, 2015.3.11.
 - 59) 三島和夫: 睡眠 そろそろ限界? 眠らない日本人. 毎日jp, 2015.3.13.
 - 60) 三島和夫: 「眠らない国」に警鐘. 毎日新聞, 2015.3.13.
 - 61) 肥田昌子: 睡眠リズム異常に関与 遺伝子の違い同定 国立精神・神経医療センターが成果. 科学新聞:6, 2014.10.3.
 - 62) 肥田昌子: 睡眠マスターに聞く! 美しさも健康もすべては睡眠から!. CLASSY 2015年3月号, 2015.1.28.
 - 63) 肥田昌子: 「ヒト」それぞれの眠りのリズム. someone vol31, 2015.3.1.
 - 64) 北村真吾: ビジネスマンを襲う日本の国民病 睡眠クライシス 睡眠研究はとても難しい. R25:11, 2014.10.2.
 - 65) 綾部直子: 【監修】不眠症徹底解消マニュアル 睡眠日誌. NHK チョイス@病気になったとき Vol1, 2014.10.20.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Kitamura S, Hida A, Mishima K: Biological basis of circadian rhythm sleep disorder. International Symposium on Human Adaptation to Environment and Whole-body Coordination, Hyogo, 2015.3.14-16.
- 2) Hida A: Potential pathogenesis of circadian rhythm sleep disorders. Asian Sleep Research Society 2014, Kerala, India, 2014.9.22-24.
- 3) 三島和夫: 睡眠薬の適正使用・休薬ガイドライン (GL)について. 『睡眠医療』座談会 Z Drugs時代の不眠症治療, 東京, 2014.5.16.
- 4) 三島和夫: 睡眠薬の適正使用・休薬ガイドラインの観点からみた慢性不眠とうつ病性不眠の治療戦略. 第22回北海道睡眠研究会, 北海道, 2014.5.17.
- 5) 三島和夫: 不眠症診療に役立つ最新情報～睡眠薬の適正使用・休薬ガイドラインより～. 第87回日本産業衛生学会 ランチョンセミナー2, 岡山, 2014.5.22.
- 6) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドラインー出口を見据えた不眠症治療に向けてー. 足立区医師会講演会, 東京, 2014.5.23.
- 7) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドラインについて. 千葉市薬剤師会実践研修会, 千葉, 2014.5.27.
- 8) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドラインについて. 東久留米市医師会学術講演会, 東京, 2014.5.28.
- 9) 三島和夫: 睡眠薬の適正使用・休薬ガイドラインの観点からみた慢性不眠とうつ病性不眠の治療戦略. 北陸生物学的精神医学研究会, 石川, 2014.6.7.
- 10) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドラインについて. 第38回平成26年度伏見・山科・東山医師会合同学術講演会, 京都, 2014.6.14.
- 11) 三島和夫: 出口を見据えた不眠治療戦略について. 第11回城北睡眠障害研究会, 東京, 2014.6.20.
- 12) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドラインー出口を見据えた不眠症治療に向けてー.

- 第26回東葛神経地域セミナー, 千葉, 2014.6.21.
- 13) 三島和夫: 不眠症が 治る とは何か? ~抑うつ, 不安, QOLから考えてみる~. 日本睡眠学会第39回定期学術集会, 徳島, 2014.7.4.
 - 14) 三島和夫: 日本の睡眠薬処方の実態. 日本睡眠学会第39回定期学術集会, 徳島, 2014.7.4.
 - 15) 三島和夫: 不眠症が治るとは深く長く眠れるようになることか? ~過覚醒抑うつ, QOLから考えてみる~. 第24回学術講演会 東京女子医科大学精神医学アカデミー, 東京, 2014.7.7.
 - 16) 三島和夫: 睡眠薬適正使用・休薬ガイドラインとラメルテオンの位置づけ. 現代型不眠と睡眠障害治療を考える会, 茨城, 2014.7.10.
 - 17) 三島和夫: 睡眠衛生教育とCBT-I を用いたうつ対策. 第11回日本うつ病学会総会, 広島, 2014.7.18-19.
 - 18) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドラインについて. AIカンファランス~地球における不眠診療を考える~, 東京, 2014.7.27.
 - 19) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドラインについて. かかりつけ医のための不眠診療セミナー, 東京, 2014.7.30.
 - 20) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドライン—出口を見据えた不眠症治療に向けて—. 医療安全睡眠セミナー, 兵庫, 2014.8.1.
 - 21) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドラインについて. 睡眠薬の適正使用・休薬のためのガイドラインを理解するための社員向け勉強会, 東京, 2014.8.7.
 - 22) 三島和夫: 睡眠の都市伝説を斬る. 第1回 NCNP メディア塾, 東京, 2014.8.22-23.
 - 23) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドライン—出口を見据えた不眠症治療に向けて—. 不眠診療セミナー (AIセミナー) ~地域における不眠診療を考える~, 長崎, 2014.9.5.
 - 24) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドライン. 睡眠薬の適正使用をより深く学ぶ会, 長崎, 2014.9.6.
 - 25) 三島和夫: 睡眠医療からみた うつ・自殺対策. 第38回日本自殺予防学会総会ランチョンセミナー4, 福岡, 2014.9.13.
 - 26) 三島和夫: ベンゾジアゼピン系向精神薬の功罪. 第12回千葉県精神科急性期治療懇話会 (秋), 千葉, 2014.9.25.
 - 27) 三島和夫: 睡眠障害とうつ病. 徳島県精神科臨床懇話会学術講演会, 徳島, 2014.10.17.
 - 28) 三島和夫: 【講師】睡眠とは何か? (ロゼレムの有効性, 新たな睡眠薬の解説など). 平成26年度 精神科薬物療法認定薬剤師講習会, 東京, 2014.10.19.
 - 29) 三島和夫: 不眠診療のパラダイムシフトをいかに普及させるか. Insomnia Forum, 東京, 2014.10.19.
 - 30) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドラインについて. 睡眠障害を考える会, 愛媛, 2014.10.22.
 - 31) 三島和夫: 睡眠薬の適正使用・休薬ガイドラインを念頭に置いたこれからの不眠医療. 睡眠薬適正使用講演会, 岡山, 2014.10.27.
 - 32) 三島和夫: ポストベンゾ時代の不眠症治療戦略—病態に応じた適剤適処—. 愛知県精神科学術講演会, 愛知, 2014.10.30.
 - 33) 三島和夫: 加齢・認知症に伴う睡眠障害について. 平成26年度 宮城県医師会研修講習会 (仙北第二地区), 宮城, 2014.10.31.
 - 34) 三島和夫: ポストベンゾ時代の不眠症治療戦略—病態に応じた適剤適処—. 第63回精神科治療研究会, 青森, 2014.11.1.
 - 35) 三島和夫: 「ゴールを見据えた不眠症治療の幕開け」—新たな治療選択肢の登場を受けて—. 学術講演会, 宮崎, 2014.11.7.
 - 36) 三島和夫: Contribution and future direction of chronobiology in sleep medicine 睡眠医学領域における時間生物学の貢献と今後の方向性. 第21回日本時間生物学会学術大会, 福岡, 2014.11.7-9.
 - 37) 三島和夫: ポストベンゾ時代の不眠症治療戦略—病態に応じた適剤適処—. 千葉県睡眠障害学術講演会,

- 千葉, 2014.11.11.
- 38) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドラインについて. 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドラインセミナーin沖縄, 沖縄, 2014.11.14.
 - 39) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドラインについて. 第3回AIカンファレンス～地球における不眠診療を考える～, 東京, 2014.11.16.
 - 40) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドラインについて. かかりつけ医のための不眠診療セミナー, 東京, 2014.11.17.
 - 41) 三島和夫: 隔離実験による睡眠・生体リズムの研究「健康づくりのための睡眠指針」の概説. 宇宙医学生物学研究勉強会, 茨城, 2014.11.18.
 - 42) 三島和夫: 「ゴールを見据えた不眠症治療の幕開け」～新たな治療選択肢の登場を受けて～. 不眠症フォーラムin松本, 長野, 2014.11.21.
 - 43) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドラインー“1時間でわかる”睡眠薬の最新情勢ー. 他科医に聞きたいちょっとしたこと. 医薬品適正使用セミナー, 京都, 2014.11.22.
 - 44) 三島和夫: ポストベンゾ時代の不眠症治療戦略ー病態に応じた適剤適処ー. Expert Meeting, 東京, 2014.11.24.
 - 45) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドラインについてー出口を見据えた不眠症治療に向けてー. 茅ヶ崎医師会内科医会学術講演会, 神奈川, 2014.11.27.
 - 46) 三島和夫: 「ポストベンゾ時代の不眠症治療戦略」～病態に応じた適剤適処～. 睡眠講演会, 埼玉, 2014.12.3.
 - 47) 三島和夫: 職場の睡眠問題 - リズム障害, 睡眠不足, 不眠について -. 第6回東海産業職域睡眠の会セミナー, 愛知, 2014.12.4.
 - 48) 三島和夫: ゴールを見据えた不眠症治療ー新たな治療選択肢の登場を受けてー. TOYAMA Insomnia Symposium, 富山, 2014.12.10.
 - 49) 三島和夫: 不眠治療の新たな潮流～その処方と指導で大丈夫ですか?～. Sleep Symposium, 東京, 2014.12.14.
 - 50) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドラインー出口を見据えた不眠症治療に向けてー. 不眠症診療セミナーin旭川, 北海道, 2015.1.20.
 - 51) 三島和夫: ゴールを見据えた不眠症治療の幕開けー新たな治療選択肢の登場を受けてー. 広島県内科会学術講演会, 広島, 2015.1.23.
 - 52) 三島和夫: ゴールを見据えた不眠症治療の幕開け～新たな治療選択肢の登場を受けて～. Sleep Symposium, 東京, 2015.1.24.
 - 53) 三島和夫: ゴールを見据えた不眠症治療の幕開けー新たな治療選択肢の登場を受けてー. Expert Meeting, 東京, 2015.1.24.
 - 54) 三島和夫: 睡眠薬の適正使用・休薬ガイドラインを念頭に置いたこれからの不眠医療. 八幡精神科医会・内科医会 合同学術講演会, 福岡, 2015.1.28.
 - 55) 三島和夫: 一般診療で活用できる睡眠障害の診断と治療. 北多摩睡眠フォーラム, 東京, 2015.1.30.
 - 56) 三島和夫: 不眠診療の新たな潮流～その処方と指導で大丈夫ですか?～. Sleep Symposium, 東京, 2015.1.31.
 - 57) 三島和夫: 不眠治療の新たな潮流～その処方と指導で大丈夫ですか?～. Sleep Symposium, 東京, 2015.1.31.
 - 58) 三島和夫: ゴールを見据えた不眠症治療の幕開けー新たな治療選択肢の登場を受けてー. Sleep Symposium (新宿会場), 東京, 2015.2.9.
 - 59) 三島和夫: ゴールを見据えた不眠症治療の幕開けー新たな治療選択肢の登場を受けてー. 不眠症フォーラムin長野, 長野, 2015.2.12.
 - 60) 三島和夫: ゴールを見据えた不眠症治療の幕開けー新たな治療選択肢の登場を受けてー. Sleep

- Symposium (立川会場), 東京, 2015.2.17.
- 61) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドラインについて. かかりつけ医のための不眠治療セミナー, 神奈川, 2015.2.18.
 - 62) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドラインについて. 睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドラインセミナー in TSUKUBA, 茨城, 2015.2.19.
 - 63) 三島和夫: ゴールを見据えた不眠症治療の幕開け—新たな治療選択肢の登場を受けて—. 豊橋内科医会研修会, 愛知, 2015.2.26.
 - 64) 三島和夫: ゴールを見据えた不眠症治療の幕開け—新たな治療選択肢の登場を受けて—. インターネット講演会, 東京, 2015.3.3.
 - 65) 三島和夫: ゴールを見据えた不眠症治療の幕開け—新たな治療選択肢の登場を受けて—. Insomnia Forum in Shizuoka, 静岡, 2015.3.4.
 - 66) 三島和夫: ゴールを見据えた不眠症治療の幕開け—新たな治療選択肢の登場を受けて—. Sleep Symposium for Pharmacists, 東京, 2015.3.8.
 - 67) 三島和夫: ゴールを見据えた不眠症治療の幕開け—新たな治療選択肢の登場を受けて—. 広島県東部 Insomnia Forum 東京, 2015.3.11.
 - 68) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドラインについて. 精神科薬物療法学術研究会, 東京, 2015.3.12.
 - 69) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドライン. 東京精神医学会第103回学術集会ランチョンセミナー, 東京, 2015.3.14.
 - 70) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドライン—出口を見据えた不眠症治療に向けて—. 第21回高崎市医師会学術講演, 群馬, 2015.3.18.
 - 71) 三島和夫: 不眠症治療の入口と出口をどのように考えるか. 睡眠薬の適正使用推進 座談会企画「不眠症治療の入口と出口をどのように考えるか」, 東京, 2015.3.29.
 - 72) 三島和夫: Z-Drug時代における薬剤選択のコツ. 北多摩エリア整形外科セミナー, 東京, 2015.3.30.
 - 73) 肥田昌子: 概日リズム睡眠障害の発症機序: 末梢時計機能の評価. 日本睡眠学会第39回定期学術集会, 徳島, 2014.7.3.
 - 74) 肥田昌子: 【受賞講演】 In vitro circadian period is associated with circadian/sleep preference. 日本睡眠学会第39回定期学術集会, 徳島, 2014.7.4.
 - 75) 北村真吾: 概日リズム機能にみられる個体差. 日本生理人類学会第70回大会, 福岡, 2014.6.21-22.
 - 76) 北村真吾: 【受賞講演】 Intrinsic circadian period of sighted patients with circadian rhythm sleep disorder, free-running type. 日本睡眠学会第39回定期学術集会, 徳島, 2014.7.4.
 - 77) 北村真吾: 健やかな暮らしのための睡眠. 手話通訳者等健康障害予防対策事業 健康管理講習会, 静岡, 2015.2.1.
 - 78) 中崎恭子: 睡眠習慣および食習慣と肥満との関連に関する検討. 日本睡眠学会第39回定期学術集会, 徳島, 2014.7.4.

(2) 一般演題

- 1) Kitamura S, Nakazaki K, Motomura Y, Katayose Y, Hida A, Oba K, Katsunuma R, Terasawa Y, Enomoto M, Nozaki K, Moriguchi Y, Mishima K: Estimating individual optimal sleep time and potential sleep debt. 22nd Congress of the European Sleep Research Society, Tallinn, Estonia, 2014.9.16-20.
- 2) Archer SN, Kitamura S, Santhi N, Dijk D-J: Effects of circadian typology and partial and total sleep deprivation on the human transcriptome. 22nd Congress of the European Sleep Research Society, Tallinn, Estonia, 2014.9.16-20.
- 3) Motomura Y, Oba K, Terasawa Y, Nozaki K, Ayabe N, Moriguchi Y, Kamei Y, Higuchi S, Mishima

- K: Structural and functional changes in the mesolimbic system in primary insomnia patients : an fMRI and DTI study. 22nd Congress of the European Sleep Research Society, Tallinn, Estonia, 2014.9.16-20.
- 4) Motomura Y, Kitamura S, Nakazaki K, Oba K, Katsunuma R, Katayose Y, Hida A, Moriguchi Y, Higuchi S, Mishima K: Recovery from potential sleep debt via sleep extension may improve emotion regulation. The 17th World Congress of Psychophysiology (IOP2014), Hiroshima, 2014.9.23-27.
 - 5) 肥田昌子, 北村真吾, 中崎恭子, 元村祐貴, 綾部直子, 加藤美恵, 小野浩子, 松井健太郎, 小林美奈, 碓氷 章, 井上雄一, 亀井雄一, 三島和夫: 概日リズム睡眠障害の発症機序: 末梢時計機能の評価. 日本睡眠学会第39回定期学術集会, 徳島, 2014.7.3-4.
 - 6) 肥田昌子: Association of a PER3 Polymorphism with Morningness–Eveningness Preference and Circadian Rhythm Sleep Disorder. 第21回日本時間生物学会学術大会, 福岡, 2014.11.7-9.
 - 7) 北村真吾, 中崎恭子, 元村祐貴, 片寄泰子, 肥田昌子, 大場健太郎, 勝沼るり, 寺澤悠理, 榎本みのり, Spaeti J, 野崎健太郎, 亀井雄一, 守口善也, 三島和夫: 睡眠延長による必要睡眠量と潜在的睡眠負債の推定. 日本睡眠学会第39回定期学術集会, 徳島, 2014.7.3-4.
 - 8) 北村真吾, 肥田昌子, 樋口重和, 亀井雄一, 三島和夫: 内的脱同調状態は概日リズム睡眠障害自由継続型患者における気分低下を惹起する. 第21回日本時間生物学会学術大会, 福岡, 2014.11.7-9.
 - 9) 元村祐貴, 大場健太郎, 寺澤悠理, 綾部直子, 野崎健太郎, 肥田昌子, 守口善也, 亀井雄一, 樋口重和, 三島和夫: 慢性不眠症患者の脳構造: Voxel-based Morphometry を用いた検討. 日本睡眠学会第39回定期学術集会, 徳島, 2014.7.3-4.
 - 10) 中崎恭子, 北村真吾, 元村祐貴, Spaeti J, 肥田昌子, 三島和夫: 睡眠習慣および食習慣と肥満との関連に関する検討. 日本睡眠学会第39回定期学術集会, 徳島, 2014.7.3-4.
 - 11) 中崎恭子, 北村真吾, 肥田昌子, 元村祐貴, Spaeti J, 三島和夫: 睡眠・食習慣とBMIとの関連. 第23 回日本睡眠環境学会, 東京, 2014.9.18-19.
 - 12) 綾部直子, 北村真吾, Quentin R, 三島和夫: Hyperarousal Scale 日本語版の作成と信頼性・妥当性の検討. 日本睡眠学会第39回定期学術集会, 徳島, 2014.7.3-4.
 - 13) 綾部直子, 野崎健太郎, 岡島 義, 中島 俊, 大淵敬太, 小鳥居 望, 小城公宏, 山寺 亘, 内村直尚, 井上雄一, 亀井雄一, 立森久照, 三島和夫: Quality of Life Scale for Insomnia (QOLI) 作成の試み. 日本認知・行動療法学会第40回大会 富山, 2014.11.1-3.
 - 14) 阿部高志, 三島和夫, 井上雄一, 水野 康, 肥田昌子, 北村真吾, 中崎恭子, 元村祐貴, 太田敏子, 須藤正道, 緒方克彦, 大島 博, 向井千秋: 宇宙飛行士のヴィジランス評価における新規指標の必要性. 日本睡眠学会第39回定期学術集会, 徳島, 2014.7.3-4.
 - 15) 阿部高志, 鈴木 豪, 緒方克彦: 宇宙探査での実用化に向けた覚醒度評価法開発. 第60回日本宇宙航空環境医学大会, 東京, 2014.11.28-29.
 - 16) Spaeti J, Aritake S, Meyer A, Kitamura S, Hida A, Higuchi S, Moriguchi Y, Kamei Y, Mishima K: Circadian and sleep-homeostatic effects on interval timing. 第21回日本時間生物学会学術大会, 福岡, 2014.11.7-9.
 - 17) 田口勇次郎, 向當さや香, 半戸志摩, 太田周作, 吉江正樹, 中崎恭子, 三島和夫: 小型活動量計への睡眠/覚醒判定アルゴリズムの適用評価. 日本睡眠学会 第39回 定期学術集会, 徳島, 2014.7.3-4.
 - 18) 李 相逸, 肥田昌子, 北村真吾, 三島和夫, 樋口重和: ヒトのメラノプシン遺伝子の一塩基多型と睡眠習慣 - 就寝時刻と覚醒時刻について. 日本睡眠学会第39回定期学術集会, 徳島, 2014.7.3-4.
 - 19) 池田美樹, 綾部直子, 千葉裕明, 佐藤友哉, 嶋田洋徳, 仲谷誠: 外傷性脳損傷者に対する認知行動療法的アプローチの適用における課題. 第7回日本不安症学会学術大会, 広島, 2015.2.14-15.

(3) 研究報告会

- 1) 三島和夫, 綾部直子: Quality of Life Scale for Insomnia (QOLI) 作成に関する平成25年度成果および

- 26年度研究計画. 「臨床評価指標を踏まえた睡眠障害の治療ガイドライン作成及び難治性の睡眠障害の治療法開発に関する研究」第1回班会議, 東京, 2014.5.12.
- 2) 綾部直子, 三島和夫: 過覚醒尺度日本語版作成の試み—信頼性・妥当性の検討—. 「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」第1回班会議, 東京, 2014.6.26.
 - 3) 綾部直子, 三井寺浩幸: 日本における向精神薬の処方実態に関する経年的変化. 向精神薬の処方実態に関する研究班会議, 東京, 2014.7.30.
 - 4) 三島和夫, 綾部直子: 睡眠薬に関する実態調査及びウェブ版CBTIについて. 井上班コンセンサスマーケティング, 東京, 2014.9.28.
 - 5) 三島和夫, 肥田昌子, 北村真吾: 課題Eヒアリング. 平成26年度 脳科学研究戦略推進プログラム 成果報告会, 東京, 2014.11.4-5.
 - 6) 綾部直子, 三島和夫: 過覚醒尺度日本語版作成の試み—3ヶ月、1年後追跡調査—. 「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証および介入手法の向上に資する研究」第2回班会議, 東京, 2014.12.18.
 - 7) 三島和夫: 課題Eヒアリング審査. 平成26年度 脳プロ課題E事後評価委員会, 東京, 2014.12.19.
 - 8) 北村真吾, 中崎恭子, 元村祐貴, 片寄泰子, 大場健太郎, 勝沼るり, 寺澤悠理, 榎本みのり, 守口善也, 肥田昌子, 三島和夫: 睡眠延長による必要睡眠量と潜在的睡眠負債の推定. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成26年度 研究報告会(第26回), 東京 国立精神・神経医療研究センター教育研修棟 ユニバーサルホール1・2, 2015.3.9.
 - 9) 元村祐貴, 大場健太郎, 寺澤悠理, 野崎健太郎, 綾部直子, 北村真吾, 肥田昌子, 守口善也, 亀井雄一, 三島和夫: 原発性不眠症患者における情動刺激観察時の脳活動. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成26年度 研究報告会 (第26回), 東京 国立精神・神経医療研究センター 教育研修棟 ユニバーサルホール1・2, 2015.3.9.

(4) その他

C. 講演

- 1) 三島和夫: 【一般向け講演】薬物療法について—安心・安全・効果的に利用するコツ—. 秋の「すいみんの日」市民公開講座, 東京, 2014.9.7.
- 2) 三島和夫: 【企業向け講演】睡眠が心身に与える影響～睡眠の質を上げるには～. JX日鉱日石エネルギー(株)衛生講習会, 神奈川, 2014.10.2.
- 3) 三島和夫: 【一般向け講演】睡眠とうつ病の深～い関係. 三重「うつ病を知る日」県民公開講座, 三重, 2014.10.26.
- 4) 三島和夫: 【一般向け講演・討論】うつ病, 睡眠, アルコール. 三重「うつ病を知る日」県民公開講座, 三重, 2014.10.26.
- 5) 三島和夫: 【一般向け講演】「薬と睡眠障害」～なぜ年をとると睡眠障害が増えるのか～. TAMA市民大学講演会, 東京, 2014.11.29.
- 6) 三島和夫: 【対談】睡眠薬の適正使用・休薬ガイドラインについて～整形外科における不眠診療の留意点～. 座談会 睡眠薬の適正使用・休薬ガイドラインについて, 東京, 2014.12.13.
- 7) 三島和夫: 【一般向け講演】睡眠と体内時計の機能を知り, 個の生活と医療に生かす. 第7回脳プロシンポジウム, 東京, 2015.2.7.
- 8) 三島和夫: 【一般向け講演】睡眠障害について. 出張睡眠市民公開講座, 長野, 2015.2.13.
- 9) 三島和夫: 【一般向け講演】睡眠障害治療薬の開発の最新情報. NCNP治験市民講座「睡眠障害の診断と治療の最前線」, 東京, 2015.2.21.
- 10) 三島和夫: 【一般向け講演】快眠と健康生活のための12の心得 その眠り, 大丈夫?. 東村山市民公開講座, 東京, 2015.3.7.

- 11) 肥田昌子, 綾部直子 : 【一般向け講演】眠りを充実させる睡眠力アップのコツ 簡単ストレッチ. 茅ヶ崎市 健康増進講演会, 神奈川, 2014.9.30.
- 12) 北村真吾 : 【一般向け講演】「睡眠の科学」専門研究科に学ぶ眠りの講演会. 杉並健康づくりリーダーの会主催講演会, 東京, 2015.1.24.
- 13) 北村真吾 : 【一般向け講演】「心地よく眠るために」～睡眠について正しく知ろう～. 平成26年度自殺予防対策講演会, 宮城, 2015.3.26.
- 14) 綾部直子 : 【一般向け講演】心地よい眠りで心もからだも元気に～睡眠力アップのコツ～. 西東京市 第52回談話サロン, 東京, 2015.2.7.
- 15) 綾部直子 : 【一般向け講演】高齢者の睡眠障害について～高齢者の睡眠の特徴と日常生活で気を付けること～. ベネッセの地域医療セミナー こちよ眠りで元気になろう ～睡眠力アップのコツ～, 東京, 2015.2.22.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 三島和夫 : 日本睡眠学会 理事
- 2) 三島和夫 : 日本時間生物学会 理事
- 3) 三島和夫 : 日本生物学的精神医学会 評議員
- 4) 三島和夫 : 日本公衆衛生学会 評議員
- 5) 三島和夫 : 脳科学関係学会連合 評議員
- 6) 三島和夫 : 精神科臨床睡眠懇話会 世話人
- 7) 肥田昌子 : 日本時間生物学会 評議員
- 8) 北村真吾 : 日本時間生物学会 評議員
- 9) 北村真吾 : 日本生理人類学会 評議員

(3) 座長

- 1) 三島和夫 : 【シンポジウム・座長】睡眠薬多剤併用からの脱却を目指して. 日本睡眠学会第39回定期学術集会, 徳島, 2014.7.4.
- 2) 三島和夫 : 【シンポジウム・司会】職域でのうつ病予防ー睡眠教育と低強度CBTを用いた一次予防ー. 第11回日本うつ病学会総会, 広島, 2014.7.18-19.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 三島和夫 : Frontiers in Sleep and Chronobiology, Associate editor.
- 2) 三島和夫 : Psychiatry Journal, Associate editor.
- 3) 三島和夫 : Sleep and Biological Rhythms, Advisory Board.
- 4) 三島和夫 : 睡眠医療 編集委員
- 5) 三島和夫 : ねむりと医療 編集委員
- 6) 肥田昌子 : Scientific Reports, Editorial Board.
- 7) 北村真吾 : Journal of Physiological Anthropology, Handling editor.

E. 研修

(1) 研修企画

(2) 研修会講師

- 1) 北村真吾：【セミナー】病院—研究所の連携、睡眠研究について. 第四回 国立精神・神経医療研究センター精神医学サマーセミナー —精神科専門医を目指す医師・医学生の皆さんに—, 東京, 2014.7.26.
- 2) 北村真吾：【講師】論文での統計報告におけるピットフォール. 2014年度日本生理人類学会夏期セミナー, 京都, 2014.9.4-5.

F. その他

10. 知的障害研究部

I. 研究部の概要

知的障害研究部は診断研究室、治療研究室、発達障害支援研究室（部長併任）の3室体制で、知的障害など発達障害に関する研究を本年度も広範に進めた。すなわち、精神遅滞（知的障害）、学習障害、注意欠如・多動性障害（ADHD）や自閉症スペクトラムなどの発達障害とその近縁状態の発生要因解明、診断法開発、治療法策定、予防対策に関する研究をそれぞれ発展させた。

発達障害児・者はその障害の発生時期や原因、年齢、重症度、養育環境によりまったく異なった症状を示し、多彩な課題を抱えている。これらの問題解決のために当研究部では、臨床例の解析に加えて、調査研究や実験動物を用いた基礎的研究など多面的アプローチを駆使している。部の英語名は Department of Developmental Disorders と表記していることから、発達障害全般について、神経病態から理解して診断・治療・対策・処遇までの広い守備範囲を研究ターゲットとしている。

平成 26 年度の常勤研究員は部長（稲垣真澄）と診断研究室長（太田英伸）に、治療研究室長として北 洋輔が 4 月 1 日から加わった。稲垣は主として小児神経学、発達障害医学、神経生理学の立場から、太田は新生児医学の立場から研究を進めた。北は特別支援教育学、認知神経科学の立場から研究をスタートした。稲垣は発達障害支援研究室長を併任した。またセンター病院小児神経診療部の併任として発達障害児に対する診療を継続し、病院診療部のスタッフとともに臨床研究の充実のため活動を展開した。

26 年度の流動研究員は白川由佳、奥村安寿子であり、併任研究員の中川栄二（センター病院小児神経科医長、6 月から病院外来部長）とともに研究を進めた。科研費研究員は、鈴木浩太、安村 明、李 珩であった。客員研究員（井上祐紀、加我牧子、木実谷哲史、小池敏英、小枝達也、後藤隆章、竹市博臣、田中敦士、中村 俊、中村みほ、難波栄二、林 隆、細川 徹、三砂ちづる、山崎広子）15 名はこれまで通り研究部員と相互協力して発達障害に関する研究を実施した。なお平成 16 年 7 月から研究員、19 年 4 月から治療研究室室長として当研究部の活動に貢献した軍司敦子は 26 年度から新たに客員研究員となった。大城武史、小林朋佳、崎原ことえ、高橋純一、中川真智子、中村雅子、矢田部清美、山本寿子、米田れい子が研究生として常勤研究者と共に研究を進めた。外来研究員は大森幹真が新たに参加し、自閉症スペクトラム、ADHD に関する研究を進めた。実習生には長沼未知が加わった。なお、科研費研究助手として大橋啓子、須藤茉衣子が、センター研究助手として中村紀子、吉川朋子が各々事務的な補助を行った。科研費研究補助員として福田亜矢子と刑部仁美が研究者の研究活動を支えた。稲垣、太田、白川、刑部、李は神経研究所疾病研究所第二部の併任研究員あるいは研究生として、基盤研究にも携わった。

II. 研究活動

1) ADHD の診断・介入に関する研究

乳幼児期からの高次脳機能の発達とその障害について神経生理学的・神経心理学的アプローチにより研究を進めている。特に発達障害児の視・聴覚認知機能に関する研究を推進し、精神遅滞、自閉症、学習障害、ADHD など発達障害児・者に適用してその有用性を明らかにした。とくに ADHD の診断補助、重症度評価のため光トポグラフィー（NIRS）を用いた他覚的検査バッテリーの開発を行った。また、ADHD 児の非薬物治療法としてニューロフィードバック法の有効性に関する介入

研究をスタートさせた。(稲垣, 北, 安村, 高橋, 奥村, 大森, 福田, 鈴木, 加我, 中川栄二. 精神・神経疾患研究開発費, 脳科学研究戦略推進プログラム)

2) 社会性認知機能評価に関する研究

自閉症スペクトラム障害児の脳機能の検討と早期診断法の確立をはかるため, 声認知に関する脳機能評価を健常成人, 定型発達小児・学童そして, 自閉症スペクトラム児において進めた。ヒト声や環境音を用いた新しい聴力検査法を確立して, 健常幼児, 小児および成人におけるデータ収集を行い, ヒト声認知に関する簡便な検査法を開発した。また社会性認知に関する神経生理学的研究の一つとして, 健常者の舌運動実行と観察における周波数応答を比較し, コミュニケーションに関わる脳機能研究をスタートした。(稲垣, 北, 鈴木, 安村, 高橋, 崎原, 軍司, 太田. 脳科学研究戦略推進プログラム)

3) 学習障害, 発達性協調運動障害に関する研究

発達性読み書き障害・算数障害の診断治療ガイドラインを小児科臨床現場で普及するように, 講演や学会発表・誌上発表を通じて広報活動を進めた。診断法開発に関する成果は, NCNP Annual Report 2013-2014 に掲載された(タイトル: 子どもの読み書き障害の診断法開発と病態解明に基づいた効果的治療法を探索)。読み書き障害児では大細胞系機能を反映する視覚誘発電位の異常を伴うことを誌上発表した。ひらがなだけでなく漢字の読み書きの標準検査バッテリーを確立するための研究をスタートさせた。一方, 発達性協調運動障害(DCD)の国際的な診断ツールであるMABC-2(Movement Assessment Battery for Children)の日本語版の開発にも着手した。そして, 定型小児, 発達障害児を対象に妥当性, 汎用性を検証する研究に着手した。(稲垣, 北, 小林, 山崎, 鈴木, 小枝, 小池. 精神・神経疾患研究開発費, 厚生労働科学研究)

4) 発達障害児を持つ家族のレジリエンス向上に関する研究

発達障害とくに自閉症スペクトラム児の母親の支援を進めるために, 母親自身のレジリエンスの向上につながる要因を解明する研究を継続し, 内外の文献に基づきレジリエンスの枠組みを理論的に構築し, 論文発表した。さらに医師面談, 母親面談によるデータ収集を進めて, 発達障害診療における保護者支援のあり方について質的研究を行い, 成果を誌上発表した。そして発達障害児を持つ多数の母親から得られた質問票からの量的研究も進めて, 養育レジリエンスを客観的に評価可能な指標を確定しえた。今後は保護者支援によるレジリエンス変化にも着目した研究を進める必要がある。(稲垣, 鈴木, 加我, 小林. 厚生労働科学研究, 精神・神経疾患研究開発費)

5) 小児副腎白質ジストロフィー症(ALD)に関する研究

進行性代謝性変性疾患の一つである小児型ALDに対する骨髄移植(造血幹細胞移植)療法時期決定と治療後評価のための研究を継続した。白質変性部位と脳波異常の関連を周波数解析で明らかにするため神経生理学的研究を継続した(稲垣, 軍司, 崎原, 加我, 中村雅子. 厚生労働科学研究)

6) 人工保育器開発・光環境開発に関する研究

発達障害予防のため, 光受容体メラノプシンを制御するフィルターを用いた人工保育器開発や新生児集中治療室における光環境デザインの研究, ならびに人工子宮の開発・妊娠高血圧症病態解明に向けた基盤研究を進めた。また, 未熟児出生の幼児における行動量や睡眠パターンの解析をアクチグラフにより行い, 成果を発表した。(太田, 李, 中川真智子. NEDO, 文部科学省科学研究費補助金, 厚生労働科学研究)

7) 発達障害児の行動異常モデルにおける研究

Bronx waltzer (bv) マウスの中樞神経系病態解明はとくに ADHD, 自閉性障害など発達障害の病態研究, 治療研究につながるものと考えている. bv マウスの原因遺伝子が alternative splicing に関わる遺伝子 (Srrm4) であることが判明したことで, bv にみられる不安様行動との関連や脳内 GABA 機能の異常を明らかにするべく基盤研究を神経研究所疾病研究第二部との共同で遂行した. これらは発達障害の不安症状の解明と治療法開発に向けた研究につながっている. (稲垣, 太田, 白川, 刑部, 李. 厚生労働科学研究, 精神・神経疾患研究開発費)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

常勤研究者は各種講演などの場を通じて, 研究成果を社会に還元した. 常勤・非常勤の研究者全員が発達障害児・者とその家族に対しセンター病院において, 日常的診療サポートを提供している.

2) 専門教育面における貢献

稲垣, 北を中心に病院小児神経科レジデントなど若手医師への臨床, 研究指導を日常的に行っている. 毎週火曜夕方にレジデント対象の神経生理学セミナーを部内で行い, 北が主に講義, 実習を担当し, 稲垣は電気生理学的所見判読のアドバイスをを行った. また講演会や各種セミナー, 講義などにより医師, 看護師, 保健師, 福祉関係専門職, 言語聴覚士, 学校教員の教育に貢献している. 稲垣は日本小児科学会専門医試験委員として小児科医師の専門知識の普及・向上に貢献した. 稲垣は東京農工大学工学部の学生講義を担当し, 国立障害者リハビリテーションセンター学院児童指導員科の学生に対する「知的障害の医学(概論)」の講義を行った. 北は学習障害教育学特論, 学習と行動の特別支援, 学習障害指導法について東京学芸大学で講義を担当した. 鈴木は立正大学で生理心理学講義を, 大森は慶應義塾大学で心理学実験の実習を担当した. 7月開催の国立精神・神経医療研究センター小児神経セミナーでは, 全国から集まった小児神経科医に対して稲垣が発達障害の診断と治療の講義を行った. 12月に防衛医科大学学生実習を稲垣, 太田, 北らが担当した.

3) 精研の研修の主催と協力

発達障害者支援法に示されている専門家養成のため, 医学課程研修を年二回企画・実施した.

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査, 委員会等への貢献

稲垣は, 環境省の子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)の評価委員として参加した. 厚生労働省平成26年度こころの健康づくり対策事業の中で, 思春期精神保健研修事業企画委員会委員として, 研修内容に関する企画に携わり, 学習障害の講義を担当した. 稲垣は加我とともに日本障害者スポーツ協会専門委員会医学委員として, 知的障害者の国際スポーツ大会参加という社会活動に貢献している. また, 障害者スポーツ医養成研修講師を務めた. 併せて稲垣は独立行政法人国立特別支援教育総合研究所運営委員として, 当該研究所の活動に関する指導助言を行った. 太田は日野市特別支援教育専門委員会副委員長を務めた.

5) センター内における臨床的活動

全員が病院に併任としてセンター内の臨床的活動に関わり, 知的障害, 学習障害, ADHD, 自閉症スペクトラムなど発達障害の診療に定期的に携わっている.

6) その他

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Kaga M, Inagaki M, Ohta R: Epidemiological study of Landau-Kleffner syndrome (LKS) in Japan. *Brain Dev* 36(4): 284-286, 2014.
- 2) Takahashi J, Yasumura A, Nakagawa E, Inagaki M: Changes in negative and positive EEG shifts during slow cortical potential training in children with attention-deficit/hyperactivity disorder: A preliminary investigation. *NeuroReport* 25 (8): 618-624, 2014.
- 3) Hirai M, Gunji A, Inoue Y, Kita Y, Hayashi T, Nishimaki K, Nakamura M, Kakigi R, Inagaki M: Differential electrophysiological responses to biological motion in children and adults with and without autism spectrum disorders. *Research in Autism Spectrum Disorders* 8(12): 1623-1634, 2014.
- 4) Yasumura A, Yamamoto H, Yasumura Y, Moriguchi Y, Hiraki K, Nakagawa E, Inagaki M: Cognitive shifting in children with attention-deficit hyperactivity disorder: A near infrared spectroscopy study. *Journal of Psychiatry* 18(196), 2014.
- 5) Furushima W, Kaga M, Nakamura M, Gunji A, Inagaki M: Auditory agnosia as a clinical symptom of childhood adrenoleukodystrophy. *Brain and Development* (Epub ahead of print), 2014.
- 6) Inoue Y, Ito K, Kita Y, Inagaki M, Kaga M, Swanson JM: Psychometric properties of Japanese version of the Swanson, Nolan, and Pelham, version-IV Scale-Teacher Form: a study of school children in community samples. *Brain Dev* 36(8): 700-706, 2014.
- 7) Nakagawa M, Ishida Y, Nagaoki Y, Ohta H, Shimabukuro R, Hirata M, Yamanaka M, Kusakawa I: Correlation between umbilical cord hemoglobin values and phototherapy rate in healthy newborns. *Pediatr Int* (Epub ahead of print), 2015.
- 8) Okumura Y, Kasai T, Murohashi H: Attention that covers letters is necessary for the left-lateralization of an early print-tuned ERP in Japanese Hiragana. *Neuropsychologia* 69: 22-30, 2015.
- 9) 小林朋佳, 鈴木浩太, 森山花鈴, 加我牧子, 稲垣真澄: 発達障がい診療における保護者支援のあり方—母親が振り返る「子育て」の視点から—. *小児保健研究* 73(3): 484-491, 2014.
- 10) 小林朋佳, 稲垣真澄, 山崎広子, 北 洋輔, 加我牧子, 岡 明: 視覚誘発電位を用いた大細胞系機能評価と読字能力の関連性. *脳と発達* 46(6): 424-428, 2014.
- 11) 榎園 崇, 中川栄二, 遠藤ゆかり, 永井盛博, 松田悠子, 安村 明, 稲垣真澄: 自閉症スペクトラム障害児における日本語版異常行動チェックリスト (ABC-J) の再検査信頼性の検討. *臨床医薬* 30(3): 271-277, 2014.
- 12) 中村達也, 鮎澤浩一, 北 洋輔, 柴 玲子, 山形暁子, 小沢 浩: 特別支援教育における小学校教員と言語聴覚士の連携に関する調査. *言語聴覚研究* 11(3), 166-174, 2014.
- 13) 小林朋佳, 鈴木浩太, 森山花鈴, 加我牧子, 稲垣真澄: 発達障害診療における保護者支援のあり方—医師8名への面接結果から—. *小児保健研究* 73(5): 737-744, 2014.
- 14) 仲村貞郎, 中川栄二, 安村 明, 稲垣真澄: 脳波異常を伴った発達障害に対する薬物治療の検

討. 臨床医薬 30(11) : 957-962, 2014.

- 15) 竹谷隆司, 奥村安寿子, 河西哲子 : 錯視的輪郭に特異的な視覚誘発反応は認知的負荷により減衰する. 生理心理学と精神生理学 32(1) : 11-17, 2014.

(2) 総説

- 1) 稲垣真澄 : 学習障害の診かた. 小児科診療 UP-to-DATE vol.4 : 42-45, 2014.
- 2) 稲垣真澄, 安村 明 : 学習障害. 小児の治療指針 小児科診療 2014 年増刊号 77:872-874, 2014.
- 3) 稲垣真澄 : ADHD. 発達障害研究 36(1) : 31-35, 2014.
- 4) 稲垣真澄, 北 洋輔 : 発達障害の病態生理 : 発達性読み書き障害における音韻操作機能の検討. 認知神経科学 15(3) : 35-40, 2014.
- 5) 稲垣真澄, 米田れい子 : コミュニケーション障害 communication disorders (吃音, 流暢性障害を除く). 精神科治療学 29 増刊号(10) : 397-401, 2014.
- 6) 稲垣真澄, 米田れい子 : 知的障害. 小児内科 46(11) : 1662-1665, 2014.
- 7) 兼次洋介, 中川真智子, 李 珩, 太田英伸 : 管理法はどう変わったか? : 温故知新 新生児編. NICU の環境~照度への考え方の変遷. 周産期医学 44 : 527-532, 2014.
- 8) 北 洋輔, 稲垣真澄 : 読み書きの障害. 精神科臨床サービス 14(3) : 309-314, 2014.8.
- 9) 奥村安寿子, 稲垣真澄 : 「読み」と「書く」-脳の仕事はどう違うのか. 国語教育 56(9) : 6-7, 2014.
- 10) 秋山千枝子, 稲垣真澄 : 研修医のためのクリニカルクイズ<第 142 回>. 小児内科 46(12) : 1721-1722, 2014.
- 11) 軍司敦子, 北 洋輔, 稲垣真澄 : 自閉症スペクトラム障害児の顔認知研究の現状と展望. 精神保健研究 27(60) : 63-71, 2014.
- 12) 小林朋佳, 稲垣真澄 : 学習障害のライフサイクルに沿った治療・支援のあり方. 小児科診療 77(12) : 1789-1794, 2014.
- 13) 鈴木浩太, 小林朋佳, 稲垣真澄 : 発達障害児・者をもつ保護者への支援とレジリエンス. 精神保健研究 28(61) : 57-60, 2015.

(3) 著書

- 1) 稲垣真澄 : 第 1 章 発達障害の概念. 有馬正高 監修, 有馬正高, 熊谷公明, 加我牧子 編 : 発達障害 基礎と臨床. 日本文化科学社, 東京, pp2-13, 2014.
- 2) 稲垣真澄 : 第 6 章 1 学習障害総論. 有馬正高 監修, 有馬正高, 熊谷公明, 加我牧子 編 : 発達障害 基礎と臨床. 日本文化科学社, 東京, pp170-197, 2014.
- 3) 太田英伸 : 胎児・新生児の (知覚) 環境とディベロップメンタルケア. 日本ディベロップメンタルケア (DC) 研究会・仁志田博司ら 編, 標準ディベロップメンタルケア, メディカ出版, 大阪, pp62-80, 2014.
- 4) 太田英伸 : おなかの赤ちゃんは光を感じるか-生物時計とメラノプシン. 岩波科学ライブラリ - 岩波書店, 東京, 2014.
- 5) 小林朋佳, 稲垣真澄 : DN-CAS. 齋藤万比古 総編 : 子どもの心の診療シリーズ 子どもの心の処方箋ガイド 診察の仕方/診断評価/治療支援. 中山書店, 東京, pp68-70, 2014.

- 6) 小林朋佳, 稲垣真澄: 学習障害. 齋藤万比古 総編: 子どもの心の診療シリーズ 子どもの心の処方箋ガイド 診察の仕方/診断評価/治療支援. 中山書店, 東京, pp171-173, 2014.

(4) 研究報告書

- 1) 稲垣真澄: 発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 (障害者政策総合研究事業 身体・知的等障害分野) 「発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究 (研究代表者: 稲垣真澄)」平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp1-6, 2015.
- 2) 稲垣真澄: 養育レジリエンス質問票の開発に関する調査研究. 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 (障害者政策総合研究事業 身体・知的等障害分野) 「発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究 (研究代表者: 稲垣真澄)」平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp7-16, 2015.
- 3) 稲垣真澄: 発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 (障害者政策総合研究事業 身体・知的等障害分野) 「発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究 (研究代表者: 稲垣真澄)」平成 24~26 年度総合研究報告書. pp1-9, 2015.
- 4) 加我牧子: ライムゾーム病 (ファブリ病含む) に関する調査研究. 厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業 (難治性疾患政策研究事業) 「副腎白質ジストロフィー症の診断指針特に早期診断のための指針について (分担研究者: 加我牧子)」平成 26 年度総括・分担研究年度終了報告書. pp87-88, 2015.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) Kita Y: Face recognition in children with autism spectrum disorders. Proceedings of the 17th world congress of psychophysiology, p141, 2014.
- 2) Suzuki K, Gunji A, Kobayashi T, Takeichi H, Li H, Yasumura A, Inagaki M: Characteristics of passive speech processing in children with typical development and with autistic spectrum disorders. Proceedings of the 17th world congress of psychophysiology, p210, 2014.
- 3) Akutsu K, Ishii M, Shinoda H, Suzuki K: Effects of neurofeedback training on event-related components and self-reported measures in healthy individuals. Proceedings of the 17th world congress of psychophysiology, p234, 2014.
- 4) Gunji A, Okamoto H: Cortical responses modulated by auditory feedback changes in speech production: An MEG study. Proceedings of the 17th world congress of psychophysiology, p126, 2014.
- 5) 稲垣真澄: 平成 25 年度障害者スポーツ医養成講習会報告「知的障害の病理」. 障害者スポーツ指導者養成講習会・研修会報告書, pp123-137, 2014.
- 6) 安村 明, 高橋純一, 福田亜矢子, 中川栄二, 稲垣真澄: ADHD 児における実行機能の検討:

干渉抑制機能の観点から. 認知神経科学 16(3・4) : 171-178, 2015.

- 7) 高橋純一, 安村 明, 中川栄二, 稲垣真澄 : ADHD 児を対象とした SCP 訓練効果の検証. 認知神経科学 16(3・4) : 179-187, 2015.
- 8) 大竹洋子, 内海加奈子, 太田英伸, 仁志田博司 : こころ 早産児の発達を促すケア. 読売新聞夕刊, 2014.10.23.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Kita Y: Face recognition in children with autism spectrum disorders. The 17th world congress of psychophysiology, Hiroshima, 2014.9.23-27.
- 2) Ohta H: Lighting conditions and developing biological clocks. Department of Biological Sciences (特別講演), Vanderbilt University, Nashville, 2014.9.22.
- 3) Ohta H: Melanopsin and visual development of neonates. Neuroscience Program (特別講演), Vanderbilt University, Nashville, 2014.9.25.
- 4) Ohta H, Moriya T, Iigo M: Research and Development of Light Filter Incubator. The 21st Annual Meeting of Japanese Society of Chronobiology (JSC) and JSC International Symposium (Workshop), Fukuoka, 2014.11.9.
- 5) Okumura Y, Kasai T, Murohashi H: A role of visual attention in expert word reading: Implications for the cause of developmental dyslexia. The 17th World Congress of Psychophysiology, Hiroshima, 2014.9.23-27.
- 6) Gunji A, Okamoto H: Cortical responses modulated by auditory feedback changes in speech production: An MEG study. The 17th world congress of psychophysiology, Hiroshima, 2014.9.23-27.
- 7) 稲垣真澄 : 臨床診断の実際. シンポジウム 2 : 発達性読み書き障害 (Dyslexia) 診断と治療の進歩 : 医療からのアプローチ, 第 56 回日本小児神経学会学術集会, 静岡, 2014.5.29-31.
- 8) 稲垣真澄 : こどものミスマッチ反応 : 発達変化と小児神経疾患を中心に. シンポジウム 10 : ミスマッチ陰性電位と臨床応用, 第 44 回日本臨床神経生理学会学術集会, 福岡, 2014.11.19-21.
- 9) 稲垣真澄, 相原正男 : シンポジウム 16 : 発達障害の臨床生理学的理解. 第 44 回日本臨床神経生理学会学術集会, 福岡, 2014.11.19-21.
- 10) 北 洋輔 : 脳機能における特徴. シンポジウム 2 : 発達性読み書き障害 (Dyslexia) 診断と治療の進歩 : 医療からのアプローチ, 第 56 回日本小児神経学会学術集会, 静岡, 2014.5.29-31.
- 11) 安村 明, 高橋純一, 福田亜矢子, 中川栄二, 稲垣真澄 : ADHD の診断プログラムの提案—実行機能障害の観点から—. シンポジウムⅢ : 発達障害の診断と治療 : 生理学的指標に基づいた知見, 第 19 回認知神経科学学会学術集会, 東京, 2014.7.26-27.
- 12) 高橋純一, 安村 明, 中川栄二, 稲垣真澄 : ADHD の治療プログラムの提案—Neuro Feedback 法の有用性—. シンポジウムⅢ : 発達障害の診断と治療 : 生理学的指標に基づいた知見, 第 19 回認知神経科学学会学術集会, 東京, 2014.7.26-27.
- 13) 太田英伸, 中川真智子, 兼次洋介, 李 コウ, Japan RED filter study group : 早産児の光環境と睡眠. 第 8 回子どもの眠り研究会 (ワークショップ), 第 56 回日本小児神経学会学術集会,

- 静岡, 2014.5.30.
- 14) 安積陽子, 太田英伸: 小児を対象としたアクチグラフ装着部位による推定睡眠指標への影響. Does accelerometer placement affect sleep estimation in children?, 第8回子どもの眠り研究会(ワークショップ), 第56回日本小児神経学会学術集会, 静岡, 2014.5.30.
 - 15) 太田英伸: 胎児・新生児の神経系の発達とディベロップメンタル・ケア. 第10回ディベロップメンタルケアセミナー(教育講演), 東京, 2014.7.26.
 - 16) 太田英伸: 新生児・早産児の視覚発達と睡眠評価. 兵庫県立リハビリテーション中央病院 子どもの睡眠と発達医療センター特別セミナー, 兵庫, 2014.8.05.
 - 17) 太田英伸: 発達障害等に対する医学的対応の基礎. 日野市教育委員会特別支援専門研修会(教育講演), 東京, 2014.8.26.
 - 18) 太田英伸: 早産児の光環境と睡眠. 埼玉医科大学医学部・神経科学セミナー(特別講演), 埼玉, 2014.10.8.
 - 19) 太田英伸, 李 コウ, 田原 優, 中川真智子, 兼次洋介, 田口和明, 大柿 滋, 若松永憲, 稲垣真澄, 柴田重信, 土屋 滋, 岡村州博, 小田切優樹, 酒井宏水, 八重樫伸生: 妊娠高血圧症候群に対する人工赤血球を用いた治療法の開発. 第52回日本人工臓器学会(ワークショップ), 北海道, 2014.10.18.
 - 20) 太田英伸: 胎児・新生児の神経系の発達とディベロップメンタル・ケア～大脳皮質の発達. 第11回ディベロップメンタルケアセミナー(教育講演), 兵庫, 2014.10.25.
 - 21) 太田英伸: 光フィルター保育器の研究開発と実用化. シンポジウム: 時間生物学の産業応用 植物からヒトまで. 第21回日本時間生物学会, 福岡, 2014.11.09.
 - 22) 北 洋輔: 学習障害に関する研究報告. 自主シンポジウム76: 特別支援教育における発達障害への実験的接近(1)-若手研究者からの報告-, 日本特殊教育学会第52回大会, 高知, 2014.9.20-22.
 - 23) 北 洋輔, 山本寿子, 花川 隆, 稲垣真澄: 発達性読み書き障害の視覚情報処理に関する神経基盤の解明. 脳病態統合イメージングセンター第四回シンポジウム, 東京, 2015.2.5.
 - 24) 高橋秀俊, 軍司敦子, 金子 裕, 廣永成人, 萩原綱一, 稲垣真澄, 飛松省三, 花川 隆, 神尾陽子: 自閉症スペクトラムの聴覚誘発定常ガンマ律動に関する検討(続報). 脳病態統合イメージングセンター第四回シンポジウム, 東京, 2015.2.5.
 - 25) 秋元頼孝, 高橋秀俊, 軍司敦子, 金子 裕, 花川 隆, 馬塚れい子, 神尾陽子: 自閉症スペクトラム障害における 語用論理解の脳磁図研究: 予備的検討. 脳病態統合イメージングセンター第四回シンポジウム, 東京, 2015.2.5.
 - 26) 加我牧子: 先人の歩みから. シンポジウム2: 発達性読み書き障害(Dyslexia)診断と治療の進歩: 医療からのアプローチ, 第56回日本小児神経学会学術集会, 静岡, 2014.5.29-31.
 - 27) 林 隆: 取り巻く問題点(併存症・二次障害). シンポジウム2: 発達性読み書き障害(Dyslexia)診断と治療の進歩: 医療からのアプローチ, 第56回日本小児神経学会学術集会, 静岡, 2014.5.29-31.
 - 28) 小枝達也: 今後の研究と診療の展望. シンポジウム2: 発達性読み書き障害(Dyslexia)診断と治療の進歩: 医療からのアプローチ, 第56回日本小児神経学会学術集会, 静岡, 2014.5.29-31.

(2) 一般演題

- 1) Shirakawa Y, Izumi H, Nakamura S, Inoue K, Goto Y, Inagaki M: The Brain expression pattern of Srrm4, the gene mutated in bronx waltzer mice, and its effect on GABAergic interneuron. The 37th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society, Yokohama, 2014.9.11-13.
- 2) Suzuki K, Gunji A, Kobayashi T, Takeichi H, Li H, Yasumura A, Inagaki M: Characteristics of passive speech processing in children with typical development and with autistic spectrum disorders. The 17th world congress of psychophysiology, Hiroshima, 2014.9.23-27.
- 3) Akutsu K, Ishii M, Shinoda H, Suzuki K: Effects of neurofeedback training on event-related components and self-reported measures in healthy individuals. The 17th world congress of psychophysiology, Hiroshima, 2014.9.23-27.
- 4) Mogi A, Maekawa T, Onozuka H, Takoda J, Ohta H, Tei H, Kobayashi M, Suzuki T, Moriya T: EGF receptor stimulation-induced entrainment of the molecular clock in the neural stem cells. The 21st Annual Meeting of Japanese Society of Chronobiology (JSC) and JSC International Symposium, Fukuoka, 2014.11.9.
- 5) 太田英伸, 中川真智子, 兼次洋介, 李 コウ, Japan RED filter study group : 早産児の光環境と睡眠. 第 8 回子どもの眠り研究会, 第 56 回日本小児神経学会学術集会, 静岡, 2014.5.30.
- 6) 安積陽子, 太田英伸 : 小児を対象としたアクチグラフ装着部位による推定睡眠指標への影響 Does accelerometer placement affect sleep estimation in children? 第 8 回子どもの眠り研究会, 第 56 回日本小児神経学会学術集会, 静岡, 2014.5.30.
- 7) 鈴木浩太, 北 洋輔, 崎原ことえ, 平田正吾, 佐久間隆介, 奥住秀之, 国分 充, 稲垣真澄 : 自閉症スペクトラム障害児におけるエラー関連陰性電位の特徴. 第 32 回日本生理心理学会大会, 茨城, 2014.05.17.
- 8) 小林朋佳, 稲垣真澄, 鈴木浩太, 森山花鈴, 加我牧子 : 発達障害診療における保護者支援のあり方—母親が振り返る「子育て」の視点から—. 第 56 回日本小児神経学会学術集会, 静岡, 2014.5.29-31.
- 9) 安村 明, 小久保奈緒美, 高橋純一, 福田亜矢子, 仲村貞郎, 中川栄二, 稲垣真澄 : ATMT を用いた ADHD 児における視空間性ワーキングメモリの定量評価. 第 56 回日本小児神経学会学術集会, 静岡, 2014.5.29-31.
- 10) 福田亜矢子, 安村 明, 北 洋輔, 小枝達也, 岡本悠子, 小池敏英, 宮島 祐, 山下裕史, 中川栄二, 稲垣真澄 : 抑制機能の発達的变化 : ADHD 児の行動学的解析. 日本発達神経科学学会 第 3 回大会, 東京, 2014.10.18-19.
- 11) 安村 明, 岡本悠子, 小枝達也, 中知華穂, 小池敏英, 安村由希子, 中川栄二, 稲垣真澄 : 抑制機能の発達的变化 : 定型発達児の NIRS 解析. 日本発達神経科学学会 第 3 回大会, 東京, 2014.10.18-19.
- 12) 崎原ことえ, 稲垣真澄 : 舌運動観察によるミューリズム (mu rhythm) 事象関連脱同期反応の出現. 第 44 回日本臨床神経生理学会学術集会, 福岡, 2014.11.19-21.

(3) 研究報告会

- 1) 稲垣真澄, 安村 明 : 発達障害 (ADHD, LD) の診断・治療プログラム開発. 精神・神経疾患研究開発費 25-6「発達障害の包括的診断・治療プログラム開発に関する研究」(主任研究者 稲垣真澄) 平成 26 年度第 1 回研究班会議, 東京, 2014.6.1.
- 2) 中川栄二 : ADHD の抑制機能障害の病態解明. 精神・神経疾患研究開発費 25-6「発達障害の包括的診断・治療プログラム開発に関する研究」(主任研究者 稲垣真澄) 平成 26 年度第 1 回研究班会議, 東京, 2014.6.1.
- 3) 軍司敦子 : ADHD の注意障害の病態生理. 精神・神経疾患研究開発費 25-6「発達障害の包括的診断・治療プログラム開発に関する研究」(主任研究者 稲垣真澄) 平成 26 年度第 1 回研究班会議, 東京, 2014.6.1.
- 4) 小枝達也 : 学習障害の治療プログラム開発に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費 25-6「発達障害の包括的診断・治療プログラム開発に関する研究」(主任研究者 稲垣真澄) 平成 26 年度第 1 回研究班会議, 東京, 2014.6.1.
- 5) 小池敏英 : 学習障害の診断プログラム開発に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費 25-6「発達障害の包括的診断・治療プログラム開発に関する研究」(主任研究者 稲垣真澄) 平成 26 年度第 1 回研究班会議, 東京, 2014.6.1.
- 6) 稲垣真澄 : 発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究. 厚生労働科学研究「発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究」(研究代表者 稲垣真澄) 平成 26 年度第 1 回研究班会議, 東京, 2014.6.29.
- 7) 鈴木浩太 : 母親アンケート大規模調査解析結果について. 厚生労働科学研究「発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究」(研究代表者 稲垣真澄) 平成 26 年度第 1 回研究班会議, 東京, 2014.6.29.
- 8) 稲垣真澄, 福田亜矢子, 安村 明, 大森幹真, 奥村安寿子, 北 洋輔 : 発達障害 (ADHD, LD) の診断・治療プログラム開発. 精神・神経疾患研究開発費 25-6「発達障害の包括的診断・治療プログラム開発に関する研究」(主任研究者 稲垣真澄) 平成 26 年度第 2 回研究班会議, 東京, 2014.11.16.
- 9) 中川栄二, 大久保真理子, 久保田一生, 安村 明, 福田亜矢子, 稲垣真澄 : ADHD の抑制機能障害の病態解明. 精神・神経疾患研究開発費 25-6「発達障害の包括的診断・治療プログラム開発に関する研究」(主任研究者 稲垣真澄) 平成 26 年度第 2 回研究班会議, 東京, 2014.11.16.
- 10) 軍司敦子, 大城武史, 武井雄一, 井上祐紀, 宮島 祐 : 注意障害の病態生理の解明. 精神・神経疾患研究開発費 25-6「発達障害の包括的診断・治療プログラム開発に関する研究」(主任研究者 稲垣真澄) 平成 26 年度第 2 回研究班会議, 東京, 2014.11.16.
- 11) 小池敏英, 中知華穂, 銘苺実土, 恩田詩織, 佐藤一葉, 瀧元沙祈, 中村理美 : 学習障害の診断プログラム開発に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費 25-6「発達障害の包括的診断・治療プログラム開発に関する研究」(主任研究者 稲垣真澄) 平成 26 年度第 2 回研究班会議, 東京, 2014.11.16.
- 12) 小枝達也, 関あゆみ, 谷中久和, 内山仁志, 縄手雅彦 : 学習障害の治療プログラム開発に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費 25-6「発達障害の包括的診断・治療プログラム開発に関する研究」(主任研究者 稲垣真澄) 平成 26 年度第 2 回研究班会議, 東京, 2014.11.16.

- 13) 稲垣真澄：発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究. 厚生労働科学研究「発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究」(研究代表者 稲垣真澄) 平成 26 年度第 2 回研究会議, 東京, 2014.11.23.
- 14) 鈴木浩太：発達障害児を持つ保護者レジリエンス研究のレビューならびに本研究班での調査解析結果のご紹介. 厚生労働科学研究「発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究」(研究代表者 稲垣真澄) 平成 26 年度第 2 回研究会議, 東京, 2014.11.23.
- 15) 中川栄二：発達障害を伴う小児てんかんの臨床病態の解明. 精神・神経疾患研究開発費「てんかんの成立機序の解明と診断・治療法開発のための基礎・臨床の融合的研究」(主任研究者 中川栄二) 平成 26 年度第 2 回研究会議, 東京, 2014.11.24.
- 16) 稲垣真澄：てんかんの神経生理学的マーカーの開発と病態解明. 精神・神経疾患研究開発費「てんかんの成立機序の解明と診断・治療法開発のための基礎・臨床の融合的研究」(主任研究者 中川栄二) 平成 26 年度第 2 回研究会議, 東京, 2014.11.24.

(4) その他

C. 講演

- 1) 稲垣真澄：知的障害の医学(概論). 国立障害者リハビリテーションセンター学院児童指導員科, 埼玉, 2014.6.19.
- 2) 稲垣真澄：発達障害の臨床病態解明研究と支援法の開発. 東京農工大学平成 26 年度脳神経科学講義, 東京, 2014.6.25.
- 3) 稲垣真澄：発達障害総論(ADHD,LDを中心に). 第 20 回国立精神・神経医療研究センター小児神経セミナー, 東京, 2014.7.18.
- 4) 稲垣真澄：読み書き障害のある子どものみかた：指導を中心に. 特別支援教育講演会, 千葉, 2014.8.22.
- 5) 稲垣真澄：学習障害(限局性学習症)：診断と治療. 多摩発達障害講演会, 東京, 2014.10.16.
- 6) 稲垣真澄：知的障害. 平成 26 年度中級障害者スポーツ指導員養成講習会(4), 東京, 2014.11.15.
- 7) 太田英伸：学童期を中心とした発達障害の治療と睡眠障害. Psychiatry Forum in Togane 2014, 千葉, 2014.12.5.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 稲垣真澄：日本小児神経学会 評議員
- 2) 稲垣真澄：日本臨床神経生理学会 代議員
- 3) 稲垣真澄：日本神経精神薬理学会 評議員
- 4) 稲垣真澄：小児脳機能研究会世話人 事務局
- 5) 稲垣真澄：日本てんかん学会 てんかん専門医指導医

- 6) 稲垣真澄：日本発達障害学会 評議員
- 7) 太田英伸：日本時間生物学会 評議員

(3) 座長

- 1) 稲垣真澄, 小枝達也：座長. シンポジウム 2：発達性読み書き障害 (Dyslexia) 診断と治療の進歩：医療からのアプローチ. 第 56 回日本小児神経学会学術集会, 静岡, 2014.5.29-31.
- 2) 稲垣真澄, 榎日出夫：座長. 実践教育セミナー5：明日から役立つ小児神経生理学入門 EP/ERP 記録実演. 第 56 回日本小児神経学会学術集会, 静岡, 2014.5.29-31.
- 3) 稲垣真澄：司会. シンポジウムⅢ：発達障害の診断と治療：生理学的指標に基づいた知見. 第 19 回認知神経科学学会学術集会, 東京, 2014.7.26-27.
- 4) 稲垣真澄, 相原正男：座長. シンポジウム 16：発達障害の臨床生理学的理解. 第 44 回日本臨床神経生理学学会学術集会, 福岡, 2014.11.19-21.
- 5) 北 洋輔：企画. 自主シンポジウム 76：特別支援教育における発達障害への実験的接近 (1) -若手研究者からの報告-, 日本特殊教育学会第 52 回大会, 高知, 2014.9.20-22.
- 6) 北 洋輔, 軍司敦子：司会. 自主シンポジウム 76：特別支援教育における発達障害への実験的接近 (1) -若手研究者からの報告-, 日本特殊教育学会第 52 回大会, 高知, 2014.9.20-22.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 稲垣真澄：日本小児神経学会機関誌「脳と発達」 編集委員
- 2) 稲垣真澄：日本小児神経学会機関誌「Brain & Development」 Editorial Board
- 3) 稲垣真澄：発達障害研究 編集委員
- 4) 太田英伸：日本時間生物学会誌 編集委員
- 5) 北 洋輔：日本小児神経学会機関誌「Brain & Development」 Editorial Board

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 第 17 回発達障害支援のための医学研修, 東京, 2014.7.2-3.
- 2) 第 18 回発達障害支援のための医学研修, 東京, 2015.1.28-29.

(2) 研修会講師

- 1) 稲垣真澄：学習障害. 思春期精神保健研修事業 思春期精神保健対策医療従事者専門研修 (1), 千葉, 2014.12.18.
- 2) 稲垣真澄：学習障害 (限局性学習症) の診断におけるポイント. 福島県精神医学会主催 精神科専門医制度生涯教育研修会, 福島, 2015.2.22.
- 3) 稲垣真澄：知的障害の病理. 平成 26 年度公益財団法人日本障がい者スポーツ協会公認 障がい者スポーツ医養成講習会, 埼玉, 2015.2.28.

F. その他

11. 社会復帰研究部

I. 研究部の概要

社会復帰研究部は、生物・心理・社会的観点から精神疾患や精神障害を多面的に捉え、施策としても導入可能な精神保健医療福祉のサービスプログラムのモデルを呈示し、その効果に関する実証研究を推進することを、目的の第一としている。

近年の研究活動を具体的に述べると、重症精神障害者の地域生活支援を可能にするための訪問を主体とした包括型地域生活支援プログラム（ACT）のモデル作り及び普及のための臨床研究、精神障害者の一般就労と職場適応を支援するためのモデルプログラム（IPS）の開発普及、センター病院専門疾病センターの「地域精神科モデル医療センター」の運営にコミットし、デイケア・在宅支援室の活動をリフォームする研究などを行っている。

加えて、平成 24 年度より平成 26 年度にかけては、東日本大震災の被災地における支援活動の一環として、東北沿岸部の複数地域におけるコンサルティング・研修活動とその状況の定期的なモニタリング、被災地間のネットワーク作りのための交流会等の企画、生活実態調査の実施等の地域精神保健医療福祉システム再構築に向けた活動を継続して実施した。平成 25 年度からは、治療・支援の基礎となる、治療者—利用者の関係性に注目し、とりわけ、精神科医・患者間の共同意思決定（shared decision making）を促進する PC ツールの開発にも力を入れている。

これらの活動は、地域中心の精神保健医療福祉のシステムモデル作りと括ることが出来るが、システムとなるためには、個々の支援技法が統合され、キャッチメントエリア全体の地域精神医療文化が形成されることが必要であろう。地域精神科モデル医療センターとの協働の活動のゴールは、このあたりにおいている。めざすところは、当事者の「人生や生活を取りもどす」（recovery）ことへの支援として、地域精神医療を鍵概念とし、我が国の精神医療のありかたを転換することである。

人員構成は以下のとおりである。部長：伊藤順一郎、精神保健相談研究室長：佐藤さやか、援助技術研究室長：山口創生、流動研究員：下平美智代、種田綾乃、科研費研究補助員：村木美香、堀尾奈都記、兼任研究員：平林直次、坂田増弘、客員研究員：大嶋 巖（日本社会事業大学）、安西信雄（帝京平成大学）、西尾雅明（東北福祉大学）、原 敬造（原クリニック）、瀬戸屋雄太郎（世界保健機関）、福井里江（東京学芸大学）、齋川信幸（日本社会事業大学）、吉田光爾（日本社会事業大学）、研究生：久永文恵、藤井和世。

II. 研究活動

1) 精神科デイケアから地域への早期移行に関する支援モデル構築と評価（伊藤順一郎・佐藤さやか、山口創生）

国立精神・神経医療研究センター病院デイケアと協働し、a) 個別性の高いケースマネジメント、b) 積極的な地域へのアウトリーチ、c) 援助付き雇用モデルによる就労支援、d) エビデンスに基づく集団プログラム、の 4 つの援助技術を核とした新しい精神科デイケアモデルの構築を行った。またデイケア利用歴が 1 年以上で調査時点でのデイケアもしくはショートケアの利用が週 2 回以上のものを対象として 13 名のデイケア利用者をリクルートし、ベースラインデータの収集後に上記 1)～4) の支援を実施した。来年度は 1 年後データを収集し、支援の効果検討を行う予定である。

2) 精神障害者の地域生活支援の在り方とシステム構築に関する研究（伊藤順一郎、佐藤さやか）

「入院に頼らない」精神保健医療福祉システムへのパラダイムシフトをめざし、英国やイタリアのシステムを参考にしつつ、我が国で有効かつ実現可能な地域生活中心の精神保健医療福祉システムへの変化はどのように始められるのか、システム変換の障壁はどのようなものなのか検討し核となる資料を作成することを目的に 6 つの分担研究班を構成した。今年度は初年度であったため、各分担研究班は実態把握と研究計画の立案を行った。

3) 東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援

に関する研究（伊藤順一郎，種田綾乃）

東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に向けた中長期支援の一環として、東北地方沿岸部の 7 地区（仙台市，女川町，石巻市，福島県全域の精神保健福祉事業所ネットワーク，相馬市，宮古市，盛岡市）において、現地支援者に対する継続的なコンサルティング活動を行い、現地支援者への定期的なフォーカスグループ・インタビューにより、その効果を確認した。また、福島県相馬市および仙台市の精神保健福祉手帳所持者を対象とした無記名自記式の生活実態調査を実施し、その結果を報告書としてとりまとめ、市町村に還元した。

4) 精神障害者の就労移行を促進するための研究（伊藤順一郎，下平美智代，山口創生）

国内で精神障害者の就労に有用とされる援助付き雇用型あるいは individual placement and support (IPS) 型のサービスを展開する 12 機関のアウトカムと支援内容等を検証する調査の研究計画を立案した。具体的には、12 機関の新規利用者（診断名は統合失調症のみ）を対象として、機能や社会機能、生活の質等を測定するほか、12 ヶ月で利用したサービスや所得保障の測定、サービスコード票を用いた支援内容の把握を行う。2014 年 12 月から対象者の募集を開始し、2015 年 3 月までに 14 名が参加した（目標は 50 名）。

5) 精神科医療でのリカバリー志向の共同意思決を促進する PC ツールの開発と効果検証（伊藤順一郎，山口創生）

診察場面で、患者と医師の双方が治療内容の決定について積極的に参加する共同意思決定 (shared decision making: SDM) を促進するために、診察準備ツール (PC ソフト) を開発し、当事者スタッフを含めた実践システムを模索した。これらの SDM システムの効果検証をするために、無作為化比較臨床試験 (randomised controlled trial: RCT) を実施中である。最終的に約 60 名が本研究に参加しており、すでにベースラインの調査が終了した。

6) 精神障がい者への就労支援現場で使用可能な評価法の開発と基礎的資料の整備（佐藤さやか）

精神障害者の就労を支援する上で重要な a) 社会的スキルと b) 認知機能を測定できる質問紙の開発をめざし準備を行った。a) については精神障害者の雇用に精通した企業の人事担当者にインタビューを行い、職場に必要な対人スキルに関する項目を収集した。b) は米国で開発された職場における行動で認知機能を測定する質問紙 Vocational Cognitive Rating Scale (VCRS) 日本語版作成について原著者から許諾を得、翻訳とバックトランスレーションを行った。a) と b) の結果得られた項目案について全国 3 カ所の医療機関および支援機関から合計 60 名あまりのデータを収集した。次年度には目標数である 150 名程度のデータが得られる予定である。

7) 地域精神科モデル医療センター（伊藤順一郎，佐藤さやか，山口創生）

我が国における地域中心の精神科医療のモデル構築を目的として、センター病院在宅支援室 PORT およびデイケアと協働し、多職種アウトリーチサービスや就労支援までを視野にいれた医療型デイケアを中心とした地域支援を実施する。平成 25 年度以降、上述の 1), 2) および 5) の研究協力機関の一環として、在宅支援室 PORT ではアウトリーチ活動における認知行動療法のパッケージ作り、またデイケアでは新たな精神科デイケアもモデル開発および共同意思決定に関する実践およびデータ収集を行っている。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・東日本大震災の支援活動の一環として、被災地における精神保健医療福祉システム再構築に向けた支援者支援の状況等を、シンポジウムや当部ホームページを通じて公表した。また被災地における精神障害者の実態調査を市町村の福祉課と共同実施し、その結果は報告書として報告書としてとりまとめ、市町村に還元した（伊藤，種田）
- ・地域における講演会などに講師として可能な限り参加した（伊藤，佐藤）

2) 専門教育面における貢献

- ・各都道府県の精神保健福祉センター，福祉局等で行われる研修事業のうち、包括型地域生活支援プログラム (ACT)，心理教育，デイ・ケア，ホームヘルプ，家族支援，解決志向的

- 接技法等のワークショップ，講演等に可能な限り協力した（伊藤）
- ・早稲田大学人間科学部「ケースフォーミュレーション」非常勤講師（佐藤）
 - ・日本社会事業大学社会福祉学科「精神保健学」非常勤講師（佐藤）
 - ・東洋大学「精神保健福祉論」，「精神保健福祉援助技術」（精神保健福祉士国家試験直前対策講座）非常勤講師（山口）
 - ・文教大学「精神障害者の生活支援システム」非常勤講師（山口）
 - ・神奈川県立保健福祉大学「人間関係とコミュニケーションⅡ」非常勤講師（種田）
- 3) 精研の研修の主催と協力
- ・第 12 回 ACT・多職種アウトリーチ研修の主任・講師，第 6 回アウトリーチによる地域ケアマネジメント（福祉型）研修の主任・講師，第 2 回医療における個別就労支援研修の主任（伊藤）
 - ・第 12 回 ACT・多職種アウトリーチ研修の副主任，第 6 回アウトリーチによる地域ケアマネジメント（福祉型）研修の副主任，第 2 回医療における個別就労支援研修の副主任・講師（佐藤，山口）
- 4) 保健医療行政・政策に関する研究・調査，委員会等への貢献
- ・独立行政法人 高齢・障害・求職者雇用支援機構障害者職業総合センター「保健医療、福祉、教育分野における障害者の職業準備と就労移行等を促進する地域支援のあり方に関する研究委員会」オブザーバー（山口，佐藤）
 - ・「平成 26 年度厚生労働省障害者総合福祉推進事業 訪問による自立訓練（生活訓練）を活用した地域生活支援の在り方及び有期限の施設入所を活用した退院支援に関する研究」：事業検討委員会メンバーとして，研究プロトコルの立案，研究の推進（ヒアリング）などに協力した（山口）
- 5) センター内における臨床的活動
- ・地域精神科モデル医療センターの急性期病棟，在宅医療支援室，および精神科デイケアと連携し，センター内での地域精神科リハビリテーションのシステム作りに関与している（伊藤，佐藤，山口）
 - ・国立精神・神経医療研究センター病院在宅支援室 PORT にて週に 0.5 程度，訪問時を中心に利用者本人および家族に認知行動療法を提供した（佐藤）
 - ・国立国際医療研究センター国府台病院精神科で，毎週 1～1.5 ポイント外来診療に従事している（伊藤）

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Yamaguchi S, Koike S, Watanabe K, Ando S: Development of a Japanese version of the Reported and Intended Behaviour Scale: Reliability and validity. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 68(6): 448-455, 2014.6.
- 2) Yamaguchi S, Ling H, Kim K, Mino Y: Stigmatisation towards people with mental health problems in secondary school students: an international cross-sectional study between three cities in Japan, China and South-Korea. *International Journal of Culture and Mental Health* 7(3): 273-283, 2014.5.
- 3) 佐藤さやか, 山口創生, 清澤康伸, 大島真弓, 坂田増弘, 伊藤順一郎: デイケアにおける援助付き雇用の実践と成果. *デイケア実践研究* 18(2): 37-43, 2015.3.31.

(2) 総説

- 1) 伊藤順一郎, 坂田増弘, 佐藤さやか: 地域における統合失調症治療に必要な構造とスタッフ技術—国立精神・神経医療研究センター病院地域精神モデル医療センターのリフォームの過程から—。精神神経学雑誌 116(6): 505-512, 2014.6.25.
- 2) 伊藤順一郎: これからの10年で精神科診療所に達成してほしいこと～地域連携を中心に～。日本精神神経科診療所協会誌 別冊(40): 13-27, 2014.8.
- 3) 吉田光爾, 伊藤順一郎: 多職種アウトリーチサービスと医療経済—診療報酬上の課題と今後—。精神神経学雑誌 116(6): 499-504, 2014.6.25.
- 4) 伊藤順一郎, 吉田光爾, 坂田増弘, 西尾雅明: 精神科多職種アウトリーチチームの効果: サービス内容やサービス量との関連について, 6か月追跡の報告。日本社会精神医学会雑誌 24(1): 45-53, 2015.2.25.
- 5) 佐藤さやか, 吉田光爾, 伊藤順一郎: 訪問型精神科医療の今後の展開。精神科 25(6): 649-653, 2014.12.28.
- 6) 佐藤さやか: 地域精神保健・リハビリテーションと生活支援—。臨床心理学 15(1): 49-53, 2015.01.10.
- 7) 山口創生, 種田綾乃, 市川 健, 坂田増弘, 久永文恵, 福井里江, 藤田英親, 伊藤順一郎: 日本の精神科診療における患者—医師関係とコミュニケーション: システムティック・レビュー。精神医学 56(6): 523-534, 2014.6.15.
- 8) 山口創生, 種田綾乃, 福井里江, 久永文恵, 澤田優美子, 伊藤順一郎: 精神障害者の社会復帰とリカバリーを促進する shared decision making プログラム: ピアスタッフと共同した臨床システムの発展。こころの健康 29(2): 8-13, 2014.12.
- 9) 鈴木友理子, 深澤舞子, 池淵恵美, 後藤雅博, 種田綾乃, 永松千恵, 伊藤順一郎: 東日本大震災後のコミュニティと地域精神保健医療福祉システム再構築の課題—支援者によるワールドカフェ方式の対話から—。家族療法研究 31(1): 111-114, 2014.4.25.

(3) 著書

(4) 研究報告書

- 1) 伊藤順一郎, 鈴木友理子, 西尾雅明, 大野 裕, 佐竹直子, 田島光浩, 三品桂子, 池淵恵美, 武田牧子, 高木俊介, 安保寛明, 種田綾乃, 深澤舞子, 永松千恵, 村木美香, 後藤雅博: 東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究。厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業) 東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究(研究代表者: 樋口輝彦) 平成26年度 総括研究報告書。pp3-18, 2015.3.
- 2) 鈴木友理子, 種田綾乃, 深澤舞子, 永松千恵, 村木美香, 伊藤順一郎: 重い精神障害をもつ者における震災後の生活実態～相馬市・仙台市における質的データの分析結果から～。厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業) 東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究(研究代表者: 樋口輝彦) 平成26年度 総括・分担研究報告書。pp31-50, 2015.3.
- 3) 安保寛明, 加藤伸二, 田代大吉, 小成祐介, 伊藤順一郎: 宮古市(岩手-A)における地域精神保健医療福祉システムの再構築に向けた支援者支援に関する報告。厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業) 東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究(研究代表者: 樋口輝彦) 平成26年度 総括・分担研究報告書。pp177-180, 2015.3.
- 4) 安保寛明, 寺井良夫, 金野万里, 佐藤充子, 伊藤順一郎: 盛岡市(岩手-B)における地域精神保健医療福祉システムの再構築に向けた支援者支援に関する報告。厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業) 東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究(研究代表者: 樋口輝彦) 平成26年度 総

- 括・分担研究報告書. pp181-185, 2015.3.
- 5) 池淵恵美, 種田綾乃, 伊藤順一郎, 鈴木友理子, 深澤舞子, 永松千恵, 村木美香: 被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に向けた外部支援の成果と課題～三年間の支援活動に関するヒアリング調査から～. 厚生労働科学研究費補助金 (地域医療基盤開発推進研究事業) 東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究 (研究代表者: 樋口輝彦) 平成 26 年度 総括・分担研究報告書. pp187-218, 2015.3.
 - 6) 伊藤順一郎: 精神障害者の地域生活支援の在り方とシステム構築に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 精神障害者の地域生活支援の在り方とシステム構築に関する研究 (研究代表者: 伊藤順一郎) 平成 26 年度 総括・分担研究報告書. pp1-6, 2015.3.
 - 7) 佐藤さやか, 梅田典子, 富沢明美: ACT・多職種アウトリーチチームの治療的機能についての評価に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 精神障害者の地域生活支援の在り方とシステム構築に関する研究 (研究代表者: 伊藤順一郎) 平成 26 年度 総括・分担研究報告書. pp67-81, 2015.3.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 伊藤順一郎: 統合失調症患者の家族支援. 精神保健研究 28(61): 13-21, 2015.3.31.
- 2) 下平美智代: 開かれた対話による治療 オープンダイアログの現場を訪れて (前篇). メンタルヘルスマガジン こころの元気 plus 9(1): 32-35, 2015.1.
- 3) 伊藤順一郎, 鈴木友理子, 種田綾乃, 深澤舞子, 佐藤さやか, 吉田光爾, 樋口輝彦: 重い精神障害をもつ者における震災後の生活実態～相双地域における精神障害者保健福祉手帳所持者に対する調査 調査報告書. 2014.4.
- 4) 伊藤順一郎, 鈴木友理子, 種田綾乃, 深澤舞子, 永松千恵, 樋口輝彦: 重い精神障害をもつ者における震災後の生活実態～相馬市地域における精神障害者保健福祉手帳所持者に対する調査 調査報告書. 2015.1.
- 5) 伊藤順一郎, 鈴木友理子, 種田綾乃, 深澤舞子, 永松千恵, 村木美香, 樋口輝彦: 重い精神障害をもつ者における震災後の生活実態～仙台市地域における精神障害者保健福祉手帳所持者に対する調査 調査報告書. 2015.3.
- 6) 下平美智代: 開かれた対話による治療 オープンダイアログの現場を訪れて (後篇). メンタルヘルスマガジン こころの元気 plus 9(3): 34-37, 2015.3.
- 7) 下平美智代: さらに見えてきたオープンダイアログ. フィンランド、ケロプダス病院見聞録. 精神看護 18(2): 106-122, 2015.3.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Sato S, Yamaguchi S, Shimodaira M, Taneda A, Ichikawa K, Ishii K, Usui T, Satake N, Masuhiro Sakata M, Nishio M, Ikebuchi E, Ito J: Effects of cognitive remediation and supported employment for people with severe mental illness in Japan: a randomised controlled trial. The 5th World Congress of Asian Psychiatry, Fukuoka, 2015.3.5.
- 2) Yamaguchi S, Sato S, Horio N, Shimodaira M, Taneda A, Yoshida K, Shibata Y, Ito J: Economic evaluation of cognitive remediation and supported employment in people with severe mental illness. In Symposium 20: development and implementation of supported employment for people with severe mental illness in Japanese settings. The 5th World Congress of Asian Psychiatry, Fukuoka, 2015.3.5.

- 3) Shimodaira M, Yamaguchi S, Katayama Y, Yoshida K, Sato S, Taneda A, Ito J: Development of a tool for Japanese version of individual placement and support fidelity scale. The 5th World Congress of Asian Psychiatry, Fukuoka, 2015.3.5.
- 4) Taneda A, Niekawa N, Yamaguchi S, Sato S, Shimodaira M, Yoshida K, Ito J: Supported employment staffs' attitudes towards strength-approach: Users' rating and staffs' self-rating. The 5th World Congress of Asian Psychiatry, Fukuoka, 2015.3.5.
- 5) 伊藤順一郎: 家族心理教育. 第31回日本家族研究・家族療法学会, 兵庫, 2014.7.19-21.
- 6) 伊藤順一郎: リカバリーと精神科リハビリテーション支援者にむけてのメッセージ. 日本精神障害者リハビリテーション学会 第22回いわて大会特別講演, 岩手, 2014.10.31.
- 7) 伊藤順一郎, 福井里江, 久永文恵, 澤田優美子, 山口創生, 種田綾乃, 相川章子: リカバリー志向のSDM(共同意思決定)を可能にする精神科診察システム「SHARE」の開発. 日本精神障害者リハビリテーション学会 第22回いわて大会 自主プログラム, 岩手, 2014.11.1.
- 8) 伊藤順一郎, 鈴木友理子, 種田綾乃, 米倉一磨, 渋谷浩太, 小成祐介, 駿河孝史, 佐竹直子: 被災地における支援者支援のメリットとデメリット、これからに向けて: 現地支援者からの発信. 日本精神障害者リハビリテーション学会 第22回いわて大会 自主プログラム, 岩手, 2014.11.1.
- 9) 伊藤順一郎, 鈴木高男: 摂食障害の家族心理教育～家族による家族学習会を中心に～. 心理教育・家族教室ネットワーク第18回研究集会, 愛知, 2015.3.6-7.
- 10) 伊藤順一郎, 福井里江, 山口創生, 種田綾乃, 久永文恵, 澤田優美子, 相川章子: リカバリー志向のSDM(共同意思決定)と心理教育～精神科医療機関向けSDM支援ツール「SHARE」の開発を通して～. 心理教育・家族教室ネットワーク第18回研究集会, 愛知, 2015.3.6-7.
- 11) 佐藤さやか: 認知機能リハビリテーションと援助付き雇用を組み合わせた就労支援の効果. 公募シンポジウム72「統合失調症に対する精神科リハビリテーションに役立つ心理社会的支援」(企画者: 佐藤さやか), 第78回日本心理学会, 京都, 2014.9.11.
- 12) 佐藤さやか, 坂田増弘, 大島真弓, 関根理恵, 種田綾乃, 下平美智代, 山口創生, 伊藤順一郎: アウトリーチ、就労支援、ピアサポートの提供を目指すデイケア改革. シンポジウム2「精神科デイケアの広がり」と深化」(企画者: 岩田和彦), 第55回中国・四国精神神経学会/第38回中国・四国精神保健学会, 山口, 2014.10.25.
- 13) 佐藤さやか, 山口創生, 下平美智代, 種田綾乃, 市川 健, 石井和子, 臼井卓也, 佐竹直子, 坂田増弘, 西尾雅明, 池淵恵美, 伊藤順一郎: Thinking Skills for Work～Cogpackを用いた認知機能リハと就労支援～. ワークショップ: 認知機能リハビリテーション, 第一回CEPD研究会, 東京, 2015.3.14.
- 14) 山口創生: リカバリー志向の精神障害者における意思決定支援: Shared decision makingの取り組み. リカバリー志向のSDM(共同意思決定)と心理教育～精神科医療機関向けSDM支援ツール「SHARE」の開発を通して～. 心理教育・家族教室ネットワーク第18回研究集会, 愛知, 2015.3.6-7.
- 15) 下平美智代, 古家美穂, 福島 円, 川村 全, 出口琢也, 丹羽大輔: オープンダイアログ(開かれた対話)、精神病治療へのフィンランドのアプローチ. 日本精神障害者リハビリテーション学会 第22回いわて大会 自主プログラム, 岩手, 2014.10.30.
- 16) 古家美穂, 下平美智代, 福島 円, 川村 全, 出口琢也, 丹羽大輔: オープンダイアログ 体験ワークショップ. 日本精神障害者リハビリテーション学会 第22回いわて大会 自主プログラム, 岩手, 2014.10.31.
- 17) 下平美智代: Open Dialogue Finland Visiting Report. 第1回オープンダイアログ連絡会議, 東京, 2015.3.30.

(2) 一般演題

- 1) Sato S, Yamaguchi S, Shimodaira M, Taneda A, Taguchi Y, Ichikawa K, Ikebuchi E, Ito J: Effects of the job assistance which combined cognitive remediation and supported employment for people with severe mental illness in Japan. 16th Pacific Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting, Vancouver, 2014.10.6.
- 2) Koike S, Yamaguchi S, Ojio, Y, Shimada T, Watanabe K, Ando S: The effect of nominal change on stigma toward schizophrenia: 12 years from ‘mind-split-disease’ to ‘integration disorder’ in Japan. 16th World Congress of Psychiatry, Madrid, 2014.9.17.
- 3) Koike S, Yamaguchi S, Ojio, Y, Shimada T, Watanabe K, Ando S: Name change of schizophrenia reduces stigma in general adolescents: 12 years from “MIND-SPLIT-DISEASE” to “INTEGRATION DISORDER” in Japan. 9th International Conference on Early Psychosis, Tokyo, 2014.11.18.
- 4) Yamaguchi S, Koike S, Ojio, Y, Shimada T, Watanabe K, Ando S: Filmed social contact v. internet self-learning to reduce mental health-related stigma among university students in Japan: a randomized controlled trial. 9th International Conference on Early Psychosis, Tokyo, 2014.11.18.
- 5) Koike S, Yamaguchi S, Ojio, Y, Shimada T, Watanabe K, Ando S: The effect of name change for schizophrenia from “mind-split-disease” to “Integration disorder” in Japan: a preliminary survey in university students. Refocus on Recovery 2014 conference, London, 2014.6.2-3.
- 6) Taneda A, Ito J, Suzuki Y, Fukasawa M, Nagamatsu C, Takeda M, Higuchi T: Impact of the Great East Japan earthquake on the well-being of psychiatric service users in Fukushima. WPA Section on Epidemiology and Public Health - 2014 Meeting, Nara, 2014.10.17.
- 7) 佐藤さやか, 市川 健, 山口創生, 下平美智代, 種田綾乃, 吉田光爾, 伊藤順一郎, 高井敏子: 障害者就業・生活支援センターにおける精神障害者への就労支援に関する全国実態調査 (最終報告). 日本精神障害者リハビリテーション学会 第 22 回いわて大会, 岩手, 2014.10.31.
- 8) 佐藤さやか, 山口創生, 下平美智代, 種田綾乃, 吉田光爾, 市川 健, 石井和子, 臼井卓也, 佐竹直子, 坂田増弘, 西尾雅明, 池淵恵美, 伊藤順一郎: 重い精神障害をもつ者に対する認知機能リハと援助付き雇用の組み合わせによる就労支援～ RCT デザインによる効果検討～. 第 10 回日本統合失調学会 東京大会, 東京, 2015.3.27.
- 9) 山口創生: 重症精神障害者に対する仲介型ケアマネジメントによる就労支の効果と限界: 無作為化比較臨床試験における対照群の結果から. 日本精神保健福祉学会 第 3 回名古屋大会, 愛知, 2014.6.27.
- 10) 山口創生, 泉田信行, 佐藤さやか, 下平美智代, 種田綾乃, 吉田光爾, 池淵恵美, 石井和子, 臼井卓也, 坂田増弘, 佐竹直子, 西尾雅明, 伊藤順一郎: 認知機能リハビリテーションと援助付き雇用の費用対効果: 無作為化比較臨床試験 II. 第 10 回日本統合失調学会 東京大会, 東京, 2015.3.27.
- 11) 小池進介, 山口創生, 小塩靖崇, 島田隆文, 渡辺慶一郎, 安藤俊太郎: 統合失調症の名称変更効果: 12 年経過時における大学生の認知度とスティグマ. 第 10 回日本統合失調学会 東京大会, 東京, 2015.3.28.
- 12) 藤澤尚子, 池田朋広, 常岡俊昭, 高木のり子, 石坂理江, 杉沢 諭, 種田綾乃, 池田勝之, 奥原孝幸, 稲本淳子: 精神障害と物質使用の問題を併存する対象者のプログラムにおけるワークブックを用いた実施について. 平成 26 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 2014.10.1.

- 13) 種田綾乃, 伊藤順一郎, 鈴木友理子, 深澤舞子, 永松千恵, 武田牧子, 樋口輝彦: 福島県における精神保健福祉サービス事業所利用者の生活実態: 震災にともなう生活の変化とニーズの実態. 日本精神リハビリテーション学会 第22回いわて大会, 岩手, 2014.10.31.
- 14) 深澤舞子, 鈴木友理子, 種田綾乃, 永松千恵, 須藤康宏, 伊藤順一郎, 樋口輝彦: 東日本大震災被災地における精神障害者保健福祉手帳所持者の生活実態: 福祉等サービスの利用有無による比較. 日本精神リハビリテーション学会 第22回いわて大会, 岩手, 2014.10.31.
- 15) 種田綾乃, 伊藤順一郎, 鈴木友理子, 深澤舞子, 永松千恵, 武田牧子, 樋口輝彦: 福島県における精神保健福祉サービス事業所利用者の東日本大震災後の生活実態: 自由記述回答の分析から. 第34回日本社会精神医学会, 富山, 2015.3.6.
- 16) 永井 努, 常岡俊昭, 杉沢 諭, 池田朋寛, 藤澤尚子, 倉持光知子, 有川健一, 佐賀信之, 澤登洋輔, 種田綾乃, 池田勝之, 斉藤 勲, 稲本淳子: 統合失調症に対する多職種による心理教育ワークブックの作成とその評価. 第34回日本社会精神医学会, 富山, 2015.3.5.

(3) 研究報告会

- 1) 佐藤さやか: 認知機能リハビリテーションと個別型援助付き雇用モデルによる就労支援に関する研究(B班) 最終報告. こころの会, 東京, 2014.8.30.
- 2) 山口創生: 認知リハ+援助付き雇用のプロセス調査: サービス・コード分析の結果. こころの会, 東京, 2014.8.30.
- 3) 山口創生: 認知リハ+援助付き雇用の医療経済評価: 費用対効果分析の結果. こころの会, 東京, 2014.8.30.
- 4) 山口創生, 佐藤さやか, 堀尾奈都記, 泉田信行, 下平美智代, 種田綾乃, 伊藤順一郎: 認知機能リハビリテーションと援助付き雇用の効果と費用対効果: 無作為化比較臨床試験. 精神保健研究所報告会, 東京, 2015.3.9.
- 5) 鈴木友理子, 種田綾乃, 深澤舞子: 福島県における精神障害をもつ者の震災後の生活実態. 東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に関する中長期支援に関する研究班会議, 東京, 2014.8.31.
- 6) 種田綾乃, 鈴木友理子, 深澤舞子, 永松千恵, 村木美香, 伊藤順一郎, 樋口輝彦: 東日本大震災の被災地における精神障害者保健福祉手帳所持者の生活実態～自由記述回答の「声」～. 東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究班 報告会, 東京, 2015.2.20.
- 7) 種田綾乃, 伊藤順一郎, 鈴木友理子, 深澤舞子, 永松千恵, 村木美香, 樋口輝彦: 被災地における支援者支援に関する3年間のヒアリング調査の状況～各サイトにおける現地支援者の声～. 東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究班 報告会, 東京, 2015.2.20.
- 8) 鈴木友理子, 深澤舞子, 種田綾乃, 永松千恵, 佐藤さやか, 吉田光爾, 須藤康宏, 伊藤順一郎, 樋口輝彦: 東日本大震災の被災地における精神障害者保健福祉手帳所持者の生活実態～南相馬市、相馬市、仙台市における調査報告～. 東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究班 報告会, 東京, 2015.2.20.
- 9) 種田綾乃, 齋川信幸, 山口創生, 佐藤さやか, 下平美智代, 伊藤順一郎: 精神科領域におけるEBP実践とスタッフのストレングス志向での支援態度—スタッフ評価と利用者評価に基づく検討—. 精神保健研究所報告会, 東京, 2015.3.9.

C. 講演

- 1) 伊藤順一郎: 国立精神・神経医療研究センターデイケアでのアウトリーチ活動の試み. 平成26年度全国自治体病院協議会 精神科特別部会, 大阪, 2014.8.27.
- 2) 伊藤順一郎: 精神科病院ってどんなところ?. 櫃原市精神保健福祉普及啓発事業講演会, 奈良, 2014.10.4.

- 3) 伊藤順一郎：地域精神医療における包括型地域生活支援プログラムの役割. 第5回在宅医療推進のための会, 東京, 2014.10.17.
- 4) 伊藤順一郎：「『地域生活中心』にふさわしいデイケアのあり方の検討ーセンター病院における模索ー. 精神科リハビリテーション学術講演会, 福岡, 2014.11.7.
- 5) 伊藤順一郎：包括型地域生活支援プログラム (ACT) がめざす生活支援とは～理念・技術・システムづくり～. ACT 講演会 in 清瀬, 東京, 2014.11.21.
- 6) 伊藤順一郎：地域精神医療のあり方. 2014 みんなねっと関東ブロック大会 in 神奈川, 神奈川, 2014.11.28.
- 7) 伊藤順一郎：家族による、家族自身のリカバリー・トーク私たちは何を体験したか？心理教育、セルフヘルプを家族（当事者）の側から語る. 摂食障害家族の会講演, 千葉, 2014.11.29.
- 8) 伊藤順一郎：統合失調症に関する情報提供. SST 普及協会 第19回学術集会 in 仙台ランチオンセミナー, 宮城, 2014.12.13.
- 9) 山口創生：精神障害者に対する効果的な就労支援とエビデンスの構築：介入研究と実施科学. 国立社会保障・人口問題研究所, 東京, 2014.7.25.
- 10) 山口創生：精神障害者における意思決定支援：Shared decision making の取り組み. 日本発達障害連盟 意思決定支援実践報告会, 東京, 2015.1.16.
- 11) 下平美智代：IPS 型就労支援ってどういうもの？. 社会福祉法人風の村 第1回ユニバーサル就労&IPS 就労支援勉強会, 千葉, 2014. 4. 2.
- 12) 下平美智代：Open Dialogue（開かれた対話）ーオープンダイアログとは何か？ー. 国際医療福祉大学大学院臨床心理学専攻 臨時研究会（飯長喜一郎教授主催）. 東京, 2014.7.10.
- 13) 下平美智代：フィンランドの「オープンダイアログ」に学ぶ対話的な関係性. ぴあクリニック勉強会. 静岡, 2015.1.28.

D. 学会活動（学会主催，学会役員，座長，編集委員等）

(1) 学会役員

- 1) 伊藤順一郎：日本精神障害者リハビリテーション学会 理事長
- 2) 伊藤順一郎：日本統合失調症学会 評議員
- 3) 佐藤さやか：日本精神障害者リハビリテーション学会 常任理事

(2) 座長

- 1) 伊藤順一郎：第55回日本心身医学会総会ならびに学術講演会, 座長
- 2) 伊藤順一郎：第110回日本精神神経学会学術総会, 座長
- 3) 伊藤順一郎：心理教育・家族教室ネットワーク第18回研究集会, シンポジウム, 座長

(3) 学会誌編集委員等

- 1) 伊藤順一郎：日本家族研究・家族療法学会 編集委員
- 2) 伊藤順一郎：心理・家族教室ネットワーク 運営委員
- 3) 伊藤順一郎：リハビリテーション研究 編集委員
- 4) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 伊藤順一郎, 佐藤さやか, 山口創生：第2回医療における個別就労支援研修, 平成26年度精神保健に関する技術研修. 東京, 2014.9.2-5.
- 2) 伊藤順一郎, 佐藤さやか, 山口創生：第12回 ACT・多職種アウトリーチ研修, 平成26年度精神保健に関する技術研修. 東京, 2014.9.2-5.

- 3) 伊藤順一郎, 佐藤さやか, 山口創生: 第 6 回アウトリーチによる地域ケアマネジメント (福祉型) 研修, 平成 26 年度精神保健に関する技術研修. 東京, 2014.9.2-5.

(2) 研修会講師

- 1) 伊藤順一郎: ストレングスモデルのケアプラン作り. 第 6 回アウトリーチによる地域ケアマネジメント (福祉型) 研修・第 12 回 ACT・多職種アウトリーチ研修, 東京, 2014.9.3.
- 2) 伊藤順一郎: 家族心理教育とは. 標準版家族心理教育研修会 in 札幌, 北海道, 2014.9.12-13.
- 3) 伊藤順一郎: リカバリー志向でいこう! ~こころの病をかかえる人が夢や希望を持って主体的に生きる~. 気仙沼地域障がい者自立支援協議会地域移行部会研修会, 岩手, 2014.9.19.
- 4) 伊藤順一郎: ストレングスアセスメント. ACT スタッフ研修 in 札幌, 北海道, 2014.10.11.
- 5) 伊藤順一郎, 久永文恵: ACT 入門②; リカバリー、ストレングスモデルと ACT. 第 6 回 ACT 全国研修福岡大会, 福岡, 2014.11.8.
- 6) 伊藤順一郎: ACT の実践 E; 家族支援. 第 6 回 ACT 全国研修福岡大会, 福岡, 2014.11.9.
- 7) 伊藤順一郎: あらためて、地域で支えるということ. アウトリーチ研修会, 東京, 2015.1.9.
- 8) 伊藤順一郎: 地域と医療と福祉の話. 平成 26 年度精神障害者地域移行支援 (退院促進) セミナー, 千葉, 2015.2.14.
- 9) 伊藤順一郎: リカバリーとストレングスモデル. NCNP デイケア研修, 東京, 2015.2.27.
- 10) 佐藤さやか: 地域で使える認知行動療法(3). ユースキャリアセンターフラッグ, 千葉, 2014.4.30.
- 11) 佐藤さやか: 地域で使える認知行動療法(1). 特定非営利活動法人 ほっとハート, 千葉, 2014.5.1.
- 12) 佐藤さやか: 地域で使える認知行動療法(2). 特定非営利活動法人 ほっとハート, 千葉, 2014.5.27.
- 13) 佐藤さやか: 市川 CBT 勉強会: 地域で使える認知行動療法 (4). ユースキャリアセンターフラッグ, 千葉, 2014.7.1.
- 14) 佐藤さやか: デイケアで行動変容を促すには? 国立精神・神経センター病院デイケア, 東京, 2014.8.22.
- 15) 佐藤さやか: 働くこととリカバリー. 第 2 回医療における個別就労支援研修, 東京, 2014.9.3.
- 16) 佐藤さやか: 市川 CBT 勉強会: 地域で使える認知行動療法 (5). ユースキャリアセンターフラッグ, 千葉, 2014.9.9.
- 17) 佐藤さやか: アウトリーチのできる認知行動療法. 第 6 回 ACT 全国研修福岡大会, 2014.11.08-09.
- 18) 佐藤さやか: 市川 CBT 勉強会: 地域で使える認知行動療法 (6). ユースキャリアセンターフラッグ, 千葉, 2014.12.16.
- 19) 佐藤さやか: 市川 CBT 勉強会: 地域で使える認知行動療法 (7) ~実習で学ぶケースフォーミュレーション~. ユースキャリアセンターフラッグ, 千葉, 2014.12.16.
- 20) 山口創生: デイケアの例 後編. 第 2 回医療における個別就労支援研修, 東京, 2014.9.4.
- 21) 下平美智代: 就労とリカバリー IPS 型就労支援 精神障害をもつ人のための就労支援. 特定非営利活動法人 ACTIPS 訪問看護ステーション ACT-J 新人研修, 千葉, 2014.5.27.
- 22) 下平美智代: IPS 就労支援. 第 2 回医療における個別就労支援研修, 東京, 2014.9.3.
- 23) 下平美智代, 樺島沙織: ACT の実践 D; ACT で行う就労支援. 第 6 回 ACT 全国研修福岡大会, 2014.11.09.
- 24) 下平美智代: フィンランドの「オープンダイアログ」に学ぶ対話的な関係性. アウトリーチ研修会, 東京, 2015.1.8.

- 25) 種田綾乃：WRAP について（理論編・実践編）． 国立精神・神経センター病院 PORT，東京，2014.11.27・2014.12.25.
- 26) 種田綾乃：スクールソーシャルワークの実際と不登校ケースへの対応（講演・演習），秦野市教育委員会 秦野市教育相談コーディネーター担当者会，神奈川，2015.2.9.

F. その他

- 1) 伊藤順一郎：伊藤氏の職場風景、及びインタビュー．北海道スペシャル，7/25 総合テレビ北海道館内放送.
- 2) 伊藤順一郎：問題解決グループワーク第一部．第4回家族心理教育インストラクター養成セミナー講師，東京，2014.8.1.
- 3) 伊藤順一郎：問題解決グループワーク第二部．第4回家族心理教育インストラクター養成セミナー講師，東京，2014.8.2.
- 4) 伊藤順一郎：薬を減らして元気になる～抗精神病薬の減薬とリカバリー～．リカバリー全国フォーラム2014，東京，2014.8.29.
- 5) 伊藤順一郎：診察場面のコミュニケーションを当事者の側から変えていこう．リカバリー全国フォーラム2014，東京，2014.8.30.
- 6) 伊藤順一郎：生活のしづらさを抱える精神障がいのある人に対する自立支援のあり方と地域連携について考える．精神障がいのある人の「地域生活支援」について考える研修会 助言，岩手，2014.9.20.
- 7) 伊藤順一郎：平成26年度 都医学研シンポジウム 総合司会，東京，2014.11.14.
- 8) 伊藤順一郎：精神科地域支援講演会 司会，千葉，2015.2.5.
- 9) 佐藤さやか：ケースフォーミュレーション．早稲田大学，埼玉，2014.4.15,23，5.7,14,21，28，6.4,11,18,25，7.2,9,16,23.
- 10) 佐藤さやか：精神保健学「地域精神保健」「関連法規」．日本社会事業大学，東京，2014.10.11.
- 11) 佐藤さやか：精神保健学「精神障害対策」「依存症対策」．日本社会事業大学，東京，2014.12.13.
- 12) 佐藤さやか：精神保健学「国際精神保健Ⅰ」「国際精神保健Ⅱ」．日本社会事業大学，東京，2015.1.10.
- 13) 山口創生：精神保健福祉士 国家試験対策講座．東洋大学，埼玉，2015.1.11.
- 14) 山口創生：精神障害者の生活支援システム．文教大学，埼玉，2014.9.10-11.
- 15) 山口創生：国立精神保健研究所 研究報告会 優秀発表賞，国立精神保健研究所 東京，2015.3.9.
- 16) 種田綾乃：ほにゃらっぷ（つくば自立生活センターWRAP 集中クラス）．WRAP（元気回復行動プラン）の集中講座のファシリテート，茨城，2014.8.21.
- 17) 種田綾乃：人間関係とコミュニケーションⅡ「精神障がい者を地域で支える」．神奈川県立保健福祉大学，神奈川，2014.12.26.
- 18) 種田綾乃：トレント精神保健医療福祉システム 視察報告会「精神科保健医療とピアサポート」「教育福祉」．おかやま UFE，岡山，2015.1.31.
- 19) 種田綾乃：SSWr の職業倫理—記録の実際と問題点—．スクールソーシャルワーク実践研究会，神奈川，2015.2.1.

12. 司法精神医学研究部

I. 研究部の概要

司法医学研究部は、平成15年7月10日「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律（以下、医療観察法）」の成立に伴い、同年10月に第11番目の研究部として新たに設置された。精神鑑定研究室、専門医療・社会復帰研究室、制度運用研究室の3室より構成されている。

（精神鑑定研究室を中心とする研究）

- ・ 刑事、民事、家事等の各種の精神鑑定の全国的な均霑化に関する研究
- ・ 司法精神医療の領域における各種の評価方法（リスクアセスメント）についての研究
- ・ 犯罪捜査支援（プロファイリング）と犯罪解決支援の精神医学的方法の開発研究

（専門医療・社会復帰研究室を中心とする研究）

- ・ 司法精神医療における専門的治療技法の開発
- ・ 司法精神医療の領域における各種のアセスメントや対処策（リスクマネジメント）についての研究
- ・ 犯罪被害者の心理的影響と支援方法についての研究

（制度運用研究室を中心とする研究）

- ・ 医療観察法の制度運用に関するモニタリング調査研究
- ・ 精神障害者の同意判断能力および医療保護入院の倫理的判断に関する研究
- ・ 精神科事前指示（psychiatric advance directives）に関する研究

平成26年度の人員構成は、部長：岡田幸之、精神鑑定研究室長：安藤久美子、専門医療・社会復帰研究室長：菊池安希子、制度運用研究室長：藤井千代、任期付研究員：津村秀樹、河野稔明、曾雌崇弘である。併任研究員として国立精神・神経医療研究センター病院医師の野田隆政、同病院臨床心理技術者の朝波千尋、研究生として武蔵野大学大学院 人間社会研究科 人間社会専攻の浅野敬子、科研費心理療法士として中澤佳奈子、科研費研究補助員 小山繭子を迎えて研究に臨んだ。

II. 研究活動

1) 心神喪失者等医療観察法制度の指定入院モニタリング調査研究

本研究は、医療観察制度の指定入院医療機関からの情報を統合的に収集管理し、専門的な見地からの評価と分析を加え、その結果を関係機関にフィードバックするものである。平成26年度は、全国の指定入院医療機関の協力により、その臨床情報から、対象者の基礎情報（氏名、住所等の個人を特定する情報を除く）、治療期間や治療内容、退院に際しての住居の確保、社会復帰における連携状況等に関する情報を収集し、データクリーニングを実施した上で、基本プロフィールに関して分析した。平成27年度より、今年度までに収集したデータを用いて、入院長期化の要因、身体合併症の実態把握等、詳細な分析を行う予定である。（岡田、藤井、河野）

2) 心神喪失者等医療観察法制度の指定通院モニタリング調査研究

本研究は、医療観察制度の指定通院医療機関からの情報を統合的に収集管理し、専門的な見地からの評価と分析を加え、その結果を関係機関にフィードバックするものである。データ収集にあたっては、全国の指定通院医療機関の協力により、その臨床情報から、対象者の基礎情報（氏名、住所等の個人を特定する情報を除く）に加え、通院処遇中の精神保健福祉法による入院や通院処遇中の問題行動の有無に関する詳細な情報を収集し、解析した。その結果、通院処遇中に、約半数のケースが精神保健福祉法による入院をしていることや、初期に短期入院しているケースの方が入院していないケースよりも早く処遇を終了していることを明らかにした。（岡田、安藤、津村、中澤、曾雌）

3) 刑事責任能力の評価に関する研究

司法精神鑑定の公平性の実現は長年にわたる懸案事項である。岡田・安藤らは、この刑事責任能力の評価・判定方法について精神医学と法学の両側面から、その標準化をはかるべく研究を行っている。本年度は、裁判員制度における精神鑑定の方法、および鑑定結果の報告の方法について、法実務家、法律学者を

交えた検討を行い、次年度にむけた研究体制の拡充をはかった。(岡田, 安藤)

4) 重度精神障害者に対する脆弱性とストレングスに注目したリスクアセスメントツールの開発に関する研究

Short-Term Assessment of Risk and Treatability (START: Webster et al., 2009)は、精神障害、物質使用、パーソナリティ障害に関連するリスクをアセスメントし、マネジメントするための構造的専門家判断ツールである。20項目の動的要因について、脆弱性とストレングスの両面から評価し、最終的なリスク判断をする。多くのリスクアセスメントのターゲットが何らかの対他暴力(対人暴力、性暴力、家庭内暴力など)であるのに対し、STARTでは、精神障害者の社会復帰を阻害する要因となる複数の問題行動(対人暴力、自傷、自殺、無断退去、物質使用、セルフネグレクト、被害)についてのリスク評価を行うことが特徴である。STARTはカナダで開発され、少なくとも4カ国語に翻訳され、10ヶ国以上の司法精神科を中心に使用されており、英国では暴力その他のリスクを管理する上で有用なツールとして推奨された(Department of Health, 2007)。本研究では、STARTの日本版を開発し、本邦の司法精神科である医療観察法の通院処遇者における、問題行動の予測妥当性を検討した。(菊池, 小山, 河野, 安藤, 岡田)

5) 生物・心理・社会的諸要因からの多面的な司法精神医学的アセスメントツールの開発研究

暴力等のリスクアセスメントについては、その評価基準があいまいで、臨床家ごとにリスク判断にもばらつきがみられるといった問題点なども指摘されており、司法精神医学分野では、客観的なアセスメント手法の開発の必要性が以前より求められてきた。本研究では、疫学統計的、および臨床的観点から見たファクターと、生体反応を用いた科学的観点に基づくファクターとを組み合わせた、包括的なアセスメントツールを開発することを最終目的とし、研究を行った。その結果、早急性反応が強制される状況ではエラーを直ちに修復しづらいことなどが示された。(安藤, 曾雌, 中澤, 野田)

6) 東京都の医療観察法指定通院医療機関の整備に関連する要因の研究について

現在、指定通院医療機関は全県に存在しているものの、特に人口が多く、それ故に医療観察法通院処遇対象者数が多い大都市圏においては、指定通院医療機関数の不足と地域偏在の問題が大きい。平成24年度は、東京都の指定通院医療機関の整備に関連する要因を抽出するため、インタビュー(指定通院医療機関の院長と精神保健福祉士、社会復帰調整官)、業務量調査、指定通院医療機関及び候補機関の常勤精神保健指定医へのアンケート調査を実施した。その結果、診療報酬の裏付けは通院開始までの準備期に特に足りていないこと、実際に通院医療を担っている医療機関は多職種協働アプローチの充実にメリットを覚えていることなどの要因が明らかになった。平成26年度は本研究の結果を、専門雑誌に公表した。(菊池, 津村, 安藤, 岡田)

7) 統合失調症の社会認知を改善するためのメタ認知トレーニングの予備的検討

医療観察法の制度開始以来、指定入院医療機関にて治療を受けている対象者の8割は、統合失調症の診断がつく。統合失調症患者の機能的転帰に対しては、神経認知機能にも増して、社会的認知機能の与える影響が大きいことが指摘されている。メタ認知トレーニングは、結論への性急な飛躍、外的帰属バイアス、反証に対するバイアス、エラーに対する過剰確信、心の理論などの認知的バイアスを標的とした心理的プログラムである。本研究では、メタ認知トレーニングの日本版が本邦の統合失調症患者に対して、認容性があり、介入効果があるかどうかを、検証することを目的とした。(菊池, 小山)

8) 精神科医療倫理に関する研究

平成25年度までに岡田, 安藤が作成した日本語版の精神科事前指示(Letter of Intent for Mental Health Emergency; LIME)について、非自発的入院の経験を有する精神障害者へのインタビューをもとに改訂した。精神障害者本人は、代諾者を1人のみ指名することを躊躇する傾向が示唆され、複数の代諾者を指定する形式に改めた。さらに事前指示には、希望する治療・処遇のみならず、希望しない治療・処遇についても記載したいとの要望を受け、「希望しない治療・処遇」を記載する欄を設けた。平成27年1月より、改訂版LIMEの有用性に関する検討を開始している。また緊急時の同意判断能力評価である(Competency Assessment Scheme for Mental Health Emergency; CASME)(安藤, 岡田 2011)について、医療保護入院患者を対象として妥当性の検証を実施するとともに、ジョンセンらによる臨床倫理の四分割表に基づき医療保護入院時の精神保健指定医による倫理的判断に関する検討を実施している。(藤

井, 岡田, 安藤)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

岡田幸之, 安藤久美子は, 裁判所, 検察庁の依頼による刑事司法鑑定および心神喪失者等医療観察法の鑑定を行い, 市民社会に貢献した。

安藤久美子は, 警視庁の依頼により, 人質立てこもり事件等における支援活動員を務め, 市民社会に貢献した。

藤井千代は, 所沢市保健センターにおける思春期こころの相談事業において中学生・高校生とその家族, 学校関係者からの相談を受け, 市民社会に貢献した。

2) 専門教育面における貢献

岡田幸之は, 科学警察研究所において, 捜査担当者を対象とした「犯罪者プロファイリング課程研修講義: 精神鑑定・精神医学概論」を担当し, 捜査実務家の養成に貢献した。

岡田幸之は, 法務総合研究所において, 検察官を対象として「刑事責任能力」に関する講義を担当し, 法実務家の養成に貢献した。

岡田幸之は, 司法研修所において, 裁判官を対象として「精神鑑定」に関する講義を担当し, 司法実務につく法律家の養成に貢献した。

岡田幸之は, 東京医科歯科大学において, 非常勤講師を務め, 司法精神医療に携わる看護師の養成に貢献した。

菊池安希子は, 法務省保護局社会復帰調整官専修科研修において, 「司法精神医療におけるリスク管理」についての講義を行い, 医療観察法精神保健観察の実務につく社会復帰調整官の養成に貢献した。

菊池安希子は, 法務省矯正局の成人用一般的リスクアセスメントツールの開発準備に関わる助言指導(アドバイザー)を行った。

菊池安希子は, 法務省矯正局の専門研修課程専攻科研修において, 矯正の実務に従事する職員の養成に貢献した。

菊池安希子は, 国立精神・神経医療研究センター病院にて実施されている Social Cognition and Interaction Training (SCIT) の日本版実施についてのスーパービジョンを週1-2回実施した。

安藤久美子は, 司法研修所にて全国の家庭裁判所の調査官に対して「精神医学」に関する講義を2度にわたって担当し, 司法実務に関わる調査官の養成に貢献した。

安藤久美子は, 法務総合研究所において, 第12回裁判員裁判対象事件担当中核事務官研修にて「精神鑑定」に関する講義を担当し, 司法実務を補佐する事務官の養成に貢献した。

安藤久美子は, 法務総合研究所において, 新任検事を対象として「精神鑑定」に関する講義を担当し, 司法実務につく法実務家の養成に貢献した。

安藤久美子は, 東京地方検察庁にて, 精神障害が疑れる事例について助言を行い, 司法実務に貢献した。

安藤久美子は, 関東管区警察学校において, 全国の警察機関に所属する上級カウンセラーを対象に「精神医学的からみた非行少年の特性」について講義を行い, 警察所属の少年カウンセラーの養成に貢献した。

安藤久美子は, 警察大学校において, 全国の警察本部に所属する児童ポルノ担当警察官らを対象に「児童ポルノ被害者の心理」に関する講義を行い, 警察官の教育等に貢献した。

安藤久美子は, 法務省矯正局の幹部職員に対して, 発達上の課題を抱える少年院在院者に対する性非行プログラムの策定に関して助言を行い, 少年矯正における教育の向上に貢献した。

安藤久美子は, 法務省矯正局の幹部職員に対して, 法務省式リスクアセスメントツール効果検証に関して助言を行い, 少年矯正におけるリスクアセスメント業務に貢献した。

安藤久美子は, 法務省矯正局の幹部職および専門官に対して, 少年矯正の処遇に関する専門家会議において助言を行い, 少年矯正の質の向上に貢献した。

安藤久美子は、法務省矯正局の専門官に対して、法務省式アセスメントツール維持管理作業に関して助言を行い、少年矯正におけるリスクマネジメント業務に貢献した。

安藤久美子は、法務省矯正局仙台管区の幹部職員に対して「リスクアセスメント及びマネジメント」の講義を行い、少年矯正における適切な処遇のあり方について助言した。

安藤久美子は、東京都内の保健所において性犯罪を行った知的障害者の支援に関する講義を行い、保健師の知識の向上に貢献した。

安藤久美子は、第 36 回かながわ司法精神医療福祉ネットワーク会議において、神奈川県内で医療観察法を担当する精神保健福祉士を対象とした医療観察法の地域処遇に関する講義を行い、地域処遇の質の向上に貢献した。

3) 精研の研修の主催と協力

岡田幸之、安藤久美子、菊池安希子、藤井千代、津村秀樹、河野稔明、曾雌崇弘は、国立精神・神経医療研究センター第 9 回司法精神医学研修にて講義を行った。

菊池安希子は、国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センターの研修において、統合失調症の認知行動療法についての講義を行った。

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

岡田幸之、安藤久美子、菊池安希子は、厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「心神喪失者等医療観察法制度における専門的医療の向上に関する研究」の運用にあたり、有用な基礎的情報をモニタリング研究により収集し、その結果を医療の現場へと提供し、その質の向上に貢献した。

安藤久美子は、厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「青年期・成人期発達障がいへの対応困難ケースへの危機介入と治療・支援に関する研究」の実施にあたり、海外ツールの翻訳をはじめとする有用な基礎的情報の提供に貢献した。

藤井千代は、埼玉県精神医療審査会において、退院請求審査を行い、精神科病院における人権擁護に貢献した。

藤井千代は、埼玉県精神医療審査会の合議体に参加し、精神科病院における医療保護入院および措置入院の適切性を審査し、精神科医療における人権擁護に貢献した。

藤井千代は、高齢の障害者に対する支援の在り方に関する論点整理のための作業チーム構成員として、総合支援法施行 3 年目の見直しに貢献した。

5) センター内における臨床的活動

岡田幸之、安藤久美子は、病院第一精神診療部精神科医師を併任し、臨床的活動を行った。

岡田幸之、菊池安希子、藤井千代、河野稔明は、医療観察法病棟（8 病棟、9 病棟）運営会議に出席し、臨床的活動を行った。

岡田幸之、安藤久美子、藤井千代は、医療観察法鑑定入院（5 階北病棟）に、鑑定医、および鑑定助手として協力した。

菊池安希子は、病院臨床心理技術者を併任し、医療観察法病棟及び外来、デイケアにおいて臨床的活動を行った。

安藤久美子は、臨床治験の分担医師として複数の患者を担当し、新薬開発のために貢献した。

津村秀樹、曾雌崇弘は、病院併任研究員として、病院の臨床活動に基づく研究に貢献した。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Kanie A, Hagiya K, Ashida S, Pu S, Kaneko K, Mogami T, Oshima S, Motoya M, Niwa S, Inagaki A, Ikebuchi E, Kikuchi A, Yamasaki S, Iwata K, Roberts DL, Nakagome K : New instrument for measuring multiple domains of social cognition: construct validity of the Social Cognition Screening Questionnaire (Japanese version), Psychiatry Clin Neurosci 68(9): 701-11, 2014.

- 2) Fujii C, Fukuda Y, Ando K, Kikuchi A, Okada T : Development of forensic mental health services in Japan: working towards the reintegration of offenders with mental disorders. *Int J Ment Health Syst* 8: 21, 2014.
- 3) Soshi T, Ando K, Noda T, Nakazawa K, Tsumura H, Okada T : Post-error action control is neurobehaviorally modulated under conditions of constant speeded response. *Front Hum Neurosci* 8: 1072, 2015. doi: 10.3389/fnhum.2014.01072.
- 4) 安藤久美子, 中澤佳奈子, 浅野敬子, 津村秀樹, 長沼洋一, 菊池安希子 : わが国における触法精神障害者通院医療の現状—2005～2013年の全国調査の分析から—。 *臨床精神医学* 43(9) : 1293-1300, 2014.
- 5) 福田 敬, 菊池安希子, 長沼洋一, 三澤孝夫, 安藤久美子, 岡田幸之 : 東京都内の医療観察法指定通院医療機関における業務量調査。 *臨床精神医学* 43(9) : 1309-1316, 2014.
- 6) 長沼洋一, 三澤孝夫, 福田 敬, 安藤久美子, 岡田幸之, 菊池安希子 : 東京都の医療観察法指定通院医療機関の精神保健福祉士が直面する困難に関する研究。 *臨床精神医学* 43(9) : 1317-1323, 2014.

(2) 総説

- 1) Niimura H, Fujii C, Semenova ND, Kashima H, Mizuno M : Aging and Morita Therapy: Psychotherapy for the Elderly. *Social and Clinical Psychiatry* 24(1) : 61-65, 2014. (in Russian)
- 2) 岡田幸之 : 刑事責任能力判断と裁判員裁判. *法律のひろば* : 41-47, 2014.
- 3) 菊池安希子 : 実践講座 認知行動療法 4 統合失調症. *総合リハビリテーション* 42(12) : 1167-1174, 2014.
- 4) 安藤久美子, 岡田幸之 : 大人の発達障害と犯罪, 触法行為. *精神科臨床サービス* 14(4) : 366-371, 2014.
- 5) 安藤久美子, 岡田幸之 : 発達障害と併存障害—自閉スペクトラム症の成人例を中心に—. *精神科臨床サービス* 14(3) : 315-321, 2014.
- 6) 安藤久美子, 中澤佳奈子, 岡田幸之 : 精神障害を有する加害者の家族のメンタルヘルス—医療観察法における家庭内事件に焦点をあてて—. *精神保健研究* 28(61) : 31-35, 2015.

(3) 著書

- 1) 岡田幸之 : 司法精神医学. 精神保健福祉白書編集委員会 編 : 精神保健福祉白書 2015 年版—改革ビジョンから 10 年—これまでの歩みとこれから. 中央法規出版, 東京, p160, 2014.
- 2) 菊池安希子 : 4 ブリーフ的 CBT または CBT 的ブリーフ. 津川秀夫, 大野裕史 編著 : 認知行動療法とブリーフセラピーの接点. 日本評論社, 東京, pp100-119, 2014.
- 3) 菊池安希子 : 第 6 章 リスクマネジメント. 伊藤順一郎, 久永文恵 監修 : ACT の立ち上げと成長 2. NPO 法人地域精神保健福祉機構コンボ, 東京, pp93-109, 2014.
- 4) 藤井千代 : 第 5 章 精神科早期治療における臨床倫理. 水野雅文 編 : 重症化させないための精神疾患の診方と対応. 医学書院, 東京, pp257-263, 2014.
- 5) 河野稔明 : 第 9 章「資料」第 3 節「統計資料」表 12～20, 図 8・9. 精神保健福祉白書編集委員会 編 : 精神保健福祉白書 2015 年版—改革ビジョンから 10 年—これまでの歩みとこれから. 中央法規出版, 東京, pp 215-224, 2014.
- 6) 河野稔明 : 第 9 章「資料」第 3 節「統計資料」解説 (都道府県別, 医療費). 精神保健福祉白書編集委員会 編 : 精神保健福祉白書 2015 年版—改革ビジョンから 10 年—これまでの歩みとこれから. 中央法規出版, 東京, pp236-237, 2014.

(4) 研究報告書

- 1) 岡田幸之 : 司法精神医療の均てん化の促進に資する診断, アセスメント, 治療の開発と普及に関する研究 (主任研究者 : 岡田幸之). 平成 24 年度～平成 26 年度 精神・神経疾患研究開発費総括研

- 究報告書. pp1-10, 2015.
- 2) 岡田幸之, 藤井千代, 安藤久美子, 山口大樹, 渡邊 理, 佐久間啓, 水野雅文: 司法精神医療と刑事司法制度における精神医学的アセスメントから意志決定に至るクリティカルパスの開発と普及. 平成 24 年度～平成 26 年度 精神・神経疾患研究開発費総括研究報告書. pp71-81, 2015.
 - 3) 菊池安希子, 鶴見隆彦, 馬淵伸隆, 國吉美也子, 小山繭子, 河野稔明, 安藤久美子, 岡田幸之: 医療観察法制度における各種心理プログラムの現状把握と新たな手法の確立. 平成 24 年度～平成 26 年度 精神・神経疾患研究開発費総括研究報告書. pp53-57, 2015.
 - 4) 菊池安希子: メタ認知トレーニングの効果に関する予備的研究. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業) 統合失調症に対する認知リハビリテーションの開発と効果検証に関する研究 (研究代表者: 中込和幸) 平成 26 年度 総括・分担研究報告書. pp49-54, 2015.
 - 5) 菊池安希子: 統合失調症の認知行動療法の普及に向けて. 厚生労働科学研究費補助金 (障害対策総合研究事業) 認知行動療法等の精神療法の科学的エビデンスに基づいた標準治療の開発と普及に関する研究 (研究代表者: 大野裕) 研究協力報告書. pp128-134, 2015.
 - 6) 安藤久美子, 野田隆政, 曾雌崇弘, 津村秀樹, 中澤佳奈子: 生物・心理・社会的諸要因からの多面的な司法精神医学的リスクアセスメントの開発. 平成 24 年度～平成 26 年度 精神・神経疾患研究開発費総括研究報告書. pp31-44, 2015.
 - 7) 安藤久美子, 榎屋二郎, 今井淳司, 中澤佳奈子: 医療観察法対象者/裁判事例についての検討. 平成 26 年度 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業) (精神障害分野) 青年期・成人期発達障がいへの対応困難ケースへの危機介入と治療・支援に関する研究 (研究代表者: 内山登紀夫) 総括・分担研究報告書. pp57-67, 2015.
 - 8) 内山登紀夫, 水藤昌彦, 堀江まゆみ, 安藤久美子, 榎屋二郎: オーストラリアにおける対応困難ケースへの支援状況に関する調査 ①. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害対策総合研究事業) (精神障害分野) 青年期・成人期発達障がいへの対応困難ケースへの危機介入と治療・支援に関する研究 (研究代表者: 内山登紀夫) 総括・分担研究報告書. pp89-114, 2015.
 - 9) 内山登紀夫, 安藤久美子, 榎屋二郎, 水藤昌彦, 堀江まゆみ: オーストラリアにおける対応困難ケースへの支援状況に関する調査 ②. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業) (精神障害分野) 青年期・成人期発達障がいへの対応困難ケースへの危機介入と治療・支援に関する研究 (研究代表者: 内山登紀夫) 総括・分担研究報告書, pp115-122, 2015.
 - 10) 藤井千代, 河野稔明, 菊池安希子, 長沼洋一, 安藤久美子, 岡田幸之: 指定通院医療機関モニタリング全国調査とこれに基づく均てん化策の推進. 平成 24 年度～平成 26 年度 精神・神経疾患研究開発費総括研究報告書. pp45-52, 2015.
 - 11) 渡邊和美, 和智妙子, 横田賀英子, 尾野修一, 大塚祐輔, 倉石宏樹, 平間一樹, 安藤久美子, 岡田幸之: 刑事司法制度のなかで精神医学的配慮の必要脆弱性をもつ児童, 成人のスクリーニング手法の開発と普及. 平成 24 年度～平成 26 年度 精神・神経疾患研究開発費総括研究報告書. pp11-29, 2015.

(5) 翻訳

- 1) 岡田幸之: Part 4 臨床上の症候群 51 章「サイコパシー」. 新版児童青年精神医学, 明石書店, 東京, pp1115-1131, 2015.

(6) その他

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 岡田幸之: 精神鑑定医の役割と資格—日本司法精神医学会認定医モデル要約書紹介 (シンポジスト). 第 10 回日本司法精神医学会大会, 沖縄, 2014.5.16-17.

- 2) 岡田幸之：第6回刑事精神鑑定ワークショップ事例検討会（司会）．第10回日本司法精神医学会大会，沖縄，2014.5.16-17.
- 3) 岡田幸之：精神鑑定の基本手法．第6回刑事精神鑑定ワークショップ（講師），東京，2014.12.20.
- 4) 菊池安希子：トラウマを受けた自己を癒す．国際交流委員会招待講演（通訳），講演者 Ruth A Lanus，日本心理臨床学会第33回秋季大会，神奈川，2014.8.23-26.
- 5) 菊池安希子，蒲生裕司：ブリーフ魂って認知？行動？ーコンタミを面白がる認知行動療法へようこそー．日本ブリーフサイコセラピー学会第24回熊本大会ワークショップ（講師）熊本，2014.8.29-31.
- 6) 菊池安希子：社会認知ならびに対人関係トレーニング（SCIT）．自主シンポジウム「統合失調症に対する精神科リハビリテーションに役立つ心理社会的支援」（企画者：佐藤さやか）（シンポジスト）．日本心理学会第78回大会，京都，2014.9.10-12.
- 7) 菊池安希子：Emmanuelle Peters 博士による妄想に対する認知行動療法ワークショップ（主催者），CBTp ネットワーク，東京，2014.11.20.
- 8) 安藤久美子：ワークショップ13「裁判員制度と精神鑑定ー法曹三者・マスコミ報道との対話」（講演者）．第110回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2014.6.26-28.
- 9) 安藤久美子：精神鑑定と裁判員制度．責任能力・精神鑑定関係共同研究 第3回研究会シンポジウム，さいたま地方裁判所，埼玉，2014.12.16.
- 10) 安藤久美子：コロキアム 精神鑑定：あなたが教えてくれたことーある被告人との対話．第1回日本司法共生社会学会（シンポジウム），東京，2015.1.25.
- 11) 藤井千代，鈴木二郎：委員会シンポジウム「臨床場面における医療倫理的科第の在り処」（司会）．第110回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2014.6.26-28.

(2) 一般演題

- 1) Kikuchi A, Asanami C, Kono T, Okada T : The Role of Empathy in Violence among Male Patients with Schizophrenia. The 6th Annual Conference, Asian Criminological Society, Osaka University of Commerce, Osaka, 2014.6.27-29.
- 2) Kikuchi A, Tanaka S, Asanami C, Okada T : Self-reported empathy and physical aggression in male patients with schizophrenia. The 3rd Bergen International Conference on Forensic Psychiatry, Bergen, Norway, 2014.9.17-19.
- 3) Watanabe O, Fujii C, Sakuma K, Mizuno M, Mimura M: Development of early crisis intervention measures with psychiatric advance directives for patients who discharged from a psychiatric acute care unit. 9th International Conference on Early Psychosis, Tokyo, 2014.11.17-19.
- 4) Yamaguchi T, Fujii C, Ito S, Tsujino N, Nemoto T, Mizuno M: Clinical features of patients with untreated schizophrenia and suicidal behavior. 9th International Conference on Early Psychosis, Tokyo, 2014.11.17-19.
- 5) Shigemura J, Tanigawa T, Tachibana S, Sano S, Fujii C, Sato Y, Kuwahara T, Tatsuzawa Y, Takahashi S, Toda H, Nishi D, Matsuoka Y, Nagamine M, Harada N, Tanichi M, Nomura S, Yoshino A: Mental health challenges of Fukushima nuclear plant workers following the 2011 Great East Japan Earthquake and Fukushima Daiichi nuclear accident. International Society for Traumatic Stress Studies 30th Annual Meeting, Miami, 2014.11.6-8.
- 6) Shigemura J, Tanigawa T, Tachibana S, Sano S, Kuwahara T, Fujii C, Takahashi S, Tatsuzawa Y, Sato Y, Toda H, Nagamine M, Harada N, Tanichi M, Shimizu K, Nomura S, Yoshino A: Mental health consequences of Fukushima nuclear plant workers following the 2011 accident: findings from the Fukushima NEWS Project. Joint Congress of 19th Japan Congress of Neuropsychiatry and the 14th International College of Geriatric Psychoneuropharmacology, Ibaraki, 2014.10.1-4.

- 7) Shigemura J, Tanigawa T, Tachibana S, Sano S, Fujii C, Sato Y, Kuwahara T, Tatsuzawa Y, Takahashi S, Toda H, Nishi D, Matsuoka Y, Nagamine M, Harada N, Tanichi M, Nomura S, Yoshino A: Psychosocial impact of the Great East Japan Earthquake and Fukushima nuclear accident among the Fukushima residents and nuclear plant workers. The 12th Asia Pacific Conference on Disaster Medicine, Tokyo, 2014.9.17-19.
- 8) Kono T, Fujii C, Kikuchi A, Naganuma Y, Ando K, Okada T : Elderly forensic inpatients in Japanese psychiatric hospitals. WPA Section on Epidemiology and public Health—2014 Meeting, Poster Session 2, Nara, 2014.10.16-18.
- 9) 菊池安希子, 河野稔明, 長沼洋一, 岡田幸之 : 医療観察法指定入院医療における転院の影響に関する研究. 第 10 回日本司法精神医学会大会, 沖縄, 2014.5.16-17.
- 10) 安藤久美子 : 医療観察法通院処遇中における精神保健福祉法による入院の実態に関する分析. 第 10 回日本司法精神医学会大会, 沖縄, 2014.5.16-17.
- 11) 安藤久美子, 宮澤絵里, 中澤佳奈子, 浅野敬子, 岡田幸之 : 医療観察法通院対象者の社会復帰促進要因に関する検討—精神保健福祉法による入院治療の分析結果から—. 第 110 回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.26-28.
- 12) 安藤久美子, 岡田幸之 : 医療観察法による申立および鑑定入院の必要性に関する検討. 第 34 回日本社会精神医学会, 富山, 2015.3.5-6.
- 13) 河野稔明, 立森久照, 菊池安希子, 長沼洋一, 安藤久美子, 岡田幸之, 竹島 正 : 在院期間からみた医療観察法指定入院医療と一般精神科入院医療の地域・医療機関特性の関連. 第 10 回日本司法精神医学会大会, 沖縄, 2014.5.16-17.
- 14) 桑原純一郎, 渡邊 理, 藤井千代, 佐久間啓 : クライシスプラン作成により地域生活の継続が可能となった症例の検討. 第 34 回日本社会精神医学会, 富山, 2015.3.5-6.
- 15) 鈴木航太, 山澤涼子, 新村秀人, 根本隆洋, 藤井千代, 村上雅昭, 三村 将, 水野雅文 : 精神科クリニックにおける精神病未治療期間 (DUP) 調査—精神科指定病院との比較—. 第 34 回日本社会精神医学会, 富山, 2015.3.5-6.
- 16) 喜田 恒, 新村秀人, 根本隆洋, 三村 将, 佐久間啓, 藤井千代, 水野雅文 : ささがわプロジェクトの 12 年 : 統合失調症長期入院患者の地域移行支援における新たな問題点, 高齢化の観点から. 第 34 回日本社会精神医学会, 富山国際会議場, 富山, 2015.3.5-6.
- 17) 茅野 分, 藤井千代, 新村秀人, 村上雅昭, 水野雅文, 真栄城輝明 : 内観療法による DV. Domestic Violence 加害者臨床の試み. 第 17 回日本内観医学会奈良大会, 奈良女子大学佐保会館, 奈良, 2014.10.18.
- 18) 重村 淳, 谷川 武, 立花正一, 佐野信也, 藤井千代, 佐藤 豊, 桑原達郎, 立澤賢孝, 高橋 晶, 戸田裕之, 野村総一郎, 吉野相英 : 福島第一・第二原子力発電所職員が受け続ける複合的なストレス. 第 13 回日本トラウマティック・ストレス学会, ホテル福島グリーンパレス, 福島, 2014.5.17-18.
- 19) 小山繭子, 菊池安希子 : 不登校中学生女兒に対する RDI を用いたスクールカウンセリングの有効性. 日本 EMDR 学会第 9 回学術大会, 兵庫, 2014.6.6.
- 20) 山口大樹, 藤井千代 : 十分な同意判断能力のない患者の身体疾患の医療契約当事者は誰か? 第 110 回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.26-28.
- 21) 中澤佳奈子, 安藤久美子, 浅野敬子, 岡田幸之 : 医療観察法通院処遇対象者の自殺防止のための効果的介入に関する検討. 第 110 回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.28.

(3) 研究報告会

- 1) 岡田幸之 : 責任能力・精神鑑定関係共同研究平成 26 年度第 1 回研究会. 埼玉, 2014.5.9.
- 2) 岡田幸之 : 「医療観察法対象者の円滑な社会復帰促進に関する研究」(研究代表者: 平林直次) 平成 26 年度第 1 回班会議. 東京, 2014.5.23.

- 3) 岡田幸之：平成26年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究」（研究代表者：竹島正）第1回会議およびディスカッション．東京，2014.7.14.
- 4) 岡田幸之：第12回TFPC研究会．東京，2014.7.26.
- 5) 岡田幸之：責任能力・精神鑑定関係共同研究平成26年度第2回研究会．埼玉，2014.10.7.
- 6) 岡田幸之：第13回TFPC研究会．東京，2014.11.29.
- 7) 岡田幸之，藤井千代，安藤久美子，山口大樹，渡邊理，佐久間啓，水野雅文：司法精神医療と刑事司法制度における精神医学的アセスメントからの意思決定に至るクリティカルパスの開発と普及．平成26年度精神・神経疾患研究開発費 精神疾患研究班 合同研究報告会，東京，2014.12.10.
- 8) 岡田幸之：平成26年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究」（研究代表者：竹島正）第2回班会議およびシンポジウム．東京，2014.12.9.
- 9) 岡田幸之：司法精神医療の均てん化の促進に資する診断，アセスメント，治療の開発と普及に関する研究．平成26年度精神・神経疾患研究開発費中間・事後評価 口演報告会，東京，2014.12.12.
- 10) 岡田幸之：厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野））「医療観察法の向上と関係機関の連携に関する研究」（研究代表者：中島豊爾）平成26年度第2回中島班全体会議．東京，2014.12.23.
- 11) 岡田幸之：「医療観察法対象者の円滑な社会復帰促進に関する研究」（研究代表者：平林直次）平成26年度第2回班会議．東京，2015.1.23.
- 12) 岡田幸之：心神喪失者等医療観察法関係研究協議会．東京，2015.1.29.
- 13) 菊池安希子：24-1 精神・神経疾患研究開発費研究事業「統合失調症の診断，治療法の開発に関する研究Ⅱ」（主任研究者：中込和幸）研究打合せ班会議．東京，2014.4.26.
- 14) 菊池安希子：厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野））平成26年度医療観察法指定医療機関ネットワークによる共通評価項目の信頼性と妥当性に関する研究班会議（研究代表者：壁屋康洋）．宮城，2014.12.6.
- 15) 菊池安希子，國吉美也子，河野稔明，小山繭子，岡田幸之：医療観察法制度における各種心理プログラムの現状把握と新たな手法の開発．平成26年度精神・神経疾患研究開発費 精神疾患研究班 合同研究報告会，東京，2014.12.10.
- 16) 菊池安希子：平成26年度厚生労働科学研究費補助金「統合失調症に対する認知リハビリテーションの開発と効果検証に関する研究」（研究代表者：中込和幸）研究打合せ．東京，2015.1.18.
- 17) 菊池安希子：平成26年度精神・神経疾患研究開発費「統合失調症の診断，治療法の開発に関する研究Ⅱ」研究報告会（主任研究者：中込和幸）．東京，2015.2.8.
- 18) 安藤久美子：責任能力・精神鑑定関係共同研究平成26年度第1回研究会．埼玉，2014.5.9.
- 19) 安藤久美子：厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））「青年期・成人期発達障がいへの対応困難ケースへの危機介入と治療・支援に関する研究」2014年度第1回内山班会議．東京，2014.5.25.
- 20) 安藤久美子：東京地裁精神鑑定研究会（指定討論）．東京，2014.7.17.
- 21) 安藤久美子：第12回TFPC研究会，東京，2014.7.26.
- 22) 安藤久美子：責任能力・精神鑑定関係共同研究平成26年度第2回研究会．埼玉，2014.10.7.
- 23) 安藤久美子：厚生労働省科学研究「青年期・成人期発達障がいの対応困難ケースへの危機介入と治療・支援に関する研究」（研究代表者：内山登紀夫）研究報告会．東京，2014.10.11.
- 24) 安藤久美子：第13回TFPC研究会，東京，2014.11.29.
- 25) 安藤久美子，曾雌崇弘，津村秀樹，中澤佳奈子，野田隆政：生物・心理・社会的諸要因からの多面的な司法精神医学的リスクアセスメント法の開発．平成26年度精神・神経疾患研究開発費 精神疾患研究班 合同研究報告会，東京，2014.12.10.

- 26) 安藤久美子:厚生労働省科学研究「青年期・成人期発達障がいへの対応困難ケースの危機介入と治療・支援に関する研究」(研究代表者:内山登紀夫)研究報告会. 東京, 2015.1.24.
- 27) 安藤久美子:心神喪失者等医療観察法関係研究協議会. 東京, 2015.1.29.
- 28) 安藤久美子:東京地裁精神鑑定研究会. 東京, 2015.3.2.
- 29) 藤井千代:第12回TFPC研究会. 東京, 2014.7.26.
- 30) 藤井千代:第13回TFPC研究会. 東京, 2014.11.29.
- 31) 藤井千代, 河野稔明, 菊池安希子, 長沼洋一, 安藤久美子:指定医療機関モニタリング全国調査とこれに基づく均てん化策の推進. 平成26年度精神・神経疾患研究開発費 精神疾患研究班 合同研究報告会, 2014.12.10.
- 32) 藤井千代:厚生労働省科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))「医療観察法の向上と関係機関の連携に関する研究」(研究代表者:中島豊爾)平成26年度第2回中島班全体会議. 東京, 2014.12.23.
- 33) 藤井千代:平成26年度第2回「精神障害者の地域生活支援の在り方とシステム構築」(研究代表者:伊藤順一郎)研究班会議. 東京, 2015.1.25.
- 34) 藤井千代:北村メンタルヘルス研究所研究会. 東京, 2015.2.6.
- 35) 藤井千代:もくせい家族研究会. 埼玉, 2015.2.7.
- 36) 藤井千代:社会精神医学研究会. 東京, 2015.3.24.
- 37) 藤井千代, 安藤久美子, 渡邊 理, 佐久間啓, 岡田幸之:精神科事前指示(psychiatric advance directive)のあり方と有用性に関する予備的検討. 平成26年度精神保健研究所研究報告会, 東京, 2015.3.9.
- 38) 河野稔明:平成26年度厚生労働省科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究」(研究代表者:竹島 正)第1回会議およびディスカッション, 東京, 2014.7.14.
- 39) 曾雌崇弘, 安藤久美子, 津村秀樹, 中澤佳奈子, 野田隆政, 岡田幸之:衝動性評価に関わる神経生理分類に関する研究. 平成26年度精神保健研究所研究報告会, 東京, 2015.3.9.
- 40) 安田拓人, 安藤久美子, 岡田幸之:刑事責任能力鑑定の均てん化と司法システムにおける適切な利用法の確立. 平成26年度精神・神経疾患研究開発費 精神疾患研究班 合同研究報告会, 東京, 2014.12.10.

(4) その他

- 1) 岡田幸之:日本司法精神医学会編集委員会. 沖縄, 2014.5.15.
- 2) 岡田幸之:日本司法精神医学会理事会. 沖縄, 2014.5.15.
- 3) 岡田幸之:家庭裁判所委員会. 東京, 2014.7.8.
- 4) 岡田幸之:日本司法精神医学会認定精神鑑定医制度試験委員会会議. 東京, 2014.7.13.
- 5) 岡田幸之:平成26年度日本犯罪学会第2回理事会. 東京, 2014.10.11.
- 6) 岡田幸之:平成26年度日本犯罪学会第1回評議委員会. 東京, 2014.10.11.
- 7) 岡田幸之:東京家庭裁判所委員. 東京, 2014.12.18.
- 8) 岡田幸之:日本犯罪学会大開理事会. 東京, 2015.3.12.
- 9) 岡田幸之:精神・神経科学振興財団第9回理事会. 東京, 2015.3.19.
- 10) 岡田幸之:子を巡る紛争において家庭裁判所が果たす役割. 東京家庭裁判所委員会, 東京, 2015.3.13.
- 11) 菊池安希子:第6期常任理事会. 日本ブリーフサイコセラピー学会, 東京, 2014.4.19.
- 12) 菊池安希子:第7期理事会. 日本ブリーフサイコセラピー学会, 東京, 2014.4.19.
- 13) 菊池安希子:EMDR ベーシックコンサルテーション. 電話会議, 東京, 2014.6.14.
- 14) 菊池安希子:日本臨床心理士会司法矯正領域委員会. 東京, 2014.7.6.
- 15) 菊池安希子:日本ブリーフサイコセラピー学会常任理事会. 熊本, 2014.8.29.

- 16) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会理事会。熊本，2014.8.29.
- 17) 菊池安希子：日本 EMDR 学会理事会。電話会議，東京，2014.9.4.
- 18) 菊池安希子：日本認知療法学会編集委員会。大阪，2014.9.13.
- 19) 菊池安希子：臨床心理職国家資格推進連絡協議会。東京，2014.9.5.
- 20) 菊池安希子：日本臨床心理士会司法矯正領域委員会。東京，2014.9.7.
- 21) 菊池安希子：日本 EMDR 学会ファシリテーターミーティング。電話会議，東京，2014.9.30.
- 22) 菊池安希子：日本臨床心理士会第5回司法矯正領域研修会。司法矯正領域委員会，東京，2014.10.26.
- 23) 菊池安希子：日本 EMDR 学会理事会。東京，2014.11.16.
- 24) 菊池安希子：日本 EMDR 学会ベーシックコンサルテーション。日本 EMDR 学会，電話会議，東京，2014.1.29.
- 25) 菊池安希子：平成 25・26 年度医療観察法心理士ネットワーク幹事会。宮城，2014.12.5.
- 26) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会常任理事会。東京，2014.12.28.
- 27) 菊池安希子：日本臨床心理士会，司法矯正警察領域委員会。東京，2015.1.18.
- 28) 菊池安希子：日本臨床心理士会担当者研修会。司法矯正領域委員会，東京，2015.2.15.
- 29) 安藤久美子：司法精神医学委員会。日本精神神経学会，東京，2014.4.20.
- 30) 安藤久美子：司法精神神経学会 司法精神医学委員会。東京，2014.7.13.
- 31) 安藤久美子：日本精神神経学会 男女共同参画・内閣府レクチャー。東京，2014.9.25.
- 32) 安藤久美子：日本精神神経学会 男女共同参画委員会研修会。東京，2014.9.25.
- 33) 安藤久美子：司法精神神経学会 司法精神医学委員会。東京，2014.9.28.
- 34) 安藤久美子：日本精神神経学会 司法精神医学委員会。東京，2014.10.26.
- 35) 安藤久美子：司法精神神経学会 司法精神医学委員会。東京，2014.12.14.
- 36) 安藤久美子：日本司法共生社会学会 理事会。東京，2015.1.24.
- 37) 安藤久美子：日本精神神経学会 司法精神医学委員会。東京，2015.2.8.
- 38) 藤井千代：日本精神神経学会 医療倫理委員会。東京，2014.5.10.
- 39) 藤井千代：日本精神神経学会 男女共同参画推進委員会内閣府研修会。東京，2014.9.25.
- 40) 藤井千代：日本精神神経学会 医療倫理委員会。東京，2014.11.29.
- 41) 藤井千代：日本精神神経学会 医療倫理委員会。東京，2015.2.28.
- 42) 藤井千代：日本精神神経学会 男女共同参画委員会。東京，2015.3.1.

C. 講演

- 1) 岡田幸之：精神疾患診断と法律判断。第1回 NCNP メディア塾，JTB フォレスト，東京，2014.8.22.
- 2) 岡田幸之：医療観察法の対象者への障害福祉サービス地域での支援の実情と課題ー。平成 26 年度第2回精神保健福祉意見交換会，しのぎ文化プラザ，東京，2014.9.26.
- 3) 岡田幸之：発達障害・人格障害と責任能力について。精神医学勉強会（講義），横浜地方検察庁，神奈川，2014.10.17.
- 4) 岡田幸之：司法精神医療の概念(2)（司法精神医学の評価方法・司法精神鑑定と医療観察法鑑定）。精神保健看護特論 B-2（講義），東京医科歯科大学大学院，東京，2014.10.21.
- 5) 岡田幸之：パーソナリティーについて。刑事鑑定研究会，甲府地方裁判所，山梨，2014.12.15.
- 6) 岡田幸之：裁判員裁判と鑑定。刑事鑑定研究会，さいたま地方裁判所，埼玉，2014.11.16.
- 7) 岡田幸之：精神鑑定と責任能力判断の実務的問題。福岡地方検察庁，福岡，2015.1.15.
- 8) 菊池安希子：司法精神医療におけるリスク管理。平成 26 年度社会復帰調整官処遇指針開発研究会，法務省保護局，東京，2014.9.3.
- 9) 菊池安希子：統合失調症患者に対する認知行動療法。茨城県立こころの医療センター院内講演会，茨城県立こころの医療センター，茨城，2014.9.9.
- 10) 木下善弘，菊池安希子：統合失調症の認知行動療法，国立精神・神経医療研究センター認知行動療法

- センター，東京，2014.12.12.
- 11) 菊池安希子：医療観察法におけるリスクアセスメントについて等．神奈川県社会復帰促進アセスメント活動研究会，国立精神・神経医療研究センター，東京，2015.1.30.
 - 12) 菊池安希子：「より安心・安全に支援するために備える」～対象者を見守る視点と援助者自身の身を守る備えとは～．平成26年度札幌地区・日胆地区合同地域連絡協議会，札幌市教育文化会館，北海道，2015.2.13.
 - 13) 菊池安希子：統合失調症の認知行動療法基本的な考え方と技術について．精神科集談会，帝京大学医学部附属病院，東京，2015.2.17.
 - 14) 安藤久美子：知的・発達障害のある人の性支援と SOTSEC-ID. Panda-J 研究所，東京，2014.4.25.
 - 15) 安藤久美子：通院処遇の実際．第36回かながわ司法精神医療福祉ネットワーク会議，川崎市北部リハビリテーションセンター百合丘障害者センター，神奈川，2014.7.18.
 - 16) 安藤久美子：SOTSEC-ID（日本語版）．海外の刑事司法研究，Panda-J 研究所，東京，2014.8.12.
 - 17) 安藤久美子：指定通院医療機関を対象としたモニタリング調査の分析．第99回【東京】医療観察制度関係機関連絡協議会，国立精神・神経医療研究センター，東京，2014.8.14.
 - 18) 安藤久美子：精神疾患診断と法律判断．第1回NCNPメディア塾，JTB フォレスト，東京，2014.8.22.
 - 19) 安藤久美子：刑事精神鑑定の基礎(2)－実施方法(初級編)．第2回司法精神医学研究部 One Day Seminar，国立精神・神経医療研究センター，東京，2014.9.6.
 - 20) 安藤久美子：初級実習(1)．第2回司法精神医学研究部 One Day Seminar，国立精神・神経医療研究センター，東京，2014.9.6.
 - 21) 安藤久美子：「首都圏フィールド・ワーク」実習（開智高校），国立精神・神経医療研究センター，東京，2014.11.13.
 - 22) 安藤久美子：精神障害者の性犯罪の再犯を防止するための地域支援者について．精神福祉事業に伴う事例検討会，東京都南多摩保健所，東京，2014.11.14.
 - 23) 安藤久美子：全国通院処遇の現状と展望．第8回北陸医療観察法研究会（特別講演），本多の森会議室，石川，2014.11.22.
 - 24) 安藤久美子：被害少年の心理と特性．専科教養，警察大学校，東京，2015.2.4.
 - 25) 安藤久美子：初心者のための精神鑑定．星和書店講演会，アルカディア市ヶ谷，東京，2015.2.12-13.
 - 26) 安藤久美子：アセスメントツールの理解と活用について．拡大研究会，仙台少年鑑別所，宮城，2015.3.4.
 - 27) 藤井千代：「松本ハウス」コントとトークショー．埼玉会館小ホール，埼玉，2014.7.2.
 - 28) 藤井千代：気分のセルフコントロール．足立区こころといのちの講演会，エミエールタワー竹の塚，東京，2015.3.20.

D. 学会活動（学会主催，学会役員，座長，編集委員）

(1) 学会役員

- 1) 岡田幸之：日本犯罪学会 理事
- 2) 岡田幸之：日本司法精神医学会 理事
- 3) 岡田幸之：日本社会精神医学会 評議員
- 4) 岡田幸之：日本精神科診断学会 評議員
- 5) 菊池安希子：日本司法精神医学会 評議員
- 6) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会 副会長
- 7) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会 常任理事
- 8) 菊池安希子：日本EMDR学会 副理事長
- 9) 菊池安希子：日本EMDR学会 理事
- 10) 安藤久美子：日本社会精神医学会 評議員

- 11) 安藤久美子：日本司法精神医学会 評議員
- 12) 安藤久美子：日本司法共生社会学会 理事
- 13) 藤井千代：日本社会精神医学会 評議員
- 14) 藤井千代：日本精神保健・予防学会 評議員

(2) 座長

- 1) 岡田幸之：第51回日本犯罪学会総会〈第二セッション〉。東京，2014.10.11.
- 2) 菊池安希子：DES-Tの正しい使い方：青年期アナログ群の大規模データを用いたデモンストレーション。日本EMDR学会第9回学術大会，神戸，2014.6.6.
- 3) 菊池安希子：一般演題「複数面接の特徴を生かすこと—モラルハラスメントの事例から—」。第24回日本ブリーフサイコセラピー学会，熊本，2014.8.29-31.
- 4) 菊池安希子：自主企画シンポジウム 3「精神病性障害に対する認知行動療法（CBTp）の研修システムをどのように確立するか」。第14回日本認知療法学会，大阪，2014.9.12-14.
- 5) 安藤久美子：第110回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2014.6.26-28.
- 6) 藤井千代：地域精神保健・福祉。第34回日本社会精神医学会，富山国際会議場，富山，2015.3.5-6.

(3) 学会誌編集委員等

- 1) 岡田幸之：日本司法精神医学会 編集委員長
- 2) 岡田幸之：日本犯罪学会 編集委員
- 3) 岡田幸之：日本司法精神医学会 研修・教育企画拡大委員
- 4) 岡田幸之：日本司法精神医学会 裁判員制度プロジェクト委員
- 5) 岡田幸之：日本司法精神医学会 精神鑑定委員
- 6) 岡田幸之：American Academy of Psychiatry and the Law International Committee
- 7) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会 学術委員会委員長
- 8) 菊池安希子：日本EMDR学会 マニュアル委員長
- 9) 菊池安希子：日本司法精神医学会 編集委員
- 10) 菊池安希子：日本EMDR学会 第10回学術大会準備委員
- 11) 菊池安希子：日本臨床心理士会 司法矯正領域専門委員会委員
- 12) 菊池安希子：日本認知療法学会 編集委員会委員
- 13) 安藤久美子：日本司法精神医学会 編集委員補佐
- 14) 安藤久美子：日本司法精神医学会 裁判員制度プロジェクト委員
- 15) 安藤久美子：日本精神神経学会 司法精神医学委員
- 16) 安藤久美子：日本精神神経学会 男女共同参画委員
- 17) 安藤久美子：日本司法共生社会学会，日本司法共生学会 プログラム委員
- 18) 安藤久美子：American Academy of Psychiatry and the Law International Committee
- 19) 藤井千代：日本精神神経学会 医療倫理委員
- 20) 藤井千代：日本精神神経学会 男女共同参画委員
- 21) 藤井千代：日本社会精神医学会 倫理規定委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 岡田幸之，安藤久美子，藤井千代，河野稔明，曾雌崇弘：第2回司法精神医学研究部 One Day Seminar。東京，2014.9.6.
- 2) 岡田幸之，菊池安希子，安藤久美子，藤井千代，津村秀樹，河野稔明，曾雌崇弘：第9回司法精神医学研修。東京，2014.10.28-29.

- 3) 菊池安希子, 石垣琢磨, 松本和紀: Emmanuelle Peters 博士による妄想に対する認知行動療法ワークショップ. CBTp ネットワーク, 東京, 2014.11.20.
- 4) 川畑直人, 渡邊 悟, 菊池安希子, 高橋郁恵, 藤代富広, 町田隆司, 吉村雅世, 津川律子: 第 5 回 司法矯正領域研修会. 日本臨床心理士会, 東京, 2014.10.26.
- 5) 川畑直人, 渡邊 悟, 菊池安希子, 高橋郁恵, 藤代富広, 町田隆司, 吉村雅世, 津川律子: 平成 26 年度 都道府県臨床心理士会 司法矯正領域担当者研修会. 日本臨床心理士会, 大阪, 2014.2.15.

(2) 研修会講師

- 1) 岡田幸之: 医療観察法における精神鑑定の実際と審判員の業務. 平成 26 年度 精神保健判定医等研修会, 大阪, 2014.6.7.
- 2) 岡田幸之: 医療観察法における精神鑑定の実際と審判員の業務. 平成 26 年度 精神保健判定医等研修会, 福岡, 2014.7.19.
- 3) 岡田幸之: 精神鑑定の基礎知識. 第 139 回 検事一般研修, 東京, 2014.7.31.
- 4) 岡田幸之: 医療観察法における精神鑑定の実際と審判員の業務. 平成 26 年度 精神保健判定医等研修会, 東京, 2014.8.30.
- 5) 岡田幸之: 医療観察法の医療～社会復帰を促進するための医療の取組みと最近の動向. 秋田県精神保健福祉協会研修会, 秋田, 2014.8.27.
- 6) 岡田幸之: 刑事精神鑑定入門－法律、制度、歴史. 第 2 回 司法精神医学研究部 One Day Seminar, 東京, 2014.9.6.
- 7) 岡田幸之: 刑事精神鑑定の基礎(1)－考え方(初級編). 第 2 回 司法精神医学研究部 One Day Seminar, 東京, 2014.9.6.
- 8) 岡田幸之: 初級実習(2). 第 2 回 司法精神医学研究部 One Day Seminar, 東京, 2014.9.6.
- 9) 岡田幸之: 司法精神医学概論－歴史、法律、制度. 第 9 回 司法精神医学研修, 東京, 2014.10.28.
- 10) 岡田幸之: 刑事責任能力と精神鑑定. 第 9 回 司法精神医学研修, 東京, 2014.10.28.
- 11) 岡田幸之: 医療観察法総論. 第 9 回 司法精神医学研修, 東京, 2014.10.28.
- 12) 岡田幸之, 安藤久美子: 司法精神医療におけるリスク・アセスメント(1). 第 9 回 司法精神医学研修, 東京, 2014.10.29.
- 13) 岡田幸之: 司法精神医学③. 第 7 回 社会復帰調整官初任研修, 東京, 2014.10.30.
- 14) 岡田幸之: 精神鑑定の基礎知識. 第 140 回 検事一般研修, 東京, 2014.11.27.
- 15) 岡田幸之: リスクアセスメント. 任用研修課程高等科 第 46 回研修, 東京, 2015.1.9.
- 16) 岡田幸之: 指定入院医療機関の現状と課題/リスク・アセスメントとリスク・マネジメントー退院後の予後からー. 平成 26 年度 医療観察法 医療従事者上級研修会, 東京, 2015.1.17.
- 17) 岡田幸之: 自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム障がい(ASD)の理解と処遇の実際について. 平成 26 年度 社会復帰調整官中央連絡協議会, 東京, 2015.1.22.
- 18) 岡田幸之: 司法精神医学概論. 鑑定技術職員養成科 第 65 期研修, 埼玉, 2015.2.18.
- 19) 岡田幸之: 精神鑑定. 裁判所書記官養成課程 第 1 部 第 11 期研修, 埼玉, 2015.2.19.
- 20) 岡田幸之: 精神鑑定. 裁判所書記官養成課程 第 2 部 第 10 期研修, 埼玉, 2015.2.19.
- 21) 岡田幸之: 精神鑑定. 家庭裁判所調査要請家庭 第 10 期 後期合同研修, 埼玉, 2015.2.19.
- 22) 岡田幸之: リスクアセスメント. 専門研修課程調査鑑別科 第 8 回研修, 東京, 2015.2.27.
- 23) 菊池安希子: 統合失調症の認知行動療法. 医療法人横田会 向陽台病院院内研修, 熊本, 2014.4.21-22.
- 24) 菊池安希子: 多職種で行う認知行動療法. 臨床作業療法士のための基幹技術(1)作業療法カウンセリングの基礎と応用力育成, 東京, 2014.4.26.
- 25) 菊池安希子: SCIT 研修会, 東京, 2014.7.5.
- 26) 菊池安希子: SCIT 研修会(司会), 東京, 2014.7.6.
- 27) 菊池安希子: V-2. 精神療法Ⅱ: 統合失調症への認知行動療法の理論と実際. 初期レジデントセミ

- ナー, 東京, 2014.7.7.
- 28) 菊池安希子: リスクアセスメントツールについて. 専門研修課程専攻科 第659回(成人用一般リスクアセスメントツール)研修, 東京, 2014.8.5.
 - 29) 菊池安希子, 小山繭子: 司法精神医療における心理学的治療アプローチ(1). 第9回 司法精神医学研修, 東京, 2014.10.29.
 - 30) 菊池安希子, 小山繭子: 司法精神医療における心理学的治療アプローチ(2). 第9回 司法精神医学研修, 東京, 2014.10.29.
 - 31) 菊池安希子: 講義①「統合失調症における日常生活の改善を目指した認知行動療法について」講義②「統合失調症における認知行動療法の実際」. 認知行動療法研修会, 岩手県立精神保健福祉センター主催, 岩手, 2014.11.8.
 - 32) 菊池安希子: 認知行動療法を現場で活用するために. 平成26年度研修会, 東京, 2014.11.9.
 - 33) 菊池安希子: 通院期間中の処遇、地域ケア. 平成26年度 医療観察法医療従事者上級研修会, 東京, 2014.12.20.
 - 34) 菊池安希子: 医療観察法対象者への関わり方. 平成26年度 医療観察法医療従事者上級研修会, 東京, 2014.12.21.
 - 35) 菊池安希子: 統合失調症の認知行動療法について. 相模原市緑区支援業務従事者及び関係機関職員研修, 神奈川, 2015.1.23.
 - 36) 菊池安希子: 生活に活かす統合失調症の認知行動療法. 2014年度日本財団助成事業 精神障がい者家族のピアサポート相談研修会. 岡山, 2015.1.31.
 - 37) 菊池安希子: 医療観察法対象者のリスク評価について. 病院研修会, 山口, 2015.2.7.
 - 38) 菊池安希子: 司法精神医療におけるリスク管理. 第2回 社会復帰調整官専修科研修, 東京, 2015.2.27.
 - 39) 菊池安希子, 朝波千尋: 精神症状評価尺度PSYRATS評定研修. CBTpネットワーク, 東京, 2015.2.28.
 - 40) 菊池安希子: 暴力リスクや衝動性の高い患者へのアプローチ. 平成26年度第3回トピックス研修会, 大阪, 2015.3.17.
 - 41) 菊池安希子: やわらか CBT のススメ～技法に持ち込むための工夫～. 日本ブリーフサイコセラピー学会第12回地方研修会, 青森, 2015.3.21.
 - 42) 安藤久美子: 精神医学. 家庭裁判所調査官養成課程 第11期 前期合同研修, 埼玉, 2014.7.8.
 - 43) 安藤久美子: 精神医学. 家庭裁判所調査官養成課程 第11期 前期合同研修, 埼玉, 2014.7.15.
 - 44) 安藤久美子: 精神鑑定. 第12回 裁判員裁判対象事件担当中核事務官研修, 東京, 2014.10.21.
 - 45) 安藤久美子: 医療観察法の現状(通院). 第9回 司法精神医学研修, 東京, 2014.10.28.
 - 46) 安藤久美子, 岡田幸之: 司法精神医療におけるリスク・アセスメント(2). 第9回司法精神医学研修, 東京, 2014.10.29.
 - 47) 安藤久美子: 通院期間中の処遇、地域ケア. 平成26年度 医療観察法医療従事者上級研修会, 東京, 2014.12.20.
 - 48) 安藤久美子: 司法精神医学の基本—精神鑑定を中心に. 第3回 司法精神医学研修会, 東京, 2015.1.12.
 - 49) 安藤久美子: 通院医療からみた指定入院医療機関に期待すること. 平成26年度 医療観察法医療従事者上級研修会, 東京, 2015.1.17.
 - 50) 安藤久美子: 精神鑑定. 平成26年度 新任検事研修, 東京, 2015.3.23.
 - 51) 藤井千代, 河野稔明: 医療観察法の現状(入院). 第9回 司法精神医学研修, 東京, 2014.10.28.

F. その他

- 1) 岡田幸之: 医療観察法カンファレンス. 東京地方裁判所, 東京, 2014.5.12.
- 2) 岡田幸之: NHK スペシャル. 取材, 東京, 2014.6.10.
- 3) 岡田幸之: 指定入院医療機関の診療情報ネットワーク体制について. データベース構築にかかる事業第1回作業チーム意見交換会, 東京, 2014.6.20.

- 4) 岡田幸之：医療観察法カンファレンス。東京地方裁判所，東京，2014.8.8.
- 5) 岡田幸之：東京地方検察庁ケース検討。東京，2014.12.5.
- 6) 岡田幸之：裁判員裁判導入後の精神鑑定の現状と課題。読売新聞司法記者クラブ取材，東京，2014.12.17.
- 7) 岡田幸之：司法精神医療等人材陽性研修企画委員会。東京，2015.2.7.
- 8) 岡田幸之：カンファレンス。東京地方裁判所，東京，2015.3.16.
- 9) 岡田幸之：日弁連刑事弁護センター責任能力小委員会との第14回意見交換。東京，2015.3.21.
- 10) 菊池安希子：処遇調査の充実化に係わる助言・教授。府中刑務所効果検証業務に係わるアドバイザー，東京，2014.6.17.
- 11) 菊池安希子：EMDR Part 2 トレーニングファシリテーター。東京，2014.8.1-3.
- 12) 菊池安希子：統合失調症のCBTのエビデンスと臨床現場での実施について（指定討論）。第58回DYCSS3研究会，東京，2014.8.10.
- 13) 菊池安希子：矯正処遇及び社会復帰支援施策等に係わる助言・教授。府中刑務所効果検証業務に係わるアドバイザー，東京，2014.11.21.
- 14) 菊池安希子：統合失調症の認知行動療法。統合失調症早期診断・治療センター勉強会，東京，2014.11.29.
- 15) 菊池安希子：成人用一般リスクアセスメントツール開発会議（第4回）。東京，2014.12.16.
- 16) 菊池安希子：ケースカンファレンス（指定討論）。日本EMDR学会東京スタディグループ，東京，2015.1.30.
- 17) 菊池安希子：日本EMDR学会ベーシックコンサルテーション。東京，2015.2.1.
- 18) 安藤久美子：医療観察法カンファレンス。東京地方裁判所，東京，2014.4.10.
- 19) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2014.4.16.
- 20) 安藤久美子：審判。東京地方裁判所，東京，2014.4.18.
- 21) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）。愛光女子学園，東京，2014.4.23.
- 22) 安藤久美子：学生のメンタルヘルス指導。国立大学法人お茶の水女子大学，東京，2014.4.23.
- 23) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2014.5.21.
- 24) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）。愛光女子学園，東京，2014.5.28.
- 25) 安藤久美子：学生のメンタルヘルス指導。国立大学法人お茶の水女子大学，東京，2014.5.28.
- 26) 安藤久美子：カンファレンス。横浜地方裁判所，神奈川，2014.6.17.
- 27) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2014.6.18.
- 28) 安藤久美子：医療観察法カンファレンス。東京地方裁判所，東京，2014.6.23.
- 29) 安藤久美子：学生のメンタルヘルス指導。国立大学法人お茶の水女子大学，東京，2014.6.25.
- 30) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）。愛光学園，東京，2014.7.11.
- 31) 安藤久美子：カンファレンス。東京高等裁判所，東京，2014.7.14.
- 32) 安藤久美子：カンファレンス。東京地方裁判所，東京，2014.7.14.
- 33) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2014.7.16.
- 34) 安藤久美子：カンファレンス。東京高等裁判所，東京，2014.7.17.
- 35) 安藤久美子：学生のメンタルヘルス指導。国立大学法人お茶の水女子大学，東京，2014.7.23.
- 36) 安藤久美子：発達上の課題を抱える少年院在院者に対する性非行プログラムの策定に当たっての指導，助言。東京，2014.7.25.
- 37) 安藤久美子：審判。東京地方裁判所，東京，2014.7.25.
- 38) 安藤久美子：カンファレンス。横浜地方裁判所，神奈川，2014.8.8.
- 39) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2014.8.20.
- 40) 安藤久美子：学生のメンタルヘルス指導。国立大学法人お茶の水女子大学，東京，2014.8.
- 41) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）。愛光女子学園，東京，2014.8.12.

- 42) 安藤久美子：効果検証業務に関する助言等。国立精神・神経医療研究センター，東京，2014.8.28.
- 43) 安藤久美子：カンファレンス。東京地方裁判所，東京，2014.9.8.
- 44) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）。愛光女子学園，東京，2014.9.9.
- 45) 安藤久美子：証人尋問。横浜地方裁判所小田原支部，神奈川，2014.9.11.
- 46) 安藤久美子，岡田幸之：「性犯罪事例の地域処遇について（東京都南多摩保健所）」（アドバイザー）。東京，2014.9.14.
- 47) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2014.9.17
- 48) 安藤久美子：学生のメンタルヘルス指導。国立大学法人お茶の水女子大学，東京，2014.9.24.
- 49) 安藤久美子：証人尋問。新潟地方裁判所，新潟，2014.10.1.
- 50) 安藤久美子：医療観察法カンファレンス。東京地方裁判所立川支部，東京，2014.10.2.
- 51) 安藤久美子：医療観察法カンファレンス。東京地方裁判所，東京，2014.10.8.
- 52) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2014.10.15.
- 53) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）。愛光女子学園，東京，2014.10.22.
- 54) 安藤久美子：学生のメンタルヘルス指導。国立大学法人お茶の水女子大学，東京，2014.10.22.
- 55) 安藤久美子：医療観察法カンファレンス。東京地方裁判所立川支部，東京，2014.10.23.
- 56) 安藤久美子：医療観察法カンファレンス。東京地方裁判所，東京，2014.10.30.
- 57) 安藤久美子：医療観察法カンファレンス。東京地方裁判所立川支部，東京，2014.10.31.
- 58) 安藤久美子：医療観察法カンファレンス。東京地方裁判所立川支部，東京，2014.11.11.
- 59) 安藤久美子：医療観察法カンファレンス。東京地方裁判所，東京，2014.11.11.
- 60) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2014.11.12.
- 61) 安藤久美子：カンファレンス。東京家庭裁判所，東京，2014.11.14.
- 62) 安藤久美子：日弁連刑事弁護センター責任能力小委員会との第13回意見交換会。東京，2014.11.15.
- 63) 安藤久美子：医療観察法カンファレンス。東京地方裁判所，東京，2014.11.20.
- 64) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）。愛光女子学園，東京，2014.11.25.
- 65) 安藤久美子：学生のメンタルヘルス指導。国立大学法人お茶の水女子大学，東京，2014.11.25.
- 66) 安藤久美子：医療観察法カンファレンス。東京地方裁判所，東京，2014.12.3.
- 67) 安藤久美子：東京地方検察庁ケース検討。東京地方検察庁，東京，2014.12.5.
- 68) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2014.12.17.
- 69) 安藤久美子：学生のメンタルヘルス指導。国立大学法人お茶の水女子大学，東京，2014.12.25.
- 70) 安藤久美子：少年審判カンファレンス。東京家庭裁判所，東京，2017.1.19.
- 71) 安藤久美子：鑑定人召喚。新潟地方裁判所，新潟，2015.1.20.
- 72) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2015.1.21.
- 73) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）。愛光女子学園，東京，2015.1.28.
- 74) 安藤久美子：学生のメンタルヘルス指導。国立大学法人お茶の水女子大学，東京，2015.1.28.
- 75) 安藤久美子：心神喪失者等医療観察法関係研究協議会。東京，2015.1.29.
- 76) 安藤久美子，岡田幸之：矯正教育プログラム（性非行）に係わる効果検証に関する助言・指導。東京，2015.2.6.
- 77) 安藤久美子：発達上の課題抱える少年院在院者に対する処遇プログラムに策定等について（指導・助言）。東京，2015.2.10.
- 78) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2015.2.18.
- 79) 安藤久美子：学生のメンタルヘルス指導。国立大学法人お茶の水女子大学，東京，2015.2.25.
- 80) 安藤久美子：東京地方検察庁事例相談会。東京，2015.2.26.
- 81) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2015.3.18.
- 82) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）。愛光女子学園，東京，2015.3.11.
- 83) 安藤久美子：学生のメンタルヘルス指導。国立大学法人お茶の水女子大学，東京，2015.3.25.

- 84) 安藤久美子：日弁連刑事弁護センター責任能力小委員会との第14回意見交換。東京，2015.3.21.
- 85) 安藤久美子（治験分担医師）：統合失調症患者を対象としたアリピプラゾール IM デポ剤（OPC-14597IMD）の有効性及び安全性をアリピプラゾール錠剤と比較する多施設共同，実薬対象，二重盲検，並行群間比較試験：大塚製薬(株).
- 86) 安藤久美子（治験分担医師）：統合失調症患者を対象としたアリピプラゾール IM デポ注射剤（OPC-14597IMD）の反復投与による薬物動態を検討する非盲検，多施設共同試験（臨床薬理試験）：大塚製薬(株).
- 87) 安藤久美子（治験分担医師）：治-165 OPC-34712 の統合失調症患者を対象とした長期投与試験.
- 88) 安藤久美子：警視庁人質立てこもり事件等における支援活動囑託委員.
- 89) 安藤久美子：発達障害特別支援教育委員（日本児童青年精神医学会認定）.
- 90) 藤井千代：精神医療審査会。埼玉県精神保健福祉センター，埼玉，2014.4.2.
- 91) 藤井千代：思春期こころの健康相談。所沢保健センター，埼玉，2014.4.23.
- 92) 藤井千代：精神医療審査会。埼玉県精神保健福祉センター，埼玉，2014.5.14.
- 93) 藤井千代：思春期こころの健康相談。所沢保健センター，埼玉，2014.5.28.
- 94) 藤井千代：思春期こころの健康相談。所沢保健センター，埼玉，2014.6.25.
- 95) 藤井千代：精神医療審査会。埼玉県精神保健福祉センター，埼玉，2014.6.11.
- 96) 藤井千代：思春期こころの健康相談。所沢保健センター，埼玉，2014.7.23.
- 97) 藤井千代：思春期こころの健康相談。所沢保健センター，埼玉，2014.8.20.
- 98) 藤井千代：思春期こころの健康相談。所沢保健センター，埼玉，2014.9.24.
- 99) 藤井千代：思春期こころの健康相談。所沢保健センター，埼玉，2014.10.22.
- 100) 藤井千代：思春期こころの健康相談。所沢保健センター，埼玉，2014.11.26.
- 101) 藤井千代：思春期こころの健康相談。所沢保健センター，埼玉，2014.12.24.
- 102) 藤井千代：思春期こころの健康相談。所沢保健センター，埼玉，2015.1.21.
- 103) 藤井千代：高齢障害者に対する支援の在り方に関する論点整理のための作業チーム，厚生労働省，東京，2015.2.23.
- 104) 藤井千代：思春期こころの健康相談。所沢保健センター，埼玉，2015.2.25.
- 105) 藤井千代：高齢障害者に対する支援の在り方に関する論点整理のための作業チーム，厚生労働省，東京，2015.3.13.
- 106) 藤井千代：思春期こころの健康相談。所沢保健センター，埼玉，2015.3.25.
- 107) 藤井千代：高齢障害者に対する支援の在り方に関する論点整理のための作業チーム，厚生労働省，東京，2015.3.25.

13. 自殺予防総合対策センター

I. 研究部の概要

わが国の2012年中の自殺死亡者数は2012年に1998年以降初めて3万人を下回り、その後も引き続き減少している。自殺対策基本法制定以後の、国を挙げての自殺対策が効果をあげている可能性も考えられる。このため、世界保健機関（WHO）を含めて、海外からもわが国の総合的な自殺対策への関心が高まっている。しかし、若年層の自殺死亡率が上昇傾向にあり、若年層向けの対策や、自殺未遂者向けの対策を一層推進することが必要とされている。また、国、地方公共団体、関係団体及び民間団体等との連携・協力をさらに推進することが望まれている。

自殺対策の目的は、自殺を防止し、あわせて自殺者の親族等に対する支援を充実し、もって国民が健康で生きがいを持って暮らすことのできる社会の実現に寄与することである（自殺対策基本法）。自殺予防総合対策センターは、自殺予防に向けての政府の総合的な対策を支援するために平成18年10月1日に国立精神・神経センター精神保健研究所の内部組織として設置された。

自殺予防総合対策センターは、センター長のもとに、自殺実態分析室、自殺予防対策支援研究室、適応障害研究室の3研究室を置き、下記の業務を行っている（自殺予防総合対策センター設置要綱）。

- 1) 自殺予防対策に関する情報の収集及び発信に関すること。
- 2) 自殺予防対策支援ネットワークの構築に関すること。
- 3) 自殺の実態分析等に関すること。
- 4) 自殺の背景となる精神疾患等の調査・研究に関すること。
- 5) 自殺予防対策等の研修に関すること。
- 6) 自殺未遂者のケアの調査・研究に関すること。
- 7) 自殺遺族等のケアの調査・研究に関すること。

センター長：竹島 正（併任）、副センター長：松本俊彦（併任）、自殺実態分析室長：松本俊彦（併任）、自殺予防対策支援研究室長：川野健治、適応障害研究室長：藤森麻衣子、自殺実態分析室研究員：山内貴史、非常勤研究員：大槻露華、川本静香（1/1 から）、小高真美、白神敬介（9/30 まで）、高井美智子、客員研究員：稲垣正俊、岡 檀、勝又陽太郎、川島大輔（11/10 から）、荘島幸子（11/10 から）、島菌 進（4/28 から）、白神敬介（11/10 から）、高橋邦彦（5/19 から）、椿 広計（4/28 から）、廣川聖子、福永龍繁、研究生：安藤俊太郎、井上佳祐、亀山晶子、クーロワ・ナズグリ、Christopher Holmberg（6/17 から 8/18）、齋藤 聖（5/26 から）、高木幸子、久永彩香、センター研究助手：滝澤さなえ、望月園江、研究費雇上：長島弥生、増田久重。

II. 研究活動

1) 自殺の要因分析体制の確立に関する研究

精神保健福祉センターとの連携による心理学的剖検の実施に加えて、自殺予防総合対策センターと東京都監察医務院の連携による心理学的剖検の実施体制、手順等を検討した。平成26年5月より、東京都監察医務院の医師が検案を担当した自殺事例の遺族に、冊子「大切な人を自死で亡くされた方へ」と協力依頼等の配布が開始された。平成27年1月末までに約300名の遺族に調査協力依頼が手渡しされ、16名の遺族から協力の可否を含む返信があり、8例の遺族に調査面接を実施した。自殺予防総合対策センターと東京都監察医務院が定期的に事例検討や研究打合せを開催し、自殺予防総合対策センターの研究者が検案業務に同行した結果、調査を実施する中で生じる問題点や課題に迅速に対処することができ、また、心理学的剖検に関する連絡のあった遺族に対して、遺族の心情に配慮したスムーズな対応が行えたと考えられた。（竹島、高井、松本、山内、小高、川野、藤森、大槻、川本）

2) 自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究

心理学的剖検調査で収集された自殺既遂事例のデータを用いて、女性の自殺が、背景にある心理

学的・精神医学的特徴に関して、男性とどのように違うのかを検討した。その結果、女性は男性よりも自傷・自殺未遂歴があった事例の割合が有意に高かった。また女性は男性に比べ、摂食障害の診断が可能と判断された事例が有意に多かった。摂食障害があった全4女性事例については、自傷・自殺未遂歴とその他の精神障害が重複しており、死亡時の年齢は27歳から33歳だった。援助希求行動については、心の健康問題で医師やその他の専門家に相談あるいは治療を受けていた割合が、女性の方で有意に高く、身近な人にも自らの死について発信している傾向にあった。また、精神科を受診していた者の割合も女性で有意に高かった。本研究から、摂食障害のある女性で、特に、重複する精神疾患と自殺未遂歴のある場合には、自殺のリスクがより高くなる危険性があり、初診から年月が経過している患者についても注意を要することが示唆された。また、自殺の危機にある女性は、援助希求に積極的である一方で、自殺のサインとなる自殺関連行動や自殺念慮を繰り返し発信することにより、家族の疲弊や陰性感情の高まりを引き起こし、結果的に長い時間経過の中で女性たちの自殺リスクの高まりを看過する危険もある。その意味では、専門家は家族等への心理教育や精神的サポートも含めた支援が重要であることが分かった。(松本, 小高, 高井, 山内, 竹島)

3) 遺族支援のための情報提供に関する研究

心理学的剖検が東京横浜地域で適切に持続するために、同地区の自死遺族支援関係者との交流が重要であるとの観点から、同地区を中心に自死遺族支援に関わる当事者、関連機関(精神保健福祉センター, 民間団体等)と自殺予防総合対策センタースタッフによる意見交換を行った。その結果、CSP自死遺族サポートネットワークが発足し、その事務局の機能を担うために、自殺予防総合対策センター内にCSP自死遺族サポートチームがつけられた。(川野, 高井, 川本)

4) 遺族支援に資する介入法開発に関する研究

遺族支援を目的として作成された冊子を東京都監察医務院にて検案が行われた自殺事例の遺族への配布を開始した。平成26年5月29日から11月30日までに3名の監察医の検案時に約100名の遺族に冊子が配布された。渡すことができなかった事例は、遺族がいない、または遺族が自殺を受け入れていない場合であった。その他の事例において、配布した監察医、補佐、および配布された自殺者の遺族から拒否、苦情等はなかった。そこで、平成26年12月1日から平成27年1月末までの約8か月間に約200名の遺族に冊子が配布された。配布した監察医、補佐、および配布された自殺者の遺族から拒否、苦情等はなかった。東京都遺族支援パンフレットの配付依頼があったため、併せて配付することになった。(藤森)

5) 重篤な慢性疾患患者の診療過程における自殺予防に関する研究

「多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの構築に関する研究」のデータを用い分析を実施した。脳卒中を発症しなかった者に対する、脳卒中発症から5年以内の者における自殺および他の外因死の相対リスクはともに約10倍であるとともに、発症か5年以上になると顕著に低下した。特に脳卒中後5年以内においては、(1)脳卒中後のうつ病・抑うつ状態をきちんと把握すること、(2)脳卒中後のリハビリテーションにより身体的および認知的な障害の程度を小さくすることが、自殺および他の外因死の予防を考えるうえで重要であると考えられた。(山内)

6) 空間統計学的手法を用いた自殺死亡の時空間集積性の検討

最新の人口動態調査および国勢調査を用いて小地域別の自殺死亡統計(ベイズ推定値)の更新を進めた。統計数理研究所との共同プロジェクトとして人口動態調査および人口動態職業産業別調査死亡票の目的外使用を申請し、全国の二次医療圏別に2012年までの手段・配偶関係・職業別の自殺死亡統計の作成を進めた。(山内)

7) 東日本大震災被災地における自殺予防

岩手県大槌町において、3年計画の住民健康調査を町と協同して実施(2012~)した。1年目の調査票の回収率は33.2%であった。全体の傾向として調査対象者の精神的健康が低い状態にあることが示された。SF-36に基づくQOLの指標では、特に身体的側面が低いことが示された。居住形

態別の分析から、仮設住宅居住者は一般住宅居住者と比べた場合、精神的側面の QOL が低い、平均睡眠時間が短い、相談できる人物がいない、居住地に不便を感じるといった回答の割合が高い傾向がみられた。(川野, 白神)

8) 児童相談所が自殺対策に果たす機能とそのための支援ネットワーク構築の検討

全国 207 箇所の児童相談所を対象とした保護者のメンタルヘルスの問題と自殺関連行動について、専門家との意見交換に基づき、作成した調査票を用いた予備調査と、それを踏まえた全国の児童相談所を対象とした本調査を実施した。160 施設 (76.9%) から回答があった。調査対象となった児童において、25 年度中に保護者等に自殺既遂があった児童は 138 人であった。こうした児童が少なくとも 1 人確認された児童相談所は 4 割であった。自死遺児支援としてのサービスを実施していると回答した施設は 5.6% であり、自死遺児支援もしくは自殺対策を行う場合の困難として「人材の確保」(70%)「職員の技術向上のための研修機会の確保」(53.1%)「医療機関との連携」(31.3%) が挙げられた。本調査によって、児童相談所で支援する児童の一定数に、自殺関連行動への関わりを余儀なくされている児童が存在することが確認された。(川野, 白神, 竹島)

9) 都道府県・政令指定都市等における自殺対策の取組状況に関する調査

内閣府自殺対策推進室等との共同調査として、全国の都道府県・政令指定都市及び市区町村の自殺対策の取組状況の分析を行った。全国の自治体の自殺対策主管課に調査票を送付し、67 の都道府県・政令指定都市の全て及び 1,722 市区町村のうち 1,269 箇所 (73.6%) から回答を得た。分析の結果、市区町村においても、普及啓発事業および人材養成事業を中心に自殺対策が実施されてきたことが示唆された。また、ゲートキーパー研修などの典型的な事業については、評価方法および評価指標を含めた評価のモデル事例を提示することが有用であると考えられた。さらには、民間団体への補助を含めた自治体、特に市区町村の自殺対策事業は基金に拠る部分が大きいこと、今後の継続的な自殺対策推進に向けての財源の安定的な確保は自治体からのニーズの極めて大きい課題であることが示唆された。(山内, 竹島)

10) 学校での自殺予防プログラム/研修効果測定とツール開発

自殺予防教育プログラムの達成目標を「学校における段階的自殺予防プログラム達成指標」について理論的に構築し、仮説検証を行った。202 名の中学生に回答を求めたところ、この指標は高い一貫性を示した。また、破壊的表出と自尊感情に対して、直接的/間接的な説明力を持つことから、妥当性も確認された。この結果をもとに、中学校向け自殺予防教育プログラム GRIP は理論的に整備され、またショートバージョン、小学生バージョンが開発された。(川野, 白神)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

自殺予防総合対策センターホームページ「いきる」の運営、メディアカンファレンス等を通して、市民社会への情報発信を行った。自殺対策ネットワークの発展と民間団体の支援をテーマに自殺対策ネットワーク協議会を開催した (2014.7.29)。東日本大震災の被災者支援・復興支援には、社会的取組と精神保健の連携等の自殺対策の枠組みが有効である可能性があることから、それを事例的、定点観測的に行い、検証・発信していく取組を進めた。科学的根拠に基づく自殺予防総合対策推進コンソーシアム準備会において、若年者の自殺対策のあり方に関するワーキンググループを立上げ、中間報告を行い (2014.9.30)、報告書を取りまとめた。

竹島 正は、全国精神保健福祉連絡協議会の副会長としてその活動を支援した。また、一般社団法人うつ病の予防・治療日本委員会 (JCPTD) 理事、「支援付き住宅推進会議」委員、NPO 法人「自立支援センターふるさとの会」の苦情解決第三者委員会と倫理審査委員会の委員長を務め、平成 26 年度厚生労働省社会福祉推進事業「居住支援と生活支援の展開に当たっての社会資源・地域ネットワークの実態に関する全国調査及び普及可能な事業モデルの研究」への協力を行った。公益社団法人全日本断酒連盟顧問、こころのバリアフリー研究会評議員、地域からこころの医療を考える会

長、一般社団法人 高知医療再生機構こちらの医療 RYOMA 大使を務めた。

松本俊彦は、一般市民を対象とする自殺予防に関する啓発的な講演会の講師を務めた。また、各地で養護教諭を対象にした高校生等の自傷行為の実態と理解のための講演会の講師を務めた。

川野健治は、一般市民を対象とする自殺予防に関する啓発的な講演会の講師を務めた。また、自死遺族支援団体やいのちの電話の主催する研修会等で講師を務めた。

藤森麻衣子は、一般市民を対象とする身体疾患を有する患者の自殺に関する講演会の講師を務めた。

2) 専門教育面における貢献

竹島 正は、全国精神保健福祉相談員会相談役を務めた。また、精神保健対策、自殺対策に関する各種研修への協力を行った。

松本俊彦は、厚生労働省管轄、法務省（矯正局・保護局）管轄、地方自治体、教育委員会が主催する各種研修会で講師を務めるとともに、精神保健福祉センター・保健所、養護教諭のグループが主催する事例検討会において助言者を務め、地域における実務家の業務を支援した。また、早稲田大学人間科学学術院非常勤講師として、心理学・福祉領域の専門家養成に貢献した。さらに、自傷行為に関する著書を刊行し、国内の臨床家・支援者に有益な知見を紹介した。

川野健治は、内閣府の官民連携ブロック会議、自殺対策連携人材養成研修で講師、ファシリテーターを勤めた。地方自治体、司法書士会、社会福祉士会等で自殺対策に関連する講習会で講師を務めた。地方自治体の自殺対策連絡協議会、事例検討会で助言者を務めた。東京多摩いのちの電話の理事をつとめた。

藤森麻衣子は、内閣府、および地方自治体が主催する自殺対策に関連する研修会で講師および助言者を務め、地域における自殺対策の推進に貢献した。また、厚生労働省委託事業がん医療に携わる医師を対象としたコミュニケーション技術研修会、コミュニケーション技術研修ファシリテーター養成講習会、がん医療に携わる医療者を対象としたコミュニケーションに関する勉強会、金沢大学医学部がんプロフェSSIONAL養成事業にて講師を務めた。さらに NCNP TMC 主催第 5 回 CRT 入門講座ワークショップ、第 5 回 CRT 実践講座ワークショップファシリテーターにて講師、ファシリテーターを務め、若手研究者育成に貢献した。

山内貴史は、地方自治体が主催する自殺対策に関連する研修会や自殺対策連絡協議会で講師および助言者を務め、地域における自殺対策の推進に貢献した。

3) 精研の研修の主催と協力

竹島 正は、第 8 回自殺総合対策企画研修（2014.8.19-20）、第 10 回精神科医療従事者自殺予防研修（2014.12.2-3）の主任、第 9 回精神科医療従事者自殺予防研修（2014.9.16-17）の副主任を務めた。また、精神保健計画研究部長として、第 51 回精神保健指導課程研修（2014.7.30-31）の主任を務めた。

松本俊彦は、第 5 回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修（2014.11.4-5）の主任、第 8 回自殺総合対策企画研修（2014.8.19-20）、第 5 回心理職自殺予防研修（2014.9.16-17）、第 10 回精神科医療従事者自殺予防研修（2014.12.2-3）の副主任を務めた。また、薬物依存臨床医師研修の講師を務めた。

川野健治は、第 5 回心理職自殺予防研修（2014.9.16-17）の主任、第 8 回自殺総合対策企画研修（2014.8.19-20）、第 5 回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修（2014.11.4-5）、第 10 回精神科医療従事者自殺予防研修（2014.12.2-3）の副主任を務め、また各々で講師を担当した。

藤森麻衣子は、第 9 回精神科医療従事者自殺予防研修（2014.9.16-17）の主任、第 5 回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修（2014.11.4-5）、第 10 回精神科医療従事者自殺予防研修（2014.12.2-3）の副主任を務めた。

山内貴史は、第 8 回自殺総合対策企画研修（2014.8.19-20）、第 9 回精神科医療従事者自殺予防

研修(2014.9.16-17), 第5回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修(2014.11.4-5)の副主任を務めた。

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査, 委員会等への貢献

内閣府自殺対策推進室, 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課等と連携して, 精神保健的観点からの自殺対策の推進のための提案および協力を行った。平成26年版自殺対策白書(内閣府)の作成に協力した。

竹島 正は, 内閣府本府政策参与(非常勤), 厚生労働省平成26年度自殺防止対策事業評価委員長, 精神保健福祉士試験委員, 内閣官房多重債務者対策本部「多重債務問題及び消費者向け金融等に関する懇談会」構成員, 人事院事務総局職員福祉局心の健康づくり指導委員会委員, 人事院事務総局職員福祉局の職場復帰相談医, 船橋市自殺対策連絡会議委員長, 富山県自殺対策推進協議会アドバイザーを務めた。また, 国立精神・神経医療研究センターとメルボルン大学の2010年9月から5年間の「メンタルヘルスプログラムにおける協力関係に関する覚書」(MEMORANDUM OF UNDERSTANDING 2010 COOPERATION IN MENTAL HEALTH PROGRAMS AS BETWEEN NCNP and THE UNIVERSITY OF MELBOURNE)に基づき, 国立精神・神経医療研究センター・メルボルン大学の交流に努めた。

松本俊彦は, 法務省保護局「薬物事犯者に対する保護観察に関する検討会」委員, 法務省矯正局「少年院における薬物再乱用防止教育に関する検討会」委員, 世田谷区および中央区の自殺対策連絡協議会会長を務めた。また, 東京地方裁判所登録精神保健判定医として心神喪失者等医療観察法の審判・鑑定に従事した。

川野健治は, 宮崎県の市町村自殺対策緊急強化モデル事業意見交換会における助言・指導等を行った。

藤森麻衣子は, 国立がん研究センターの外来研究員を務め, がん対策推進総合研究事業に貢献した。

山内貴史は, 情報・システム研究機構共同研究員, および情報・システム研究機構統計数理研究所 外来研究員を務め, 自殺に関する共同研究プロジェクトの推進に貢献した。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) [Takeshima T](#), [Yamauchi T](#), [Inagaki M](#), [Kodaka M](#), [Matsumoto T](#), [Kawano K](#), [Katsumata Y](#), [Fujimori M](#), [Hisanaga A](#), Takahashi Y: Suicide prevention strategies in Japan: A 15-year review (1998–2013). *Journal of Public Health Policy* 36 (1): 52-66, 2015.
- 2) Sueki H, Yonemoto N, [Takeshima T](#), [Inagaki M](#): The Impact of Suicidality-Related Internet Use: A Prospective Large Cohort Study with Young and Middle-Aged Internet Users. *PLoS ONE* 9 (4): e94841, 2014.
- 3) [Matsumoto T](#), Tachimori H, Tanibuchi Y, Takano A, Wada K: Clinical features of patients with designer drugs-related disorder in Japan: A comparison with patients with methamphetamine- and hypnotic/anxiolytic-related disorders. *Psychiatry Clin Neurosci* 68 (5): 374-382, 2014.
- 4) Ando S, Yasugi D, [Matsumoto T](#), Kanata S, Kasai K: Serious outcomes associated with overdose of medicines containing barbiturates for treatment of insomnia. *Psychiatry Clin Neurosciences* 68: 721-721, 2014.
- 5) Shimane T, [Matsumoto T](#), Wada K: Clinical behavior of Japanese community pharmacists for preventing prescription drug overdose. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 69: 220-227, 2015

- 6) Fujimori M, Shirai Y, Asai M, Kubota K, Katsumata N, Uchitomi Y: Effect of communication skills training program for oncologists based on patient preferences for communication when receiving bad news: a randomized controlled trial. *Journal of Clinical Oncology* 32 (20): 2166-2172, 2014.
- 7) Fujimori M, Shirai Y, Asai M, Katsumata N, Kubota K, Uchitomi Y: Development and preliminary evaluation of communication skills training program for oncologists based on patient preferences for communicating bad news. *Palliative & Supportive Care* 12 (5): 379-386, 2014.
- 8) Fujisawa D, Umezawa S, Basaki-Tange A, Fujimori M, Miyashita M.: Smoking status, service use and associated factors among Japanese cancer survivors--a web-based survey. *Support Care Cancer* 22 (12): 3125-3134, 2014.
- 9) Yamauchi T, Inagaki M, Yonemoto N, Iwasaki M, Inoue M, Akechi T, Iso H, Tsugane S: Death by suicide and other externally caused injuries following a cancer diagnosis: the Japan Public Health Center-based Prospective Study. *Psycho-oncology* 23 (9): 1034-41, 2014.
- 10) Yamauchi T, Inagaki M, Yonemoto N, Iwasaki M, Inoue M, Akechi T, Iso H, Tsugane S: Death by suicide and other externally caused injuries after stroke in Japan (1990-2010): the Japan Public Health Center-based prospective study. *Psychosomatic medicine* 76 (6): 452-9, 2014.
- 11) Nakanishi M, Yamauchi T, Takehima T: National strategy for suicide prevention in Japan: Impact of a national fund on progress of developing systems for suicide prevention and implementing initiatives among local authorities. *Psychiatry and clinical neurosciences* 69 (1): 55-64, 2015.
- 12) Kodaka M, Matsumoto T, Katsumata Y, Akazawa M, Tachimori H, Kawakami N, Eguchi N, Shirakawa N, Takehima T: Suicide risk among individuals with sleep disturbances in Japan: a case-control psychological autopsy study. *Sleep medicine* 15 (4): 430-5, 2014.
- 13) 白神敬介, 川野健治, 勝又陽太郎, 川島大輔, 荘島幸子: 中学校における自殺予防教育プログラムの達成目標についての実証的検討. *自殺予防と危機介入* 35 (1): 23-32, 2015.
- 14) 白神敬介, 川野健治, 立森久照, 竹島 正: 東日本大震災被災地岩手県大槌町における精神的健康-居住形態ごとの QOL の比較-。厚生学の指標 62 (3): 9-18, 2015.]
- 15) 高井美智子, 上條吉人, 井出文子: 向精神薬による急性薬物中毒の実態および関連する心理社会的要因についての考察: 臨床心理士の立場からの提言. *日本臨床救急医学会誌* 18 (1): 22-29, 2015.
- 16) 勝又陽太郎, 松本俊彦: 若年者の自傷行為に対する援助行動と感情体験との関連. *日本社会精神医学会雑誌* 24 (1): 9-18, 2015.
- 17) 赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 小高真美, 川上憲人, 江口のぞみ, 白川教人, 立森久照, 竹島 正: 過去に自殺企図歴のない成人男性における自殺のリスク要因の検討. *精神科治療学* 29 (4): 519-526, 2014.
- 18) 高野 歩, 川上憲人, 宮本有紀, 松本俊彦: 物質使用障害患者に対する認知行動療法プログラムを提供する医療従事者の態度の変化. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 49 (1): 28-38, 2014.
- 19) 池田朋広, 小池純子, 森田展彰, 山本和弘, 合川勇三, 松本俊彦, 稲本淳子: 措置入院指定病院の立場における違法物質使用障害者への退院支援策の検討-司法的処遇と薬物採尿検査に着目した4事例から-. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 49 (1): 45-56, 2014.
- 20) 近藤あゆみ, 井手美保子, 高橋郁絵, 谷合知子, 三浦香澄, 山口亜希子, 四辻直美, 松本俊彦: 精神保健福祉センターにおける薬物依存症再発予防プログラム「TAMARPP」の有効性評価.

- 日本アルコール・薬物医学会雑誌 49 (2) : 119-135, 2014.
- 21) 池田朋広, 小池純子, 森田展彰, 合川勇三, 松本俊彦, 稲本淳子, 岩波 明 : 措置入院指定病院に入院する違法物質使用障害者の実態調査—退院時における逮捕群と非逮捕群との比較から. 日本社会精神医学会雑誌 23 : 112-122, 2014.
 - 22) 奥村康之, 藤田純一, 松本俊彦, 立森久照, 清水沙友里 : 日本全国の生活保護受給者への抗不安・睡眠薬処方地域差. 臨床精神薬理 17 (11) : 1561-1574, 2014.
 - 23) 奥村泰之, 藤田純一, 松本俊彦 : 日本における子どもへの向精神薬処方の経年変化—2002年から2010年の社会医療診療行為別調査の活用—. 精神神経学雑誌 116 (11) : 921-935, 2014.
 - 24) 引土絵未, 松本俊彦, 和田 清, 谷渕由布子, 高野 歩, 今村扶美, 川地 拓, 若林朝子, 加藤 隆 : いわゆる『脱法ドラッグ』使用障害患者の集団薬物再乱用防止プログラム (SMARPP) における治療反応性—覚せい剤使用障害患者との比較. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 49 (6) : 318-329, 2014.
 - 25) 高野 歩, 宮本有紀, 松本俊彦 : 薬物使用障害を有する人を対象としたインターネットを活用した介入に関する文献レビュー. 日本アルコール薬物医学界雑誌 50 (1) : 19-34, 2015.
 - 26) 岡本依子, 菅野幸恵, 川野健治, 高崎文子 : 授乳スタイルの選択・定着のプロセス 1 : 授乳についての語りにみられる母乳プレッシャーの受け入れ/拒否. 子育て研究 4 : 53-64, 2014.

(2) 総説

- 1) Fujimori M, Uchitomi Y: Reply to B. Gyawali et al. Journal of Clinical Oncology 33 (2): 223-224, 2015.
- 2) 竹島 正, 山内貴史, 松本俊彦 : わが国における自殺の原因分析と自殺対策の展望. 公衆衛生 78 (4) : 230-235, 2014.
- 3) 竹島 正 : 自殺対策における精神保健医療の役割—自殺総合対策大綱見直しを踏まえて—. 精神神経学雑誌 116 (8) : 670-676, 2014.
- 4) 竹島 正 : 精神保健疫学の今後—歴史を振り返りながら—. 精神科 26 (1) : 1-3, 2015.
- 5) 竹島 正 : 人口構成の変化と高齢者の抱えるメンタルヘルスの問題の意味するもの. 老年精神医学雑誌 26 (2) : 131-137, 2015.
- 6) 後藤基行, 竹島 正, 中込和幸 : 国立精神・神経医療研究センターにおける歴史資料研究の進捗状況. 生物学史研究 91 : 74-75, 2014.
- 7) 下田陽樹, 立森久照, 竹島 正 : 精神保健 630 調査からわかるもの. 精神科 26 (1) : 57-62, 2015.
- 8) 松本俊彦 : 脱法ドラッグの現状. 財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センターNEWS LETTER 2013.2・第90号 : 2-5, 2014.
- 9) 松本俊彦 : 職能ワークショップ 3 (保健師) : 事例検討 アディクションとしての自傷～「故意に健康を害する」症候群としてのアディクション～. 日本アルコール関連問題学会雑誌 15 (2) : 113-116, 2014.
- 10) 松本俊彦, 小高真美, 山内貴史, 川野健治, 藤森麻衣子, 勝又陽太郎, 赤澤正人, 廣川聖子, 亀山晶子, 白川教人, 竹島 正 : 心理学的剖検と今後の方向. 精神保健研究 60 : 89-96, 2014.
- 11) 松本俊彦 : トラウマという視点からみえてくるもの. 精神科治療学 29 (5) : 569-575, 2014.
- 12) 松本俊彦 : [DSM-5をどう見るか? 第4回] 私はDSM-5の物質関連問題をこう見る. 精神科治療学 29 (5) : 700-701, 2014.
- 13) 松本俊彦 : 1. 依存の問題～常用量依存も含めて. Modern Physician 34 (6) : 653-656, 2014.
- 14) 松本俊彦 : 物質依存当事者の求助行動促進. 精神科 24 (6) : 676-681, 2014.
- 15) 松本俊彦 : Q08 脱法ドラッグの健康被害と指導上の注意点について. 健康教室 2014年7月増刊号 : 養護教諭のための教育実践に役立つQ & A集V : 39-41, 2014.
- 16) 松本俊彦 : 自傷行為の理解と援助. アディクションと家族 30 (1) : 16-22, 2014.

- 17) 松本俊彦：自傷行為を繰り返す人たちとその家族への支援. 日本アルコール関連問題学会雑誌 16(1)：159-161, 2014.
- 18) 松本俊彦：薬物関連精神障害者の司法的問題とその対応. 日本社会精神医学会雑誌 23(3)：202-208, 2014.
- 19) 松本俊彦：脱法ドラッグ（危険ドラッグ）関連障害の疫学的動向とその症候学的特徴：～「全国精神科医療施設における薬物関連障害の実態に関する調査」より～. 精神科救急 17:22-27, 2014.
- 20) 松本俊彦：薬物依存症. 臨床精神医学 43(8)：1161-1166, 2014.
- 21) 松本俊彦：薬物依存症と「自己治療仮説」～人が依存症になる理由に関する一つの見方～. 公益財団法人 麻薬・覚せい剤乱用防止センター NEWS LETTER 2014.8・第 91 号：2-7, 2014.
- 22) 松本俊彦：くすりにハマる患者のこころ. 月刊薬事 56(10)：27-30, 2014.
- 23) 松本俊彦：DSM-5 「え、うそ、アルコール依存症の診断名が変わるの!？」薬物「使用障害」について. 季刊ビィ Be! 116 Sept 2014：47, 2014.
- 24) 松本俊彦：社会の要請に応える「新しい教育課題」「薬物乱用防止教育」の基礎的知識とその意義. 月刊教職研修 43(2)：52-53, 2014.
- 25) 松本俊彦：現代社会と薬物 危険ドラッグ問題の実態と対応. 診療研究 501：15-20, 2014.
- 26) 松本俊彦：薬物依存症に対する治療ー認知行動療法的ワークブックを用いたグループ療法ー. 保険の科学 56(10)：683-687, 2014.
- 27) 松本俊彦：自傷行為を繰り返す若者の理解～どのような支援が必要か～. 病院・地域精神医学 57(1)：19-25, 2014.
- 28) 松本俊彦：覚醒剤依存症の理解. 更生保護 65(10)：6-12, 2014.
- 29) 松本俊彦：この病、この一曲 僕をだましてもいいけど、自分はまだだまさないで. こころの科学 178：2-8, 2014.
- 30) 松本俊彦：エッセイー私の「ゆきづまり」乗り越え体験から 薬物依存症の臨床から. こころの科学 178：92-93, 2014.
- 31) 松本俊彦：習慣化・嗜癖化した自傷行為への対応. 認知行動療法実践レッスン エキスパートに学ぶ 12 の極意：115-130, 2014.
- 32) 松本俊彦：特集心の病と向き合う 心の病を俯瞰する. 月報司法書士 No.513：4-15, 2014.
- 33) 松本俊彦：特集 その患者に睡眠薬は必要かー眠れないという訴えにどう対応するかー 睡眠導入に好ましくない薬剤. 精神科治療学 29(11)：1439-1442, 2014.
- 34) 松本俊彦：物質関連障害および嗜癖性障害群. 臨床精神医学 日本の精神科医は米国 DSM-5 をどう読むか 第 43 巻増刊号：166-172, 2014.
- 35) 松本俊彦：覚醒剤乱用受刑者に対する自習ワークブックとグループワークを用いた薬物再乱用防止プログラムの介入効果. 精神神経学雑誌 117(1)：3-9, 2015.
- 36) 松本俊彦：境界性パーソナリティ障害に伴う精神疾患の診断と治療ー物質使用障害を中心にー. Depression Strategy うつ病治療の新たなストラテジー4(4)：7-9, 2014.
- 37) 松本俊彦：物質関連障害. 精神科 26(1)：83-86, 2015.
- 38) 松本俊彦：自殺念慮のアセスメントーCASE アプローチー. 精神科治療学 30(3)：325-332, 2015.
- 39) 山口 豊, 窪田辰政, 須部宗生, 杉山三七男, 下川 学, 横沢民男, 松本俊彦：自傷行為の実態について. 国士舘大学 21 世紀アジア学会 21 世紀アジア学研究第 11 号：73-83, 2014.
- 40) 宮田久嗣, 樋口 進, 廣中直行, 池田和隆, 伊豫雅臣, 小宮山徳太郎, 松本俊彦, 鈴木 勉, 高田孝二, 和田 清, 齋藤利和：DSM-5 を理解する為の基礎知識 物質関連障害および嗜癖性障害群. 精神神経学雑誌 29(11)：950-954, 2014.
- 41) 和田 清, 松本俊彦, 船田正彦, 嶋根卓也, 邱 冬梅：薬物乱用・依存の疫学. 精神科 26(1)：

- 44-49, 2015.
- 42) 谷合知子, 四辻直美, 奥田秀実, 苅部春夫, 三浦香澄, 平賀正司, 近藤あゆみ, 松本俊彦: 薬物等再発予防プログラム「TAMARPP」の質的効果評価—担当職員の振り返りから. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 49(6): 305-317, 2014.
 - 43) 松本俊彦: SMARPPによる薬物依存治療の現状と可能性. 最新精神医学 20(2) 131-139, 2015.
 - 44) 松本俊彦: 薬物依存症の現在～再乱用防止—依存症治療を中心に～. ストレスアンドヘルスケア 2015 春号 No.216: 1-4, 2015.
 - 45) 谷渕由布子, 松本俊彦: 危険ドラッグをめぐる諸問題. 精神医学 57(2): 105-117, 2015.
 - 46) 川野健治: 若年者の自殺の背景要因. 自殺予防と危機介入 35(1): 16-17, 2015.
 - 47) 川野健治: 自死遺族への支援. 精神保健研究 61: 5-12, 2015.
 - 48) 川野健治: 参与観察と研究記録. 臨床心理学増刊第6号 6: 106-110, 2014.
 - 49) 藤森麻衣子: 医師の対話力、がんの不安緩和. ナース専科 34(10): 114-116, 2014.
 - 50) 山内貴史, 奥村泰之, 白川教人, 松本俊彦, 竹島 正: 自殺のリスク評価において何に注意すべきか—消防庁および地方自治体の自損行為データから見えてきたこと—. 精神科治療学 30(3): 315-320, 2015.
 - 51) 小高真美, 松本俊彦, 竹島 正: 心理学的剖検研究による自殺の実態把握—自殺総合対策大綱に明記された研究手法からみえてきたこと—. 月刊精神科 25(1): 64-71, 2014.
 - 52) 小高真美: 自殺のリスク評価における睡眠問題の意義—心理学的剖検から見えてきた自殺予防のヒント—. 精神科治療学 30(3): 301-306, 2015.
 - 53) 高井美智子, 松本俊彦: 自殺対策とリスクマネジメント. 臨床心理学 15(1): 59-63, 2015.
 - 54) 白神敬介, 川島大輔, 川野健治: 精神科臨床において知っておくべき自死遺族の心理とニーズ. 精神科治療学 30(3): 393-398, 2015.
 - 55) 稲垣正俊, 山内貴史, 内富庸介: がん告知後の自殺はいつが多いのか? 日本の大規模疫学研究から. Depression Frontier 12(2): 47-51, 2014.

(3) 著書

- 1) 竹島 正: 精神保健に関する予防の概念と対象. 日本精神保健福祉士養成校協会 編: 新・精神保健福祉士養成講座 2 精神保健の課題と支援 第2版. 中央法規出版, 東京, pp58-62, 2015.
- 2) 竹島 正: 精神保健に関する国, 都道府県, 市町村, 団体等の役割および連携. 日本精神保健福祉士養成校協会 編: 新・精神保健福祉士養成講座 2 精神保健の課題と支援 第2版. 中央法規出版, 東京, pp63-69, 2015.
- 3) 竹島 正: うつ病と自殺防止対策. 日本精神保健福祉士養成校協会 編: 新・精神保健福祉士養成講座 2 精神保健の課題と支援 第2版. 中央法規出版, 東京, pp227-231, 2015.
- 4) 竹島 正: 諸外国の精神保健活動の現状および対策. 日本精神保健福祉士養成校協会 編: 新・精神保健福祉士養成講座 2 精神保健の課題と支援 第2版. 中央法規出版, 東京, pp326-341, 2015.
- 5) 松本俊彦: 8.破壊的行動障害 C.薬物乱用. 齊藤万比古 総編集: 子どもの心の診療シリーズ 子どもの心の処方箋ガイド 診察の仕方/診断評価/治療支援. 中山書店, 東京, pp329-331, 2014.
- 6) 松本俊彦: アルコールとうつ, 自殺——「死のトライアングル」を防ぐために. 岩波書店, 東京, pp1-78, 2014.
- 7) 松本俊彦: B. 子どもの心の診療特有の問題. 4 自傷行為. 齊藤万比古・小平雅基 編, 日本精神神経学会小児精神医療委員会 監修: 臨床医のための小児誠意新医療入門. 医学書院, 東京, pp117-121, 2014.
- 8) 松本俊彦: 第4章 治療 衝動・逸脱行動に対する対処. 齋藤利和 編: 最新医学別冊 新しい診

- 断と治療の ABC 83 アルコール依存症 精神 9, 大阪, pp143-151, 2014.
- 9) 赤澤正人, 松本俊彦: 第 7 章 自殺と自傷行為. 臨床死生学テキスト編集委員会 編: テキスト臨床死生学. 勁草書房, 東京, pp85-95, 2014.
 - 10) 松本俊彦: 6. 境界性パーソナリティ障害. 平安良雄 編: 精神科レジデントハンドブック第 2 版. 中外医学社, 東京, pp149-156, 2014.
 - 11) 谷渕由布子, 松本俊彦: 行動嗜癖. 田中啓治・御子柴克彦 編: 脳科学辞典: DOI: 10.14931/bsd.4651.
 - 12) 松本俊彦: 9. 薬物乱用・依存. 東京都保健医療公社豊島病院副院長 味澤 篤 編: 長期療養時代の HIV 感染症/AIDS マニュアル. 日本医事新報社, 東京, pp118-126, 2014
 - 13) 松本俊彦: V.自殺関連 第三部 新しい尺度とモデル/今後の研究のための病態 非自殺的な自傷行為. DSM-5 を読み解く 伝統的精神病理, DSM-IV, ICD-10 をふまえた新時代の精神科診断 1 神経発達症群, 食行動障害および摂食障害群, 排泄症群, 秩序破壊的・衝動制御・素行症群, 自殺関連 総編集: 神庭重信 編集: 神尾陽子, 中山書店, 東京, pp190-202, 2014.
 - 14) 松本俊彦: II.物質関連障害および嗜癖性障害群 診断概念の歴史. DSM-5 を読み解く 伝統的精神病理, DSM-IV, ICD-10 をふまえた新時代の精神科診断 2 統合失調症スペクトラム障害および他の精神病性障害群, 物質関連障害および嗜癖性障害群 総編集: 神庭重信 編集: 村井俊哉/宮田久彌, 中山書店, 東京, pp107-120, 2014.
 - 15) 松本俊彦: リストカットがやめられない……. 女と男のディクショナリー HUMAN+. 公益社団法人 日本産婦人科学会, 神奈川, p17, 2014.
 - 16) 松本俊彦: ダイエット, 拒食・過食. 女と男のディクショナリー HUMAN+. 公益社団法人 日本産婦人科学会, 神奈川, p18, 2014.
 - 17) 松本俊彦: 精神保健. 自殺対策. 公衆衛生実践キーワード 編集: 鳩野洋子 島田美喜. 医学書院, 東京, pp105-106, 2014.
 - 18) 松本俊彦: (構成 河野アミ): 危険ドラッグはなぜ「危険」なのか～その恐ろしさと回復のヒント～. KADOKAWA, 東京, pp1-109, 2014.
 - 19) 松本俊彦: 薬物依存. 山口 徹, 北原光夫 編監修: 高木 誠, 小室一成 総編集: 今日の治療方針 私はこうしている. 医学書院, 東京, pp957-958, 2015.
 - 20) 松本俊彦: 抗不安薬の正しい使い方～より安全に用いるための注意点は? 抗不安薬プラティカルガイド 今だから知っておきたい正しい使い方. 中外医学社, 東京, pp26-34, 2015.
 - 21) 松本俊彦: 自分を傷つけずにはいられないー自傷から回復するためのヒントー. 講談社, 東京, pp1-272, 2015.
 - 22) 松本俊彦 監修: 依存症からの回復 DVD 第 1 巻-第 3 巻. 社会福祉法人NHK厚生文化事業団, 東京, 2015.
 - 23) 川野健治: 秘密, もしくは立ち上がる主体のために 他. 川野健治, 八ッ塚一郎, 本山方子 編: 物語りと共約幻想. 新曜社, 東京, pp1-14, 2014.
 - 24) 高井美智子: 自殺対策とリスクマネジメント. 下山晴彦, 熊野宏昭, 中嶋義文, 松澤広和 編: 臨床心理学, 金剛出版, 東京, pp59-63, 2015.

(4) 研究報告書

- 1) 竹島 正: 新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業) 「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究 (研究代表者: 竹島 正)」平成 24 ～26 年度総合研究報告書. pp1-10, 2015.
- 2) 竹島 正, 立森久照, 高橋邦彦, 山之内芳雄, 堀尾奈都記, 河原 和: 地域精神保健医療の社会サービスへの統合および精神医療機能別必要量の検討に関する研究ー地域精神保健医療の推

- 進基盤に関するヒアリング報告— 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島 正）」平成 24～26 年度総合研究報告書. pp11-24, 2015.
- 3) 竹島 正, 立森久照, 高橋邦彦, 山之内芳雄：地域精神保健医療の社会サービスへの統合および精神医療機能別必要量の検討に関する研究—26 年度 630 調査および追加調査の実施とそこから得られる成果の活用可能性の検討— 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島 正）」平成 24～26 年度 総合研究報告書. pp25-47, 2015.
 - 4) 竹島 正, 立森久照, 西 大輔, 高橋邦彦, 下田陽樹, 金田一正史, 山之内芳雄：地域精神保健医療の社会サービスへの統合および精神医療機能別必要量の検討に関する研究—26 年度 630 調査および追加調査の実施とそこから得られる成果の活用可能性の検討— 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島 正）」平成 24～26 年度 総合研究報告書. pp49-54, 2015.
 - 5) 竹島 正, 下田陽樹, 立森久照, 高橋邦彦, 金田一正史, 小池純子：地域精神保健医療の社会サービスへの統合および精神医療機能別必要量の検討に関する研究—Unmet needs の把握のための通報等調査— 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島 正）」平成 24～26 年度総合研究報告書. pp55-64, 2015.
 - 6) 竹島 正, 山内貴史, 廣川聖子, 牛島品子, 西村武彦：地域精神保健医療の社会サービスへの統合および精神医療機能別必要量の検討に関する研究—精神疾患当事者に対する態度の変容のための啓発資材・プログラムの開発に関する研究— 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島 正）」平成 24～26 年度 総合研究報告書. pp65-68, 2015.
 - 7) 奥村泰之, 清水沙友里, 立森久照, 竹島 正：精神保健福祉資料におけるレセプト情報の利活用の可能性（研究協力報告書）. 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島 正）」平成 24～26 年度総合研究報告書. pp69-75, 2015.
 - 8) 立森久照, 臼田謙太郎, 後藤基行, 下田陽樹, 加藤直広, 西 大輔, 竹島 正：630 調査等による精神保健医療福祉のマクロ動向の分析に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島 正）」平成 24～26 年度 総合研究報告書. pp77-91, 2015.
 - 9) 岩谷 力, 我澤賢之, 竹島 正：自立支援医療に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島 正）」平成 24～26 年度 総合研究報告書. pp163-173, 2015.
 - 10) 高橋邦彦, 立森久照, 加藤直広, 竹島 正：精神医療にかかる医療圏のあり方に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島 正）」平成 24～26 年度 総合研究報告書. pp175-182, 2015.
 - 11) 竹島 正, 高井美智子, 松本俊彦, 山内貴史, 小高真美, 福永龍繁, 鈴木秀人, 引地和歌子, 白川教人, 川野健治, 藤森麻衣子, 大槻露華, 川本静香：自殺の要因分析体制の確立に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究（研究代表者：福田祐典）」平成 26 年度 総括・分担研究報告書. pp5-13, 2015.

- 12) 松本俊彦, 小高真美, 高井美智子, 山内貴史, 白川教人, 竹島 正: 自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究—女性の自殺の背景と予防介入ポイント: 心理学的剖検の手法を用いた自殺既遂者の精神医学的・心理社会的特徴の性差から—. 厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究(研究代表者: 福田祐典)」平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp15-25, 2015.
- 13) 竹島 正: 厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究(研究代表者: 竹島 正)」平成 26 年度 総括研究報告書. 2015.
- 14) 竹島 正, 立森久照, 曾根大地, 小竹理紗, 岡村 毅: てんかん患者の保健医療福祉等ニーズ調査. 厚生労働科学研究委託費(障害者対策総合研究開発事業)「てんかんに対する総合的な医療の提供体制整備に関する研究(研究代表者: 大槻泰介)」平成 26 年度総括研究報告書. pp17-58, 2015 .
- 15) 竹島 正, 立森久照, 川上憲人, 西 大輔, 山内貴史, 高橋清久: 国際連携—わが国における精神保健疫学の発展をめざして—. 厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究: 世界精神保健日本調査セカンド(主任研究者: 川上憲人)」平成 26 年度総括研究報告書. pp72-85, 2015.
- 16) 川崎二三彦, 松本俊彦, 高橋 温, 上野昌江, 長尾真理子: 2. 精神科医の立場から. 社会福祉法人横浜博萌会子どもの虹 情報研修センター(日本虐待・思春期問題情報研修センター)平成 24・25 年度研究報告書「親子心中」に関する研究(3) 裁判傍聴記録による事例分析: pp 147-148, 2014.
- 17) 松本俊彦, 高野 歩, 谷渕由布子, 立森久照, 和田 清: 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査. 平成 26 年度 厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「脱法ドラッグ」を含む薬物乱用・依存の実態把握と薬物依存症者の「回復」とその家族に対する支援に関する研究(研究代表者 和田清) 総括・分担研究報告書: pp95-128, 2015.
- 18) 松本俊彦: 薬物依存症に対する包括的治療プログラムの開発と普及・均てん化に関する研究. 平成 26 年度 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業(精神障害分野)「様々な依存症の実態把握と回復プログラム策定・推進のための研究(研究代表者 宮岡等)」総括・分担研究報告書, pp15-42, 2015.
- 19) 川野健治, 福井里江: 遺族支援のための情報提供に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究(研究代表者: 福田祐典)」平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp27-29, 2015.
- 20) 藤森麻衣子: 遺族支援に資する介入法開発に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「自殺総合大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究(研究代表者: 福田祐典)」平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp31-33, 2015.
- 21) 福永龍繁, 鈴木秀人, 引地和歌子, 谷藤隆信, 柴田幹良, 阿部伸幸, 奥村泰之, 松本俊彦: 自殺既遂者の検案等に基づく自殺予防研究. 厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究(研究代表者: 福田祐典)」平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp35-41, 2015.
- 22) 稲垣正俊, 山内貴史, 米本直裕: 重篤な慢性疾患患者の診療過程における自殺予防に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究(研究代表者: 福田祐典)」平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp61-65, 2015.
- 23) 自殺予防総合対策センター: 都道府県・政令指定都市および市区町村における自殺対策の取組状況に関する調査 報告書(平成 26 年度). 2014.

- 24) 自殺予防総合対策センター：児童相談所におけるこころの健康と支援のための学術調査 報告書. 2015.
- 25) 自殺予防総合対策センター：児童相談所における自死遺児等支援の手引き. 2015.
- 26) 科学的根拠に基づく自殺予防総合対策推進コンソーシアム準備会 若年者の自殺対策の在り方に関するワーキンググループ：若年者の自殺対策のあり方に関する報告書. 2015.

(5) 翻訳

- 1) 松本俊彦 監訳, 遠藤光政, 川口 衆 訳：「報酬欠陥症候群」 生物学的モデル. アロー出版, 奈良, 2014. (ケネス・ブラム, ジェイ・M・ホルダー 著.)
- 2) 松本俊彦 監訳, 藤井さやか, 市川 亮 訳：統合失調症とアルコール・薬物依存症を理解する為のセルフ・ワークブック. 金剛出版, 東京, 2014. (デニス・C・デイリー, ケネス・A・モントローズ 著.)
- 3) 藤森麻衣子：ホロコーストからの生還-小児生存者の心的外傷後成長：そんなことが可能なのだろうか？. 宅 香菜子, 清水 研 監訳：心的外傷後成長ハンドブック, 医学書院, 東京, 362-383, 2014. (Lawrence G. Calhoun, Richard G. Tedeschi 原著編集.)

(6) その他

- 1) 竹島 正, 小高真美, 山内貴史：「WHO 世界自殺レポート会議および関連行事」開催報告（第3回）関連行事2 シンポジウム. 公衆衛生情報 44 (1) : 20-23, 2014.
- 2) 竹島 正：一般社団法人 日本社会精神医学会. 精神医学 56 (4) : 342, 2014.
- 3) 竹島 正：自治医大精神医学に期待される研究と実践. 自治医大精神医学教室同門会誌(4) : 43-44, 2014.
- 4) 香月真理子, 富樫健太郎, 大迫久美恵, 滝川一廣, 佐川眞太郎, 清水邦光, 本田哲也, 竹島 正, 尾上義和, 的場由木, 阿久津斎木, 小川正明, 佐藤幹夫：最相葉月さんを囲んで「セラピスト」をセラピストたちが読む. 飢餓陣営 41 : 91-104, 2014.
- 5) 竹島 正：地域において当事者の尊厳ある回復を支えるために何ができるか 指定発言—従来志向からの脱却—. 精神保健政策研究 23 : 39-40, 2014.
- 6) 松本俊彦：書評 うつ病の倫理と臨床 神庭重信著. 臨床精神医学 44 (2) : 301-302, 2015.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Takeshima T: National Strategies for Suicide Prevention. 6th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention. Tahiti, French Polynesia, 2014.6.10-13.
- 2) Takeshima T, Yamauchi T: Japan's comprehensive suicide prevention policy and international implications. The 110th Annual Meeting of the Japanese Society of Psychiatry and Neurology, Kanagawa, 2014.6.26-28.
- 3) Takeshima T: Cooperation in mental health programs between UOM and NCNP: Present and future. Joint Symposium 2014 Department of Psychiatry & National Center of Neurology and Psychiatry, Melbourne, 2014.11.19.
- 4) Matsumoto T: Symposium34 Consideration of Japanese drug policy from the view point of harm reduction. 16th International Society of Addiction Medicine Annual Meeting, Kanagawa, 2014.10.5.
- 5) Matsumoto T: Symposium41 Building bridges: Networking to establish the exchange of culturally sensitive addiction modalities and research. 16th International Society of

- Addiction Medicine Annual Meeting, Kanagawa, 2014.10.6.
- 6) Kawano K: Suicide Metaphor. 6th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention, Tahiti, French Polynesia, 2014.6.10-13.
 - 7) Fujimori M: Quality of life in Japanese long-term survivors of non-small cell lung cancer. 16th World Congress in Psycho-Oncology, Lisbon, 2014.10.20-24.
 - 8) Yamauchi T: Suicide epidemiology in Japan. WPA Section on Epidemiology and Public Health 2014 Meeting, Nara, Japan, 2014.10.15-18.
 - 9) Yamauchi T, Takeshima T: Epidemiology of suicide and development of suicide prevention policies in Japan. The 5th World Congress of Asian Psychiatry, Fukuoka, Japan, 2015.3.3- 6.
 - 10) Kodaka M: “Preventing suicide: A global imperative” and its Japanese version. WPA Section on Epidemiology and Public Health 2014 Meeting, Nara, Japan, 2014.10.15-18.
 - 11) 竹島 正, 小高真美, 山内貴史, 福田祐典, 樋口輝彦: 自殺予防における NCNP と WHO の協働—これまでとこれから—. 第 110 回日本精神神経学会学術総会. 神奈川, 2014.6.26-28.
 - 12) 竹島 正: WHO はじめての世界自殺レポート—その意義と活用—. 第 38 回日本自殺予防学会, 福岡, 2014.9.11-13.
 - 13) 松本俊彦: 向精神薬乱用・依存、過量服薬の防止のために精神科医にできること. 日本総合病院精神医学会無床総合病院精神科委員会主催 無床フォーラム 2014 招待講演, 横浜, 2014.6.26.
 - 14) 松本俊彦: 教育講演 9 専門家の要らない薬物依存治療 ～ワークブックを用いた治療プログラム「SMARPP」～. 第 110 回日本精神神経学会学術総会, 横浜, 2014.6.26.
 - 15) 松本俊彦: 嗜癖としての自傷～その理解と対応実践～. シンポジウム 43 行動嗜癖の現状と治療, 第 110 回日本精神神経学会学術総会, 横浜, 2014.6.27.
 - 16) 松本俊彦: 精神科医療機関における脱法ドラッグ関連患者の臨床的特徴. シンポジウム 52 「脱法ドラッグ」乱用・依存の実態と対応策について. 第 110 回日本精神神経学会学術総会, 横浜, 2014.6.27.
 - 17) 松本俊彦: 基調講演 性的トラウマと「故意に自分の健康を害する」症候群. 日本「性とこころ」関連問題学会 第 6 回学術研究大会, 東京, 2014.6.28.
 - 18) 松本俊彦: 「危険ドラッグ」乱用患者の臨床的特徴. 第 22 回日本精神科救急学会学術総会 ランチョンセミナー 3, 札幌, 2014.9.5.
 - 19) 松本俊彦: 自殺未遂者支援の問題点・課題点. 総括的視点から (指定討論). 第 38 回日本自殺予防学会総会シンポジウム 4 自殺未遂者支援の実態とその問題点・課題点, 福岡, 2014.9.12.
 - 20) 松本俊彦: 基調講演 自己治療としてのアディクション. 日本アディクション看護学会第 13 回学術大会, 愛知, 2014.9.20.
 - 21) 松本俊彦: 特別講演 人はなぜ依存症になるのか? 第 36 回日本アルコール関連問題学会, 神奈川, 2014.10.3.
 - 22) 松本俊彦, 成瀬暢也: 分科会 3 司法機関における依存症対応の実態と今後の動向. 第 36 回日本アルコール関連問題学会, 神奈川, 2014.10.3.
 - 23) 松本俊彦: シンポジウム 1 脱法ドラッグ乱用の現状 全国精神科病院調査より. 第 36 回日本アルコール関連問題学会, 神奈川, 2014.10.4.
 - 24) 松本俊彦, 村山昌暢: 分科会 9 処方薬乱用・依存の予防と治療——精神科医療は何をなすべきで、何をなすべきではないのか. 第 36 回日本アルコール関連問題学会, 神奈川, 2014.10.4.
 - 25) 松本俊彦: シンポジウム 6 診断書の諸問題—出すべきか出さざるべきか—. 第 27 回日本総合病院精神医学会総会, 茨城, 2014.11.29
 - 26) 松本俊彦: 分科会⑤特別講演「私の依存症治療」. 第 27 回九州アルコール関連問題学会熊本

大会, 熊本, 2015.2.20.

- 27) 川野健治: 自殺とコミュニケーション. 第63回東海心理学会, 岐阜, 2014.5.24.
- 28) 田島充士, 小島康次, 川野健治, 山本登志哉: 「文化・共同体・文脈」の幻想性を穿つ「私たち」とは誰のことなのか. 第26回日本発達心理学会, 東京, 2015.3.20.
- 29) 藤森麻衣子: がん告知と共感的コミュニケーション. シンポジウム 2. がん患者の心をどうとらえるか: Psycho-Oncology の科学的基盤. 第27回日本総合病院精神医学会総会, つくば国際会議場, 茨城, 2014.11.28-29.
- 30) 山内貴史: 自殺予防総合対策センターの役割と実践. シンポジウム「自殺はなぜ減ったのか: これからの自殺対策のあり方を探る」, 東京, 2014.7.5.
- 31) 吉野淳一, 石井千賀子, 辻井弘美, 小高真美, 久保恭子, 木村 睦, 鈴木美砂子, 大野真実: AFSP 制作ビデオを題材に自死遺族支援について考える. 日本家族研究・家族療法学会 第31回神戸大会, 兵庫, 2014.7.19-20.

(2) 一般演題

- 1) Takano A, Kawakami N, Miyamoto Y, Matsumoto T, Naruse N, Kobayashi O: (Poster) DEVELOPMENT AND FEASIBILITY STUDY OF WEB-BASED INTERVENTION PROGRAM FOR PEOPLE WITH DRUG PROBLEMS IN JAPAN. 16th International Society of Addiction Medicine Annual Meeting, Kanagawa, 2014.10.5-6.
- 2) Shimane T, Matsumoto T, Wada K:(Poster) The Japanese community pharmacist as a “gatekeeper” for PREVENTING PRESCRIPTION DRUG OVERDOSE. 16th International Society of Addiction Medicine Annual Meeting, Kanagawa, 2014.10.5-6.
- 3) Fujimori M, Uchitomi Y: Quality of life in Japanese long-term survivors of non-small cell lung cancer. World Psychiatric Association Section on Epidemiology and Public Health 2014 Meeting, Nara, 2014.10.15-18.
- 4) Fujimori M: Effect of communication skills training program for oncologists based on patient preferences for communicating bad news in a randomized control trial. 4th Asia Pacific Psycho-Oncology Network Conference, Taipei, 2014.11.21-22.
- 5) Yamauchi T, Shirakawa N, Shitoto R, Matsumoto T, Takeshima T: Characteristics of non-fatal suicidal behavior in an urban area in Japan, as assessed by pre-hospital medical emergency records. WPA Section on Epidemiology and Public Health 2014 Meeting, Nara, Japan, 2014.10.15-18.
- 6) Kodaka M, Matsumoto T, Katsumata Y, Akazawa M, Tachimori H, Kawakami N, Eguchi N, Shirakawa N, Yamauchi T, Takeshima T: Suicide and sleep disturbances. WPA Section on Epidemiology and Public Health 2014 Meeting, Nara, Japan, 2014.10.15-18.
- 7) Kodaka M, Matsumoto T, Yamauchi T, Takai M, Takeshima T: Psychiatric and psychosocial characteristics of women who died by suicide: A psychological autopsy study of 92 cases. 6th World Congress on Women's Mental Health, Tokyo, 2015.3.22-25.
- 8) Shiraga K, Takeshima T, Kawano K: Suicidal behaviors among caregivers of children temporally protected by child guidance centers in Japan. WPA Section on Epidemiology and Public Health – 2014 Meeting, Nara, Japan, 2014.10.15-18.
- 9) 後藤基行, 竹島 正: (独) 国立精神・神経医療研究センターにおける歴史資料館開設準備活動. 2014年度日本科学史学会生物学史分科会・夏の学校, 宮城, 2014.7.4-5.
- 10) 後藤基行, 竹島 正: 精神病床を有する全国の病院における歴史的資料・物品の保存状況について. 第18回日本精神医学史学会, 京都, 2014.11.9.
- 11) 稲垣正俊, 末木 新, 米本直裕, 竹島 正: 自殺関連のインターネット利用の影響—若年・中

- 年層インターネット利用者に対する大規模前向きコホート研究— 第 38 回日本自殺予防学会, 福岡, 2014.9.11-13.
- 12) 奥村泰之, 松本俊彦: 過量服薬の発生前の診療状況: 大規模レセプト情報を用いた記述疫学研究. 第 110 回日本精神神経学会学術総会, 横浜, 2014.6.27.
 - 13) 引土絵未, 岡崎重人, 山崎明義, 松本俊彦: (ポスター) 日本型治療共同体モデル開発に向けた予備的調査—グループインタビューを通して—. 第 36 回日本アルコール関連問題学会, 神奈川, 2014.10.3.
 - 14) 津田多佳子, 多田利光, 木下 優, 佐野由美, 東田奈緒美, 大山 樹, 勝野 淳, 伊藤真人, 松本俊彦: (ポスター) 川崎市精神保健福祉センターにおけるアルコール依存症支援の認知行動療法的プログラム「だるま〜ぷ」の取組. 第 36 回日本アルコール関連問題学会, 神奈川, 2014.10.3.
 - 15) 川野健治, 白神敬介, 勝又陽太郎, 川島大輔, 荘島幸子: 学校における自殺予防教育プログラム (1). 第 78 回日本心理学会, 京都, 2014.9.10-12.
 - 16) 川島大輔, 森下雅子, 川野健治: 自殺の美学的表現へのナラティブ分析. 第 78 回日本心理学会, 京都, 2014.9.10-12.
 - 17) 白神敬介, 川野健治, 勝又陽太郎, 川島大輔, 荘島幸子: 学校における自殺予防教育プログラム (2): プログラム実施による中学校生徒への効果. 第 78 回日本心理学会, 京都, 2014.9.10-12.
 - 18) 須賀万智, 山内貴史, 杉森裕樹: Factors affecting informal and formal help-seeking for mental illness among Japanese adults. 第 25 回日本疫学会学術総会, 愛知: 2015.1.21-23.
 - 19) 小高真美, 高井美智子, 引戸絵未, 岡田澄江, 渡辺恭江, 福島喜代子, 稲垣正俊, 山田光彦, 竹島 正: ソーシャルワーカー養成課程における自殺予防教育の取組み状況と実施要件に関する研究. 第 38 回日本自殺予防学会, 福岡: 2014.9.11-13.
 - 20) 小高真美, 引土絵未, 岡田澄恵, 渡辺恭江, 福島喜代子: 自殺の危機にあるクライアントの支援に備えたソーシャルワーク教育—その取組み状況と実施要件—. 日本社会福祉学会第 62 回秋季大会, 東京, 2014.11.29-30.
 - 21) 高井美智子: 向精神薬を過量服薬した患者の精神科受療状況と致死性との関連についての検討. 日本自殺予防学会, 北九州, 2014.9.11-13.

(3) 研究報告会

- 1) 竹島 正: 自殺の要因分析体制の確立に関する研究. 平成 26 年度 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究」第 1 回研究班会議, 東京, 2014.7.4.
- 2) 竹島 正: 地域精神保健医療の社会サービスへの統合及び精神医療機能別必要量の検討に関する研究. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究」第 1 回 班会議およびディスカッション, 東京, 2014.7.14.
- 3) 竹島 正: 地域精神保健医療の社会サービスへの統合及び精神医療機能別必要量の検討に関する研究. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究」第 2 回班会議およびシンポジウム会議, 東京, 2014.12.9.
- 4) 竹島 正: てんかん患者の保健福祉等ニーズ調査. 厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究開発事業「てんかんに対する総合的な医療の提供体制整備に関する研究 (研究代表者: 大槻泰介)」班会議, 東京, 2015.1.12.
- 5) 竹島 正: 新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する

研究. 厚生労働科学研究 (障害者対策総合研究推進事業 (精神障害、神経・筋疾患分野)) 研究成果等普及啓発事業研究成果発表会, 東京, 2015.2.4.

- 6) 松本俊彦, 成瀬暢也, 川副泰成, 木村 充, 嶋根卓也, 武藤岳夫: 専門病棟を持たない精神科医療機関における薬物依存症治療システムの構築に関する研究. 平成 26 年度精神・神経疾患研究開発費「物質依存症に対する医療システムの構築と包括的治療プログラムの開発に関する研究」(25-2) (主任研究者 松本俊彦) 研究成果報告会, 東京, 2015.12.10.
- 7) 和田 清, 松本俊彦, 上條吉人, 庄司正実, 福永龍繁, 嶋根卓也, 宮永 耕, 近藤あゆみ: 全国精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査, 平成 26 年度 厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業「脱法ドラッグ」を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の「回復」とその家族に対する支援に関する研究」(研究代表者 和田 清) 研究成果報告会, 埼玉, 2015.2.27.
- 8) 山内貴史: 身体疾患と自殺および他の外因死: 前向き地域住民コホートをを用いて. 第 5 回 自殺リスクに関する研究会, 東京, 2015.2.15.
- 9) 小高真美, 松本俊彦, 山内貴史, 高井美智子, 竹島 正: 女性自殺既遂者の精神医学的および心理社会的特徴. 平成 26 年度 精神保健研究所報告会, 2015.3.9.
- 10) 高井美智子, 上條吉人: 向精神薬を過量服薬する患者の背景についての検討. 平成 26 年度「脱法ドラッグ」を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の「回復」とその家族に対する支援に関する研究 研究成果報告会, 埼玉, 2015.2.27.

(4) その他

- 1) 竹島 正: 若年者の自殺対策のあり方に関するWG会議 (1 回目). 東京, 2014.5.28.
- 2) 竹島 正: 自殺予防コンソーシアム委員会. 東京, 2014.7.29.
- 3) 竹島 正: 自殺対策ネットワーク協議会. 東京, 2014.7.29.
- 4) 竹島 正: 若年者の自殺対策のあり方に関する WG 会議 (2 回目). 東京, 2014.8.18.
- 5) 竹島 正, 近藤治郎, 山口浩志, 吉尾さだえ, 石本康仁: (コーディネーター) 高齢者の自殺を防ぐために私たちができること. 自殺対策シンポジウム IN とくしま. 徳島, 2014.9.15.
- 6) 竹島 正: 科学的根拠に基づく自殺予防総合対策推進コンソーシアム準備会 第 2 回シンポジウム. 東京, 2014.9.30.
- 7) 竹島 正: (助言者) ミニシンポジウム管内における自殺未遂者支援の現状について. 平成 26 年度自殺対策関係者研修会. 愛媛, 2014.10.24.
- 8) 竹島 正: (助言者) 愛媛県内のアルコール対策の現状について. 平成 26 年度自殺対策関連研修会 III ハイリスク者支援研修 (アルコール問題対応研修), 愛媛, 2014.10.23.
- 9) 竹島 正: 若年者の自殺対策のあり方に関する WG 会議 (第 3 回). 東京, 2015.1.7.
- 10) 竹島 正: 自死問題対策委員会拡大委員会「多職種合同ラウンドミーティング」. 東京, 2015.3.16.
- 11) 川野健治: 自殺対策官民合同フォーラム (案) に関する協議. 日本司法書士会連合会, 東京, 2014.10.28.
- 12) 山内貴史: 自殺に関する危険因子・保護因子の最新の枠組みについて. 愛知県 自殺未遂者調査事業検討会議 (第 1 回), 愛知, 2014.9.22.
- 13) 山内貴史: 自殺対策の評価について. 新潟県における精神保健福祉業務及び自殺対策に関する検討会, 新潟, 2015.3.11.

C. 講演

- 1) 竹島 正: 地域からこころの医療を考える. 地域から心の医療を考える会, 埼玉, 2014.9.6-7.
- 2) 竹島 正: 自殺予防からの地域づくり. 自殺対策シンポジウム IN とくしま, 徳島, 2014.9.15.
- 3) 竹島 正: マクロに見たうつ病の現状と社会的インパクト. 日経健康セミナー 21 「うつ病治

- 療最前線」, 東京, 2014.11.1.
- 4) 樋口輝彦, 竹島 正, 丸岡いずみ: パネルディスカッション うつ病を乗り越えるために. 日経健康セミナー 21 「うつ病治療最前線」, 東京, 2014.11.1.
 - 5) 竹島 正: 自殺予防総合対策の状況. 福祉講演会「生きること。支えること。», 岩手, 2014.11.7.
 - 6) 吉川武彦, 竹島 正, 福田 宏: てい談 生きることへの支え. 福祉講演会「生きること。支えること。», 岩手, 2014.11.7.
 - 7) 竹島 正: やさしさのなかのたくましい生き方 ーアート, 社会とメンタルヘルスー. 構原町家族会講演, 高知, 2014.12.5.
 - 8) 竹島 正: 地域ネットワークと自殺問題を経験した人の支援. 平成 26 年度自殺対策関係者研修会, 愛媛, 2014.10.24.
 - 9) 竹島 正: 自殺予防から見たアルコール健康障害対策～地域保健、医療、介護の連携に向けて～. 平成 26 年度自殺対策関連研修会 III ハイリスク者支援研修 (アルコール問題対応研修), 愛媛, 2014.10.23.
 - 10) 竹島 正: 精神保健の現状と課題. 平成 26 年度精神保健指定医研修会 (新規・第 19 回), 大阪, 2014.12.4.
 - 11) 竹島 正: これからの自殺対策に求められるもの～「今、ここから」私たちの地域でできることは～. 平成 26 年度自殺予防対策研修会, 福岡, 2014.12.12.
 - 12) 竹島 正: 世代の特徴と、地域における自殺対策の視点. 官民協働した自殺対策の推進を考える研修会, 新潟, 2015.1.8.
 - 13) 竹島 正: 自殺対策に関する評価・検証について. 相模原市自殺対策協議会委員研修, 神奈川, 2015.1.20.
 - 14) 竹島 正: 自殺予防対策について. ふじみ野市議会議員研修, 埼玉, 2015.1.21.
 - 15) 竹島 正: 特別報告 満たされないニーズの存在～最新の調査から見えてくるもの～. 第 39 回全国精神保健福祉業務研修会, 京都, 2015.2.8.
 - 16) 竹島 正: 自殺対策と地域連携. 長野県医師会自殺防止対策研修会, 長野, 2015.2.28.
 - 17) 松本俊彦: 子ども・若者のメンタルヘルスー自傷と自殺を中心に. 第二東京弁護士会子どもの権利に関する委員会主催講演会, 東京, 2014.4.2.
 - 18) 松本俊彦: 求められる薬物乱用防止教育とは?～「ダメ、ゼッタイ」だけではダメ～. 神奈川県福祉保健局生活衛生部薬務課主催 平成 26 年度薬物乱用防止講演会, 神奈川, 2014.5.14.
 - 19) 松本俊彦: 若者の薬物乱用を防ぐために薬剤師ができること. 愛知県女性薬剤師会主催 平成 26 年度第 1 回愛知県女性薬剤師会学術講演会, 愛知, 2014.5.18.
 - 20) 松本俊彦: 専門的処遇プログラム (覚せい剤事犯者処遇). 法務省法務総合研究所主催 第 11 階保護局関係職員処遇強化特別研修, 東京, 2014.5.20.
 - 21) 松本俊彦: アルコール問題とうつ, 自殺. 福井県医師会主催 平成 26 年第 1 回産業医研修会, 福井, 2014.5.25.
 - 22) 松本俊彦: PSW に期待すること. 愛知県精神保健福祉士協会主催 第 14 回愛知県精神保健福祉士協会定期総会記念講演, 愛知, 2014.6.8.
 - 23) 松本俊彦: 故意に自分の健康を害する生徒たち～リストカット等の理解と対応. 愛知県学校保健会県立学校部運営部会 養護教諭会総会第 1 回研究会, 愛知, 2014.6.10.
 - 24) 松本俊彦: 若者のアディクション. 東京都中部総合精神保健福祉センター主催 平成 26 年度精神保健福祉研修 (前期), 東京, 2014.6.11.
 - 25) 松本俊彦: 処方薬乱用の予防と精神科治療の課題. MSD 株式会社主催 第 2 回湾岸うつ・睡眠研究会, 千葉, 2014.6.13.
 - 26) 松本俊彦: 向精神薬乱用・依存を防ぐために精神科医療にできること. 日本イーライリリー社主催 精神科救急・急性期治療研究会, 東京, 2014.6.17.

- 27) 松本俊彦：自殺の現状と自治体が担う役割・地域が担う役割について．横浜市福祉保健局主催 第1回よこはま自殺対策ネットワーク協議会，神奈川，2014.6.18.
- 28) 松本俊彦：脱法ドラッグ乱用患者の臨床的特徴．医療法人社団 薫風会 山田病院主催 第3回薫風会学術交流会，東京，2014.6.20.
- 29) 松本俊彦：事例検討会座長 特定非営利活動法人メンタルケア協議会主催 第15回シンポジウム 大事例検討会へのお誘い～3つの自殺企図事例から考える～，東京，2014.6.22.
- 30) 松本俊彦：自殺の実態・地方自治体の施策について．横浜市こころの健康相談センター主催 平成26年度自殺対策基礎研修，神奈川，2014.6.25.
- 31) 松本俊彦：依存症精神医学．独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 平成26年度第1回アルコール依存症臨床医等研修，神奈川，2014.7.1.
- 32) 松本俊彦：処方薬乱用と過量服薬の理解と対応．公益財団法人東京都福祉保健財団主催 平成26年度ゲートキーパー養成研修，東京，2014.7.2.
- 33) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助～「故意に自分の健康を害する」若者たち．公益財団法人東京都予防医学協会主催 第242回学校保健セミナー，東京，2014.7.4.
- 34) 松本俊彦：思春期・青年期の自傷と依存症．公益財団法人明治安田こころの健康財団主催 2014年度 子ども・専門講座8，東京，2014.7.6.
- 35) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助．岩手県精神保健福祉センター主催 「自傷行為の理解と援助」研修，岩手，2014.7.7.
- 36) 松本俊彦：自殺をめぐる最近の動向と対策．東京都多摩総合精神保健福祉センター主催 平成26年度自殺対策研修，東京，2014.7.11.
- 37) 松本俊彦：自傷とアディクション～トラウマ・解離という視点から．MSD株式会社主催 自殺関連行動ならびにアディクションからの回復研究会，大阪，2014.7.12.
- 38) 松本俊彦：自殺予防のために一人ひとりにできること．国分寺市主催 ゲートキーパー養成講座，東京，2014.7.16.
- 39) 松本俊彦：これからの依存症支援～保健・医療・福祉・教育・司法の連携．地方独立行政法人岡山県精神科医療センター，岡山，2014.7.18.
- 40) 松本俊彦：精神科医による思春期・青年期のメンタルヘルス～心のサインを受け止めよう～．神奈川県立総合教育センター主催 平成26年度 精神科医による思春期・青年期のメンタルヘルス研修講座，神奈川，2014.7.23.
- 41) 松本俊彦：精神科薬物治療—精神科治療薬の依存・乱用を中心に．特定非営利活動法人横浜市精神障害者家族連合会主催研修会，神奈川，2014.7.25.
- 42) 松本俊彦：薬物乱用・依存の現在とその治療．Sapporo Neuropsychiatric Forum 2014，北海道，2014.7.26.
- 43) 松本俊彦：若者たちが抱える困難の根底にあるもの．2014AIDS 文化フォーラム in 横浜，神奈川，2014.8.2.
- 44) 松本俊彦：自分を傷つける子どもたち—思春期の危機—．思春期心の健康セミナー，茨城，2014.8.12.
- 45) 松本俊彦：自殺，自傷，依存への相談対応と自殺対策．特定非営利活動法人メンタルケア協議会主催 第2回東京都自殺相談ダイヤル・夜間こころの電話相談相談員グループ研修，東京，2014.8.17.
- 46) 松本俊彦：思春期の問題行動とその対応 自傷行為，依存症，自殺など．日本産婦人科学会主催 女性のヘルスケアアドバイザー養成プログラム，東京，2014.8.24.
- 47) 松本俊彦：自傷・自殺企図の理解と援助．平成26年度思春期問題研修，青森，2014.8.27.
- 48) 松本俊彦：危険ドラッグ利用患者の臨床的特徴．大塚製薬株式会社主催学術講演会，群馬，2014.8.29.

- 49) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助。第 24 回サイコソーシャルリハビリテーション研究会，愛知，2014.8.30.
- 50) 松本俊彦：誰でもできる依存症治療～SMARPP～。大塚製薬株式会社主催学術講演会，東京，2014.9.3.
- 51) 松本俊彦：自殺未遂者の相談支援について。北海道立精神保健福祉センター主催 平成 26 年度行政課題研修「自殺対策研修」，北海道，2014.9.8.
- 52) 松本俊彦：処方薬乱用と過量服薬の理解と対応。東京都福祉保健局主催 平成 26 年度自殺総合対策にかかる講演会，東京，2014.9.10.
- 53) 松本俊彦：依存症精神医学。独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 平成 26 年度第 2 回アルコール依存症臨床医等研修【医師（基礎）コース】，神奈川，2014.9.19.
- 54) 松本俊彦：処方薬乱用の予防と精神科治療の課題。MSD 株式会社主催 第 6 回うつ病の薬物療法・精神療法研究会，京都，2014.9.20.
- 55) 松本俊彦：講演会：若者の生きるを支える～大人たちは何ができるか？～ シンポジウム：若者の生きるを支える～私たちにできること～。神奈川県精神保健福祉センター主催 神奈川県自殺対策講演会・シンポジウム，神奈川，2014.9.28.
- 56) 松本俊彦：矯正施設における自殺・自傷への対応。法務省矯正研修所主催 任用研修課程高等科第 46 回研修，東京，2014.9.29.
- 57) 松本俊彦：救急センターにおける自殺未遂者支援の意義。横須賀医師会主催自殺未遂者対策講演会，神奈川，2014.10.8.
- 58) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助。厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課主催 平成 26 年度九州沖縄地区薬物中毒対策講習会，佐賀，2014.10.15.
- 59) 松本俊彦：薬物乱用・依存の現状について。薬物依存症治療の新たな展開～SMARPP の理念と実際～。長崎県長崎こども・女性・障害者支援センター主催 平成 26 年度アルコール・薬物関連問題研修会，長崎，2014.10.17.
- 60) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助～生きるための自傷が死をたぐり寄せるプロセス。こころと脳のセミナー・吉富薬品株式会社主催 第 30 回こころと脳のセミナー，福岡，2014.10.18.
- 61) 松本俊彦：自傷行為と遭遇したら。日本小児科医会主催 第 2 回「子どもの心」研修会（導入編），東京，2014.10.19.
- 62) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助。厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課主催 平成 26 年度近畿地区薬物中毒対策講習会，和歌山，2014.10.21.
- 63) 松本俊彦：薬物乱用・依存の現状とその治療。千葉大学大学院医学研究院主催 子どものこころ発達研究センター特別講演，千葉，2014.10.22.
- 64) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助。アディクション問題を考える会主催 セミナー，東京，2014.10.26.
- 65) 松本俊彦：覚せい剤事犯者処遇プログラムについて。大阪保護観察所主催 覚せい剤事犯者処遇プログラムに関する自庁研修，大阪，2014.10.27.
- 66) 松本俊彦：危険ドラッグと家族の対応。仙台ダルク家族会主催 第 8 回フォーラム，宮城，2014.11.2.
- 67) 松本俊彦：向精神薬乱用・依存の実態、ならびにその予防と治療。千葉県医師会千葉県精神科医会主催 平成 26 年度千葉県精神科医会総会及び学術集会，千葉，2014.11.3.
- 68) 松本俊彦：薬物処遇プログラムの集団実施について。法務省保護局主催 薬物依存対策研修，東京，2014.11.7.
- 69) 松本俊彦：アルコールとうつ・自殺「死のトライアングル」を防ぐために。内閣府主催 アルコール関連問題啓発フォーラム，東京，2014.11.12.
- 70) 松本俊彦：「依存するこころ」の理解と支援 インターネット・薬物・アルコール。昭和女子大

- 学主催平成26年度生活心理研究所公開講座，東京，2014.11.15.
- 71) 松本俊彦：なぜ自分を傷つけるの？若者の自殺予防のために大人にできること．ぐんま思春期研究会主催 第3回研修会，群馬，2014.11.16.
 - 72) 松本俊彦：思春期・青年期の自傷行為の理解と支援～「故意に自分の健康を害する」症候群．中央大学主催 講演会（公開授業），東京，2014.11.17.
 - 73) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助．厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課主催 平成26年度中国・四国区薬物中毒対策講習会，島根，2014.11.19.
 - 74) 松本俊彦：危険ドラッグはどう「危険」なのか？乱用者の臨床的特徴とその援助のあり方．日本プライマリ・ケア連合学会主催 プライマリ・ケア認定薬剤師研修会，東京，2014.11.23.
 - 75) 松本俊彦：薬物事犯者へのアセスメント及びトリートメントの実際等．法務総合研究所主催 薬物事犯に関する研究，埼玉，2014.11.26.
 - 76) 松本俊彦：子どもの自傷行為の理解と対応～子どもの生きづらさを考える～．石川県こころの健康センター主催 平成26年度第3回子どものこころの問題に携わる関係者育成研修会，石川，2014.11.30.
 - 77) 松本俊彦：大学生の自殺防止－自傷行為に注目して－．日本学生相談学会主催 第52回全国学生相談研修会，東京，2014.12.1.
 - 78) 松本俊彦：アルコールとうつ・自殺．独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 アルコール問題の早期発見早期介入実践講座，神奈川，2014.12.12.
 - 79) 松本俊彦：地域における支援困難家族．横須賀市主催 地域における支援困難事例事例検討会，神奈川，2014.12.16.
 - 80) 松本俊彦：自殺関連事象．独立行政法人国立国際医療研究センター主催 思春期精神保健対策医療従事者専門研修(1)，千葉，2014.12.19.
 - 81) 松本俊彦：自殺関連行動と文化－自傷とボディモディフィケーションに関する文化精神医学的考察．東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター主催国際シンポジウム「東アジアの死生学へ」，東京，2014.12.20.
 - 82) 松本俊彦：自殺未遂者への対応～リストカット・大量服薬を繰り返す人の理解と対応～．山口県精神保健福祉センター主催 平成26年度自殺未遂者支援研修会，山口，2015.1.11.
 - 83) 松本俊彦：自傷する若者の心理理解と適切な対応援助．愛媛県心と体の健康センター主催 平成26年度自殺対策関連研修会，愛媛，2015.1.19.
 - 84) 松本俊彦：自殺・自傷行為・セキュリティ(1)，(2)．公益財団法人精神・神経科学振興財団主催 平成26年度指定入院医療機関従事者病棟研修会，山形，2015.1.20.
 - 85) 松本俊彦：自らを傷つける若者への理解～思春期・青年期の子どもたちの声なき訴えを知ろう～．東京都西多摩保健所主催 平成26年度思春期講演会，東京，2015.1.21.
 - 86) 松本俊彦：学生のメンタルヘルス問題への理解と対応．国立大学法人東京医科歯科大学主催 平成26年度大学院保健衛生学研究科・医学部保健衛生学科教員研修会（FD），東京，2015.1.28.
 - 87) 松本俊彦：自傷や依存やめたい！でもやめられない．特定非営利活動法人 地域精神保健福祉機構主催 第26回こんぼ亭月例会，東京，2015.1.31.
 - 88) 松本俊彦：自殺未遂を繰り返す方々へのかかわりについて．一般社団法人東京精神保健福祉協会主催 東京都被保険者退院促進支援事業における専門支援員事例検討・相談会「特別企画研修」，東京，2015.2.2.
 - 89) 松本俊彦：薬物依存について．一般社団法人東京都病院薬剤師会 ヤンセンファーマ株式会社共催 平成26年度精神科薬物療法学術研究会，東京，2015.2.3.
 - 90) 松本俊彦：危険ドラッグはなぜ「危険」なのか～その恐ろしさと回復のヒント．NPO法人 ぷしけ主催 平成26年度自殺対策啓発事業講演会，東京，2015.2.6.
 - 91) 松本俊彦：専門的処遇プログラム（覚せい剤事犯者処遇）．第50回保護観察官高等科研修，東

- 京, 2015.2.10.
- 92) 松本俊彦: 大切な人から「死にたい」といわれたら～自殺予防のためにひとりひとりができること. 世田谷区世田谷保健所主催 世田谷区自殺対策シンポジウム, 東京, 2015.2.11.
- 93) 松本俊彦: 薬物依存者に対する認知行動療法の有効性と限界. 平成 26 年度薬物事犯者に対する処遇プログラム等に関する矯正・保護実務者連絡協議会, 埼玉, 2015.2.13.
- 94) 松本俊彦: 青少年の自殺のために何ができるか. 明星大学心理相談センター主催 公開講演会, 東京, 2015.2.14.
- 95) 松本俊彦: 依存的に自分を傷つける若者へどんな支援が必要か. NPO 法人エンパワメントかながわ主催 若者のリアルと依存, 神奈川, 2015.2.15.
- 96) 松本俊彦: 自殺企図・未遂者への対応について. 江戸川区保健師研究会主催 講演会, 東京, 2015.2.16.
- 97) 松本俊彦: 自殺予防のために私たち一人ひとりにできること. 神奈川県厚木保健福祉事務所主催 平成 26 年度水と緑といのちの地域ネットワーク会議第 3 回担当者部会, 神奈川, 2015.2.18.
- 98) 松本俊彦: 精神鑑定事例. 法務省矯正研修所主催 専門研修課程調査鑑別特別科 第 8 回研修, 東京, 2015.2.25.
- 99) 松本俊彦: 人はなぜ依存症になるのか. 東京少年鑑別所主催 心理技官のためのワークショップ, 東京, 2015.2.28.
- 100) 松本俊彦: こどもの自殺予防. 神奈川県立こども医療センター主催 子どもの心の診療ネットワーク事業 平成 26 年度第 2 回児童思春期精神科セミナー, 神奈川, 2015.2.28.
- 101) 松本俊彦: 危険ドラッグはなぜ「危険」なのか～その怖ろしさと回復のヒント～. 社会福祉法人 桜ヶ丘社会事業協会主催 精神科医療地域連携事業 南多摩圏域(日野市・多摩市・稲城市) 講演会, 東京, 2015.3.4.
- 102) 松本俊彦: アルコール問題とうつ・自殺. 千葉県医師会主催 平成 26 年度かかりつけ医うつ病対応力向上研修, 千葉, 2015.3.5.
- 103) 松本俊彦: 故意に自分の健康を害する人たちへの理解と援助. 高知大学保健管理センター主催 メンタルヘルス講演会, 高知, 2015.3.8.
- 104) 松本俊彦: 薬物依存について. 日本イーライリリー株式会社 主催 千葉県若手精神科医の会, 千葉, 2015.3.10.
- 105) 松本俊彦: 青年期の依存症. 東京都立小児総合医療センター主催 医師、医療関係者向け児童青年期臨床精神医療講座, 東京, 2015.3.11.
- 106) 松本俊彦: アディクション支援と自殺予防. 函館市主催 平成 26 年度自殺予防講演会, 北海道, 2015.3.13.
- 107) 松本俊彦: 薬物依存症の臨床. 大阪府こころの健康総合センター主催 平成 26 年度薬物依存症者等ケア強化事業依存症研修, 大阪, 2015.3.16.
- 108) 松本俊彦: リストカットは「生きたい!」という叫び. 公益財団法人キリスト教婦人矯風会主催 きょうふう会アディクションセミナー, 東京, 2015.3.18.
- 109) 松本俊彦: 人はなぜ依存症になるのか～薬物依存症と自己治療仮説～. 群馬県こころの健康センター主催 第 33 回こころの県民講座, 群馬, 2015.3.20.
- 110) 松本俊彦: 故意に自分の健康を害する人にどう向き合うかを考える. NPO 法人仙台グリーンケア研究会主催 講演及びワークショップ, 宮城, 2015.3.22.
- 111) 松本俊彦: 薬物依存の理解と援助. 公明党厚生労働部会主催講演, 東京, 2015.3.25.
- 112) 松本俊彦: 命をつなぎとめ 生きることを支援すると. 中央区保健所主催 平成 26 年度中央区ゲートキーパー養成講座, 東京, 2015.3.25.
- 113) 松本俊彦: 薬物乱用・依存の現在～危険ドラッグ・処方薬依存について考える～. 福岡保護観察所主催 薬物依存研修会, 福岡, 2015.3.27.

- 114) 松本俊彦：思春期の自傷行為の理解と支援について．滋賀県臨床心理士会主催 スクールカウンセラー研修会，滋賀，2015.3.29.
- 115) 川野健治：第二回国際学術大会 東アジアにおける自殺予防のための協力と連帯．翰林大学校生死学HK研究団，韓国，2014.5.14.
- 116) 川野健治：平成26年度第2回スクールカウンセラー連絡協議会及び第2回さわやか相談員研修会 学校での自傷・自殺予防プログラム．さいたま市教育委員会，埼玉，2014.6.5.
- 117) 川野健治：平成26年度東久留米市こころの健康づくり事業 自殺の実態と自殺予防～大切な命を守るために～．東久留米市福祉保健部健康課，東京，2014.7.7.
- 118) 川野健治：(ケース検討・スーパーバイズ) ハイリスク者を支援している保健師等の相談技術向上事業．志木市健康増進センター，埼玉，2014.7.18.
- 119) 川野健治：(ケース検討・スーパーバイズ) ハイリスク者を支援している保健師等の相談技術向上事業．志木市健康増進センター，埼玉，2014.11.7.
- 120) 川野健治：(ケース検討・スーパーバイズ) ハイリスク者を支援している保健師等の相談技術向上事業．志木市健康増進センター，埼玉，2015.2.20.
- 121) 川野健治：平成26年度自死遺族支援研修会 自死遺族ケアをめぐる動向について．青森県立精神保健福祉センター，青森，2014.7.31.
- 122) 川野健治：平成26年度札幌市教育センター専門研修 自殺予防の取組～教師として大切なこと～．札幌市教育委員会，北海道，2014.8.1.
- 123) 川野健治：平成26年度第1回院内自殺の予防と事後対応のための研修会．公益財団法人日本医療機能評価機構，東京，2014.8.22.
- 124) 川野健治：平成26年度自殺対策専門研修 自殺対策の現状と看護職等の役割・自殺未遂者の基礎理解と未遂者ケア．公益財団法人大分県看護協会，2014.8.23.
- 125) Kawano K：(key note speech) Internet and Suicide: Challenges and Opportunities in JAPAN. Taiwan Suicide Prevention Center, Annual conference, 2014.8.31.
- 126) 川野健治：こころと命を支えるゲートキーパー養成講座(実践編) / 自殺のサインに気づいたときに～相談の受け止め方と対応の実践～．世田谷区世田谷保健所，東京，2014.10.10.
- 127) 川野健治：平成26年度ゲートキーパー研修会 消防職員におけるゲートキーパーの役割について．豊田市役所健康政策課，愛知，2014.10.20.
- 128) 川野健治：平成26年度ゲートキーパー研修会 民生委員・児童委員におけるゲートキーパーの役割について．豊田市役所健康政策課，愛知，2014.10.21.
- 129) 川野健治：生活困窮者の支援に携わる方の自殺対策研修 自死に接した人々への支援．一般社団法人愛知県社会福祉士会，2014.10.21.
- 130) 川野健治：平成26年度市区町村等自殺対策担当者会議 地域における今後の自殺対策について．宮崎，2014.10.27.
- 131) 川野健治：平成26年度ゲートキーパー養成研修会 自殺の現状．岡崎市，愛知，2014.10.31.
- 132) 川野健治：なぜ、うつ・自殺予防対策が必要なのか？民生委員に求められる地域支援．岡崎市，愛知，2014.10.31.
- 133) 川野健治：地域における自殺未遂者支援の意義とその評価について．大阪府こころの健康総合センター，大阪，2014.11.6.
- 134) 川野健治：ゲートキーパー養成研修．ふじみ野市，埼玉，2014.11.10.
- 135) 川野健治：平成26年度医療・産業合同研修会 自殺者の家族や職場など遺された人々への対応とケア．神奈川県臨床心理士会，2014.11.16.
- 136) Kawano K：Mental health screening in Otsuchi after the Great East Japan Earthquake. Department of Psychiatry (UoM) & National Centre for Neurology and Psychiatry (Japan) Joint Symposium 2014, 2014.11.19.

- 137) 川野健治：平成 26 年度自殺対策相談支援者研修会 自殺が生じたあとの対応。千葉県健康福祉部，千葉，2014.12.9.
- 138) 川野健治：平成 26 年度自殺予防相談従事者養成研修 自殺対策事業の評価について。大阪府こころの健康総合センター，大阪，2015.1.8.
- 139) 川野健治：平成 26 年度復興期のこころの研修会Ⅱ ポストベンション（事後対応）～自死が起きてしまった時の支援者の心構えと対応について。宮城県精神保健福祉センター，宮城，2015.1.9.
- 140) 川野健治：平成 26 年度自死遺族支援者研修会 自死遺族等支援における心理的対応のポイント～場のケアと個別～。新潟県精神保健福祉センター，2015.1.15.
- 141) 川野健治：平成 26 年度政策・実務研修 若者の自殺対策を考える。全国市町村国際文化研究所，滋賀，2015.2.17.
- 142) 川野健治，高井美智子，川本静香：平成 26 年度自殺対策連携人材養成研修 自治体と民間団体の連携を考える。内閣府自殺対策推進室，東京，2015.2.18.
- 143) 川野健治，藤森麻衣子：平成 26 年度自殺対策連携人材養成研修 自治体と民間団体の連携を考える。内閣府自殺対策推進室，東京，2015.2.18.
- 144) 川野健治：中京大学臨床心理相談室第 12 回公開講演会 自殺に傾いた青少年をどう支えるかー対応・アセスメント（評価）・連携の基本。愛知，2015.2.21.
- 145) 川野健治：平成 26 年度自殺予防対策学校関係職員向け研修 若年層の自殺に関する基礎知識と学校におけるゲートキーパーの役割。ふじみ野市，埼玉，2015.2.26.
- 146) 川野健治：自死遺族支援活動の課題と今後の方向性について。NPO 法人ぶしけ，東京，2015.2.27.
- 147) 川野健治：平成 26 年度南多摩保健所自殺対策推進者養成研修 自殺事例や未遂事例発生後の組織的な対応と援助者支援について。東京都南多摩保健所，東京，2015.3.12.
- 148) 川野健治：自死問題対策委員会拡大委員会 多職種合同ラウンドミーティング ジョイナーの自殺の対人関係理論の紹介。日本司法書士会連合会，東京，2015.3.16.
- 149) 川野健治：市町村における自殺対策の進め方。福島県精神保健福祉センター，福島，2015.3.25.
- 150) 川野健治：学校保健と地域保健との連携会議。東京都多摩小平保健所，東京，2015.3.26.
- 151) 藤森麻衣子：気持ちに寄り添うコミュニケーション。神奈川県茅ヶ崎市自殺対策普及啓発講演会，神奈川，2014.9.26.
- 152) 藤森麻衣子：がん医療における患者-医師間のコミュニケーションに関する研究から学ぶ ～円滑な消費生活相談のために～。平成 26 年度 第 4 回都区市町村消費生活相談担当職員研修，東京，2014.12.5.
- 153) 藤森麻衣子：がん医療における患者-医師間のコミュニケーションに関する研究から学ぶ ～円滑な消費生活相談のために～。平成 26 年度 第 4 回都区市町村消費生活相談担当職員研修，東京，2014.12.9.
- 154) 藤森麻衣子：金沢医科大学がんプロフェッショナル養成事業コミュニケーション技術研修会。石川，2014.11.29-30.
- 155) 藤森麻衣子：平成 26 年度第 1 回ファシリテーター養成講習会。千葉，2014.12.12-14.
- 156) 藤森麻衣子：平成 26 年度第 2 回ファシリテーター養成講習会。千葉，2015.1.10-11.
- 157) 藤森麻衣子：平成 26 年度第 4 回がん医療に携わる医師に対するコミュニケーション技術研修会。大阪，2015.2.21-22.
- 158) 山内貴史：自殺対策の実施とその評価（第 1 回）。愛知県 26 年度自殺防止地域力強化事業研修，愛知，2014.5.16.
- 159) 山内貴史：自殺統計の読み方とその利活用。平成 26 年度 第 1 回地域自殺対策担当者会議，神奈川，2014.6.23.

- 160) 山内貴史：自殺対策の組み立てと評価。平成26年度 自殺対策企画研修会，山梨，2014.6.30.
- 161) 山内貴史：自殺対策の実施とその評価。愛知県 平成26年度自殺防止地域力強化事業研修（第2回），愛知，2014.8.22.
- 162) 山内貴史：ゲートキーパー養成講座—窓口における自殺予防対応を考える—。小平市 接遇アドバンス研修，東京，2014.12.5.
- 163) 山内貴史：事業の評価に必要な視点と指標—自殺対策の実践を踏まえて—。埼玉県立精神保健福祉センター 市町村職員研修，埼玉，2015.2.3.
- 164) 山内貴史：自殺対策の評価・検証について。相模原市 自殺対策協議会，神奈川，2015.1.20.
- 165) 大槻露華：ゲートキーパー養成研修。ふじみ野市，埼玉，2014.11.13.
- 166) 福島喜代子，小高真美：ゲートキーパー研修会（リーダー養成研修会）。さいたま市いじめ・自殺防止等子どもサポート事業，埼玉，2014.7.25.
- 167) 福島喜代子，小高真美，岡田澄恵：自殺危機初期介入スキルワークショップ。東京，2014.9.8.
- 168) 福島喜代子，小高真美，岡田澄恵：自殺危機初期介入スキルリーダー養成研修会。東京，2014.9.9.
- 169) 小高真美：自殺を予防する—私たちひとり一人のできる事。箱根町ゲートキーパー（こころのサポーター）養成講座，神奈川，2015.3.23.
- 170) 小高真美：悩みを抱える患者への対応を考える—薬剤師による自殺予防。新潟県薬剤師会自殺予防ゲートキーパー養成研修会，新潟，2015.3.15.
- 171) 高井美智子：ストレスへの対処：相談業務におけるコミュニケーションとストレスについて。横浜市青葉区福祉保健課，神奈川，2014.6.5.
- 172) 高井美智子：介護現場の環境を整える方策。神奈川県社会福祉事業団，神奈川，2014.6.26.
- 173) 高井美智子：介護現場の環境を整える方策。神奈川県社会福祉事業団，神奈川，2014.9.19.
- 174) 高井美智子：相談者の抱えるメンタルヘルスの問題とその対応。関東財務局総務部財務広報相談室，埼玉，2014.11.11.
- 175) 高井美智子：介護現場の環境を整える方策。神奈川県社会福祉事業団，神奈川，2014.11.14.
- 176) 高井美智子：薬局でのメンタルサポート～精神的に不安定な患者への対応～。三重県薬剤師会，三重，2015.1.18.
- 177) 高井美智子：自殺未遂者ケア研修（一般救急版）ファシリテーター。厚生労働省，東京，2015.1.25.
- 178) 高井美智子：精神疾患を有する身体救急患者に対する緊急度判定研修会（PEEC）アシスタント。横浜市立大学，神奈川，2015.2.1.
- 179) 高井美智子：清瀬市自殺予防対策事業講演会。清瀬市健康福祉部健康推進課，東京，2015.2.9.
- 180) 高井美智子：精神疾患を有する身体救急患者に対する緊急度判定研修会（PEEC）アシスタント。昭和大学，東京，2015.2.28.
- 181) 高井美智子：教育機関における自殺予防。神奈川県消防学校，神奈川，2015.3.3.

D. 学会活動（学会主催，学会役員，座長，編集委員等）

(1) 学会主催

- 1) Takeshima T：WPA Section on Epidemiology and Public Health-2014 Meeting Nara, 2014.10.15-18.

(2) 学会役員

- 1) Takeshima T：WPA Section on Epidemiology and Public Health-2014 Meeting 会長
- 2) Takeshima T：Asia Australia Mental Health International Advisory Council メンバー
- 3) 竹島 正：日本社会精神医学会 理事
- 4) 竹島 正：日本精神衛生学会 理事
- 5) 竹島 正：日本自殺予防学会 理事

- 6) 竹島 正：日本精神保健福祉政策学会 理事
- 7) 竹島 正：日本精神神経学会「精神保健に関する委員会」委員
- 8) 竹島 正：日本精神神経学会「精神医療・保健福祉システム委員会」委員
- 9) 竹島 正：第 38 回日本自殺予防学会プログラム委員
- 10) 竹島 正：第 9 回国際早期精神病学会 組織委員会委員
- 11) 松本俊彦：日本青年期精神療法学会 理事
- 12) 松本俊彦：日本依存神経精神科学会 評議員
- 13) 松本俊彦：日本司法精神医学会 評議員
- 14) 松本俊彦：日本アルコール・薬物医学会 評議員
- 15) 松本俊彦：日本精神科救急学会 理事
- 16) 松本俊彦：日本社会精神医学会評議員
- 17) 川野健治：日本パーソナリティ心理学会 常任理事
- 18) 川野健治：日本社会精神医学会 理事
- 19) 川野健治：日本質的心理学会 理事
- 20) Fujimori M: World Psychooncology Society, Research Committee.
- 21) 藤森麻衣子：日本サイコオンコロジー学会 教育委員
- 22) Yamauchi T：WPA Section on Epidemiology and Public Health-2014 Meeting 日本委員会委員

(3) 座長

- 1) 竹島 正, 栗田主一：(司会・コーディネーター) 包括的で、統合された、反応性のあるコミュニティメンタルヘルスの構築に向けて—私たちは何ができるか—。第 110 回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.26-28.
- 2) 竹島 正, 川野健治：(座長) 若年者の自殺の背景要因。第 38 回日本自殺予防学会, 福岡, 2014.9.11-13.
- 3) 野口正行, 竹島 正：(座長) 地域からこころの医療を考える。WPA Section on Epidemiology and Public Health - 2014 Meeting, Nara, 2014.10.15-18.
- 4) 竹島 正：(座長) わが国のアルコール関連問題の現状・治療・対策：アルコール健康障害対策基本法施行に向けて。WPA Section on Epidemiology and Public Health - 2014 Meeting, Nara, 2014.10.15-18.
- 5) 松本俊彦：(座長) シンポジウム 3 薬物依存症の地域支援～刑の一部執行猶予制度施行に備えて。第 110 回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.26.
- 6) 杠 岳文, 松本俊彦：シンポジウム 1 アルコール・薬物問題と自殺予防。第 38 回日本自殺予防学会総会, 福岡, 2014.9.12.
- 7) Fujimori M: (Chair) Communication skills training. 4th Asia Pacific Psycho-Oncology Network Conference, Taipei, 2014.11.21-22.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 松本俊彦：日本思春期精神療法学会 編集委員
- 2) 松本俊彦：星和書店「精神科治療学」編集委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 竹島 正, 藤森麻衣子：平成 26 年度 第 1 回 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター自殺予防研修。東京, 2014.7.22.

- 2) 竹島 正, 立森久照, 西 大輔: 第 51 回指導課程研修. 東京, 2014.7.30-31.
- 3) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 藤森麻衣子: 第 8 回 自殺総合対策企画研修. 東京, 2014.8.19-20.
- 4) 川野健治, 松本俊彦: 第 5 回 心理職自殺予防研修. 東京, 2014.9.16-17.
- 5) 藤森麻衣子, 竹島 正, 山内貴史: 第 9 回精神科医療従事者自殺予防研修. 東京, 2014.9.16-17.
- 6) 竹島 正, 藤森麻衣子: 平成 26 年度 第 2 回 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター自殺予防研修. 東京, 2014.9.24.
- 7) 松本俊彦, 川野健治, 藤森麻衣子, 山内貴史: 第 5 回 自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修. 東京, 2014.11.4-5.
- 8) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 藤森麻衣子: 第 10 回 精神科医療従事者自殺予防研修. 京都, 2014.12.2-3.
- 9) 竹島 正, 藤森麻衣子: 平成 26 年度 第 3 回 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター自殺予防研修. 東京, 2015.1.22.

(2) 研修会講師

- 1) 竹島 正: 精神保健のプライマリケアへの統合のピラミッドモデルの考え方. 第 51 回指導課程研修, 東京, 2014.7.30-31.
- 2) 竹島 正: 自殺対策の考え方. 第 8 回 自殺総合対策企画研修, 東京, 2014.8.19.
- 3) 竹島 正: 自殺対策の現状. 第 5 回 心理職自殺予防研修・第 9 回 精神科医療従事者自殺予防研修, 東京, 2014.9.16.
- 4) 竹島 正: 自殺対策の現状. 第 10 回 精神科医療従事者自殺予防研修, 京都, 2014.12.2.
- 5) 松本俊彦: ハイリスク者支援の考え方. 第 8 回 自殺総合対策企画研修, 東京, 2014.8.20.
- 6) 松本俊彦: 「脱法ドラッグ」ーその乱用実態から依存性・毒性、治療までー. 第 1 回 NCNP メディア塾, 東京, 2014.8.22.
- 7) 松本俊彦: 薬物関連精神障害者の司法的問題とその対応. 独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第 28 回 薬物依存臨床医師研修, 東京, 2014.9.10.
- 8) 松本俊彦: 自殺のハイリスク者. 第 5 回 心理職自殺予防研修・第 9 回 精神科医療従事者自殺予防研修, 東京, 2014.9.16.
- 9) 松本俊彦: 事例をもとにしたディスカッション. 独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター自殺予防研修, 東京, 2014.9.24.
- 10) 松本俊彦: 自傷行為・過量服薬の理解と対応. 第 4 回 自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修, 東京, 2014.11.4.
- 11) 松本俊彦: 自殺のハイリスク者. 第 10 回 精神科医療従事者自殺予防研修, 京都, 2014.12.2.
- 12) 川野健治: 自殺念慮に対する対応の基本. 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター自殺予防研修, 東京, 2014.7.22.
- 13) 川野健治: 遺族支援の考え方. 第 8 回 自殺総合対策企画研修, 東京, 2014.8.20.
- 14) 川野健治: 事後対応. 第 5 回 心理職自殺予防研修・第 9 回 精神科医療従事者自殺予防研修, 2014.9.16.
- 15) 川野健治: 自殺が生じた後の対応. 第 10 回 精神科医療従事者自殺予防研修, 京都, 2014.12.3.
- 16) 藤森麻衣子: 臨床研究から学んだこと. 第 4 回 CRT 入門講座ワークショップ, 東京, 2014.7.25.
- 17) 藤森麻衣子: 身体疾患を有する患者の自殺対策. 第 8 回 自殺総合対策企画研修. 東京, 2014.8.19.
- 18) 藤森麻衣子: 事例をもとにしたディスカッション. 平成 26 年度 第 2 回 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター自殺予防研修, 東京, 2014.9.24.
- 19) 藤森麻衣子: 自殺と精神疾患. 第 10 回 精神科医療従事者自殺予防研修, 京都, 2014.12.2.
- 20) 藤森麻衣子: 「死にたい」と言われた時の対応. 平成 26 年度 第 3 回 独立行政法人国立精神・

神経医療研究センター自殺予防研修，東京，2015.1.22.

- 21) 藤森麻衣子：演習．第5回 CRT 実践講座ワークショップ，東京，2015.1.23-24.
- 22) 山内貴史：自殺統計の利用／自殺対策の評価．第8回 自殺総合対策企画研修，東京，2014.8.19.
- 23) 山内貴史：地方自治体の自殺対策の取組状況と課題．第8回 自殺総合対策企画研修，東京，2014.8.19.
- 24) 山内貴史：統計からみた自殺の実態．第5回 心理職自殺予防研修・第9回 精神科医療従事者自殺予防研修，東京，2014.9.16.
- 25) 山内貴史：統計からみた自殺の実態．第10回 精神科医療従事者自殺予防研修，京都，2014.12.2.
- 26) 小高真美，加藤雅江：地域連携．第5回 心理職自殺予防研修・第9回 精神科医療従事者自殺予防研修，2014.9.16.
- 27) 高井美智子：自殺リスクの高い人とは？．独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター自殺予防研修，東京，2014.7.22.
- 28) 高井美智子：未遂者ケア．第5回 心理職自殺予防研修・第9回 精神科医療従事者自殺予防研修，2014.9.16.
- 29) 勝又陽太郎，山内貴史，大槻露華，白神敬介：自殺対策－課題と研究－．第5回 心理職自殺予防研修，東京，2014.9.17.

F. その他

- 1) 竹島 正：自殺対策官民連携協働会議@福島（内閣府）．福島，2014.6.20.
- 2) 竹島 正：日本・韓国・台湾自殺予防情報交換．東京，2014.6.27.
- 3) 竹島 正：第3回 自殺対策官民連携共同会議．東京，2014.6.30.
- 4) 竹島 正：全国精神保健福祉センター長会定期総会．東京，2014.7.17.
- 5) 竹島 正：船橋市 自殺対策連絡会議．千葉，2014.8.5.
- 6) 竹島 正：全国精神保健福祉連絡協議会 常務理事会．東京，2014.8.14.
- 7) 竹島 正：自殺対策主管課長会議．東京，2014.9.25.
- 8) 竹島 正：自殺対策官民連携協働会議（内閣府）．東京，2015.2.3.
- 9) 竹島 正：心の健康づくり指導委員会（人事院）．東京，2015.2.6.
- 10) 竹島 正：自殺防止対策事業 評価委員会（厚生労働省）．東京，2015.2.27.
- 11) 松本俊彦：薬事法改正に伴う脱法ドラッグの取り締まり強化．静岡第一テレビ ニュース every 静岡，2014.4.15.
- 12) 松本俊彦：脱法ドラッグ 45%に幻覚 乱用者依存症過半数．毎日新聞，2014.4.15.
- 13) 松本俊彦：中国の咳止めシロップ中毒について，日本の咳止めシロップ中毒に対する現在の規制等．フジテレビ 世界 HOT ジャーナル，2014.4.26.
- 14) 松本俊彦：薬物依存からの回復方法について．TBS ラジオ 荻上チキ・Session-22，2014.5.22.
- 15) 松本俊彦：薬物依存 家族たちの苦悩．NHK おはよう日本，2014.5.27.
- 16) 松本俊彦：中高年に急増！？なくせるか，薬物汚染．NHK 週刊ニュース深読み，2014.6.7.
- 17) 松本俊彦：女性の薬物依存 絶つ．読売新聞朝刊，2014.6.15.
- 18) 松本俊彦：〇〇がやめられない（依存の悩みについて）．NHK ハートネット TV，2014.6.26.
- 19) 松本俊彦：脱法ドラッグ汚染拡大．毎日新聞朝刊，2014.6.27.
- 20) 松本俊彦：メンタルヘルス治療の新たな展開－精神科薬物療法．日経ラジオ 杏林シンポジア，2014.7.14.
- 21) 松本俊彦：脱法ドラッグ乱用者 4割超に幻覚・妄想．朝日新聞夕刊，2014.7.15.
- 22) 松本俊彦：医師は自らのうつ病を予防できて当たり前？．日経メディカル，2014.7.16.
- 23) 松本俊彦：脱法ドラッグによる交通事故が相次ぐニュースについて．日本テレビ PON！，2014.7.17.

- 24) 松本俊彦：なぜ拡大？どう防ぐ？脱法ドラッグ。NHK 週刊ニュース深読み，2014.7.19.
- 25) 松本俊彦：睡眠薬・抗不安薬・ご注意を 処方量だけで依存症も。朝日新聞朝刊，2014.7.22.
- 26) 松本俊彦：基礎からわかる危険ドラッグ 利用者の事故急増。読売新聞朝刊，2014.7.25.
- 27) 松本俊彦：規制といたちごっこ 危険ドラッグ 大麻・覚せい剤しのご害も 幻覚，依存性早い 症状悪化。中日新聞，2014.7.31.
- 28) 松本俊彦：規制といたちごっこ 危険ドラッグ。東京新聞，2014.7.31.
- 29) 松本俊彦：危険ドラッグ 40人死亡 11年以降今年急増 24人。毎日新聞，2014.7.31.
- 30) 松本俊彦：危険ドラッグ死者急増 今年すでに 24人 専門家指摘 覚せい剤より危険。読売新聞，2014.8.6.
- 31) 松本俊彦：危険ドラッグ治療現場の悲鳴。毎日新聞，2014.8.8.
- 32) 松本俊彦：依存症。TBS ラジオ明日も元気，2014.8.11-15.
- 33) 松本俊彦：危険ドラッグ中毒性重く。日経新聞，2014.8.12.
- 34) 松本俊彦：覚せい剤より依存性が高い危険ドラッグ！。週刊プレイボーイ，2014.8.25.
- 35) 松本俊彦：危険ドラッグ 相談どこで？。毎日新聞夕刊，2014.9.5.
- 36) 松本俊彦：シリーズ 20代の自殺第3回“自傷行為” 生きるために傷つけて……。NHK ハートネットTV，2014.9.1.
- 37) 松本俊彦：薬物依存治療の中断防ぐ 新たなプログラム「スマーブ」患者同士，体験を語り合い。中日新聞朝刊，2014.9.11.
- 38) 松本俊彦：薬物依存治療の中断防ぐ。東京新聞朝刊，2014.9.11.
- 39) 松本俊彦：気がつけば依存症 危険ドラッグ 安く手軽。読売新聞朝刊，2014.9.21.
- 40) 松本俊彦：厚労省方針 脱薬物依存を支援 全国で治療プログラム。毎日新聞朝刊，2014.9.22.
- 41) 松本俊彦：若い人の自殺を防ごう 平塚でシンポ。神奈川新聞，2014.9.29.
- 42) 松本俊彦：薬物依存治療を広めたい ワークブック方式に注目 精神神経医療研究センター開発。山口新聞，2014.9.29.
- 43) 松本俊彦：根絶！危険ドラッグ 薬物依存の治療 ワークブック活用に注目 専門機関以外にも取り組みやすく。静岡新聞夕刊，2014.9.30.
- 44) 松本俊彦：薬物依存症の再発防止 治療ワークブックに注目。北國新聞夕刊，2014.10.1.
- 45) 松本俊彦：脱薬物依存に新手法 ワークブックが効果。岩手日報，2014.10.5.
- 46) 松本俊彦：ワークブックで脱薬物依存 精神科専門機関 治療プログラム開発。山梨日日新聞，2014.10.6.
- 47) 松本俊彦：ワークブック活用 薬物依存「読む治療」。夕刊フジ朝刊，2014.10.6.
- 48) 松本俊彦：薬物依存症治療 ワークブック方式が効果。佐賀新聞，2014.10.7.
- 49) 松本俊彦：薬物依存治療を継続 国立研究センター、ワークブック方式開発。山陽新聞，2014.10.7.
- 50) 松本俊彦：多様化する問題・・・悩み向き合い 32年 ぐんま思春期研究会。上毛新聞，2014.10.7.
- 51) 松本俊彦：もっと命救える 青少年の自殺予防対策で研究。中日新聞，2014.10.7.
- 52) 松本俊彦：薬物依存の治療広めたいワークブック方式に注目 精神神経センター開発。琉球新報，2014.10.7.
- 53) 松本俊彦：薬物依存の治療 ワークブック方式に注目。下野新聞，2014.10.10.
- 54) 松本俊彦：薬物依存の治療 ワークブック方式に注目 再発防止へ問題点や修正法学ぶ。四國新聞，2014.10.10.
- 55) 松本俊彦：薬物依存再発防げ ワークブック方式治療で断薬率アップ。神戸新聞，2014.10.11.
- 56) 松本俊彦：3か月後の継続 90%超 薬物依存治療ワークブック方式。新潟日報，2014.10.13.
- 57) 松本俊彦：薬物依存症治療 ワークブック方式注目 自ら問題振り返り，修正法学ぶ。福井新聞，2014.10.16.

- 58) 松本俊彦：薬物依存 遅れる治療 新プログラムで効果. 沖縄タイムス朝刊, 2014.10.17.
- 59) 松本俊彦：今年 1～9 月 危険ドラッグ原因死 74 人 昨年の 9 人から急増. 読売新聞朝刊, 2014.10.17.
- 60) 松本俊彦：法務省調査 保護観察中 薬物依存治療 3% 専門施設不足で. 読売新聞夕刊, 2014.10.17.
- 61) 松本俊彦：医療新世紀 薬物依存治療プログラム ワークブック形式に注目 脱落者が減少、受け皿増加. 東奥日報夕刊, 2014.10.20.
- 62) 松本俊彦：危険ドラッグ依存症の治療について. NHK 福岡, 2014.10.24.
- 63) 松本俊彦：薬物依存症 地域支援に何が必要か. NHK 視点・論点, 2014.11.5.
- 64) 松本俊彦：シリーズ 依存症 第 1 回 治療・支援への長い道のり. NHK ハートネット TV, 2014.11.11.
- 65) 松本俊彦：シリーズ 依存症 第 2 回 どうすれば“回復”できるか?. NHK ハートネット TV, 2014.11.12.
- 66) 松本俊彦：リストカットしてしまうあなたへ 信頼できる人きつといる. 朝日中高生新聞, 2014.11.16.
- 67) 松本俊彦：危険ドラッグ依存拡大/少ない専門機関 ワークブック式治療注目. 愛媛新聞朝刊, 2014.11.18.
- 68) 松本俊彦：どうすれば安心安全 薬物依存治療の取組 患者自ら気付き再発防止. 毎日新聞夕刊, 2014.11.20.
- 69) 松本俊彦：ドラッグってなんだ. NHKBS プレミアム 関口宏のそもそも, 2014.12.1.
- 70) 松本俊彦：子供の自傷行為 原因や対応学ぶ 金沢で研修会. 北國新聞, 2014.12.1.
- 71) 松本俊彦：日本の社会の変化（バブル崩壊後、リーマン・ショック、格差社会）から人々の心理的な変化、それが自殺とどのような関係があるのか。心理的な変化が現れた時、我々はどのような対策をしなければいけないのか。韓国教育国営放送 EBS Docu-prime, 2014.12.9.
- 72) 松本俊彦：他人事ではない！危険ドラッグの恐怖。フジテレビ ノンストップ！, 2014.12.10.
- 73) 松本俊彦：悪質化 危険ドラッグ 成分複雑 使用者の罪悪感希薄 回復に 3 年「最悪の経験」。毎日新聞夕刊, 2014.12.10.
- 74) 松本俊彦：高校生「カンニング自殺」裁判に疑問—争点は、自殺の解釈。精神科医の意見書は無視！？。TOCANA, 2014.12.19.
- 75) 松本俊彦：厚労省方針 薬物依存治療拡大へ 危険ドラッグ対策. 岩手日報朝刊, 2014.12.24.
- 76) 松本俊彦：薬物依存治療体制強化 専門プログラム全国普及 15 年度以降厚労省方針. 愛媛新聞朝刊, 2014.12.24.
- 77) 松本俊彦：厚労省 薬物依存治療プログラム 来年度から全国拡大. 下野新聞朝刊, 2014.12.24.
- 78) 松本俊彦：薬物依存治療普及へ 厚労省 全国 69 施設に順次拡大. 中国新聞朝刊, 2014.12.24.
- 79) 松本俊彦：厚労省方針 危険ドラッグなど薬物依存 治療体制全国で整備. 徳島新聞朝刊, 2014.12.24.
- 80) 松本俊彦：厚労省 危険ドラッグ対策 薬物依存 治療普及へ. 長崎新聞朝刊, 2014.12.24.
- 81) 松本俊彦：厚労省 薬物依存、治療普及へ 危険ドラッグ対策で. 福島民報朝刊, 2014.12.24.
- 82) 松本俊彦：全国で薬物依存治療プログラム 危険ドラッグ問題化 体制を強化 厚労省、来年度から. 北海道新聞朝刊, 2014.12.24.
- 83) 松本俊彦：厚労省 来年度以降体制を強化 薬物依存治療普及へ. 山形新聞朝刊, 2014.12.24.
- 84) 松本俊彦：薬物依存治療法 全国に拡大方針 国が危険ドラッグ対策. 琉球新報朝刊, 2014.12.24.
- 85) 松本俊彦：薬物依存 治療普及へ 危険ドラッグ対策 厚労省が体制強化. 佐賀新聞朝刊, 2015.1.5.
- 86) 松本俊彦：薬物依存：保護観察中、支援 1 割未満 26 件「治療拠点なし」。毎日新聞朝刊, 2015.1.6.

- 87) 松本俊彦：恐ろしすぎる・・・働き女子に忍び寄る「危険ドラッグ」の悲惨な状態。BizLady, 2015.1.9.
- 88) 松本俊彦：厚労省の手法「効果確認」精神保健施設 全国 69 カ所で 薬物依存 危険知り治す。日本経済新聞朝刊, 2015.1.10.
- 89) 松本俊彦：全国初調査 6年間で 子どもに向精神薬処方増 注意欠如・多動症薬で 2.5 倍。読売新聞朝刊, 2015.1.13.
- 90) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える精神科医。茨城新聞, 2015.1.15.
- 91) 松本俊彦：治療の受け皿増やすべき。北日本新聞, 2015.1.15.
- 92) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える精神科医。新潟日報, 2015.1.15.
- 93) 松本俊彦：回復者に一目置く文化が日本にも育ってほしい。福井新聞, 2015.1.15.
- 94) 松本俊彦：回復へ向け 受け皿増やしたい。沖縄タイムス, 2015.1.16.
- 95) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える精神科医。東奥日報, 2015.1.16.
- 96) 松本俊彦：子供に向精神薬処方増のなぜ？。yomiDr, 2015.1.20.
- 97) 松本俊彦：やめ方を教えろと言われ自分の宿題になった。愛媛新聞, 2015.1.20.
- 98) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える精神科医。埼玉新聞, 2015.1.20.
- 99) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える精神科医。宮崎日日新聞, 2015.1.20.
- 100) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える医師。神戸新聞, 2015.1.21.
- 101) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える精神科医。西日本新聞夕刊, 2015.1.24.
- 102) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える精神科医。徳島新聞, 2015.1.27.
- 103) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える精神科医。京都新聞, 2015.1.31.
- 104) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える医師。東京新聞, 2015.2.2.
- 105) 松本俊彦：薬物依存症治療の重要性を訴える精神科医, 松本俊彦さん。山口新聞, 2015.2.1.
- 106) 松本俊彦：幻覚 3 日間の悪夢 壁一面に文字・蛍光灯に「即死亡」。朝日新聞朝刊, 2015.2.18.
- 107) 松本俊彦：薬物患者の 3 分の 1 が危険ドラッグ使用。NHK ニュース, 2015.2.27.
- 108) 松本俊彦：依存防ぐ治療環境を。読売新聞朝刊, 2015.3.17.

14. 災害時こころの情報支援センター

I. 研究部の概要

災害時こころの情報支援センターは、平成23年東日本大震災の被災者に対する継続的な対応、及び今後発生が予想されるその他の災害の発生に備えた体制づくりのための研究や調査を行うことを目的として、平成23年12月に国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所に設置された。

当センターの活動は、主に以下の3つである。

(1) 大規模災害発生時の全国レベルの支援体制に関する技術的支援

- 1) 災害派遣精神医療チーム(Disaster Psychiatry Assistance Team: DPAT)の活動手法の開発・検討
- 2) 大規模災害訓練(DPAT研修)
- 3) 災害精神保健医療情報支援システム(Disaster Mental Health Information Support System: DMHISS)開発

(2) データ収集・分析・発信

- ・東日本大震災被災3県に設置された心のケアセンターと連携し、共通の活動報告項目によるデータ収集、分析を行う

(3) 研修会・教育

- ・DPATの他、WHO版心理的応急処置(Psychological First Aid: PFA)に関する研修を行う

平成26年度の当センターの構成は以下の通りである。センター長:金吉晴、情報支援研究室長:渡路子、併任研究員:鈴木友理子、科研費研究員:大滝涼子、小見めぐみ、大沼麻実、吉田航、中神里江、中谷優、科研費研究補助員:菊池美名子、客員研究員:昼田源四郎、前田正治、石峯康浩、望月聡一郎、荒川亮介、高橋晶、研究生:小菅清香、石田牧子、中村裕美、池田美樹、川端美代子、河嶌讓、上松太郎、高橋直子、斎藤正子、緑川大介、実習生:沖野昇平。

II. 研究活動

- 1) 平成23年東日本大震災被災者への支援内容に関するデータの収集・分析及び技術的指導・助言
- 2) 3県心のケアセンター活動報告集計
- 3) WHO版の心理的応急処置(PFA)の普及活動可能性の検討

III. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・当センターのHP(<http://saigai-kokoro.ncnp.go.jp/>)で、ガイドライン・マニュアル等の資料を、専門家、一般向けに公開し、災害時の対応についての啓発を行った

2) 専門教育面における貢献

- ・当センターのHPで、専門家向けにe-learningを用いた災害時の精神保健医療に関する教育プログラムを実施した
- ・WHO版PFAを日本語に翻訳・導入し、WHOならびに国際連合大学グローバルヘルス研究所との研究協力の下でPFA指導者研修、一般研修を継続した
- ・日本ユニセフ協会と協働で、ユニセフ本部が発行しているChild Friendly Space(CFS)のマニュアルをもとに、国内での緊急時のために共同で開発した「子どもにやさしい空間」のガイドラインに基づいた研修プログラムを作成し、feasibilityを検討した
- ・各種学術団体で、心のマネジメントや災害時の精神的健康について講演を行った
- ・専門家向けにPTSDや災害精神医療等についての講演を行った
- ・メディア取材を通じて専門知識の社会普及を行った

3) 精研の研修の主催と協力

- ・大規模災害訓練(DPAT研修)

・DPAT活動要領及びDPAT活動マニュアルに基づく具体的な研修を、平成26年1月8, 14, 15, 16日に、全都道府県等の精神保健福祉センター長、各地域の災害精神医療のリーダーになると想定される医師、事務担当職員を対象として、DPAT研修を行った

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

金 吉晴：原子力規制委員会原子力規制庁 緊急事態応急対策委員

金 吉晴：宇宙航空研究開発機構 有人サポート委員会 専門委員

金 吉晴：ふくしま心のケアセンター 顧問

金 吉晴：みやぎ心のケアセンター 顧問

渡 路子：岩手県こころのケアセンター，釜石市におけるこころのケア活動，2014.4.11

渡 路子：NPO 法人心の架け橋いわて，大槌町または近隣地域における地域住民のメンタルヘルス支援活動，岩手，2014.4.12

渡 路子：岩手県こころのケアセンター，釜石市におけるこころのケア活動，岩手，2014.5.3

渡 路子：NPO 法人心の架け橋いわて，大槌町または近隣地域における地域住民のメンタルヘルス支援活動，岩手，2014.5.4, 6.30

渡 路子：岩手県こころのケアセンター，釜石市におけるこころのケア活動，岩手，2014.7.4

渡 路子：NPO 法人心の架け橋いわて，大槌町または近隣地域における地域住民のメンタルヘルス支援活動，岩手，2014.7.5

吉田 航：大島町子ども家庭支援センター，大島町におけるこころのケア活動，2014.5.1-2.

吉田 航：大島町子ども家庭支援センター，大島町におけるこころのケア活動，2014.6.1-3.

吉田 航：大島町子ども家庭支援センター，大島町におけるこころのケア活動，2014.7.28-29.

吉田 航：大島町子ども家庭支援センター，大島町におけるこころのケア活動，2014.8.24-26.

吉田 航：大島町子ども家庭支援センター，大島町におけるこころのケア活動，2014.9.29-30.

吉田 航：大島町子ども家庭支援センター，大島町におけるこころのケア活動，2014.10.20-21.

吉田 航：大島町子ども家庭支援センター，大島町におけるこころのケア活動，2014.11.10-11.

吉田 航：大島町子ども家庭支援センター，大島町におけるこころのケア活動，2014.12.8-9.

吉田 航：大島町子ども家庭支援センター，大島町におけるこころのケア活動，2015.1.26-27.

吉田 航：大島町子ども家庭支援センター，大島町におけるこころのケア活動，2015.2.23-24.

吉田 航：大島町子ども家庭支援センター，大島町におけるこころのケア活動，2015.3.23-24.

5) センター内における臨床的活動

なし

6) その他

渡 路子：東京地方裁判所，精神保健審判員.

渡 路子：消防団員等公務災害補償等共済基金，消防団等公務災害補償等共済基金相談医.

渡 路子：千葉県健康福祉部，措置診察のための精神保健指定医（嘱託）.

渡 路子：公益団休法人生駒会 松戸診療所，精神科・心療内科 診療所での外来診察.

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

1) Suzuki Y, Fukasawa M, Obara A, Kim Y: Mental Health Distress and Related Factors Among Prefectural Public Servants Seven Months After the Great East Japan Earthquake. J Epidemiol 24(4): 287-294, 7, 2014.

2) 菊池美名子, 金 吉晴 : DSM-5 におけるトラウマ・ストレス関連疾患の診断基準について. 心と社会 45(3) : 48-52, 2014.9.16.

3) Suzuki Y, Fukasawa M, Nakajima S, Narisawa T, Keiko A, Kim Y: Developing a Consensus-based

Definition of “Kokoro-no Care” or Mental Health Services and Psychosocial Support: Drawing from Experiences of Mental Health Professionals Who Responded to the Great East Japan Earthquake. Version 1. PLoS Curr, 2015.1.29.

(2) 総説

- 1) Hibi J, Kurosawa A, Watanabe T, Kadowaki H, Watari M, Makita K: Post-traumatic stress disorder in volunteers dispatched to Miyazaki Prefecture, Japan, to control a foot-and-mouth disease epidemic in 2010: The Journal of Veterinary Medical Science.
- 2) 大沼麻実, 大滝涼子, 金吉晴: 災害直後のこころのケア—WHO 版心理的応急処置 (サイコロジカル・ファーストエイド) の支援とは. 看護教育: 902-907, 2014.9.25.
- 3) 望月聡一郎, 中神里江, 川端美代子, 吉田航, 小見めぐみ, 渡路子: 大規模広域災害発生時の精神科医療のニーズ. 地域保健 46(3): 56-65, 2015.3.1.

(3) 著書

- 1) 鈴木友理子, 中島聡美: 適応障害, 他の特定される心的外傷およびストレス因関連障害, 特定不能の心的外傷およびストレス因関連障害. 神庭重信 総編集, 三村将 編: DSM-5 を読み解く. 伝統的精神病理, DSM-IV, ICD-10 をふまえた新時代の精神科診断 4. 不安症群, 強迫症および関連症群, 心的外傷およびストレス因関連障害群, 解離症群, 身体症状症および関連症群. 中山書店, 東京, pp179-186, 2014.
- 2) 鈴木友理子: PTSD とは?. 高橋清久 監修, 有馬邦正, 平林直次, 古屋龍太 編集, むさしの会 編集協力: Q&A でわかるこころの病の疑問 100 当事者・家族・支援者に役立つ知識. 中央法規, 東京, pp40-41, 2014.
- 3) 大沼麻実, 大滝涼子, 金吉晴: PTSD について. 貝谷久宣, 佐々木司, 清水栄司 編: 不安症の事典. 日本評論社, 東京, pp79-81, 2015.2.12.

(4) 研究報告書

- 1) 金吉晴: 被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))) 「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究 (研究代表者: 金吉晴)」, 平成 24~26 年度総合研究報告書. pp3-11, 2015.
- 2) 金吉晴, 大沼麻実, 大滝涼子, 井筒節, 堤敦朗, 菊池美名子: WHO 版心理的応急処置 (サイコロジカル・ファーストエイド: PFA) の普及と研修成果に関する検証. 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 (精神障害分野) 『被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究』平成24年度~平成26年度 総合研究報告書. pp29-42, 2015.3.
- 3) 鈴木満, 阿部薫, 阿部又一郎, 荒木剛, 伊藤武彦, 石田まりこ, 井上孝代, 大川貴子, 大滝涼子, 大沼麻実, 小野辺美智子, 柏原誠, 金吉晴, 久津沢りか, 小林利子, 佐藤麻衣子, 重村淳, 嶋崎恵子, 杉谷麻里, 鈴木貴子, 田辺邦彦, 田中英三郎, チャイヤディロ和子, 堤敦朗, 傳法清, 仲本光一, 原敬造, 原田菜穂子, 本郷一夫, 松本秀幸, 松本順子, 村上裕子, 中山浩嗣, 山本菜樹, 山本泰輔, 吉川潔, 吉田常孝: 海外および国内の大規模緊急事態に共通する遠隔メンタルヘルス支援の現況と課題. 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 (精神障害分野) 『被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究』平成24年度~平成26年度 総合研究報告書. pp73-84, 2015.3.
- 4) 神尾陽子, 金吉晴, 大沼麻実: 東日本大震災のメディア報道による子どもたちのメンタルヘルスへの影響. 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 (精神障害分野) 『被災地における精神

- 障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究』平成24年度～平成26年度 総合研究報告書. pp207-218, 2015.3.
- 5) 金 吉晴, 鈴木 満, 井筒 節, 堤 敦朗, 荒川亮介, 大沼麻実, 菊池美名子, 小見めぐみ, 大滝涼子: WHO版心理的応急処置(サイコロジカル・ファーストエイド:PFA)の普及と研修成果に関する検証. 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業(精神障害分野)『被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究』平成26年度 総括・分担研究報告書. pp23-34, 2015.3.
 - 6) 鈴木 満, 阿部又一郎, 伊藤武彦, 石田まりこ, 井上孝代, 大川貴子, 大滝涼子, 大沼麻実, 小野辺美智子, 柏原 誠, 嶋崎恵子, 鈴木貴子, 田中英三郎, 仲本光一, 原 敬造, 原田菜穂子, 松本秀幸, 中山浩嗣, 村上裕子, 吉川 潔, 吉田常孝: 海外および国内の大規模緊急事態に共通する遠隔メンタルヘルス支援の現況と課題. 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業(精神障害分野)『被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究』平成26年度 総括・分担研究報告書. pp77-88, 2015.3.
 - 7) 神尾陽子, 金 吉晴, 大沼麻実: 東日本大震災のメディア報道による子どもたちのメンタルヘルスへの影響. 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業(精神障害分野)『被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究』平成26年度 総括・分担研究報告書. pp207-212, 2015.3.
 - 8) 神尾陽子, 金 吉晴, 森脇愛子: 被災地の子どもの精神医療支援: 災害時の避難所・仮設住宅における子どもとその家族のための生活環境と支援ニーズの実態調査およびガイドライン遵守のためのチェックリスト作成. 平成26年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))『被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究(研究代表者: 金 吉晴)』, 平成26年度総括・分担研究報告書. pp213-224, 2015.
 - 9) 神尾陽子, 金 吉晴, 伊藤史エ, 丹羽まどか, 中山未知他: 母親のうつ状態と子どもの問題行動について. 平成26年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))『被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究(研究代表者: 金 吉晴)』, 平成26年度総括・分担研究報告書. pp225-230, 2015.
 - 10) 金 吉晴, 中谷 優: 災害時地域精神保健医療活動ガイドライン改訂に関する研究. 厚生労働省科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究. 平成26年度分担研究報告書. pp35-41, 2015.3.
 - 11) 金 吉晴, 中谷 優: 災害時地域精神保健医療活動ガイドライン改訂に関する研究. 厚生労働省科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究. 平成24年度～26年度分担研究報告書. pp43-49, 2015.3.
 - 12) 秋山 剛, 飯田敏晴, 岩谷 潤, 川口彰子, 金 吉晴他: 災害時の外国人支援ガイドライン案の作成. 平成26年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))『被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究(研究代表者: 金 吉晴)』, 平成24-26年度総合研究報告書. pp61-72, 2015.
 - 13) 金 吉晴, 鈴木友理子, 深澤舞子: (資料) DPATに関する意見の収集. 平成26年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))『被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究(研究代表者: 金 吉晴)』, 平成26年度総括・分担研究報告書. pp43-63, 2015.
 - 14) 金 吉晴, 大滝涼子: 幼少期のトラウマによる複雑性PTSDのための認知行動療法STAIR(感情調整と対人関係調整スキルトレーニング)とNST(ナラティブ・ストーリー・テリング)治療プロトコルの検

討. 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業「認知行動療法等の科学的エビデンスに基づいた標準治療の開発と普及に関する研究（研究代表者：大野 裕）」、平成 26 年度総括・分担研究報告書. pp107-121, 2015.

- 15) 鈴木友理子：厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）「東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究」平成 26 年度 分担研究報告書.（研究代表者 樋口輝彦）2015.3.

(5) 翻訳

- 1) 金 吉晴, 和田 信, 大沼麻実, 木村美也子, 伊藤正哉, 堤 敦朗, 西 大輔, 大矢 大, 野間俊一, 栗山健一, 荒川亮介, 富田博秋, 加茂登志子, 細金奈奈, 元村直靖, 石丸径一郎, 伊藤大輔, 重村 淳, 中島聡美, 長沢 崇, 笠原麻里, 堀 弘明, 臼杵理人, 井筒 節, 玉村あき子, 福井裕輝, 前田正治, 袴田優子, 渡 路子, 松本和紀, 上田一気：PTSD ハンドブックー科学と実践. 金 吉晴 監訳, 金剛出版, 東京, 2014.5.20.（マシュー・J・フリードマン, テレンス・M・キーン, パトリシア・A・レシック 編.）
- 2) 金 吉晴, 小林由季, 大滝涼子, 大塚佳代：青年期 PTSD の持続エクスポージャー療法 - 10 代のためのワークブック -. 星和書店, 東京, 2014.5. (Kelly R. Chrestman, Eva Gilboa-Schechtman, Edna B. Foa 著.)
- 3) 金 吉晴, 中島聡美, 小林由季, 大滝涼子：青年期 PTSD の持続エクスポージャー療法 - 治療者マニュアル -. 星和書店, 東京, 2014.5. (Edna B. Foa, Kelly R. Chrestman, Eva Gilboa-Schechtman 著.)

(6) その他

- 1) 鈴木友理子, 深澤舞子, 池淵恵美, 後藤雅博, 種田綾乃, 永松千恵, 伊藤順一郎：東日本大震災後のコミュニティと地域精神保健医療福祉システム再構築の課題— 支援者によるワールドカフェ方式の対話から—. 家族療法研究 31(1)：110-114, 2014.
- 2) 大滝涼子, 大沼麻実, 河瀬さやか, 金 吉晴：幼少期のトラウマによる複雑性 PTSD のための認知行動療法 STAIR（感情調整と対人関係調整スキルトレーニング）と NTS（ナラティブ・ストーリー・テリング）, トラウマティック・ストレス. 金剛出版, 12(1)：pp71-78, 2014.6.
- 3) 大滝涼子：消防団員に対する「サイコロジカルファーストエイド(PFA)」取得研修を実施. 日本消防, 67(8)：41, 2014.8.
- 4) 中谷 優：第 20 回子ども虐待防止世界会議 名古屋 2014. トラウマティック・ストレス, 12(2)：p117, 2014.12.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Kim Y: International Symposium on Disaster Medical and Public Health Management: Review of the Hyogo Framework for Action. Washington D.C, 2014.5.20.
- 2) Kim Y: Disaster and alcohol-related mental problems-from reports 3years after the niigata-chuetsu earthquake. 16th international Society of Addiction Medicine Annual Meeting2014, Kanagawa, 2014.10.3.
- 3) Suzuki Y, Yabe H, Yasumura S, Niwa S, Ohtsuru A, Mashiko H, Maeda M, Abe M on behalf of the Mental Health Group of the Fukushima Health Management Survey. Gender and age differences on psychological distress among evacuees of the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant accident: The Fukushima Health Management Survey. World Psychiatric Association Section on Epidemiology and Public Health-2014 Meeting, Symposium on Mental Health Consequences of Radiation Disasters, Nara, 2014.10.16-18.

- 4) Kim Y: Keynote3: 311 disaster and mental health countermeasures311. International Society for Traumatic Stress Studies (ISTSS) Hangzhou Conferene and the 2 Annual Conference of Zhejiang Behavior Medicine Society, Hangzhou, 2014.10.18.
- 5) Suzuki Y, Fukasawa M: What is “Kokoro-no care”, or Mental health service and psychosocial support? The 5th World Congress of Asian Psychiatry. Challenges for Asian Psychiatry, Mental Health Consequences of Disaster, Fukuoka, 2015.3.3-6.
- 6) 鈴木友理子, 深澤舞子: 仙台市の児童生徒への心とからだの健康調査. 第13回日本トラウマティックストレス学会シンポジウム 東日本大震災後の、仙台市の児童生徒への心のケア, 福島, 2014.5.17-18.
- 7) 金吉晴: 委員会シンポジウム 18 来たるべき災害に必要な備えと支援は何か? 東日本大震災で津波被災した精神科病院での体験を通して考える. 第110回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.28.
- 8) 金吉晴, 秋山剛: ワークショップ 21 災害時精神医療の経験と備え. 第110回日本精神神経学会学術総会, 神奈川, 2014.6.28.
- 9) 鈴木満, 大沼麻実: 災害メンタルヘルス入門 —被災地のこころの復興のために次世代ができること—. 東北みらい創りサマースクール実行委員会, 岩手, 2014.8.9.
- 10) 金吉晴: シンポジウム 1 災害時における組織のマネジメント 「災害直後のメンタル対応」. 日本災害看護学会第16回年次大会, 東京, 2014.8.19.
- 11) 渡路子: 「DPAT」. 平成26年度全国自治体病院協議会精神科特別部会 第52回総会・研修会, 大阪, 2014.8.28
- 12) 金吉晴: シンポジウム A 「東日本大震災とメンタルヘルス」. 第57回日本病院・地域精神医学会総会, 宮城, 2014.10.31
- 13) 小見めぐみ, 中神里江: 災害時の言葉がけ. 第20回全国女性消防団員活性化ちば大会, 千葉, 2014.11.14.
- 14) 金吉晴: こころのケアの連携を巡って. こころのケア国際シンポジウム, 兵庫, 2014.12.1

(2) 一般演題

- 1) 大滝涼子: 災害時における「子どもにやさしい空間(Child Friendly Spaces- CFS)支援の意義と可能性; 東日本大震災支援活動における試みから考える. 第20回ISPCAN子ども虐待防止世界大会 名古屋2014 (企画: 日本ユニセフ協会. 協力: 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター災害時こころの情報支援センター), 愛知, 2014.09.14.
- 2) Ohnuma A, Ohtaki R, Kim Y: Effectiveness of Psychological First Aid (PFA) training among different types of care providers in Japan. World Psychiatric Association Section on Epidemiology and Public Health – 2014 Meeting, Nara, 2014.10.16-18.
- 3) Snider L, Kim Y, Izutsu T, Tsutsumi A, Ohtaki R: “Orienting Emergency Responders in Psychological First Aid: Techniques and Resources.” International Society for Traumatic Stress Studies, 30th Annual Meeting. Miami, FL, 2014. Pre-meeting Institute, 2014.11.5.
- 4) 吉田航: 災害精神保健医療情報支援システム (DMHISS) の開発と運用. 第20回日本集団災害医学会総会・学術集会, 東京, 2015.2.27.

(3) 研究報告会

- 1) 渡路子, 小見めぐみ, 吉田航, 中神里江: 第1回DPAT先遣隊検討会. 東京, 2014.4.29.
- 2) 渡路子: 第1回「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」班会議. 東京, 2014.6.12
- 3) 渡路子: 第1回福島県災害派遣精神医療チーム (DPAT) 運営協議会. 福島県, 2014.11.18.
- 4) 渡路子: 第2回「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」班会議. 東京, 2014.12.18
- 5) 金吉晴: 被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究,

厚生労働科学研究（障害者対策総合研究推進事業（精神障害，神経・筋疾患分野））研究成果等普及啓発事業研究成果発表会，東京，2015.2.4

- 6) 渡 路子，小見めぐみ，吉田 航，中神里江，小菅清香：DPAT 体制整備状況と災害時精神医療体制について．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成 26 年度 研究報告会（第 26 回），東京，2015.3.9.
- 7) 吉田 航，渡 路子，小見めぐみ，中神里江：平成 26 年度 DPAT 関連研修について．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成 26 年度 研究報告会（第 26 回），東京，2015.3.9.

C. 講演

- 1) 金 吉晴：東日本大震災後の精神保健医療の歩みを振り返る．第 13 回日本トラウマティック・ストレス学会 パネルディスカッション，福島，2014.5.17.
- 2) 金 吉晴：被災地における精神障害等に関する情報交換と今後の研究体制について．自殺対策官民連携協働ブロック会議，福島，2014.6.20.
- 3) 金 吉晴：東日本大震災の津波と原発事故による精神的影響について．平成 26 年度新潟 PTSD 対策専門研究会，新潟，2014.8.6.
- 4) 金 吉晴：新たなコミュニティづくりに向けて～住民と支援者の心のケア～．第 8 回震災心のケア交流会みやぎ in 南三陸～明日へ向かう支援～，宮城，2014.9.5.
- 5) 大沼麻実：災害時に備えて知っておきたいこと（自主衛生管理講習会）．文京区環境衛生協会，東京，2014.9.16.
- 6) 大沼麻実：災害時のこころのケア研修．横浜市こころの健康相談センター，神奈川，2014.9.29.
- 7) 大沼麻実：WHO 版サイコロジカルファーストエイドについて．奈良県精神保健福祉センター，奈良，2014.10.15
- 8) 鈴木友理子，深澤舞子：平成 26 年度心とからだの健康調査結果について．平成 26 年度仙台市児童生徒心のケア推進委員会，宮城，2014.10.30.
- 9) 渡 路子：平成 26 年度第 1 回福島県災害派遣精神医療チーム（DPAT）運営協議会，「DPAT について」，福島，2012.11.18
- 10) 渡 路子：「DPAT－災害派遣精神医療チームの意義と活動内容」，山形，2014.11.26
- 11) 大沼麻実：こころの応急手当「サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）」を知る．三重県こころの健康センター，三重，2014.11.28
- 12) 金 吉晴，大沼麻実：相談対応の基本姿勢について－WHO 版サイコロジカル・ファーストエイドを例にして－．警察庁，東京，2014.12.12
- 13) 金 吉晴：自然災害と精神医学（DPAT の現状について）．内閣官房副長官補（事態対処・危機管理担当）付職員勉強会，東京，2014.12.24
- 14) 大沼麻実：高知県災害時の心のケア活動研修会「WHO 版心理的応急処置（サイコロジカル・ファーストエイド：PFA）研修会」．高知県地域福祉部障害保健福祉課，高知，2015.1.23.
- 15) 金 吉晴：災害とストレス関連疾患．第 24 回若手精神科医のためのクロスカンファレンス，東京，2015.2.4
- 16) 金 吉晴：次に災害が起きたら．こころの防災市民フォーラム～第 3 回国連防災世界会議に向けて～，東京，2015.2.7
- 17) 金 吉晴：被災地での被災者取材の記者の対応について．日本医学ジャーナリスト協会例会，東京，2015.2.27
- 18) 鈴木友理子：災害時のこころのケア．平成 26 年度岐阜県災害医療関係機関体制整備事業「岐阜県医師会災害医療研修会」，岐阜，2015.3.1.
- 19) 大沼麻実：心理的応急処置（サイコロジカル・ファーストエイド：PFA）．平成 26 年度災害時精神保健医療活動研修，埼玉，2015.3.13

D. 学会活動（学会主催，学会役員，座長，編集委員等）**(1) 学会主催****(2) 学会役員**

- 1) Kim Y: International Society for Traumatic Stress Studies 理事
- 2) Kim Y: World Psychiatric Association, Committee of psychopathology
- 3) Suzuki Y: World Health Organization, Member of the International Health Regulation (2005(IHR(2005)) Roster of Experts, expert in Mental Health (2012-2016)
- 4) Suzuki Y: World Health Organization, Working Group on the Classification of Stress-Related Disorders. International Advisory Group for the Revision of ICD-10 Mental and Behavioral Disorders.
- 5) 金 吉晴: 日本トラウマティック・ストレス学会 常任理事
- 6) 金 吉晴: 日本精神神経学会 災害支援委員会委員, 災害支援連絡会委員
- 7) 金 吉晴: 自殺予防学会 理事
- 8) 金 吉晴: 日本不安症学会 評議員
- 9) 渡 路子: 日本精神科救急学会 H26 年度評議員
- 10) 鈴木友理子: 日本精神神経学会 アンチスティグマ委員, 東日本大震災特別委員
- 11) 鈴木友理子: 日本トラウマティック・ストレス学会 理事, 国際委員

(3) 座長

- 1) 金 吉晴: 子供向け心理的応急処置 (PFA) 指導者研修 (セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンとの共催), 東京, 2014.7.18.
- 2) 金 吉晴, 渡 路子: 平成26年度DPAT先遣隊研修, 東京, 2014.7.20.
- 3) 金 吉晴: PTSD持続エクスポージャー療法研修会, 東京, 2014.8.26.
- 4) Suzuki Y: World Psychiatric Association Section on Epidemiology and Public Health-2014 Meeting, Chair of the Free parallel session 2, Nara, 2014.10.16-18.
- 5) 鈴木友理子, 種田綾乃: 自主プログラム シンポジウム 被災地における支援者支援のメリットとデメリット, これからに向けて: 現地支援者からの発信 座長. 日本精神障害リハビリテーション学会 第22回いわて大会, 岩手, 2014.10.30-11.1.
- 6) 加藤 寛, 金 吉晴: パネルディスカッション「こころのケアの連携を巡って」座長, こころのケア国際シンポジウム, 兵庫, 2014.12.1.
- 7) Xiang Dong Wang, Suzuki Y: Challenges for Asian Psychiatry, Mental Health Consequences of Disaster. The 5th World Congress of Asian Psychiatry, Fukuoka, 2015.3.3-3.6.
- 8) Cheng-Chung Chen, Suzuki Y: Activating Regional Mental Health Services with International Collaboration- Action between Vietnam and Taiwan. The 5th World Congress of Asian Psychiatry, Fukuoka, 2015.3.3-3.6.
- 9) Kim Y: SY21 Medication treatment for women with depression. 6th World Congress on Women's Mental Health, Tokyo, 2015.3.24.

(4) 編集委員等

- 1) Kim Y: Cognitive Neuropsychiatry, editorial board.
- 2) Kim Y: Psychopathology, editorial board.
- 3) Kim Y: Psychiatry and Clinical Neuroscience, field editor.
- 4) 金 吉晴: 日本トラウマティック・ストレス学会 編集委員長

- 5) 金吉晴：日本精神神経学会 編集委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 金吉晴, 大滝涼子, 大沼麻実：子ども版サイコロジカル・ファーストエイド指導者育成研修会. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 災害時こころの情報支援センター, Save the Children による共催, 東京, 2014.7.8-11.
- 2) 渡路子, 小見めぐみ, 吉田航, 中神里江, 石峯康浩, 望月聡一郎, 高橋晶, 河嶌讓, 池田美樹, 川端美代子, 齋藤正子, 上松太郎, 高橋直子, 齋藤結香：平成26年度災害派遣精神医療チーム (DPAT) 先遣隊研修. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 災害時こころの情報支援センター、災害医療センターによる共催, 東京, 2014.7.19-20
- 3) 渡路子, 小見めぐみ, 吉田航, 中神里江, 石峯康浩, 望月聡一郎, 高橋晶, 池田美樹, 川端美代子, 高橋直子：平成26年度総合防災訓練へのDPAT先遣隊の参加. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 災害時こころの情報支援センター, 宮崎, 2014.8.30
- 4) 金吉晴, 大滝涼子, 大沼麻実：Psychological First Aid (PFA)—Mutual Support for Resiliency after Crisis Session. World Bank/TDLC, UNU-IIGH, and the National Institute of Mental Health in Japan, Tokyo, 2014.9.17.
- 5) 渡路子, 小見めぐみ, 吉田航, 中神里江, 石峯康浩, 望月聡一郎, 高橋晶, 河嶌讓, 池田美樹, 川端美代子, 齋藤正子, 緑川大介, 小菅清香, 沖野昇平：平成26年度災害派遣精神医療チーム (DPAT) 研修. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 災害時こころの情報支援センター, 災害医療センター共催, 東京, 2015.01.11-12.
- 6) 渡路子, 小見めぐみ, 吉田航, 中神里江, 石峯康浩, 望月聡一郎, 高橋晶, 河嶌讓, 池田美樹, 川端美代子, 齋藤正子, 緑川大介, 小菅清香, 沖野昇平：平成26年度災害派遣精神医療チーム (DPAT) 研修. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 災害時こころの情報支援センター, 災害医療センター共催, 東京, 2015.01.17-18.
- 7) 渡路子, 小見めぐみ, 吉田航：第1回九州地区合同DPAT研修会. 備前精神医療センター主催, 備前精神医療センター 医師養成研修センター, 佐賀, 2015.2.7-8
- 8) 渡路子, 小見めぐみ, 吉田航, 中神里江, 石峯康浩, 望月聡一郎, 高橋晶, 河嶌讓, 池田美樹, 川端美代子, 齋藤正子, 緑川大介：平成26年度 奈良市消防団、DMAT、DPAT 合同訓練. 奈良市消防団主催, 奈良市消防局, 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 災害時こころの情報支援センター共催, 奈良, 2015.2.9.

(2) 研修会講師

- 1) 金吉晴：講義12 心理ケア (支援者, 受援者). 平成26年度第1回日本DMAT 隊員養成研修, 東京, 2014.5.12.
- 2) 渡路子, 河嶌讓：災害派遣精神医療チーム (DPAT) 制度勉強会. 社会福祉法人恩寵財団済生会横浜市東部病院研究室1, 神奈川, 2014.5.16
- 3) 渡路子：上智大学総合人間科学部看護学科, 4限メンタルヘルスケア, 主な精神疾患と治療①主な精神症状とアセスメント. 上智大学目白聖母キャンパス1号館, 東京, 2014.5.23
- 4) 上智大学総合人間科学部看護学科, 補講5限メンタルヘルスケア, 主な精神疾患と治療②統合失調症. 上智大学目白聖母キャンパス1号館, 東京, 2014.5.23
- 5) 渡路子：上智大学総合人間科学部看護学科, 4限メンタルヘルスケア, 主な精神疾患と治療③気分障害、身体表現性障害. 上智大学目白聖母キャンパス1号館, 東京, 2014.6.6
- 6) 渡路子：上智大学総合人間科学部看護学科, 補講5限メンタルヘルスケア, 主な精神疾患と治療④物質関連障害、発達障害, 人格障害, 不安障害. 上智大学目白聖母キャンパス1号館, 東京, 2014.6.6

- 7) 渡 路子：「平成26年度 健康危機管理研修（実務編第1回）」．災害時の心のケアとDPAT活動，国立保健医療科学院本館4F 4-8, 4-9 講義室，埼玉，2014.6.26
- 8) 小見めぐみ：大規模災害における派遣準備（「災害精神保健医療情報支援システム」実習）．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 災害時こころの情報支援センター，災害医療センター共催（平成26年度 災害派遣精神医療チーム（DPAT）先遣隊研修），東京，2014.7.19-20.
- 9) 小見めぐみ，大滝涼子：心理的応急処置（サイコロジカル・ファーストエイド：PFA）．奈良市消防局（WHO版サイコロジカル・ファーストエイド研修会（奈良市消防団員対象）），奈良，2014.7.27.
- 10) 大沼麻実，種市康太郎，石田牧子：WHO版心理的応急処置（PFA）研修会．千葉県精神保健福祉センター，千葉，2014.7.29.
- 11) 鈴木友理子，深澤舞子：平成26年度心とからだの健康調査結果について．仙台市教育委員会 平成26年度 第7回 心のケア研修会，宮城，2014.8.18.
- 12) 金 吉晴：PTSD 持続エクスポージャー療法研修会，東京，2014.8.26-8.29
- 13) 吉田 航：災害時こころの情報支援センターの活動について．東京大学医学部健康総合科学科（国立精神・神経医療研究センター見学），東京，2014.9.4.
- 14) 渡 路子：「平成26年度第2回全国赤十字救護班研修会」．ランチョンセミナー「DPATについて」，日本赤十字社本社，東京，2014.9.13-15
- 15) 大沼麻実：Psychological First Aid (PFA)—Mutual Support for Resiliency after Crisis Session. World Bank/TDLC, UNU-IIGH, and the National Institute of Mental Health in Japan, Tokyo, 2014.9.17.
- 16) 鈴木友理子：うつ病と自殺対応のメンタルヘルス・ファーストエイド．相模原市精神保健福祉センターゲートキーパ研修（窓口編），神奈川，2014.9.19.
- 17) 鈴木友理子：原子力災害とメンタルヘルス．福島県立医科大学付属病院性差医療センター 平成26年度保健師等支援研修会，福島，2014.9.30.
- 18) 吉田 航：災害時の心のケアについて．千葉市（平成26年度防災ライセンス講座），千葉，2014.10.12.
- 19) 金 吉晴：災害時のこころのケアについて．平成26年度第1回奈良県災害時こころのケア活動に関する専門職研修会，奈良，2014.10.15
- 20) 渡 路子：「平成26年度 健康危機管理研修（実務編第2回）」，災害時の心のケアとDPAT活動，国立保健医療科学院本館4F 4-2 講義室，埼玉，2014.10.15.
- 21) 大滝涼子，川原正人：WHO版サイコロジカル・ファーストエイド研修会．NPO法人こころの架け橋いわて，宮城，2014.10.18.
- 22) 大沼麻実，大滝涼子，川尻浩司，川原正人：Psychological First Aid（心理的応急処置：PFA）遠隔研修会（災害復興メンタルヘルス研修）．特定非営利活動法人 心の架け橋いわて（こころがけ），岩手（盛岡・釜石）・宮城・東京，2014.10.18.
- 23) 渡 路子：「災害時の心のケア」．災害時の心のケア研修会，郡山市音楽・交流館（ミュージカルがくと館），福島，2014.11.13.
- 24) 大沼麻実，大滝涼子：WHO版PFA研修．さいたま市保健所，埼玉，2014.11.14.
- 25) 小見めぐみ：災害時の心のケアについて．千葉市（平成26年度防災ライセンス講座），千葉，2014.11.17.
- 26) 大沼麻実，大滝涼子：外務省領事中堅研修—緊急事態を想定したワークショップ（PFA研修）．外務省，東京，2014.11.19.
- 27) 大沼麻実，江部克也：DMAT 隊員向け PFA（サイコロジカルファーストエイド）研修．国立病院機構災害医療センター，大阪，2014.11.21.
- 28) 渡 路子：「DPATの意義と活動内容」．山形県災害派遣精神医療チーム(DPAT)整備に向けた研修会，山形県庁2階講堂，山形，2014.11.26
- 29) 大滝涼子，小野道子，湯野貴子，本田涼子：「子どもにやさしい空間（Child Friendly Spaces:CFS）」研修．日本ユニセフ協会，東京，2014.12.03.

- 30) 金 吉晴, 大沼麻実, 川尻浩司:サイコロジカル・ファーストエイド スキルトレーニング. 沖縄県精神保健福祉センター, 沖縄, 2014.12.5.
- 31) 金 吉晴:相談対応の基本姿勢について~WHO 版サイコロジカル・ファーストエイドを例にして~. 全国警察職員 生活相談員研修会, 東京, 2014.12.12.
- 32) 鈴木友理子:精神保健、メンタルヘルス、こころのケア. 相模原市精神保健福祉センター教育研修事業(課題別研修)「地域精神保健活動」, 神奈川, 2014.12.15.
- 33) 大沼麻実, 大滝涼子:サイコロジカル・ファーストエイド(PFA)指導者養成研修会. 在タイ日本国大使館, バンコク, 2014.12.19-21.
- 34) 渡 路子, 池田美樹, 河嶌 譲:「災害時の精神保健医療:DPAT 構想と臨床心理士との連携可能性」. 日本臨床心理士会 災害対策構想班 主催研修 災害時における心理社会的支援—他支援団体との連携構築に向けて, 災害医療センター, 東京, 2014.12.20
- 35) 中神里江:災害時の心のケアについて. 千葉市(平成 26 年度防災ライセンス講座), 千葉, 2014.12.21.
- 36) 金 吉晴:災害時の精神医療活動概観. 平成 26 年度災害派遣精神医療チーム (DPAT) 研修, 東京, 2015.1.11
- 37) 大滝涼子:WHO 版 PFA (心理的応急処置、サイコロジカル・ファーストエイド) 研修 DMAT 隊員向け. 国立病院機構九州医療センター, 福岡, 2015.1.16.
- 38) 小見めぐみ:災害時のロジスティックス 実習 1. 災害精神保健医療情報支援システム (DMHISS) . 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 災害時こころの情報支援センター, 災害医療センター共催(平成 26 年度災害派遣精神医療チーム (DPAT) 研修), 東京, 2015.1.12.
- 39) 吉田 航:災害時のロジスティックス 実習 2. 衛星通信. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 災害時こころの情報支援センター, 災害医療センター共催(平成 26 年度災害派遣精神医療チーム (DPAT) 研修), 東京, 2015.1.12.
- 40) 金 吉晴:災害時の精神医療活動概観. 平成 26 年度災害派遣精神医療チーム (DPAT) 研修, 東京, 2015.1.17
- 41) 小見めぐみ:災害時のロジスティックス 実習 1.災害精神保健医療情報支援システム (DMHISS) . 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 災害時こころの情報支援センター, 災害医療センター共催(平成 26 年度災害派遣精神医療チーム (DPAT) 研修), 東京, 2015.1.18.
- 42) 吉田 航:災害時のロジスティックス 実習 2. 衛星通信. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 災害時こころの情報支援センター、災害医療センター共催(平成 26 年度災害派遣精神医療チーム (DPAT) 研修), 東京, 2015.1.18
- 43) 金 吉晴:PTSD の概念と治療. 第 9 回犯罪被害者メンタルケア研修, 東京, 2015.1.21
- 44) 渡 路子:「災害時における消防・救急隊員のこころのケアについて」. 奈良県消防長会消防業務研究会, 奈良市消防センター, 奈良, 2015.1.22
- 45) 金 吉晴, 大沼麻実, 鶴和美穂:心理的応急処置(サイコロジカル・ファーストエイド) 訓練. 国立保健医療科学院, 厚生労働省 健康危機管理研修(高度技術編), 埼玉, 2015.1.30
- 46) 金 吉晴, 林みづ穂, 大沼麻実, 大滝涼子:平成 26 年度 PTSD 対策専門研修事業 C. 大規模災害対策コース(一般医療関係者). 国立精神・神経医療研究センター, 東京, 2015.2.2.
- 47) 小見めぐみ:DMHISS (実習). 肥前精神医療センター, 佐賀県共催(第 1 回九州地区合同 DPAT 研修会), 佐賀, 2015.2.7-8.
- 48) 吉田 航:災害医療派遣チームのロジスティックス ②無線通信と衛星電話(実習). 肥前精神医療センター, 佐賀県共催(第 1 回九州地区合同 DPAT 研修会), 佐賀, 2015.2.7-8.
- 49) 金 吉晴, 大沼麻実, 大滝涼子:NCNP メディア塾特別講座「ジャーナリストのための PFA 研修(心理的応急処置)~被災者に寄り添う取材のために~」. 国立精神・神経医療研究センター, 東京, 2015.2.10.
- 50) 渡 路子:「地域医療と災害対策~情報と連携~」. 狭山保健所健康危機管理研修会, 入間市産業文化

センター, 埼玉, 2015.2.13

- 51) 大滝涼子: 第 7 回日本不安症学会学術大会 - 不安症の包括的治療を目指して - . 幼少期のトラウマによる複雑性 PTSD のための認知行動療法: STAIR (感情調整と対人関係調整スキルトレーニング) と NST (ナラティブ・ストーリー・テリング), 広島, 2015.2.14-15
- 52) 金 吉晴, 大沼麻実, 大滝涼子, 種市康太郎, 宮本有紀: 平成 26 年度 PTSD 対策専門研修事業 E. 大規模災害対策コース サイコロジカル・ファーストエイド 指導者育成研修. 国立精神・神経医療研究センター, 東京, 2015.2.16-19.
- 53) 大沼麻実: 子どものためのサイコロジカル・ファーストエイド Psychological First Aid for Children (災害復興メンタルヘルス研修). 心の架け橋いわて, 岩手 (遠隔テレビ会議システム: 東京・釜石), 2015.2.21.
- 54) 金 吉晴: 平成 26 年度 PTSD 対策専門研修事業 A. 通常コース サイコロジカル・ファーストエイド 指導者育成研修. 国立精神・神経医療研究センター, 東京, 2015.2.23-24.
- 55) 金 吉晴, 大沼麻実, 大滝涼子, 種市康太郎, 成澤知美, 伊東史エ, 川尻浩司, 寺島 瞳, 森脇愛子, 鈴木吏良, 三瓶舞紀子, 池田美樹, 猿渡英代子, 久保千晶, 福田 燈, 西岡智子, 赤坂美幸, 小島梨沙, 伊東史エ, 川原正人: 平成 26 年度 PTSD 対策専門研修事業 D. 大規模災害対策コース サイコロジカル・ファーストエイド研修. 国立精神・神経医療研究センター, 東京, 2015.2.25-26.
- 56) 渡 路子, 小見めぐみ, 吉田 航, 川端美代子: DPAT 構成員研修. 宮崎県 (平成 26 年度宮崎県災害派遣精神医療チーム (DPAT) 構成員研修会), 宮崎, 2015.3.2.

F. その他

- 1) 吉田 航: 平成 25 年度 DPAT 研修. 日本トラウマティック・ストレス学会誌 12(1): p105, 2014.6.30.
- 2) 金 吉晴: 心のケアチームから DPAT へ. 平成 26 年度全国精神保健福祉センター長会定期総会, 2014.7.17
- 3) 金 吉晴: 被災者支援 長い目で (新潟 心のケア学ぶ研修会). 新潟日報モア, 社会面, 2014.8.7.
- 4) 金 吉晴: listening 市民による被災者心のケア 震災後に脚光各地で研修実施. 毎日新聞 (ネットニュース), 2014.8.21
- 5) 金 吉晴: 災害時に精神医療が果たすべきこと. 第 1 回 NCNP メディア塾, 2014.8.22
- 6) 金 吉晴: スポンサーセッション A 『災害時における「子どもにやさしい空間 (Child Friendly Spaces-CFS) 支援の意義と可能性: 東日本大震災支援活動における試みから考える』企画. 子ども虐待防止世界会議名古屋 2014, 愛知, 2014.9.14.
- 7) 金 吉晴: ビデオメッセージ (スポンサーセッション A 『災害時における子どもにやさしい空間 (Child Friendly Spaces-CFS) 支援の意義と可能性: 東日本大震災支援活動における試みから考える』). 子ども虐待防止世界会議名古屋 2014, 愛知, 2014.9.14.

Ⅲ. 研 修 実 績

平成 26 年度研修報告

研究所事務室

精神保健研究所における研修は、国、地方公共団体、精神保健福祉法第 19 条の規定による指定病院等において精神保健の業務に従事する医師、保健師、看護師、作業療法士、臨床心理業務に従事する者、精神科ソーシャルワーカー等を対象に、精神保健技術者として必要な資質の向上を図ることを目的として、精神保健各般にわたり必要な知識及び技術の研修を行うものである。平成 26 年度には、精神科医療評価・均てん化研修、発達障害早期総合支援研修、発達障害支援医学研修（2 回）、精神保健指導課程研修、自殺総合対策企画研修、摂食障害治療研修、ACT・多職種アウトリーチ研修、アウトリーチによる地域ケアマネジメント(福祉型)研修、医療における個別就労支援研修、司法精神医学ワンデイセミナー、薬物依存臨床医師研修、薬物依存臨床看護等研修、心理職自殺予防研修、精神科医療従事者自殺予防研修（2 回）、発達障害精神医療研修、司法精神医学研修、自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修、摂食障害看護研修、薬物依存症に対する認知行動療法研修、犯罪被害者メンタルケア研修、の計 22 回の研修を合計 1,022 名に対して実施した。

《精神科医療評価・均てん化研修》

平成26年6月12日から6月13日まで、第8回精神科医療評価・均てん化研修を実施し、「精神疾患治療を担う精神科救急・急性期医療施設をとりまく現状を理解し、精神科医療の質を高めるための専門的知識および技能を修得すること」を主題に、精神科救急・急性期医療施設において精神科診療に従事している専門医および専門職41名に対して研修を行った。

課程主任 伊藤 弘人 課程副主任 山之内芳雄

6月12日(木)

＜政策の動向＞

司会：伊藤 弘人

野上 毅

＜国立精神・神経医療研究センターでの取り組み＞

伊藤 弘人

精神科救急医療の質の向上のために1

司会：山之内芳雄・西村 武彦

精神科救急医療の動向および重度かつ急性患者の基準について

平田 豊明

精神病性障害急性期薬物療法に関する最新の知見

八田耕太郎

行動制限最小化のための戦略に関する調査結果最新情報

杉山 直也

精神科救急医療の質の向上のために2

司会：山之内芳雄・八田耕太郎

精神科救急病棟の医療の質を考える(臨床の立場から)

吉村 直記

行動制限最小化に向けたこれまでの取り組み報告

熊地 美枝

CODOにおけるデータの整合性

及び入力用語に関する均てん化(調査結果報告から)

岸 清次

精神科救急医療の質の向上のために 総合討論

司会：山之内芳雄・杉山 直也

6月13日(金)

テーマ：心療報酬改定等に対応した精神科医療組織方針と心療

＜薬剤処方・入院医療＞

司会：福田 祐典・住吉 太幹

抗精神病薬処方の減量方法：SCAP法

山之内芳雄

睡眠薬の多剤併用の背景と減薬・休薬法について

三島 和夫

精神科入院医療のクリティカルパス

藤田 潔

総合討論

司会：住吉 太幹

野田 隆政

質の高い電気けいれん療法とは何か

患者手帳を用いた統合失調症治療とフォローアップ

黒木 規臣・柴岡 三智

＜スマートな共生社会に向けた取り組み＞

司会：伊藤 弘人

病棟建替えに伴う病床再編計画策定に向けた経験と具体例

酒井麻由美

精神科領域での在宅療養支援診断所のつくり方

岡崎 公彦

＜精神障害者の身体管理＞

統合失調症患者の糖尿病治療：当院における経験例(対処例)から

藤田 寛子

講師名簿

伊藤 弘人	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会精神保健研究部部長
山之内芳雄	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会精神保健研究部室長
野上 毅	厚生労働省社会援護局精神・障害保健課心の健康支援室心の健康づくり対策官
西村 武彦	国立精神・神経医療研究センター病院副看護部長
平田 豊明	千葉県精神科医療センター院長
八田耕太郎	順天堂大学医学部附属練馬病院前任准教授
杉山 直也	公益財団法人復康会沼津中央病院院長
吉村 直記	国立精神・神経医療研究センター病院第一精神診療部第六精神科医長
熊地 美枝	国立精神・神経医療研究センター病院看護部看護師長
岸 清次	国立精神・神経医療研究センター病院看護部看護師長
住吉 太幹	国立精神・神経医療研究センター病院臨床研究推進部長
三島 和夫	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神生理研究部長
藤田 潔	医療法人清心会藤田こころケアセンター理事長
野田 隆政	国立精神・神経医療研究センター病院第一精神診療部第二精神科医長
黒木 規臣	国立精神・神経医療研究センター病院第二精神診療部第一司法精神科医長
柴岡 三智	国立精神・神経医療研究センター病院第一精神診療部医師
酒井麻由美	ヘルスケア経営研究所副所長
岡崎 公彦	岡崎クリニック院長
藤田 寛子	公益財団法人東京都保健医療公社多摩北部医療センター内分泌・代謝内科医長

《発達障害早期総合支援研修》

平成26年6月19日から6月20日まで、第9回発達障害早期総合支援研修を実施し、「発達障害支援における早期発見の意義とその方法、地域における早期からの発達発見・支援の実際」を主題に、各自治体において、乳幼児健診に携わる医師および保健師で、発達障害支援について責任的立場にある者58名に対して研修を行った。

課程主任 神尾 陽子 課程副主任 高橋 秀俊

6月19日(木)

発達障害者支援事業について	日詰 正文
発達障害の早期発見と早期支援の意義：ライフステージの観点から	神尾 陽子
自治体における乳幼児健診を活用した早期発見・早期支援システムづくり	工藤 哲也
地域における発達障害の早期診断・早期療育と連携のあり方	高橋 脩
総合討論	工藤 哲也・高橋 脩

6月20日(金)

自閉症スペクトラム障害の早期発見のポイント	神尾 陽子
乳幼児の対人コミュニケーション行動アセスメントについて	立花 良之
乳幼児の対人コミュニケーション行動アセスメント実習	立花 良之
ペアレント・トレーニングの実際Ⅰ・Ⅱ	井上 雅彦

講師名簿

神尾 陽子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部部長
高橋 秀俊	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部室長
日詰 正文	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課発達障害対策専門官
工藤 哲也	信濃医療福祉センター
高橋 脩	豊田市こども発達センター長
立花 良之	国立成育医療研究センターこころの診療部乳幼児メンタルヘルス診療科医長
井上 雅彦	鳥取大学医学部大学院医学系研究科教授

《発達障害支援医学研修》

平成26年7月2日から7月3日まで、第17回発達障害支援医学研修を実施し、「発達障害の診断・治療と支援の実際」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し発達障害に関心を有する医師、特に指導について責任的立場にある者35名に対して研修を行った。

課程主任 稲垣 真澄 課程副主任 太田 英伸・北 洋輔

7月2日(水)

厚生労働省の発達障害支援施策	日詰 正文
クリニックで実践する子育ての支援	秋山千枝子
青年期発達障害者への支援のシナリオ	小栗 正幸
発達障害者支援専門員の育成と役割：大分県の取り組み	清田 晃生
発達障害児を持つ保護者支援	林 隆

7月3日(木)

ADHD 児の見方	井上 祐紀
発達障害者支援：くるめSTPの9年の歩み	山下裕史朗
学習障害の診断と治療	小枝 達也
成人期発達障害の薬物治療	増子 博文

講師名簿

稲垣 真澄	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部部長
太田 英伸	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
北 洋輔	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
日詰 正文	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課発達障害対策専門官
秋山千枝子	あきやま子どもクリニック院長
小栗 正幸	特別支援教育ネット代表 宇部フロンティア大学臨床教授
清田 晃生	大分大学医学部附属病院小児科助教
林 隆	医療法人テレサ会西川医院発達診療部長
井上 祐紀	十愛病院
山下裕史朗	久留米大学医学部小児科教授
小枝 達也	鳥取大学地域学部教授
増子 博文	福島県発達障がい者支援センター長

《精神保健指導課程研修》

平成26年7月30日から7月31日まで、第51回精神保健指導課程研修を実施し、「精神保健医療福祉の改革、自殺対策、地域精神保健福祉活動（コミュニティメンタルヘルス）の推進等、精神保健福祉行政の重要課題についての情報を提供するとともに、受講者間の情報交換を行う」を主題に、都道府県（指定都市）等において精神保健福祉計画の企画立案の指導的立場または中心的役割を担う者、公的機関または民間団体において地域精神保健医療福祉（コミュニティメンタルヘルス）の実践の指導的立場または中心的役割を担う者33名に対して研修を行った。

課程主任 竹島 正 課程副主任 立森 久照・西 大輔

7月30日（水）

精神保健のプライマリケアへの統合のピラミッドモデルの考え方	竹島 正
精神障害の地域疫学研究で明らかとなった課題	立森 久照
精神保健におけるセルフケア	西 大輔
精神保健福祉行政	諸富 伸夫
地域保健とソーシャルキャピタル	藤内 修二
地域精神保健医療—大阪での経験から	籠本 孝雄
コミュニティメンタルヘルスにおけるリーダーシップ	チー・アン

7月31日（木）

＜シンポジウム＞

地域精神保健医療とインフォーマルなコミュニティケアとの連携 座長：竹島 正

シンポジスト：川崎 洋子・福地 成・田辺 等・大場 義貴・
的場 由木・船木友里恵

＜グループディスカッション＞

精神保健のプライマリケアへの統合のピラミッドモデルの、日本における活用可能性の検討—インフォーマルなコミュニティケアとの連携に焦点を当てて

ファシリテーター：西 大輔・立森 久照・川崎 洋子・福地 成・
田辺 等・大場 義貴・的場 由木・船木友里恵
コメンテーター：チー・アン

講師名簿

竹島 正	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神保健計画研究部部長
立森 久照	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神保健計画研究部室長
西 大輔	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神保健計画研究部室長
諸富 伸夫	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課課長補佐
藤内 修二	大分県中部保健所所長
籠本 孝雄	地方独立行政法人大阪府立病院機構大阪府立精神医療センター院長
チー・アン	メルボルン大学精神医学部国際精神医学科准教授
川崎 洋子	みんなねっと公益社団法人全国精神保健福祉会連合会理事長
福地 成	公益社団法人宮城県精神保健福祉協会みやぎ心のケアセンター地域支援部長
田辺 等	北海道立精神保健福祉センター所長
大場 義貴	聖隷クリストファー大学社会福祉学部准教授
的場 由木	NPO 自立支援センターふるさとの会保健師
船木友里恵	NPO 自立支援センターふるさとの会

《自殺総合対策企画研修》

平成26年8月19日から8月20日まで、第8回自殺総合対策企画研修を実施し、「地方自治体における自殺対策の計画づくりの企画立案能力の向上」を主題に、都道府県（政令指定都市）等において、自殺対策の企画立案の指導的立場または中心的な役割を担う者80名に対して研修を行った。

課程主任 竹島 正 課程副主任 松本 俊彦・川野 健治・山内 貴史

8月19日(火)

自殺問題の捉え方	竹島 正
自殺対策の基本的な考え方	高橋 祥友
わが国の自殺対策	内閣府自殺対策推進室
精神保健医療福祉対策における自殺対策	伊東千絵子
身体疾患を有する患者の自殺対策	藤森麻衣子
地方自治体の自殺対策の取組状況と課題	山内 貴史
自殺統計の利用／自殺対策の評価	山内 貴史
法医学からみた自殺の実態と対策	福永 龍繁

8月20日(水)

ハイリスク者支援の考え方	松本 俊彦
遺族支援の考え方	川野 健治
自殺対策の企画・実施・評価演習	(ファシリテーター)
	竹島 正・藤森麻衣子・山内 貴史
	(コメンテーター)
	南島 和久・松本 俊彦

講師名簿

竹島 正	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センターセンター長
松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター副センター長
川野 健治	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
藤森麻衣子	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
山内 貴史	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター研究員
高橋 祥友	筑波大学医学医療系教授
岡田 誠	内閣府自殺対策推進室参事官補佐
伊東千絵子	厚生労働省 PTSD 専門官
南島 和久	神戸学院大学法学部准教授
福永 龍繁	東京都監察医務院院長

《摂食障害治療研修》

平成 26 年 8 月 26 日から 8 月 29 日まで、第 12 回摂食障害治療研修を実施し、「摂食障害の病態と治療に関する最新の知見」を主題に、病院、保健所、精神保健福祉センター等に勤務し、摂食障害に関心を有する医療従事者 28 名に対して研修を行った。

課程主任 安藤 哲也 課程副主任 菊地 裕絵

8月26日(火)

摂食障害病態・治療概論	安藤 哲也
家族の心理教育	小原 千郷
リハビリテーション	武田 綾

8月27日(水)

心理教育	馬場 安希
ガイデット・セルフヘルプ	林 公輔
身体的合併症・身体的管理	鈴木(堀田) 眞理

8月28日(木)

症例検討	田村 奈穂
小児の摂食障害	宇佐美政英
精神障害・パーソナリティー障害を合併する摂食障害	永田 利彦
摂食障害とアルコール・薬物などのアディクション	鈴木 健二

8月29日(金)

入院治療	河合 啓介
認知行動療法	切池 信夫

講師名簿

安藤 哲也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所心身医学研究部室長
菊地 裕絵	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所心身医学研究部室長
小原 千郷	東京女子医科大学附属女性生涯健康センター臨床心理士
武田 綾	NPO 法人のびの会相談室心理療法士
馬場 安希	国立国際医療研究センター国府台病院心理療法士
林 公輔	慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室助教
鈴木(堀田) 眞理	政策研究大学院大学教授
田村 奈穂	国立国際医療研究センター国府台病院心療内科医師
宇佐美政英	国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科医師
永田 利彦	なんばながたメンタルクリニック院長
鈴木 健二	鈴木メンタルクリニック院長
河合 啓介	九州大学病院心療内科医師
切池 信夫	浜寺病院名誉院長

【地域精神科モデル医療研修シリーズ】

《ACT・多職種アウトリーチ研修》

平成26年9月2日から9月5日まで、第12回ACT・多職種アウトリーチ研修を実施し、「包括型地域生活支援プログラム（ACT）の定着のためのプログラム」を主題に、精神科医療機関、精神保健福祉センター、保健所、市町村、社会復帰施設等に勤務する従事者23名に対して研修を行った。

課程主任 伊藤順一郎 課程副主任 佐藤さやか・山口 創生

9月2日（火）

地域精神保健とアウトリーチ

吉田 光爾

ケアマネジメント総論

吉田 光爾

リカバリー

安保 寛明・駿河 孝史

デイケア利用者

グループ・ディスカッション

司会：山口 創生・下平美智代

9月3日（水）

ストレングスモデルのケアプラン作り

伊藤順一郎・久永 文恵

アウトリーチと家族支援

上久保真理子

質疑応答

司会：佐藤さやか・山口 創生

9月4日（木）

ACT 支援の実際(事例含む)

司会 伊藤順一郎・佐藤さやか

利用者の体験談

足立 千啓

利用者

多職種チームのチームリーダー論

西川 里美

指定討論&ディスカッション

石川 三絵・足立 千啓

精神科医の役割

佐竹 直子

危機介入と倫理(1)(2)

西尾 雅明・金井 浩一

9月5日（金）

医療型アウトリーチの展望（シンポジウム）

司会 佐藤さやか

アウトリーチと制度

座長：伊藤順一郎

アウトリーチ推進事業の今後

福生 泰久

アウトリーチに必要なモニタリング

萱間 真美

吉田 光爾

講師名簿

伊藤順一郎	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部部長
佐藤さやか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部室長
山口 創生	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部室長
下平美智代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部
吉田 光爾	日本社会事業大学社会福祉学部福祉援助学科准教授
安保 寛明	特例医療法人智徳会未来の風せいわ病院これからの暮らし支援部副部長
駿河 孝史	特例医療法人智徳会未来の風せいわ病院ピアスタッフ
久永 文恵	NPO 法人地域精神保健福祉機構コンボリハビリテーションカウンセラー
上久保真理子	ぴあクリニック精神保健福祉士
足立 千啓	特定非営利活動法人リカバリーサポートセンターACTIPS チームリーダー
西川 里美	株式会社みらい訪問看護ステーション宙代表取締役所長
金井 浩一	たかぎクリニック精神保健福祉士チームリーダー
佐竹 直子	国立精神・神経医療研究センター病院第一診療部
西尾 雅明	東北福祉大学総合福祉学部社会福祉学科教授
福生 泰久	厚生労働省精神・障害保健課課長補佐
萱間 真美	聖路加看護大学看護学部教授
林 恵介	医療法人常清会尾辻病院

【地域精神科モデル医療研修シリーズ】

《アウトリーチによる地域ケアマネジメント（福祉型）研修》

平成26年9月2日から9月5日まで、第6回アウトリーチによる地域ケアマネジメント(福祉型)研修を実施し、「アウトリーチによる地域ケアマネジメントのスキル向上プログラム」を主題に、障害者自立支援法における社会福祉サービスの事業者、医療機関、市町村等に属する医療・社会福祉従事者27名に対して研修を行った。

課程主任 伊藤順一郎 課程副主任 佐藤さやか・山口 創生

9月2日(火)

地域精神保健とアウトリーチ	吉田 光爾
ケアマネジメント総論	吉田 光爾
リカバリー	安保 寛明・駿河 孝史
	デイケア利用者
グループ・ディスカッション	司会 山口 創生・下平美智代

9月3日(水)

ストレンジモデルのケアプラン作り	伊藤順一郎・久永 文恵
アウトリーチと家族支援	上久保真理子
質疑応答	司会 佐藤さやか・山口 創生

9月4日(木)

シンポジウム	
アウトリーチの可能性	司会 吉田 光爾
相談支援	岩上 洋一
地域移行・地域定着	岩上 洋一
グループ・ディスカッション	
福祉型アウトリーチの実際事例より	遠藤 紫乃・松尾 明子
グループ・ディスカッション	司会 山口 創生

9月5日(金)

福祉型アウトリーチの実際の運営	松尾 明子
利用者の声	ほっとハート利用者
ピアによる支援の可能性	櫻田なつみ
質疑応答	司会 山口 創生

講師名簿

伊藤順一郎	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部部長
佐藤さやか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部室長
山口 創生	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部室長
下平美智代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部
吉田 光爾	日本社会事業大学准教授
安保 寛明	特例医療法人智徳会未来の風せいわ病院これからの暮らし支援部副部長
駿河 孝史	特例医療法人智徳会未来の風せいわ病院ピアスタッフ
久永 文恵	特定非営利活動法人地域精神保健福祉機構コンボリハビリテーションカウンセラー
上久真理子	ぴあクリニック精神保健福祉士
岩上 洋一	特定非営利活動法人じりつ代表理事
遠藤 紫乃	特定非営利活動法人ほっとハートほっとハートらいふ管理者
松尾 明子	特定非営利活動法人ほっとハート相談支援専門員
櫻田なつみ	株式会社 MARS 多機能型事業所マーレ生活支援員

【地域精神科モデル医療研修シリーズ】

《医療における個別就労支援研修》

平成26年9月2日から9月5日まで、第2回医療における個別就労支援研修を実施し、「個別職場定着とサポート（IPS：individual Placement and Support）の就労支援の原則を学び、そこから精神科デイケアを中心とした、個別就労支援のありかたや、医療機関が周囲の就労支援機関と組む場合のありかたについて検討する」を主題に、精神科医療機関で臨床に従事しており、利用者の就労支援に関心を持つ者、および医療機関と密接な関係を持ちながら精神障害者の就労支援に従事している者20名に対して研修を行った。 課程主任 伊藤順一郎 課程副主任 佐藤さやか・山口 創生

9月2日（火）

地域精神保健とアウトリーチ	吉田 光爾
ケアマネジメント総論	吉田 光爾
リカバリー	安保 寛明・駿河 孝史
	デイケア利用者
グループ・ディスカッション	司会：山口 創生・下平美智代

9月3日（水）

働くこととリカバリー	佐藤さやか
IPS型就労支援	下平美智代
医療機関における就労支援(1) 前編	
慈雲堂病院デイケアの例	松井 彩子・浅見 直之
グループ・ディスカッション	司会：種田 綾乃・下平美智代
精神障害者就労支援：制度と現状	相澤 欽一

9月4日（木）

医療機関における就労支援(2)	
国立精神・神経医療研究センター病院	司会：山口 創生
デイケアの例 前編	大島 真弓・清澤 康伸
デイケアの例 後編	山口 創生
地域における就労支援	司会：下平美智代
広島における就労支援	澤田 恭一
市川における就労支援	渡辺 未来
パネルディスカッション「ESの役割と他業種・他機関との連携」	司会：下平美智代
	清澤 康伸・澤田 恭一・渡辺 未来
グループ・ディスカッション	司会：種田 綾乃・下平美智代

9月5日（金）

就労支援への医師の関わり	坂田 増弘
医療における就労支援に期待すること	司会：下平美智代
ハローワーク	池田真砂子・菅沼 真弓
企業	松井 彩子・高橋 正俊

講師名簿

伊藤順一郎	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部部長
佐藤さやか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部室長
山口 創生	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部室長
下平美智代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部
種田 綾乃	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部
吉田 光爾	日本社会事業大学准教授
安保 寛明	特例医療法人智徳会未来の風せいわ病院これからの暮らし支援部副部長
駿河 孝史	特例医療法人智徳会未来の風せいわ病院
松井 彩子	医療法人社団じうんどう慈雲堂病院デイケア精神保健福祉士
浅見 直之	医療法人社団じうんどう慈雲堂病院デイケア精神保健福祉士
相澤 欽一	福島障害者職業センター所長
大島 真弓	国立精神・神経医療研究センター病院精神リハビリテーション部作業療法士長
清澤 康伸	国立精神・神経医療研究センター病院医療連携福祉部医療社会事業専門員
澤田 恭一	一般社団法人 FLaT 就労支援センターFLaT 代表理事
渡辺 未来	NPO 法人 NECST 障害者就職サポートセンタービルド就労支援コーディネータ
坂田 増弘	国立精神・神経医療研究センター病院第一精神診療部第三精神科医長
池田真砂子	特定非営利活動法人ゆるら社会生活サポートセンターこみっと所長代理
菅沼 真弓	ハローワーク三鷹 専門援助第二部門職業指導官
高橋 正俊	NTT グループ テルウェル東日本株式会社経営管理部 CSR 推進室担当課長

《司法精神医学ワンドイセミナー》

平成26年9月6日に第2回司法精神医学ワンドイセミナーを実施し、「刑事責任能力鑑定を行うために必要となる初歩的な知識と技能の習得」を主題に、刑事責任能力に関する精神鑑定について、これから学び、鑑定を行っていきたいと考えている精神科医14名に対して研修を行った。

課程主任 岡田 幸之 課程副主任 菊池安希子・安藤久美子

9月6日(土)

刑事精神鑑定入門－歴史、法律、制度	岡田 幸之
刑事精神鑑定の基礎(1)－実施方法	安藤久美子
刑事精神鑑定の基礎(2)－考え方	岡田 幸之
演習	安藤久美子

講師名簿

岡田 幸之	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部部長
菊池安希子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部室長
安藤久美子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部室長

《薬物依存臨床医師研修》 《薬物依存臨床看護等研修》

平成 26 年 9 月 9 日から 9 月 12 日まで、第 28 回薬物依存臨床医師研修ならびに第 16 回薬物依存臨床看護等研修を実施し、「薬物依存症概念の理解と薬物依存症に対する臨床的対応の普及」を主題に、精神科病院、精神保健福祉センター等に勤務する医師 15 名、看護師等 41 名に対して研修を行った。

課程主任 和田 清 課程副主任 松本 俊彦・船田 正彦

9月9日(火)

「薬物依存に関する基礎知識」と「わが国の薬物乱用・依存の現状と課題」	和田 清
行動薬理学からみた薬物依存（精神依存、身体依存）	船田 正彦
ベンゾジアゼピン系薬物の基礎と臨床	稲田 健

9月10日(水)

有機溶剤乱用・依存の現状と臨床	和田 清
薬物依存症者に対する心理療法	森田 展彰
薬物関連精神障害者の司法的問題とその対応	松本 俊彦
覚せい剤依存・精神病の臨床	小林 桜児

9月11日(木)

精神保健福祉センターにおける薬物依存への取り組み	谷合 知子
【埼玉県立精神医療センターへ移動】病棟見学	
病棟見学と医療施設における薬物依存の治療（医師）	成瀬 暢也
病棟見学と医療施設における薬物依存の治療（看護等）	青柳 歌織

9月12日(金)

地域における薬物依存症の治療ーダルクと治療共同体について	和田 清
薬物依存からの回復者による自助活動・ダルクの取り組み	栗坪 千明・栃原晋太郎
大麻によって発現する動物の異常行動	三島 健一
覚せい剤精神疾患の生物学的病態	曾良 一郎

講師名簿

和田 清	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
船田 正彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
稲田 健	東京女子医科大学医学部精神医学講座講師
森田 展彰	筑波大学医学医療系准教授
小林 桜児	神奈川県立精神医療センターせりがや病院医師
谷合 知子	多摩総合精神保健福祉センター広報援助課相談係長
成瀬 暢也	埼玉県立精神医療センター副病院長
青柳 歌織	埼玉県立精神医療センター第2病棟（依存症病棟）主任
栗坪 千明	栃木ダルク代表
栃原晋太郎	栃木ダルクスタッフ
三島 健一	福岡大学薬学部臨床疾患薬理学教室准教授

《心理職自殺予防研修》

平成 26 年 9 月 16 日から 9 月 17 日まで、第 5 回心理職自殺予防研修を実施し、「自殺のアセスメントと基本的対応、関連する精神科診断、薬物療法の知識、ソーシャルワーク等の基礎知識の習得」を主題に、自治体、関係団体、民間団体、企業等で対人支援に携わる心理職等の方、78 名に対して研修を行った。

課程主任 川野 健治 課程副主任 松本 俊彦

9月16日(火)

自殺対策の現状	竹島 正
統計からみた自殺の実態	山内 貴史
自殺と精神疾患	稲垣 正俊
自殺のハイリスク者	松本 俊彦
未遂者ケア	高井美智子
地域連携	小高 真美・加藤 雅江
事後対応	川野 健治

9月17日(水)

感情調節困難	遊佐安一郎
自殺対策－課題と研究－	勝又陽太郎・大槻 露華・白神 敬介
総合討論	松本 俊彦

講師名簿

竹島 正	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センターセンター長
松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター副センター長
川野 健治	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
山内 貴史	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター研究員
小高 真美	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター研究員
白神 敬介	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター研究員
大槻 露華	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター研究員
稲垣 正俊	岡山大学病院精神科神経科講師
加藤 雅江	杏林大学医療福祉相談室医療 MSW
遊佐安一郎	長谷川メンタルヘルス研究所 所長
勝又陽太郎	新潟県立大学人間生活学部子ども学科講師

《精神科医療従事者自殺予防研修》

平成26年9月16日から9月17日まで、第9回精神科医療従事者自殺予防研修を実施し、「精神科医療における自殺予防の取組の充実」を主題に、医師、看護師、精神保健福祉士等の精神科医療従事者75名に対して研修を行った。

課程主任 藤森麻衣子 課程副主任 竹島 正・山内 貴史

9月16日(火)

自殺対策の現状	竹島 正
統計からみた自殺の実態	山内 貴史
自殺と精神疾患	稲垣 正俊
自殺のハイリスク者	松本 俊彦
未遂者ケア	高井美智子
地域連携	小高 真美・加藤 雅江
事後対応	川野 健治

9月17日(水)

精神科病院における自殺のリスクとその予防	森 隆夫
アルコール依存症の自殺予防	松下 幸生
事例から学ぶこと	坂本 岳之・日野 耕介
精神科医療における自殺とその予防（スモールグループディスカッション）	坂本 岳之・日野 耕介・藤森麻衣子

講師名簿

竹島 正	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センターセンター長
松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター副センター長
川野 健治	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
藤森麻衣子	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
山内 貴史	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター研究員
高井美智子	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター研究員
小高 真美	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター研究員
稲垣 正俊	岡山大学病院精神科神経科講師
加藤 雅江	杏林大学医療福祉相談室
森 隆夫	医療法人愛精会あいせい紀年病院理事長
松下 幸生	久里浜医療センター
坂本 岳之	国立精神・神経医療研究センター病院5南病棟看護師
日野 耕介	横浜市立大学附属市民総合医療センター

《発達障害精神医療研修》

平成 26 年 9 月 24 日から 9 月 26 日まで、第 7 回発達障害精神医療研修を実施し、「未診断の発達障害を抱える青年・成人患者の鑑別診断と処遇法に関する幅広い臨床ニーズに対応する最新の知見」を主題に、各自治体において精神医療の中核となる機関に勤務する精神科医等 38 名に対して研修を行った。

課程主任 神尾 陽子 課程副主任 高橋 秀俊

9月24日(水)

発達障害者支援事業について	日詰 正文
成人期の発達障害の精神医学的問題について	神尾 陽子
自閉症スペクトラム障害成人の脳画像研究からわかること	山末 英典

9月25日(木)

発達障害を有する成人女性の臨床的諸問題	笠原 麻里
発達障害児・成人の診断と治療の実際について	飯田 順三
症例検討 2 ケース	飯田 順三・近藤 直司
ひきこもり事例にみられる高機能広汎性発達障害の特徴	近藤 直司
成人期の発達障害専門診療の歩み	加藤 進昌

9月26日(金)

自閉症スペクトラム児・者の発達の道筋	神尾 陽子
症例検討 2 ケース	神尾 陽子・石飛 信
成人期の自閉症スペクトラム障害の就労支援	梅永 雄二
当事者の体験から	村上 由美
当事者の体験から	
(ASD 者が精神科医に望む認容性の個性差を考慮した薬剤と ASD に併存する身体症状のケア)	片岡 聡

講師名簿

神尾 陽子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部部長
高橋 秀俊	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部室長
石飛 信	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部室長

日詰 正文	厚生労働省 社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課発達障害対策専門官
山末 英典	東京大学脳神経医学専攻臨床神経精神医学講座准教授
笠原 麻里	医療法人財団青溪会駒木野病院児童精神科診療部長
飯田 順三	奈良県立医科大学精神医学講座教授
近藤 直司	大正大学人間学部臨床心理学科教授
加藤 進昌	昭和大学発達障害医療研究所
梅永 雄二	宇都宮大学教育学部教授
村上 由美	ボイスマネージ
片岡 聡	NPO法人東京都自閉症協会高機能自閉症

《司法精神医学研修》

平成26年10月28日から10月29日まで、第9回司法精神医学研修を実施し、「司法精神医学的な評価と介入を提供するために必要となる基本的な知識と技能の習得、およびその一般精神医療への応用」を主題に、指定医療機関や行刑施設、地域(保健所等)において精神医療に従事している医師、臨床心理技術者、看護師、精神保健福祉士等43名に対して研修を行った。

課程主任 岡田 幸之 課程副主任 菊池安希子・安藤久美子

10月28日(火)

司法精神医学概論—歴史、法律、制度	岡田 幸之
刑事責任能力と精神鑑定	岡田 幸之
医療観察法総論	岡田 幸之
医療観察法の現状(入院)	藤井 千代・河野 稔明
医療観察法の現状(通院)	安藤久美子

10月29日(水)

司法精神医療におけるリスク・アセスメント(1)	安藤久美子・岡田 幸之
司法精神医療におけるリスク・アセスメント(2)	安藤久美子・岡田 幸之
司法精神医療における心理学的治療アプローチ(1)	菊池安希子・小山 繭子
司法精神医療における心理学的治療アプローチ(2)	菊池安希子・小山 繭子

講師名簿

岡田 幸之	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部部長
菊池安希子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部室長
安藤久美子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部室長
藤井 千代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部室長
河野 稔明	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部
小山 繭子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部

《自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修》

平成 26 年 11 月 4 日から 11 月 5 日まで、第 5 回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修を実施し、「自傷を繰り返す者、あるいは、パーソナリティ障害を抱える者が自殺リスクの高い一群であることを理解し、適切に治療・対応できるようになること」を主題に、医療機関、自治体における相談業務従事者等 122 名に対して研修を行った。

課程主任 松本 俊彦 課程副主任 川野 健治・藤森麻衣子・山内 貴史

11月4日(火)

自殺予防のためのパーソナリティ障害の理解と対応	林 直樹
自傷行為・過量服薬の理解と対応	松本 俊彦
トラウマを抱えた境界性パーソナリティ障害の理解と対応	白川美也子
若者の自傷予防プログラム (DVD 視聴)	松本 俊彦

11月5日(水)

境界性パーソナリティ障害に対する弁証法的行動療法	遊佐安一郎
アディクションを抱えた境界性パーソナリティ障害の地域支援	上岡 陽江
家族の立場から	奥野 栄子
総合討議	松本 俊彦

講師名簿

竹島 正	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センターセンター長
松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター副センター長
川野 健治	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
藤森麻衣子	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
山内 貴史	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター研究員
林 直樹	帝京大学医学部附属病院メンタルヘルス科教授
白川美也子	こころとからだ・光の花クリニック
遊佐安一郎	長谷川メンタルヘルス研究所所長
上岡 陽江	ダルク女性ハウス代表
奥野 栄子	BPD 家族会代表

《摂食障害看護研修》

平成26年11月5日から11月7日まで、第11回摂食障害看護研修を実施し、「摂食障害の病態と治療に関する最新の知見」を主題に、精神科、心療内科、小児科、精神保健福祉センター等に勤務する看護師および保健師、作業療法士、精神保健福祉士等22名に対して研修を行った。

課程主任 安藤 哲也 課程副主任 菊地 裕絵

11月5日(水)

摂食障害の疫学・病態・治療概論	安藤 哲也
精神障害、パーソナリティ障害を合併する摂食障害	西園マーハ文
重症の神経性無食欲症の入院治療と看護	石川 美雪
心療内科病棟における看護	金居久美子・大嶺 靖子

11月6日(木)

ソーシャルワーカーの役割	佃 宏美
心理教育的アプローチ	武田 綾
栄養リハビリテーション	河野 公子
摂食障害の身体的合併症の管理	鈴木(堀田) 眞理

11月7日(金)

ケアとコミュニケーションのスキル	小原 千郷
摂食障害治療の基本	高倉 修
小児科病棟における治療と看護	高宮 静男・佐野 智子

講師名簿

安藤 哲也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所心身医学研究部室長
菊地 裕絵	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所心身医学研究部室長

西園マーハ文	白梅学園大学子ども学部発達臨床学科教授
石川 美雪	北里大学東病院看護部
金居久美子	国立国際医療研究センター国府台病院3南病棟看護師長
大嶺 靖子	国立国際医療研究センター国府台病院3南病棟副看護師長
佃 宏美	国立国際医療研究センター国府台病院ソーシャルワーク室
武田 綾	NPO 法人のびの会心理療法士
河野 公子	国立国際医療研究センター病院栄養管理室室長
鈴木(堀田) 眞理	政策研究大学院大学保健管理センター教授
小原 千郷	東京女子医科大学付属女性生涯健康センター臨床心理士
高倉 修	国立大学法人九州大学病院心療内科診療講師
高宮 静男	西神戸医療センター精神科部長
佐野 智子	西神戸医療センター小児病棟看護師

《薬物依存症に対する認知行動療法研修》

平成 26 年 11 月 11 日から 11 月 12 日まで、第 6 回薬物依存症に対する認知行動療法研修を実施し、「薬物依存症者の臨床的特徴と治療に関するエビデンスを理解し、直面化を避けた動機づけ面接の重要性を理解し、ビデオ学習やデモセッションの見学を通じて、薬物依存症に対する集団認知行動療法のファシリテーションの実際を学ぶ」を主題に、医療機関、行政機関、司法機関、民間回復施設等で薬物依存症者の援助に従事している者 74 名に対して研修を行った。

課程主任 松本 俊彦 課程副主任 和田 清

11月11日(火)

SMARPP の意義と実際	松本 俊彦
TAMARP～精神保健福祉センターでの試み	近藤あゆみ
認知行動療法プログラムの立ち上げ方～保健機関における実例	嶋根 卓也
医療観察法病棟における物質使用障害治療プログラム	今村 扶美

11月12日(水)

SMARPP ビデオ学習	松本 俊彦
デモセッション	松本 俊彦・今村 扶美
グループワーク	松本 俊彦・今村 扶美・引土 絵未・ 米澤 雅子・高野 歩
SMARPP ワークブックを用いた外来個人療法	若林 朝子
プログラムの効果とディスカッション	松本 俊彦

講師名簿

和田 清	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
嶋根 卓也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
引土 絵未	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部
近藤あゆみ	新潟医療福祉大学社会福祉学部社会福祉学科准教授
今村 扶美	国立精神・神経医療研究センター病院主任心理療法士
若林 朝子	国立精神・神経医療研究センター病院心理療法士

《精神科医療従事者自殺予防研修》

平成26年12月2日から12月3日まで、第10回精神科医療従事者自殺予防研修を実施し、「精神科医療における自殺予防の取組の充実」を主題に、医師、看護師、精神保健福祉士等の精神科医療従事者76名に対して研修を行った。

課程主任 竹島 正 課程副主任 松本 俊彦・川野 健治・藤森麻衣子

12月2日(火)

自殺対策の現状	竹島 正
統計からみた自殺の実態	山内 貴史
自殺と精神疾患	藤森麻衣子
自殺のハイリスク者	松本 俊彦
未遂者ケア・地域連携	下田 重朗
アルコール依存症の自殺予防	辻本 士郎

12月3日(水)

自殺が生じた後の対応	川野 健治
精神科病院における自殺のリスクとその予防	森 隆夫
事例から学ぶこと	松村 由美・小田 良子
精神医療における自殺とその予防(グループディスカッション)	ファシリテーター
	松村 由美・小田 良子
	司会：藤森麻衣子

講師名簿

竹島 正	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センターセンター長
松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター副センター長
川野 健治	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
藤森麻衣子	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
山内 貴史	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター研究員
下田 重朗	奈良県立医科大学付属病院精神医療センター精神保健福祉士
辻本 士郎	医療法人東布施辻本クリニック院長
森 隆夫	医療法人愛精会あいせい紀年病院理事長
松村 由美	京都大学医学部附属病院医療安全管理室室長
小田 良子	医療法人栄仁会宇治おうばく病院A8病棟看護師長

《犯罪被害者メンタルケア研修》

平成 27 年 1 月 19 日から 1 月 21 日まで、第 9 回犯罪被害者メンタルケア研修を実施し、「犯罪被害者・遺族の心理についての基本的な知識、および臨床現場での適切な治療対応」を主題に、精神科医療機関、精神保健福祉センター、保健所、犯罪被害者支援関連機関に勤務する医療・臨床心理、福祉業務従事者等 42 名に対して研修を行った。

課程主任 金 吉晴 課程副主任 中島 聡美

1月19日(月)

犯罪被害者等基本法および犯罪被害者等基本計画における精神医療の役割	及川 京子
警察による犯罪被害者支援	阿武 孝雄
犯罪被害者と刑事司法	柑本 美和
犯罪被害者の心理と治療・支援	中島 聡美

1月20日(火)

犯罪被害者の声：犯罪被害者そして精神科医として	高橋 幸夫
犯罪被害者遺族の心理	白井 明美
DV被害者への対応	中島 聡美
子どもの被害者への対応	細金 奈奈

1月21日(水)

PTSD の概念と治療	金 吉晴
犯罪被害者への治療対応	小西 聖子
犯罪被害者の事例提示	小西 聖子・中島 聡美
犯罪被害者治療の実際	小西 聖子・中島 聡美

講師名簿

金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所成人精神保健研究部部長
中島 聡美	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所成人精神保健研究部室長
及川 京子	内閣府犯罪被害者等施策推進室参事官
阿武 孝雄	警察庁長官官房給与厚生課犯罪被害者支援室長
柑本 美和	東海大学大学院実務法学研究科准教授
高橋 幸夫	医療法人東浩会石川病院精神科医局部長
白井 明美	国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科准教授
細金 奈奈	恩賜財団母子愛育会総合母子保健センター愛育病院医師
小西 聖子	武蔵野大学人間科学部教授

《発達障害支援医学研修》

平成27年1月28日から1月29日まで、第18回発達障害支援医学研修を実施し、「発達障害児に対する医学的介入と心理社会的支援の実際」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し、発達障害に関心を有する医師、特に指導について責任的立場にある者38名に対して研修を行った。

課程主任 稲垣 真澄 課程副主任 太田 英伸・北 洋輔

1月28日(水)

厚生労働省の発達障害支援施策	日詰 正文
チック・トゥレット症候群の診断と支援	金生由紀子
発達障害者の就労支援	望月 葉子
医師が知っておきたい神経心理検査：KABC-II（講義と実習）	後藤 隆章

1月29日(木)

発達障害児支援サービスの展開：東京都多摩地区の実践	小沢 浩
不器用な子どもたちへの認知作業トレーニング（講義とワークショップ）	宮口 幸治
自閉症スペクトラムの感覚過敏の特徴と対応	栗山 進一
発達障害者支援：不登校児童への対応を中心に	齊藤万比古

講師名簿

稲垣 真澄	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部部長
太田 英伸	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
北 洋輔	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
日詰 正文	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課発達障害対策専門官
金生由紀子	東京大学医学部附属病院 こころの発達診療部部長
望月 葉子	独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構障害者職業総合センター特別研究員
後藤 隆章	常葉大学教育学部講師
小沢 浩	島田療育センターはちおうじ所長
宮口 幸治	宮川医療少年院法務技官
栗山 進一	東北大学災害科学国際研究所教授
齊藤万比古	恩賜財団母子愛育会総合母子保健センター愛育病院小児精神保健科部長

研修の推移

国立精神衛生研究所			
	36年6月～		54年度～ 61年度
研 修 課 程	<ul style="list-style-type: none"> ・医学科研修 ・心理学研修 ・社会福祉学研修 ・精神衛生指導科研修 	→	<ul style="list-style-type: none"> ・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科デイケア課程研修

国立精神・神経センター精神保健研究所						
	61年度		62年度～	18年度～	20年度	21年度
研 修 課 程	<ul style="list-style-type: none"> ・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科デイケア課程研修 	→	<ul style="list-style-type: none"> ・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神保健指導課程研修 ・精神科デイケア課程研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・精神保健指導課程研修 ・精神科デイケア課程研修 ・発達障害支援課程研修 ・摂食障害治療課程研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・ACT研修 ・薬物依存臨床課程研修 ・児童思春期精神医学研修 ・司法精神医学課程研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・自殺総合対策企画研修 ・地域自殺対策支援研修 ・心理職等自殺対策研修 ・自殺対策相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害精神医療研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害看護研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・薬物依存臨床看護研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・PTSD精神療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・司法精神医学研修 ・ACT研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・自殺総合対策企画研修 ・地域自殺対策支援研修 ・心理職等自殺対策研修 ・自殺対策相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害精神医療研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害看護研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・薬物依存臨床看護研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・PTSD精神療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・司法精神医学研修 ・ACT研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修

独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所			
	22年度	23年度	24年度
研 修 課 程	<ul style="list-style-type: none"> ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・司法精神医学研修 ・PTSD医療研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・発達障害精神医療研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・ACT研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・不眠症の認知行動療法研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・PTSD認知行動療法基本研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修

独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所		独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所	
25年度		26年度	
研 修 課 程	<ul style="list-style-type: none"> ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・精神障害者に対する医療機関と連携した就労支援研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント(福祉型)研修 ・ACT・多職種アウトリーチ研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・医療における個別就労支援研修 ・司法精神医学ワンデイセミナー 	

Ⅲ 研 修 実 績

平成26年度精神保健に関する技術研修課程 実施計画表

研 修 日 程	課 程 名	応募 方法	願 書 締 切 日	受 講 料	会 場	定 員	主 任	自殺予防 総合対策 センターの担 当する研 修
			願書作成(WEB登録)期間				副 主 任	
平成26年 6月12日(木)～13日(金)	(第8回) 精神科医療評価 ・均てん化研修	WEB のみ	4月24日(木) 4/3(木)～4/24(木)	¥15,000	小平市	40	伊藤 弘人	
6月19日(木)～20日(金)	(第9回) 発達障害早期総合 支援研修	WEB 登録後 郵送	4月17日(木) 3/24(月)～4/14(月)	無料	小平市	50	神尾 陽子 高橋 秀俊	
7月2日(水)～3日(木)	(第17回) 発達障害支援 医学研修	WEB 登録後 郵送	5月1日(木) 4/7(月)～4/28(月)	無料	小平市	60	稲垣 真澄 太田 英伸 軍司 敦子	
7月30日(水)～31日(木)	(第51回) 精神保健指導 課程研修	WEB のみ	6月5日(木) 5/15(木)～6/5(木)	¥20,000	小平市	60	竹島 正 立森 久照 西 大輔	
8月19日(火)～20日(水)	(第8回) 自殺総合対策 企画研修	WEB のみ	6月26日(木) 6/5(木)～6/26(木)	¥12,000	府中市	100	竹島 正 松本 俊彦 川野 健治 山内 貴史	○
8月26日(火)～29日(金)	(第12回) 摂食障害治療研修	WEB 登録後 郵送	6月26日(木) 6/2(月)～6/23(月)	¥24,000	小平市	40	安藤 哲也 菊地 裕絵	
≪地域精神科 モデル医療研修シリーズ≫ 9月2日(火)～5日(金)	(第12回) ACT・多職種アウトリーチ研修	WEB 登録後 郵送	7月3日(木) 6/9(月)～6/30(月)	¥25,000	千代田区	各 20	伊藤順一郎 佐藤さやか 山口 創生	
	(第6回) アウトリーチによる 地域ケアマネジメント(福祉型)研修							
	(第2回) 医療における個別就労支援研修							
9月6日(土)	(第2回) 司法精神医学ワンデイセミナー	WEB 登録後 郵送	7月8日(火) 6/13(金)～7/4(金)	¥10,000	小平市	25	岡田 幸之 菊池安希子 安藤久美子	
9月9日(火)～12日(金)	(第28回) 薬物依存臨床 医師研修	WEB 登録後 郵送	7月10日(木) 6/16(月)～7/7(月)	¥24,000	小平市	20	和田 清 松本 俊彦 船田 正彦	
9月9日(火)～12日(金)	(第16回) 薬物依存臨床 看護等研修	WEB 登録後 郵送	7月10日(木) 6/16(月)～7/7(月)	¥24,000	小平市	30	和田 清 松本 俊彦 船田 正彦	
9月16日(火)～17日(水)	(第5回) 心理職自殺予防研修	WEB のみ	7月24日(木) 7/3(木)～7/24(木)	無料	府中市	70	川野 健治 松本 俊彦	○
9月16日(火)～17日(水)	(第9回) 精神科医療従事者自殺予防研修	WEB のみ	7月24日(木) 7/3(木)～7/24(木)	無料	府中市	70	藤森麻衣子 竹島 正 山内 貴史	○
9月24日(水)～26日(金)	(第7回) 発達障害 精神医療研修	WEB のみ	8月7日(木) 7/17(木)～8/7(木)	無料	新宿区	50	神尾 陽子 高橋 秀俊	
10月28日(火)～29日(水)	(第9回) 司法精神医学研修	WEB 登録後 郵送	8月28日(木) 8/4(月)～8/25(月)	¥12,000	小平市	50	岡田 幸之 菊池安希子 安藤久美子	
11月4日(火)～5日(水)	(第5回) 自殺予防のための自傷行為とパーソナリ ティ障害の理解と対応研修	WEB のみ	9月11日(木) 8/21(木)～9/11(木)	無料	府中市	100	松本 俊彦 川野 健治 藤森麻衣子 山内 貴史	○
11月5日(水)～7日(金)	(第11回) 摂食障害看護研修	WEB 登録後 郵送	9月4日(木) 8/11(月)～9/1(月)	¥18,000	小平市	40	安藤 哲也 菊地 裕絵	
11月11日(火)～12日(水)	(第6回) 薬物依存症に対する 認知行動療法研修	WEB 登録後 郵送	9月11日(木) 8/18(月)～9/8(月)	¥15,000	小平市	60	松本 俊彦 和田 清	
12月2日(火)～3日(水)	(第10回) 精神科医療従事者自殺予防研修	WEB のみ	10月9日(木) 9/18(木)～10/9(木)	無料	京都市	80	竹島 正 松本 俊彦 川野 健治 藤森麻衣子	○
平成27年 1月19日(月)～21日(水)	(第9回) 犯罪被害者 メンタルケア研修	WEB のみ	11月27日(木) 11/6(木)～11/27(木)	¥15,000	小平市	40	金 吉晴 中島 聡美	
1月28日(水)～29日(木)	(第18回) 発達障害支援 医学研修	WEB 登録後 郵送	11月27日(木) 11/3(月)～11/24(月)	無料	小平市	60	稲垣 真澄 太田 英伸 軍司 敦子	

※最新情報は、ホームページにてご確認ください。

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所

平成26年度 研究報告会

(第26回)

プログラム・抄録集

平成25年度精神保健研究所 研究報告会 受賞者名

青申賞 (優秀発表賞)

・松本俊彦 (薬物依存研究部)

「精神科病医療機関における脱法ドラッグ関連患者の臨床的特徴」

若手奨励賞

・山内貴史 (自殺予防総合対策センター)

「わが国におけるがん診断後の自殺および他の外因死：前向き地域住民コホートを用いて」

・佐藤さやか (社会復帰研究部)

「重い精神障害をもつ者に対する認知機能リハと援助付き雇用の組み合わせによる就労支援」

平成27年3月9日(月)

国立精神・神経医療研究センター

教育研修棟 ユニバーサルホール1・2

平成26年度 国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所 研究報告会

会期：平成27年3月9日(月)

会場：国立精神・神経医療研究センター 教育研修棟ユニバーサルホール1・2

【開 会】 9:00～ 9:10 開会の辞 ご挨拶

【セッションI】
9:10～ 9:35 演題1 知的障害研究部
9:35～ 10:00 演題2 心身医学研究部
10:00～ 10:25 演題3 司法精神医学研究部

休憩 10:25～ 10:40

【セッションII】
10:40～ 11:05 演題4 社会復帰研究部
11:05～ 11:30 演題5 成人精神保健研究部
11:30～ 11:55 演題6 薬物依存研究部
11:55～ 12:10 写真撮影・連絡

12:10～ 13:10 退任記念講演

13:10～ 14:00 昼食

【セッションIII】
14:00～ 14:25 演題7 精神保健計画研究部
14:25～ 14:50 演題8 社会精神保健研究部
14:50～ 15:15 演題9 精神薬理研究部
15:15～ 15:40 演題10 児童・思春期精神保健研究部

休憩 15:40～ 15:55

【セッションIV】
15:55～ 16:20 演題11 精神生理研究部
16:20～ 16:45 演題12 災害時こころの情報支援センター
16:45～ 17:10 演題13 自殺予防総合対策センター

【閉 会】 17:10～ 17:20 閉会の辞
(後片付け・評価検討)
18:30～ 19:30 懇親会・表彰式 (教育研修棟多目的室)
(18:00開場)

平成26年度 精神保健研究所リサーチ委員会
伊藤弘人 太田英伸 嶋根卓也 立森久照 津村秀樹 渡 路子

お知らせとお願い

<発表者の皆様へ>

- 発表時間
各部の発表時間は、室長1名、流動研究員1名にて質疑応答を含む計25分間です。円滑な進行のため、発表者の交替も含めて各部25分の時間厳守をお願いいたします。
- 発表形式および発表用ファイルの仕様
発表にはリサーチ委員会が用意する Windows マシン(Powerpoint2010 対応)を使用いたします。発表者の持参機、Macintosh マシンの切り替え作業は行いません。Windows 版 Powerpoint での発表用ファイル作成をお願いいたします。なお、Powerpoint2013 以降で作成される場合には Powerpoint2010 との互換性が保証される形式で保存してください。発表用ファイルは各部1ファイルにまとめ、ファイル名は「01 災害時こころの情報支援センター.pptx (もしくは.ppt)」のように、演題番号(前頁参照)および研究部名としてください。
- 発表用ファイルの提出
発表用ファイルは、3月6日(金)までに社会精神保健研究部 伊藤 (ItoHiroto@ncmp.go.jp) と山縣 (wh-ito@ncmp.go.jp) までメール添付にてお送りください。ただし、動画・音声ファイルを使用される場合は伊藤、山縣まで一度ご連絡をいただき、ファイルをご持参後、動作確認をお願いいたします。

<歴長・会場係のお願い>

- 歴長は各部長先生にお願いいたします。スケジュールが非常にタイトですので、上記発表時間厳守での運営をお願いいたします。
- 会場係 (タイムキーパー・照明・マイク担当 3～5名) は、セッションごとにリサーチ委員の所属する部からのご協力をお願いいたします。

次の歴長、発表者は最前列にご着席になり、お待ちください。

<写真撮影に関するお願い>

午前中の発表が終了した段階 (11:55 目途) で、会場で記念写真撮影を行います。若手研究者の皆さんは、テーブルや椅子、機材等の移動等の手伝いをお願いいたします。

平成26年度 精神保健研究所 研究報告会
プログラム

9:00-9:10 開会の辞 総長 樋口輝彦
ご挨拶 所長 福田祐典

<< 発表 >>

9:10-9:35 知的障害研究部

座長 稲垣真澄

1: 発達性協調運動障害の日本語版アセスメントツールの構築

○北 洋輔¹⁾、鈴木浩太²⁾、平田正吾^{3,3)}、崎原ことえ⁴⁾、多辺田俊平⁵⁾、
中井昭夫⁶⁾、稲垣真澄¹⁾

1) 知的障害研究部

2) 千葉大学

3) 日本学術振興会

4) 帝京大学

5) 鳥田療育センターはちおうじ

6) 兵庫県立リハビリテーション中央病院

2: ADHD児における時間的定位置能の検討

○奥村安寿子、大森幹真、安村 明、北 洋輔、稲垣真澄
知的障害研究部

9:35-10:00 心身医学研究部

座長 安藤哲也

1: 日常生活下調査による食行動関連要因の包括的理解

～食事摂取に伴う心理状態の変化～

○菊地裕絵、安藤哲也

心身医学研究部

2: 過敏性腸症候群に対する認知行動療法の効果および実施可能性に関する研究

○大江悠樹^{1,2)}、倉 五月¹⁾、富田吉敏³⁾、有賀 元⁴⁾、天野智文⁴⁾、大和 滋⁴⁾、
堀越 勝⁵⁾、福土 審⁵⁾、菊地裕絵¹⁾、安藤哲也¹⁾

1) 心身医学研究部

2) 認知行動療法センター

3) センター病院心療内科

4) センター病院消化器科

5) 東北大学大学院医学系研究科行動医学

10:00-10:25 司法精神医学研究部

座長 岡田幸之

1: 精神科事前指示 (psychiatric advance directive) のあり方と

有用性に関する予備的検討

○藤井千代¹⁾、安藤 久美子¹⁾、渡邊 理²⁾、佐久間 啓²⁾、岡田幸之¹⁾

1) 司法精神医学研究部

2) 医療法人安積保育園 あさかホスピタル

2: 衝動性評価に関わる神経生理分類に関する研究

○菅雄崇弘¹⁾、安藤久美子¹⁾、津村秀樹¹⁾、中澤佳奈子²⁾、野田隆政²⁾、
岡田幸之¹⁾

1) 司法精神医学研究部

2) 国立精神・神経医療研究センター病院

10:40-11:05 社会復帰研究部

座長 伊藤順一郎

1: 認知機能リハビリテーションと援助付き雇用の効果と費用対効果；

無作為化比較臨床試験

○山口創生¹⁾、泉田信行²⁾、佐藤さやか¹⁾、下平美智代¹⁾、種田綾乃¹⁾、
伊藤順一郎¹⁾

1) 社会復帰研究部

2) 国立社会保険・人口問題研究所

2: 精神科領域におけるERP実践とスタッフのストレスレベル志向での支援態度；

スタッフ評価と利用者評価に基づく検討

○種田綾乃¹⁾、贅川信幸²⁾、山口創生¹⁾、佐藤さやか¹⁾、下平美智代¹⁾、
伊藤順一郎¹⁾

1) 社会復帰研究部

2) 日本社会事業大学

11:05-11:30 成人精神保健研究部

座長 金 吉晴

1: COMT Val158Met polymorphism interacts with sex to influence fear
conditioning and extinction in healthy humans

○栗山健一、吉池卓也、本間元康、池田大樹、金 吉晴

成人精神保健研究部

2: 日本語版感情表出尺度の信頼性および妥当性の検討

○林 明明¹⁾、河瀬さやか^{1,3)}、伊藤真利子¹⁾、大滝涼子^{3,4)}、金 吉晴^{1,4)}

1) 成人精神保健研究部

2) 東京女子医科大学附属女性生涯健康センター

3) 山梨大学

4) 災害時こころの情報支援センター

- 11 : 30-11 : 55 薬物依存研究部
 座長 和田 清
- 1 : 危険ドラッグの有害作用とその検出法に関する研究
 ○ 船田正彦、大澤美佳、和田 清
 薬物依存研究部
- 2 : 危険ドラッグの使用実態について:薬物使用に関する全国住民調査より
 ○ 邱 冬梅、和田 清、嶋根卓也
 薬物依存研究部
- 12 : 10-13 : 10 退任記念講演
- 14 : 00-14 : 25 精神保健計画研究部
 座長 竹島 正
- 1 : BaySDelect 法とクラスタ分析による精神病床からの退院発生
 相対リスクの時間推移のパターンによる都道府県分類
 ○ 立森久照^{1,2)}、加藤直広¹⁾、臼田謙太郎¹⁾、後藤基行¹⁾、下田陽樹¹⁾、
 竹島 正¹⁾
- 1) 精神保健計画研究部
 2) 統計数理研究所リスク解析戦略研究センター
- 2 : 妊娠中期の妊婦における精神疾患の有病率およびその関連因子に関する検討
 ○ 臼田謙太郎、西大輔、牧野みゆき、松岡 豊、佐野 養、嶋田秀仁、
 伊東宏裕、井坂恵一、立森久照、竹島 正
 精神保健計画研究部
- 14 : 25-14 : 50 社会精神保健研究部
 座長 伊藤弘人
- 1 : 独法病院における障害者虐待の防止ならびに差別解消に関する取り組みの状況
 ○ 堀口寿広¹⁾、高梨憲司²⁾、佐藤彰一³⁾
- 1) 社会精神保健研究部
 2) 社会福祉法人愛光
 3) 國學院大学法科大学院
- 2 : 人間ドック受診者における抑うつとメタボリックシンドロームに
 関する縦断研究
 ○ 大森由美^{1,2)}、宮地元彦³⁾、出浦喜丈³⁾、伊藤弘人¹⁾
- 1) 社会精神保健研究部
 2) 国立健康・栄養研究所
 3) 佐久総合病院
- 14 : 50-15 : 15 精神薬理研究部
 座長 山田光彦
- 1 : リゾホスファチジン酸シグナル伝達系の新規創薬ターゲット及び
 バイオマーカーとしての可能性についての検討
 ○ 斎藤顕直¹⁾、山田美佐¹⁾、塚越麻衣^{1,2)}、後藤玲央¹⁾、岡 淳一郎²⁾、
 樋口輝彦³⁾、山田光彦¹⁾
- 1) 精神薬理研究部
 2) 東京理科大学薬学部薬理学研究室
 3) 国立精神・神経医療研究センター
- 2 : リゾゾールの新規曝露療法併用薬としての可能性
 ○ 杉山梓^{1,2)}、斎藤顕直¹⁾、岡 淳一郎²⁾、山田光彦¹⁾
- 1) 精神薬理研究部
 2) 東京理科大学薬学部薬理学研究室
- 15 : 15-15 : 40 児童・思春期精神保健研究部
 座長 神尾陽子
- 1 : 自閉症スペクトラム障害の併存症スクリーニングツール開発に関する予備的検討
 ○ 石飛 信、原口英之、浅野路子、野中俊介、荻野和雄、高橋秀俊、神尾陽子
 児童・思春期精神保健研究部
- 2 : 我が国における、自閉症児に対する「応用行動分析による療育」の
 検証に関する研究
 ○ 原口英之、三宅篤子、石飛 信、高橋秀俊、神尾陽子
 児童・思春期精神保健研究部
- 15 : 55-16 : 20 精神生理研究部
 座長 三島和夫
- 1 : 睡眠延長による必要睡眠量と潜在的睡眠負債の推定
 ○ 北村真吾、中崎恭子、元村祐貴、片寄泰子、大場健太郎、勝沼るり、寺澤悠理、
 榎本みのり、守口善也、肥田昌子、三島和夫
 精神生理研究部
- 2 : 原発性不眠症患者における情動刺激観察時の脳活動
 ○ 元村祐貴、大場健太郎、寺澤悠理、野崎健太郎、綾部直子、北村真吾、
 肥田昌子、守口善也、亀井雄一、三島和夫
 精神生理研究部

- 16：20-16：45 災害時こころの情報支援センター
 座長 金 吉晴
- 1：DPAT体制整備状況と災害時精神医療体制について
 ○渡 路子、小見めぐみ、吉田 航、中神里江、小菅清香、金 吉晴
 災害時こころの情報支援センター
- 2：平成26年度DPAT関連研修について
 ○吉田 航、渡 路子、小見めぐみ、中神里江、金 吉晴
 災害時こころの情報支援センター
- 16：45-17：10 自殺予防総合対策センター
 座長 竹島 正
- 1：がん専門医へのコミュニケーショントレーニングの有効性の検討：
 無作為化比較試験
 ○藤森麻衣子¹⁾、白井由紀²⁾、浅井真理子³⁾、勝俣範之⁴⁾、久保田馨¹⁾、
 内高庸介⁵⁾
- 1) 自殺予防総合対策センター
 - 2) あそかピハラー病院
 - 3) 帝京平成大学
 - 4) 日本医科大学
 - 5) 国立がん研究センター
- 2：女性自殺既遂者の精神医学的および心理社会的特徴
 ○小高真美、松本俊彦、山内貴史、高井美智子、竹島 正
 自殺予防総合対策センター
- 17：10-17：20 閉会の辞
 精神保健研究所 所長 福田祐典
- 18：30-19：30 懇親会・表彰式（教育研修棟多目的室）

口頭発表
抄録

知的障害研究部

発達性協調運動障害の日本語版アセスメントツールの構築

○北洋輔¹⁾ 鈴木浩太¹⁾ 平田正吾^{2,3)} 崎原ことえ⁴⁾ 多辺田俊平⁵⁾
中井昭夫⁶⁾ 稲垣真澄¹⁾

1) 知的障害研究部 2) 千葉大学 3) 日本学術振興会 4) 帝京大学
5) 島田療育センターはちおうじ 6) 兵庫県立リハビリテーション中央病院

【背景】 発達性協調運動障害 (Developmental Coordination Disorder, DCD) は、協調運動や粗大運動に支障をきたす発達障害である。発達障害者支援法が施行されて 10 年が経過したわが国では自閉症スペクトラム障害、注意欠如・多動性障害、学習障害への関心が強まった一方、運動症状を示す発達障害、例えば DCD への注目は未だ乏しい。運動系の困難度の詳細な評価に基づく DCD 診断と治療は、子ども達の健やかな発達の保証のために重要と考える。そこで我々は、小児の運動機能の定量的な評価バッテリー Movement Assessment Battery for Children-Second Edition (MABC2) をわが国に導入し、DCD の客観的診断につながるアセスメントツールの標準化を目指す研究に着手した。

【方法】 DCD の診断において世界的な標準検査として用いられている MABC2 を、定型発達小児 213 名 (4-10 歳, 男児 121 名) に施行した。本課題は、『手先の器用さ』『ボール運動』『粗大運動・パランス』の 3 つの主要領域 (全 8 検査項目) から構成される個別実施検査であり、英国やその他の国で標準化されている。各児に MABC2 を実施し、海外で発表されている基準値を参考に、日本人小児の特性を検討するとともに、性差・年齢変化等を検証した。

【結果】 全例に実施することが可能であり (実施実現性=100%)、一人あたりの所要時間は 30 分程度であった。『手先の器用さ』および『粗大運動・パランス』は、英国人小児の基準値に比して、日本人小児が有意に高得点であった ($p < .000$)。また中年齢群 (7-10 歳) では、男児に比して女児がこれら 2 領域において有意に高得点であった ($p < .05$)。一方、低年齢群 (4-6 歳) では、『手先の器用さ』のみ、女児に比して男児の得点が高い傾向を示した。

【考察】 英国人小児に比して、日本人小児が利き手、非利き手ともに巧緻性や粗大運動・パランスが優れていることが示され、運動機能における文化差が示唆された。また、児童期初期では、女児の方が優れているという性差も認められ、男児の優れている体力や俊敏性といった一般的な運動能力と、DCD に関わる運動機能を分けて評価する必要性が改めて認められた。

これらの知見から、本邦において MABC2 の標準化を進めるにあたっては文化差や性差を考慮する必要があること、ならびに併存発達障害 (ASD や ADHD) を考慮した運動機能の定量評価・診断システムの構築・整備することが求められる。今後は、発達障害児への検査適応可能性や特徴の抽出など進めていきたいと考える。

知的障害研究部

ADHD 児における時間的定位置能の検討

○奥村安寿子・大森幹真・安村明・北洋輔・稲垣真澄

【序論】 注意欠陥・多動性障害 (Attention Deficit Hyperactivity Disorder, ADHD) は、不注意、多動/衝動性を中核症状とする発達障害である。ADHD の認知・行動上の困難に関わる要因の一つとして時間情報処理障害が指摘されており、刺激持続時間の弁別・再生・推測における成績低下が示されている (Toplak et al., 2006)。時間情報処理が関わる認知機能に事象の予想生起時点に自発的に注意を向け、行動を最適化する時間的定位置能があるが (e.g., Coull & Nobre, 1994), ADHD における特異性はこれまで検討されていない。そこで本研究では、刺激提示時点を予告する先行手がかり法を用いて ADHD 児における時間的定位置能の特徴を明らかにし、SNAP-IV (Inoue et al., 2014) による行動評価との関連性を検討することを目的とした。

【方法】 ADHD 児 17 名 (M=13.2 歳, 9.9-16.4 歳, 男児 14) が参加し、対照群は定型成人 10 名 (M=24.3 歳, 20-32 歳, 男性 3) とした。参加者は、先行手がかり (図形, 持続時間 100 ms) に就いて提示される標的 (絵) に対し単純検出課題を行った。このとき、先行手がかりと標的の時間間隔 (stimulus onset asynchrony, SOA) が一定の Predictable 条件と不定の Unpredictable 条件を設定し、標的出現時点の予測性を操作した。両条件は手がかりの色で区別され、ランダム順に提示された。Predictable 条件の SOA は Short (300 ms) と Long (1400 ms) の 2 種類とし、ブロック別に提示した。Unpredictable 条件の SOA は 200-1500 ms でランダムであった。

【結果】 Table 1 に標的検出の反応時間、および標的出現以前に生じた尚早反応の割合を条件別に示した。反応時間は群と SOA によらず Predictable 条件で Unpredictable 条件より短縮し ($F(1,25)=72.87, p<.001$), ADHD 児において刺激出現への時間的定位置能が成人と同様に生じることが示された。ただし ADHD 児のみ Unpredictable 条件の尚早反応が Short SOA で Long SOA より増加しており ($F(1,16)=27.68, p<.001$), 手がかり直後への定位置能が優勢であるときに (Short SOA ブロック), それを抑制することが困難であると考えられた。さらに ADHD 群内では、SNAP-IV の不注意得点が高いほど Short-Predictable 条件における反応時間が延長し ($r=.56, p<.03$), 尚早反応率が減少していたことから ($r=-.53, p<.03$), 不注意特性は先行手がかりに基づく行動準備・生成の遅延と関連することが示唆された。

【結論】 ADHD 児の行動遂行は時間的定位置能により向上するが、定位置能の調節において弱さがあることが示唆された。従って、ADHD 児の行動支援において活動や課題提示時点の予告は有効と考えられるが、タイミングの変動や準備時間の設定には考慮が必要と思われる。

Table 1. Behavioral performances (standard errors in parentheses)

Measures	Condition	ADHD		Adult	
		Short	Long	Short	Long
Reaction Time (msec)	Predictable	257 (11)	253 (7)	235 (14)	240 (10)
	Unpredictable	277 (9)	300 (8)	266 (8)	279 (10)
Anticipatory response (%)	Predictable	6.7 (1.0)	10.9 (2.1)	3.5 (1.3)	4.0 (1.6)
	Unpredictable	13.7 (1.7)	4.4 (1.2)	2.5 (0.9)	1.3 (0.8)

日常生活下調査による食行動関連要因の包括的理解 ～食事摂取に伴う心理状態の変化～

○菊地 裕絵, 安藤 哲也

心身医学研究部心身症研究室では、日常生活下調査を中心に用いて、心身症や摂食障害における病態および病態生理の解明や評価法の開発、日常生活下調査の方法論的検討などを進めており、そのひとつとして日常生活下における食行動関連要因の心理社会的な包括的理解に取り組んでいる。

食事摂取の心理的効果については、これまでに気晴らし食い (emotional eating) や食べすぎとの関連で研究が行われてきたが、その多くは実験環境下での研究であった。近年、生態学的妥当性を高めるという目的から日常生活下調査の重要性が提唱されており、日常生活下での食行動についても、行動のみならず栄養学的評価も可能にするような記録システムが開発されてきている。そこで上記研究の一環として、日常生活下調査データを用いて、食事摂取前後での心理状態の変化について、各栄養素摂取量との関連を明らかにすることを目的として解析を行った。

対象は精神疾患を併存しない普通体重成人 15 名 (女性 13 名男性 2 名; 年齢 38.7 ± 10.9 歳) と肥満成人 6 名 (女性 4 名男性 2 名; 年齢 34.7 ± 7.9 歳) である。被験者は 2 週間スマートフォンを携帯し、食事摂取前後を含む 1 日 10 回前後、入力時点における心理状態について入力を行った。またスマートフォン上の食事記録評価システムを用いてすべての飲食物の摂取量について摂取のつど記録を行った。このシステムによりエネルギー・炭水化物・脂質の摂取量が自動的に計算されデータが蓄積された。食事摂取前後のストレス・不安・抑うつ気分・肯定的気分・否定的気分の変化を従属変数とし、各食事摂取のエネルギー・炭水化物・脂質のいずれかの摂取量を独立変数とした単変量モデルについてマルチラベル解析により解析した。

その結果、肯定的気分はエネルギー摂取量 ($p = 0.03$, after Bonferroni correction) と正の関連を認めた。すなわち、エネルギー摂取量が多いと、食事摂取に伴い速やかに生じる肯定的気分の増加が大きいという定量的関係を認めた。今後食事の状況 (間食か否か、外食かどうかなど) や個人要因 (普通体重か肥満かなど) による違いについても検討を行い、今回認められた関係が環境や個人要因によって違いがあるのかどうか、またこのような関係を認めることが肥満や食行動異常に関連するのかどうかについても明らかにしていきたい。

過敏性腸症候群に対する認知行動療法の効果および 実施可能性に関する研究

○大江悠樹¹⁾²⁾, 倉 五月¹⁾, 富田吉敏³⁾, 有賀 元⁴⁾, 天野智文⁴⁾,
大和 滋⁴⁾, 堀越 勝²⁾, 福土 審⁵⁾, 菊地裕絵¹⁾, 安藤哲也¹⁾

1) 心身医学研究部, 2) 認知行動療法センター, 3) センター病院心療内科, 4) センター病院消化器科, 5) 東北大学大学院医学系研究科行動医学

【背景と目的】過敏性腸症候群 (Irritable Bowel Syndrome: IBS) は腹痛とそれに関連する便通異常を特徴とする代表的な心身症のひとつである。我が国の有病率は 14% と報告され頻度が高い。生活の質 (Quality of Life: QOL) や生活機能を著しく低下させ、経済的損失や医療資源へ負荷が大きき。海外やわが国でも認知行動療法 (Cognitive Behavioral Therapy: CBT) が治療抵抗性の IBS に対する治療オプションとして推奨されているが、我が国で有効性を検討した実証研究はほとんどない。そこで我々は Craske ら (2011) による CBT プロトコル (CBT-IE) のわが国における実施可能性を検討することを目的に研究を行った。

【方法】研究デザインは単群の前後比較研究、対象は Rome III の診断基準を満たす中等症以上の IBS 患者である。原著者の協力のもと CBT-IE の日本語版を作成して介入を行った。CBT-IE は、内部感覚曝露や注意訓練などの介入を特徴とする、1 回 50 分全 10 回からなる治療プログラムで介入期間は 16 週間とした。主要評価項目として IBS 症状の重症度の指標 IBSSI、腹部症状に関する不安の指標 VSI を、副次評価項目として IBS 疾患特異的 QOL、抑うつ・不安などを測定した。なお、本研究は国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を受け、被験者から書面によるインフォームドコンセントを得て実施された。

【結果】目標に対して 15 例をエントリーし 10 例で介入を終了した。介入後評価まで終了した 8 名 (男性 5 名、女性 3 名、平均年齢 41.1 ± 15.4 歳) について、測定時期 (介入前、中間時、介入後) を独立変数、各評価項目を従属変数とする 1 要因 3 水準の反復測定分散分析を行った。測定時期の主効果が有意となった変数については続けて Bonferroni 法による多重比較を行った。その結果、主要評価項目である IBSSI (腹部症状の重症度)、VSI (腹部特異的な不安) のいずれも介入前に比べ介入後で改善が認められた (IBSSI: $t(7) = 2.70, p = .031$, $Cohen's d = 1.34$, VSI: $t(7) = 4.34, p = .003, d = 1.30$)。また、副次評価項目である抑うつ、不安、生活の質についても、介入前に比べて介入後で有意な改善が認められた。ITT 分析では 10 例中 7 例 (70.0%) が介入後評価における GIS で治療反応を示した (“1.非常に悪くなった” ~ “7.非常に悪くなった” のうち 1 または 2 と回答)。なお、介入期間を通して有害事象は発生していない。

【結論】介入による有害事象は認められず、症状や QOL の改善が認められたことから、本プロトコルは我が国でも安全に実施可能かつ一定の治療効果を持つと考えられる。さらに症例を重ねるとともに、フォローアップ評価の結果も踏まえて治療効果を確認していく必要がある。今後テキストとプロトコルを洗練させ、RCT の実施を目指す。

精神科事前指示(psychiatric advance directive)のあり方と
有用性に関する予備的検討

- 藤井 千代¹⁾、安藤 久美子¹⁾、渡邊 理²⁾、佐久間 啓²⁾、岡田 幸之¹⁾
 1) 司法精神医学研究部 2) 医療法人安積保養園 あさかホスピタル

【背景と目的】

精神障害を有する人が、自身の判断能力が低下したときの対応に関して判断能力があるときに指示しておくこと、またはその内容を精神科事前指示(Psychiatric Advance Directives、以下 PADS)という。PADs は精神症状により判断能力が一時的に失われた場合でも本人の自己決定権を最大限に尊重した医療を提供するための方法であり、米国では約半数の州で法制化されている。本研究は、我が国の精神科臨床現場において PADs を取り入れる際の PADs の作成方法および指示すべき指示内容を提案することを目的とする。

【方法】

- ① 米国で用いられている PADs を参照し、日本語版 PADs の原案を作成する。
 - ② 非自発的入院の既往があり、病状が安定している精神障害者（バーンナリテイ障害、病状が不安定な者、同意判断能力のない者を除く。）4 名および病院または地域における経験年数 3 年以上の精神科医療福祉従事者 3 名に対して日本語版 PADs の原案を提示し、PADs の内容および作成方法に関する意見を聴取する。
 - ③ ②で得られた意見を踏まえて日本語版 PADs 改訂版を作成し、意見聴取の対象者から再度フィードバックを得たうえで事後の研究に用いる日本語版 PADs を完成させる。
- 本研究は国立精神・神経医療研究センターおよびあさかホスピタルの倫理委員会の承認を受け実施した。

【結果】

対象者全員が PADs 作成の意義を理解し、PADs を精神科臨床で用いることに賛同した。うつ病で入院を繰り返している対象者は、PADs の意義を認めながらも自身の PADs 作成は望まなかった。対象者全体の意見を集約し、PADs は本人の担当スタッフとの話し合いにより作成し、指示内容は①代諾者の指示（複数名）、②希望する治療・処置および希望しない治療・処置とその理由、③入院したい病院および入院したくない病院とその理由、④入院したときに自分の代わりにしてほしいことおよびしてほしくないこと から本人が希望する項目について指示することが望ましいという合意が得られた。

【考察】

我が国においても必要に応じて PADs を用いることにより精神障害を有する人の自律性尊重に寄与する可能性が示唆された。今後は、本研究で作成した日本語版 PADs の有用性に関して多数例で検討する予定である。

衝動性評価に関わる神経生理分類に関する研究

- 曾雌崇弘¹⁾、安藤久美子¹⁾、津村秀樹¹⁾、中澤佳奈子²⁾、
野田隆政²⁾、岡田幸之¹⁾

- 1) 司法精神医学研究部、2) 国立精神・神経医療研究センター病院

【背景】最近の衝動性関連研究の方向性の一つとして、「神経予測 (Neuro-prediction)」や「神経分類 (Neuro-classification)」がある (Aharoni et al., 2013; Steele et al., 2013)。例えば、Steele ら(2013) は、行動抑制に関わる脳電位活動を記録し、物質乱用治療の完遂について予測研究を行っている。これらの研究の共通点は、行動表出に関わる脳活動を問題行動のリスクアセスメントに活用している点である。このような神経分類器の特定の目的には、どのような脳活動をどの程度用いれば、正確な分類が可能であるかを把握する必要がある。上記の研究が用いている脳活動は、衝動性行動の回避に関わる抑制機能 (Bari & Robbins, 2013) である。一方で、行動抑制が機能するまでには、反応刺激入力後約 0.3 秒の時間を要するが、それ以前の前注意的活動も衝動性に関連するという報告もなされている (Lijffijt et al., 2012)。本発表では、行動抑制機能を中心に、感覚入力から抑制エラー修復過程までの時系列的行動モデルに基づいた実験と、分類器作成までを含めた報告を行う。最初に、抑制課題における脳波データと複合課題の結果を示し、最後に、抑制課題の脳活動を用いた分類器について報告する。

【方法】健康成人 25 名が参加した (女性 16 名、男性 9 名; 30 ± 9.8 歳)。被験者は、行動抑制課題を含め、複数の課題を行った。脳波は 6 頭皮電極から記録した。行動抑制に関しては、N200 と P300 の事象関連電位を調査対象とした。他の課題は、聴覚性誘発電位、視覚的逸脱電位、エラー関連電位などを対象とした。行動特性指標として、衝動性 (BIS-11, BIS/BAS) と攻撃性 (Buss-Perry) を含めた質問紙の回答を得た。脳波解析方法は、一般的な加算平均法を用いているが、課題に応じて脳活動成分の分離を行った。眼球運動ノイズは、単一試行ごとに除去している。

【結果】抑制課題では、先行研究と同じく、双極性の脳活動 (N200, P300) が反応抑制時に現れた。N200、P300 は衝動性評価、攻撃性評価とそれぞれ相関関係がみられ、先行研究と一致した (Bartholow et al., 2006)。他の課題は衝動性評価と相関し、遅い活動的に行動特性との関係を調べてみると、より早い活動は衝動性評価と相関し、遅い活動は攻撃性評価と相関する傾向が見られた。抑制関連脳活動とサポータベクターマシンのを用いて、行動特性高底群 (n = 24) の分類器の作成を試みたところ、P300 とエラー一直後の N200 を用いた分類器が比較的高い精度 (cross-validation: 75%) を持っていた。今後は、対象群に応じて、分類に有効な脳活動を個別に特定していくことや分類器の汎化が課題になると考えられる。

社会復帰研究部

認知機能リハビリテーションと援助付き雇用の

効果と費用対効果：無作為化比較臨床試験

○山口創生、泉田信行（国立社会保障・人口問題研究所）、佐藤さやか、

下平美智代、種田綾乃、伊藤順一郎

【目的】

認知機能リハビリテーション（認知リハ）と援助付き雇用のセットとした支援プログラムの効果および費用対効果を検証するために、無作為化比較臨床試験を実施した。

【方法】

国内6つの医療機関とその連携機関が研究協力機関となった。研究対象者は、以下5つの基準を満たす者であった：1) 研究協力施設に外来通院中、2) 主診断が統合失調症、双極性障害、大うつ病、3) 20-45歳、4) 就労を希望している、5) 一定の認知機能障害を有する。111名が無作為割付けの対象となり、中断や死亡ケースを除く92名（介入群：45名、対照群47名）が分析対象となった。就労アウトカムとコストデータは、モニタリングシートと日本版クライエント・サービス受給票、レポート、サービスコード票および職場開始記録票からデータを把握した。平均コストの比較には、初月のコストを調整したbootstrap regression modelを用いた。それぞれの群の就労率および平均就労期間と平均コストから、incremental cost effective ratio (ICER) を算出し、cost-effectiveness planeを用いて、費用対効果を把握した。本研究は、国立精神・神経医療研究センター (A2011-024) の承認を受けている。

【結果】

認知リハと援助付き雇用の就労率は62% (28名) であり、従来の支援では19% (9名) であった ($\chi^2=17.7, P<0.001$)。各群の平均就労期間は、それぞれ78.6日 (sd=88.4)、24.9日 (sd=66.3) であった。介入群の平均コストは116万8,963円 (所得保障費含む：180万9,616円) であり、対照群は134万0,352円 (社会保障費含む：175万1,069円) であった。両群の平均コストに有意な差はなかった ($\beta=14$ 万1,951円, 95%CI=-51万2,553円 to 22万8,652円, $p=0.453$)。他方、入院のコストにおいては、両群に大きな差があった (介入群：6万6,640円、対照群：42万5,820円, $\beta=-35$ 万9,180円, 95%CI=-71万5,209円 to -3,151円, $p=0.048$)。就労率のICERは-3,423円であり、平均就労期間のICERは-2,747円であった。それぞれのICERはcost-effectiveness planeにおける優位 (dominant)：効果が高く、コストが安い) に位置した。

【考察】

従来の就労支援と比較し、認知リハと援助付き雇用は利用者に高い就労率や長い就労期間をもたらすだけでなく、入院を防止する効果が期待されるが、コストに統計的な有意差はない。すなわち、認知リハと援助付き雇用は費用対効果の高い実践と判断できるかもしれない。

社会復帰研究部

精神科領域におけるEBP実践と
スタッフのストレス志向での支援態度
：スタッフ評価と利用者評価に基づく検討○種田綾乃、費川信幸（日本社会事業大学）、山口創生、佐藤さやか、
下平美智代、伊藤順一郎

【目的】

精神保健福祉領域のEBP実践（多職種アウトリーチ、認知機能リハビリテーション）個別就労支援による介入が臨床スタッフのストレス志向の支援態度に及ぼす影響をサービス利用者の視点から把握すること、および、スタッフ側と利用者側の視点による一致の程度を確認し、今後の支援関係の質の向上のための知見を得ることを目的とした。

【方法】

国内4つの医療機関において、「多職種アウトリーチ」もしくは、「認知機能リハビリテーション（認知リハ）+個別就労支援」による介入研究への参加者を対象とし、研究への参加1年後の経過時に、①介入群および対照群に割り付けられたサービス利用者（精神障害をもつ当事者）を対象とした無記名自記式調査（以下、利用者版評価）、および、②介入群の支援にあたるスタッフを対象とした無記名自記式調査（以下、スタッフ版自己評価）を実施した（いずれも配付郵送法により実施）。

調査項目は、スタッフ版自己評価では、既存のストレス尺度（費川, 2012）を使用し、利用者版評価では、既存のスタッフ版尺度を参考にして作成した10項目を使用した。調査にあたり、国立精神・神経医療研究センター (A2012-085) の承認を得た。

【結果】

介入種別による比較検討では、介入群の利用者では介入種別での有意差は見られず、対照群の利用者において、「認知機能リハ+個別就労支援」の方が有意に高得点であった ($p<.05$)。また、スタッフ版評価では、「認知機能リハ+個別就労支援」のスタッフの方が「多職種アウトリーチ」に比べ、実施度・自信度ともに得点が高かった ($p<.05$)。

「多職種アウトリーチ」の利用者版評価では、介入群は対照群に比べ総得点が高かった ($p<.01$)、「認知機能リハ+個別就労支援」では、介入有無による差異は見られなかった。利用者版評価とスタッフ版自己評価との項目得点の比較では、利用者の方が有意に高評価である項目（クライシスプランの共同作成、支援計画の共同作成）やスタッフの方が有意に高評価の項目（スタッフ自身の自己開示、地域における支援活動の実施）が確認された。

【考察】

多職種アウトリーチ支援では、特に「クライシスプランの共同作成」「スタッフ自身の自己開示」の点で、介入によるストレス視点での支援態度が示されることが明らかになった。一方、「認知機能リハ+個別就労支援」の実践では、対照群においても介入群と同様の支援態度が保たれていたことから、介入の有無による差異は見られなかったものの、多職種アウトリーチ支援の介入の利用者と同程度のストレス尺度支援態度が確保されていることが確認された。また、EBP実践により、通常の精神科医療と同程度、もしくはそれ以上のストレス志向ともつづいた支援が提供された状況においても、利用者はスタッフとの相互理解・信頼関係の構築や、地域をベースにした支援活動の実施等の側面でも、スタッフの意識以上にストレス志向による支援を希求している状況も推察された。

COMT Val158Met polymorphism interacts with sex to influence fear conditioning and extinction in healthy humans

○栗山健一, 吉池卓也, 本間元康, 池田大樹, 金 吉晴

The acquisition and extinction of conditioned fear underlies the pathophysiology of anxiety disorders, including PTSD. Women have higher lifetime prevalence and greater risk of PTSD than men. Such sex differences may be attributed to a combination of genetic and hormonal factors. The catechol-O-methyltransferase (COMT) gene encodes an enzyme that metabolizes catechol compounds including dopamine. The COMT Val158Met polymorphism affects the enzymatic activity of dopamine and has been associated with altered fear memory performance. Besides, when estrogen secretion is elevated, women show a greater extinction of conditioned fear than men due to the facilitation of dopamine secretion by estrogen. Here, we investigated the relationship between the COMT genotype and sex in the acquisition and extinction of conditioned fear. In a 3-day cued fear conditioning experiment, acquisition and extinction performance of 75 healthy men (21.8 years) and 45 healthy women in follicular phase (21.2 years) were examined. Visual cues and electric shocks were used as the conditioned stimulus and unconditioned stimulus, respectively. Subjects with Met/Met homozygotes showed less fear acquisition ($p < .0001$). Female Val carriers showed greater extinction ($p = .009$) and less reconsolidation ($p < .0001$) than male Val carriers. Women with Val/Val homozygotes were less affected by a reinforcing stimulus than men with Val/Val homozygotes ($p = .0001$). These findings suggest a clear interaction between the COMT gene and sex in fear memory function, and that women have a greater tolerance for aversive experiences than men. Higher estrogen levels mediate increased dopaminergic activity, potentially optimizing the prefrontal function known to contribute to the fear-related symptomatology of PTSD.

日本語版感情表出尺度の信頼性および妥当性の検討

○林 明明¹⁾、河瀬さやか¹⁾²⁾³⁾、伊藤真利子¹⁾、大滝涼子³⁾⁴⁾、金 吉晴¹⁾⁴⁾
¹⁾ 成人精神保健研究部 ²⁾ 東京女子医科大学附属女性生涯健康センター
³⁾ 山梨大学 ⁴⁾ 災害時こころの情報支援センター

【目的】感情の表出とは、顔表情・声・ジェスチャーなど様々な方法で、感情を外へ向けて表現することである(Kring et al., 1994)。感情を表出することは、身体的健康やウェルビーイングを向上させることが報告されている(Smyth, 1998)。本研究では、海外でよく使用される感情表出の質問紙尺度である Emotional Expressivity Scale (EES; Kring et al., 1994)および Berkeley Expressivity Questionnaire (BEQ; Gross & John, 1995) の日本語版を作成し、それらの信頼性・妥当性を検討した。

【方法】EES および BEQ の原版著者から許可を得た後、バックトランスレーションの手続きを経て日本語版 EES および日本語版 BEQ を作成した。学生: 504 名(男性 252 名・女性 252 名、平均年齢 20.5 歳)を対象に、日本語版 EES、日本語版 BEQ、日本語版 Social Skills Inventory より情緒的表現性尺度(BE)、Courtald Emotional Control Scale (CECS) 日本語版、NEO-FFI、セルフ・モニタリング尺度(SMS)、CES-D、Rosenberg の自尊感情尺度(SES)についてオンラインの調査を実施した。約 1 ヶ月後に 241 名が 2 回目の日本語版 BEQ に回答した。本研究は国立精神・神経医療研究センター倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果・考察】日本語版 EES 全体の Cronbach の α 係数は .84 であり、1 ヶ月後の再検査信頼性の相関係数は .61 であった。高い内的整合性および再検査信頼性が得られた。日本語版 BEQ 全体の Cronbach の α 係数は .83 であり、1 ヶ月後の再検査信頼性の相関係数は .61 であった。下位尺度の Positive Expressivity・Negative Expressivity・Impulse Strength の α 係数はそれぞれ .71、.61、.75、再検査信頼性の相関係数は .61、.59、.57 であった。おおむね満足できる内的整合性および再検査信頼性が得られたが、今後さらなる検討が必要である。同時に実施した尺度である BE、CECS、NEO-FFI、SMS、CES-D、SES との相関を求めることにより、日本語版 EES・日本語版 BEQ および BEQ の下位尺度には十分な収束的妥当性・弁別的妥当性があることを確認した。また、情緒的表現性を示す EE と日本語版 EES では高い正の相関が得られ($r = .71, p < .01$)、日本語版 BEQ 全体では中程度の有意な正の相関が得られた($r = .51, p < .01$)。感情の抑制を示す CECS と EES の相関($r = -.49, p < .01$)は、CECS と BEQ 全体の相関($r = -.25, p < .01$)よりも高かった。全体的な感情の表出傾向を測定したい場合は、日本語版 EES を使用するほうが妥当性が高いと示唆された。一方、日本語版 BEQ は下位尺度に分かれていてことに利点があり、下位尺度ごとに感情表出の異なる面を測定することが可能である。感情の表出を多面的に測定したい場合には、日本語版 BEQ を使用すると良いと考えられる。

危険ドラッグの有害作用とその検出法に関する研究

○船田正彦 大澤美佳 和田 清

【目 的】危険ドラッグ(いわゆる脱法ドラッグ)乱用に基づく事件や事故が多発しており、大きな社会問題となっている。流通している危険ドラッグを解析すると、大麻の精神活性物質である Δ^9 -tetrahydrocannabinol (THC) と類似の作用を示す合成カンナビノイドが検出される。合成カンナビノイドは多数の類似化合物が合成されており、規制と流通の「いちごっこ」が続いている。合成カンナビノイドにより発現する中枢作用をより迅速に評価し、危険性を推測するシステム構築が重要となっている。この合成カンナビノイドは既存の乱用薬物検出キットでは検知されず、その検出には精密分析機器が必須である。機器分析において、危険ドラッグの構造決定までは数週間の時間を要するため、この分析時間を適切に確保するための工夫が必要となっている。また、危険ドラッグ急性中毒が疑われる場合の原因薬物の特定および店舗等における取り締まり時の検査などに、危険ドラッグの簡易検出法の確立が急務となっている。本研究では、合成カンナビノイドの作用点であるカンナビノイドCB₁受容体に着目し、行動薬理学的試験法およびカンナビノイド受容体発現細胞を利用して、合成カンナビノイドの検出システムの確立を試みた。

【方 法】行動薬理学的試験：ICR 系雄性マウス(20-25g)を使用し、CP-55,940(1mg/kg)を5日間投与し、カンナビノイド受容体拮抗薬 AM251 後の退薬症候の観察を行った。カンナビノイド受容体作用の解析：ヒト CB₁ 受容体発現安定細胞株 CHO-CB₁ 細胞を利用して、合成カンナビノイド処置による細胞内カルシウム濃度の変動を測定した。

【結 果】合成カンナビノイドである CP-55,940 の慢性処置後、カンナビノイド受容体拮抗薬を投与したところ、著しい跳躍行動および立ち上がり行動などの退薬症候が発現した。CHO-CB₁ 細胞を利用して、CB₁ 受容体に対する作用を検討した。合成カンナビノイドの添加により蛍光強度は増加し、この効果は CB₁ 受容体拮抗薬 AM251 の前処置により完全に抑制された。また、CP-55,940(10 μ M)慢性処置後 AM251 を添加したところ一過性の蛍光強度の増加が確認された。

【考 察】本研究から、合成カンナビノイドは身体依存形成能を有することが明らかになった。また、CHO-CB₁ 細胞による解析により、合成カンナビノイドの存在を蛍光発光により、検出できることが明らかになった。CHO-CB₁ 細胞による検出方法は、合成カンナビノイド同定のための一次スクリーニング法として有用であると考えられる。また、CHO-CB₁ 細胞に合成カンナビノイドを長時間添加し、カンナビノイド受容体拮抗薬を処置することにより発現する一過性の反応は、いわゆる「退薬症候」と考えられることが可能であり、本評価系は薬物依存モデルとして応用できるものと考えられる。培養細胞を利用した合成カンナビノイドの毒性評価は、迅速かつ高感度な評価方法として有用である。報告会では、現在解析中の合成カンナビノイドの有害作用についても報告する予定である。

危険ドラッグの使用実態について

—薬物使用に関する全国住民調査より—

○邱 冬梅、和田 清、嶋根卓也

【背景・目的】近年、東京、池袋で危険ドラッグを吸引した運転手が暴走し8人が死傷した事件をはじめ、危険ドラッグによる事件が相次ぎ、危険ドラッグに対する国民の関心が高まっている。しかし、我が国全体の我が国における乱用状況を把握することはない。そこで本研究では危険ドラッグの我が国における乱用状況を把握することを目的とした。

【方法】2013年10月17日～27日までに住民基本台帳から層化二段無作為抽出法により選ばれた全国350地点の15-64歳の5,000人に対し、戸別訪問調査による自記式調査を実施した。なお、本研究は国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得た。

【結果】回答が得られた2,948(回収率59.0%)人中、有効回答数は2,926(有効回答率58.5%)であった。男性の割合は46.8%であった。危険ドラッグの生涯経験率は0.4%(12名)であり、覚せい剤(0.5%)よりも低く、MDMA(0.3%)よりも高かった。身主に危険ドラッグ乱用者がある割合(周囲乱用率)は0.8%であり、大麻(0.9%)に次いで高かった。危険ドラッグによる健康被害を理解している割合(害周知率)は、全体の61.5%にとどまり、覚せい剤(82.1%)や大麻(74.3%)に比べ低かった。危険ドラッグ経験者12人(男:8人、女:4人)の平均年齢は33.8歳±8.1歳であり、今回調べた7種類の薬物使用者の中で最も若かった。使用された危険ドラッグを形状別にみると、ハーブ系(58.3%)、リキッド系(50.0%)、パウダー系(33.3%)の順で高かった。男性はハーブ系が最も多いのに対して、女性はリキッド系が最も多かった。危険ドラッグ経験者は、大麻との併用率が高率であった(75.0%)。危険ドラッグの害周知率は、使用群(83.3%)と非使用群(62.1%)との間で有意な差は認められなかった($p=0.23$)。一方、危険ドラッグの周囲乱用率は、非使用群(0.7%)に対して、使用群(25.0%)の方が有意に高かった($p<0.01$)。

【考察】本調査研究は、地域住民における危険ドラッグ乱用状況の詳細を明らかにした国内の初めての試みと言える。危険ドラッグ乱用者は年齢が若く、大麻との併用率が高いという特徴がみられた。危険ドラッグはインターネットを通じて入手しやすいことや、覚せい剤等に比べて安価であることが、若年層の間で乱用されている原因である可能性が示唆された。また、危険ドラッグに含まれる有害成分の一つとして知られる合成カンナビノイドが知られているが、大麻成分に似た作用を期待して使用することが、大麻との併用率の高さを反映している可能性があると考えられる。今回の調査では、危険ドラッグ使用者と非使用者との間で、害周知率の差がみられなかったことを踏まえると、教育現場等で、危険ドラッグ防止教育を進めていく上で、害の知識を伝えるだけの健康教育では十分な効果が期待できない可能性があらわ。したがって、身近な友人や知人からの誘いを断るような、実践的な教育を取り入れていくことが必要であろう。

BaySTDetect 法とクラスタ分析による精神病床からの退院発生 の

相対リスクの時間推移のパターンによる都道府県の種類

- 立森久照^{1,2}, 加藤直広¹, 白田謙太郎¹, 後藤基行¹, 下田陽樹¹, 竹島正¹

¹ 精神保健計画研究部, ² 統計数理研究所リスク解析戦略研究センター

小地域データの時空間モデリングにおいて、時間的に通常と異なるパターン (unusual temporal patterns) の地域の検出に関心がある場合がある。政策評価の領域を例にとり全国規模の施策によって現状をある方向に変化させることを目的とした場合を考える。第一に関心があるのは全国が意図した方向に変化しているからであろう。それが確認できた場合に次に関心があるのは、各地域を、全国と同じように変化した地域、全国の変化から取り残されている地域、全国以上に変化した地域などに分類することではないだろうか。今回我々は、ベトナムモデル選択による時間的に通常とは異なるパターンの検出法である BaySTDetect 法 (Li et al., 2012) とクラスタ分析を組み合わせることで、精神病床からの退院発生数の相対リスクの時間推移 (トレンド) による都道府県 (以下、県) の分類を試みた。使用したデータは精神保健福祉資料による 2002 年から 2011 年までの県ごとの 6 月中の退院の発生件数と 6 月 30 日現在の在院患者数である。解析には R 3.0.2 と WinBUGS 1.4.3 を用いた。結果として、47 県中 27 の県は相対リスクのトレンドが互いに類似していると考えられた。これら 27 の県の相対リスクは極端かに増加する傾向にあった。また残りの 20 の県はトレンドがそれぞれ異なっていると考えられた。さらに、この 20 の県の傾向を把握するため、その推定値を確認したところ、これらの県の中でもお互いにトレンドが異なっていたことが確認された。そこでそれらを類似したトレンドを持つ県に分類するためクラスタ分析を行った。その結果、退院の相対リスクが増加傾向にある 10 の県からなるクラスタと相対リスクが減少傾向にある 10 の県からなるクラスタの 2 つに分類された。増加傾向にある都道府県については地理的な偏りは見られなかった。一方、減少傾向にある都道府県は、殆どが東日本に存在していた。本研究によって抽出された 3 つのクラスタ (退院の相対リスクのトレンドが、全国とはほぼ同じ、増加傾向、減少傾向) と各県の精神科医療資源やその他の要因との関連を今後検討したい。

妊娠中期の妊婦における精神疾患の有病率および その関連因子に関する検討

- 白田謙太郎、西大輔、牧野みゆき、松岡豊、佐野養、嶋田秀仁、伊東宏絵、井坂恵一、立森久照、竹島正

妊娠中のうつ病は、定期健診の不参加、不適切な食事、喫煙、飲酒、物質依存、自傷や自殺の危険、産後うつ病等に関連するだけでなく、胎児の成長や出生後の児の行動等ライフコースにわたる負の影響を及ぼすことが示唆されている。また、妊婦においてはうつ病だけでなく不安症も稀ではないことが指摘されており、妊婦の精神健康は精神上の重要な課題である。これまでに国内外でさまざまな先行研究が行われているが、わが国の妊娠中期における妊婦の精神健康について構造化面接を用いて調べた研究や、地域の一般医療機関における研究は、演者らが知る限りこれまでなかった。そこで本研究では、妊娠中期における妊婦の精神疾患の有病率とその関連因子を、地域の一般医療機関を研究実施施設として、妊娠期間 1500 件以上の出産を扱う埼玉県玉川の代表的な産科医療機関を研究実施施設として、妊娠 12-24 週にその医療機関を受診した 20 歳以上の妊婦を、2014 年 5 月から 9 月まで連続サンプルと算定した。精神疾患は、国際的に用いられている構造化面接 Mini-International Neuropsychiatric Interview (MINI) を用いて診断した。

実施調査期間中に対象となった妊婦は 297 名であり、そのうち研究参加に同意したのは 177 名であった。研究参加者と非参加者との間で年齢には有意差がなかったが、エディンバラ産後うつ病自己調査票 (EPDS) の得点に関しては研究参加者のほうが有意に低かった。精神疾患の有病率は、大うつ病エピソード 2 名 (1.1%)、パニック障害 2 名 (1.1%)、広場恐怖 7 名 (3.9%)、社交不安障害 2 名 (1.1%)、強迫性障害 3 名 (1.7%)、PTSD 1 名 (0.6%)、アルコール依存 2 名 (1.1%) であり、少なくとも 1 つ以上の診断を満たしていたのは 11 名であった。1 つ以上の精神疾患の診断基準を満たしていることを従属変数としてロジスティック回帰分析を行ったところ、精神科既往歴、過去の対人トラウマ体験、妊娠前に子どもを産まなければならないというプレッシャーを感じていたことが精神疾患に関連していた。

本研究には、非参加者において EPDS 得点が高かったため真値より低い有病率となった可能性があること、研究参加登録期間が短かったこと、1 施設の研究であること等の限界があるが、わが国の地域の一般医療機関で出産を予定する妊娠中期の妊婦における精神疾患有病率を初めて明らかにした。また、子どもを産むことを周囲に期待されたり、自分でそのプレッシャーを強く感じたりしていることが精神疾患の危険因子となっている可能性が示唆された。その縦断的な影響や精神疾患になった場合の適切な介入法について、今後さらに研究を進める必要があると考えられる。

独法病院における障害者虐待の防止ならびに差別解消に関する

取り組みの状況

○堀口寿広¹⁾、高梨憲司²⁾、佐藤彰一³⁾

¹⁾社会精神保健研究部、²⁾社会福祉法人愛光、³⁾國學院大學法科大学院

【目的】「障害者虐待の防止、障害者の養護者に対する支援等に関する法律」（障害者虐待防止法）は、すべての医療機関の管理者に、①職員へ障害・障害者への虐待の実施及び普及啓発、②障害者（である患者）からの虐待に関する相談体制の整備、③障害者への虐待に対処するための措置を講ずることを求めている。また、医療機関ならびに専門職に、障害者虐待の早期発見の努力義務を課している。すなわち、地域に暮らす障害者を虐待から守るため、受診が虐待の早期発見の機会となるよう医療機関は職員の高めるとともに、医療を要する障害者の一時保護に協力する等、地域の虐待防止施策へ積極的に関与することが求められている。また、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（差別解消法）平成28年4月施行）は行政機関等に対し不当な差別な取り扱いは禁止するともに合理的配慮の提供を義務づけており、独法および地方独法は行政機関等に含まれている。障害者虐待の防止ならびに差別の解消に関して現在独法病院等が実施している内容は、患者サービスならびに職員教育のあり方といったQC活動の参考例になると考え、現状を調査した。

【方法】国立高度専門医療研究センター、国立病院機構病院、労災病院、および、地方独法病院の合計219施設（配布は233施設分）を対象とした。調査は平成25年11月～12月にかけて、郵送法により実施した。障害者虐待防止法への対応状況としては法に規定された各種対策の実施の有無をたずねた。また、差別解消法に関連した取り組みについては障害者雇用率、虐待防止法に準拠した各種対策、接遇面での合理的な配慮を例示して実施の有無をたずねた。回答は記名式とし、内容の公表の可否を選択できるようにした。

【結果】40施設から回答があった（回答回収率17.2%）。虐待防止法への対応状況として、行政主催の研修への職員参加は21施設（52.5%）、職員への二次研修は12施設（30.0%）が実施していた。相談窓口の周知は、職員向けには14施設（回答した施設の35.0%）、患者向けには12施設（30.0%）が実施していた。専門職員の確保は20施設（50.0%）、独自の対応マニュアル等の作成は7施設（17.5%）が実施していた。院内ネットワークの構築は11施設（27.5%）、地域のネットワークへの参加は9施設（22.50%）、被虐待障害者の一時保護への協力は4施設（10.0%）が実施していた。つぎに、差別解消法に関連した取り組みとして、障害者雇用率は中央値で2.12%であり、職員への啓発活動は4施設（10.0%）、対応要領等の作成は3施設（7.5%）が実施していた。合理的な配慮は、書類の読み上げを26施設（65.0%）、視覚障害者向けの日常生活の援助を22施設（55.0%）が実施していた。

【考察】回答した病院での調査時点における各種取り組みの実施状況は必ずしも十分ではなかったが、他の施設での取り組みについて先行事例として情報を共有することにより、改善されていくことが期待される。

人間ドック受診者における

抑うつとメタボリックシンドロームに関する縦断研究

○大森 由実¹⁾²⁾、宮地 元彦²⁾、出浦 喜丈³⁾、伊藤 弘人¹⁾

¹⁾ 社会精神保健研究部、²⁾ 国立健康・栄養研究所、³⁾ 佐久総合病院

【背景と目的】

これまでに、抑うつが糖尿病や高血圧などの生活習慣病やメタボリックシンドローム（Metabolic syndrome；以下MetS）の発症リスクとなることが海外で報告されている。しかし本邦における前向き研究は少なく、関連要因である食事や身体活動等の生活習慣を含めた報告はない。そこで、MetS及び各危険因子に及ぼす抑うつと生活習慣の関連を縦断的に検討した。

【方法】

本研究コホートは、長野県S病院人間ドックの受診者のうち研究参加の同意が得られた3504名（男性2066名、女性1438名）である。解析は、2009年～2012年までの調査期間中に2回以上ドックを受診した30～74歳を対象とした。調査項目は、人間ドックの基本的な受診項目に加え、日本語版SDS(Self-rating Depression Scale：自己評価式抑うつ尺度)を調査し、点数で3分位（36点以下：抑うつ低群、37～42点：抑うつ中群、43点以上：抑うつ高群）に分類した。MetSは日本の診断基準により、腹囲、血糖値、血圧、血中脂質の基準で分類し、追跡期間中の該当有無をエンドポイントとした。解析は全て男女別に行い、Cox比例ハザードモデルを使用しMetSと各危険因子の該当リスクの相対危険度を求めた。また、抑うつとMetS該当リスクの重反応関係を検討するため線形トレンド検定を行った。

【結果】

SDSの抑うつ低群を基準として、他の群の相対危険度および95%信頼区間を求めた。女性ではMetS血圧基準該当について、抑うつ低群に対する調整ハザード比は、抑うつ中群で1.43（0.79-2.59）、抑うつ高群で1.78（1.03-3.08）であり、抑うつ高群は有意に高かった。ベースライン時の収縮期血圧、拡張期血圧、食塩摂取量を調整した多変量モデルでも同様の結果が得られた。さらに女性ではトレンド検定でも有意差が認められ（ $p=0.035$ ）、抑うつが高いほどMetS血圧基準該当リスクが高い量反応関係が見られた。男性ではいずれのモデルにおいても、調整ハザード比と量反応関連に有意差はなかった。生活習慣の群別による層化分析を行った結果、男女共に身体活動量の少ない群において、抑うつ低群に対するMetS血圧基準該当は抑うつ中群が認められ、女性では抑うつ高群の調整ハザード比が3.37（1.33-8.52）、男性では抑うつ中群の調整ハザード比が2.02（1.10-3.68）であった。

【考察】

抑うつによるMetS及び危険因子該当リスクの影響は男女で相違が見られ、女性において抑うつはMetS血圧基準該当リスクの予測因子であることが示された。一方、男女共に一定レベル以上の身体活動量を維持することで、抑うつによるMetS血圧基準該当リスクを抑制できる可能性があることが示唆された。

精神薬理研究部

リゾホスファチジン酸シグナル伝達系の新規創薬ターゲット及び
バイオマーカーとしての可能性についての検討

○斎藤顕宜¹⁾、山田美佐¹⁾、塚越麻衣¹⁾、後藤玲央¹⁾、
岡淳一郎²⁾、樋口輝彦³⁾、山田光彦¹⁾

- 1) 精神薬理研究部、2) 東京理科大学薬学部薬理学研究室
3) 国立精神・神経医療研究センター

【目的】現在、うつ病の治療には選択的セロトニン再取り込み阻害薬 (SSRI) が広く用いられているが、効果発現までに数週間を要する等の問題があり理想的な治療薬とは言い難い。これまでに我々は、新規抗うつ薬創薬のためのターゲット候補について遺伝子発現を手がかりに網羅的に探索し、リゾホスファチジン酸 (LPA) シグナル伝達系に関連する分子を複数同定した。LPA は脳内で産生されているとともに血漿や脳脊髄液等に存在している。そこで本研究では、LPA シグナル伝達系に焦点を当て、新規抗うつ薬創薬のためのターゲット及びバイオマーカーとしての可能性について検討した。

【方法】(1) 抗うつ薬関連遺伝子の探索：SD 系雄性ラットに 3 環系抗うつ薬の imipramine、または SSRI の sertraline を 4 週間腹腔内投与し、differential display 法、microarray 法により、抗うつ薬の奏効機転に重要な分子を探索した。(2) 行動薬理試験：C57BL/6N マウス脳室内に LPA を投与し、ホールボード試験、高架式十字迷路試験および強制水泳試験を用いて情動行動変化を検討した。さらに、LPA 受容体拮抗薬の Btp-LPA 併用による影響を検討した。(3) LPA 濃度の測定：実験動物の血漿や脳脊髄液の LPA 濃度の測定には ELISA 法 (Echelon 社: LPA AssayKit ID) を用いた。

【結果】抗うつ薬の慢性投与によりラット脳内で発現変化する遺伝子を 707 種同定した。これらをスゴットした microarray を開発し、電気けいれん療法 (ECT) を模した処置を負荷したラットサンプルを解析したところ、抗うつ薬、ECT という全く異なるうつ病治療法において共通して発現変化する遺伝子群を発見した。これらの中に、LPA シグナル伝達系の下流遺伝子や LPA の機能を修飾する遺伝子が複数含まれていた。LPA は脂質メディエーターであり、がんの浸潤や平滑筋の収縮など末梢での機能は多数報告されているが、中枢神経系 (特に情動) における機能は明らかではない。そこで、マウス脳室内に LPA を投与し、情動行動変化を検討した。その結果、LPA 投与 15 分後に情動行動変化が認められた。これらの情動行動変化は、LPA 受容体拮抗薬 Btp-LPA の併用により消失することが明らかとなった。また、実験動物の血漿及び脳脊髄液の LPA 測定条件を確立し、現在、詳細な検討を進めている。

【考察】本研究により「LPA シグナル伝達系が抗うつ薬の奏効機転に関与する」という仮説を提唱するとともに、LPA 受容体拮抗薬、LPA の下流シグナル伝達系を修飾する因子、LPA 産生酵素 (autotaxin) を阻害する因子等が、新規抗うつ薬のリードとなる可能性を提示することができた。一方、情動変化が高率に合併する脳損傷後に autotaxin 活性が増加する等の知見が蓄積されている。今後は、LPA のバイオマーカーとしての応用可能性について詳細に検討する計画である。

精神薬理研究部

リルゾールの新規曝露療法併用薬としての可能性

○杉山梓^{1),2)}、斎藤顕宜¹⁾、岡淳一郎²⁾、山田光彦¹⁾

- 1) 精神薬理研究部、2) 東京理科大学薬学部薬理学研究室

【目的】PTSD や恐怖症等の不安障害の治療法として曝露療法として曝露療法の有効性が報告されている。一方、曝露療法の効果を強化する併用薬として、恐怖記憶の消去学習を亢進する D-サイクロセリン等の薬剤が強い関心を集めている。しかし、D-サイクロセリンは恐怖記憶の消去学習と共に再固定化もまた亢進するため、十分な学習が行われない場合に恐怖記憶を増強させてしまう場合がある。一方、これまで我々は、実験動物においてリルゾールが、記憶に障害を与えず、ベンゾジアゼピン系抗不安薬であるジアゼパムと同程度の抗不安様作用を示すことを明らかにしてきた。そこで本研究では、リルゾールの恐怖記憶消去学習および再固定化への影響を検証し、新規曝露療法併用薬としての可能性について検討した。

【方法】実験には、Wistar 系雄性ラットを用いた。リルゾールの恐怖記憶消去学習および再固定化への影響について検証するため、文脈的恐怖条件付け試験を実施した。対照薬として、消去学習および再固定化を亢進することが知られている D-サイクロセリンと、ベンゾジアゼピン系抗不安薬であるジアゼパムを用いた。また、これら薬剤の認知機能への影響を評価するため、新奇物体認識試験を実施した。

【結果・考察】電気刺激を用いた条件付けを行った翌日にリルゾールを経口投与し、条件付け刺激を与えずにチャランパーへ長時間 (10 分間) 曝露させたところ、時間と共にすくみ行動が減少した。さらにその 24 時間後にチャランパーへ再曝露したところ、すくみ行動のさらなる減少が認められ、消去学習の亢進作用が確認された。D-サイクロセリン投与群でも、同様に消去学習の亢進作用が確認された。一方、ジアゼパム投与群では、恐怖記憶の消去学習は障害された。次に、条件付け翌日にリルゾールを経口投与し、条件付けチャランパーへ条件付け刺激を与えずに短時間 (2 分間) 曝露を行い、その 24 時間後にチャランパー内へ再曝露し、恐怖記憶の再固定化への影響について検討した。リルゾール投与群は、2 分間の短時間曝露時には溶媒群と同程度のすくみ行動を示したが、翌日のチャランパー内再曝露時には溶媒群と比較し顕著なすくみ行動の減少を示し再固定化の障害作用を示した。一方で D-サイクロセリン投与群は、短時間曝露時には溶媒群と同程度のすくみ行動を示し、翌日のチャランパー内再曝露時には溶媒群と比較してすくみ行動の増加傾向を示した。ジアゼパム投与群は、短時間曝露時にはすくみ行動の減少を示したが、翌日の再曝露時には溶媒群と同程度のすくみ行動時間を示した。また、新奇物体探索行動試験において、リルゾール及び D-サイクロセリン投与群はラットの物体認知機能を障害しなかったが、ジアゼパム投与群は障害した。本研究により、リルゾールが恐怖記憶消去学習の亢進作用および再固定化の阻害作用を示し、認知機能に障害を及ぼさずに曝露療法の効果を強化する優れた併用薬となる可能性が示された。

児童・思春期精神保健研究部

自閉症スペクトラム障害の併存症スクリーニングツールの開

発に関する予備的検討

○石飛信、原口英之、浅野路子、野中俊介、荻野和雄、高橋秀俊、

神尾陽子

【はじめに】自閉症スペクトラム障害 (Autism spectrum disorders: 以下 ASD) では、中核症状に加え、注意欠陥多動性障害・チック・強迫性障害・睡眠障害・不器用・衝動性など多くの併存症が認められ、ASD の臨床多様性を形成し、合併する併存症の特性や重症度が ASD を有する個人の予後を大きく左右する。また、閣下の自閉症特性を有する個人においても、高頻度に併存症が認められることがわかっており、併存症を考慮した早期対応は喫緊の課題である。しかし、これらの併存症の早期介入に繋がるスクリーニング・診断の方法は確立されていない。本研究では、ASD での合併率の高い併存症を幅広く評価するスクリーニングツールの開発を目指し、地域の児童コホートを対象に予備的調査を行い、ASD 特性の程度と併存症との関連性を明らかにすることを目的とする。

【方法】現在当部でフォロー中の地域コホート (8 歳児: H26 年現在) の ASD 児および閣下も含む中程度以上自閉症状態を有する児童 (① ASD probable 群、② ASD possible 群) 約 70 名と定型発達児約 350 名 (③ ASD Unlikely 群) の保護者に質問紙を郵送し、回答のあった者を解析対象とする。質問紙の項目は、文獻的レヴューを元に、ASD に合併率の高い併存症約 20 項目とした (併存症スクリーニングツール)。また、専門機関での相談歴、身体的・精神的診断の有無、併存症に対する薬物治療の有無、SDQ (Strength and Difficulties Questionnaire: 子どもの全般的な行動と情緒の問題を評価する 25 項目の親評定質問紙) などもあわせて調査した。ASD 特性の程度によって分類された上記 3 群 (① ASD probable 群、② ASD possible 群、③ ASD Unlikely 群) 別に、併存症の特徴を明らかにし、併存症に対する処方率などを後方視的に調べる。

【結果】現在、得られたデータを解析中である。

【今後の方向性】本調査の結果に加え、今後臨床サンプルにおいても検討を重ねることが必要である。

児童・思春期精神保健研究部

我が国における、自閉症児に対する「応用行動分析による療育」の検証に関する研究

○原口英之、三宅篤子、石飛信、高橋秀俊、神尾陽子

児童・思春期精神保健研究部

【背景・目的】

自閉症スペクトラム障害 (autism spectrum disorders: ASD) の早期発見と早期介入 (以下、療育と表記) は世界的に重要な課題である。欧米では、応用行動分析 (applied behavior analysis: ABA) による療育の効果研究が最も多く蓄積され、近年ではランダム化比較試験 (randomized controlled trial: RCT) による効果研究も報告されている。しかしながら、ABA による療育が ASD 児の発達促進や行動改善に有効であるとする高いエビデンスは得られていない。これは ASD 児の個人差に起因すると思われるが、個人差や予測要因に関する検証は不足している。我が国においては、ASD の早期発見は一定の成果が見られている一方、療育については ASD 児と家族のニーズを満たすには量、質ともに十分とは言えない状況にある。また、ASD 児への ABA による療育の効果検証は事例研究に留まり、よりエビデンスレベルの高い研究デザインを用いた効果研究はこれまでのところ皆無である。有効性の実証に関して RCT の実施は重要であるが、RCT は実用面や倫理面から問題点も指摘されており、我が国の療育の現状を踏まえると RCT の実施は困難と言わざるを得ない。本研究では、我が国において通常提供されている ABA による療育が ASD 児の発達促進や行動改善に及ぼす有効性を包括的に検証することを通じて、ASD 児の反応性および予測要因を明らかにする。そして我が国の状況に合った療育を標準化することを目指す。

【方法】

1. 研究デザイン: 非ランダム化群間比較 (ABA 群と地域療育群)
2. 対象: 2~5 歳の ASD 児、各群 70~80 名
3. 介入: ABA 群では、大学もしくは民間機関等で ABA による療育が行われ、地域療育群は公的機関等で折衷的な療育が行われる。
4. アウトカム評価: 療育開始前および 1 年後、2 年後に、標準化された評価指標を用いて、幼児の全般的発達、適応行動、自閉症症状、情緒・行動面の問題等、また、親の養育ストレスやうつ症状等を多面的に評価する。
5. 統計的解析: 2 群の 1 年後および 2 年後のアウトカムを共分散分析で比較する。

原発性不眠症患者における情動刺激観察時の脳活動

○元村祐貴、大場健太郎、寺澤悠理、野崎健太郎、綾部直子、北村真吾、肥田昌子、守口善也、亀井雄一、三島和夫

不眠と情動機能の間には機能的連結がある。不眠はうつ病に効率に付随する症状の一つであり、両者の重症度や経過には正の関連がある。逆に慢性不眠はうつ病のリスクファクターとなる。さらに、不眠症状そのものよりも、不眠に伴う日中の機能障害がうつ病の罹患リスク増大と関連していることが示唆されており、覚醒時の情動機能障害の関与が疑われているがその詳細は明らかになっていない。そこで本研究では、不眠症患者における情動処理の異常の有無とその関連脳領域について検討した。

対象は、センター病院睡眠障害外来を受診した 14 名の原発性不眠症患者(59.6±15.6 歳)と、年齢性別をマッチさせた 28 名の健常対照群(59.4±16.7 歳)であった。意識上または意識下で恐怖、幸せ、ニュートラル表情を呈示した際の脳活動の変化を機能的 MRI によって比較検討した。

その結果、意識上、意識下での恐怖表情呈示時には、不眠群と対照群との間に情動関連脳領域の活動に有意差は認められなかった。一方、意識上の幸せ表情呈示時に、ポジティブな情動や報酬処理に関連する眼窩前頭皮質の活動が不眠群で有意に低下していた。意識下の幸せ表情呈示時にはより多くの部位で活動の差がみられ、眼窩前頭皮質に加え、線条体、中脳腹側蓋野、前帯状皮質の活動が不眠群で有意に低下していた。

幸せ表情呈示時に不眠群で活動が低下していた眼窩前頭皮質、線条体、中脳腹側蓋野、前帯状皮質はすべて情動や報酬処理に関連する重要な脳領域であり、動機づけと報酬のプロセスに関わる神経ネットワークを形成している。本研究の成果は、不眠症患者でしばしば併存する抑うつや、慢性不眠の気分障害罹患リスクの増大の背景に、ポジティブ情動刺激に対する動機づけ・報酬関連領域の機能低下が関与している可能性を示唆している。

睡眠延長による必要睡眠量と潜在的睡眠負債の推定

○北村真吾、中崎恭子、元村祐貴、片寄泰子、大場健太郎、勝沼り、寺澤悠理、榎本みのり、守口善也、肥田昌子、三島和夫

睡眠はヒトにとって本質的な機能であり、その不足は多面的な機能障害のリスクとなることが示唆される。しかしながら、睡眠時間には大きな個人差が存在する。また、現在用いられている客観的眠気評価法では睡眠負債の定量的評価は困難である。そのため、睡眠負債と必要とされる睡眠量の個人差についての情報は限定的である。我々は、睡眠恒常性が持つ補償的作用から、十分な睡眠機会を与えられた際に飽和する睡眠時間を個人の必要睡眠量を反映すると考え、習慣的な睡眠時間との差分が睡眠負債の度合いを表すと仮定した。本研究で我々は、15 名の若年成人男性を、21 日間までの在宅での習慣的睡眠時間の記録に続けて、9 日間の 12 時間睡眠機会と 1 晩の全断眠で構成される実験プロトコルに導入し、12 時間睡眠機会での睡眠時間の減少から得られた漸近値から睡眠必要量 (OST) を推定し、習慣的睡眠時間 (HST) との差分から潜在的睡眠負債 (PSD) を推定した。

平均 HST は 7.3 ± 0.3 h であったが、延長初日の総睡眠時間は 10.59 ± 0.72 h と大きく延長した。総睡眠時間は睡眠延長セッションを通じて急速に減少し、平均 OST は 8.41 ± 0.70 h であった。平均 PSD は 1.07 ± 0.90 h で、 $-0.58 \sim -2.63$ h の範囲を示した。PSD は OST とは相関せず、HST と有意に相関した ($r = -0.750, p = 0.001$)。さらに、延長初日での増加は PSD と有意に相関した ($r = -0.770, p = 0.001$)。リバウンドとその解消がみられたことを合わせて考えると、PSD は対象者が 1 時間程度の潜在的な睡眠負債を抱えていたことを示している。PSD は主観的な眠気やビジランスとは相関しなかったが、覚醒維持能力に対して個人の睡眠恒常性との相互作用を示した。また、在宅での日々の眠気に対して実際の睡眠時間よりも PSD の寄与が大きい結果が得られた。

これらの結果は、適切な睡眠習慣の維持向上において、画一的な基準ではなく、睡眠必要量の個人特性への考慮を要求する。

平成26年度DPAT 関連研修について

○吉田 航、渡路子、小見めぐみ、中神里江、金 吉晴

【背景】 平成23年3月に起きた東日本大震災では、発災後数日の間に、被災した精神科病院内の入院患者の移送が必要になる等、急性期における精神保健医療に関する対応が必要となった。そのような課題を踏まえ、平成26年1月7日、厚生労働省により「災害派遣精神医療チーム（以下：DPAT）活動」が改定（障精発0107第1号）され、各都道府県・政令指定都市（以下：都道府県等）においてDPATの体制整備が進められている。同要領ではDPATを構成する班の中で、発災当日から遅くとも72時間以内に活動できる、急性期の災害派遣医療について一定の知識や技能を有する人員で構成する班を先遣隊としているが、急性期の災害精神医療に関する研修は行われてこなかった。そこで災害時こころの情報支援センターでは、災害派遣医療チーム（以下：DMAT）事務局が置かれている災害医療センターの協力を得て、先遣隊登録を行った都道府県等を対象にDPAT先遣隊研修を行った（研修Ⅰ）。また、そこで習得した知識・技術を実践するため、宮崎県、宮崎県精神科病院協会等の協力を得て、宮崎県内で行われた政府の総合防災訓練の中で、宮崎県内での精神科病院入院患者を搬送する研修を実施した（研修Ⅱ）。

【方法】 研修Ⅰ 平成26年度DPAT先遣隊研修：事前に先遣隊登録のあった都道府県等を対象に研修を行った（平成26年7月19日、20日開催）。内容は1. DPAT先遣隊活動の意義 2. 災害派遣医療の指揮命令系統 3. 災害現場でのロジスティクス 4. トリアージについて 5. 大規模災害における派遣準備 6. 災害時の地図の使い方 7. 大規模災害演習 8. 自治体における研修の立案であった。研修Ⅱ 宮崎県総合防災訓練：研修Ⅰの参加者を対象に、宮崎県総合防災訓練の一部に参加し（平成26年8月30日開催）、早期派遣の実現可能性を検証した。内容は、津波による被災をした想定の中核精神科病院の入院患者搬送支援をDMATと協力して行うことであった。

【結果】 研修Ⅰ：平成26年7月時点で登録のあった14府県のうち、13府県（宮城県、千葉県、愛知県、三重県、兵庫県、岡山県、広島県、山口県、徳島県、佐賀県、宮崎県、沖縄県）計56名が参加した。研修Ⅱ：研修Ⅰに参加した6県（宮城県、千葉県、岡山県、佐賀県、宮崎県、沖縄県）計25名が参加した。宮崎県DPAT統括者の指揮の下、宮崎県庁での本部活動を宮崎県、佐賀県、被災精神科病院の支援を宮崎県、千葉県、岡山県、沖縄県、総合病院精神科での入院患者受入を宮崎県が行った。

【考察】 研修Ⅰ：指揮命令系統を素早く確立する等、早期派遣に必要な技術を実践することができた。一方で、入院患者の搬送において、受け入れ側と搬送側で患者情報の伝達に齟齬が生じ、想定外の患者が搬送されることがあった。DMATでは患者搬送の際の共通書式があるが、DPATにはない。東日本大震災において福島県で918名の精神科病院入院患者の転院を行った（熊倉, 2012）ことを踏まえても、精神科病棟への入院にも対応できる共通書式を作成する必要があるだろう。

DPAT体制整備状況と災害時精神医療体制について

○渡路子、小見めぐみ、吉田 航、中神里江、小菅清香、金 吉晴

東日本大震災では、厚生労働省の幹旋を経た49自治体、9国立病院が、いわゆる心のケアチームとして災害精神保健医療活動を行った。その実人数は3307人、派遣に要した経費概算は3億9443万円に上った。しかしながら、全体の活動実績を分析すると、チームの活動内容や実績に大きな差が出たり、必ずしも現地のニーズに対応できていなかったりと、一部に非効率的な実態があることが明らかになった。これを受け、厚生労働省は平成25年4月に災害派遣精神医療チーム（DPAT）を設立し、そのDPAT活動要領によると、DPATはこれまで心のケアチームが主に行ってきた避難所での支援など、中長期的な被災地域での精神保健活動に加え、以下の機能を明確化している。

- (1) 統括；被災自治体の災害対策本部にDPAT調整本部を設置、DPAT統括者が情報を集約した上で、指揮命令系統を一括し、DMATや他の保健医療支援と連携を図る。
- (2) 急性期からの医療支援；被災した精神科医療機関への支援、地域での精神科医療ニーズなど、専門家によるニーズアセスメントを行い、情報発信し、適切な支援体制構築につなげる。
- (3) 平時の準備；国および自治体レベルそれぞれで、地域防災計画における災害想定を用いた訓練を体系的に行う。

現在、内閣府の中央防災会議や、都道府県の地域防災計画等においてDPATが位置づけられ、全自治体を対象としたDPAT研修が継続的に行われるなど、全国で体制整備が進んでいる。災害医療における精神科医療の位置づけがなされたことで、今後、関係機関との更なる連携が期待される。

今回は、全国のDPAT体制整備状況と、平成26年の広島県土砂災害、御嶽山噴火におけるDPAT活動の報告より、今後の体制整備における現在の課題を整理する。

自殺予防総合対策センター

がん専門医へのコミュニケーションスキルトレーニングの有効

性の検討：無作為化比較試験

○藤森麻衣子¹⁾、白井由紀²⁾、浅井真理子³⁾、勝保範之⁴⁾、久保田馨⁴⁾、

内富庸介⁵⁾

- 1) 自殺予防総合対策センター 2) あそかピハハラ病院 3) 帝京平成大学
4) 日本医科大学 5) 国立がん研究センター

【目的】がん医療において、患者は医師から難治がんの告知や抗がん剤による治療の中止など、将来の見通しを根拠から否定的に変えてしまうような悪い知らせを伝えられることが少なくない。このような悪い知らせを伝えられた後の患者のうつ病や適応障害の有病率は高く、がん告知後1年以内の自殺率が高いことが示されており、身体や病気の悩みを原因・動機とする自殺死亡の約半数に当たると推計されている。そこで本研究では、悪い知らせを伝えられる際の医師のコミュニケーションに対する患者の意向に即して、望ましいコミュニケーションを医師が学習するために開発されたコミュニケーションスキルトレーニング (CST) プログラムの有効性を無作為化比較試験により検討することを目的とする。

【方法】インフォームドコンセントを得たがん専門医 30 名を対象に、無作為に CST に参加する介入群 15 名、参加しない統制群 15 名に振り分けた。CST は小グループでのテキストとビデオを用いた講義、ロールプレイ、ピアディスカッションで構成される 2 日間のプログラムである。評価項目は、医師の患者とのコミュニケーションに対する自己効力感、被験患者との面談の録音の第三者評価によるコミュニケーションへの満足感、医師と面談した患者の心理的ストレス (抑うつ、不安)、コミュニケーションへの満足感、医師への信頼感である。介入前後 (統制群は 1 週間空けて) に 2 回 (ベースライン、フォローアップ) 評価した。

【結果】フォローアップ時に介入群の医師は統制群の医師と比して、医師のコミュニケーションに対する自己効力感得点 (p=0.001)、望ましいコミュニケーション行動の評価値 (p=0.011) が有意に高くなることが示された。また、介入群の医師と面談した患者は統制群の患者と比して、抑うつ得点が有意に低く (p=.027)、医師への信頼感得点が有意に高い (p=.009) が示された。しかしコミュニケーションへの満足感に有意な差は認められなかった。

【結論】本研究の結果から、患者の意向に即した CST プログラムは、参加者であるがん専門医が患者に悪い知らせを伝える際のコミュニケーションに対する自己効力感を高め、望ましいコミュニケーション行動を増加すること、さらに、破局的なストレスを抱えるがん患者の抑うつ気分を軽減し、医師への信頼感を高めることに対して有効であることが示された。がん医療における患者-医師間のコミュニケーションを促進する方法として CST への参加が望まれる。このような取り組みにより、がんに関連する自殺死亡のさらなる減少が期待される。

自殺予防総合対策センター

女性自殺既遂者の精神医学的および心理社会的特徴

○小高真美、松本俊彦、山内貴史、高井美智子、竹高正

【背景・目的】自殺の危険性は女性よりも男性の方が高い。一方、わが国の女性の自殺死亡率は、OECD 加盟国の中では大韓民国に次いで 2 番目に高い。また、2011 年の厚生労働省人口動態統計では、10～54 歳の各年代において、女性の女性の自殺の死因 1 位から 3 位までに自殺がエントリしている。このような背景から、わが国の女性の自殺の要因を解明し、予防介入のポイントを明らかにすることは喫緊の課題であると言える。しかし、女性の自殺の要因を明らかにするための研究は、その多くが欧米諸国で実施されており、日本を含むアジア諸外国では十分に研究がおこなわれていない。そこで、本研究では、心理学的剖検調査で収集された自殺既遂事例の心理社会的および精神医学的特徴について、その性差に着目し、女性の自殺の背景と予防介入ポイントについて明らかにすることを目的とした。

【方法】本研究は、自殺予防対策センターが実施してきた心理学的前検研究である「自殺予防と遺族支援のための基礎調査」(以下、基礎調査)を母体としている。本研究では基礎調査において、2007 年 12 月から 2013 年 7 月末までに収集された 20 歳以上の 92 自殺事例 (男性 64 例、女性 28 例)を対象とした。基礎調査で収集された情報のうち、①人口動態的変数、②自殺の状況、③自殺関連行動の既往ならびにその家族歴、④経済的問題、⑤医学的問題、⑥自殺の変数について男女間で比較を行った。データ分析では、比率の比較には項目ごとに Fisher の正確検定を実施し、連続量の比較には Student-t 検定を使用した。本研究は、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会への申請と、同総長の承認を得て実施された。

【結果】女性は男性よりも自傷・自殺未遂歴のある割合が高かった (p<0.001)。また女性は男性に比べ、摂食障害の診断基準を満たしている事例が有意に多かった (p<0.01)。摂食障害があった全 4 女性事例については、自傷・自殺未遂歴とその他の精神障害が重複しており、死亡時の年齢は 27 歳から 38 歳だった。援助希求行動については、心の健康問題で医師やその他の専門家相談あるいは治療を受けていた割合が、女性の方で有意に高く (p<0.05)、身近な人にも自らの自傷・自殺未遂歴を告白している傾向にあった。また、精神科を受診していた者の割合も女性で有意に高かった (p<0.01)。

【考察】本研究から、摂食障害のある女性で、特に、重複する精神疾患と自殺未遂歴のある場合には、自殺のリスクがより高くなる危険性があり、初診から年月が経過している患者についても注意を要することが示唆された。また、自殺の危機にある女性は、援助希求に積極的である一方で、自殺のサインとなる自殺関連行動や自殺念慮を繰り返して発信することにより、家族の疲弊や陰性感情の高まりを引き起こし、結果的に長い時間経過の中で女性たちの自殺リスクの高まりを看過する危険もある。その意味では、専門家は家族等への心理教育や精神的サポートも含めた支援が重要であるだろう。

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所

平成26年度 研究報告会

(第26回)

プログラム・抄録集

発行 独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター

印刷 株式会社東京リート印刷所

V 平成26年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
所 精 長 室 研	福田祐典	研究代表者	自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	竹島 正	研究代表者	「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究」内 「地域精神保健医療の社会サービスへの統合とその評価・リーダーとなる人材育成に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
精 神 保 健 計 画 研 究 部	竹島 正	研究分担者	「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究」内 「自殺の要因分析体制の確立に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	竹島 正	研究分担者	「精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究：世界精神保健日本調査セカンド」内 「国際連携」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	竹島 正	分担研究者	「国立精神・神経医療研究センターの歴史的使命と貢献に関する実証的研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療 研究センター
	竹島 正	研究分担者	「てんかんに対する総合的な医療の提供体制整備に関する研究」内 「てんかん患者の保健医療福祉等ニーズ調査」	厚生労働科学研究委託費 (障害者対策総合研究開発事業)	厚生労働省
	竹島 正	研究分担者	「障害福祉データの利活用に関する研究」内 「障害福祉に関するデータの利活用に関する検討」	厚生労働科学研究委託費 (障害者対策総合研究開発事業)	厚生労働省
	竹島 正	研究代表者	「NCNP所蔵・国立精神療養所関連資料のアーカイブズ 整備―戦時精神医療体制の基礎研究を中心に―」	平成26年度三菱財団助成金	公益財団法人 三菱財団
	立森久照	研究分担者	「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究」内「630調査等による精神保健医療福祉のマクロ動向の分析に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	立森久照	研究分担者	「てんかんに対する総合的な医療の提供体制整備に関する研究」内「地域における成人てんかんの有病率調査」	厚生労働科学研究委託費 (障害者対策総合研究開発事業)	厚生労働省
	立森久照	研究分担者	「精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究：世界精神保健日本調査セカンド」内「こころの健康に関する方法論の検討と改善、統計解析」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	立森久照	研究分担者	「精神障害者の重症度判定及び重症患者の治療体制等に関する研究」内「重症入院患者の評価方法の開発と統計処理方法に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	立森久照	分担研究者	「筋ジストロフィーのエビデンス創出を目的とした臨床研究と体制整備」内「筋ジストロフィーのエビデンス創出を目的とした臨床研究と体制整備における生物統計に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療 研究センター
	西 大輔	研究代表者	「妊婦における心身の健康増進に向けたオメガ3系脂肪酸による無作為比較試験」	科学研究費助成事業 (若手研究A)	日本学術振興会
	趙 香花	研究代表者	精神障害者のホームレス化の予防とホームレスからの脱脚に向けた支援プログラムの開発	科学研究費助成事業 (特別研究員奨励費)	日本学術振興会
後藤基行	研究代表者	「戦後精神病床入院の社会政策史研究：公的支出形態の3類型の視点から」	科学研究費助成事業 (若手研究B)	日本学術振興会	
後藤基行	研究代表者	「公的支出形態の3類型から見た戦後日本の措置入院および同意入院の研究」	家計経済研究所研究振興助成事業	公益財団法人家計経済研究所	
薬 物 依 存 研 究 部	和田 清	研究代表者	「脱法ドラッグ」を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の「回復」とその家族に対する支援に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	和田 清	研究分担者	飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査(2014年)	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	和田 清	研究分担者	「高リスク層のHIV感染監視と予防啓発及び内外のHIV関連疫学動向のモニタリングに関する研究」内 「薬物乱用・依存者のHIV感染と行動のモニタリングに関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (エイズ対策研究事業)	厚生労働省
	松本俊彦	主任研究者	物質依存症に対する医療システムの構築と包括的治療プログラムの開発に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療 研究センター
	松本俊彦	研究代表者	いわゆる「脱法ハーブ」乱用者の実態、心理的社会的・精神医学的特徴、ならびにその治療法に関する包括的研究	社会安全研究財団 一般研究助成	社会安全研究財団
	松本俊彦	研究分担者	SMARPPの実践における課題の明確化に基づく実践ガイドの画策に向けて	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	松本俊彦	研究分担者	自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業(精神障害分野)	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	「脱法ドラッグ」を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の「回復」とその家族に対する支援に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省

薬物依存研究部	松本俊彦	治験	慢性疼痛患者を対象としたS-8117のオープンラベル試験	独立安全性評価委員会委員 塩野義製薬(受-200)	塩野義製薬
	松本俊彦	治験	慢性腰痛症患者を対象としたS-8117のプラセボに対する優越性試験	独立安全性評価委員会委員 塩野義製薬(受-203)	塩野義製薬
	松本俊彦	治験	慢性腰痛症患者を対象としたS-8117の継続投与試験	独立安全性評価委員会委員 塩野義製薬(受-204)	塩野義製薬
	松本俊彦	治験	オピオイド誘発性の便秘症を有する非がん性の慢性疼痛患者を対象としたnaldemedineの第3相臨床試験－S-8117(オキシコドン塩酸塩)使用例でのオープンラベル試験－	独立安全性評価委員会委員 塩野義製薬(受-235)	塩野義製薬
	松本俊彦	拠点病院	拠点センター(薬物依存症)	厚生労働省依存症治療拠点病院事業	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	様々な依存症における医療・福祉の回復プログラムの策定に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)	厚生労働省
	船田正彦	主任研究者	大麻関連化合物を中心とした脱法ドラッグにおける精神薬理作用発現の機序解明に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	船田正彦	分担研究者	「大麻関連化合物を中心とした脱法ドラッグにおける精神薬理作用発現の機序解明に関する研究」内「違法ドラッグの有効性及び有害性の評価」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	船田正彦	研究代表者	違法ドラッグの構造類似性に基づく有害性評価法の確立と乱用実態把握に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	船田正彦	研究分担者	「違法ドラッグの構造類似性に基づく有害性評価法の確立と乱用実態把握に関する研究」内「合成カンナビノイドの細胞毒性:培養筋細胞による評価」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
船田正彦	研究代表者	危険ドラッグを中心とした中枢神経系に作用する物質の迅速検出法の開発に関する研究	平成26年度厚生労働科学研究委託費(医薬品等規制調和・評価研究事業)	厚生労働省	
船田正彦	研究分担者	「危険ドラッグを中心とした中枢神経系に作用する物質の迅速検出法の開発に関する研究」内「合成カンナビノイド迅速検査法の開発:危険ドラッグ製品からの検出」	平成26年度厚生労働科学研究委託費(医薬品等規制調和・評価研究事業)	厚生労働省	
嶋根卓也	研究分担者	「『脱法ドラッグ』を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の『回復』とその家族に対する支援に関する研究」内「薬局を情報源とする処方薬乱用・依存の実態把握に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省	
嶋根卓也	研究分担者	「違法ドラッグの構造類似性に基づく有害性評価法の確立と乱用実態把握に関する研究」内「クラブイベント来場者における違法ドラッグの乱用実態把握に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省	
嶋根卓也	分担研究者	「物質依存症に対する医療システムの構築と包括的治療プログラムの開発に関する研究」内「HIV拠点病院と連携した薬物依存者支援システムの構築と治療プログラムの開発に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター	
心身医学研究部	安藤哲也	研究代表者	摂食障害の診療体制整備に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))	厚生労働省
	安藤哲也	主任研究者	心身症・摂食障害の研究ネットワーク拠点整備と治療プログラムの開発	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	菊地裕絵	分担研究者	「心身症・摂食障害の研究ネットワーク拠点整備と治療プログラムの開発」内「過敏性腸症候群の日常生活下での多面的評価法の開発」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	菊地裕絵	研究代表者	EMAによる日常生活下での多面的調査を用いた肥満成人における食行動関連要因の同定	科学研究費助成事業(若手研究B)	日本学術振興会
	菊地裕絵	研究代表者	日常生活下調査による摂食障害の食行動異常関連要因と背景基盤の解明	科学研究費助成事業(若手研究B)	日本学術振興会
	菊地裕絵	研究分担者	「発達障害児者の地域生活参加を支援する多次元スマートセンシングシステムの開発」内「発達障害者の主観評価法の開発」	厚生労働科学研究委託費(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
児童・思春期精神保健研究部	神尾陽子	研究代表者	我が国における、自閉症児に対する「応用行動分析による療育」の検証に関する研究	厚生労働科学研究委託費(身体・知的等障害分野)	厚生労働省
	神尾陽子	研究代表者	発達障害者の就労定着を支援する多次元スマートセンシングシステムの開発	厚生労働科学研究委託費(精神障害分野)	厚生労働省
	神尾陽子	研究代表者	通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある児童生徒の包括的な心の健康教育支援	科学研究費助成事業(挑戦的萌芽研究)	日本学術振興会
	神尾陽子	研究担当者(責任者)	「人間力活性化によるスーパー日本人の育成と産業競争力増進/豊かな社会の構築」内「学童期以降の脳機能と、個性の関連性評価」に関する研究	JST委託研究開発費	(独)科学技術振興機構
	神尾陽子	主任研究者	「自閉症スペクトラム障害の最適事後のための早期介入に関する研究」内「自閉症スペクトラム障害における幼児期、児童期から青年期への発達軌跡の多様性」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター

V 平成 26 年度委託および受託研究課題

児童・思春期精神保健研究部	神尾陽子	研究代表者	日本における非精神病性の一般精神科外来受診成人患者における注意欠如・多動性障害ADHDの有病率推定のための多施設共同横断研究：J-PAAP研究	受託・共同研究費	日本イーライリリー(株)
	神尾陽子	研究分担者	「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」内「被災地の子どもの精神医療支援」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	神尾陽子	研究分担者	「発達障害児とその家族に対する地域特性に応じた継続的な支援の実施と評価」内「標準的な評価指標に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(身体・知的等障害分野))	厚生労働省
	神尾陽子	研究分担者	「発達障害を含む児童・思春期精神疾患の薬物治療ガイドライン作成」内「発達障害を含む児童・思春期精神疾患の薬物治療ガイドライン作成と普及」	厚生労働科学研究委託費(精神障害分野)	厚生労働省
	神尾陽子	研究分担者	発達中の脳における麻酔薬の神経毒性に関する包括的研究	科学研究費助成事業(基盤研究B)	日本学術振興会
	神尾陽子	分担研究者	自閉症スペクトラム成人に持続する社会性障害の発達の基盤の解明に関する研究	委託研究開発費	昭和大学発達障害医療研究所
	高橋秀俊	研究代表者	自閉症スペクトラムの児童における知覚情報処理の発達の変化に関する神経生理学的研究	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	高橋秀俊	分担研究者	「自閉症スペクトラム障害の最適予後のための早期介入に関する研究」内「聴覚情報処理に関わる神経生理学的基盤を用いた児童期から成人期における精神医学的障害の早期発見と早期介入に関わる病態解明に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	石飛 信	研究代表者	広汎性発達障害の二次障害に対するアリピプラゾールの効果：実行機能の観点からの検討	科学研究費助成事業(若手研究B)	日本学術振興会
	石飛 信	分担研究者	「自閉症スペクトラム障害の最適予後のための早期介入に関する研究」内「自閉症スペクトラム障害の併存症に対する早期発見・早期介入のあり方についての研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
中鉢貴行	研究代表者	自閉症スペクトラム障害児の限局的反復的行動に関連するバイオマーカーの探索	科学研究費助成事業(若手研究B)	日本学術振興会	
成人精神保健研究部	金 吉晴	研究代表者	被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究(精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究内「心的外傷後ストレス障害に対する持続エクスポージャー療法の無作為比較試験」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究(精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」内「持続エクスポージャー療法(Prolonged Exposure Therapy:PE)の普及体制の確立に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究(精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」内「WHO版心理的応急処置(サイコロジカル・ファーストエイド:PFA)の普及と研修成果に関する検証」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究(精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」内「感情の表出に関する尺度の標準化研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究(精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」内「災害時地域精神保健医療活動ガイドライン改訂に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究(精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」内「TFCBTの普及体制の確立に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究(精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」内「被災地の子どもの精神医療支援：東日本大震災のメディア報道による子どもたちのメンタルヘルスへの影響」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究(精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」内「被災地の子どもの精神医療支援：災害時の避難所・仮設住宅における子どもとその家族のための生活環境と支援ニーズの実態調査およびガイドライン遵守のためのチェックリスト作成」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究(精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」内「母親のうつ状態と子どもの問題行動について」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究(精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「東日本大震災における精神疾患の実態についての疫学的調査と効果的な介入方法の開発についての研究」内「トラウマ後のPTSDと抑うつの関連：epigeneticな視点から」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究(精神障害分野))	厚生労働省

成人 精神 保健 研究 部	金 吉晴	研究分担者	「東日本大震災における精神疾患の実態についての疫学的調査と効果的な介入方法の開発についての研究」内「トラウマとうつ病との関連について」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究(精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「健康危機管理・テロリズム対策に資する情報共有基盤の整備に関する研究」内「災害時の基本的精神医療対応の普及に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合研究事業)	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「認知行動療法等の精神療法の科学的エビデンスに基づいた標準治療の開発と普及に関する研究」内「幼少期のトラウマによる複雑性PTSDのための認知行動療法STAIR(感情調整と対人関係調整スキルトレーニング)とNST(ナラティブ・ストーリー・テリング)治療プロトコルの検討」	厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合研究事業)	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	PTSDの持続エクスポージャー療法の客観的治療効果指標に関する研究	科学研究費助成事業 (挑戦的萌芽研究)	日本学術振興会
	中島聡美	研究代表者	複雑性悲嘆治療の無作為化比較試験による効果の検証およびその治療メカニズムの解明	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	日本学術振興会
	中島聡美	研究分担者	東日本大震災における遺族への心理社会的支援プログラムの開発と検証に関する研究	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	日本学術振興会
	中島聡美	研究分担者	性暴力被害者を対象としたPTSDの急性期治療/回復プログラムの開発および効果検証	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	日本学術振興会
	鈴木友理子	分担研究者	「東日本大震災における被災児童の前向き追跡研究の前向き追及および今後の支援設備に関する研究」内「東日本大震災における被災児童の前向き追跡研究(小学生を中心に)」	平成26年度国際医療研究開発事業(疾病研究分野)	国立国際医療研究センター
	鈴木友理子	研究分担者	「東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究」内「重い精神障害をもつ者における震災後の生活実態～相双地域における精神保健福祉手帳所持者に対する調査の実施～」	厚生労働科学研究費補助金 (地域医療基盤開発推進研究事業)	厚生労働省
	鈴木友理子	研究分担者	「精神疾患患者早期介入のための医療従事者向け研修プログラム開発—メンタルヘルス・ファーストエイドの応用—」内「プログラム開発と評価方法の検討」	厚生労働科学研究委託費 (障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野))	厚生労働省
	栗山健一	研究代表者	D-サイクロセリンによる睡眠中の恐怖記憶消去学習強化への影響の検討	2010年度医学系研究奨励金 (精神疾患・脳疾患)	公益財団法人武田科学振興財団
	栗山健一	研究代表者	恐怖記憶の抑制が睡眠中の記憶の強化処理に与える影響	科学研究費助成事業 (挑戦的萌芽研究)	日本学術振興会
	栗山健一	研究代表者	脳機能画像を用いた複雑性悲嘆の病態生理の検討	平成25年度(第46回)薬療分野一般研究助成	公益財団法人先進医薬研究振興財団
	栗山健一	研究代表者	交通事故後のPTSD発症に関わる脳機能メカニズムの解明—恐怖記憶の抑制が睡眠中の記憶の強化処理に与える影響—	2014年度交通事故医療研究助成	一般社団法人日本損害保険協会
	堀 弘明	研究代表者	統合失調症と気分障害の連続性：遺伝子、認知、統合失調型パーソナリティの包括的検討	科学研究費助成事業 (若手研究B)	日本学術振興会
	堀 弘明	研究代表者	健全成人における運動習慣は心理的・身体的要因とどのように関連するか—心身の健康に最適な運動の強度・時間の提案を目指した包括的検討—	平成26年度第31回一般研究奨励助成事業	公益財団法人総合健康推進財団
	林 明明	研究代表者	PTSDの持続エクスポージャー療法の客観的治療効果指標に関する研究	科学研究費助成事業 (挑戦的萌芽研究)	日本学術振興会
	大村英史	研究分担者	異文化体験シミュレーションによる人工的雰囲気生成とインタラクションデザイン	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	大村英史	研究分担者	未来を指向する推論モデルによる音楽表現のデザイン	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	伊藤真利子	研究代表者	運動習慣によるストレス反応の緩和—主観評価と自律神経活動評価による実験的検討—	第31回(2014年度)若手研究者のための健康科学研究助成	公益財団法人明治安田厚生事業団
伊藤真利子	研究分担者	PTSDの持続エクスポージャー療法の客観的治療効果指標に関する研究	科学研究費助成事業 (挑戦的萌芽研究)	日本学術振興会	
池田大樹	研究代表者	指示忘却による記憶抑制が睡眠中の記憶処理及び夢内容に及ぼす影響の検討	科学研究費助成事業 (特別研究員奨励費)	日本学術振興会	
吉池卓也	研究代表者	高照度光療法の不安障害への臨床応用と作用機序の解明	平成26年度(第8回)精神薬療分野若手研究者助成	公益財団法人先進医薬研究振興財団	
精神 薬理 研究 部	山田光彦	研究代表者	自殺対策のための効果的な介入手法の普及に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))	厚生労働省
	山田光彦	主任研究者	気分障害の病態解明と診断治療法の開発に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	山田光彦	研究代表者	第1回ACTION-Jケース・マネジメント関西地区講習会	研究集会等助成金	公益財団法人精神・神経科学振興財団
	山田光彦	研究代表者	うつ病の病態及び治癒機転におけるリゾホスファチジン酸シグナル伝達的作用	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	山田光彦	研究分担者	「新規抗不安薬開発に向けた8オピオイド受容体を介する情動制御の機序解明」内「統計解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会

V 平成26年度委託および受託研究課題

精神薬理研究部	山田光彦	研究分担者	「転写因子MATH2およびその下流遺伝子Prglを介したうつ病治療メカニズムの解明」内「遺伝子発現定量、神経伝達物質定量解析」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	山田光彦	分担研究者	情動系を調節するオピオイドδ受容体作動薬の創製	委託研究開発費	独立行政法人科学技術振興機構
	斎藤顕宜	分担研究者	「気分障害の病態解明と診断治療法の開発に関する研究」内「δオピオイド受容体を介した新規うつ病治療法開発のための基盤的創薬研究：情動神経回路に注目した行動薬理学アプローチ」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	斎藤顕宜	研究代表者	新規抗不安薬開発に向けたδオピオイド受容体を介する情動制御の機序解明	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	斎藤顕宜	研究分担者	「うつ病の病態及び治療機転におけるリゾホスファチジン酸シグナル伝達の役割」内「情動行動評価」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	斎藤顕宜	研究分担者	「転写因子MATH2およびその下流遺伝子Prglを介したうつ病治療メカニズムの解明」内「行動薬理学的解析、神経伝達物質定量解析」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	斎藤顕宜	分担研究者	情動系を調節するオピオイドδ受容体作動薬の創製	委託研究開発費	独立行政法人科学技術振興機構
	米本直裕	研究分担者	「自殺対策のための効果的な介入手法の普及に関する研究」内「多施設共同研究における研究計画及び解析計画の立案と解析」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))	厚生労働省
	米本直裕	研究分担者	「周産期医療の質と安全の向上のための研究」内「統計解析計画の作成と実施」	厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤推進研究事業)	厚生労働省
	米本直裕	研究分担者	「難治性筋疾患の疫学・自然歴の収集および治療開発促進を目的とした疾患レジストリー研究」内「統計解析、臨床研究の計画および実施に対するアドバイス」	厚生労働科学研究費補助金(難治性疾患等政策研究事業)	厚生労働省
	米本直裕	研究代表者	自殺予防介入の評価指標と研究ガイドランスの開発	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	米本直裕	研究分担者	「健康関連認知行動の変容を促すモバイルヘルスプログラムの開発と実証研究」内「臨床試験の計画」	科学研究費助成事業(基盤研究B)	日本学術振興会
	山田美佐	研究代表者	転写因子MATH2およびその下流遺伝子Prglを介したうつ病治療メカニズムの解明	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	山田美佐	研究分担者	「うつ病の病態及び治療機転におけるリゾホスファチジン酸シグナル伝達の役割」内「遺伝子・タンパク発現解析」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	山田美佐	研究分担者	「新規抗不安薬開発に向けたδオピオイド受容体を介する情動制御の機序解明」内「神経伝達物質定量解析」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
山田美佐	研究分担者	「回復するうつ病治療：治療阻害因子から解明する脳神経回路網修復促進ストラテジー」内「関連遺伝子発現検討」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会	
後藤玲央	分担研究者	情動系を調節するオピオイドδ受容体作動薬の創製	委託研究開発費	独立行政法人科学技術振興機構	
川島義高	研究代表者	医療領域において心理職が多職種協働で自殺対策を行うために必要なスキルに関する研究	科学研究費助成事業(若手研究B)	日本学術振興会	
社会精神保健研究部	伊藤弘人	研究代表者	身体疾患を合併する精神疾患患者の診療の質の向上に資する研究	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))	厚生労働省
	伊藤弘人	研究分担者	「精神疾患の医療計画と効果的な医療連携体制構築の推進に関する研究」内「精神医療の評価に資する標準的な指標の開発に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))	厚生労働省
	伊藤弘人	研究分担者	「健康日本21(第二次)の推進に関する研究」内「こころの健康・休養に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業(循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策研究事業))	厚生労働省
	伊藤弘人	研究分担者	「向精神薬の処方実態に関する研究」内「ナショナルデータベース調査の解析、薬物相互作用」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))	厚生労働省
	伊藤弘人	研究分担者	「学術的・国際的アプローチによる自殺総合対策の新たな政策展開に関する研究」内「国際的動向を踏まえた学術的研究、とくに精神保健医療政策の在り方に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))	厚生労働省
	伊藤弘人	研究分担者	「統合失調症患者の服薬セルフモニタリングシステムの開発」内「患者手帳と連携した、モニタリング項目選定モデルの提案」	厚生労働科学研究費委託費(障害者対策総合研究開発事業)	厚生労働省
	伊藤弘人	主任研究者	精神科医療の質の評価と均てん化に関する研究 23-8	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	伊藤弘人	主任研究者	精神科医療の質の評価と均てん化に関する研究	共同研究費	国立精神・神経医療研究センター
	伊藤弘人	実務担当	メンタルケアモデルの開発に関する研究	臨床研究推進事業	国立精神・神経医療研究センター
	山之内芳雄	研究分担者	「精神疾患の医療計画と効果的な医療連携体制構築の推進に関する研究」内「GP連携体制および医療連携モデルの構築に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))	厚生労働省

社会精神保健研究部	山之内芳雄	研究分担者	「向精神薬の処方実態に関する研究」内「向精神薬の減量ガイドラインの精緻化に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))) 委託事業	厚生労働省
	山之内芳雄	研究担当	平成26年度自殺ハイリスク者対策推進事業(自殺未遂者地域支援体制推進事業)		愛知県
	堀口寿広	研究代表者	障害者への虐待と差別を解消する社会体制の構築に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(身体・知的等障害分野)))	厚生労働省
	堀口寿広	研究分担者	「精神障害者の重症度判定及び重症患者の治療体制等に関する研究」内「重症入院患者の臨床パスと地域連携に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))	厚生労働省
	三宅美智	研究代表者	ピアサポーター参加型の行動制限最小化のためのモデル開発と効果の検証	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	三宅美智	研究分担者	精神科病院における身体拘束施行数の増加の要因分析 - 精神科病棟に認知症患者の入院が増えていることに着目して -	日本精神科看護協会補助金	日本精神科看護協会
精神生理研究部	三島和夫	分担研究者	「生涯に亘って心身の健康を支える脳の分子基盤、環境要因、その失調の解明(体[睡眠・リズム]とこころの恒常性維持及び破綻機構の遺伝子環境相互作用に関する研究)」内「ヒト睡眠・生物時計機能の迅速評価システムの確立と社会還元に関する研究」	脳科学研究戦略推進プログラム	文部科学省
	三島和夫	主任研究者	「睡眠医療プラットフォームPASMを用いて実施する臨床研究ネットワーク、運用システム、リソースの構築に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	三島和夫	研究分担者	「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」内「災害前定点調査計画立案」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	三島和夫	研究分担者	「臨床評価指標を踏まえた睡眠障害の治療ガイドライン作成及び難治性の睡眠障害の治療法開発に関する研」内「QOL障害の脳病態に関わる機能的MRI研究と睡眠恒常性異常に関わる研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	三島和夫	研究分担者	「向精神薬の処方実態に関する研究」内「レセプト調査、薬物相互作用」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	三島和夫	研究代表者	生物時計の障害特性に基づく概日リズム睡眠障害の治療最適化とその効果検証	科学研究費助成事業(基盤研究B)	日本学術振興会
	肥田昌子	分担研究者	「睡眠医療及び睡眠研究用プラットフォームの構築に関する研究」内「同プラットフォームPASMを用いたバイオリソースを利用した睡眠障害診断ツールの構築と検証」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	肥田昌子	研究代表者	睡眠障害における生体リズム異常の分子メカニズム	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	北村真吾	研究分担者	「生物時計の障害特性に基づく概日リズム睡眠障害の治療最適化とその効果検証」内「研究の実施および解析」	科学研究費助成事業(基盤研究B)	日本学術振興会
知的障害研究部	稲垣真澄	主任研究者	発達障害の包括的診断・治療プログラム開発に関する臨床研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	稲垣真澄	分担研究者	「てんかんの成立機序の解明と診断・治療法開発のための基礎・臨床の融合的研究」内「てんかんの神経生理学的マーカーの開発と病態解明」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	稲垣真澄	研究代表者	発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究	厚生労働科学研究費補助金	厚生労働省
	稲垣真澄	研究分担者	生涯に亘って心身の健康を支える脳の分子基盤、環境要因、その失調の解明」内「発達障害児社会認知に関する臨床研究」	脳科学研究戦略推進プログラム	文部科学省
	稲垣真澄	研究代表者	不安行動惹起遺伝子の特定と治療法開発	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	稲垣真澄	研究分担者	光受容体メラノプシンを基礎とした視覚発達メカニズムの解明と光環境設計	科学研究費助成事業(基盤研究B)	日本学術振興会
	太田英伸	研究代表者	光受容体メラノプシンを基礎とした視覚発達メカニズムの解明と光環境設計	科学研究費助成事業(基盤研究B)	日本学術振興会
	太田英伸	研究代表者	体動計による早産児の多動性・睡眠障害の解明とADHDハイリスク群の早期発見	科学研究費助成事業(挑戦的萌芽研究)	日本学術振興会
	太田英伸	研究代表者	メラノプシンを制御する光フィルターを用いた早産児発達障害を予防する次世代人工保育器の開発	光科学技術財団 研究助成金	光科学技術財団
	太田英伸	研究代表者	眼球光受容体「メラノプシン」を基礎とした視覚発達理論の再構築および新生児の発達を促進する照明機器の開発	武田科学振興財団 研究助成金	武田科学振興財団
	太田英伸	研究分担者	「メラノプシン神経節細胞の視覚処理における機能の解明」内「視覚処理の機能解析」	科学研究費助成事業(基盤研究B)	日本学術振興会

V 平成26年度委託および受託研究課題

知的障害研究部	太田英伸	研究分担者	「人工血液カクテルによる胎児慢性低酸素症の治療法開発」内「人工血液カクテルの作製」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	太田英伸	研究分担者	不安行動惹起遺伝子の特定と治療法開発	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	太田英伸	研究分担者	「調光フィルターを用いた新生児医療への応用」内「調光型光フィルターの作製」	産業技術総合研究所ナノテク研究助成金	産業技術総合研究所
	安村明	主任研究者	ADHD児の病態解明及び検査システムの開発	精神・神経疾患研究開発費(若手研究グループ)	国立精神・神経医療研究センター
	李珩	研究代表者	人工血液カクテルによる胎児慢性低酸素症の治療法開発	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	李珩	研究分担者	不安行動惹起遺伝子の特定と治療法開発	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	刑部仁美	研究分担者	不安行動惹起遺伝子の特定と治療法開発	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	加我牧子	研究分担者	不安行動惹起遺伝子の特定と治療法開発	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	崎原ことえ	研究代表者	ヒトの適応的歩行に関わる神経基盤の解明	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	北洋輔	研究代表者	発達性ディスレクシアのリスク児における病態解明と早期支援システムの導入	科学研究費助成事業(若手研究B)	日本学術振興会
大森幹真	研究代表者	発達障がい児の学習スキルズ・社会スキルズ獲得のための融合的な教育支援研究	科学研究費助成事業(特別研究員奨励費)	日本学術振興会	
社会復帰研究部	伊藤順一郎	研究代表者	精神科医療でのリカバリー志向の共同意思決定を促進するPCツールの開発と効果検証	科学研究費助成事業(基盤研究B)	日本学術振興会
	伊藤順一郎	主任研究者	精神科デイケアから地域への早期移行に関する支援モデル構築と評価(26-5)	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	伊藤順一郎	研究分担者	「東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究」内「総括、対象地区コンサルタント取りまとめ」	厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業)	厚生労働省
	伊藤順一郎	研究分担者	精神障害者への多職種アウトリーチ支援の質的評価用フィデリティ尺度の開発と標準化	科学研究費助成事業(挑戦的萌芽研究)	日本学術振興会
	伊藤順一郎	センター長	地域精神科モデル医療センター	精神・神経疾患研究開発費(専門疾病センター事業費)	国立精神・神経医療研究センター
	伊藤順一郎	研究代表者	精神障害者の地域生活支援の在り方とシステム構築に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))	厚生労働省
	伊藤順一郎	研究分担者	「精神障害者の就労移行を促進するための研究」内「精神障害者の就労支援に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策研究事業(精神障害分野)))	厚生労働省
	佐藤さやか	研究代表者	精神障がい者への就労支援現場で使用可能な評価法の開発と基礎的資料の整備	科学研究費助成事業(若手研究B)	日本学術振興会
	佐藤さやか	研究分担者	「精神障害者の地域生活支援の在り方とシステム構築に関する研究」内「ACT・多職種アウトリーチチームの治療的機能についての評価」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))	厚生労働省
	佐藤さやか	分担研究者	「精神科デイケアから地域への早期移行に関する支援モデル構築と評価(26-5)」内「地域への早期移行を行うデイケアの新しいモニタリング方法の開発」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
山口創生	研究分担者	精神科医療でのリカバリー志向の共同意思決定を促進するPCツールの開発と効果検証	科学研究費助成事業(基盤研究B)	日本学術振興会	
山口創生	分担研究者	「精神科デイケアから地域への早期移行に関する支援モデル構築と評価(26-5)」内「アウトカムからみた効果的な支援要素の検討」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター	
司法精神医学研究部	岡田幸之	主任研究者	司法精神医療の均てん化の促進に資する診断、アセスメント、治療の開発と普及に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	岡田幸之	研究分担者	「刑事責任能力の具体的診断枠組みと精神鑑定のあるり方に関する学際的研究」内「責任能力の判断枠組みならびに精神鑑定のあり方に関する司法精神医学の立場からの理論的検討」	科学研究費助成事業(基盤研究B)	日本学術振興会
	菊池安希子	研究代表者	幻聴に対する認知行動療法ワークブックの開発	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	菊池安希子	分担研究者	「司法精神医療の均てん化の促進に資する診断、アセスメント、治療の開発と普及に関する研究」内「医療観察法制度における各種心理プログラムの現状把握と新たな手法の開発」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	菊池安希子	研究分担者	統合失調症に対する認知リハビリテーションの開発と効果検証に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野)))	厚生労働省
	安藤久美子	研究分担者	「刑事責任能力の具体的診断枠組みと精神鑑定のあり方に関する学際的研究」内「責任無能力とされた後の司法精神医療に関する制度・実情が責任能力判断に与える影響に関する司法精神医学の立場からの理論的検討」	科学研究費助成事業(基盤研究B)	日本学術振興会

司法精神医学研究部	安藤久美子	分担研究者	「司法精神医療の均てん化の促進に資する診断、アセスメント、治療の開発と普及に関する研究」内「生物・心理・社会的諸要因からの多面的な司法精神医学的リスクアセスメントの開発」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	安藤久美子	研究分担者	「青年期・成人期発達がいへの対応困難ケースへの危機介入と治療・支援に関する研究」内「医療観察法の対象者／裁判事例についての検討」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))	厚生労働省
	藤井千代	研究代表者	精神科医療に特有の論理的諸問題および倫理教育のあり方に関する研究	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	藤井千代	分担研究者	「司法精神医療の均てん化の促進に資する診断、アセスメント、治療の開発と普及に関する研究」内「指定医療機関モニタリング全国調査とこれに基づく均てん化策の推進」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
自殺予防総合対策センター	竹島 正		(精神保健計画研究部に記載)		
	松本俊彦		(薬物依存研究部に記載)		
	川野健治	研究代表者	自殺への許容性についての心理学的検討と予防的介入	科学研究費助成事業(基盤研究B)	日本学術振興会
	川野健治	研究分担者	「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法に関する研究」内「遺族支援のための情報提供に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	藤森麻衣子	研究代表者	情動的共感に対するコミュニケーション技術学習プログラムの有効性の検討	科学研究費助成事業(若手研究B)	日本学術振興会
	藤森麻衣子	研究代表者	がん専門医を対象としたコミュニケーション技術トレーニング法の医師の心理的ストレスの軽減への有効性の検討	パブリックヘルス科学研究助成金	公益財団法人パブリックリサーチセンター
	藤森麻衣子	研究分担者	「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法に関する研究」内「遺族支援に資する介入法開発に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	山内貴史	研究代表者	わが国の大都市部における自殺未遂者の特性	科学研究費助成事業(若手研究B)	日本学術振興会
小高真美	研究代表者	自殺の危機にあるクライアントの支援に備えたソーシャルワーク教育プログラム開発研究	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会	
白神敬介	研究代表者	児童相談所が自殺対策に果たす機能とそのための支援ネットワーク構築の検討	科学研究費助成事業(若手研究B)	日本学術振興会	
災害時こころの支援センター	金 吉晴		(成人精神保健研究部に記載)		
	渡 路子	研究分担者	「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」内「東日本大震災「こころのケアチーム」派遣・実績に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	渡 路子	研究分担者	「大規模災害時に向けた公衆衛生情報基盤の構築に関する研究」内「災害時における要援護者情報の把握(精神)」	厚生労働科学研究費補助金(健康安全・危機管理対策総合)研究事業	厚生労働省
	鈴木友理子	研究分担者	(成人精神保健研究部に記載)		

精神保健研究所年報 No.28 (通号 No.61) 2015

平成 27 年 8 月 31 日発行

編集責任者

福田 祐典

編集委員

稲垣 真澄

菊池 安希子

堀 弘明

発行所

国立研究開発法人

国立精神・神経医療研究センター

精神保健研究所

〒187-8553

東京都小平市小川東町 4-1-1

(非売品)

電話 042 (341) 2711

印刷：(株) 東京アート印刷所
